

今週の主張1月2日

謹賀新年。今年もよろしくお願いたします

(1) 大久保鷹さんに倣って私も「積極的曖昧主義」で行きますよ

明けましてお目でとうございます。年末は忘年会ばかりで大変でした。ロフトも月末にあったし、仕事の打ち合わせ、原稿の〆切…と、ギリギリまで、あたふたしてました。どうしても出なくちゃならん忘年会があり、一日に二つ掛け持ちで出た日も何日かありました。どちらもロクに食べれなくて、会費は倍ですから、あまりよくはないですね。今年の年末は、もうちょっとうまく考えなくちゃ。と、正月なのに、もう年末の心配をしちよります。いっそ猫と一緒に年末年始はハワイというのもいいですね。そのためには売れる本を今年は書かないと。

12月18日(日)にロフトの上の「あった村」で塩見孝也さんの忘年会がありました。そこで中村さんから「チャンネル桜」のDVDをもらいました。その話を書こうと思ったんですが、まず苦言です。この時、30人位集まっていて、ロフトの平野さんも来てたし、ロフトに集まる人達も来てました。それはいいんですが、今度、12月29日(木)には、やはり同じ「あった村」で、ロフトの平野さん主催の忘年会がありました。「エッ、この前やったじゃないの」と言ったら、この前は塩見さん主催。今度は平野さん主催で、違うのだという。でもメンバーは同じだよ。場所も料理も全て同じだよ。皆の挨拶まで同じだ。「だったら一回やりゃいいじゃないか。そんなもん、行くもんか。バカやロー！」と言いたいんですが、こちらは弱い立場ですけん。「そんならいいよ。ロフトにもう出してやんないから」と平野さんに言われたら怖いので行きましたよ。

そうだ。高田馬場には「だまる」といって名物居酒屋がある。巨大な座敷があって、300人位入る。大広間だ。仕切りもなしに、ズラッと入る。

そこを予約してやったらいい。ここのコーナーはロフト。ここはトリックスター。ここは塩見さんご一統。ここは一水会…と、各々まとまって。それで、各コーナーを皆が回ったらいい。そうしたら、忘年会は一日で済む。うん、これは革命的提案だと思うが、どうでせうか。各自検討してみてください。まア、私は年末はハワイだからどうでもいいけど。今はペットも泊まれるホテルやペットも入れる温泉も出来て、便利になりましたよね。ありがたいです。

12月28日(水)下北沢のザ・スズナリで新宿梁山泊の「風のほこり」を見てきました。とてもいい芝居でした。大久保鷹さんはじめ、重厚で個性的な役者ばかりだし、内容的にも面白かったです。打ち上げにも出ました。「鈴木さんのHP、毎週見てるよ」と大久保鷹さんに言われました。

鷹さんの芝居は何度も見ている。フリーだが、月蝕歌劇団にも何回か出てたし。この人が出るだけで、ホッとしますね。いいんです。でも、昔は、ガンガンとやり合う芝居をやってたそうです。しかし、今は、ホンワカしていて、まわりの殺気を消します。なごやかにし、いやす力がある。格闘技でいったら、ガンガン打ち合う、頭と頭でガツーンとぶつかる。といった感じではなく、一瞬体をさばいて、自分の間合いで闘う。そういった余裕を感じますね。この人、人間関係でもそうだ。本人に言わせれば、「積極的曖昧主義」と言っていました。いいですね。

私も昔は、ピリピリしていて、どんな場合でも「負けちゃいかん」と思っていました。ところが、いつの時からか、「小さなことでは負けたっていいや」と思うようになりしました。リラックスして、「まあ、焦らないで…」と自分で自分に言い聞かせています。私も「積極的曖昧主義」になったのかもしれません。

(2) 「左右激突4対4」 (part3) を見た。そして私の提言

12月18日(日)の塩見さん忘年会の時に、「チャンネル桜」のDVDを中村さんにもらった。その話だよね。塩見さんは今年は、随分と頑張ったんだよね。数カ月前、テレビ朝日のワイドショーに出てた。「靖国問題」「改憲問題」について討論していた。誰とやったんだっけ。あつ、私だ。忘れていた。4時間位やって、放映されたのは20分位だった。

それと、チャンネル桜では、「左右激突4対4」のメインとして出ている。赤組（左翼側）と白組（保守・右翼側）が4対4で闘うが、赤組の総大将だ。それも3回目だ。「今度は健闘した。勝利した」と自画自賛している

が、私から見ると「三連敗」のように思える。3回も続いているのは、「左翼いじめ」が出来るからだろう。左翼は今や、〈エサ〉ですね。こんなに叩きやすいものはない。右翼側も、カサにかかって、左翼いじめをする。「そんなことも分からないんですか」「もっとしっかり勉強しなさいよ。塩見さん！」なんて言う。失礼なヤツらだね。「日本のレーニン」に対して。礼を知らん連中だ。もし日本に革命が起こっていたら、日本人民共和国の初代大統領になってたんだよ。そんな偉い人をつかまえて、「勉強しろ！」はないだろう。「アホ」「ボケ」「死ね」はないだろう（そんなことは言っていないか）。「チャンネル桜」の話は又、する。塩見さんの「今年の活躍」を紹介してたんだ。毎週、塩見さんのことばかり書くんで、「これは塩見のブログか」とからかわれたりもしちよります。でも、いいでしょう。一水会の木村三浩代表と対談本を出すそうです。もう数回、対談したんで、今年の春には出るそうです。

パトリオット（愛国者）2人の対談というから、『パトリオットの条件』といった本になるのでしょうか。楽しみです。木村氏は現役のバリバリの活動家だし、反米愛国の活動家です。塩見さんともがっぷり四つに組んで、討論しています。「木村氏は真面目だから、キチンと正面から討論する。鈴木君とは違う」と言われました。そうですね。鈴木君はズルイですからね。大体、がっぷり四つに組まない。立ち合いに注文をつける。立っても、いきなり、肩透かしや、蹴たぐり、引き落としなんかをやる。奇襲というか、ズルイ手ばかり使う。いかんよな、この人は。

そこで反省。塩見さんのような偉大な人を相手に、こんな卑怯な手を使う鈴木なんていかん。真正面から真剣に闘う木村氏こそ、塩見さんの相手にふさわしい。だから一水会の忘年会の時（12月26日）、木村氏に言いました。

「塩見さんは、もう木村君にあげるよ」と。

そしたら木村氏。「そんな！子供がオモチャにあきて、弟にあげるみたいじゃないですか」

ギクッとしましたね。心の中を見すかされたとですよ。

では、「日本文化チャンネル桜」の話です。「闘論！倒論！討論！2005。日本人よ、今…」です。長いタイトルですが、通称「左右激突4対4」です。この方が分かりやすい。すでに今回で3回目です。赤組（左翼側）はいつもボロ負け。敗軍の将は塩見さん。第3回目は12月3日(土)の午後9時～12時に放映されました。「朝生」と同じく3時間の生バトルで

す。

今回のテーマは、「愛国心とは？ 日本民族とは？」 いいですね。旬なテーマですね。

左翼側は、塩見孝也（元赤軍派議長）
齋藤貴男（ジャーナリスト）
PANTA（ミュージシャン）
野中章弘（アジアプレス代表）

右翼側は、井尻千男（拓殖大学日本文化研究所所長）
潮 匡人（評論家）
西村幸祐（ジャーナリスト）
河内屋蒼湖堂（チャンネル桜「テレビ掲示板」司会者）
そして司会は水島総（日本文化チャンネル桜代表）

豪華な顔ぶれだ。今まで左翼側には三上治さん、荒岱介さんなど大物の左翼指導者も出た。しかし、いつも惨敗。森達也さんを投入したこともある。もったいないと思った。4対4の集団戦のコマとして使うべき人じゃない。今回は何と齋藤貴男さんだ。もったいないというか、かわいそうにと思った。ワーワーとうるさい討論番組じゃなく、一人だけ呼んでじっくり話を聞くべきだよ。何なら、齋藤貴男さんと井尻千男さんだけで3時間、じっくり話し合った方がよかった。そうしたら、もっともっと実のあるものになっただろうよ。

でも、齋藤さんは頑張っていましたね。ただ、齋藤さんの「憂い」や「問題提起」をキチンと受けとめて、討論できる人が右側にはいないんだよ。これは不幸だった。

大体、こういうバトルになると（朝生もそうだが）、皆、言いつ放しになる。「何を言おうか」ではない。少しでも多く喋ろう、少しでも長く喋ろう、となる。相手の話を十分に聞いていたら、自分の喋るチャンスはなくなる。だから、喋ってる人をさえぎり、押しのけ、シャベル。失礼な話だ。

それに、〈思いやり〉がない。相手のいい話はキチンと聞いてやって、その上で、（その土俵の上で）話し合おうという気がない。「バカナ」「アホらしい」「お前は勉強不足だ」「とんでもない」と切って捨てる。そして、自分の「論」だけをとうとうと喋る。

これでは討論から生まれるものは何もない。各人の書いた本を読めば済むことじゃないか。相手の話を聞いて、「なるほど、そういう方法もあるのか」「じゃ、こう考えたらどうか」という進化、積み重ね、新しい発見がある。いや、あるはずだ。それは素直に認めて、〈一致点〉を模索する。そのために討論をするはずだ。討論によって何らか、より素晴らしいものを生み出すんだよ。ソクラテスの「産婆術」だよ。

ところが、そんな生産的な産婆術を考えてる人は一人もいない。この日本に誰もいない。ともかく相手をつぶす。相手に喋らせないで、自分だけ喋る。こんな連中ばかりだよ。人のことは言えないけどな。私も「日本の右翼」で朝生デビューした時は、ともかく、自分が喋ることだけ考えて頭が一杯だった。何度出ても、緊張のし通しだ。あまり喋れん。だから見てる人に叱られる。「バカヤロー、もっとガンガン喋れよ!」「相手の話を何で聞くんか。相手に喋らせないで、立ち上がって演説しろよ!」と。

ともかく、回数を多く、時間を多く喋ると、「よく頑張ったな」「勝った」と思われる。回数と時間と勢いだけなんだ。内容なんか問題にされない。「エ?何を喋ってたの?」と皆、おぼえちょらん。でも、どっちが勝ったか、負けたかだけは〈勢い〉で判断する。よくないやね。

(3)立てPANTA! パンタよ銃を取れ!

PANTAさんも、こんな粗野な集団戦にはもったいないやね。12月24日、クリスマスにPANTAさんのライブに行った。礼仁(レーニン・本名)さんと、美人OLと3人で行った。よかったです。PANTAさんの生ライブは初めてで感動しました。終わって、「チャンネル桜」の話になりました。私は言いました。

「PANTAさんといえば、カリスマなんだし、ミュージシャンだ。これだけ熱狂的なファンが集まる。そんな人が、あんな集団戦の一兵士として消耗されたらもったいないよ」と。

「俺の考えを聞きたいなら、3時間、生ライブをさせる! それ以外は出んよ。バカヤロー!」と言ってやりゃいいんだ。「俺を誰だと思うんだ。なめんじゃないよ。天下のPANTAだ!」「終わった左翼やガキ右翼となんか同席させんな!」と言ってやりゃいい。

あの学生運動華やかなりし頃、日比谷野音で、三里塚でPANTAは歌い、その歌で励まされて学生は闘ったんだ。「あの闘いを作ったのは俺だ!」と言ってやればいい。

それなのに、〈一兵士〉として、塩見軍団の傭兵で出てるんだもん。情けねえよ。もったいないよ。まア、人間、浮世の義理があるから塩見さんに頼まれりゃ断われないかもしれん。毎日毎日、電話が来るから、煩わしくて、つい「いいよ」と言っちゃったのかもしれん。

じゃ、こうすりゃよかったんだ。「左右激突4対4」には出る。仕方ないから出る。いやいや出る。「PANTAさんはどう思いますか」と指名された時だけ喋る。あとは「ザコ共と一緒にすんな、バカヤロー」といった態度で大きく構えている。

さて、「一言」といわれたら、やおら立ち上がる。ギターをひいて歌う。PANTAさんのヒット曲「銃をとれ」とか「赤軍兵士の歌」でもいい。「世界革命戦争宣言」「最終指令自爆せよ！」でもいい。あるいは即興で、歌をつくって大声で歌うんだよ。右翼側が反論しようとしても、こっちは声もデカイし、ギターもある。音量では負けへん。

司会に何か言われたら、「俺はミュージシャンだ。ロックンローラーだ。これが俺の〈言葉〉だ！」と言ってやりゃいい。カッコいい。いや、これも歌でやる。全部、歌いながらやる。そうすると他の人も、つられて歌いながら反論するかもしれん。いいね。オペラだ。ミュージカルだよ。

私が出たら、無礼なことを言う奴には、いきなり飛びかかって、首を絞めて落としちゃう。文字通り、だまらせる。「俺は柔道家だ。これが俺の〈言葉〉だ！」とって。野村秋介さんが生きてたら、ここは5, 7, 5の俳句にして発言する。いいねー。面白い。塩爺も、隠し持ってたヘルメットと覆面、ゲバ棒で武装し、すっくと立ち上がって、「ワレワレは一！」「断固として…」と大演説をすりゃいい。「お前は古いんだよ」「勉強しろよ」なんて無礼なことを言う右翼・保守派の人間には、いきなりゲバ棒を振り下ろせばいいんだ。「粛清だ！ウジ虫め！」とか言いながら。まさに、リアルファイトだ。流血戦だ。視聴率は一気にアップだよ。

えーと、討論の内容を紹介するつもりだったけど、余りの激しさに、忘れてしまった。いかんね、私も。ボケてる。「いやーすごい激論だったね」というのは覚えてるけど、どんなことで皆が激論し、怒ってたかは忘れた。ただ、最初、PANTAさんが言ってたのは覚えてる。映画「男たちの大和」の主題歌は長渕剛「Close your eyes」だが、これはないだろう！」とっていた。そうだよな。大和はアメリカと闘ったんだ。それなのに英語じゃ、大和の人たちも浮かばれんよ。でも、右派の人はそれに対して何も反論、反応してなかった。いかんよな。いい問題提起があったら受けて投げて、キャッチ

ボールをしてあげなくっちゃ。やっぱり、言ったって分かんねえのだよ。立ち上がって歌うしかねえよ、PANTAさん！銃をとれ！（頑張ってくんなまし。今年は映画にも出て革命家になるそうだし）。

【今週の猫のコーナー】

(1)本文で大久保鷹さんの芝居のことを書きましたが、打ち上げの席で、「鈴木さんは猫を飼ってたってね。彼も猫を可愛がってるんだよ」と言って役者さんを紹介してくれました。「猫が死んだ時は大泣きに泣いたそうだよ。肉親が死んだって泣かないのに」。

だから私は聞きました。「そうですか。母親が死んだ時は泣かなかったんですか」と。そしたら「母親はまだ生きてますけどね」アレっ。悪いことを言っちゃったよ。どこかで話が混線した。三人しかいないのに伝言ゲームをしてるようだ。

鷹さんは、「彼は、たとえ肉親が死んでも泣かないだろうが、猫が死んだ時は大泣きした」と言ったんだ。つまり、仮定形で言ったんだ。それを私は、酒で頭が混乱してたので、肉親が死んだと過去完了形で聞いたんですな。さらに母親と限定して。そんで失礼なことを言っちゃった。同じ猫好きに免じて許して下さいな。

(2)クリスマスに、猫にケーキを送ってもらいました。でも、猫は食わんけん、私が食べました。ありがとうございました。

(3)「還暦を過ぎたら猫を飼っちゃダメだよ」と知り合いに言われました。家猫は20年も生きるんだそうです。野良猫は3年か4年です。車にはねられたり、外では戦争だからです。アメリカでは本人の遺産を猫に残すことも出来るけど、日本じゃまだ無理だ。じゃ、本人が死んだら、野良に戻してやればいいのか。問題ないよ。

【だいありー】

(1)12月26日(月) 午後7時、一水会の忘年会。同じ時間に有田芳生さんの忘年会。どっちも出たいので、半々ずつ出た。だったら近くでやってくれりゃいいのに、遠い。有田さんと朝日新聞の藤森さん、臼井さんとは浅草ですきやき。おいしかったです。でも、赤報隊事件について、三人がかりで「訊問」されて大変でした。いつか、キチンと書かなくっちゃならんでしょ。だから、見沢知廉氏の小説を今、読み直している。小説という形で書いたらいいのかもしれない。それに、あの事件も、この事件も。「えっ、知ってて黙っていたのか！」「悪党め！」と思われるのが嫌で、黙ってきた

んだけど。いつかは書かにならなんでしょう。「やっぱり大石内蔵助だね」なんて森達也さんに言われたそうだな。

赤報隊についての「訊問」は8:40分まで。すぐに地下鉄で高田馬場へ。さかえ通りの「紫蘇の実」で一水会の忘年会。大幅に遅れて出席。美女が4人もいて、楽しい忘年会でした。

この「紫蘇の実」は開店40年。「楯の会」の人たちとよく来ていた。私も阿部勉氏に連れられて来た。「35年前の三島事件の時は大変だったそうです」と店主。「おやじの代だったんですが、楯の会の人たちがここで集まったんです。外は公安が一杯いて」。凄い話しだ。

(2)12月27日(火) 1時、骨法整体。体の調子もすっかりよくなりました。ありがとうございました。これで年末年始、がんばって原稿が書けます。05年から06にかけて、足かけ2年あるんで、必死で書かなくちゃ。

夜7時からロフトプラスワン。「創」イベントで、一部は、東條由布子さんを迎えて靖国問題。二部は、裁判傍聴マニアの阿曾山大噴火さんを迎えて、裁判のはなし。第三部は今年の十大ニュース。司会は篠田博之「創」編集長。西岡昌紀さん、綿井健陽さん、森達也さん、山本直樹さん、中川志大さん、私も出る。12時近くまでやる。大入りだった。そのあと、出演者と飲んでいたら、終電に間に合わなくなった。タクシーは全くひろえない。あ、そうか。年末か、と思い出した。仕方がないから、ヤケで、「ルノアール」に朝までいて本を読んでやった。『決定版・三島由紀夫全集』第12巻(600ページ)の「複雑な彼」と「命売ります」を読破した。三島の作品の中でも、ちょっと変わった作品だ。『複雑な彼』は作家の安部譲二さんをモデルにしたものだ。安部さんとは何度か会って、三島の話を知っている。見沢氏を「おくる夕べ」にも来てくれた。

(3)12月28日(水) 7時、下北沢のザ・スズナリで新宿梁山泊の「風のほこり」を見る。よかった。カメラマンの平早勉さんが連れて行ってくれた。スズナリの近くで、マスクをした女性とすれ違ったら、「この人が主演の渡会さん。お尻を出すんだよ」と紹介してくれた。本当に生お尻を出し放しだった。驚いた。唐十郎の書き下ろしで、役者は皆、達者な人ばかりで、その中に笑いがあり、楽しめた。31日だけ休んで、元旦からずっとやっている。1月9日まで。皆さんも行って見て下さい。終わって、打ち上げに誘われ飲みました。

(4)12月29日(木) 7時から、ロフトプラスワンの忘年会。宮崎学さんも来ていた。ロフトの上(5F)のあった村で。楽しかったです。平野さん、宮

崎さん、ごちそうさまでした。途中で、次の忘年会に。昔の同級生たちの忘年会すら。

(5)12月30日(金) 6時、「ザ・ニュース・ペーパー」の忘年会。今年は「ライブ塾」でお世話になりました。

【お知らせ】 (1)年末はかなり仕事をしていたので、1月はいろんな雑誌に出ます。発売日と内容を紹介ませう。

1月1日(日) 「レコンキスタ」。私の連載「平成文化大革命」で、〈三島事件と一水会誕生〉について書いてます。

1月5日(木) 「論座」(2月号・朝日新聞社)で特集「私と参拝」について書いてます。

1月7日(土) 「実話マッドマックス」(2月号)。「今だれを殺したら日本はよくなるのか」のテーマで、塩見さんと私が書いてます。

1月7日(土) 「アサヒニュースター」(衛星チャンネル)の「テレビウワサの真相」放映。〈公安〉について特集。私も出て喋りました。

1月9日(月) 月刊「創」(2月号)。私の連載「言論の覚悟」で「私の柔侠伝」。

1月12日(木) 「月刊TIMES」。連載「三島由紀夫と野村秋介」で、「負い目の連鎖としての民族派運動」

1月18日(水) 「サイゾー」(2月号)で岡留安則さんと対談。「天皇制について」

1月18日(水) 格闘技のムック本『Middle Weight Fighters style Book』発売。魔裟斗、山本KID、マッハ速人、五味隆典など、10人の中量級選手の闘い、人生について聞く。私は須藤元気選手に聞いて書きました。(10ページ)。哲学的な深い話が聞けました。

(2)『日本のタブー事件史』が文庫になって出ました。昨年、別冊宝島で出ましたが、年末に宝島社文庫になりました。648円です。

〈在日、ユダヤ、同性愛、警察、皇室。タブーという扉の向こう側にあるものとは？ 新聞・テレビでは報道されない禁断の事件、その舞台裏〉と本の帯には出ています。

〈「日本人より日本人」在日コリアン新井将敬「自決」の背景にあったもの〉

で私が喋っています。

(3)1月17日(火) 7:00p.m.よりライブ塾(トリックスター)です。若松孝

二監督がこれから撮る映画「実録・連合赤軍事件」の構想、決意について語ってくれます。大久保鷹さんも、聞きに行くよと言ってくれました。鷹さんは今、別の映画を撮影中。革命家に扮して出演するそうです。楽しみです。

(4) 1月18日(水) 7:00p.m. 高田馬場シチズンプラザで一水会フォーラムです。講師は福田逸先生です。明大教授で、福田恆存先生のご子息です。演題は「日本を保守するもの=天皇制と国語=」です。

私事ですが、福田恆存先生には学生時代、大変お世話になりました。全国学協結成大会では記念講演をして頂きました。福田恆存、三島由紀夫、村松剛、林房雄…と、当時は錚々たる思想家がいました。圧倒的に強い全共闘の中であって、命をかけて言論活動をし、右翼学生の指導に当たっていました。今の保守派の教授たちとは大違いでした。

(5) 2月14日(火) ライブ塾です。7:00p.m.です。漫画家の石坂啓さんが、「日の丸・君が代」について話してくれます。

(6) 前にこのHPで書きましたが、靖国神社問題をテーマにした闘うドキュメンタリー映画「あんにょん・サヨナラ」が今年の夏から劇場公開されます。そのプレ企画として、李熙子（イ・ヒジャ）さんと私がトークをやります。2月17日(金)の夜です。場所・時間が決まったら、お知らせします。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)
[2006年](#)

今週の主張1月9日

おかげさまで去年も「月30冊」のノルマを達成しました

(1) もうすぐ「三島由紀夫全集」(全42巻)も全巻読破じゃ

はい、正月恒例の発表です。去年、何冊の本を読んだかです。私なんて、他に取柄はないし、せめて本を読み、勉強し、ものを考えていこうと決意しております。

学生の際は試験があるし、レポートもある。だから本は読む。又、まわりにも本を読み、考え、討論している人が多かった。だから知的刺激もあったし、「読まなくちゃ」という意欲もわいた。

ところが、社会に出た途端に本を読まなくなった。これじゃいけんと思い、自分で自分にノルマを課した。産経新聞に入った時から「ノルマ式読書法」をやっている。だからもう30年以上も続いていることになる。もちろんノルマ式だからノルマがある。「月30冊」だ。忙しくて月に10冊とか20冊しか読めない時もある。その時は他の月で挽回して、年間平均で「1ヵ月30冊」になるようにしている。

このHPを始めてからは、1月に前年の読書総数と月平均読了冊数を発表するようになった。というわけで、昨年度の成績だ。

1月(48冊)、2月(32冊)、3月(40冊)、4月(36冊)、5月(33冊)、6月(32冊)、7月(25冊)、8月(42冊)、9月(36冊)、10月(37冊)、11月(40冊)、12月(32冊)

7月だけがノルマに達していない。25冊だ。手帳を調べたら7月はメチャクチャ忙しかった。『公安化するニッポン』(WAVE出版)、『天皇家の掟』(祥伝社)の2冊の執筆にかかりきりだったんだ。それでも25冊読めたのはよくやったほうだ。と自分で自分を褒めてあげた。

その他の月はすべて30冊のノルマを達成している。さらに、1月(48冊)、3月

(40冊)、8月(42冊)、11月(40冊)と、40冊を突破した月が4つもある。これも偉い。だからといって次の年は「月40冊」にしよう、などとは考えない。そうしたら他のことができなくなる。いつか生活に余裕ができたなら、「今年は読書の年」「今年は執筆の年」と一年交替でやってもいい。そうしたら、月40冊は軽くクリアできる。「月50冊ノルマ」でもできるかもしれない。

次に、去年の読書総冊数だ。(と、ここで机の引き出しからソロバンを出す。この時と確定申告の時は必ずソロバンを使っている鈴木君でありました。珠算4級の腕の見せ所です。ちなみにソロバンは「算盤」と書くんだよ)

えーと、パチパチ…と。うん、合計は433冊だ。これを12で割ると36冊だ。四捨五入したら40冊か。いや、それは強引だとしても「月30冊」ノルマは軽〜くクリアしている。がんばったね。

今、パラパラと過去の記録を見たら、毎年35冊くらいだ。37、38冊の年もあるが、だいたい30冊台だ。ところが平成15(2003)年だけは、なぜか一年で486冊。「月平均40.5冊」になっている。すごい。この年はよっぽどヒマだったんだろう。というのは嘘で、夏には『ヤマトタケル』(現代書館)を書いていたし、冬には『公安警察の手口』(ちくま新書)を書いていた。実は、この2冊を書くために、膨大な量の本を読んだんだね。03年中に原稿を入れ、翌年8月に『ヤマトタケル』、10月に『公安〜』を出した。だから、ヒマだから本を読めるというわけでもない。気持ちの張り意志さえあれば、どんな短い時間でもそれを集積させて多くの本を読むことはできる。

ちなみに、本を読むのにそんなに費用はかかっていない。最近は図書館で借りることが多いし、送っていただいた本も多い。どうしても必要な本はなくならないうちに買う。また、昔の本で図書館にないものはネット古書店で買っている。今度書く本のために備えて年末は少し無理して本を買った。必ず役立つと思っている。

(2)三島の『憂国』がDVDになるだよ

全集にもいろいろ挑戦している。『決定版 三島由紀夫全集』(全42巻・新潮社)は、1冊が700ページくらいあって読み応えがある。このうち28冊を既に読んだ。あと14冊で全巻読破だ。夏までには達成できるだろう。だが、

「42巻」といいながら、実は補巻が年末に出た。これには新しく発見された会計日記や別の筆名で書いた小説、参考文献資料などが収録されている。

さらに、今春には別巻も出るという。別巻には、あの映画『憂国』のDVDが収められるという。もうこの世からなくなったと思われていた『憂国』だ。

この映画は、1965年に上映された。自決の5年前だ。30分の短い作品だが、三島が監督・主演をやっている。二・二六事件の青年将校に扮し、割腹自決する映画だ。70年の三島事件以降、三島の妻だった人が「自決を思い出すから」と言ってフィルムを集めて焼却した。気持ちはわかるが、個人的感情だけで日本の文化を焼却していいのかと当時は思った。

しかし、フィルムは残っていたのだ。未亡人のことを考えて他の人も黙っていたのだろう。その証拠に僕のところへも、数年前にある人から『憂国』のビデオが送られてきた。ロフトプラスワンで上映会もやった。その時は作家の夢枕獏さんも見にきてくれた。

三島の自決から35年。「もういいだろう」と、所有者が名乗りをあげたのだ。ヨーロッパでは早々と上映会が行なわれた。そして、日本では『三島全集』の別巻になって発売される。また、この映画の関係者である堂本正樹が『回想 回転扉の三島由紀夫』(文春新書)を去年末に出している。衝撃的な本だった。

しかし、奇妙というか、凄い話だ。死後35年経ち、全集が出ているのに拘わらず、次々と新しい発見があって全集に加えられ。まさに死後も生長し続ける作家なのだ。

(3) ミシマと力道山は会って話をしたのでしょうか

さて、三島全集は、1から14巻が長編、15～20巻が短編、21～25巻が戯曲、26～36巻が評論、37巻が詩歌、38巻が書簡、39～40巻が対談となっている。だから、後ろからのほうが読みやすいと思って実行している。必要な箇所はノートに写してから図書館に返している。

評論には、『行動学入門』『葉隠入門』『太陽と鉄』『文章読本』などがある。戯曲では『サド公爵夫人』『黒蜥蜴』『鹿鳴館』など。これらと短編を読了し、今やっと長編に入った。前回のHPに書いたが、12月27日夜、朝までかかって12巻の『複雑な彼』と『命売ります』を読んだ。

『複雑～』はあの『塀の中の懲りない面々』の著者・安部譲二さんがモデルだ。橋本龍太郎と同級生だった麻布中学校時代から愚連隊の安藤昇事務所に出入りしていたため退学、慶應義塾高等学校に編入したが、やっぱり退学してやくざになってあの本を書いたのだ。日航のパーカーもやっていて、国際線に乗る快男児だからやたらともてる。

三島は安部さんに直接話を聞き、この小説を書いた。安部は格闘技、プロレス、興業にも詳しくて力道山とも交流があった。だから、「見沢知廉を追悼

する会」で会った時に聞いてみた。

「三島さんと力道山を会わせたのは安部さんですか？」と。

これは、僕の長年の疑問だった。三島は剣道、ボクシング、空手はやったが、柔道、アマレスはやっていない。距離を持って闘う打撃格闘技が好きだったが、組討ち格闘技はやっていない。嫌いだったのだろう。というよりも三島は体が小さかったから、「組む」よりも離れて打ち、蹴る方を選んだのだ。だから柔道については全く書いていない。オリンピックの観戦記でアマレスについては書いているが、プロレスに至っては全く触れてもいないし、毛嫌いしていたのだろう。真剣勝負じゃないものには興味はなかったのか。ただ、そんな三島が力道山には会っている。「日本の英雄」と力道山だけは認め、憧れていたのだ。それに、毎日新聞社の『戦後50年』だったと思うが、三島と力道山が対談している写真が載っていて、ネットでも2ショット写真を見ることができる。

http://hugo-sb.way-nifty.com/hugo_sb/images/mishima_rikidouzan.html

これには驚いた。何を話したんだろう。読んでみたいと思った。だが、三島はこのことについて一切触れていない。まだ全集すべてを読んでいないが、まったく触れていないと思う。一方、力道山の書いたものや力道山について書かれたものもかなり読んだがこちらにも三島のことは出てこない。じゃー毎日新聞で対談したんだろうか。

いや、安部譲二さんかもしれない。二人を知っているのは安部さんだけだ。この人が三島を紹介し、対談させたに違いない。僕の頭の中では、それは<確信>になった。じゃー今度会ったときにじっくり聞いてみようと思った。三島と力道山。二人の英雄が一体、どんな話をしたのか。聞いてみたかった。

実は数年前、野村秋介さん追悼の群青忌で安部さんを見かけたが、途中で帰られてしまい、声をかける機会を逸してしまっていた。そして、去年11月5日の見沢氏の追悼会で安部さんにようやく会えたので、思い切って聞いてみたのだ。しかし、意外な答えが返ってきた。

「いや、そんな憶えはありませんよ？」と言う。「確かに二人を知っていますが、僕が紹介したんじゃないです」。それで、僕が見た写真の話をした。一体、二人はどんな話を？ それに、何に掲載されたのか？

安部さんは「多分、何かの折にばったり会って、写真だけを撮ったのでしょう。対談なんかはしてないと思いますよ」。えっ！ そんな！ と思ったが、

後で考えてみると、そうかもしれないと思った。でも、僕の疑問はまだ完全に解けたわけではない。いつかわかったら報告しよう。

(4)まだまだオススメあるだよ

三島のほか『日本の詩歌』(中央公論社・全31巻)も読んでいる。今、26巻だから、あと2ヶ月くらいで読破できるはずだ。この本は巻頭のカラーグラビアがきれいで、それだけで詩もきれいに見える。自分の知らない世界を知って勉強になった。感動した詩を今度紹介しよう。

また、『新潮現代文学』(全80巻)は、今75巻であと5巻だから3ヶ月くらいで読了…なのだが、この5冊が図書館にない。それで1巻ずつ取り寄せてもらっているので、時間がかかってしかたがない。全部読んだらまた詳しく書こうと思うが、僕のオススメはこれだ。

6巻 芹沢光治良 『人間の運命』 『狭き門』

12巻 石川達三 『青春の蹉跎』 『独りきりの世界』

14巻 高見順 『いやな感じ』 『死の淵より』

26巻 梅崎春生 『桜島』 『幻花』 ※これらは学徒兵、特攻隊について考えさせられた

39巻 阿川弘之 『雲の墓標』

41巻 遠藤周作 『沈黙』 『イエスの生涯』

43巻 住井すゑ 『橋のない川』

54巻 開高健 『夏の闇』

56巻 城山三郎 『落日燃ゆ』

63巻 丸谷才一 『笹まくら』 『横しぐれ』

66巻 吉村昭 『戦艦武蔵』 『冬の鷹』

70巻 高橋和巳 『我が心は石にあらず』 『散華』

71巻 柴田翔 『されどわれらが日々』

他に、島尾敏雄『死の棘』、司馬遼太郎『燃えよ剣』、三島由紀夫『金閣寺』『春の雪』などがある。既読のものもあるが、まったく初めてののも多い。

特に、高橋和巳、柴田翔などは30年ぶりに読んだ。当時は熱中して読み、感動した。だから、今読むのが怖かった。読んでみたら、もう完全に忘れていた。えっ、こんな小説だったのかと思った。でも別の感動が生まれたのだ。

ジャナ専でそんな話をしたら、今、高橋和巳の『憂鬱なる党派』を読んでいる、という生徒もいて嬉しかった。「おっ、がんばって読めよ！」と励ました。今は誰も読む人もいないと思っていたのに、こんな青年がいたのかと嬉しくなった。『悲の器』『邪宗門』など高橋の他の作品も読み返したいと思った。そういえば今はなき管理人・赤坂は、高橋和巳と誕生日が同じだと自慢していた。小林よしのりもそうなんだって。林家ペーみたいなヤツだ。そんなことはほっておいて、今、手帳を開いて去年何を読んだかを見てみた。手帳はこのHPでも書いたことがあるが、日本法令の『HANDY MEMORY』を愛用している。なかなか売っている店がないのが難点だが、ファルコンさんの自宅近くの文具店にあるので、いつも買ってもらっている。今年の方も年末に送ってもらったので、ようやく1月からの予定も立てられた。こんないい手帳なのに、どうして大手文具店には置いていないのか。不思議だ。世界一使いやすい手帳だと思うのに。

ともかく、去年の手帳を見てみた。全集や図書館から借りた本が多い。又、天皇論、憲法、宗教、格闘技、歴史……など自分が原稿を書く上で必要な本が多い。それに小説も多い。送っていただいた本もある。その中で印象に残った本を記しておく。

尾崎士郎 『小説・早稲田文学』(文藝春秋) 『大逆事件』(雪華社)

吉村昭 『赤い人』(講談社文庫)

橘木俊詔 『封印される不平等』(東洋経済新報社)

中条 省平 (編集) 『三島由紀夫が死んだ日 あの日何が終わり 何が始まったのか』(実業之日本社)

『皇室典範』(角川書店)

高橋哲哉 『靖国問題』(ちくま新書)

※ 『日本の君主制』の葦津珍彦さんの論文を紹介してくれただけでも嬉しかった

中野正志 『女性君主論』(朝日新聞社)

所功 『近現代の「女性天皇」論』展転社

犀川(さいかわ)博正 『警察官の現場』(角川oneテーマ21)

中山俊明 『紀子妃の右手』(情報センター出版局)

※ 古い本なので図書館で。いい本だった。図書館は思わぬ発見があっというトク・ベルツ(編纂) 『ベルツの日記 上下』(岩波文庫)

※ これは以前紹介した

島田雅彦 『美しい魂』(新潮社)

車谷長吉 『贗世捨人』(新潮社) 『赤目四十八瀧心中未遂』(文春文庫)

山本譲司 『獄窓記』(ポプラ社)

※ これには感動して思わず涙が出た。それで京都まで山本さんの講演を聴きに行った。

山田風太郎 『くの一忍法帖』 『甲賀忍法帖』 『忍法忠臣蔵』 『忍法八犬伝』(すべて講談社文庫)など忍法ものを全部読んだ。面白かった。今まで読んだことがなかったのだ。オクテだね。

森達也 『悪役レスラーは笑う』(岩波新書)

※ 森さんがこんなにプロレスに詳しいのかと驚いただよ

原武史 『皇居前広場』(光文社新書)

田原総一郎・姜尚中・西部邁 『愛国心』(講談社)

清水幾太郎 『愛国心』(岩波新書)

※ 40年ぶりに読み返した。いい本だ。愛国心についての古典的名著だと思った。

西部邁・宮崎学 『酒場の真剣話』(イブシロン出版)

斉藤貴男 『機会不平等』(文春文庫) 『非国民のススメ』(ちくま書房)

宮崎学 『法と掟と』(洋泉社)

筑紫哲也 『旅の途中』(朝日新聞社)

佐藤優 『国家の罟』(新潮社)

保坂正康 『東条英機と天皇の時代』(ちくま文庫)

宮城谷昌光 『史記の風景』(新潮文庫)

※ 実は横山光輝のマンガ『史記』全11巻(小学館)もいい本だ。感動した。でもマンガだからノルマには入れられない。残念だ。

島田裕巳 『日本人の神はどこにいるか』(ちくま新書)

他には、中里介山『大菩薩峠』、司馬遼太郎『街道をゆく』など全集ものも読破した。大塚英志『読む。書く。護る。―「憲法前文」の作り方』 『「私」であるための憲法前文』(ともに角川書店)など大塚の本はかなり読み、教えられることが多かった。天皇論、連赤論も面白かった。

できたら433冊全部を紹介したらいいんだろうが、そうもいかん。「読書にノルマを決めるなんておかしい。邪道だ」と言う人もいる。ノルマがなくても、本を読み、勉強している人は偉い。でも僕は意志が弱いし、すぐに易きに流れてしまう。正月だって原稿も読書も口クにできんかった。だから、いつまでも学生のような気分で、自分にタガをはめなくちゃと思っている。皆さんも月に5冊でもいい、10冊でもいい。目標、ノルマを決めて読んでみた

らどうでしょう。

【だいありー】

(1) 1月1日(日)

12月31日から1月1日まで「足かけ2年」あるので、かなり原稿を書けると思ったが、さっぱり書けなかった。去年まで年末はPRIDEを見に行ったが、連載してた格闘技雑誌がなくなって、僕の連載もなくなった。そんで、取材では入れなくなった。しかたないのでテレビで見る。昼は街で『男たちの大和』を見る。よかったが、長淵剛の「Close your eyes」はないだろうと思った。PANTAさんの言うとおりであった。でも映画はよかった。森達也さんは「反戦映画だったよ」と言っていたが、うーん、どうかな。しかし、戦争映画には「全て」がある。戦い、殺し合い、非日常、愛、友情、裏切り…と人生の、歴史の全てがここに凝縮されている。だから戦争映画はなくなるのだろう。

(2) 1月2日(月)

学校の生徒から呼び出されて池袋で飲みました。

(3) 1月3日(火)

夜7時から風見愛や赤坂たちの新年会にお呼ばれしました。

(4) 1月5日(木)

『論座』2月号発売。「私と参拝」をテーマに書いてます

(5) 1月7日(土)

朝日ニュースター「テレビ噂の真相」放映。

『実話マッドマックス』2月号発売。「不良が狙う！「今年消したい奴」に書いてます。さて、私の消したい人は誰でしょう。塩見孝也元議長は小泉を消したいと言っていました。しかし、僕も塩見さんも「不良」なの？ なんか嬉しいですね。不良なんて初めて言われた。「裏切り者」とか「ドジ」とはよく言われちよりますが。よし、今年は不良で決めてやるけん！

<http://www.coremagazine.co.jp/magazine/dynamite/>

(6) 1月8日(日)

東中野図書館。今日から大相撲が始まりました。国技だから、愛国者としては見なくちゃ。

正月は、必死で原稿を200枚書こうと思っていたのに、半分も書けんかつ

た。正月は他にやることがないから原稿に集中できると思っていたのに、考えが甘かった。寒いからコタツで書いているといつの間にか寝ちゃったり。テレビばかり見たり。誘いの電話に乗って出かけたり呑んだり。意志が弱いんですな、こいつは。来年の正月は意志を強く持ってがんばりましょう、ともう来年の決意をして、書初めもした私です。

【お知らせ】

(1) 1月18日発売の『サイゾー』で、岡留安則さんと天皇制をテーマに対談しています。かなり突っ込んだ話をしました。同じく18日発売の『Middle Weight Fighters Style Book』で須藤元気選手に私がインタビューしています。大晦日にはKIDに負けちゃったけど、でも元気さんの哲学、人生観は深いですよ。

(2) 1月17日(火)午後7時より高田馬場トリックスターにてライブ塾です。若松孝二監督がこれから撮る映画「実録・連合赤軍」について語ってくれます。

(3) 1月18日(水) 午後7時より高田馬場シチズンプラザにて一水会フォーラム。講師は福田逸先生(明治大学教授)。「日本を保守するもの」—天皇制と国語—

(4) 2月14日(火) 午後7時より高田馬場トリックスターにてライブ塾。漫画家の石坂啓さんが「日の丸・君が代」について語ってくれます。

(5) 有田芳生さんがブログで僕の事を書いてくれてます。赤報隊問題の話です。

<http://www.web-arita.com/sui0512b.html>

有田さんは毎日書いてるんですね。偉いんですね。忙しいのに。よく書く時間があるものだと思います。友達が「有田さんのブログは文章もうまいし、日常の話なのに思想的だ」と言ってた。さらに「猫と遊んだ。オワリ」なんていう鈴木さんのサイトとは大違いだとも言われた。悔しいですね。どうせ私のは小学生の作文ですよ。僕も毎日ブログに書くかなー。でもそれをやったら本を読めんよ。

(6) だいたひかる はいいいよね。面白かったので、ついメモしてしまった。

「納得いかない」。七転八起。転びすぎ。ノストラダムスはあやまれ。

「私だけでしょうか」 句読点の打ち方が分からない 合唱している子供を見ると、エサを待っているヒナに見える

「どうでもいいですよ」 何座？ ギョーザ

空中元彌チョップ

「ねームイミン」

曙のやる気

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)
[2006年](#)

今週の主張 1月16日

「戦後民主主義礼賛」でいいじゃないか。石坂洋次郎はいいよ

(1)この人の出身地は一体、どこなんだ

福島県出身、秋田県出身、宮城県出身…。と、「学説」が分かれている。学説というのは大袈裟だが、この三つがこの人の「プロフィール」には載っている。「そんなことは調べたらすぐに分かることじゃないか」と言われるだろう。「それとも、そんなに大昔の人か？」と聞かれるかもしれない。大昔のはずはない。江戸時代の藩ではないし、県だから。明治の廃藩置県のあとに生まれた人らしい。それなのに「出身地」の学説が分かれている。不思議だ。

その不思議な人は誰かって。私ですよ。私のことなのに本当の出身地は分からない。だから新聞や雑誌に原稿が載る時も、「プロフィール」は、まちまちだ。いつ、どこで生まれたのかも分からない。親が誰かも分からない。橋の下に捨てられてたという説もあるし、馬小屋で生まれたという説もある。生後1週間で病院から攫われて、全く別人の手で育てられたという説もある。最近もあったでしょう。宮城県は人攫いの多い土地なんだ。

と、出生の秘密を語り始めたところで、本題に戻る。親はいたし、秘密はないんだが、「出身地」が三つあるのは本当だ。だから皆、てんでに書いている。本籍地は宮城県塩釜市だ。父親の出身地で、鈴木家の本家がある。墓もある。だから、「出身地は宮城県」でよさそうだ。でも、父親は税務署に勤めていたので東北地方を転々とした。2年か3年に一度、転勤する。当然、学校も転校するわさ。「ここの小学校は居心地がいい。かわいい女の子も多いから転校は嫌だ」といってダダをこねたが、無視された。一人だけで

生活し、「単身登校」しようとしたがダメだった。

でも、実現できたら面白かっただろうね。小学校2年くらいで、一人でアパート住まいをする。自炊をして一人で学校に通う。生活費は親が送ってくれるから大丈夫だ。働かなくってもいい。一人暮らしで勉強三昧だ。そのうち好きな女と同棲しちゃう。子供も出来ちゃう。小学生夫婦だ。子供なのに子供を持つんだ。革命的だよ。

しかし、そんな革命的生活は出来ず、親について回って転校していた。生まれたのは福島県郡山らしい。三島由紀夫じゃないから、生まれた瞬間は見てないし、はっきりとは分かん。生まれたのが福島だから、「福島県出身」と書かれることも多い。

福島県郡山市は生まれただけだ。その後、青森県に行ったらしいが記憶にない。ねぶた祭りを見たような記憶もあるが、後からの知識かもしれない。ともかく、幼稚園に入る前の記憶は一切ない。もしかしたら、それまではこの世にいなかったのかもしれない。生まれたらすぐ立ち上がる小馬のように、生まれたらすぐに幼稚園児だった。電柱につかまって「行きたくない！」と泣きじゃくっている園児。それがこの世に生を受けて第1番目の記憶だ。私の第1番目の〈仕事〉かもしれない。

幼稚園と小学1年は秋田県横手市だ。2年、3年は秋田市だ。4～6年と中学1、2年は湯沢市だ。中学3年と高校は宮城県仙台市だ。大学になったら東京だ。流浪の生活だ。もの心がついて、子供時代を送ったのは秋田県だ。横手、秋田、湯沢と「秋田の自然」が私を育ててくれた。この世に生まれ出て、初めてアイデンティティを感じたのは横手の電柱にしがみつく己の姿だった。宇宙からテレポーテーションしてこの地球に来て、電柱にしがみついていたのだ。

私の性格も考え方も、秋田県で作られた。秋田は私の母だ。だから、「出身地」といったら秋田が一番正しいのかもしれない。聞く方も杜撰なんだよな。「本籍は？」とか、「出生地は？」と聞けばいい。そしたら宮城県だ。福島県だ。と即座に答えられる。でも、「出身地」となると、概念が広い。宮城に本籍があり、福島で生まれたけど、秋田県で育ったから、「秋田出身」かな。とってしまう。

昔、「三人の母」という映画があった。生みの母。育ての母。そして、どっかに引き取られるので、名義上の母。涙、涙の物語だった。私の「出身地」もそうなんだわさ。だから、どこだっていいじゃないか、と今は思っている。面倒だから、出身地は「日本」と書こうかな。パスポートのようだ。

私の本の巻末には「1943年（昭和18年）、福島県生れ」と書いている。「出身地」なんて曖昧な概念は使わない。新聞や雑誌の「プロフィール」は、「福島県出身」が多いが、「宮城県出身」「秋田県出身」もある。どれも間違いじゃない。

しかし、明らかな間違いもある。「福岡県出身」「徳島県出身」と書かれた時だ。福島の福に引かれて福岡になり、もう一つは福島の島に引かれて徳島になったのだろう。これで出身県は5つになった。うれしい。

そうだ。産経新聞社に4年半勤めていたが、私は「産経新聞社記者を経て」と書かれることがある。皆、新聞社といったら記者しかいないと思っているのだ。だが私は、販売局と広告局にいた。それも、無能で使い途がなく、9回も部署を変わり、たらい回しされた。

販売局にいた時、「拡張センター」という部署にいた。何のことはない、拡張員のような仕事をするのだ。新興住宅地に行って、「産経新聞を取って下さい」と一軒一軒まわるのだ。又、団地の入居者の抽選会に行って、当たった人に勧誘したこともある。本来は地元の販売店か拡張員がやる仕事だ。本社からわざわざ社員がゾロゾロと来て勧誘したのは産経だけだった。

勧誘しても、なかなか取ってくれない。「産経なんて恥ずかしくて取れない」「やっぱり朝日でなくっちゃ、世間体が悪い」と断われた。「あーあ、やだな」と同僚が嘆いていた。「大学出て新聞社に勤めたっていうから母親は、記事を書いていると思ってるのに、こんなことをしてんだもんな」…と。その後、彼は辞めて今は銀座で画廊を経営している。私も一緒に辞めて、彼の下で使ってもらえばよかった。

「プロフィール」には、「産経新聞記者を経て」と書かれることがある、という話だ。ゲラが送られてくれば、そりゃ良心的に直しますよ。「記者」を消すとか。「販売局」「広告局」を入れるとか。時には自虐的に、「産経新聞配達員を経て」と直そうと思ったこともある。入社してから、配達員もさせられたから嘘じゃない。

ゲラは直すが、ゲラを見せないで、向こうで書かれたものは仕方ない。「新聞記者を経て」なんて書かれると、何か偉くなったようで嬉しい。たった一度だが、あえて直さなかったことがある。すみません。出来心で。

「じゃ今度は、“産経新聞論説委員を経て”と書きましようか」とレコンキスタの編集人に言われた。「えっ、間違っ、そう書かれたの。困るなー」と私は笑ってればいい。でもネタをバラしちゃ、もう使えんか。いいんですよ、「新聞配達員を経て」で。

(2)明るく能天気でも、「青い山脈」はいいよね

さて、ここで再び、出身地の話だ。私が地球人だと初めて知ったのは横手の電柱にしがみついた時だ。いい町だった。何かの時に友達に、「幼稚園と小学1年は横手だよ」と言うことがある。「ヨコテって何？」と聞かれると、ほら、石坂洋次郎の「山と川のある町」のモデルになった所だよと言っていた。「あっ、あの町ね」と以前は分かったのだ。今じゃ、かえって分からなくなる。石坂洋次郎を知らない。かわいそうに「過去の作家」だ。「青い山脈」の作者だと言うと、「ああ」と知ってる人もいる。「ああ」には色々な意味があるが、あまりいい意味はない。「何だあの大衆作家か」「戦後民主主義を謳歌しただけのあの能気な作家か」。といった意味なのだ。

横手だって、「山と川のある町」よりも雪の風物詩「かまくら」の方が有名だ。雪で小山を作り、中をくりぬく。そこでモチを焼いたり甘酒を飲んだりする。懐かしい。北国版の「三丁目の夕陽」といった感じかな。

石坂洋次郎は横手で教師をしていた。その体験が、「山と川のある町」になっているし、他の小説にも生きている。でも、生まれたのは青森県だ。出生地は青森県で、出身地は秋田県（横手市）だ。青森県生れというと太宰治を思い浮かべる人が多いだろう。「太宰治は津軽の暗さを、そして石坂は津軽の明るさを代表する作家」とも言われる。

しかし、石坂は能気な明るいのではないし、本人もこれには不満だったようだ。

昭和41年、石坂は「健全な常識に立ち明快な作品を書きつづけた功績」という理由で、第14回菊池寛賞を受けたが、その時、こう言っている。

「私は私の作品が健全で常識的であるという理由で今回の受賞にあずかったのであるが、見た目に美しいバラの花も暗いじめじめした地中に根を匍（は）わせているように、私の作品の地盤も、あんがい陰湿なところにありそうだということである…」

なかなか、深いことを言っている。決して、「明るい」だけの作家ではなかった。又、横手での13年間の教師体験の方が、小説の元になっている。だから、「秋田出身の作家」といった方がいい。

石坂は青森で1年、横手で13年、計14年、教員生活をしている。圧倒的に横手の方が長い。秋田県立横手高等女学校（現在の城南高校）。秋田県立横手中学校（現在の美入野高校）などに勤務した。僕は幼稚園と小学校1年の時は横手にいた。昭和25、26年だ。9才上の兄は美入野（みいりの）高

校には入っていた。石坂が教師をしていた高校だ。でも、石坂は教員をやめ、その頃は東京に住んでいた。もう、ベストセラー作家になっていた。

なぜ突然、石坂洋次郎の話をしたかだ。「横手」で思い出ただけでなく、最近、石坂の「青い山脈」と「あいつと私」を読んだからだ。「新潮現代文学」（全80巻）で読んだのだ。両方とも昔、読んだ。粗筋は知っている。「でも、大衆小説だろう」と思っていた。中学や高校の国語の教科書に取り上げられることはない。「文学史」にも載ってない。大衆小説だからだ。大衆小説というのは〈娯楽〉だ。〈文学〉ではない。そう思われている。

ところが、久し振りに読んでみて、感動した。なかなかいい。「青い山脈」は敗戦後の昭和22年6月から9月まで「朝日新聞」に連載された。敗戦と共に日本人は新しい行き方を求めている。それに答えた小説だ。本は売れ、映画化もされた。歌もヒットし、今でも歌われている。「若くあかるい歌声に 雪崩（なだれ）は消える 花もさく」で始まる歌だ。西条八十の作詞で、服部良一が作曲。藤山一郎、奈良光枝が歌った。とにかく明るい歌だ。能天気な歌だとも批判されるが、結構、思想的な歌だと私は思う。古い軍国主義、全体主義から脱却し、これからは個人が前面に出る民主主義の世の中だ。という明るさと意欲に溢れている。そのこと自体は悪くない。いいことだ。僕は好きな歌だ。カラオケでもよく歌っている。特に二番がいい。

「古い上衣よ さようなら
さみしい夢よ さようなら
青い山脈 バラ色雲へ
あこがれの
旅の乙女に 鳥も啼く」

「古い上衣」は古い時代だし、古い道德だ。それを脱ぎすてるのだ。上着の比喩は野村秋介さんもよく使っていた。右翼だからといって古くさいことばかり言い、古い行動だけをしていてはダメだ。上衣が小さくなったら、捨てたらいい。いつまでも小さくなった古い上衣に自分を合わせることはない。そして、一般の人に分かる言葉で話し、新しい感覚で運動をすべきだと。もしかしたら、「青い山脈」の歌が心の中にあっただのかもしれない。

「青い山脈」は女子高を中心とした物語だ。新子は六助と町を歩いていただけで、クラスの皆から批判される。ニセのラブレターまで、でっち上げら

れる。しかし〈犯人〉は、「私は愛校心からやったのです」と涙ながらに訴え、皆の同情を買う。男女が町を一緒に歩くなんて不潔だ。そんな生徒はやめさせるべきだという。それを担任の雪子は批判する。すると、その雪子がクラス中から叩かれ、孤立する。教師からもPTAからも批判される。

校医の沼田だけは味方だ。又、芸妓梅太郎も。沼田はいい人間だが俗物だ。「将来は大病院を持って、多分、看護婦の2、3人に手を出して問題になり、その後、市議員になり、妾の一人も持つだろう」と偽悪的に夢を語ると、いきなり雪子に頬っぺたをひっぱたかれる。映画でそのシーンは印象的だった。

又、新子の行動をめぐってクラス討論会が連日開かれる。PTAの総会が行われる。自由とは何か。民主主義とは何か。が大真面目に議論される。それがいい。何が〈愛校心〉かも議論される。

これは〈愛国心〉であってもいい。でも、敗戦直後だから、愛国心という古い言葉は使わないで、〈愛校心〉と言ったのだろう。そんな気がする。

性の問題だって明るくサラリと取り上げている。そうか、こんなところが〈革命的〉だったんだろう、当時は。だから、大ヒットしたんだ。もう一つの「あいつと私」になると、さらに性の問題を大胆に取り上げている。

「私」は女子大生で、「あいつ」は男子大学生だ。映画にもなって「あいつ」は石原裕次郎が演じた。これは敗戦から、かなりたち、昭和35年から36年にかけて「週刊読売」に連載された。あいつは、金持ち（ママがやり手の美容師）の息子だ。お小遣いもふんだんにある。学校で、「何に使うのか」と教師に聞かれ、「時々は夜の女も買います」と露悪的なことを言う。

又、母親は「息子の性」を心配し、高校2年の時、内弟子の女性を「セックスの緩衝器」として、与える。こんなことはありえないだろうが、凄い設定だ。「性が生を変える」とでも言うように、石坂は大胆な性の問題を提起する。

(3)かわいそうに。右翼に脅されたんだって

この本の「解説」で小松伸六はこう言う。

〈この作品（あいつと私）で注目すべきことは、セックスの問題が大胆に提出されていることだ。高校生のゆみ子に精子・卵子の話をさせたり、「男女の肉体関係では男は積極的で女は消極的だという定説」に疑問をもつと言わせたり、「バンビの奴、いまごろはお嬢さんの精液を身体の中に入れて、すやすやと眠っているんだろうな！」と金沢正太にいわせる。思春期の少年

セックスの盲目性やモトコたちの夫婦関係も活発に論議されている)

バンビというのは同級生で、この日、結婚式だった。新婚旅行に発った彼女を思いながら金沢たちは、「いまごろは…」と想像するのだ。これが書かれた当時なら、大変なことだったろう。革命的な表現だったろう。昭和35年だ。この年は60年安保だ。だから、「安保反対」のデモの話もふんだんに出てくる。だからといって、「反動政府」と「正しいデモ・学生」というステロタイプの対立構図ではない。デモに行く学生の理想や夢も語るが、同時に、そんな中にも、下らない学生はいたと書いている。小松は書く。

〈地方出身で政治に興味をもつ元村貞子、新安保反対のデモに参加し、酒をのみ、同志的感情から同郷の男二人に安宿で犯されてしまう金森あや子などが登場する〉

昔読んだ時は気がつかなかった。学生時代に読んだから、ここを読んでも、サラリと流していたのだろう。「まさか」とか、「小説として奇をてらったのだろう」と。だって、僕らの学生運動にはそんなことはなかったからだ。左翼のことは深く知らなかったし。しかし、今なら分かる。こんな理想や夢を語り合いながらも、こうした問題は起こる。四ト口という新左翼のセクトでも起こった問題だ。又、日共は非合法時代、敵の目をごまかすために、男女ペアで一緒に住ませた。「ハウスキーパー」だ。これだって、ねじれた性の強制だ。

「あいつと私」では地方出身の貞子は、「絶対にそんなことはない」と主張する。しかし、貞子が尊敬する運動の先輩があや子を犯した。デモで興奮し、気分が高揚したからか。同志なら肉体も一緒になるべきだと思ったのか。ともかく、二人がかりであや子を犯す。事実をつきつけられても貞子は「そんなはずはない」と教条的に否定する。ついには、「あなたが誘ったんでしょう」と被害者のあや子に殴りかかる。悲惨だ。全然、革命的じゃない。そこら辺の男女の争い。三角関係の争いだ。それなのに社会主義の理論で理屈をつけて武装しているだけ、かえって醜い。目を覆いたくなる。

石坂は「新しい時代」を謳歌し、古い意識、古い体制を批判する。しかし、新しい意識をもった革命的な男女にもまだ残る旧さをも批判する。それも性の問題を取り上げながら、その手法が、斬新だったのだ。小松は言う。

〈バルザックの「風流滑稽譚」にヒントを得て、田舎のおおらかな性を描き、ワイセツ罪容疑に問われた「石中先生行状記」(昭和23年)をはじめ、

新聞小説で「性」をひめごとから解放しようと、積極的にとりあげた「光る海」、さらにインツェスト（近親相姦）を主題にした野心作「水で書かれた物語」にいたるまで、石坂氏は一貫して〈性〉の問題をとりあげている

いや、「性」だけではない。こんなこともあった。「年表」にも出ていたが、昭和13年（1938）。石坂、38才の時だ。

〈11月、執筆に専念するべく、勤続14年にわたる教員生活に終止符をうち退職。「若い人」が右翼団体から、不敬罪、軍人誣告罪で告訴され（不起訴になる）ていたこともあり退職を早めた〉

「若い人」も昔、読んだと思ったが、忘れていた。こんなことがあったのか。じゃ、この本も、もう一度読み返してみよう。と思って本屋で探したが、ない。もう読む人もいないからか。図書館で探したがやはりない。ただ、「日本の文学」（中央公論社）の中に入っていたので、借りてきた。「若い人」と「石中先生行状記」が入っていた。しかし、どこが「不敬」だったんだろう。それは又、再読してから報告しよう。

それと、今週は「新潮現代文学」の高橋和巳を読んだ。新幹線で広島に二回行ったので、読めたのだ。「我が心は石にあらず」「散華」「墮落」だ。これも久し振りに読み返した。30年ぶりか。あっここに感動したんだ。あっこの文句にしびれたんだ…と、懐かしい〈再会〉があった。いいもんだね。昔の恋人に会って心をときめかせているようだ。恋人ならば、30年たったら、古くなって、ときめかないかな。その点、本は古くならない。いつまでも新鮮だ。やはり、読書ですよ。人生の最大の楽しみは。本の中にこそ全てがある。と読んでばかりいないで自分の原稿も書かなくっちゃ、と焦る私でありました。

【だいありー】

(1) 1月8日(日)昼の新幹線で広島へ。そこから電車で呉に。沢口ともみさんのお見舞いに行く。手術も成功し、もうすぐ退院できると思ってたのに、容態が急変し、危篤だという。「今日明日が山だ」と医者は言っている。前夜おそく塩見さんから電話があったのだ。塩見さんの他、東京から4人ほど来ていた。沢口さんに声をかけたが、反応はない。かすかにうなずいてるように思えたが。夜は市内のホテルに泊まる。

沢口さんは、イラクにも一緒に行った。僕は一回しか行ってないが、沢口さんは三回も行った。団長は木村三浩氏だったが、彼女は事務局長。一番大

変な仕事を担当していて、ロフトにもよく出ていた。がんばり屋さんだった。浅草では、快樂亭ブラックさん、沢口さん、そして僕と三人でライブをやったこともあった。早く元気になってもらいたい。

(2) 1月9日(月) 午前中、病院に行く。塩見さんは、さすがだと思った。枕元で、「沢口さんは何も悪いことをしてないし、世のため、義のために闘ったんだ。だから必ず治ります。がんばって下さい」と言っていた。感動した。僕なんて、何も言えずにオロオロしていた。「良くなれないが、このままで安定してます」と看護婦さんが言う。「また来ますから」と言って、東京勢4人は帰った。

(3) 1月10日(火) 朝電話があった。今朝7時に沢口さんが亡くなったという。啞然とした。昨日会ったのが最後になってしまった。今日も東京からは木村三浩氏をはじめ5人ほどが呉に行っている。木村氏は「明日のお通夜に出て帰ります」と言っていた。昼、仕事の打ち合わせ。図書館。

(4) 1月11日(水) 午後3時からJR総連の新春賀詞交歓会。松崎さんをはじめ、JR労組は国家権力により大弾圧を受けている。その実状も聞きたかったし、会って打ち合わせる人もいたので出る。実は、夜6時から呉で沢口さんのお通夜だ。行くべきだと思ったが、翌日の告別式に出ることにして、JRの会合に出る。

(5) 1月12日(木) 午前11時から呉の玉泉院で沢口さんの告別式。朝一番(6時)の新幹線で行く。東京からも仲間が大勢駆け付けていた。学校の恩師、同級生も参加し、号泣していた。涙が出た。亡くなったなんて今でも信じられない。夕方、帰京する。

(6) 1月13日(金) 一日、図書館にいる。資料を探したり、本を読んだり、原稿を書いたり。

(7) 1月14日(土)、15(日)、メ切的迫った原稿があって、必死で書く。なかなか書けん。頭が悪いのかな。

【お知らせ】

(1) 1月16日(月) 7:00p.m.ネーキッド・ロフトで「塩見塾」開校。第1回のお相手は木村三浩氏。パトリオット(愛国者)二人の活発な討論がなされるでしょう。なお、急遽、予定を変更し、「沢口ともみさん追悼集会」にす

ることになった。私も出るようになった。

(2) 1月17日(火) 7:00p.m.高田馬場のライブ塾 (トリックスター)。若松孝二監督が映画「実録・連合赤軍」について語ります。かなり大掛かりな映画のようで、各方面からも期待されてます。抱負を語ってもらいます。

(3) 1月18日(水) 7:00p.m.高田馬場シチズンプラザにて一水会フォーラム。講師は福田逸先生 (明治大学教授)。テーマは「日本を保守するもの＝天皇制と国語＝」。

(4) 2月11日(土)午後1時。ロフトプラスワン。重信房子さんを激励・支援する集い。

(5) 2月14日(火) 7:00p.m.高田馬場ライブ塾。漫画家の石坂啓さんが「日の丸・君が代」について語ります。

(6) 2月17日(金) 夕方。靖国問題をめぐる激論映画「あんにょん・サヨナラ」上映記念トーク。李熙子 (イ・ヒジャ)さんと私。

(7) 2月23日(土) 10:00a.m.東京地裁。重信房子さんの判決。

(8) 2月28日(火) 6:00p.m.文京シビックホール (小ホール)。シンポジウム、「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」。

(9) 1月13日(金)発売の『わしズム』 (vol.17・小学館)で小林よしのりさんと堀辺正史先生 (骨法道場)が対談してます。「あえて言う。日本の武士とは“世界一の首狩り族”である」という衝撃的なタイトルです。ぜひ読んで下さい。

(10) 1月12日(木)の「夕刊フジ」に「元自衛官ストリッパー、壮絶死」と、沢口ともみさんのことが大きく出てました。又、1月19日(木)発売の「週刊実話」に沢口さんの記事が出るそうです。呉まで取材に来てました。

(11) 1月25日(水)のロフトプラスワンは高須基仁プロデュースで急遽、「沢口ともみ追悼ライブ」に変更するそうです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年 2004年 2005年 2006年

今週の主張 1月23日

「平和日本」じゃない。これはもう、〈戦争〉なのだ

(1) 4ヶ月に9人が〈戦死〉した！

昔、中核派の活動家が言っていた。「戦争が終わって今は平和な時代だと皆、言ってるが、そんなことはない。我々の仲間が毎日のように殺されているんだ。これはもう戦争だ」と。革マル派との内ゲバが熾烈に行われていた頃だ。血で血を洗う、文字通りの戦争なのだ。

革マルにしたって、同じことを言うだろう。

「日本は平和ではない。戦争だ」と。

『内ゲバに見る警備公安警察の犯罪』（あかね図書販売）を読むと、革マル派は78人も殺されたという。中核派も同じ位、殺されているのだろう。（注：『検証内ゲバ』（社会批評社）によれば革マル派は中核派の攻撃により48人死亡。解放派の攻撃で23人死亡している。又、革マル派による攻撃で死亡した中核派・解放派は15人だという）。まさに戦争だ。警察官だって、こんなには死んでない。「国防」の任に当る自衛官だって、死んでない。革命家だけが次から次と殺されている。

この話は僕の『公安警察の手口』（ちくま新書）にも詳しく書いた。それに、中核vs革マルの内ゲバには実は裏がある。いや、「裏がある」と両派は主張している。革マルは言う。「我々の仲間を殺しているのは権力の謀略部隊だ。中核派は犯行声明を出してるだけだ」と。権力（公安）と中核は一体となって革マルを殺していると。中核派も同じ論法で革マルを批判する。警察（K）と革マル（K）は一体となって我々を殺している。「KK連合」が全てやっているのだ…と。

これは単に、新左翼の「内ゲバ」なのではない。権力謀略部隊が、つま

り、〈国家〉が我々を潰そうとして襲いかかっている。それと我々は断固として闘っているのだ…と。そう思いたいのだ。たしかに国家権力が謀略を使うことはある。わざと、相手に情報を流したり、内ゲバを誘ったりと。はた又、尾行・張り込みをしても、内ゲバの時は、見て見ぬふりをするか。そんなことはやるだろう。しかし、新左翼と一緒に人殺しをすることはない。そう思う。

元公安の北芝健氏も「どんなことがあっても殺しに参加することはありません」と言う。ただし、潜入した公安が内ゲバに巻き込まれて死んだケースは10件以上あるという。これは、『公安化するニッポン』（WAVE出版）の中で彼が言った。

しまった。内ゲバの「裏側」や、公安の潜入捜査の話まではするつもりがなかった。「今はもう戦争だ」といった中核派の言葉だけを紹介するつもりだった。だから、話をそこまで戻す。中核派にそう言われたら、「大変だね」「ひどいね」と相槌を打つしかない。しかし、もうひとつ実感が湧かなかった。「君らが勝手に戦争状態を作ってるんじゃないか」と思ったからだ。

自分たちが内ゲバをやめたらいいのだ。いったん始めたものをやめるには勇気がある。しかし、やめるべきだ。それをやらなくて、「今は戦争だ」はないだろうと思った。

ところで、現在の話だ。今はあまり内ゲバもない。公安は何とか仕掛けようとしても、新左翼にはもう余力がないのだろう。そんな時だ。こっちの方が、「今は戦争だ」と思った。なぜこんなに次々と人が死ぬのか。まさに戦争じゃないか、と思った。

だって昨年の9月から4ヶ月で、もう9人も死んだ。何なんだこれは、と思った。僕の人生の中で、こんな短期間に、こんなに大勢の人が死んだことはなかった。異常だ。たしかに、戦争ではない。いや、見沢知廉氏にしる、戦死かもしれない。又、「憂国忌」の世話人・三浦重周氏は憂国の割腹自決を遂げている。他の人達は病死だ。だが、闘いの途上で死んでいる。やはり戦死だろう。

民族派運動の後輩は3人死んだ。全国学協2代目委員長の吉田良二氏。作家の見沢知廉氏。「憂国忌」世話人の三浦重周氏だ。

民族派運動の先輩は3人死んだ。中村武彦先生、北上清五郎先生、清水一

路先生だ。又、お世話になった評論家でアナーキストの玉川信明先生。「朝まで生テレビ」のプロデューサー・日下雄一さん。そして今年の1月10日に亡くなった沢口ともみさんだ。計、9人だ。

「もう誰も死ぬな！」と叫びたい気持ちだ。民族派運動の関係者から話をしよう。見沢氏のことは何度も書いてきた。吉田氏と三浦氏のことだ。吉田氏は全国学協の委員長。三浦氏は日学同（日本学生同盟）の委員長をしていた。

1960年代後半、全共闘に対抗して民族派学生団体が生まれた。詳しくは僕の『新右翼』（彩流社）を読んでほしいが、日学同と全国学協という二大潮流があった。時には協力し合い、時には反撥しながら、全国制覇を目指した。全共闘と対決しながら、民族派による全国制覇を目指したのだ。

その中で、自治会を獲得し、「民族派全学連」を創ろうという動きもあった。今、国会議員になった井脇のぶ子さんは当時、別府女子短大の生徒で、自治会の委員長だった。「民族派全学連」は、いい所まで行ったが、潰れた。

次には、OB組織を作ろうとした。いつまでも学生ではいられないし、卒業してからも運動を続ける為に「青年組織」が必要だと思ったのだ。これは成功した。全国学協は日本青年協議会を作る。そして日学同は重遠社を作る。又、日学同は三島研（三島由紀夫研究会）をつくり、毎年11月25日に「憂国忌」を行なってきた。三浦重周氏は、この重遠社の代表であり、三島研の事務局長であり、憂国忌の世話人なのだ。そして彼は早大在学中は日学同の委員長もやっている。その彼が12月に自決した。

一方、吉田良二氏は全国学協の二代目委員長だ。二代目とはいったが、実質、彼から始まったようなものだ。だって初代の委員長は無能・無気力で就任後すぐに降ろされてしまったからだ。つまり私だ。僕と違い、吉田良二氏は人徳があり、人をまとめる力がある。北大の学生で、明るく、格好よく「北海道の石原裕次郎」と言われた。又、北方領土返還運動に力を入れていたので、「北方良二」とも言われた。その吉田君も去年、亡くなった。病気だった。

だから去年は、全国学協、日学同という二大組織の元委員長が亡くなり、元活動家たちが全国から集まった。思いがけなく昔の仲間たちと会った。心ならずも「同窓会」のようになった。

吉田氏の通夜、告別式は家から100メートルの落合斎場で行われた。僕よ

り4つほど下だった。まだまだ若かったのに残念だ。吉田氏の葬儀のことはこのHPにも前に書いたと思う。

(2)大西中将を思わせる、三浦氏の壮絶な自決

では、三浦重周氏の話だ。彼の自決は週刊誌にも取り上げられた。「週刊新潮」（12月29日号）だ。

〈壮絶な「割腹自殺」を遂げた
「三島由紀夫研究会」事務局長〉

2ページにわたって詳しく報じられている。宮崎正弘氏（評論家・元日学同事務局長）、木村三浩氏（一水会代表）のコメントも出ていた。12月10日、新潟市の岩壁で自決した。正座して、皇居遥拝の形をとって前のめりにうづくまるような格好で自決していた。宮崎氏は語っている。

「三浦氏は毎年、三島の命日に行われる、憂国忌という行事の実行委員で、政治結社の代表を務めていました。派手な行動をするタイプではなく理論派。お金や名声などの俗っぽい欲が全くない非常に高潔な人柄でした」

本当にその通りだった。誠実で、寡黙な人だった。活動家というよりは、むしろ学者タイプだと思った。思想家だった。見沢知廉氏の自殺にはショックを受けていた。木村三浩氏はこう語っている。

〈最後にお会いしたのは11月26日の勉強会の席でした。二人で話をしながら、地下鉄で帰る時に、三浦先輩は“日本の状況を変えるくらいのインパクトのある展望が必要なんだ”と仰り、“展望だよ、展望”と繰り返されました。これからの民族派運動を背負っていかれる思想家の一人だったのが、残念でなりません〉

友人と酒を飲み、話をしてる時にも、三浦氏は「如何に死ぬべきか」という話をしたという。学生時代からの友人は語る。

「長年、運動を続けて、中々大きなムーブメントが作り出せないことに、どこか無力感を抱いていたとも思えます。とにかく、ベッドのマットの下には常に出刃包丁を敷いて、いつでも死ぬるという覚悟を持っていましたから」

その出刃包丁で自決したのだ。12月22日(木)6時半から市ヶ谷「グランド

ヒル市ケ谷」二階白樺の間で、「三浦重周さんを追悼のゆうべ」が行われた。大勢の人が全国から駆けつけた。何十年かぶりで会う仲間も多い。日学同、全国学協、日本学生会議などで活動していた仲間たちだ。

日学同初代委員長の斎藤英俊氏とも久しぶりに会った。理論家だし、行動家だった。彼が民族派の学生運動を創ったといっても過言ではない。その時の事務局長が宮崎正弘氏だった。名コンビで、運動をつくり、左翼と闘っていた。

宮崎氏は今や著名な評論家で、著書は100冊以上ある。三浦氏自決の報を聞いて、真っ先に新潟に駆けつけた。その時の報告をする。

〈驚天動地の衝撃が走りました。12月10日午後9時半頃、新潟市の波止場で三浦家の菩提寺に近い三番波頭。寒風吹きすさぶなか、三浦重周代表は壮絶な割腹自決を遂げました。発見は翌日（11日）午前9時頃。直ちに兄上が立ち合わせて検死の結果、心臓部は肋骨に達し、咽喉部を切ったので喉に刃物がつきささった状態でした。〉

壮絶にして見事な割腹を遂げ、大西中将の最後を思い出させてくれます〉

三浦氏は故郷の新潟に帰り、菩提寺の三浦家代々の墓を訪れ、岸壁に正座し、皇居を遥拝するかたちでうつぶせになってたという。兄上は「立派な最後でした」と言われた。やはり三浦氏はサムライだ。兄上もサムライだと思った。

ただ、自決する時に出刃包丁というのは余り例がない。包丁というと「台所用品」のように思うし、自決には場違いだと思う。でも、骨法道場の堀辺正史先生に聞いたら、「いや、そんなことはない」と言う。日本刀や短刀の場合は、刃が薄いし、細い。だから自決には本当は相応しくない。昔、切腹をした時は、必ず介錯をする人がいた。だから、日本刀でも切腹できたんだ、と言う。それに比べて、出刃包丁は、刃が厚いし、刃の幅もある。一人で自決する場合は、その方が確実だ。

なるほど、と思った。野村秋介さんはピストルで自決した。これも、誰にも介錯を頼めないからだ。大東塾の影山正治塾長は確か、猟銃の自決だったと思う。

それに、驚いたのは、三浦氏の意志の強さだ。「週刊新潮」によゆるところ書かれている。

〈…皇居の方角を向いて正座し、右手に持った小振りの包丁を左胸に深々

と突き刺した。そのまま包丁を腹部まで強引に引き下ろし、一旦、そこで刃を抜き、血に濡れた包丁を再び首の左側に当てて、一気に頸動脈を掻き切ったのだ)

だから、発見された時は、首に刃物が突き刺さっていたという。「それにしても凄い意志の強さですね」と堀辺先生も言っていた。普通なら、心臓を刺した段階で絶命するという。それなのに…。壮絶な自決だった。

「開戦記念日に真珠湾に飛び立ったピカピカの一番機のもりだったのではないかと考えているんです」と語っていた仲間もいた。

(3) 「復活祭」も空しく。「反戦ストリッパー」沢口さんが亡くなる

さて、一人一人、書いていこうと思ったが、終わりに近くなった。民族運動の後輩は、吉田良二、見沢知廉、三浦重周氏が亡くなった。民族派運動の先輩では中村武彦先生、北上清五郎先生、清水一路先生だ。このお三方の先生には本当にお世話になった。一水会をつくった時からご指導をあおいできた。又、このHPで、詳しく書いてみたい。

玉川信明先生は、昔、「新雑誌X」で知り合い、いろいろと教えて頂いた。ジャナ専の先生でもあり、学校でもお世話になった。アナキストだった。今週の「主張」の初めに紹介したが、革マル派が出した本、『内ゲバに見る警備公安警察の犯罪』（あかね図書出版）の編集人になっていたのが玉川先生だった。本人は革マル派ではないが革マル派の代表的存在・黒田寛一氏とは学生時代からの友人で、その関係で編集人を引き受けたとっていた。僕の『公安警察の手口』（ちくま新書）の中にも玉川先生のことは出ている。この本を書く上でも随分とお世話になった。

日下雄一さんは「朝まで生テレビ」の初めっからのプロデューサーだった。野村さん、四宮氏、木村氏、見沢氏…そして僕など、何度か朝生に出たが、日下さんには本当にお世話になった。近いうちに「お別れ会」をやると言っていた。

今年になって亡くなられたのは日下さんと、そして沢口ともみさんだった。沢口さんは44才。これからの人だった。去年6月、「復活祭」を高田馬場でやった。病魔に勝って、又、東京に来ますと元気に言っていた。それなのに1月10日、亡くなってしまった。白血病だった。

沢口さんと一番初めに知り合ったのは一水会の関口和弘君だった。彼は、作家志望で、そのためには、いろんな世界を見なくてはと思い、ストリップ劇場に勤めた。今から9年前だ。そこで沢口さんと知り合った。沢口さんは

踊り子さん（ストリッパー）だった。広島県の高校を出て、自衛官になり、その後、ストリッパーになっていたのだ。異色の経歴の持ち主だ。

沢口さんは勉強家で、本好きだった。週刊「SPA!」も読んでいたし、「夕刻のコペルニクス」も読んでいた。それで関口君が紹介してくれた。それから、右翼、左翼など、いろんな人々と知り合う。ロフトプラスワンにも出るようになる。

そして決定的なのは、木村三浩氏らと共にイラクに三回も行ったことだ。又、リビアにも行っている。さらに塩見孝也さんらと共に北朝鮮にも行こうとした。「白船訪朝団」だ。彼女は華があり、やさしく、気配りもあり、誰にも好かれる。イラク行きでは事務局長をやり、訪朝団でも事務局長をやっていた。我が儘勝手な人々が多い中で、彼女の事務局長としての苦労は大変だったと思う。

いつも、全力で走っていた。全力で闘っていた。危篤になってからは東京からも10人以上が駆けつけて、励ました。でも、奇蹟は起きなかった。残念だ。告別式にも、東京から10人以上の人が参列し、火葬場まで行った。告別式では、彼女の好きだった「クイーン」の音楽が流れていた。

【だいありー】

(1) 1月16日(月) 7時、ネーキッドロフトで「沢口ともみさん追悼集会」。この日は、「塩見塾」の第1回目で塩見孝也さんと木村三浩氏が対談するはずだった。ところが、沢口さん急逝のため、急遽、「追悼集会」にした。沢口さんを知り、沢口さんの死を悼む人々が駆けつけ、会場は超満員。塩見、木村、平野…など、沢口さんの思い出を語り、会場に来た一人一人が沢口さんについて語る。なかには泣き崩れてしまい、喋れない人もいた。

(2) 1月17日(火) 今日からジャナ専の授業が始まる。「時事問題」は、「わしズム」に載った小林よしのりさんと堀辺正史先生の対談「あえて言う。日本の武士道とは“世界一の首狩り族”である」をテキストにして武士道の話をする。「時事問題」では、「フーテン、ヒッピーの時代」について話す。

午後7時から高田馬場のライブ塾（トリックスター）。若松孝二さん（映画監督）の「実録・連合赤軍を撮る」。今まで連赤を取り上げた映画が数本あるが、それではダメだ。オレが撮る。…と、その思いのたけをぶちまけてくれた。又、この映画を撮ったら次は山口二矢を撮るといふ。これで時代に対する自分なりの落とし前をつけるという。凄い。期待できる。

若松さんは実は仙台の出身。日本赤軍の若生氏もそう。私もそう。仙台は

笹かまぼこ、ズンダもち、牛タンだけではない。過激派の産地としても有名だ。仙台から17才で家出同然で上京し、いかにして映画監督になったかの話も面白かった。ピンク映画を撮りながら、〈政治〉を主張してきた。その闘いは見事という他ない。又、「日本赤軍の黒幕」と警察に睨まれ、何度かガサ入れをされた。そんな、闘いの日々についても語る。

僕は昔、重信房子のお父さん（末夫さん）に会って取材したことがある。お父さんは、戦前、血盟団事件に関係していた。今から32年前に会った。多分、新左翼でも会ってる人はいない。と思ったら、若松監督だけは何回も会っている。それで、お父さんの話になった。又、この日は、32年前に一緒に取材に行った久保内君も来ていたので、思い出を語ってもらった。彼は「やまと新聞」の記者で、僕はそこに書かせてもらったのだ。

重信末夫さんの他、5.15事件、2.26事件などの関係者にも会って「やまと新聞」に書いた。この頃の気持ちは若松監督にも通じているようだ。なんせ、山口二矢を撮りたいという位だから。何故、17才のテロリストに興味を持ったのかも語ってもらった。

(3) 1月18日(水)

午後7時、一水会フォーラム。高田馬場シチズンプラザにて。講師は福田逸先生（明治大学教授）で、「日本を保守するもの＝天皇制と国語＝」。福田先生は、福田恆存先生のご子息。恆存先生には、学生時代にお世話になった。全国学協結成大会（1969年5月）が九段会館で行われたが、その時の記念講演が福田恆存先生と会田雄二先生だった。その他にも福田先生には、講演や勉強会に来てもらった。親切だが、決して学生に妥協したりしない。学生を甘やかさない先生だった。『当用憲法論』などは当時の学生のバイブルだった。

一水会フォーラムでは、いわゆる女帝問題を中心にして話された。日本の伝統を守るためには、女性天皇、女系天皇ではダメだ。と、話された。終わって二次会。福田恆存先生の思い出などを先生と話した。

(4) 1月19日(木)、20日(金) カゼで倒れた。でも原稿のメ切があるので寝床で必死に書く。

(5) 1月21日(土) カゼなのに、さらに雪まだ降りやがる。でも、秋田の冬を思い出して嬉しくなった。そう思ったら、カゼも治った。

【お知らせ】

(1) 『Middle Weight Fighters Style Book』 (ベースボールマガジン社・1200円) が1月18日、発売された。

KID、五味、マッハ、魔娑斗、ルミナ…など中量級の格闘家10人を取り上げて、その人間像、生活、考え方に迫る。凄い本だ。売れている。

インタビュアーは、ターザン山本、李春成ら。僕は、須藤元気さんにインタビューして、10ページ。元気さんは、とても宗教的、哲学的な話をする。キング牧師、シャカ、キリスト、さらには坂本龍馬、石原莞爾…の話までする。とても勉強になった。ぜひ、読んでみて下さい。

他の選手のインタビューも面白い。編集はライトハウスの新井等さん。僕のインタビューも新井氏がテープ起こしをしてくれた。完璧な仕事で驚いた。実は彼はジャーナ専の卒業生で、僕も教えた。教え子が、立派になって、バリバリと仕事をしている。嬉しい。新井氏は、小比類巻、所英男選手へのインタビューもやっている。

(2) 『サイゾー』 (2月号・690円) が1月18日発売になった。「日本一カゲキな皇室・女帝論」と銘打って二大対談が載っている。一つは岡留安則氏と私。「左右激突!カゲキ皇室論。次期天皇は、陛下が決めるべし!」

もう一つは宮台真司vs宮崎哲弥。「M2式統治論or革命論。男系主義は維新への道!」。9ページの重厚な特集だ。

(3) 1月19日発売の『週刊実話』 (2月2日号) に沢口ともみさんの記事が出ておりました。巻頭グラビアで踊り子時代の写真、イラクでのデモの写真も出ています。とても詳しくていい記事です。見て下さい。

(4) 1月25日(水) ロフトプラスワン。高須基仁プロデュースで、沢口ともみ追悼ライブをやるそうです。

(5) 2月11日(土) 午後1時、ロフトプラスワン。重信房子さんを支援する集会。足立正生、重信メイ、パンタ、塩見孝也さんなどが出演。

(6) 2月14日(火) 7:00p.m. 高田馬場ライブ塾。漫画家の石坂啓さんが「日の丸・君が代」について語ります。

(7) 2月17日(金) 夕方、靖国問題をめぐる日韓討論映画「あんにょん・サヨナラ」上映記念トーク。李熙子 (イ・ヒジャ)さんと私。

(8) 2月23日(木) 10:00a.m.東京地裁。重信房子さんの判決。

(9) 2月28日(火) 6:00p.m. 文京シビックホール (小ホール) 。シンポジウム「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

今週の主張 1月30日

誰が〈不敬〉なのか。誰が〈詩〉を殺したのか

(1)私の青春とは「石坂文学」のことよ

最近、石坂洋次郎を読み返している。なかなかいいね。「もう終わった作家だ」「しょせん大衆作家だ」と軽蔑する人も多いが、なかなか捨てたもんじゃない。そんな批判をする人に限って、じゃ読んだのかというと一冊も読んどらん。読んでみて、「ここがいかん」「ここが甘い」というのなら分かるが、「そんなのは読まんでも分かる」「時代おくれた」とハナから決めつけている。いかんでしょうか。

「青い山脈」のことは先々週のHPで触れた。今回は「若い人」だ。この小説は「不敬罪」で告訴された。だから、どんな不敬な小説なのか読んでみたのだ。かなり昔に読んだ気がするし、多分、映画化もされている。しかし、別に不敬とは感じなかった。

それに今、気づいたが、石坂文学は、活字よりも先に、映画で知った。「青い山脈」だって、映画を何回も見て、小説を読んだのは、かなり後だ。又、高校の頃だと思うが、「あじさいの歌」「陽のあたる坂道」「あいつと私」「光る海」「寒い朝」「乳母車」などは次々と日活で映画化された。石原裕次郎、吉永小百合、浜田光夫、芦川いずみ、などが出ていた。青春映画だった。田舎の高校生だった私は、まぶしく見ていた。

「光る海」だったと思う。羽田に友人を見送りに行って帰る小百合が、モノレールに乗る。「ウヒャー、東京には凄いものがあるなー。空の上を電車が走ってるぞ！」と友達と声をあげて驚いたもんだ。一つ一つの映画が、驚きであり、若者はこう生きるべきだ、と教えられた。右翼青年になる前の〈原風景〉だわさ、私の。これが青春だと思った。

だからこそ、今、読み返してみても、懐かしいし、つい擁護したくなる。

さて、「若い人」だ。これは、山本健吉によれば、「青春小説」であると同時に「教養小説」だ。

昭和8年5月～12年12月にかけて、5ヶ年にわたって「三田文学」に連載された。長い長い小説だ。中央公論社の「日本の文学」の58巻が「石坂洋次郎」で、そこに「若い人」と「石中先生行状記」が収められていた。「若い人」は5ページから458ページまでである。読むのも大変だ。

実は「石中先生行状記」の方だって、同じ位長い。何せ35篇もある。この本では、3篇だけを入れていた。「黒いワンピースの娘の巻」「夫婦貯金の巻」「千草ぐるまの巻」だ。面白い。昔、読んだ記憶がある。映画にもなったと思う。楽しい小説だし、ちょっと色っぽい。昭和23年から29年まで断続的に「小説新潮」に発表された。戦後になったのだから、思い切り、自由に書かれている。そうか。「若い人」は、堅苦しいし、読みにくいと思ったが、制約の多い戦前に書かれたからなんだ。自由気儘に書くことは出来なかったのだ。かわいそうに。

「石中先生行状記」は、戦後だから、何ら気を使うことなく、自由気儘に書いたといったが、35篇の中の1篇、「根ッ子町の巻」が猥褻罪容疑で警視庁から忠告を受けている。それで、いっそう世評を高めたそうな。

他にも面白そうな巻がある。「人民裁判の巻」「エロ・ショウの巻」「津軽風流譚」…と。特に、「人民裁判」なんて、気になりますね。連合赤軍事件のことかな。いやいや、昭和23年に書いたんだ。敗戦後の共産党のことかもしれない。図書館で探してみても読んでみませう。そして又、報告しませう。

では、「若い人」だ。読んでいて思った。もしかしたら、この辺が、「不敬罪」の容疑になったのかと。生徒が先生に質問するんだわさ。

「神と天皇とは、どちらが豪（えら）い方なのですか。はっきり教えて下さい」

うん。。はっきり教えてやればよかとよ。「はい、勿論、神さまの方がえらいです」。

私が教師ならそう言ってやるよ。だって、「古事記」をみても、神さまがこの国をつくり、その子孫が天皇なんだ。だったら、神さまがえらいに決まっとる。

ヨーロッパだって、そうだ。神がこの世界をつくったのだ。だから神は、この全世界を支配する。王は、この地上の、小さな国を支配してるだけだ。それも表面上だ。

王権神授説だって、国の権力は神から授かったから貴いという。やはり、神の方が、えらいのだ。

「若い人」の中では、生徒はさらにこんなことを先生に聞く。

「先生。天皇陛下は黄金（きん）のお箸（はし）でお食事をなさるってほんとですか？」

つまらないことを聞くガキだ。「そうそう」と適当に答えてやればいい。でも金の箸は使いにくいでしょうね。竹か木の方が使いやすい。時々には、かんだりも出来るし。金じゃ、歯の方がいかれてしまう。それに重い。箸の上げ下げだけで重労働になるわさ。「だから、使っちゃらんでしよう」と生徒に教えてやったらよかばい。

(2)自慢じゃないが、石坂よりも私の方がずっと不敬だよ

ところで、この中央公論社「日本の文学」（58巻）の「石坂洋次郎」の「注釈」を見たら、出とった。やっぱり、「神と天皇とはどちらがお豪（えら）い」に注をつけて、こう出とった。

〈天皇制絶対主義下の当時においては、天皇は現人神（あらひとがみ）として、すべてに超越する存在であると、一般に教えられていた。明治13年、「若い人」はこの個所のために不敬罪で、さらには海軍士官の短剣の使い方の一件などにより軍人誣告（ぶこく）罪で右翼から告訴されたことがある〉

「やっぱり」と思った。同時に、「この程度のことだ」と思った。生徒なんだから、分からんことは質問するだろうよ。それをもって「不敬」とはおかしいよ。文句をつける右翼も悪い。これで皆、萎縮してしまい、天皇について（良くも悪くも）触れることを怖がるだけじゃないか。この程度で「不敬」なんてかわいそうだ。自慢じゃないが私の書いてるものの方がずっと不敬だ。歴代の天皇の名前も知らんし、敬語の使い方も分からん。

しかし、もうひとつの「海軍士官の短剣の使い方」って何だろう。そんな箇所があったかな。

と思ったら、別の本で発見した。図書館で又一冊、石坂洋次郎を借りてきた。「新潮日本文学」第27巻の「石坂洋次郎」だ。ここには、「青い山脈」「陽のあたる坂道」「婦人靴」「乳母車」「ある詩集」が収められていた。メインは「陽のあたる坂道」で、166ページから494ページだ。長い小説だ。でも、これは面白かった。

お金持ちで何不自由のない家庭がある。子供は3人だ。秀才の雄吉、ちょっとワルの弟・信次。かわいい妹・くみ子。この、くみ子の家庭教師に来るのが、たか子だ。話は、たか子を中心に進む。雄吉と信次は顔が似てない。信次は、どうも妾腹の子らしい。

たか子のアパートの隣の部屋に、トミ子、民夫という母子がいる。その民夫と信次がどうも顔が似ている。そしたら、やっぱり二人は兄弟だったんや。トミ子が、信次の本当の母だった。

そして、秀才・雄吉の化けの皮も剥がれてゆく。子供の頃、くみ子を怪我させたのは信次だとばかり思っていたら、本当の犯人は雄吉だった。事故の時、あわてる二人に、「信次、お前だぞ!」「お前がくみ子を怪我させたんだ!」と言いたてて、一方的に罪をなすりつけたのだ。

ウーン、こんなシーン、どっかで見たことがある。と思っていたら、私の逮捕場面だった。15年前かな。ガサ入れの時、令状を見ていたら、「もういいだろう!」と公安は令状をひったくった。僕はしっかり持って読んでたから、ビリッと破れた。公安は「シマッタ!」という顔をした。でも、自分が破ったと分かれば始末書を書かなくてははいけない。それで、とっさに、「あっ!お前が破ったんだ!」「お前だ!」と僕に罪をなすりつけて、手錠をかけた。

アホらしい話だが、そんな下らないことで、罪をなすりつけられ逮捕、1ヶ月も私は勾留されていた。そして、やっと、「証拠不十分」で釈放された。「不十分」というよりは公安が「犯人」なんだよ。しかし、そいつは逮捕もされない。訓戒もされない。それどころか、後に「公安三課長」にまで出世した。「デッチ上げ逮捕」が「手柄」なのだ。ひどい奴らだと思った。私にとっては「陽のあたらない坂道」だったわいな。

本の話に戻る。弟に罪をなすりつけた雄吉だ。たか子も、はじめは秀才だし、いい男だしと、雄吉と付き合う。だけど、卑劣な男だと分かり、付き合いをやめ、ちょっとワルの信次と付き合うようになり、ハッピーエンドだ。

この本は巻末に小松伸六が「解説」を書いている。そこに何と「若い人」のことも出ていた。紹介しよう。

〈女学生・江波恵子たちは修学旅行で上京。皇居前で「天皇陛下は黄金の箸でお食事をなさるってほんとですか?」「天皇陛下と皇后陛下は御一緒にお食事をなさいますか」という会話や、海軍の軍人たちが腰にさげた短剣で果物の皮をむいたり、鉛筆を削ったりするところが、皇室にたいする不敬罪

であり、軍人誣告罪になるというのである)

なんだ、こんなことかよ、と思った。剣で果物をむいたっていいじゃないか。その辺を歩く犬や猫を殺して食べたわけじゃなし。果物や鉛筆けずり程度のことは、むしろほほえましいよ。と私なんかは思うけどね。こんなことに目くじらを立てる連中こそが不敬なんだよ。バカタレ。

(3) 「左翼は散文。右翼はポエム」とある詩人が言った

話が変わって、詩だ。ポエムだ。「左翼は散文である。右翼はポエム(詩)である」と言った人がいた。けだし名言だ。でも、誰が言ったのだろうか。大昔から言われてきた言葉だろう。いや、元楯の会の阿部勉氏か。あるいは寺山修司か。はたまた、私か。分からん。

ともかく、左翼は難しいことを理屈っぽく言う。しかし、心がない。涙がない。反対に右翼には詩があり、心があり、涙がある。でも頭が弱いから論理がない。そういう意味らしい。右翼にとっては美しくも、自虐的な言葉だ。その悲壮美、頹廃美に酔いながら、私は自虐的に中央公論社の「日本の詩歌」(全31巻)を読み進めておりゃんす。右翼はポエムじゃから、もう27巻まで読んだ。もう4巻で全巻読破だ。

その27巻だが、『現代詩集』の巻で、多くの現代詩人が出ている。その中に、木山捷平の「おしのを呑んだ神戸」という詩が載っていた。奇妙な詩だ。

にくい汽車！

おしなの乳房までものせて
上り列車は汽笛をふいた。
神戸へ！
神戸のマッチ工場へ！
さびしいか？おしなの
さびしいのに何故行くんだ？
神戸へ！
神戸のマッチ工場へ！

恋人なんだろうか。おしなのさんは神戸に働きに行っちゃった。「僕の恋人、東京へ行っちゃっ…」という歌もあった。昔、守屋浩が歌った。あれに似た心境なんだろう。でも、「おしなの乳房までのせて」って何だろう。せ

めて、乳房だけは置いてっくれということか。それとも乳房が全ての女だったのか。哲学的すぎて分からん。おいらの疑問も神戸まで運ばれて行くんやろうか。

『日本の詩歌』（26巻）。やはり「現代詩集」だ。

岡本潤

冷静なる発狂

おれは一日に数十回

冷静に発狂する

森山啓

生活はいつも種子を播いて過ぎた

おれたちの胸にも 果樹園はあるのだ

それは地平へひろびろとのびてゐる

だから小鳥らは来るな

まるい果実（み）を啄（つつ）かうたって無駄だから

『日本の詩歌』（第25巻）北川冬彦、安西冬衛、竹中郁などが載っている。

竹中郁の感性がいいね。

島

この島 何貫あるんだろう

てのひらに のせて 量りたいほどだ

瀬戸内海の名もない島

それで一向 浪にもってゆかれもしない

晩夏

果物舗（や）の娘が

桃色の息をはきかけては

せっせと鏡をみがいてゐる

澄んだ鏡の中からは

秋がしずかに生れてくる

安西冬衛の余りにも有名な詩

てふてふが一匹 韃靼（だったん）海峡を渡って行った

北川冬彦の「瞰下景」

ビルディングのてっぺんから見下ろすと
電車・自動車・人間がうごめいてゐる
眼玉が地べたにひっつきさうだ

この詩を読んで思い出した。晴山陽一の『すごい言葉』（文春文庫）に出
ていたんだ。

「おい、飛行機に乗ると人間がアリに見えるってホントだね」
「あれはアリだよ。僕たちの飛行機はまだ滑走路の上だよ」

えー、再び、「日本の詩歌」（25巻）に戻りますけん。やはり北川冬彦
だ。

街裏

両側の家がもくもく動きよって
街をおし潰（つぶ）してしまった
白っちゃけた屋根の上で
太陽がげらげら笑ひこけてゐる

まるで現代の話のやうですね。こんなことはよくありますよね。耐震強度
を偽装したビルだったんでしょう。あるいは神戸の大地震だったんでしょう
か。太陽だけがげらげら笑ひこけてました。失礼な太陽やね。人の不幸を
笑っとる。まさに現代日本を象徴する詩じゃないか。やはり詩は右翼だ。予
言者だ。

戦争

義眼の中にダイヤモンドを入れて貰ったとて、何になるろう。
苔の生えた肋骨に勲章を懸（か）けたとて、それが何になるろう。
では最後はやはり北川冬彦のメタフィジカル・ポエム（形而上詩）だ。

屋の月

まあ、綺麗だね。欲しいわね。あたし、あれを髪に掛けて毎日、眺めてた
いの。

--何を？

--あれよ。

彼女の魚のやうな指をたどると、昼の月がくすんで街をうっすら飾ってゐる

--ねえ、とって頂戴よ

--ええ、あんたの満月をくれるんなら。

私は、彼女のふっくらした、お尻をつついた。

--お莫迦（ばか）さんね、いやよ。

なんじゃいな、この詩は。お前の満月をくれるんなら、空の月をとってやる。でも、満月をもらったって、すぐに臨月になっちゃうよ。

そういえば、月をとろうとホウキを振り回していた子供がいたそうな。父親が叱って言ったそうな。

「馬鹿、そんなもんで届くか！屋根に上れ！」。

ここからは又、晴山陽一の『すごい言葉』に戻るけん。

医師「奥さん、自分が猫だと思ふようになったのはいつごろですか」

患者「子猫の時です」

医師「大丈夫、80までは生きられますよ」

患者「明日が80の誕生日なんですけど」

「ハバナの博物館にはクリストファー・コロンプスの頭蓋骨が二つある。ひとつは少年時代ので、もうひとつは大人になってからのだ」（マーク・トウェイン）

「恋とは、二人で一緒にバカになることである」（ポール・ヴァレリー）

そうだ、そうだ。みんな、バカになればいいんだ！と、ヤケになってオワリ。

【だいありー】

(1) 1月23日(月) 東中野図書館

(2) 1月24日(火) ジャナ専。「時事問題」では須藤元気さんにインタビューした記事（「中量級スタイルブック」）を使う。ジャナ専出身のライターにお世話になった。「格闘技通信」「ゴング格闘技」などにもジャナ専出身者が多い。スポーツライターは狙い目だろう。「現代史」では70年の大阪万博

の話をする。夜は友人と北朝鮮問題について話し合う。

(3) 1月25日(水) 作家の星川淳さんが、グリンピース・ジャパン事務局長に就任した。2時から就任記者会見。3時から就任発表パーティ。新宿厚生年金会館で。

夜7時からロフトプラスワン。高須基仁さんのイベント。本人の出版記念。沢口ともみさんの追悼。そして鹿砦社・松岡利康さんの保釈祝い…と、盛り沢山。松岡さんは昨年7月12日、名誉棄損で、いきなり逮捕され6ヶ月余りも勾留。1月20日、やっと保釈された。全く酷い話した。ご苦労さまでした。そして、会社はつぶれてしまった。「だから、これからは自宅に連絡して下さい」と言われた。大変だ。佐藤優の『国家の罟』のような本を書いて逆襲してほしい。

(4) 1月26日(木) 河合塾コスモが始まる。「現代文要約」と「基礎総合」ゼミ。夜7時から鹿砦社・松岡さんの慰労会。新宿で。学校があったので私は遅れて参加する。

(5) 1月27日(金) 2月17日にやる「あんにょん・サヨナラ」のtalkライブの打ち合わせ。2時に、外苑前で。「鈴木さんは出かける時は猫に“あんにょん・サヨナラ”と言って出かけるんですね」と、スタッフの人に言われました。そうなんですよ。HPを読んでもらうんですね。嬉しかったです。

(6) 1月28日(土)、29日(日) 必死で原稿を書く。あの大雪の日からもう2週間も経ったのに、家の周りはまだ雪がある。陽が当たらないし、高台だからか。「雪のみやま山荘」だ。一步步くごとに、ズボツ、ズボツとくるぶしまで雪に埋まる。それも又、楽しい。

【お知らせ】

(1) 1月21日付の「東京新聞」の「こちら特報部」に沢口さんのことが大々的に出てました。「あるストリッパーの死」「反戦、捨て身でアピール」「被爆二世、自衛官。平和ないと愛営めない」「自由求め奔放に挑戦」「風俗嬢支援へ労働組合結成」「左右の大物たちとの交流」…と見出しに出ています。木村三浩氏（一水会代表）のコメントも出てました。

〈沢口さんと一緒にイラクを訪問した木村氏は、「本当に優しくて「誠」のある女性だった。イラク人からも「サーディーヤ」（美しい花）とアラビアネームで呼ばれ、愛された。彼女は昨年、自分のことを『無職だ』と言っ

ていたけど、僕は彼女は『夢職』だったと思う」と悼む)

イラクの人には「サワグチ」は言いにくい。それで「サーディーヤ」になった。いいですね。僕の名前も言いにくいようだ。「クニヨーラ?」「クニョーン?」とか言われ、最後は「クニョニョン」に落ちついた。「毒のある花」の意味だ。違うかな。

(2) 2月11日(土) 午後1時、ロフトプラスワン。重信房子さんを支援する集会。足立正生、重信メイ、パンタ、塩見孝也さんなどが出演。

(3) 2月14日(火) 7:00p.m. 高田馬場ライブ塾。漫画家の石坂啓さんが「日の丸・君が代」について語ります。

(4) 2月17日(金) 7:00p.m. 文京区民センター会議室2A (地下鉄・春日町、後樂園駅徒歩2分)。「あんにょん・サヨナラ」劇場公開記念イベント。李熙子(イ・ヒジャ)さんと鈴木邦男のトーク。「靖国を語る」。

「あんにょん・サヨナラ」の主人公であり、靖国に祀られている父の名前の取り下げを求めているイ・ヒジャさんと鈴木が靖国問題について語ります。

なお、映画「あんにょん・サヨナラ」は7月1日から2週間、東中野のポレポレ座で上映されます。

(5) 2月22日(水) 7:00p.m. 高田馬場シチズンプラザ。一水会フォーラム。古賀俊昭氏(東京都議会議員)の「皇室典範改悪阻止」。

(6) 2月23日(木) 10:00a.m. 東京地裁。重信房子さんの判決。

(7) 2月28日(火) 6:30p.m. 文京シビックホール(小ホール)。シンポジウム「おかしいぞ!警察・検察・裁判所」

(8) 2月6日(月)「論座」(3月号)発売です。2月7日(火)、「創」(3月号)発売です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン/丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)
[2006年](#)

今週の主張 2月6日 愛国者はそんなに偉いのか

(1) 「本物の右翼」の先生に出会い、幻惑されて、この世界に入った

今日、2月6日(月)発売の「論座」(3月号・朝日新聞社)に20枚の原稿を書きました。タイトルが凄いです。

「愛国者はそんなに偉いのか」

=僕が本物の右翼から学んだこと=

「検証・保守論壇」の特集があり、その中で書いてます。8ページです。右翼界の大思想家・葦津珍彦(あしず・うずひこ)先生のことを書きました。さらに、僕が初めて会った右翼の先生・白井為雄先生などのことも書きました。『論座』の巻頭は『正論』と『論座』の編集長が激突討論しています。凄いです。二人とも勇気があります。又、奥武則さんが「戦後保守系・右翼系雑誌の系譜と現在」を書いてます。読んで下さい。さて、僕の原稿のことです。

大学生の時は全共闘と闘っていましたが、まだ〈右翼〉ではなかったんですね。ストライキ反対の「一般学生」であり、「良識派学生」だったんです。それが、全共闘との闘いの中で、鍛えられ、勉強し、右翼・民族派学生になるんです。左翼と論争する為に右派論客の本を貪り読みました。葦津珍彦、福田恆存、村松剛、会田雄次、林房雄、三島由紀夫、田中卓、林健太郎…と。錚々たる人々がおりました。そして学問・思想だけでなく、その先生方は〈志操〉があり、〈信念〉がありました。だって考えてもみて下さい。当時は左翼全盛で、愛国心、憲法改正なんてタブーです。誰も言えません。大学教授、評論家の人々も、そんなことを言ったら「反動!」「右

翼！」と言われ、学生に突き上げられます。下手したら大学から追われるでしょう。

そんな時に、こうした先生方は、生命をかけて闘ったのです。勇気のある人々です。今の「にわか右翼」の教授や評論家たちとは違います。全く違います。だから、僕らは幸せだったと思います。「思想の覚悟」というか、「言論の覚悟」を持った先生方を沢山見、会ってきたからです。だから今の保守派・右派の教授・評論家の本はもう読まなくていいや。と思ってしまうのです（偏見かもしれませんが）。時代が変わり、左翼も滅び、愛国も改憲も自由に言えるようになった。だから「安全圏」にいて過激なことを言うだけじゃないか。と、つい思ってしまうんです。中には元左翼だった人もいます。田原総一郎さんに言わせれば「今の保守論客の半分以上は左翼からの転向組だ」と言います。この人たちも、ただ「多数派」にいたいだけじゃないのか。と思っちゃいます。

今の「愛国者」は多数派です。「愛国心を持つのは当然だ」と言い、中学・高校では日の丸・君が代を強制してます。あの戦争は全て正しい。少しでも疑問を持つ奴は非国民だ。といった調子です。「北朝鮮なんか攻めちゃえ！中国・韓国になめられるな！」と。まるで、暴走族のアンちゃんのような意気り方です。皇室論議でも、「女系天皇になったら、もう天皇制ではない」「女性・女系天皇を言う奴は売国奴だ！」といった調子で、テンションが上っています。どうも冷静な議論が出来ないようです。そんなに愛国者は偉いのか、と思います。

話を戻します。「一般学生」から「右翼・民族派学生」に進化した僕たちでしたが、まだ本物の右翼ではありませんでした。だって学生ですから、いつだって、元に戻れるんです。引き返せるんです。卒業したら、企業に勤め、「普通のサラリーマン」になれます。企業だって歓迎します。当時は左翼だって歓迎されたんです。

「ほう、機動隊に石を投げてパクられたことがある。うん、元気でいいね。学生はその位でなくっちゃ。じゃ、今度はそのエネルギーをうちの会社の為に使ってよ！」

と言われて、入ったんです。今とは違います。今ならそんな太っ腹な経営者はいません。

「過激派？ 冗談じゃない」

とすぐ断わります。まア、当時は、何万人もの学生がデモをし、ストライ

キに参加したんです。一般の普通の学生だって参加しました。デモや集会に一度も行かず、マージャンばかりしてたり、女の尻を追っかけ回したりした人間の方が軽蔑されたんです。企業だって、そんな奴らは採りたくないでしょう。当時の政治状況に関心がなく、「私」のことだけを考えて、遊んでいた奴の方がよっぽど異常です。そして、そんな奴らに限って、今頃、「俺は昔から左翼に反対して運動してた」なんて言っとるんです。嘘つけ！

エート、話があっちゃこっちゃ飛びますね。学生時代は、「右翼学生」といっても、アマチュアであり、いつでも引き返せたんですよ。企業に勤める。大学院に行く。国会議員の秘書になる。実家に帰り家事をつぐ。金持ちの女と結婚し、勉強する…と。

金持ちの女じゃなかったけど、結婚し、女を働かせてヒモになった男も何人かいましたね。女は勤めに出て、男は一日中、家にいて勉強している。

「女はカネを持ってくるが、俺は女に夢を与えている」と豪語してました。このまま終わったら、ミジメですが、後に彼は大学の先生になりました。苦労して夫を支えてきた女は今や教授夫人です。よかったですね。

左翼学生だって企業は雇ったんですから右翼学生はなおさら歓迎、ウェルカムでした。

「えっ、全共闘と闘ったんですか。偉いですね。少数であんな連中に闘いを挑むなんて。リンチもされたんですか。大変でしたね。その不屈の闘志を今度はうちの会社の為に使って下さいよ」

と言われたんです。

それに、1970年が近くなると、警察の大弾圧で左翼は皆、いなくなる。

「じゃ、俺たちの役目は終わった」と、右派学生も皆、運動をやめちゃう。ほんの一握りの人達だけが残ったんです。

じゃ、どうする。学生を長くやって、「学生運動」を続ける人もいる。青年組織をつくる人もいる。本物の右翼の仲間入りする人もいる。私は、最後のケースですね。

(2)白井先生にボーヴォワールを読めと言われた

『論座』にも書きましたが、「右翼の先生」といわれた人に初めて会ったのが白井為雄先生でした。他にも素晴らしい先生がいて、幻惑されたんです。「右翼って、こんなに立派で生命をかけた先生ばかりいるのか！」と感動したんです。それで右翼に入ったんです。ところが、中の世界を覗くと、立派な人もいるが、そうでない人が余りに多くて、愕然としました。

でも、自分の意志で入ったんですし、文句は言えません。それよりも、多くの素晴らしい先生方がいて、その存在に幻惑されたのです。そのことの方が重要ですね。白井先生の他、中村武彦、影山正治、毛呂清輝、片岡駿…といった大思想家が右翼運動をリードしていたのです。

一番初めに会ったのは白井先生です。僕は当時、乃木坂にある「生長の家学生道場」におりました。乃木神社の隣りです。よくこの神社に行っては玉砂利の上に正座をしてお祈りをしました。日本のことを守って下さいと祈りました。

乃木坂は、今でこそ、都心の一等地といわれますが、僕が学生だった頃は、乃木坂も、六本木も青山一丁目も地下鉄が通ってなく、交通機関はバスかトロリー電車でした。いわば陸の孤島でした。こんな不便なところ、やだな、と言ってました。

すぐ近くに防衛庁があり、出入り自由でした。そこの食堂が安かったので、昼間はよく食べに行っていました。ドテラを着て、ゲタをはいて、行っていました。服や靴もそこの生協で買っていました。のんびりしたもんでした。でも社学同が丸太をもって防衛庁に突っ込もうとした事件があり、それ以来、自由に出入りできなくなったのです。

その防衛庁の向かい側に道があり、右側には竜土軒というレストランがありました。（今はもうないでしょうな）。2.26事件の青年将校が、ここに集まっては酒を飲み、謀議したという場所です。その竜土軒の向かい側に白井為雄先生の家がありました。

白井先生は、大日本生産党の書記長をやり、この時は、日本青年講座の事務局長でした。「この人が右翼の先生か」と驚きました。学生道場に国土館の学生がいて、「凄い先生が近くにいるんです。会ってみませんか」と連れていってくれたのだ。初めは大学教授かと思ったが、右翼の先生だという。でも、部屋にはマルクスやレーニンや左翼の本が一杯ある。勿論、右翼の本もある。どうみても大学教授の研究室という感じだった。穏和な先生で、日本の危機について諄々と説く。さらにレーニンや毛沢東の話をする。

こっちは大学生だから、あまり分かん。でも、先生の思想、覚悟は感じた。「大学の先生とは違う」と思った。大学ではだらしのない先生ばかり見てきたし、学生に突き上げられてオドオドし、何も言えない先生ばかり見てきたからだ。

白井先生は、それからサルトルとボーヴォワールの話をした。サルトルは有名な哲学者で、分かんながらも二、三冊は読んでた。大学生のたしなみ

として。ところがポーヴォワールなんて読んどらん。『第二の性』という有名な本があるとは知ってた。女は女として生まれてくるのではない。女になるんだ。と言ってた。社会制度や抑圧や男の偏見や、いろんなもので、「女になる」んだそう。

ついでだから、三島由紀夫には『第一の性』という本がある。ポーヴォワールを意識して書いたものだ。これはいわば、男の生き様を書いた本だ。男は生まれながらにして男だ。といったことを書いていた。この本は読んでなかったが、格闘家の前田日明さんが「鈴木さん、これはいい本ですよ」と言って、すすめてくれたのだ。前田さんは神田の古本屋で見つけたと言って、箱入りの初版本を持っていた。僕は何年かして、「決定版・三島由紀夫全集」で読んだ。

でも白井先生は、この時、ポーヴォワールの有名な『第二の性』ではなく、『老い』という本を紹介してくれた。「これはいい本だ。思想的にも深い」と言う。いろんな本を紹介してくれたが、これだけは読む気がしなかった。「老いなんて、一生、自分には関係ありませんよ」と心の中で呟いた。

それから40年たって、少しは読んでみようかという気になった。ところが、本屋で聞いたら絶版。古本屋でもない。元「創」の荒井さんに相談したら、ネットの古本屋で探し、買ってくれた。『第二の性』5巻と『老い』を。申し訳ありませんでした。高かったろうに。すみません。今、読んでます。謝謝。

(3) 「YP体制打倒」のスローガンをつくった田中卓先生の女帝論

そんなわけで、『論座』を読んでみて下さいな。これで終わりにしようとしたら、産経新聞（2月10日付）に『諸君』（3月号）の広告が出ていた。田中卓先生（皇学館大学名誉教授）が書いている。

「寛仁親王殿下へ 歴史学の泰斗からの諫言。」

女系天皇で問題ありません」

驚いた。「諫言（かんげん）」か。田中先生にしか出来ないことだ。「揺れる皇室」という特集で、他に、篠沢秀夫氏が「女帝容認かつ男系維持の秘策あり」を書いている。

田中卓先生は学生時代から、お世話になった。講演や合宿でお話を聞いたり、本を読んだ。「YP体制」という言葉を作った人でもある。戦後の体制のことだ。「Y（ヤルタ）、P（ポツダム）体制」の意味だ。それ以来、「YP

体制打倒」というのが右翼、新右翼のスローガンになった。

田中先生は「女帝容認論」で、実は、この『諸君』の前にも、小冊子を出している。僕は展転社の藤本社長からもらって読んだ。実に素晴らしい。やはり、田中先生は違うと思った。キャリアが違うし、長年、歴史学をやってきた先生だ。深さが違う。見識が違うと思った。女帝、是か非か。考えはいろいろあるだろうが、それを超えて、田中先生の国を思う誠が伝わってくる。

田中卓『女帝・女系反対論に対する批判と私見』という本だ。サブタイトルには、

「原則、『有識者会議』報告に賛同し、政府案に要望す」だ。

出版は財団法人・国民会館だ。

田中先生はズバリとこう言う。

〈現在、最も大切なことは、先ず愛子さまに皇太子・女帝となつていただくことである。その場合、皇婿の候補として、傍系の旧皇族もその範囲に含めることは何ら差し支えなく、その可能性もあり得ると思うが---その場合は当然、「女系」となる。---現在の皇太子殿下が天皇になられた次の皇位に愛子さまを差しおいて直ちに、「傍系天皇」（男子）を迎えると言うことには無理があり、国民大方の同意を得られないと思う〉

又、DNAのy染色体が男性にだけ受け継がれるとって男系男子を天皇という人がいるが、それは最近の生物学の発見で、古来の日本の歴史や伝統とは全く関係がない、と言う。外国人はDNAで日本の皇室に感動しているというのも違うという。

〈従来から、外国人が皇室に対して敬意を表するのも、また日本人が皇室を誇りにするのも、神武天皇の建国以来、皇族の籍を有せられる一系の天子が、千数百年にわたって、一貫した統治者であり、他系（皇族以外の諸氏）の権力者が帝位を篡奪した例がないという。世界にも類をみない歴史の事実にあるのであって、皇位が“男系”とか“女系”という血統のせいではない〉

又、次のことは、田中先生だから言えることだと思った。

〈女帝反対論社の一部には、男子を生めない皇妃は退下して貰い---つまり離婚---代わりの方を選べばよいと放言する物もいるらしいが、事実とすれば、それこそ不遜極まる暴言であろう。また若し万一にも、そのような事態

が起これば、聡明で責任感のお強い皇太子殿下はどうされるか。申すまでもない)

その通りだと思う。又、先生は、「皇族の御意見をというなら、第一に天皇陛下の御叡慮こそ」と言っている。その通りだと思う。僕も前に「朝日新聞」に同じようなことを書いた。「有識者会議」の報告もいいたろう。国民の議論もいいたろう。そして、最後には天皇陛下に決めていただければいいと。

ある会合で、そんな質問が出たらしい。「女帝反対」の学者はこう言った。田中先生は書いている。

〈天皇陛下の御意向を承る必要があるのではありませんか」と質問がでたところ、「それは必要ない。そのようなことをして、若し天皇陛下が将来は女帝でも差し支えない、と申されたらどうするのか!」と切りかえした。という話を私は仄聞している。若しそれが事実なら、その講師は、日本国体の極致にして至純の伝統、「承詔必謹」【詔（みことのり）を承（うけたまわ）りては必ず謹（つつし）む】の精神を何と考えられているのであるか)

他にも「女帝容認派」が最近、増えている。西部邁氏は「産経新聞」（1月27日付）の「正論」で、「血統より家系を優先すべき天皇制」と書いている。又、「男系か女系かは第二義的な問題」とも。

天皇が政治的力を持ち、政治的能力、判断を必要とされる時代なら、女帝・女系は危険な制度かもしれない。

〈しかし、現在、天皇は文化的な元首であり、政治的元首は総理大臣である、という輿論（よろん）が定着しつつあるようにみえる。それでよいというなら、（慣習ではなく）伝統を保守するとの見地に立って、女帝・女系の可能性を天皇制において容認すべきだ)

これこそまさに正論だと思う。

もう一つ紹介しよう。『SAPIO』（2月8日号）は特集が何と、〈このままでは「天皇制」が壊される〉。やけにセンセーショナルな特集だ。でも、この中で、宮崎哲弥氏の文は、なかなかよかったと感動した。

〈皇室典範改正は「男系or女系」ではなく、「男系or直系」の正統性をめぐる闘いだ)

なるほど、その通りだと思った。何か、〈男系〉というと由緒正しくて、うん、これで行こうと思わせる言葉だ。

一方、女帝・女系という、何か、やましさを感ぜさせる。でも違うんだね。「女帝・女系」じゃなく、「直系」といえばいいんだ。その通りなんだから。

又、宮崎氏は、三島由紀夫が改憲案の中で、女帝・女系を認めたことにも触れて、「この事実は、極めて興味深い」と言っている。旧宮家を復活し、養子を迎えて「男系天皇」を守るべしとの主張に対して、こう反対している。

〈しかし、現天皇家とは縁遠い傍系の養子に対し、どれほどの尊崇の念が集まるものか、疑問なしとしない。まして直系の女性の嫡出子（内親王）を差し置いて、その傍系の養子が皇位を継ぐとなれば、正統性への疑念が生じるのは必定だろう〉

さらに彼は、こんな革命的な提案をする。

〈さらに私案を付加すれば、皇室典範に新たに限定的な譲位各項等を設け、女性天皇が旧宮家の子孫から配偶者を得、その後に皇位を夫に譲ることができるようにすべきであろう。これで直系でありかつ男系の血統を保つ可能性が開ける〉

うーん。これも一つの方法でしょうね。「だったら最初から、旧宮家の養子をとって天皇にし、愛子さまは皇后にしたらいい。という人もいます。それはちょっとね、と思いますね。

他に、所功さん（京都産業大学教授）は、男系男子の継続に努めながら、万一に備え、女帝、女系の継承も可能にした方がいいと言っております。高森明勅氏（拓大客員教授）も、女帝・女系天皇を認める発言をしております。

3月14日(火)、一水会フォーラムで、高森氏をお呼びし、天皇論を語って頂きます。ご期待下さい。

佐藤由樹さんと私が書いた『天皇家の掟＝皇室典範を読む＝』（祥伝社新書）もぜひ読んでみて下さい。

ともかく、昔と違い、「天皇制擁護か打倒か」の激論があるわけじゃない。皇室にはずっと続いてもらいたいという同じ気持ちがあるんだ。だったら、もっと冷静に話し合えると思うのだが。

【だいありー】

(1) 1月30日(月) 12月末に書き上げる予定の原稿が出来ないで、七転八倒。一ヶ月おくれで204枚をやっと書き上げた。でも、「こんな未熟なものではダメだ」と突き返されるんじゃないか。不安だ。夜中、コンビニでコピーをする。ただひたすら、204枚をコピーする。旧式で、出てくるのが遅く、2時間近くかかった。

(2) 1月31日(火) ジャナ専。「時事問題」では皇室問題について。「現代史」では、三島事件について話す。

(3) 2月1日(水) 夜、久しぶりに柔道。

(4) 2月2日(木) コスモ。「基礎総合」のゼミでは、藤原正彦の『国家の品格』（ちくま書房）を皆で読む。いくら国家に品格があっても、国民が下品で、アホだったら仕方ない。「国民の品格」こそ重要じゃないか。うん。このタイトルで本を書こうかな。でも私じゃ売れないだろうな。やめた。

(5) 2月3日(金) 7時から日本出版クラブ。栗本慎一郎氏の出版パーティ。『パンツを脱いだサル』（現代新書）と『シリウスの都 飛鳥』（たちばな出版）の二冊を出したのだ。病で倒れたのに奇跡のカムバック。凄いです。久しぶりに元気な栗本さんを見て嬉しかった。後半は、「栗本さんと語る」といシンポジウム。平野さん、二木さん、西垣内さん、それに私が出て話す。

【お知らせ】

(1) 2月3日発売の「週刊朝日」（2月10日号）に沢口ともみさんのことが出てました。「夭逝した元自衛官ストリッパーはなぜ反戦活動にこだわったのか?」。凄いですね。「夕刊フジ」「週刊実話」「東京新聞」「週刊朝日」と、次々と取り上げられています。

(2) 2月6日(月) 『論座』（3月号）発売。私は「愛国者はそんなに偉いのか」を書きました。

(3) 2月7日(火) 『創』（3月号）発売。私は「転ぶ人・斃（たお）れた人」を書きました。山本譲司、三浦重周、沢口ともみ、三氏のことを書きました。

(4) 2月11日(土) 午後1時、ロフトプラスワン。重信房子さんを支援する集会。足立正生、重信メイ、PANTA、塩見孝也さんなどが出ます。

(5) 2月14日(火) 7:00p.m.高田馬場ライブ塾。漫画家の石坂啓さんが「日の丸・君が代」について話します。

(6) 2月17日(金) 7:00p.m. 文京区民センター会議室2Aで映画「あんにょん・サヨナラ」劇場公開記念イベント。李熙子（イ・ヒジャ）さんと私。「靖国を語る」

(7) 2月22日(水) 7:00p.m. 高田馬場シチズンプラザ。古賀俊昭氏（東京都議会議員）で、「皇室典範改正阻止」。

(8) 2月23日(木) 10:00a.m. 東京地裁。重信房子さんの判決。

(9) 2月28日(火) 6:30p.m.文京シビックホール（小ホール）。シンポジウム「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」。

(10) 3月14日 7:00p.m.高田馬場シチズンプラザ。高森明勅氏（拓大客員教授）をお迎えして、天皇論の講演です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年 2004年 2005
年 2006年

今週の主張 2月13日 おめでとうございます！

(1) 又もや、正月がきましたね

この日、午前中はジャナ専で授業をやり、午後は家でテレビを見ながら仕事をしてました。図書館に返す本の大事な箇所をノートに写したり、資料の整理をしたり。又、書き散らしたメモを大学ノートにまとめたり…と。別に集中しなくても出来る仕事だから、そんな時はテレビをかけながらやってるんです。

この時は「紅白歌合戦」をかけてました。年末に録画したのですが、原稿が忙しくて、見てなかったんです。2月になって、やっと見たわけですよ。しかし、知らない歌手ばかりでつまらない。それに、下手くそな歌手ばかりだし。オンチでも歌手になれるなんて日本だけだ。世界に対し恥ずかしい。申し訳ない。と謝罪しながら見ていました。最後に、皆で「蛍の光」を歌う。うっ、平成17年（2005年）も終わりか、今年も終わりか。と。気分は本当に大晦日ムードでした。「新しい年がいい年でありますように」とみのもんたが叫んでる。しかし、よくピッタリと終わるもんだと感心した。

それから、日本各地のお寺の除夜の鐘だ。ゴーン、ゴーンとなる音を聞きながら、ああ、今年も終わるんだ。よし、明治神宮にでも初詣に行こうと思ってました。今年もいい年でありますように。いい仕事ができますように。ここで、アナウンサーが言う。「明けましておめでとうございます」と。あっ、元旦なんだ。「おめでとうさん」とつい、テレビに答えてしまう私でした。

その時、ゴーンと鐘の音が。いや、リーンと電話の音が。うるさいな。元旦の朝っぱらからと思いながら、受話器をとったんです。

「おめでとうございます」

と相手は言う。知り合いの新聞記者だ。

「あ、明けましておめでとうございます。今年もよろしく」と私は応えました。

「紀子さまがご懐妊されたそうです」と言う。えっと驚いた。元旦からお目でたい話だ。そう思った。いけない。今日は元旦じゃない。2月7日(火)だ。時計を見たら午後3時だ。「紅白」を見ていたら、すっかり「元旦」モードになってしまった。

でも何たる偶然。何たる喜び。本当にお目でたい。元旦になり、おめでとくとテレビに言った途端に、おめでたいニュースが飛び込んだ。元旦モードの中で、このニュースを聞いたのは世界広しといえども、私だけでありましょう。暗いニュースが多い中、パッと明るくなるニュースでしたね。この日は、街でも号外が出たそうです。夕方から夜のテレビは「ご懐妊」一色でした。なかでも、「コウノトリ」のお話しはよかったですね。

昨年の9月、秋篠宮ご夫妻は兵庫県豊岡市の県立コウノトリの郷公園に行かれたんですね。そこで試験放鳥されるコウノトリを見られた。そのことを今年1月の歌会始の際、よまれたんです。それも、お二人そろってコウノトリを題材にした歌を。

「人々が笑みを堪へて見送りしこふのとり今空に羽ばたく」（秋篠宮さま）

「飛び立ちて大空にまふこふのとり仰ぎてをれば笑み栄える」（紀子さま）

お二人が同じ題材でうたう、ということは例がないそうです。それだけお二人には、「確信」があったのでしょう。コウノトリの郷にいて、コウノトリが運んでくれたのでしょう。「笑み栄える」には、その喜びがあふれていますね。

2月7日にニュース番組に出たコメンテーターが、「実は、この歌を聞いて、私はピンと来たんです」と言っていた。だったら1月に言いなさいよ。後だしジャンケンみたいなコメントをしちゃいけないやね。あの時点では誰も知らなかったんですよ。今考えると分かるけど、お二人でコウノトリをよみ、これ以上ない示唆を与えている。「ちょっと、ヒントを与えすぎたかな」といたずら心すらうかがえる。これほどの確信を持ち、喜びを持ってうたっている。誰だって気付くはずだ。でも、誰も気付かない。うたわれたお二人だけしか知らない。大したものですね。

よかったですね。おめでとうございます。でも、テレビで街の声を紹介してたけど、「今度はぜひ男のお子さんを」と答えている人が多い。おいおい、又、プレッシャーをかけちゃいけないよと思いましたね。でも、9月末にはご出産だという。「それまでは皇室典範論議は凍結を」と世界日報の社説には出ていた。どちらにしる、これで大きく変わるでしょう。(この3日後、皇室典範改正案は今国会提出見送りとなった)

「男子なら皇位継承3位」と一面に書いてる新聞もあった。「男子なら皇室典範を改正する必要はない。万万歳だ」という声もある。そうやってほしい。しかし、男子か女子かという問題とは別に、皇室典範は改正する必要があるだろう。皇位継承の受け皿は出来るだけ大きくしておいた方がいい。1条も9条も改正し、「養子もとれる」「女帝・女系もいい」と、〈可能性〉は広く、大きくしたらいい。もっと言うならば、皇室典範は必要ないと思う。有識者会議で議論するのもいい。国会で議論するのもいい。そしてあとは、天皇陛下に決めてもらう。あるいは皇族会議で決めてもらう。それでいいのではないか。

そういう話を、2月8日(水)のテレビで話した。

(2)テレビに出たよ。本も出そうだよ

2月7日(火)の夕方、紀子さまご懐妊のニュース。翌、8日(水)にテレビに出て、この話をした。と言うと、「ご懐妊」の報を受けて、緊急特番を組んだと思うだろう。ところが違うのだ。1ヶ月以上も前から決まっていたのだ。何たる偶然!

ただ、残念なことに、これは録画なんですな。「この日、すぐに放映したらいいのに」と思いましたが、そうはいかないのでせう。だから放映日が近づいたら又、お知らせしましょう。「この収録が2月7日前だったら、録り直しでしたよ」と局の人は言っていた。だから、これもハッピーだったのだ。

ついでに言っておくと、もう一つ、ハッピーなことがあった。2月7日(火)は私にとっても忘れられない日になった。元旦だとばかり思い、ハッピーニューイヤーと言っていたら、新聞記者からの電話で「紀子さまご懐妊」のお目でたいニュースを知らされた。もしかしたらこの日は、旧正月の元旦だったのかもしれない。幻想と現実のお目でたが重なったが、もう一つある。出版社から電話があった。12月中に書き上げる約束で取りかかりながら、自分の未熟さのせいで、書けず、やっと1月末に書いて送った原稿だ。

焦って書いたし、文章も下手だし、論理も一貫してないし。これじゃ、ボツだろうな。と思いながらも、出したんです。204枚を。そしたら、この日、電話があって、「いいじゃない。これで行きましょう」と言う。いやー、嬉しかったですね。「バンザーイ！」と声をあげちゃいました。2月7日にして、やっと私にも正月が来たという感じですね。だから、これからは2月7日を元旦にしましょう。国民の祝日にしましょう。それは無理か。でもいつか祝日になるかもしれない。

実は、204枚の原稿を書いて、ボツになるかもしれないと思ったのには、わけがあるんです。以前、そんなことがよくあったし、又、今出ている『論座』の「愛国者はそんなに偉いのか」も、エライ苦勞をしてやっと書いたからです。「俺はダメだな」と打ちのめされながら、書き直したんです。書き下ろしの本と並行して書いてたんですね。年末から年始まで「足かけ2年あるや」なんて気楽に考えてたんです。でも、書けない。『論座』は×切の1月16日になって、やっとできた。ホッとした。ところが、どうも未熟で不完全だと思い、書き直した。

まあ、結果的にはそれがよかったんでしょうな。文章も引きしまったし。でも、書き直している間に、やっぱり私は未熟だな、と思い知りました。文章が下手なだけでなく、どうも覇気がないし、集中力が無い。いかんな。もっともっと勉強して、もっともっと本を読み、考えなくては。そう思い知らされた。この間は、書き下ろしの本はストップ。そんなこともあって、204枚を書き上げても、ボツになるんじゃないかと、脅えていたんです。でも、ひとまず、ホッとしました。

ただ、無力で非力で勉強不足の私ですが、必死に、全力で書いたとは思いません。『論座』を読んでくれたある編集者がこんなメールを下さいました。あまりに嬉しかったので、一部分紹介しますね。〈『論座』掲載の論文を拝読させていただきました。気合の入った素晴らしい文章だと思います。近代史における右翼運動を整理し、そのなかで現代の愛国主義の高揚を自覚的に位置づけることは、おそらく鈴木さんにしかできない仕事だと存じます。失礼な言い方かもしれませんが、久しぶりに真面目な鈴木さんの論考を拝見し、胸がすくような思いをしました〉

(3) 「正論」「論座」の「激突！編集長対談」は歴史に残るでしょう

私にしか出来ない部分があるのか。嬉しいですね。自虐史観の私ですが、

少々、誇りを持ちました。あれを書くキッカケになったのは、高橋哲哉さんの『靖国問題』（ちくま新書）なんですね。とてもいい本で、バランス感覚のある本です。靖国の遺族の気持ちも十分に理解し、かなりページをさいて紹介している。又、右翼論客の葦津珍彦（あしず・うずひこ）先生の論文を取り上げて紹介している。アツと思った。僕なんか、全く忘れていた点を指摘された。やっぱり、葦津先生は深いし、見識が違う、と思った。

そういえば、野村秋介さんと、よく葦津先生のお宅にうかがって話を聞いた。そんなことを、『論座』の人に話した。そしたら、「ぜひ、葦津先生のことを書いて下さいよ」と言う。嬉しかったですね。右翼や保守派の雑誌からはそんな注文はないのに。朝日新聞社の『論座』から頼まれた。それで必死に書いたんですよ。

他にも、白井為雄先生のこと書いた。血盟団事件の小沼正、2.26事件の末松太平さんのことも少し触れた。又、もっともっと書いてみたいと思う。今、思うと、戦前から運動をやっていた人々は、皆、凄かった。同じ言葉を言うにしても、〈覚悟〉が違う。今の保守派の学者や「にわか右翼」の人々は、〈安全圏〉にいてもものを言ってる。基盤が違う。そんなことを思い出しながら書いた。

骨法道場の堀辺正史先生からも電話を頂いて、「あれはよかったね」と言われた。「愛国者は自己申告だ」というのが「鈴木さんらしくて面白い」と言って下さった。「思わず笑っちゃいましたよ」と。そうなんですよ。愛国者になるには試験もいらない。他人の認可もいらない。「俺は愛国者だ！」と言えば済む。そして愛国者だから何でも出来ると思う。まわりも黙ってしまう。これでいいのかな、と思う。

きのう今日、「愛国者」になったガキ共が、偉そうに、「鈴木は反日だ」「鈴木は愛国心が足りん」と言う。何言われたっていいけどさ。どうせ、左翼とばっかり付き合ってるから、私は「非国民」ですよ。でも、こんな連中に言われたくないやと思っちゃう。

『論座』に書いたが、2.26事件に参加した末松太平さんと会った時、「オレは愛国者だ。オレは民族派だ、なんて言うのはやめなさい」と言われた。「チョウチョは自分のことをチョウチョと思ってますか。そう言われないと淋しいですか。そんなのは人間が勝手に貼りつけたレッテルです。そんなのがなくても生きていけるでしょう。死んだあとに『愛国者の墓』と書いてもらえばいい。それとも、生きてるうちに言われないと淋しいですか？」

なんか、チャカされてると思った。その時は、ムツとした。しかし、今考えてみると確かにその通りだと思う。「愛国者だ！」なんて自分で言う言葉じゃないやね。心の中に秘めておけばいい。他人が評価することだ。又、死んだあとで、「あの人は愛国者でしたね」と言われたらいい。逆に、「あの人は、愛国者だと自分では言ってたけど、他人に迷惑のかけっ放しで、とても愛国者とはいえませんでしたね」と言われる人もあるだろう。私もこの右翼業界に入って40年。「オレは愛国者だ」と言う人を何千人、何万人と見てきた。しかし、そのうち本当の愛国者はどれだけいたのでしょうか

話は『論座』に戻る。特集の「検証・保守論壇」はよかったですね。産経「正論」と朝日「論座」の激突！編集長対談。これは凄かった。考えてもみなかった。ガツプリ組み合って討論している。「正論」もよく出てきたと思う。二人とも勇気がある。感動した。これは歴史に残る対談になるでしょう。歴史、靖国、中国問題など幅広く討論し、さらにオピニオン雑誌の役割。保守とは何か。何を守るのか。…といった問題に、二人とも思い切り突っ込んで話している。これは、ジャナ専の授業の時、生徒と一緒に読み、感動しましたね。

それと、奥武則さん（法政大学社会学部教授）の「戦後『保守系・右派系雑誌』の系譜と現在」も凄いです。

〈『心』『自由』から『諸君！』『正論』まで〉と、サブタイトルがついてます。よく調べて書いている。膨大な資料を調べ、整理し、その問題点を書いている。学生時代から読んできた雑誌や論客の先生方のことが出ていて、懐かしかった。又、昔は、言論人は皆、覚悟を持って発言してたんだなと、改めて痛感した。今のように、「安全圏」にいて、吠えるだけだと、言葉だけが上滑りになり、「過激」になる。威勢のいい言葉、見出しだけが並ぶ。そしてその言葉に責任をとろうともしない。これじゃ、いかんがな。

そんな現状に警鐘を乱打してるんだと思いましたね。この『論座』は。そんな素晴らしい企画の中で、私も書かせて頂き、幸せでしたし、光栄だと思えます。

【だいありー】

(1)2月6日(月) 夕方まで図書館。4時に岡村青さん（作家）と会う。取材される。岡村さんは「楯の会」などについて取材し、書いている。茨城在住のライターだ。書かれたものは大体、読んでた。一度会いたいと思っていたので、嬉しかった。

(2) 2月7日(火) 午前中ジャナ専。今期ラストの授業。「時事問題」は、『論座』に載った「正論」と「論座」の〈編集長対談〉を読み、雑誌の使命、言論人の覚悟について皆と話しあう。「現代史」は「連合赤軍事件」をやる。

家に帰って、「紅白歌合戦」のビデオを見ながら、資料の整理、ノートの整理をしていたら、新聞記者から電話で、「紀子さまご懐妊」のニュースを知らされる。そして、本文に続く。

(3) 2月8日(水) 4:00から、テレビに出演する。女帝問題。

(4) 2月9日(木) 河合塾コスモの授業。終わって夜、ルノワールで3時間、閉じこもって本を読む。書評を頼まれた本があって、集中的に読んだ。

(5) 2月10日(金) 図書館。島尾敏雄の『死の棘』は読み切れなくて、もう一回、借りた。昔読んで、かなりキツかった。すさまじい本だった。女が恐くなった。でも、今、読み返すと、文学としても上質な本だと思う。図書館だけで月に20冊借りて読破してる。勉強しなくっちゃ。

【お知らせ】

(1) 2月14日(火) 7:00p.m.高田馬場のライブ塾（トリックスター）。漫画家の石坂啓さんとトークをします。「日の丸・君が代」について。石坂さんは「発言する社会派の漫画家」です。「週刊金曜日」の編集委員でもあります。過激で楽しい話が聞けると思います。

(2) 2月17日(金) 7:00p.m.文京区民センター会議室2A。靖国問題のドキュメンタリー映画「あんにょん・サヨナラ」劇場公開記念イベント。李熙子（イ・ヒジャ）さんと私がトーク。「靖国を語る」。

(3) 2月22日(水) 7:00p.m 高田馬場シチズンプラザ。古賀俊明氏（東京都議会議員）で、「皇室典範改正阻止」。

(4) 2月23日(木) 10:00a.m. 東京地裁。重信房子さんの判決。

(5) 2月28日(火) 6:30p.m. 文京シビックホール（小ホール）。シンポジウム「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」

(9) 3月14日(火) 7:00p.m. 高田馬場シチズンプラザ。高森明勅氏（拓大客員教授）の天皇論の講演。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン / 丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)
[2006年](#)

今週の主張 2月20日 「人の心を読む機械」が出来た！

(1)そうです。私は憎むべき殺人犯です

「お前のせいだ」と言われました。確かにそうです。見沢知廉氏の自殺のことです。「仕事は絶対に断わってはいけない」と私は言ったそうです。それを信じて膨大な仕事をして疲れ果てたのだそうです。又、「人の心を読む機械」について私が見沢氏に吹き込み、そのことで悩んでいたそうです。彼のHPも最後は、「最近、心を読まれている」という不可思議な文章で終わっていました。死の直前も、「人の心を読む機械」について、いろんな人に聞いて回ってたそうです。「そんなこと、私は言ったかなー」と思っていました。最近やっと、ある事に気付きました。そのことについて書きましょう。

「沢口ともみさんが死んだのもお前のせいだ」と言われました。9年前に知り合った時は政治に全く関係のない、明るい踊り子さんでした。それなのに右翼や左翼の変な人達を紹介したばかりに、イラクに行ったり、訪朝団に関わったり。それで苦勞をし、命を縮めたのだと。全くその通りです。私が悪いのです。

「この4ヶ月で9人が亡くなった」と書きましたが、もう2人おりました。小学校の恩師の、芳賀達也先生です。そして評論家の田中正明先生です。2人とも、とてもお世話になりました。田中先生は、東京裁判・パール判事に関する著作などで、日本の戦後史観の過ちを指摘しておりました。何度もお話を聞き、指導して頂きました。

芳賀先生は、私の少年期の思想・人間形成で一番大きな影響を受けた人です。私の絵の才能を見出してくれた先生です。「将来の自分」の絵は、このHPで以前、紹介しました。又、他の絵や習字などもとっておいてくれまし

た。今度、少しずつ紹介しましょう。小6とは思えないほど上手な絵ですし、習字です。老後は「書道教室」を開こうと思っております。

去年の夏に、秋田県湯沢市で芳賀先生を囲む会があったんです。私は欠席しました。先生はとても落胆してたそうです。「鈴木君の本を本屋で見つけて買って読んだ、と言ってたど。おめえの来るのを楽しみにしてたのに」と同級生に言われました。すみません。ガッカリさせて。それで12月に亡くなってしまいました。私のせいでありんす。先生を殺したのは私です。

この4ヶ月で亡くなった11人の人々も、全て私のせいです。私は憎むべき殺人犯です。懺悔します。では、見沢氏の話に戻ります。これだけ多くの人亡くなると、見沢氏の死は、もう随分前のような気がします。しかし考えてみたら去年の9月7日なんですね。たった4ヶ月前なんです。時間が随分と経ったような気がします。でもこの4ヶ月の間に何と、見沢氏の新しい本が二冊も出ました。『ライト・イズ・ライト』（作品社・1500円）と、『七号病室』（作品社・1500円）です。又、近くもう一冊、『改造』（作品社）が出ます。これは、自伝的な作品です。凄いですね。死んでからも書きまくってるんですね。と思ったけど、死ぬ前に書いたんですね。未発表のものはまだまだあるそうです。続々と本になるでしょう。楽しみです。死後も生長し続ける作家です。

ところで、「人の心を読む機械」でしたね。よく、夜中に見沢氏から電話がかかってきたんですよ。

「人の心は読めるんですか？」と。「読めねーよ。ウルセーナ」と私は邪険に答えてました。「読む必要もねえだろう。下らん。地球人が何を考えるか、オレには興味ねえよ。今、金星人とコンタクトをとってんだから」と私は答えました。

でも、見沢氏は他の人にも聞いてたんですね。彼は横浜に住んでたんですが、近くに米軍の通信基地があるんです。巨大なアンテナがあって、そこから「反米分子」の心を読んでたそうです、米軍が。知りませんでした。

「だから、どうも、心を読まれてるんですよ」と言う。「うん、その話を小説にしたらいんじゃないの」と私は言いました。小説にするためには、その〈事実〉を一旦突き放し、客観的に見る必要があります。そうしたら彼の仕事上もプラスになるでしょう。そう思ったのですが、客観視する余裕はなかったようです。

「つまらん。そんな事、どうでもいいじゃないか」と私は言いました。下

らないな。誰がそんなことを言ってんだ、と心の中で呟きました。ところが何と、その心を見沢氏に読まれたんです。

「下らないな。誰がそんなことを言ったんだ、と思ってるでしょう」

「(ギクッ!)」

「元々は鈴木さんが言ったことですよ」

(バカな) と思ったら…

「バカなと思ったでしょう。嘘じゃないですよ」と真剣に言う。私は心当りが無い。変だなと思いながら、考えた。必死に考えたことです。そして、アッあのことかと思い当たった。

(2)見沢氏の遺言は正しかったのだ

『公安警察の手口』（ちくま新書）を出したのが、一昨年の10月だ。いろんな人から手紙や電話がきた。その中に、「心を読む機械」の話があったんだ。

何でも、「思考盗聴器」というのが、アメリカで発明されたそうだ。電話なら、コードがあるから、簡単に盗聴できる。今は、コードのない携帯でも盗聴できる。電波を途中でキャッチするんだ。同じように、人間が考えてることを盗聴する。お空には巨大な人工衛星があって、そこを中継して、盗聴するんだ。人間の思考も要は電波だから、盗聴できる。

…という話だ。反体制運動、反政府運動をしてる人はすぐに分かる。そんな反逆の心を持ってる人も分かる。潜在左翼、潜在右翼もすぐに分かる。そんな話だ。「えっ、鈴木さんともあるう人が知らなかったんですか」と、電話の主になじられた。「すみません。勉強不足で」と謝った。でも、何で、こんな話を2時間も聞かにゃならんのだ。それで、何で謝らなきゃならんのだ。と思いましたね。

その話をこのHPにチラッと書いた。それを見沢氏は読んだ。私もその「思考盗聴器」を信じてると思って、見沢氏は聞いてきたんですな。「こんな奇妙な電話があったよ」と書いてただけなのに、まいるなー。

と、ここまで書いたら電話だ。

「奇妙な話とは何だ！ 思考盗聴器は実際にあるんだよ。どれだけ多くの人が被害を受けてると思うんだ！」と怒鳴り立てる。ヤベー、また、心を読まれちゃったよ。「すみません。私が悪うございました」と電話に向かって、ペコペコ頭を下げました。

だから、見沢氏の言ったことは、この「思考盗聴器」のことだったんで

すな。これで解決。

と、思っていた。今の今まで、そう思っていた。ところが、今日、部屋を掃除していたら、一枚の紙が出てきた。新聞記事の切り抜きだ。何気なく読んだ。ゲツと叫んだ。だって見出しが、こうだ。

「人の心読む機械」できるかも？

「世界日報」の05年4月25日の記事だ。そうか。この話を私は、見沢氏にしたのか。きっとそうだろう。自分でも全く忘れていた。いかんよな。見沢氏自殺の5ヶ月前だ。「変な電話があった」というだけでなく、「新聞にも出てたよ」と多分、言ったんだろう。新聞となると、リアリティーが違う。大変だ。やっぱり私のせいだ。

「世界日報」というのは統一教会が出してる新聞だ。でも、宗教色は出さず、一般紙だ。なぜかうちには「贈呈」で毎日、配達されてくる。ご苦労さまだ。他の一般紙と同じだが、たまに、珍しい記事がある。一般紙では触れない記事がある。これもそうだ。

では、「人の心を読む機械」出来るかも。の話だ。あくまでも医学の話だ。自動車事故などで、寝たきりになってる人がいる。喋れない。手足も動かせないから筆談も出来ない。目で合図も出来ない。舌や顎でパソコンを操作することも出来ない。植物人間と思われている。でも、脳は働いている。思考している。だから、機械で脳の血流分析をし、それで考えてることを知るのだ。そういうことらしい。記事を見てみよう。

〈脳内の血流の状態を映した画像を調べ、その人が見ているしま模様の方角を当てることに、国際電気通信基礎技術研究所（ATR。京都府精華町）の神谷之康研究員（神経科学）らのグループが成功した。世界初の成果といい、論文は25日、米科学雑誌ネイチャー・ニューロサイエンスの電子板に掲載された。

神谷研究員は「人の心を読むことのできる機械の開発に向け、小さいが確実な一歩。研究が進めば、身体のみひや、言語障害のある人のコミュニケーションにも活用できるのではないかと話している〉

ウン、やっぱり、医者の治療用か。出来たら、本当に凄い。でも、治療用に限定しても、必ず、他に利用されるだろうな。警察が取り調べで使うとか。嘘発見器どころではない効力を発揮する。取り調べで、いくら黙秘して

も意味はない。又、男女関係でも使われるんだろうな。男は浮気も出来ない。すぐに女房にバシってしまう。今、島尾敏雄の『死の棘』を読んでいるが、それでなくても勘のいい女に、問いつめられている。さらに、こんな機械が実用化されたら、もう「家庭の平和」はないよ。

さて、「人の心を読む機械」の記事に戻る。どうやって読むのかだ。なんでも「しま模様」で分かるらしい。

〈同研究員らは、磁気によって脳内の血流の状態を調べる機能的磁気共鳴画像装置を使用。水平か垂直、または斜めのしま模様が描かれた円盤を4人の被験者に見せる一方、大脳の視覚野に表れた血流パターンを分析することで脳細胞の反応を調べた。

その結果、誤差はあるが、どの方向のしま模様を見ているかを当てることができた。二方向のしま模様が描かれた円盤を見せ、被験者がどちらの方向に注意を向けているかも当てられる〉

(3)電話を通して心を読む詐欺商法も

心の動きが読めるんですね。でも、まだこの程度です。衛星を使って、人の心を全て読むなんてことは出来ません。ましてや、政府に不満を持つ人間がいるかどうかをチェックする。なんてことも出来ません。

いや、まてよ。「まだこの程度だ」と我々を安心させ、油断させるのが奴らの手なのかもしれない。本当は、「心を読む機械」は完成してるのかもれしない。でも、この新聞記事では、「まだまだだ」といっている。

〈この分析手法は、色や運動方向などの視覚情報、聴覚や触覚などの感覚、記憶や意図などの認知状態をつかむことにも応用でき、既に研究を始めているという。同研究員は、「課題は多いが、将来は感情も読み取ることが可能になるかもしれない」としている〉

うーん。この程度の完成度だ。それを喜ぶべきなのか。でも、時間の問題で出来るだろう。その時に備えて、「心を読ませない機械」の開発を進めている。私が、ですよ。読む機械に対してバリアーを張るんです。結界（けっかい）ですよ。だから忙しい。だから、ここで終わる。

と思ったら、又もや変な記事が新聞に出ていた。実は先週、書こうと準備していたんやけど、お目でたい記事と一緒に、不敬かと思って、やめたんです。

一体これは何なんだ。と私も驚きましたね。シロウトが「右翼」を名乗って企業を恐喝し、大金をせしめたんですよ。こんなことで金を取れるんか。それに、大金を払う企業も馬鹿だね。

「世界日報」（1月30日付）に出ていた。こんな見出しだった。（アッ、今週は全部、「世界日報」情報だ！）

〈政治団体名乗る企業恐喝

メンバーは失職中の中高年男性

「ドスの利いた声」で採用 大阪府警〉

「右翼が恐喝した」という記事はよく目に付く。しかし、彼らは右翼とは全く関係がない。シロウトだ。それなのに右翼を偽装して、恐喝した。電話一本で。新手の「振り込め詐欺」だ。でも、「企業が信用せんやろ」と思うかもしれないが、そのために、面接して「ドスの利いた声」の男を採用した。凄いね。着眼点がいい。

捕まったのは1人や2人じゃない。23人も逮捕された。23人も構成員がいるなんて、本物の右翼団体よりも大きいよ。

この23人だが、皆、普通の人たち。上場企業の元サラリーマン、中学校の元教師、起業に失敗した元経営者…。誰一人、右翼活動をしたことのある人間はいない。求人雑誌の広告に応募してきた失業中の中高年男性ばかりだった。

「求人雑誌の広告」といっても、まさか、「右翼団体に入りませんか」

「元気があって、企業恐喝の出来る方、募集します」なんて出せない。「商品販売の仕事」として40～60代の男性を募集した。この年齢でも仕事があると思うと、ドッと応募はくるわさ。応募者の電話の声を聞いて、「低音でドスの利いた声」の人から採用した。それで「仕事」だが…。

〈求人雑誌で集めた40～60代のメンバーに電話をかけさせた。「北方領土返還運動をやっている」「街宣車を回すぞ」「若い者もたくさんいる」とマニュアルの決めぜりふを使って、ドスの利いた低音の声で脅した。しかし、実際には政治活動はしておらず、街宣車や血気にはやる若い者も存在しなかった〉

顔が見えないし、声だけだから出来たんだろう。「大日本」とか「憂国」とか「反共」「愛国」なんて単語をとりまぜて、それらしい団体名をつくり、それで企業に電話する。しかし、いくら仕事がほしい中高年者でも、こ

んなマニュアルをもらったら、「犯罪」だと分かりそうなもんだ。「仕事」だからと割り切ってやったのか。家族を養うために、仕方なく犯罪に手を染めたのか。理解できん。

さらに、いくら低音でドスが利いてるとは言っても、シロウト集団だ。企業が質問したら、相手もボ口を出すと思うのだが…。でも、企業は馬鹿だから、ホイホイと金を出したんだよね。中川容疑者というのが仕切り役で、4つ位の団体名をデッチ上げて、23人を使い、「商売」をした。この人間だけは、右翼のことを少し知っていたのだろう。ネットなどで、右翼のことを調べて、かたったのかもしれない。

〈中川容疑者は防衛白書をコピーした書類や皇族の肖像画を6万円で売り付け、47都道府県の中小企業や宗教団体、学校法人などから総額8億円を脅し取った〉

ヒャー、凄いね。8億円だよ。振り込め詐欺よりも儲かる。右翼って儲かるもんだね。知らなかった。しかし、何度も言うけど、金を出す方も馬鹿だ。「北方領土返還運動をしている」と言われたって、「それがどうした」と言ってやればいい。「皇族の肖像画を買え」って言われたって、「間に合っている。皇族カレンダーを持ってるから」と言えばいい。それなのに6万円で買うかよ。「宮内庁の許可はもらっているんですか。電話して確かめましょう」と聞けばいい。

又、「街宣車回すぞ」とか言われても、何も悪いことをしてないのなら、断固闘えばいい。本当に恐怖を感じたら、警察に言ったらいい。それなのに、簡単に金を出しちゃう。8億円も。こんな企業や宗教団体、学校の名前は公表すべきだよな。

【だいたいありー】

(1) 2月13日(月) 出版社と打ち合わせ。

(2) 2月14日(火) 7:00p.m.ライブ塾で石坂啓さん(漫画家)とトーク。

「日の丸・君が代」について楽しい提言とお話。私が最近手に入れた「歴代天皇陛下御真影」の掛け軸を御披露目した。

(3) 2月15日(水) 夕方。元左翼の人と会った。

(4) 2月16日(木) 朝8:30から帝国ホテルで上田哲さんの朝食勉強会。講師は「皇室典範に関する有識者会議」のメンバーで元最高裁判事の園部逸雄さ

ん。とても勉強になりました。昼に週刊誌の取材を受けた。

午後から河合塾コスモの授業。田中卓先生（皇学館大学名誉教授）が『諸君！』に書いた、「女性天皇で心配ありません」を読む。

(5) 2月17日(金) 2時、打ち合わせ。7時、文京区民センター。靖国問題をめぐる討論映画「あんにょん・サヨナラ」の劇場公開記念イベント。映画の主人公であり、靖国に祀られている父の名前の取り下げを求めているイ・ヒジャさんと私が靖国問題について語りました。中味の濃い、実りある話になったと思います。

(6) 2月18日(土) 11時、新聞の取材を受けた。

【お知らせ】

(1) 2月22日(水) 高田馬場シチズンプラザ。古賀俊明氏（東京都議会議員）で、「皇室典範改正阻止」

(2) 2月23日(木) 10:00p.m. 東京地裁。重信房子さんの判決。

(3) 2月24日(金) 「朝まで生テレビ」で「天皇論」をやるそうです。知っている人も出るでしょう。

(4) 2月26日(日) にんげん出版より『国家の崩壊』（佐藤優 聞き手・宮崎学）が出ます。いい本です。この日の朝日新聞、産経新聞に広告が出ます。私も推薦の言葉を書きました。夕方、沢口ともみさんの追悼の集まりです。

(5) 2月28日(火) 6:30p.m. 文京シビックホール（小ホール）。シンポジウム「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」

(6) 3月14日(火) 7:00p.m. 高田馬場シチズンプラザ。高森明勅氏（拓大客員教授）の天皇論の講演です。

(7) 現在、神保町の岩波ホールで映画「死者の書」をやっております。川本喜八郎監督の人形劇です。素晴らしい歴史ドラマです。原作は折口信夫です。川本さんがNHKで昔、作った「新平家物語」が2月末にDVDで発売されます。全巻で4万5千円ですが、それだけの価値はあります。

(8) 靖国問題を扱った日韓激論映画「あんにょん・サヨナラ」は7月1日から2週間、東中野のポレポレ座で上映されます。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン / 丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

今週の主張 2月27日 皇室・国旗・国歌について真剣に考えた！

(1) やっぱ、「朝生」では喋れませんでした

あーあ、キツかった。大変だった。惨敗でした。「朝生に出るんだろ。ガンガン喋るよ！」「しっかり主張しろよ！」と皆にプレッシャーをかけられましたが、やはり、ダメでしたね。全然、喋れない。ちょっと発言しようとする、他の人につぶされる。イライラし通しの3時間でした。

でも、誰も恨むわけでもなし、やはり、私が悪いのです。実力がありません。そんなわけで「朝生」のレポートは終わり。

でもでも、いろんな人と知りあえたのは嬉しかったですね。2月24日(金)の深夜にあったんですよ。正確には25日(土)の午前1時20分から4時19分までだ。

夜12:00に車が迎えにきた。わが、みやま山荘に。そして、12:35にテレ朝に着く。12:45から、ちょっと打ち合わせ。10分位。いつもそうだ。こんなもんだよ。「こんな流れでやる」という「予定」はあるが、その通りに行きたためしがない。だから、打ち合わせをしても意味がない。それで、いつも、パネリスト紹介だけだ。

「朝生」は始まって何と20年になる。凄いね。そんなになるんだ。今回で227弾。私は今回で8回目だ。出席率3%位だ。2年半に1回位の割合で出ている。でも、何回出ても慣れない。喋れない。足が震える。大変だ。

今回は、「激論！天皇」。いろいろ考えることはあった。あれも言おう、これも言おうとメモもしていた。でも、話に入り込めない。黙っていたら、一言も喋れない。焦燥感だけが募る。イライラする。精神的に悪いよな。

「ロフトのような気分でリラックスしてやりゃいいじゃないか」という人もいる。しかし、出たことのある人なら分かるだろうが、一種独特の雰囲気

だ。リラックスも出来んし、割り込んで喋るのも出来ん。

今回、初対面の人は山本一太さん（自民党・参議院議員）。小宮山洋子さん（民主党・衆議院議員）。小池晃さん（日本共産党・参議院議員）。高橋紘さん（静岡福祉大学教授）。中丸薫さん（国際政治評論家）。八木秀次さん（高崎経済大学教授）。

この人たちと知り合えたことは嬉しかった。始まる前、又、終わってから、かなり話をした。

それと、あと半分は知ってる人だ。

小沢遼子さん（評論家）。小林節さん（慶応大学教授）。清水建宇さん（朝日新聞社編集委員）。宮崎哲弥さん（評論家）。高森明勅さん（拓殖大学客員教授）。

司会は田原総一郎さん。後ろにはギャラリーの若者が60人。一水会の若手も来てくれた。ありがたい。長い時間、ジーツと座って大変だったでしょう。「ダメじゃないか。鈴木さん。もっと喋れよ!」と思ってたんでしょう。そんな叱咤激励の視線を背後から感じていましたが、ダメでしたね。申し訳ありませんでした。やっぱり朝生は、テレビで見るのが一番いいですね。

田原さんが言ってましたが、「天皇」問題はこれで、5回目なんだそう。僕は2回目の「天皇」にも出た。この時は、殺気だった討論会だった。でも、今回よりは僕も話すチャンスがあった。不思議だ。

90年（平成2年）11月23日の「徹底討論！象徴天皇制と日本」だった。16年前だ。この時は、天皇「支持派」と「反対派」の激突だった。支持派は、野村秋介、大原康男、高森明勅、私。反対派は、大島渚、色川大吉、小沢遼子…。小沢さんまでが、「長い間、反体制運動をされていて…」と紹介されていた。「反体制の過激派」だったんだ。

この時は、5時間だった。1時から6時まで、文字通り、「朝まで」生テレビだ。時間が長かったから、私もかなり話したような気がするのか。

その前の90年2月23日は「日本の右翼」だった。「朝生」に初めて出たのがこれだ。この時も5時間だ。左翼と右翼の激突だ。というよりも、右翼の7人と、左翼・反右翼の人々という構図だった。右翼を中心にとり上げたので、かなり話す時間はあった。というより、7人の右翼を順ぐりに喋らせようという戦略だったからか。考えてみると、この時だけかな、「喋った」という記憶があるのは。後は、7回出ても、ずーっと喋れんかった。

前にも書いたが、8回出ても、全く慣れない。だらしのない話だ。応援して下さった皆さん、本当に申し訳ありませんでした。何と批判されても仕方ありません。甘んじて批判を受けます。でも、これも私の実力です。やっぱり私は、ライブ塾かロフトでささやかにtalkしてるのがちょうどよいのでせうか。ですから、ここからは、石坂啓さんとのトークの話ばしませう。

(2)バレンタインなんて知らねえよ

石坂啓さん（漫画家）の革命的「国旗・国歌論」をたっぷりと聞きました。2月14日(火)高田馬場のライブ塾（トリックスター）での事でした。

「でも何で、バレンタインデーにしたのよ」と言っていました。「しょうがないから、ほい」と板チョコの義理チョコをくれました。

「すみません。毎月第2火曜日にやってるもんで。それで自動的になっただけです。バレンタインデーだと知ってたら他の日にしたのに」

と謝りました。実際、「チョコレートを配る日だから行けない」と言っていたお客さんも沢山いたようです。どんな仕事をしてるんでしょうか。チョコレート工場の女工さんか、どっかの飲食店の人でしょう。それに、もっと石坂さんにマズイことを言っちゃったんですよね、前に。

「えっ、バレンタインデーって2月14日だったんですか。知らなかった。2月11日だと思ってました」

つい、うっかり、何も考えずに言っちゃったんですね。

「バッカじゃにゃーの。2月11日は建国記念日だがにゃ！」

と名古屋弁で思いっ切り馬鹿にされました。「右翼として忘れてはならない日でしょうが！」と。

この話はパッと日本中に広まって、森達也さん（映画監督）もロフトで喋っていました。

しかし、建国記念日っていったって古い古い神話の話だよ。本当に2月11日かどうか分かりゃせんよ。と、ブツブツ呟いていたら、「右翼がそんなこと言っているのかな」と森さんにかからかわれましたっけ。

さて石坂啓さんだ。前から知ってるし、漫画も見ている。でも、トークをするので石坂さんの書いたものを何冊か買ってちゃんと勉強した。タイトルがいいやね。さすがは漫画家だ。エート、なんだっけ。そうそう。

『赤ちゃんがドバドバ出た！』『コハレタ私』『恥ずかしい家族』『悪銭の稼ぎ方』『キスよりセックスが簡単』…うん、凄いタイトルだ。

「えっ、全部違ってよ！」と石坂さんに言われました。そして訂正して下さいました。『赤ちゃんが来た』『ちょっとコハレタひと』『私は恥ずかしい』『お金の思い出』『キスより簡単』だそうです。でも別に変わらないか。

『ちょっとコハレタひと』（読売新聞社）は1998年（平成10年）に出たんですね。「北京に行ったら妹のノリ子が空港まで迎えに来てくれた」といきなり始まって驚きました。嬉しかったです。この典子さんは私の「職場仲間」です。木曜日、河合塾コスモに行ってますが、そこでフェローをやっているのが典子さんです。いつもお世話になってます。

典子さんは名古屋人と中国人のハーフで、長い間、中国に住んどりました。そこでイタリア人の男性と結婚しました。だから息子はアメリカ人です。いろんな国籍が混ざると子供はアメリカ人になるんです。絵の具の色はいろんなのをどんどん混ぜると黒になります。しかし、光はどんどん混ぜると白になるんです。中学の理科で習いましたよね。人間はいわば光です。私達は「光の子」なんです。だから、いろんな光をどんどん混ぜてゆけば、白になります。白人になり、ホワイト・チョコレートになります。だから、ルッチーはアメリカ人です。

そうそう、典子さんの息子はルッチーというんです。本に書きちりました。239ページに。

「ノリコの息子ルッチーはうちのコドモと同じ7才。ルッチーは父親のピッポとはイタリア語で、私とは日本語で話す」

イタリア人の夫はピッポというんですね。変な名前ですね。ピッポ・エレキバンですね。仕事の打ち合わせで典子さんの家に電話することがある。何故かいつもピッポさんが出る。ところが日本語を一語も喋れん。だったら電話に出るなよ。赤ん坊が電話で遊んでるかんじだ。留守電にしてくれた方が用が足せる。しかし、何故か、用の足せないピッポ・エレキバンが出る。

「エー、this is Kunio Suzuki Speaking. Please Noriko.呼んでちょ！」

とか言って、やっと通じることがある。でも、通じない事の方が多い。日本に来て10年以上もたつのに、なんちゅう奴だ。カタコトでも喋れよ。中国やフィリピンから来た女の子なんて半年位で、もう日本語がペラペラだよ。それなのに。こいつは馬鹿か。

「でも本当は日本語がペラペラで、わざと知らないふりをしている」という説もある。何の為に？ イタリアの諜報機関の人間だからかな。あるい

は、周りの人が、自分のことをどう言ってるかを知るためかな。でも、エレキバンに限ってそんなに賢いとは思えん。

さて、子供のルッチーだ。この時は7才。僕も2、3回会ったことがある。3年ほど前、ニューズペーパーの公演に行ったら、石坂さんが自分の息子と、このルッチー君を連れて来ていた。2人とも小学生だ。でも大きい。2メートルある。100キロ以上ある。ジャイアント・ベイビーだ。今は中学3年らしい。だから3メートルはあるだろう。300キロはあるだろう。そのうち、「世界ビックリ・ショー」か何かに出るやろう。

(3)国旗は「鯉のぼり」か。はたまた「温泉マーク」か

あっ、いかな。他人の家庭の事情ばかり喋っちゃって。革命的「国旗・国歌」論だよ。実は、この『ちょっとコハレタひと』にその提言は載っていたのだ。125ページの「オリンピックに?マークの旗を」という章だ。

石坂さんは、日の丸・君が代が嫌いなんだね。オリンピックに日の丸が掲がるのも不愉快だ。それで、何とか別のものをと考えた。ザ・ニューズ・ペーパーに元いた松崎菊也さんは、「国旗を鯉のぼりにしよう」と提案したそう。でも、これは旗じゃないよな。オリンピックで、皆、旗を掲げてる時に、日本だけが長い長い鯉のぼりじゃいかなだろう。それで、国歌は「鯉のぼり」の歌ににするのか。「屋根より高い鯉のぼり。大きいまごいはお父さん。小さいひごいは子供たち。面白そうに泳いでる」という歌だよ。まア、童話を国歌にするのはいいけど、鯉のぼりは大きすぎるから規格外だ。原田選手のスキーみたいだ。

じゃ、鯉のぼりを旗にしちゃえばいい。鯉の絵を描いた旗だ。でも、これじゃ広島カーブになっちゃうか。赤ヘル軍団だ。じゃ、面倒だ。国民全員も赤ヘルメットを被る。俺たち全員、赤軍派だ。それで、天皇の赤子だ。おっ、いいじゃんけ。赤は「誠心」ですよ。「ホンキ」ですよ。赤軍にもなるし、天皇の赤子（「せきし」と読む）にもなる。天皇の忠良な臣民だわいな。

はい、ではこれで決まりですな。日本の国旗は鯉の旗。国歌は「鯉のぼり」。鯉は「国の魚」だから「国魚」にする。大事に扱わにゃならん。失礼があってはいかん。食べることは禁止。捕ったり、食べた人は逮捕。国家反逆罪だから死刑。

「うーん、昔は鯉こく、鯉の刺身、鯉のうま煮なんて食べたな。なつかしいな」と喋っただけで、これも反逆罪で死刑だね。ついでに、国の元首も鯉

にする。国名も「カープ共和国」にする。人間の上に鯉がいて、鯉が人民を支配する。じゃ、共和国じゃないな。「カープ王国」にする。全国の鯉の声を聞き、鯉の意志で政治は決まる。「人の心を読む機械」が出来たんだ。鯉の心も読める。人間と鯉の会話も出来る。

人間は元々は海から来た。だから、元々は我々は魚だ。鯉は我々の先祖だ。だから先祖に政治の大権を返す。大政奉還だ。明治維新の時に大政奉還をやったから今度は二度目だ。あの時は徳川幕府が天皇に大政奉還した。今度は、もっと昔のご先祖様の鯉に大政を奉還する。これでご一新がなるわけだ。めでたい。めでたい。めでたいじゃなくて、めでコイだ。（これからは言葉も変えなくちゃいかな）

これで全ては解決した。万歳。めでコイ、めでコイ。と喜んでいたら、続きがある。石坂啓さんの事務所のカナちゃんが、「それよりも温泉マークの?にしたらどうでしょう」と提案した。革命的な提案だ。「朝まで激論。どうする・どうなる。日本の国旗」だ。

こんな革命的な提案をしたんだから、「カナちゃん」はないだろう。ちゃんと名前を出せよ。出身地、年齢、顔写真も。

「温泉マークだと日本的だし、実に平和なのどかな気分になる」と、石坂さんも賛同した。「だったら国歌は、ドリフターズの『いい湯だな』にするか」と大乗り気です。お正月も祝祭日も、玄関ごとに温泉マークが掲げられている。自衛隊のパレードも温泉マーク。オリンピックも温泉マークが翻る。そして石坂さんは、のたまわく。

「うーん、愛国心が湧いちゃうなあ」

「いかんがにゃ、愛国心が湧いちゃ」と私は叱りました。だって、石坂さんは、「週刊金曜日」の編集委員ですよ。社会派マンガ家ですよ。反体制・革命マンガ家ですよ（そこまで言っちゃいかなかな）。

ともかく、この日本を批判し、9条を守り、平和日本を守るんでしょ。愛国心よりも世界平和です。国際連帯です。愛国心なんて狭いことを考え、そんなものにかかずに合ってるから国家エゴが生まれるんです。だから、戦争が起こるんです。国旗や国歌を作って、そのもとに結集しよう、まとまろう…という気持ちが戦争を起こすんです。むしろ、外に目を向けましょう。国境のない時代は来ます。そのためには、まず、日本が国旗、国歌をやめろ！と宣言したらいい。9条を世界に広めるだけでなく、「No!国旗、No!国歌」運動を強力に広げるのです。それでこそ「世界は一つ」「世界平和」の

礎（いしずえ）になれるとです。

…と、私は大演説をしちゃいましたよ。それに、自衛隊の戦車に温泉マークを付けて喜んでちゃいけません。「憲法違反の自衛隊は廃止だ！」「国旗・国歌も廃止だ！」と叫ぶべきですよ。そして、「愛国心」もいらんとですよ。

(4)国歌「いい湯だな」を強制されたら恥ずかしいやね

そうそう、ビアスが『悪魔の辞典』を書いている。それを筒井康隆が訳してる。さらに、筒井は『乱調文学大辞典』も書いてる。じゃ、私も書こうかと、密かに準備している。だいたひかるは「プレイボーイを読んでも人にプレイボーイはいない」と名言を吐きやしたが、それにならって私も書きますよ。

「愛妻家だと言う人は皆、ただの恐妻家だ」

「俺は愛国者だ、と言う人に愛国者はいない」

「バージンロードを歩く花嫁にバージンはいない」

「家庭崩壊してる人は何故か年賀状にだけ、一家の写真を載せる」

うん、いいね。それに、「ペン先に思想は宿る」とか、「右翼と左翼のテロの違いは、ミニスカートとキュロットの差だ」と、名言が多い。そういう名言集だけを集めて本にするか。あるいは、アイウエオ順に「辞書」にするか。今、迷ってるところだ。

さて、石坂啓さんだ。この人は、いろんな集会でこの革命的提言を披露している。日比谷で「個人情報保護法案反対集会」をやったあと、銀座のビヤホールで打ち上げがあった。その時も、酔っ払って、テーブルに上って大演説をしていた。「温泉は日本中、どこでもある。日本の文化だ。これこそが日本だ。その日本を表わすのに温泉マークほどいいものはない！」と。

でもあんまり賛同の拍手はなかったな。「早く逃げ！」と場違いな掛け声がかかっていたが（何でも酔うとすぐに脱ぐ癖があるんだそう。いい癖だ）。

そのうち、本質的・思想的な野次も。「でも、沖縄には温泉がねえぞ！」。なるほど。他にも温泉のない県はあるのかもしれない。まさか温泉の出ない県は切り捨てるわけにもいかん。無理矢理、掘って温泉を出すか。火山列島だから、とにかく掘りゃ出るやろう。

そうそう、参加していた女子大生が、言っていた。

「でも、卒業式で、“いい湯だな”なんて歌うの、いやだなー」

これには笑った。女子中学生も、女子高生も、“ババンババンバンバン、いい湯だな”なんて、ちょっと恥ずかしい。恥ずかしい人々だ。でも、まさか〈強制〉はしないんだろうよ。でも決まったら、ムキになって押しつけたりして…。おー、こわ。

さらに、もっと本質的な問題だけど、「温泉マーク」というと、古い世代の人々には、「あっ、連れ込みホテルのマークか」と思うだろう。今は「連れ込みホテル」なんて死語ですね。ラブホテルとか、ファッションホテルとか呼ばれちよります。でも、やってることは変わんない。ちっともラブはないし、ファッションはない。

「ラブホテルにラブはない」

「ファッションヘルスにヘルス（健康）はない」

ともかく、昔は、「連れ込みホテル」「連れ込み旅館」と言われ、必ず温泉マーク(?)が付いとった。あれは、その筋からのお達しで、強制的に付けさせられたんやろか。「普通の旅館」と区別するために。だから、年配の人達にとっては「温泉マーク」は「逆さクラゲ」と言われて、ズバリ、「性交」のことだったんですよ。

まあ、日本は、「古事記」を見ても、アバウトで、セクシーな国やったから、「温泉マーク」でもいいのかもしれないけど。

ここで小噺。医者がインターンに聞いた。「女性の虫垂（盲腸）はどっちにあるかね。右かね左かね」

男でも女でも盲腸は右だ。ところがインターン、「左です」と答えた。医者が顔をしかめるのを見て、言い直した。

「すみません。入って左です」

これは、野内良三の『ユーモア大百科』（図書刊行会）に出とった。国旗が「温泉マーク」になったら、この手の話も「国策」として量産されるであります。そうそう。石坂さんはマンガ家の持病でギックリ腰になった。そんで整体にいった。そしたら何と乳まで揉まれたそう。阿呆ですね。黙って、やられているなんて。（ちゃんと本に書いとりました！デマじゃなかと）。

私も今書いてる本が出たら、秋田の乳頭（にゅうとう）温泉に行きましょう。乳頭を連れて。しかし、変な名前ですよ。お湯が乳色になっている。それでだと思ったら、カナダ在住のアーノルド佐藤さんはそれだけじゃない

と言っていました。佐藤さんはカナダで温泉を掘ってる会社の社長だ。時々、日本に帰ってきて、全国の温泉を調査・研究している。「乳頭山という山が近くにある。その山はちょうどおっぱいのような形をしている。さらに頂上に、小さく盛り上がったところがある。まるで乳頭だ。そう思って村人たちは昔々から（多分、万葉の時代から）そこを畏敬の念を込めて「乳頭山」と呼び、近くの湯を「乳頭温泉」と呼んできたそうじゃ。だから万葉集にも載ってる（に違いないと言う）。日本昔話だね。温泉マークが国旗になったら、この乳頭山は「お国の山」だ。富士山じゃなくて、こっちの方が日本を代表する山になる。めでコイ、めでコイ。

【だいありー】

(1) 2月20日(月) 早朝の新幹線で名古屋に。アムネスティの人々4人と名古屋拘置所に。小林正人さん(30才)の面会。野村秋介さんや僕の本を随分、読んでるという。「鈴木さんにならって月に30冊読もうと思ったがムリでした。でも月に10冊は読んでます」。偉いですね。自分の体験や反省を込めて、本を書いたらいい。見沢知廉さんを目指しなよ、と言いました。

そのあと、名古屋城の隣のレストランで、名古屋名物「みそカツ」を頂きました。おいしかったです。夕方、帰京。夜、ロフトに行きました。漫画家のパロン吉元さんが出てたので聞きに行ったんです。ビッグ錠さん、日野日出志さんとも会いました。「鈴木さんには何回も会ってるよ」とお二人にも言われました。

(2) 2月21日(火) 午後、講演会の打ち合わせ。大学で面白い討論会と講演を企画している。それも1ヶ月にわたって。その相談でした。

夜は志の輔さんの落語会。面白かったです。

(3) 2月22日(水) 7時から一水会フォーラム。高田馬場のシチズンプラザ。古賀俊昭氏(東京都議会議員)の「皇室典範改正阻止」。議員の立場からの話を聞いてとても勉強になりました。

(4) 2月23日(木) 朝10時、重信房子さんの判決。何と懲役20年の判決。重い。大変だ。塩見さん、植垣さん、PANTAさんらが傍聴に来ていた。

午後3時から河合塾コスモ。

(5) 2月24日(金) 夜、「朝まで生テレビ」。久しぶりに出た。この前出たのは04年3月26日の「激論! オウム・連合赤軍は終わらない!」だったか

ら、2年ぶりの朝生だ。「激論！天皇」だ。大変だった。疲れた。

(6) 2月26日(日) 夜7時から沢口ともみさんを偲ぶ会。大勢の人が集まり、沢口さんの話をし、偲びました。

【お知らせ】

(1) 2月28日(火) 6:30p.m. 文京シビックホール（小ホール）。シンポジウム「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」

(2) 3月4日(土) 夜10時～12時。衛星チャンネル「朝日ニュースター」。

「テレビウワサの真相」で「女性女系天皇に傾く平成ニッポンの事情」

岡留安則、佐高信、小沢遼子、松崎敏弥、そして私も出ます。「朝生」と違って人数も少ないし、ゆっくりと話し合えると思います。木村三浩氏もビデオ出演するそうです。

(3) 3月14日(火) 7:00p.m. 高田馬場シチズンプラザ。高森明勅氏（拓大客員教授）の天皇論の講演です。

(4) 5月15日(月) 7時から。角筈区民センター。「笑いとバトルのスーパーライブ」。矢崎泰久、山根二郎、そして私です。三人だから、ゆっくり話し合えるでしょう。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年 2004年 2005年
2006年

今週の主張 3月6日 重信房子さんに判決 ＝革命と民族と歌と＝

(1)何とも重い判決だ。懲役20年なんて

「懲役20年」か。重たいな。法廷の傍聴席から「エッ」という驚きと、「フーツ」という溜息がもれる。新聞記者はバタバタと立ち上がり、外に出る。社に第一報を入れる為だ。

2月23日(木)午前10時から東京地裁で重信房子さんの判決が言い渡された。104号法廷で。一番大きな法廷だ。でも、日本赤軍最高幹部・重信房子の判決だ。傍聴希望者も全国からドッと押し寄せるだろう。マスコミも来るだろう。抽選だから、1人入るためにマスコミは10人以上の「並び屋」を雇うだろう。そうしたら、とても入れないな。でも、行くだけ行ってみるか。と思った。

ところが何と、抽選はない。早い者順だ。僕は8時45分に着いた。1時間前に行ったのだ。そしたら、悠々入れた。足立さん、塩見さんも前の方に並んでいる。「傍聴券は60枚ありますので全員入れます」という。PANTAさんも後から来た。私が佐多稲子のプロレタリア小説「時に佇つ」を読んでたら、「おっ、ノルマですね」と声をかけられた。その後、連赤兵士の植垣さんも来た。

だから、思いがけず傍聴できた。60人以上いたら、勿論、抽選だったろうが、それにしても、ちょっと淋しい。「よど号」の田中義三さんの裁判の時は、毎回、抽選だった。だから、どうしても入りたい時は、自分で「並び屋」のバイトを5人ほど雇った。1人5千円として2万5千円の出費だ。でも、それほどしても入りたい時はあったのだ。田中さんは「懲役12年」の判決を受け、今は熊本刑務所にいる。中では図書係をやってるそう。読書家

の田中さんには最適の仕事だろう。

さて、重信さんの判決だ。10時に始まるやいなや、「主文」といって「懲役20年」を言い渡し、それからゆっくりと判決理由を読み上げる。11時半まで、1時間半も、ただただ読み上げる。

検事求刑では「無期懲役」だった。でも罪一等を免じて20年ということか。しかし、担当の村上博信裁判長は、やたらと高圧的だ。「罪人を裁いてやる。罰してやる」という気持ちが露骨に出ている。

重信さんが罪に問われたのは、1974年のオランダ・ハーグの仏大使館占拠事件を指揮した容疑だ。その時、重信さんはそこにいなかったし、指揮も、共謀もしていないと弁護側は無罪を主張していた。当時、協力関係にあったPFLPの作戦の一環として和光たちが実行した作戦だった。「重信は関係ない」と、PFLPのライラ・ハレドも来日して証言している。

しかし、検察側は、何としても重信さんを「主犯」にしたい。そして、共謀の事実は立証できないまま、「無期」を求刑し、裁判長は「20年」を言い渡した。ひどい話だ。この時、日本赤軍はまだ出来てない。PFLPの協力のもとに日本人が作戦を行った。PFLPの活動の一環だ。重信さんは全く、関知していなかった。

それなのに裁判長は、「詳しい内容や時期や場所は明らかではないが、共謀を遂げていた」と言う。又、

「組織体制を十分確立していなかったとしても、重信被告はグループの中核的な立場にあった」と言う。

ひどいね。こんな抽象的な推定だけで「20年」も人間をぶち込むのかよ。

「国策」判決だ。世界中に日本赤軍の名が轟いた。政府としては面子を失ったと思い、その復讐の念もあるのだろう。そして重信さんは日本赤軍の中心メンバーだ。この代表的人物に重い罰を与えることで、国家の面子を保とうとしているのだ。

でも、実は、日本赤軍の活躍によって、アラブ世界では日本は評判がいい。「やはりサムライの国だ」と評価している人々が多い。イラクに行った時も、皆、(日本赤軍の)岡本公三の名を知っている。「サムライ」「カミカゼ」と口にする。日本ではマスコミは「テロリスト」といって批判するが、アラブでは彼らの活動をちゃんと理解し、支持している。

いや、70年代は、日本のマスコミも、評価してるところがあった。それが今や、「右傾化」「保守化」の中で、マスコミも皆、政府の言いなりだ。そし

て、「過激派」「テロリスト」として攻撃する。

「判決20年」を報じる産経新聞（2月24日付）は、すぐ隣りが、「日本赤軍、支援組織先細り」「法廷闘争 かさむ負担」と出ていた。「支援者の高齢化など、国内支援組織は維持がやっとの状態で、テロ組織の“落日”は著しい」

「テロ組織」と書いてるよ。ひどいね。でも、どこの世界も高齢化・少子化なんだ。じゃ、どんどん子供を生んで「少年革命軍」を作ればいい。実際、この日は重信房子さんの娘で、美人の重信メイさんも来ていた。彼女が「重信房子」を襲名すればいい。あ、本人がいるから無理か。

重信房子さんは今、60才だ。「懲役20年」だと、出てきたら80才だよ。残酷だ。未決が算入されるが、それでも15年以上だ。この日、さっそく控訴すると言っていた。あくまで無罪を主張して闘う。

(2) 「まつろわぬ意志 ふつつつと湧く」と短歌を

そうそう、産経新聞の記事だが、さらにこう書かれていた。

〈今月11日。東京・新宿のライブハウスで判決を控えた重信被告の支援集会が開かれた。参加者によると、集まったのは過激派活動をしていた関係者や、重信被告の明大時代の友人ら約百人で、高齢化が進んでいるという。

治安当局幹部は「法廷闘争を維持するための経済的負担が大きく、党勢拡大に向かう余力はないだろう」と指摘する〉

文中、ライブハウスというのはロフト・プラスワンだ。集まった人は別に過激派や明大の友人だけではない。OLやサラリーマン、ライター、元ストリッパーなど一般の人の方が多かった。まずいやね。見もしないで、こんなことを書きちゃ。「目撃もしないで、南京事件を言っちゃいけない」と産経は言ってんだから。

まあ、高齢化が進んでるのは事実だけどね。日本赤軍関係では6人が国際手配されている。この人達も高齢化だ。一覧表が出ていた。

岡本公三（58）。奥平純三（57）。佐々木規夫（57）。大道寺あや子（57）。仁平映（59）。坂東国男（59）。松田久（57）。

坂東は連合赤軍だ。佐々木、大道寺は、連続企業爆破の「東アジア反日武装戦線」のメンバーだ。日本赤軍のハイジャックによる人質奪還作戦でアラブに行ったのだ。植垣さんも奪還の名簿に入っていたが、行かなかった。行

かなくてよかった。行ったら、今でも「国際指名手配」で、日本に帰れない。植垣さんは刑を終え、今は静岡でスナックをやっている。心の優しい、思いやりのある中国人の美人妻との間に、かわいい男の子もいる。「高齢化・少子化」の壁を身をもってぶち壊している。偉い。これからも革命家の後継者をどんどん産むだろう。産めよ、増やせよ、革命家だ。

「若い時はいいけど、60過ぎてからの刑務所はキツイですよ」と植垣さんは言っていた。本人は27年間も刑務所にいた。大変だ。でも、若いから耐えられたと言う。「死ぬまで出さないつもりか」と怒っていた人もいた。このあと弁護士の記者会見、それから植垣さん、PANTAさんと、地下の食堂でご飯を食べた。

「その前に郵便局に行かなくちゃ」と植垣さん。「又、強盗するの？」なんて失礼なことを言ってた人もいた。ご飯を食べたら、私は帰った。学校がある。植垣さんも帰った。「子供を風呂に入れなくちゃ」と言う。「帰らないと女房にぶっとばされる。総括だよ」と冗談を言っていた。あんな優しい美人妻がそんなことをするはずはない。あくまで冗談ですよ。

「あっ、バロンさんの絵を有難う」と言っていた。「柔侠伝」を描いた漫画家・バロン吉元さんと僕は最近、二度会った。僕は「柔侠伝」の愛読者で、随分と影響を受けたが、植垣さんもそうだ。だから、静岡に出したスナックの名前も「バロン」にした。「じゃ、バロンさん、植垣さんと三人でロフトでやりましょうよ」と言ったら、「ぜひお願いしますよ」と言っていた。だから、ロフトの人。見てたら、お願いしますよ。

さて、重信さんの判決だ。11時半から、弁護士が記者会見。「許せない。全く立証も出来ないくせに20年はひどい。控訴します」と言っていた。娘のメイさんは、「今の価値判断で30年前の時代全てを裁き、断罪しようとしている」と言う。又、「母が捕まった時、親指を立てガッツポーズをしたことを“英雄気取りだ”と批判したマスコミがありました。間違ってます。支援して下さった人々に、“負けません。頑張ります”と伝えたのです」と言っていた。そういえば、この日、判決の後も、親指を立てていた。挨拶したら、「あっ、鈴木さん」と言っていた。前の公判の時も、全く初対面なのに、すぐに分かったようで、「鈴木さん、ありがとう」と言われた。ジーンと胸に来た。

そうだ。驚いたことがある。記者会見で弁護士が、「実は、重信さんから託された歌があります」と言って披露する。判決を受けて、法廷ですぐに歌

を作り、弁護士に手渡したのだ。それは…。

**判決は終わりにあらず 始まりと
まつろわぬ意志 ふつつつと湧く**

学校に行って、生徒に、この短歌を紹介してやった。「新左翼でも短歌をよむんですか？」と聞く。短歌や俳句は日本の文化・伝統だ。右翼がよむのは分かるが、新左翼はそんな日本的なものに反撥するのではないか。そういうのだ。ウーン、難しい。でも、最近は、連赤の坂口弘、革マルの黒田寛一にしる、短歌をよむ人はいる。

「あまりうまいとは思わないけど、闘う意志は伝わってきますよね」と生徒。僕は、うまい歌だと思うけどな。でも、受験で毎日、万葉集や古今集を讀んでる目から見ると、レベルが下ると思うのか。

そうだ。重信さんは、確か、歌集も出してるはずだ。それで翌日、紀伊国屋で探したらあった。喫茶店に入って、一気に讀んだ。

重信房子歌集『ジャズミンを銃口に』（幻冬舎・1400円）だ。

帯にはこう書かれている。

**〈聴けよ、かつての戦士たち！
または決意したる人々よ。
敗れざる者が獄中から歌いし
美しき魂の旋律を----。〉**

そして、代表的な歌が一首。

**草原に身をひるがえし 蝶を追う
決死の闘い ひかえし君は**

(3)血盟団の父親を歌ったのがいいね。ジンと来ますよ

讀んで驚いた。えっ、革命の闘士がこんな歌を。と思うのが多い。「革命版・俵万智」といった印象の歌も多い。歌でなければ表現できない革命家の気持、愛、闘いがあったのかもしれない。「手記」だと、余りに生々しくなる。あるいは、裁判の「証拠」とされては困る。その点、歌なら、その形式の中で自己を自由に表現できる。そう思って歌をよみ続けたのかもしれない。

この歌集には大谷恭子さん（弁護士）の「解説」と「あとがき」もついている。重信さんの闘いの軌跡も分かる。思いつくままに、いくつか紹介してみよう。

からからの喉から愛を語るなど

よくやったねと今なら思う

（ウーンやっぱ、俄万智だよと私は思う）

愛があり心臓の音ドタドタと

聞き合いながら星を数えた

（ロマンティックだね。手記や小説では、やはり、恥ずかしい。歌でよむしかない世界なのか）

銃口にジャスミンの花 無雑作に

挿して岩場を歩きゆく君

（これが歌集のタイトルになったんだね。竹中労は「汝、花を武器とせよ」と言った。喜納昌吉は「すべての武器を楽器に」と言った。銃を捨て、闘いをやめて、花を愛し、平和に暮らそうと言ったのだ。毛沢東は「革命は銃口から生まれる」と言った。重信さんは、その闘いに花を添えてみた。銃口にジャスミンを、と。ジャスミンって花だったんですね。知りませんでした。と、ジャスミン茶を飲みながら私は驚きました）

コクリコの岩場に咲きし朱の色は

君の怒りの届きし証（あかし）

（コクリコも花だ。日本名・ひなげしだ。与謝野鉄幹・晶子夫妻がヨーロッパ旅行をした時、「…君もコクリコ、吾もコクリコ」と詠んだ。2、3年前のこの「主張」でも紹介したから、クリックしてみなせえ。重信さんも、これが頭にあって出た歌やろう）

つつましく家にひかえるおみならが

戦士となりてカラシニコフ撃つ

（「おみならが」なんて、日本の戦時中の愛国婦人会の歌に出てきそう。短歌という形式を借りることによって、日本的な情緒もぐんと引き寄せられるのではないか。詩歌の霊性が乗り移るのだ。ちょっと怖い）

一本のローソクのもと肩を組み

インター歌いて戦線に就く

(詩歌・短歌というのは日本の古来からの表現形式だ。万葉の時代から、日本をたたえ、天皇をたたえる歌も多い。日本主義の土壌だと思ってきた。しかし、違う。と重信さんは思うのだろう。そういえば、石川啄木も革命的な歌をよんでるし、他にもプロレタリア歌人はいくらもいた)

「地獄でまた革命やろう」と先に逝き

彼岸で待ってる君は二十六歳

(ウーン、映画にした方がいい。そんな情景だ。足立正生は今、岡本公三の映画を撮ってるそうだ。重信も出てくるだろう。重信役は荻野目慶子がやる。という話を聞いた)

団交の敵と味方に分かれたる

師と再会の獄の七月

(歳月を感じますね。昔、学生運動をやってた時、「反動教授め!」「自己批判しろ!」と吊るし上げたんでしょ。その師が今、面会に来てくれる。「あの時はすみませんでした」「いやいや君達もよく闘ったよ」と恩讐を超えた対面だったのでせう。美しいです。涙も流したでしょう。乃木大将とステッセルのようです)

インターは一人歌えばなおさらに

さびしきものと独房で知る

(そうですね。大衆で歌うから意気が上がり、闘志が湧くんです。独房で一人で口ずさんでは、落ち込むばかりです。塩見さん。ハイジャックして救出して下さいよ)

少しだけ意見のちがうそれだけで

許し合えない若き日のあり

(こういう本音を言えるのはいいですね。昔なら絶対に言えなかったでしょう。話し合ってみたいですね)

催涙ガス除ける レモンを噛みながら

笑ったあなたは「連赤」で死す

(かなしいです)

この歌集の後半には、お父さんを歌ったものがかなりある。お父さんは、重信末夫さんといい、戦前の右翼活動家だった。僕は、一度お会いし、インタビューしている。井上日召の「血盟団」に属していた。前回の裁判の時、

房子さんは言っていた。「父は愛国心や民族主義を言っていたが、学生の時
は理解できなかった。反動だと思って。しかし、今は理解できる。民族主義
に根差した革命でなくてはならない。と、父は娘をどこまでも信じ、誇りに
思っていた。自分の出来なかったことをやっていると胸を張っていたのだろ
う。では、その父をうたった歌を。

祖国発つ朝にかけたる赤電話
おだやかな父の声きこえる

世界中敵になってもお前には
我々が居ると父の文あり

まっとうに生きてきた自負 何よりも
告げた父は コスモスが好き

哀しみと自信も失せしあの時に
父の挫折を遠く思いし

獄窓の秋空見れば甦る 父のハモニカ
「チゴイネルワイゼン」

父を語るわれの思い出 すこしだけ
理想化してると姉は語りぬ

散る銀杏踏みしめていく風呂帰り
父と私の長い影二つ

(お父さんを詠んだ歌は、どれもいいですね。でも、お父さんの発言はマ
スコミにはほとんど出てない。マスコミの取材にも応じない。唯一（といっ
てもいいだろう）、僕と久保内君の取材に応じてくれた。それは『右であれ
左であれ』（エスエル出版会）に入っている。あの時、取材しておいて本当
によかったと思う)

【だいありー】

(1)2月26日(日) 佐藤優『国家の崩壊』（にんげん出版・1680円）が発売
になった。これは実にいい本だ。ソ連崩壊を当時、ソ連にいて目撃した佐藤
が語る。宮崎学が聞き手だ。

「リーダーがアホだと国家が壊れる。巨大帝国＝ソ連崩壊の元凶はリスト

ラ構造改革だった」

この日の朝日新聞の朝刊、そして翌27日(月)の産経新聞に大きく広告が出ていた。そして5人の「推薦の言葉」が出ていた。紹介しよう。

「こんな情報プロを追い出してしまって日本の対露外交はどうなるんだ？」（高野孟）

「巨大帝国ソ連の崩壊の裏にこれだけ複雑な力学があったとは。現認者の語る秘話の迫真性は類を見ない」（呉智英）

「佐藤優は危険な予言者だ。恐い本だ。覚悟して読め」（鈴木邦男）

「『神の眼』という言葉思い出した。凄まじい観察眼だ」（魚住昭）

「ソ連崩壊の理由（ワケ）が、はじめて納得できた」（田原総一郎）

この原稿（というか、推薦の言葉）を頼まれたのは2月上旬。×切は2月10日。そして2月26日に載る。20字～30字という注文。それはかなり難しい。やってみて分かったが書評より大変だ。本は面白かった。ルノアールで一気に読んだ。3時間ちょっといた。コーヒーを飲み、こぶ茶を追加した。メモをとりながら読んだ。興奮した。しかし、それを20～30字で、どう伝えられるか。もしかしたら、他の4人も同じような言葉を書くかもしれない。だから、重複しないように三案書いて出した。

「朝日」「産経」に載った推薦の言葉を見て、「読まないで書いたんじゃないの」と言ったアホがいた。どうせ文章は下手だし未熟だ。でも、必死に読み、メモを取って読んだ。この三つの「案」を見たら、それが分かるだろう。「三つの案」を紹介したいが、これはやめよう。「企業秘密」だし。佐藤優さんは今まで、『国家の罨』『国家の自縛』と自分のことを書いてきた。しかし、今度はソ連のことだ。しかし、他のことを書きながら、かえって〈自分〉が一番出ることもある。それがこの本だと思った。ソ連について、ロシアについて、僕らは何も知らなかったんだと思い知らされた。嘘だと思ったら本を買ってみな。「推薦の言葉」に偽りがあると思ったら、私が本代を返す。それだけ自信を持って薦められる。

(2)この日、2月26日(日)の7:00p.m.から新宿で「沢口ともみさんをしのぶ会」。60人が集まった。沢口さんがイラクに行った時に、「被爆二世」の自らの体験を語り、アメリカへの抗議を表わした。その時の演説原稿がこの日、朗読された。感動的だった。皆、涙を浮かべて聞いていた。本当に惜しい人をなくした。

(3) 2月28日(火) 6:30p.m. 文京シビックホール (小ホール)。シンポジウム「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」。超満員。熱気ある集会だった。いろいろ勉強になった。

(4) 3月1日(水) 図書館。柔道。

(5) 3月2日(木) 河合塾コスモ。長い間、千駄ヶ谷にあったが、4月から新宿新校舎に移る。それで、千駄ヶ谷にお別れする会。「思い出を語る」ゼミと銘打って、生徒、OB、スタッフなどが集まり、語り、飲み、食べました。

(6) 3月3日(金) 6:30p.m. 全日空ホテル。「朝まで生テレビ！ 20周年。感謝の夕べ」。凄い人だった。日本の言論界、マスコミ界の主だった人々が全て集まったかんじだった。又、「朝生」プロデューサー、日下雄一さんが亡くなって一ヶ月。この日は、日下さんを偲ぶ会にもなった。

(7) 3月4日(土) 10:00p.m.~12:00。衛星チャンネル「朝日ニュースター」。「テレビウワサの真相」で「女性女系天皇に傾くニッポンの事情」。岡留安則、小西克哉、佐高信、小沢遼子、松崎敏弥、そして私が出ました。かなり話すことが出来たし、有意義な話しになったと思います。小沢さんは「朝生」同様、過激でしたね。木村三浩氏もビデオ出演しておりました。

【お知らせ】

(1) 3月14日(火) 7:00p.m. 高田馬場シチズンプラザ。高森明勅氏 (拓大客員教授) の天皇論の講演。2月24日(金)の「朝生」で女帝論を主張しておりました。天皇問題では一番詳しいし、論客です。ぜひ、お聞き下さい。

(2) 3月19日(日) 5:00p.m. 新進気鋭のライター、中野ジロー氏初書き下ろし『刑務所ぐらし』(道出版)出版記念パーティ。中野さんを知る人も知らない人もどうぞいらして下さい。塩見さんとは獄中で一緒だったこともあるそうです。発起人代表は森哲郎、発起人は塩見孝也、鈴木邦男です。場所は新宿の「台湾楽楽一館ダンスホール」です。tel 03(3204)4881。会費は5千円です。

(3) 5月15日(月)

7:00p.m. 角筈区民センター。「笑いとバトルのスーパーライブ」。矢崎

泰久、山根二郎（弁護士）、そして私です。

(4)ネーキッドロフトで保坂展人さん（社民党）が毎月トークをしてるんですね。3月17日(金)は安田好弘（弁護士）と「死刑廃止は可能なのか」。4月7日(金)は栗本慎一郎氏と「自民党とミミズ」。これは面白そうだ。私も聞きに行くつもりです。

(5)朝日新聞（2月28日・夕刊）の「今号の論考」で「ベストテン」に私の「愛国者はそんなに偉いのか」（「論座」3月号）が入ってました。嬉しかったですね。

(6)「アサヒ芸能」（3月2日号）の「皇太子を悩ます男子出産・離婚圧力の重大局面」に私のコメントも出てました。トリで。

(7)3月7日(火) 月刊「創」（4月号）発売です。私は連載で、グリーンピースのこと。そして若松孝二さんのことを書きました。3月11日(土)「月刊TIMES」（4月号）発売です。三浦重周氏の自決と昔の学生運動について書きました。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

年

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

今週の主張 3月13日 今週は理屈っぽく。「反近代の思想」についてじゃ

(1)未来を語る近代主義者は、実は過去を語っていただけだ

「現代日本思想大系」（全35巻・筑摩書房）の第32巻は「反近代の思想」になっている。編集・解説は福田恆存（つねあり）だ。「反近代」の思想家として保田与重郎、唐木順三、小林秀雄、永井荷風などの論文が紹介されている。巻頭に福田の「解説」がある。のっけから驚いた。まず、こう書いている。

〈反近代主義者の「反」は「近代」の否定を意味するのか、それとも「近代主義」の否定を意味するのかという問題がある。前者なら、近代精神そのものへの懐疑という本質的な意味があるし、後者なら、主として日本のいわゆる「近代主義」に対する反対という意味に限定されて用いられる〉

なるほどと思った。なかなか緻密だ。第一の場合は、ヨーロッパの近代精神そのものがその成立以来はらんでいる弱点や危機を正当に直視しようとする態度だ、と言う。

第二の場合は、日本における近代主義のきわめて軽薄な風潮にたいする批判である。

〈日本の近代主義は、歪んだ過去の因襲や社会の不合理と戦うことを旗じるしにし、ヨーロッパの近代をその規範として美化し、絶対化してきた〉

その通りだ。明治維新以降の日本は、近代主義を〈国是〉として突き進んできた。欧米列強に追いつくことだ。そのために、富国強兵だったし、外国に馬鹿にされないように、憲法をつくり、立憲君主制を定め、国旗、国歌もつくった。ひたすら〈近代〉を見て驚進した。明るい未来に向かってひた走ってきた。しかし、福田は、「はたして前を見ていたのか？」と疑問を提

起する。エッ？と思った。

〈文学、思想、社会問題の各分野にみられる明治以来のこの浪漫的革新思潮は、未来を美化していたからといって、かならずしも真に未来へ前向きの姿勢をとっていたとはいえない。

未来を語ってはいたが、その眼はつねに過去だけしか眺めていなかった。過去を批判し、否定してただけだった。反封建とか自由とか進歩とか、標識はいろいろあったが、彼らの未来記はすべて裏がえしにされた過去物語にすぎぬ)

驚いた。アッと叫んだ。そうだったのかと気付いた。未来を見ているようで、実は過去しか見てない。だから、こんなものはすぐに行き詰まる。そう言っているのだ。これは40年近く前に書かれている。僕は当時、読んでいた。理解したつもりだった。だが、本当には理解していなかったのだ。今、全く新たに読む感じがする。

自由、進歩、革命…と言いながら、本当は過去しか見てない。左翼にも言える。先の戦争を否定し、批判し、罵倒し、それで進歩的であり、「平和と民主主義」だと言ってきた。しかし、本当は未来への展望は何もない。だって、世の中が、又、戦争の時代に戻ってきたからだ。アメリカのイラク戦争がある。北朝鮮の拉致がある。中国、韓国は靖国問題で日本を批判し、反日暴動も起きている。

世界はちっとも進歩してない。ちっとも「平和と民主主義」に進んでいない。過去を否定しただけでは何も生まれなかった。いや、否定の仕方がおかしい。やりすぎだった…と、今、揺り戻しが起きている。歴史の見直しが迫られている。今日のそんな状況を福田は予言していたのだ。

又、革命を語る人々が、未来に夢を持てなくなった。資本主義は倒れ、社会主義、そして共産主義になると言っていた。しかし、もうこんな〈夢〉は持てない。そして、何としたことか、〈否定した過去〉にすがろうとしている。つまり、「縄文時代は原始共産制だった」「そこにこそユートピアがあった」と。しかし、これも虚しい夢だ。塩見孝也さんは、「縄文時代は階級もなく、搾取する人間もいなかった。殺し合いもなかった」とユートピア世界を描く。しかし、最近の研究では、階級も、搾取もあり、私有財産もあり、勿論、争いも、殺し合いもあったといわれている。

未来に夢を持てないからといって、過去に投影してみても同じことなのだ。「明るい未来」を信じて、過去を否定するのはいい。しかし、「明るい

未来」にも、〈影〉があるのだ。それを気付かない近代主義者は愚かなのだ。福田はその辺のことを、続けて、こう言っている。

〈(近代主義は…) 近代という時代が行き着くさきにたちいるであろう不安や恐怖は少しも予感されていない。社会にのこっている封建的な遺風や意識を否定することには果敢であった近代主義者たちも、その頃すでに、ヨーロッパにおいては近代精神そのものが懐疑の俎上にのせられていた事実には全く気がつかなかった。

と同時に、彼らによってヨーロッパの近代がいったん目標化されてしまうと、近代精神というものは、きわめて単純な形態をした理想の目印、信仰の対象と化してしまう〉

そうか、近代主義というのは「信仰」だったのか。信仰とまでは思わない人も、「理想の目印」にした。

こう見てくると、福田恆存は、かなり右派の論客だと思うだろう。しかし、違うのだ。「近代主義が悪かった。ヨーロッパを目標にしたのが悪いのだ。やっぱり日本が素晴らしい」と言ってるわけではない。日本の〈過去〉に回帰すれば解決だと言ってるのではない。それでは、過去を否定し、過去にばかり目の向いている近代主義者と同じことになる。福田はヨーロッパ思想のいいものは認める。そして、その問題点をも指摘する。決して、単純な「国粹主義者」ではなかった。

(2)謎が解けた。37年前、福田恆存にやり込められた理由はこれか

学生時代はこのことに気付かなかった。左翼に反対してる人は皆、右派であり〈仲間〉だと思っていた。保守主義も、自由主義も、国粹主義も、超国家主義、国家社会主義も、大アジア主義も、そして反近代主義も皆、同じだと思っていた。いや、少し位の差異はあっても、「反左翼」であり、この日本が好きなんだと思っていた。

実際、福田恆存は、当時、左翼と最も先鋭的に闘っていた。胸のすくような論文を次々と書いていた。

「左翼にとって論争しても勝てない随一の保守知識人」と磯田光一（評論家）は言っていたが、その通りだった。ベトナム戦争の時、「アメリカを孤立させてはならない」と「中央公論」に書いた。又、『平和論の進め方についての疑問』でも左翼の平和論を徹底論破した。誰も言えないことだ。左翼全盛で、「ベトナム戦争反対」「アメリカはベトナムから出ていけ！」と言

われていた時だ。そのために全国の大学ではストライキがやられていた。そんな風潮の真最中で、こんなことを言ったのだ。しかし、左翼は福田とだけは論争したがる。誰も攻撃しない。

又、福田は、『私の国語教室』を書く。正漢字・正假名遣（歴史的仮名遣）の正しさを主張していた。さらには、『当用憲法論』という刺激的な論文を発表する。今の憲法は当用漢字と制定過程が似ている。だから「当用憲法」だ。この当用憲法を破棄し、帝国憲法（明治憲法）を復元させて、その後には改正すればいいと言ったのだ。昭和40年（1965年）に言ったのだ。今から40年前だ。「憲法改正」を言うことすらタブーだった時代だ。それなのに、「明治憲法復元改正」を主張したのだ。

福田恆存については猪野健治編の『右翼民族派総覧』（二十一世紀書院）が詳しい。

実は、今年の1月18日の一水会フォーラムに福田恆存の息子さんの福田逸さん（明治大学教授）が来て講演してくれた。「日本を保守するもの＝天皇制と国語」のテーマだった。終わってから、「お父さんには随分とお世話になりました」という話をした。その時のことは一水会機関紙「レコンキスタ」（2月1日号）に詳しく書いた。

そこにも書いたが、「厳しい先生」だった。左翼を批判し、平和論を論破し、アメリカを擁護し、旧仮名を使っている。又、明治憲法復元論者だ。どうみても、右派の代表的論客だと思う。「我々の味方」だと思う。それで、何回か講演会や集会に来てもらった。でも、決して我々学生に媚びないし、迎合しない。これは意外だった。

少ないながら、右派の大学教授や評論家はいたし、そういう人達を訪ねていくと、皆、誉めてくれる。歓迎してくれる。「ほう、全共闘と闘ってんのか。偉いね。頑張れよ」と言ってくれる。「勇気があるね」「立派だよ」と言ってくれる。それに僕らも慣れ、甘んじていた。

ところが福田恆存先生だけは違う。「何で、全共闘と闘っているの?」「日本を守るためですか。じゃ、そんなに日本が好きなの?」と論争を吹っかけてくる。何だ、この人はと思った。未熟な学生相手に、からかっても仕方ないだろう。同じ味方じゃないかと、思った。さらにこんなことを言う。

「日本のものがそんなに好きですか。でも畳に正座するより、こうして椅子に座るほうが楽でしょう」

「新幹線に乗ってカンフォタブルと感じませんか。感じるでしょう」

と聞く。猫がネズミをいたぶるようだ。こっちは言葉に詰まり、何も言え

ない。37年も前のことなのに、「カンフォタブル（快適）と感じませんか？」という言葉だけは今も耳に残っている。「和魂洋才ですよ」とでも言えばよかったのか。と今になって思う。西洋の便利なものはどんどん取り入れる。しかし、心は日本精神だ。とでも言えばよかった。でも、そう言ったら又、「洋才を使いこなせる和魂が君達にあるのか」と突っ込まれただろう。

しかし、偏屈な先生だ。こっちは、先生の書いたものを読み、感動して、講演を頼みにきたのに。その学生に論争を吹っかけることはないだろう、と思った。赤坂見附にあった北野アームスという高級アパートに住んでいた。そこを訪ねた時に言われたのだ。

この福田恆存に論破された話を、ちくま書房の人とした。「あの時はまいりましたよ」とボヤきながら話した。そしたら、数日後、コピーを送ってくれた。「交通機関の便利・不便について書いてましたよ」と。エッ、僕らをいたぶった時と同じことを他にも書いてたのか。それが、初めに紹介した『反近代の思想』の解説だ。では、本題だ。交通機関の話だ。新幹線に乗って便利・快適と感じないか。という問題だ。

T・S・エリオットは、「文化とはわれわれが意識的にそれを目的にすることのできない唯一のものである」と定義したそうな。これは文化という概念の本質を言い当てた言葉だ、と福田は言う。さらにこう言う。

〈文化とは、その中にくらしているものには、必ずしも意識化されてはいないが、社会生活全般にしみわたっている「生き方」の様式のようなものである。社会や国家が、有機体としての統一をたもっているときの、一定の生の様式である。とすれば、文化とはあらかじめ計量したり目的にしたりできないものであって、標識や見取図をかかげて文化が目標されたときは、もはや文化が存在しないときである〉

近代化しようとし、西洋を目標とした日本は、その時、もう文化がないのだという。衝撃的な言葉だ。さらにこう言う。

〈こう考えていくと、文明開化以後の近代日本の歩みは、文化の喪失の歴史ではないか。われわれ近代日本人にとって、ここ百年というもの----いいかえれば日本が近代国家として封建的鎖国状態から解放されて欧米先進国の仲間入りをして以来----「文化」とは、つねに目標として眼の前にぶら下がっていたものではなかったか〉

そして、いよいよ交通機関の便利・快適の話に触れるのだ。

〈これまでに何度か書いてきたことだが、例えば交通機関を例にとると、われわれの祖先や父たちはかごや馬車が不便だからどうにかしたいという「内発的」な必要を感じて蒸気機関車や自動車を輸入したわけではない。蒸気機関車や自動車が輸入されてみてはじめてかごや馬車の不便を知らされたという具合である。いわば、西欧とは順序が逆であった〉

そうか。37年前に福田先生に言われたのは、そのことだったのか。でも当時は全く分からなかった。「これまで何度か書いてきたことだが」と、わざわざ言っている。この前、馬鹿な学生が来たが、あきれた。とも思っているんだらう

(3)いい本は皆、絶版になった。日本人の知性も良識も絶版になった

しかし、問題は、「交通機関」だけの話ではない。そこが福田恆存の凄いところであり、恐ろしいところだ。

〈交通機関というような文明の利器についてばかりでなく、政治について、芸術について、思想について、そのほかあらゆる文化現象について、この種のことが言えるからである〉

かごや自動車や新幹線のごとは、むしろ、どうでもいいんだ。もっと大事なことについて、我々は勘違いをしてるといふ。思想上の観念は、全て、西欧文化の息のかかったものだ。自由、進歩、ヒューマニズム、唯物論、階級闘争、国家、封建主義…と。

〈今日やや通俗化して私たちの間に用いられているこれらの概念は、いずれも西欧文化の観念体系の中では、それぞれ固有の歴史的背景をもち、相互につり合った関係をもっているが、ひとたびそれが日本に入ってくると、それぞれがたがいに関係のないバラバラの抽象体として作用し、無意味に衝突し合うという事態をまねく〉

つまり、西欧の観念は、歴史的な現実の中で、内発的な「必要」として生まれたものだ。それに対し、日本では外発的に入ってきた。切実な「必要」から生まれたものではなかった。言葉や概念だけを西欧からかりてきて日本の現実に当てはめたとしても当然ズレが生じる。現実を正確に説明する論理や方法は生まれてこない。福田は、そう言う。そして。

〈そういうことは原理的には最初からわかっていることである。にもかかわらず、学問や思想の実践の場で、そういう自覚をもって事に当る人はきわめて少ない。自動車やかごの例でしめした錯誤には気づいても、学問や思想の世界にある同じ錯誤には気がつかない場合が多いからだ〉

まさにその通りですね。私は、福田恆存は、かなり読んだつもりだったが、こうしてみると、全く読んでなかったとも言える。理解してなかったのだ。もう一度、読み直してみよう。ただ、こんな凄い思想家なのに、ほとんどが絶版だ。惜しい。どうでもいいような人々の本ばかり出ていて、こういう偉大な思想家の本は出ていない。

ちくま文庫で一冊だけ出ている。『私の幸福論』（640円）だ。本屋で手に入るのはこれだけだ。

では、今回紹介した福田の「反近代の思想」だが、これは筑摩書房の『現代日本思想大系』（全35巻）の中に入っている。この「全集」には、「ナショナリズム」「超国家主義」「アジア主義」などがある。当時、異端としてあまり取り上げられないものを思い切って取り上げている。もっとも、「社会主義」「アナキズム」「マルキシズム」もあるが。

筑摩では他にもいい思想全集が2つある。「戦後日本思想大系」（全16巻）は「ニヒリズム」「平和の思想」「革命の思想」「美の思想」「保守の思想」などがある。又、「近代日本思想大系」（全36巻）は人物中心で、大川周明、幸徳秋水、山川均、河上肇…などが入っていた。丘浅次郎、石川三四郎、木下尚江などは、この全集で初めて読んだ。当時、学生は争って読んでいた。僕も負けまいと思って、全部読んだ。筑摩の人には「ぜひ再刊して下さいよ」と言ってるが…。今、出してもこういう思想的な本は売れないでしょう。と言う。学生も青年も、どんどん退化し、バカになっているんだ。残念だ。

筑摩の他にも中央公論社の『世界の名著』（全66巻。続全15巻）、「日本の思想」（全50巻）があった。又、河出書房から「世界の大思想」（全45巻）、「世界思想教養全集」（全24巻）も出ていた。さらに、平凡社からは「世界教養全集」（全38巻）もあったし、講談社の「人類の知的遺産」（全80巻）も出ていた。

それらが、皆、よく売れていた。それだけ知的関心が高く、知的レベルも高かったのだ。私も、皆についていこうと、毎月、買って全部読んだ。

しかし、読んだだけだ。今回、福田恆存の「反近代の思想」の解説を読ん

で、「もう一度読まなくちゃ」と思った。しかし、皆、絶版だ。日本の若者の知性も絶版だ。携帯やメールばかりやってる奴に本なんか読めないや。携帯・メールを捨てて本を読め。と私は言いたいね。あんなものがない時代に学生生活を送れてよかった。思い切り本が読めたし、ものを考えられた。左翼とも乱闘できたし。

【だいありー】

(1) 3月6日(月) 蓮舫さん(民主党)が国会で猪口少子化担当大臣に質問していた。おっ、頑張ってると思った。3月3日(金)の「朝生・20周年パーティ」の時、蓮舫さんと、テレビ・マスコミについて話をした。朝生が始まった頃は大阪、静岡など地方でも真面目な討論番組があり、蓮舫さんも司会してた。しかし今は全くない。バラエティばかりになっていいのか、と話をした。

(2) 3月7日(火) 昼から河合塾コスモ。生徒たちが主催するお別れ会「千秋楽」に行く。校舎が千駄ヶ谷から新宿に移るのだ。生徒がコスプレをしていた。私は左翼のヘルメットと覆面をさせられた。

「創」(4月号)発売。私の連載では、「天壤無窮」を書いた。夜、柔道に行く。

(3) 3月8日(水) 図書館。柔道。

(4) 3月10日(木) プロレスの原稿を書いた。久しぶりだ。

(5) 3月11日(土) 税務署の申告のため1日中計算。算盤を使ってやっただよ。

「月刊TIMES」(4月号)が出た。

【お知らせ】

(1) 3月14日(火) 7:00p.m. 高田馬場シチズンプラザ。一水会フォーラム。高森明勅氏が講師です。

(2) 3月19日(月) 5:00p.m. 中野ジロー氏の出版記念会。新宿の「台湾楽楽一館ダンスホール」。03(3204)4881。

(3) 5月15日(月) 7:00p.m. 角筈区民センター。「笑いとバトルのスーパーライブ」。矢崎泰久、山根二郎、そして私。

(4)映画「あんにょん・サヨナラ」がポレポレ東中野で7月8日(土)から2週間上映と決まりました。大阪のシネヌーボでは7月15日からです。7月9日(日)の午後6時からポレポレでイ・ヒジャさんを迎えてトークをする予定です。私も出ます。他に豪華ゲストが出る予定です。

(5)映画「力道山」はいいですね。感動しました。見なせえ。

(6)小林よしのりさんの体験的闘論マンガ『目玉日記』(小学館・1000円)は凄い! 一気に読んだ。骨法道場の堀辺先生も出てくる。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン/丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)
[2006年](#)

今週の主張 3月20日

朝生20周年パーティに出て、昔を思い、感無量でした

(1) 「死ぬまで生テレビ」と田原さんは言っていました

「朝まで生テレビ！20周年。感謝の夕べ」が3月3日(金)、全日空ホテルで開かれた。凄い人だった。冒頭、今までの朝生の様子が紹介された。タブーに挑戦する、ということで「天皇」「差別」「右翼」「原発」「憲法」といった問題を取り上げてきた。今となっては、「どこがタブーなんだ」と思われるテーマもあるが、それは朝生が取り上げることでタブーでなくしてきたのだ。「天皇」だって初めに取り上げる時は、かなりの覚悟をもって、緊張してやったという。

ともかく大したものだ。初めの方には初期・朝生の名物男たちが出ている。大島渚、野坂昭如、小田実…らだ。大島が怒鳴ってるシーンが何度も出てくる。よく怒鳴ってたなと思い出した。野坂は驚いたことに立ち上がってスタジオをうろついている。あの頃は討論中に立ち上がってもよかったんだ。いやいや、そんな事、出来たのは野坂だけだろう。それにいつも酔っ払っていた。

昔は朝生は酒を飲んでよかったんだ。ビールや水割りを飲みながら討論していた。それで大島が怒鳴り、野坂が立ち上がってうろつく。過激で、アナキーだった。それに時間も5時間だった。午前1時から6時まで。本当に「朝まで」の徹夜番組で、外に出たらもう朝だ。それが、4時間になり、今は3時間だ。

初期の朝生には上田哲さんもよく出ていた。野村秋介さんも出ていた。司会の田原総一郎は「挨拶」の中で、「この番組中に死ねれば本望だ」と言っていた。討論中にあれっ田原さん、静かになったな、と思ったら死んでいた。あっ亡くなったんだ。では司会を渡辺宣嗣さんに代わって続けましょ

う。…と、なるのだろう。

田原さんは70過ぎだが、まだまだ元気だ。とてもその日が近く来るとは思えない。「朝生30周年」「40周年」「50周年」も迎えるだろう。「さあ、朝までまいります！」と渡辺さんが朝生の時は言ってるが、このパーティでは何と、「さあ、死ぬまでまいります！」と言っていた。「朝まで生テレビ」じゃなくて、「死ぬまで生テレビ」か。凄いやね。

朝生は20周年だが、それまで何回放映したかだ。1年に12回だから、単純に計算して240回だ。そう思ったら、今年の2月で227回だった。休んだ月もあったんだ。その中で、「最多出場者」は誰か。舩添要一さんなんだね。95回だという。じゃ、半分近く出てるんだ。「ここまで来たら、区切りのいいところで100回を目指します」と元気に挨拶していた。

ということは、舩添さんは初期の朝生からズッと出てるんだ。大島、野坂さんは倒れて闘病中なのに、舩添さんだけは元気だ。大島、野坂さんも元気になったら又、出てほしい。小田実、西部邁らを含めて、昔ながらの朝生も見てみたい。

「右翼」が取り上げられたのは、平成2年（1990年2月23日）だ。四宮氏、木村氏と共に僕も出た。じゃ、右翼・民族派の人が出たのは、これが初めてかということ、違う。野村さんはその前から出ていた。だから初期・朝生をつくった名物出演者でもあった。ベルサーチを着て、おしゃれだったし、話し方にも華があった。迫力があつた。野村さんの活躍があつたから、他の右翼の人達も続いて出ることが出来たのだ。

右翼の中では野村さんが多分、一番多く出てるんだろう。大原康男さん、高森明勅さん、木村三浩氏も多い。四宮正貴氏も出ている。木村氏は10回以上出ている。イラク問題のときによく出ていたからだという。

僕は、先月の「天皇」に出て、8回目だ。きついし、大変だし、もういいだろうと思うが、木村氏に「10回を目指して下さいよ」とハッパをかけられた。

でも、重要なテーマの時に出してもらい感謝している。90年2月が初めてだから、16年前だ。朝生が始まって4年目の時か。まあ、初期朝生とっていいだろう。出た8回は、こんなテーマだった。

(2)これが私が出た8回の全リストですわ

・平成2年（1990年）2月23日。「激論！日本の右翼と言論の自由と暴力」。これが一番印象に残っている。〈右翼の人〉が出て、大島、野坂、小

田、小沢遼子らと激論した。小沢vs四宮氏のバトルは有名。これは単行本にもなった。右翼は「7人の侍」だね、と言っていた。そのうち、3人がもう亡くなった。

・平成2年（1990年）11月23日。「徹底討論！象徴天皇制と日本」。野村、大原さんと僕が出た。色川大吉など天皇制反対論者と擁護論者の激論になった。天皇問題は、この20年で5回取り上げてると言っていたが、その第2弾だ。「右翼」の時もそうだが、右翼の先輩、仲間が一緒だったので心強かった。〈集団戦〉で闘うような気分だった。

・平成3年（1991年）4月26日。「徹底討論！日本国憲法と世界の平和」。この時は右翼・民族派からは僕一人だ。〈集団戦〉ではなく、〈一人〉で闘わなくてはならない。「集団」の時は、よく分からないことを言って相手に突っ込まれても、こちら側で誰かフォローしてくれる人がいる。今回はそれが無い。だから、自分で本当に理解したことしか喋れない。又、「我々は…」といった思考ではダメだ。自分の頭の中で考えたことだけを言おうと思った。かなり覚悟をして出た。自分なりの「提案」や「理想論」も言った。

そしたら、野村さんが突然、本番中に入ってきた。ギャラリー一席に座り、発言した。「皆、きれい事ばかりで聞いてられない！」と言う。僕に対して一番、怒ってたんだ。緊張が走り、ハラハラする場面だった。いろんな意味で、これが僕の「転機」になった。

しかし、90年2月から91年4月まで、2年間で3回も朝生に出てるんだ。

実はこの後、大きな事件があった。92年6月に野村さんが立ち上げた「風の会」が選挙に出た。僕らも手伝った。93年10月に野村さんが自決した。民族派運動も一気に沈静した。僕も、4年位、朝生に呼ばれることがなかった。

・平成7年（1995年）4月28日。「検証！オウム真理教事件とは何か？」。95年3月20日に地下鉄サリン事件が起きている。その1ヶ月後に出たんだ。遠藤誠、浅野健一、鳥越俊太郎らと出た。専門家たちにまじって僕は何を言ったんだろう。しかし、この時が一番、脅迫電話が多かった。家に帰ったら、留守電に一杯入っていた。「麻原と共に地獄に落ちろ！」「死ね！」と言うのが多い。お経を延々と読んでる人もいる。気持ち悪い。

そんなに過激なことを言ったのか。それとも、「オウム寄り」と思われたのか。警察によるオウムの「別件逮捕」を批判しただけじゃないのかな。

・平成7年（1995年）8月5日。朝生100回スペシャル。「激論！現代ニッポンと天皇制とオウム」。大島渚、舛添要一、西部邁、宮台真司さんらと出ている。どんな話をしたか、忘れた。

・平成8年（1996年）9月27日。「激論！こんな日本に誰がした！」。野坂昭如さんが司会だった。何か、アットホームな、のんびりとした朝生になったような気がした。中島らもさん（作家）も出ていたが、全く喋らない。野坂さんも心配になって、「じゃ、らもさんはどう？」と、何回かふる。でも、「いや」とか言って、喋らない。5時間、何も喋らなかった人も珍しい。いい人だなと思った。

「皆さん、心に残る歌は？」なんて野坂さんは聞いていた。私は「雪の降る街を」と答えた。ほんわかとした朝生でよかった。

この・～・は2年の間に3回でた。それから、8年ほどブランクがあつて…。

・平成16年（2004年）3月26日。「激論！オウム・連合赤軍は終わらない？」。植垣康博、宮崎学、小阪修平といった人々と共に出た。話が盛り上がり、楽しかった。元連合赤軍兵士・植垣さんの話を中心に進められ、よかったと思う。

・平成18年（2006年）2月24日。「激論！天皇」。女帝・女系天皇問題が中心になった。

以上。これが、私の「朝生」リストだ。

(3) 说白了、NHK衛星の討論番組にも出たよな

では、話を「朝生20周年」パーティに戻す。先週にもちょっと書いたが、蓮舫さん（民主党）と少し話し込んだ。朝生が始まった直後は、討論番組が、他にもかなりあった。フジテレビでは、「ザ・ディベート」というのがあった。NHKでも高校生を集めたディベートをよくやっていた。又、NHK衛星では、田原さん司会の討論番組をやっていて、僕も出た。NHKに出たのは後にも先にもこれ一回きりだ。この時、田原さんが昔、12chにいた頃に作った、「学生右翼」を流した。日学同の斉藤英俊を中心に撮ったドキュメントだ。そこに、三島由紀夫と自決した森田必勝氏が映っていた。ビラをま

いてる場面と、日学同事務所で話し合ってるシーンだ。動いてる森田氏が映ってるのは、これだけだ。

話しが横に外れたが、朝生に影響され、刺激されたのか、他局でも随分と討論番組をやった。さらに地方でもやった。大阪では猪瀬直樹さんを司会に、朝生とそっくりの番組をやっていた。僕も何回か出た。猪瀬さんは田原さんに似て、結構厳しい司会をしていた。ギャラリーから学生が質問すると、「もっと勉強してから質問しろ！」と怒鳴りつけていた。ピリピリしていた。3回ほど僕は出してもらった。

あと、静岡テレビで討論番組をやっていた。蓮舫さんと高野孟さんが司会していた。政治的なテーマを扱うが、面白い視点からやっていた。局の方で一つのテーマを決め、それについて話し合う。たとえば、「マンガ立国論」とか「和魂洋才のすすめ」とか。いや、誰か一人がまず問題提起の話をして、それについて話すんだったかな。面白かった。静岡テレビだが、実は東京で収録していた。だから東京の論客たちも集まりやすかった。僕は5回ほど出た。

他に、横浜のテレビ、京都のテレビ、東京を結んだ三元中継の教育に関する討論もあった。これは本になっている。日教組の委員長だった槇枝さんも出てた。

その他、僕は出てないが、九州や北海道でも討論番組があったという。各局で工夫して、頑張ってたのだ。

ところが今は全くない。全て、なくなった。残ったのは唯一、朝生だけだ。あと、似たようなものではテレ朝の「テレビタックル」がある位だ。でも、あれは、「お笑い」「バラエティ」に近いしな。

「なんでですかね」と蓮舫さんに聞いた。「視聴率がとれないからです」と言う。そうすると、スポンサーがつかない。それで皆、消えていった。

「それでいいんですか」といったら、「ダメですね」と言う。しかし、「これではダメだ」という声が国民の間から起きてこない。皆、「これでいい」と思ってるからつまらん番組がはびこり、いい番組は消える。

「視聴率のことだけ考えたら、バラエティになっちゃうでしょう」といったら、「そうですね」と言う。ただ、大まかな「枠」というか「制約」はあるんだそうな。報道は全体の何%、娯楽は何%…と。しかし、今は下らない娯楽ばかりだ。報道も、教養も何もない。

「外国でも、こんなひどいんですか」と聞いたら、「日本ほどではない」

と言う。視聴者がどんどん文句を言ってくる。たとえば、「暴力シーンは入れるな」とか。「終わったタレントが出て、ただ喋ったり、メシを食ってる番組ばかりじゃないか!」とか。「下らない娯楽番組ばかりやるな!」と言ってくる。又、多くの人が、そんな下らない番組を見ない。だから、下らないものにはスポンサーがつかない。ところが、日本だけは、「下らない娯楽でいい」と思っている。そういうことなんだそうな。国民の民度が低いのか。アホなのか。といって国民を啓蒙して、テレビを変えるというのも百年河清を待つようだ。

「スポンサーなしの番組を1日に2時間つくる」といった法律を作ったらどうですか。と私は提案した。「視聴率」に縛られては、いい番組は作れないと現場のプロデューサーは言う。だったら、スポンサーなしの番組を作る。一局だけなら出来ないよね。減収だから。だから全局にやらせる。

そしたら、「視聴率は低いが、いい番組」を作れる。低視聴率の方こそ、いい番組だ。視聴率の低さの競争をしたらいい。そこで各局が競い合って、いい番組を作る。あるいは、週に何時間かは、キッチンとした討論、対談番組を作れ、という法律を作る。それも一つの手だろう。

本当なら、テレビ局で、各々、見直しを自発的にやればいいのだが、とても出来ないだろう。

さて、話を全日空ホテルに戻す。「朝まで生テレビ!20周年。感謝の夕べ」に引き続き、同会場で、日下雄一さんを偲ぶ会になった。日下さんは「朝生」のプロデューサーであり、この番組に初めから関わっていた。今年の1月に亡くなった。朝生最大の功労者だ。僕らも随分とお世話になった。正面右側には日下さんの遺影が置かれている。又、日下さんが座っていた机も置かれている。

田原さんが言っていた。「日下さんがいなければ朝生は始まりませんでしたし、ここまで続きませんでした」。もめた時もあるし、大変な時もあった。いや、そういう時の方が多かったのかもしれない。今まで、誰もやろうとしなかった「天皇制」「右翼」「差別」「原発」などを取り上げてやったのだ。その心労たるや大変なものだったろう。出る人を集め、ぶつかってはもめ、そのたびに日下さんが走り回っていた。「日下さんの命を縮めたのは私です。本当に申し訳なく思ってます」と田原さんが言っていた。

ということで、3月3日の「20周年パーティ」のレポートは終わりです。そうそう。2月の私の出た朝生を見た人に言われました。「ダメだね。何

も喋れんで」「もっとガンガン行かにかいかなだろう」「ロフトのように水かけてやれよ！」と。そうはイカんでしょうが。昔から見てた人に言われました。そういえば、昔は、「民族派の若き論客」って紹介されてたよね。と皮肉る。今は、左翼かぶれで、民族派かどうか分からんし、若くもないし…と。大きなお世話だ。バカヤロー。じゃ、これからはこう呼べよ！

「非国民の、老いた、口べた」

【だいありー】

(1)3月13日(月) 午前中、税務署に行く。申告の計算は何度やっても慣れない。大変だ。「何度経験しても慣れないもの。確定申告と朝生」と、徒然草ふうに呟きながら中野税務署に行きました。去年は、『公安警察の手口』をはじめ、かなり本を書き、印税をもらった。だから所得税を払わなくちゃならんかと憂鬱だった。ところが、その分、ガバツと源泉徴収が引かれてるんだ。経費を差し引いて計算したら、何と、戻ってくる。バンザーイ！と叫んでしまいました。「でも、それだけ収入が低いってことだよ」と知り合いに馬鹿にされました。しかし、お金が返ってくるなんて、やっぱ嬉しい。

算盤で計算し、試し算もやり、万全だ。算盤4級の腕の見せどころだ。

「どうだ。間違いはないじゃろう」と胸を張って出した。そしたら、「アレ？ここ違ってますよ」と言う。「さらに定額減税額を引くんですよ」。そんで、その部分を計算し直して、書き直した。直したところには訂正印を押して。でも、これで返ってくるお金がさらに増えた。バンザーイ。「でも、定額なんとかって去年もありましたか？」と聞いたら、「毎年ありますよ」。

今まで、教えてくれなかったよ。その分、国に貢献したわけだ。愛国者になったんだ。うん、偉いね、とクニヨニヨンを誉めてあげました。オワリ。

夜、もう一つの慶事です。ヤフーオークションで私の『腹腹時計と〈狼〉』（三一新書）が2万8千円で出てました。自分でも驚きました。私のデビュー作で、1975年10月15日発売です。31年前ですね。480円です。それが今や60倍！凄いですね。だから、今出てる本も早いうちに買い占めて下さい。30年後は60倍ですよ！

(2)産経新聞と世界日報の3月13日付に出てました。夫を殺そうとしてインスリンを射った中国出身・美人妻のことが。殺されかけた被害者は、やはり鈴木さんですね。54才。それに何と、「妻に殺されるかもしれない」と事件直前に友人に言ってたそうです。「もし自分が死んだら、解剖してくれ」と

も言ってたんだそうなの。

でも、周りの人は冷たくて、「誰に」「なぜ」などと詮索する者はいなかった（「世界日報」）という。かわいそうだね。妄想だと思われたのか。あんな美人妻に殺されるんなら本望だろうとやっかんで、本気にしなかったのか。誰にも信じてもらえず、かわいそうな鈴木さん。でも、考えたら、バカですね。命の危険があったら、逃げ出しゃいいじゃないか。あるいは、逆に殺しちゃうとか。やられる前にやれ、ですよ（これはマズイかな。でも正当防衛だったらいいんじゃないかな）。

「これも戦後賠償ですよ」と言ってた人がいた。バカな。だったら、戦争指導者を狙えよ。

ともかく、鈴木さんは、別れるなり、逃げるなりすればよかったんだ。

鈴木さんは皆、優しいし、人がいいから、逃げられんのだ。僕は他にも同じケースの人を5人も知っている。別に中国人妻じゃないが、危ない。「命を狙われてるぞ」「目的は金だけだ」と注意してるが、全く聞いてくれない。「なぜ」「誰に」といって相手にしない。皆、「愛があるんです」と言っている。困ったことだ。

(3)3月14日(火) 2時、月刊誌の取材。7時一水会フォーラム。高森明勅先生（拓殖大学客員教授）の「皇室典範の改正を如何に考えるか」。いやー、勉強になりました。高森先生は凄いね。参加した皆も、感動し、驚いていました。

先生は息子さんを連れて来てました。プロレスが好きで、「鈴木さんのプロレス論も読んでます」と言う。ありがたいですね。ミュージシャンのPANTAさんも来てました。初めての参加でしたが、「とても勉強になりました」と言っていた。「それと、今週のHPよかったね、福田恆存さんて、凄い人だったんですね。目からウロコが落ちました」と言っていた。嬉しいですね。HP始まって以来6年、初めて誉められました。

フォーラムのあと、下の居酒屋で二次会。今までシチズンプラザでやってたが、今回で終わり。改築中で、会議室はなくなるんだという。ヒドイ。国家権力の弾圧だ。公安の陰謀だ。（…と、そんなことはないか）。それで、来月からは、新しい会場になるそうです。

そんなこともあって、名残惜しくて、さらに三次会に行きました。「丸とみ」に行った。久しぶりだ。マスターが、「鈴木さん、アサヒニュースターで見ましたよ」と言う。「朝生」のことかと思ったら、衛星チャンネルの

「テレビ・ウワサの真相」のことだった。ありがたいですね。嬉しくて、一水会の若者たちと深酒をしてしまいました。タクシーで帰りました。

(4) 3月15日(水) 最近、朝早く起きて、午前中はずっと原稿を書いている。何を書いているかは言わない。ボツになったら恥ずかしいから、本が出たらお伝えします。

昼、東中野図書館。夕方。出版社の人と打ち合わせ。夜、柔道。うん、こういう生活がいいね。午前中は書く。午後は読む。夜は闘う。「書・読・闘(しょどくとう)」の三位一体と名付けております(今、思いついたんだけど)。

(5) 3月16日(木) 午前10時。京王プラザホテル。ジャーナ専(日本ジャーナリスト専門学校)の卒業式。終わって、卒業パーティ。就職が決まった人も決まらなかった人も皆、楽しそうに飲み、食い、騒いでおりました。私も、きもの姿のかわいい生徒たちと写真を撮って楽しんでおりました。

(6) 3月17日(金) 一日中、家で原稿書き。夜7時からネーキッドロフトに行く。保坂展人さん(社民党)と安田好弘さん(弁護士)のtalkを聞きに。死刑廃止のテーマだったので関心があったからだ。もうロフトには出ることもないだろうから、こうして客として聞きに行くだけだね。これもいいやね。

(7) 3月19日(日) 午前11時。河合塾コスモ。千駄ヶ谷から新宿に校舎が移り、オープニングイベント。牧野剛先生が記念講演。そのあと、パーティ。

夜5時、中野ジローさん(ライター)の出版記念会。塩見さんと私が発起人。なかなか、賑やかでした。

【お知らせ】

(1) 3月25日(土) 午後1時からロフト。チャンネル桜の名物討論番組「左右激突4対4」が、何と、ロフトで公開収録です。「お前も見に来い」と塩見さんから命令書がきました。「左翼側で出してよ」と言ったら、「お前は裏切るからダメだ。我々の討論を黙って聞いとれ!」とのこと。だから、黙って聞きにいきます。

1時から3時まで。他に、PANTAさん、三上治さん(左側)。井尻千男さん、遠藤浩一さん(右側)らが出る予定です。

(2) 3月26日(日) 1時から渋谷区勤労福祉会館。「戦場体験放映保存の会」総会です。私も行きます。

- (3) 3月29日(水) 7時。文京シビックホール。「週刊金曜日」600号記念。憲法集会。聞きに行こうと思ってます。
- (4) 4月5日(水) ロフト。7時半。宮崎学さんと村上正邦さんのトーク。聞きに行こうと思っとります。
- (5) 4月7日(金) 7時。ネーキッド・ロフト。保坂展人さんと栗本慎一郎さん。面白そうです。聞きに行くつもりです。
- (6) 4月11日(火) 7時。高田馬場のライブ塾(トリックスター社)。月一回やっていた私のトークは終わりました。でも、滝大作がやってる会に呼ばれたので、この日は行きます。人前で喋るのは2ヶ月ぶりですね。
- (7) 5月15日(月) 7:00p.m. 角筈区民センター。矢崎泰久さん、山根二郎さん、私のトークです。
- (8) 7月9日(日) 6時、東中野ポレポレで、「あんにょん・サヨナラ」の上映記念トークです。イ・ヒジャさん。私。それに他は交渉中です。
- (9) 「よせふの舞台裏」というメールが送られてきました。「(有)ヨセフ&レオン」の中川文人さんが書いている。まじめに皇室問題を考えている。「皇室典範に関する有識者会議」で決めてはいかん。天皇陛下は「徳」の人なのだから、徳のある人々に決めてもらおう。そこで、「皇室典範に関する有徳者会議」を提唱しています。それはいい！では誰が「有徳者」かをめぐって…。いやー、驚きました。見て下さいませ。(以下次週)。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

今週の主張 3月27日 「ここでは言えない話」って何だ！

(1)それは「朝生」の本番中に起きたとです

本番中に〈異変〉が起きた。「これ以上はテレビでは言えない」と言ったのだ。「証言拒否」をした国会の参考人のようだ。でも、国会中継ではない。「なんでもあり」の朝生（朝まで生テレビ）の本番中だ。先月、2月24日(金)の朝生「激論・天皇」の時だ。

南北朝の話になった時だ。明治になって「南朝こそ正統だ」という説が天下を圧した。特に忠臣・楠正成は教科書でも、物語でも、歌でも取り上げられ、良き日本人の典型と持ち上げられた。しかし、今の天皇は北朝の子孫だ。では正統性はないのか。「朝生」では、いや南北朝で交替で立てるようになったんだ。その問題は話し合いで解決したのだ。いや、どちらも天皇の血筋だ。…と、いろんな反論が出た。

高森明勅氏は、「楠正成を忠臣として持ち上げたので、南朝ブームになったんでしょ」と言っていた。明治天皇の胸中も複雑だったろう。「国民の皆は南朝こそ正しい。楠正成はその南朝のために死んだ。しかし自分は北朝の子孫だ」と思われたでしょう。昭和天皇は、はっきりと、「自分は北朝だ」と言われている。

昭和天皇は他にも、はっきりと明言されたことがある。「天皇機関説を言うのはけしからん！」と世の愛国者たちが声を荒げて美濃部達吉を糾弾した時だ。「自分は天皇機関説が正しいと思う」と言われている。絶対君主ではない。明治憲法の制約のもとに天皇はある。立憲君主制だ。だから、天皇は国家の一つの機関だ。その通りじゃないか。そう言われたのだ。

又、終戦直後には「人間宣言」をした。神ではない。人間だと言われた。

国民の肥大化した幻想を破ったのだ。しかし、それが正しかった。

「天皇は神聖だ」「絶対だ」「何にも制約されない」と言うのは、勇ましいし、天皇のためを考えて主張してるように見える。しかし、違う。ありがたい迷惑なのだ。又、「天皇大権」を言い出す人は、その陰に隠れて自分が権力を行使したいだけなのだ。そんな卑しい意図を見抜かれたので昭和天皇は、はっきりと自らのことを言われたのだらう。

さて、南北朝だ。中丸薫さんは、「朝生」で「いや、明治以降、皇室は南朝に戻ったんです」と言った。「どういうことですか」と田原さんが突っ込んだ。中丸さんは、「いや、テレビではそれ以上のことは言えない」と言った。「そこまで言ったなら言いなさいよ」と田原さん。「いえ、言えませんが」と中丸さん。

もしかして、あの事かな。と僕はピンときた。明治になって、北朝から南朝に戻ったというならば、あれしかない。そんな大それたことを生番組では恐ろしくて言えない。番組が中止になるかもしれない。あるいは、抗議の電話、FAX、メールが殺到するだらう。

それに中丸薫さんは「明治天皇の孫」だ。内情をよく知っている。「孫」というのは著書にも書いてるし、週刊誌のコメントにもそう出ている。しかし、いや、この「孫」と言うのは嘘だ。と批判する人がいる。しかし今までは問題にならなかった。僕は最近、いくつかの週刊誌に女帝問題で取材されたが、この中丸さんも出てることが多い。「明治天皇のお孫さん」と紹介されている。

しかし、「朝生」の時は、「孫」とは出てない。事前に紹介され、抗議されて、その部分は外したという説もある。そんなこともあってか、中丸さんはナーバスになっていた。「こんな恐ろしいことは本番中に言えない」と思ったのだらう。だったら、初めから、触れなければいい。そこが思わせぶりだ。「ここでは言えないが、私の本の中には書いてる。だからそれを読んでくれ」とも言っていた。「だったら言いなさいよ」と田原さんに言われてたが、「証言拒否」は変わらなかった。

番組が終わってから僕は中丸さんに聞いた。「テレビで言えなかったことって、もしかしたら、〈あの事〉じゃないですか」と。そうですよと言う。何の本に書いてんですかと聞いたら、『真実のともしびを消してはならない』（サンマーク出版）だという。「読んだら電話して感想を聞かして下さい」と名刺をもらった。気さくなお孫さんだ。

気さくなついでに失礼な質問もした。「おじいさん（明治天皇）に会われたことはあるんですか」「ないです」「大正天皇は」「ないです。私は昭和の生れですから」。あっそうか。「孫というのは嘘じゃないか、という人もいますが」と不敬な質問もした。「無礼者！下（さが）れ！」と怒鳴られるのかと思ったが、丁寧に説明してくれる。

後で書くが、本を読んで驚いた。中丸さんは、世界のトップたちと随分会っている。カダフィ、フセイン、と。写真も出ているから本当だ。テレビのインタビューの仕事で出会っている。しかし、よく会えたもんだ。もしかしたら、「明治天皇のお孫さん」ということで世界のトップたちは会ったのかもしれない。きっとそうだろう。

フランスの俳優・アラン・ドロンとも会っている。その様子も詳しく書かれている。「じゃ、国民戦線のルペンにも会ったんですか」と聞けばよかった。だって、アラン・ドロンは（極右政党といわれている）国民戦線のルペンを熱烈に支持しているからだ。国民戦線のポスター、チラシにもアラン・ドロンは名前を出している。

そうだ。3年前、「国民戦線30周年大会」に招待されて木村三浩氏と僕はフランスのニースに行ってきた。何とした偶然か。そこで「南北朝」の話になったのだ。

(2)フランスでも「南北朝」の対立はあるとです

フランスの右翼といっても、別に王政復古を目指しているわけじゃない。だって1789年のフランス革命の直後の議会で「右翼・左翼」という言葉が生まれた。議会は鳥が翼を広げたように見えた。右の翼の席には保守派がいたので「右翼」と呼ばれた。左には急進派がいた。左翼といわれた。それだけだ。つまり、王政を否定し、フランス革命をやった。その後に生まれた右翼・左翼だ。だから、右翼も「王政をもう一度」とは考えてない。

ただ、どこにでも例外はある。「ブルボン王朝の復活を！」と唱えている人はいる。ほんのごくごく一部だが。前は「アクション・フランセーズ」という右翼政党が言っていた。今、それはない。残党の一部が「国民戦線」に入ってるという。しかし、全く影響力はない。

国民戦線のゴルニッシュ書記長は、実は日本の京大を出ている。そして、徳島の女性と結婚している。だから、日本語でいろんな話ができる。フランスでも話し込んだ。又、日本にも何度も来ている。欧州議員になっているので、日本政府の招待で何度か来てるし、その度に木村氏と一緒に会ってい

る。

ゴルニッシュさんは三島由紀夫、川端康成も好きで、研究し、大学で教えている。僕は、フランスの王政復古に興味があったので聞いてみた。王様はじめ、マリー・アントワネットなど主だった人々はギロチンで殺された。しかし、ブルボン王朝の全ての血族を殺したわけではない。フランスには少し残っている。又、スペインに亡命した人々もいる。

もし王制が復活したら、誰が王位につくかという順位も決まっているという。ただ、問題はある。本流はスペインに亡命した人々だ。でも、亡命した人は王になれない。そんな決まりがあるそう。いや、改正して王政復帰を認めるべきだという説もある。いや、フランスに残った人々から選ぶべきだという人もいる。フランスに残った人か。スペインに亡命した人か。「どちらが〈正統〉か。どちらを正統と認めるかで、論争があるんです。まるで南北朝です」とゴルニッシュさんは言う。まさか、フランスにきて南北朝の話を書くとは思わなかった。

というところで、肝心の話だ。中丸薫さんは、明快に「北朝から南朝に戻った」と言う。じゃ「あの話」かと思った。だから、ズバリ聞いてやりましたよ。「明治天皇は実は、すり替えられた」という話でしょう、と。「そうです。だからテレビでは言えなかったんです」と言う。

明治維新にからまる「謎」だ。「噂」だ。「奇説」だ。「孝明天皇暗殺説」ほど有名ではないが、「明治天皇すり替え説」がある。これは本も何冊か出ていて、僕も読んだ。

中丸さんの本は、何件か本屋を探したがない。だから、ネットのアマゾンで買った。時間がかかったが、届いた。ほとんどは、世界を支配する「国際金融」の話だ。僕は、よく分からなかった。ロスチャイルドが企てた「世界革命」。世界を支配する「円卓グループ」の正体、…といったことが書かれている。1章から11章まではそうした「闇の支配」について書かれている。

ただ、最後のエピローグの「明らかになった明治天皇の真実」は面白かった。これが、「朝生」でも言えなかった「衝撃の真実」なんだろう。なぜ、あれほど憎み合っていた薩長が手を握ったか。それは、北朝を南朝に戻すという大義名分があったからだ。

幼少の時は弱々しく、臆病で、病気がちだった明治天皇が、天皇になるやいなや力強い、雄々しい天皇になる。まるで別人のように。御真影をみても、まるで違う。昔のは本当に写真を写したものだ。しかし、「雄々しい明

治大帝」の方はイタリア人のキヨソネが描いたものだ。だから違うのは当たり前だ。いや、そういう理由づけのためにキヨソネに描かせたのではないか。すり替わったのではないか。そういう説がある。

又、ここでは中丸氏自身の出自についても書いている。

中丸氏の父・堀川辰五郎は明治天皇と御側女官の権典侍（ごんてんじ）・千草任子（ことこ）との間に生まれた子供だという。明治天皇の第一子として生まれたが、国家の犠牲となり、すぐに井上馨のもとに預けられた。

さて、明治維新だ。中丸氏は「明治天皇の孫」だということで、いろんな人が、訪ねてくる。いろんな本や話が持ち込まれる。「薩長同盟の秘密」も、あるライターが言ってきたことだ。

〈明治維新というのは、単に幕府を倒して王政復古を実現するためだけではなかったのです。じつは北朝の天皇家へは足利義満のとき以来、天皇の血脈が流れていません。そのため、天皇家の血脈をもっている南朝に天皇の座を取り戻すために、勤王の志士たちが決起した革命なんです〉

では、誰とすり替わったのか。南朝の末裔に大室寅之祐（おおむろ とらのすけ）という人がいた。後醍醐天皇（1288～1339年）の玄孫（やしやご）のさらに孫くらいにあたる人物だ。その寅之祐を勤王の志士である伊藤博文や桂小五郎たちが担ぎ上げて、天皇のすり替えを行ったという。

大室は長州藩の武士たちにかくまわれ萩の地で育てられたという。〈話〉としては面白いが、やはり、どうも不可能だと思う。こうなると、かなり大っぴらにやられている。それなのに〈秘密〉がどこにも洩れないできたということは難しい。今もあるが、皇室をめぐる「都市伝説」のたぐいだろう。特に、病弱だった天皇が、急に雄々しくなった。又、実際の写真とキヨソネの絵が余りに違う。そこから思いついて、「もしかしたら」「うん、こう考えたら面白いだろう」と誰かが考えた。幾何の補助線のようなもんだ。そうしたら、アーラ不思議、こことここが結びつく。これも結びつく。…となったのだろう。

(3) 「鹿島史観」を知っとるかね

実は、これにはネタ本がある。一番有名なのは、鹿島昇の『裏切られた三人の天皇--明治維新の謎』（新国民社）だ。鹿島史観といわれるほど、たくさん本を書いている。その世界では有名な人だ。僕も読んだ。これには、「すり替え説」の詳しい「証拠」が、これでもか、これでもかと書かれてい

る。興味のある人はネットで探して読んだらいい。僕も読んだ。それに、知り合いの弁護士の西垣内堅祐さんが「序文」を書いてたので驚いた。

そしてもう一冊。竹下義朗著『検定不合格 教科書になれなかった史実』（雷韻出版）があり、そこに「明治天皇は暗殺されていた！ 南北朝秘史」が出ているという。これは僕はまだ読んでない。

中丸さんの本に戻る。孝明天皇は公武合体論で、朝廷（公）と幕府（武）が一致協力して事に当ることを唱え、将軍・家茂を信任していた。それでは〈革命〉が出来ないと薩長の志士たちは思った。それで孝明天皇を毒殺した。又、家茂も毒殺したという。これは知らなかった。

孝明天皇と家茂とは皇女和宮を通して義兄弟の間柄であった。二人の死は謎にみちている。孝明天皇は粗野な志士たちが嫌いだった。京の安全を守る会津藩主松平容保を特に信頼していた。「信頼できるのは容保だけだ」とも言っていた。その容保の下で京の治安を守ったのが新選組だった。つまり、天皇のために新選組は闘ったのだ。それなのに、賊軍にされ、靖国神社にも入れてもらえない。アンフェアだ。京・大阪で命をかけて天皇を守るために戦っていた時、将軍・慶喜は、さっさと自分だけ船で逃げ帰ってしまった。「朝敵」になるのを恐れて大政奉還し、謹慎してしまった。それじゃ幕府軍もやる気をなくすわさ。

幕府軍はまず慶喜を殺すべきだった。そして、別の将軍を立てる。あるいは〈すり替え〉でもいい。そうしたら薩長に勝てただろう。又、孝明天皇の暗殺も防げたろうに。人がいいんだよ幕府軍は。そんなことすらも出来ずに、崩壊した。

薩長なんて凄いよ。自分たちが崇める孝明天皇を殺し、家茂を殺し、明治天皇を殺し、そして〈替え玉〉を天皇にした。いやいや、そういう説があるという話だ。僕は、全く信じてないが、こんな破天荒な想像力は一体どこから来るのだろうか。判官びいきなのか。斃れた者への哀悼なのか。

もう少し続ける。明治天皇は幼少の時は病弱だったという話だ。神経は繊細で、気が弱かった。1864（元治元）年、12才の時に禁門の変が起こった。長州藩が御所の蛤（はまぐり）御門を攻撃したのだ。その時の様子が『明治天皇紀』にこうある。

〈随徒の宮女恐怖して為す所を知らず、声を放ちて号泣する者あり。親王亦（また）驚かせられ、俄（にわか）に病を発して紫宸殿（ししんでん）下

に倒れたまふ)

気を失っちゃったんですな。又、遊技が好きで女官たちとよく遊んでいた。教育係の山岡鉄舟も手を焼いたという。ところが、天皇に即位後は急に、浅黒く、背が高く、声の大きい人になっている。この容姿からは即位前の軟弱な印象が消えてしまった。まるで別人だ。

だから「すり替え」だという。しかし、本当に別人のようになったのだ。多分、山岡らの教育によるものだ。他の本で読んだが、天皇は夜も女官のもとにばかり通っている。天皇を廊下で待ち伏せした山岡は、何と天皇を柔術の技で投げ飛ばした。「無礼な。余は天皇だ！」と怒る幼君に対し、「天皇はそのような軟弱なことはしません」と答えたという。又、一緒に相撲をとり、手加減しないで天皇を投げ飛ばしたという。感動的な、いい話ではないか。そうした厳しい教育があって、生まれ変わったように明治天皇は雄々しくなったんだ。私はそう思いますね。

大蔵省印刷局に勤めていたイタリア人のエドアルド・キヨッソーネが、侍従長から信頼をうけて明治天皇を描いた。どうしても西欧的な絵になる。又、より立派な君主のように描こうという気持ちも逸る。それはお雇い外人としては仕方のないことだろう。あるいはフランスやイギリス、ロシアなどの西欧の王様の肖像画もそのような手法で描かれていたのだろう。かなりオーバーに、かっこよく描かれている。実際の写真と見比べたら、まさに〈別人〉のようだ。ルイ14世やルイ16世だって、多分、「まるで別人」のようだったろう。ただし、彼らの実際の写真がないから我々には分からないだけだ。というのが私の結論だが、でも、まだまだ「新事実」があり、「真相」があるのかもしれない。それは分かった段階で、さらに考えてみませう。

【明治天皇の御真影（お写真）はいろんな本に出てますが、参考のために『歴代 天皇・皇后 総覧』（新人物往来社）に載ったお写真を紹介しましょう。はじめのは、明治天皇の本物のお写真。もう一つはイタリア人・キヨソネの描いた肖像画です。これを写真にとって「御真影」としたのです】



【だいありー】

(1) 3月18日(土)のことでありました。「読書ノルマ」を果たそうと、高田馬場のルノアールにおりんした。昼メシを食ってから、2時から7時まで5時間、読書する予定を立てたのです。本を読み出してすぐに、「おっ、鈴木君！」とポンと肩を叩かれました。元・叛旗派代表の三上治さんでした。どうしたんですか、と聞いたら、「2時から打ち合せなんだよ」と言う。3月25日(土)にチャンネル桜の「左右激突4対4」がある。ロフトで公開録画をするのだ。その「左」側の打ち合せだそうなの。

「皆、そろそろまで」と話していたが誰も来ん。店の人に聞いたら、塩見様は、4時からだという。4時と14時を間違えたんだ。そこで、4時まで二人でお話。というより、左翼のお話を2時間、聞いた。そして4時、塩見さん、PANTAさんらが来る。「お前も打ち合せに出ろ」と塩見さんに言われて出る。これで、私の予定した5時間の「読書時間」はパーになってしまいました。

「左側で僕を出してよ」と又、言ったけど、「ダメだ」と又も断われた。しかし、いつも同じメンバーじゃ勝てん。いっそ、小田実、姜尚中、小沢遼子を入れりゃいい。これなら勝てる。でも、その提案もダメ。そこで、私なりにいろいろアドバイスをした。アドバイスが効いて、きっと勝てるでしょう。そう祈ります。

(2) 3月19日(日) 午前11時から、河合塾コスモの新しい校舎でオープニング

パーティ。きれいな校舎でビックリ。自習室も立派だ。今度は私も、ここで自習しよう。牧野剛先生の記念講演があって、モチつき大会。たくさん食べました。おいしかったです。5時から新宿のダンスホールで中野ジローさんの本、「刑務所ぐらし」（道出版）の出版記念会。発起人の塩見さんと私が挨拶をした。いろんな業界のお客さんがたくさん来ていた。おわって塩見グループで二次会をしました。

(3) 3月20日(月) 昼は家で原稿を書いちゃいました。夜は、喫茶店に行ってノルマの本読み。

(4) 3月21日(火) 同じ

(5) 3月22日(水) 同じ。夜、柔道。

(6) 3月23日(木) 図書館。打ち合わせ。

(7) 3月25日(土) 1時、ロフトプラスワン。桜チャンネルの録画を見に行く。ともかく凄かった。私は歴史の証人になった。ここでは書けん。詳しくは次回に。

(8) 3月26日(日) 1時、渋谷区勤労福祉会館。「戦場体験放映保存の会」総会に行きました。

【お知らせ】

(1) 「よせふの舞台裏」は凄いですね。「有識者」ではなく、「有徳者」を集めて皇室典範に関する会議をやれ！と。これは賛成です。それで、いろんな人を候補にあげてます。WBCで世界一になった王さん。うん、この人は世界的有徳の人だ。それに塩見さん、喜納昌吉さん…とあげてます。それに何と私まで。それも議長に推してます。ありがたいけど、こりゃ、無理でしょう。私なんて徳なんて全くありません。ここはやっぱり、王さんか、塩見さんですね。

(2) 3月28日(火) 6時30分。文京区民センター3A集会室。「共謀罪の新設に反対する市民と表現者の集い」。石坂啓、大谷昭宏、斎藤貴男、森達也さんらが出ます。

(3) 3月29日(水) 7時、文京シビックホール。「週刊金曜日」600号記念。憲法集会。

(4) 4月1日(土) 月刊「正論」(5月号)発売です。初めて、「正論」デビューです。佐藤優さんの『国家の崩壊』(にんげん出版)の書評を書きました。

(5) 4月5日(水) ロフト。宮崎学さんと村上正邦さんのトーク。聞きに行こうと思ってます。

(6) 4月7日(金) ネーキッド・ロフト。保坂展人さんと栗本慎一郎さんのトーク。「自民党とミミズ」のテーマだそうです。

この日、「創」(5月号)発売です。日韓討論映画「あんにょん・サヨナラ」について書きました。

(7) 4月11日(火) 7時。高田馬場のライブ塾。滝大作さんと私が出ます。

(8) 4月15日(土) 「EX大衆」(5月号・双葉社)発売。皇室典範についてコメントしています。

(9) 5月15日(月) 7:00p.m.角筈区民センター。矢崎泰久さん、山根二郎さん、私のトークです。

(10) 今度、大学で天皇論の討論会をやることになり、テキストが送られてきました。何と葦津珍彦(うずひこ)先生の本が5冊です。「葦津珍彦の主張普及発起人会」から、今、5冊の本が出ています。

第1巻 日本の君主制

第2巻 永遠の維新者

第3巻 近代民主主義の終末

第4巻 土民のことば

第5巻 大アジア主義と頭山満

です。各2000円。これは文句なしに素晴らしい本です。昔、読みましたが、この機会に又、読み直してみます。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年 2004年 2005年
2006年

今週の主張4月3日 聖ロフトの大虐殺

(1)怖かった。ホラー映画よりも怖かった。足がすくんだ

あまりにもおぞましい光景だった。背筋も凍る冷酷無残、非道な殺戮現場だ。まさに大虐殺だった。

右翼側の4人は「南京大虐殺はなかった。国際条約に反する虐待、虐殺はなかった」と言っていた。「あったら言って下さい。全て論破します」と豪語していた。でも、あったじゃないか。このロフトでやられた。これは左翼に対する大虐殺だ。逃げ道をふさぎ、情け容赦なく殺してゆく。そう、左翼側の4人は思想的に殺されたのだ。完膚なきまでにやられた。一人一人殺され、死体が累々と並ぶさまを我々は目撃した。歴史の証人になってしまった。虐殺された左翼はもう生き返ることはない。ご冥福をお祈りいたします。

4月25日(日)のことだった。チャンネル桜の名物番組「左右激突4対4」の収録の時だ。午後1時から3時間、収録が行われた。塩見監督率いる左翼チームは今まで3連敗。それも完敗だ。「いや五分五分に戦っていた」と塩見氏。現実を見ていない。さらに凄いことを言う。

「負けてるように見えたのはアウェイで戦ったからだ。だから今度はホームグラウンドで戦う」と言って、ロフトプラスワンに場所を移した。ところがこれが裏目に出た。客がいるもんだから右翼側4人は異常にハッスル。立ち上がって演説する人もいて、観客席では「そうだ、そうだ!」と拍手喝采。昼間の1時だから、普段のロフトの客はいない。ガラの悪い、ちょっとアナーキーな、左翼っぽい、ひねくれた客はいない。寝てるんだろうよ。夜行性動物だから。

観客の多くはチャンネル桜をいつも見てる人。桜では連日、予告をしていた。それで集まった人が多い。だから、全く、ホームグラウンドにはなっていない。さらにアウェイだ。敵地の中のさらに奥深くに入ってしまった。愚かな将だね、この塩見という人は。

3時間は長いから、1時間ずつ休憩（10分）が入る。格闘技のようだ。3R（ラウンド）の死闘だ。1Rは60分。インターバルは10分。

うん、「何でもあり」のPRIDEだね。左翼側は塩見孝也、三上治、PANTA、谷口末廣（不戦兵士の会。85才）。右側は井尻千男、遠藤浩一、潮匡人、大高美貴。司会は水島総（チャンネル桜の代表だ）。

塩見といえば元・赤軍派議長。三上といえば元・叛旗派代表。何千人、何万人の部隊を率いて国家権力と闘った英雄だ。学生時代なら、僕なんて足元にも近寄れなかった。論争するなんてとてもとても。雲の上の人でしたよ。当時は、このお二人の末端の活動家たちと論争し、乱闘し、そんで粉砕されていた。お二人は「強大な敵」だった。

ところが、右翼の若手（1人、長老がいたが）に手もなく、やられてしまう。「具体例を出しなさいよ」「もっと勉強しなさいよ」なんて、からかわれる。そして大虐殺だ。そこで思った。左翼のリーダーは、もしかしたら、「プロレスラー」だ。強い、強いと思われてきた。どんなリングで、どんな相手と戦ったも勝てると思った。ところが、PRIDEに出たら、プロレスラーは皆、簡単に負けた。柔術家やアマレスやキックボクサーの餌食だった。「何だ、こんなものか」と思った。それですよ、これは。

「左右激突4対4」は第4回目だ。やはり「4」は不吉な数児だった。「4」は「死」だった。左翼が殺されたこの日、2006年3月25日(土)は、「セント・ロフトの大虐殺」として、歴史に記録されることでしょう。歴史の教科書の年表にも載るでしょう。「オーむごい！」と受験生は語呂合わせで暗記することでしょう。

(2)「日本主義者に日本精神がない」と、虐殺酒場で痛感した

しかし、こんなもの見たくなかった。かわいそうで私は涙が出ましたよ。それにしても右翼は嫌いだ。冷酷だ。情けがない。こんなのは日本精神じゃない。いたわりの精神がないよ。ここで大虐殺したら、もう生き返らない。せっかく、「おもちゃ」にして遊んでたのに。もう、遊ぶものがなくなつたろうが。馬鹿だね。これじゃ、チャンネル桜の「名物番組」も終わりだよ。

少しは左翼側にも花を持たせてやれよ。ちょっと負けたふりでもしてやれ

よ。それで左翼に「自信」をつけてやればいい。今時、いないよ。負けても負けても、出てくるなんて。けなげじゃありませんか。かわいそうじゃありませんか。

見ていて私は、飛び出そうかと思いました。「弱い者いじめはやめろ！」
「そんなのは日本精神じゃない！」と叫びそうになりました。だって余りにも攻める方がひどいんですもの。それに中立であるべき司会（水島さん）も完全に右翼側。4対5だよ。初めから勝てるわけではない。

今回は元軍人の谷口さん（85才）も入り、戦争の残酷さを訴えた。戦争は殺し合いだ。地獄だ。死んだ戦友の荷物を奪い、戦友の肉を食らった人もいた。と衝撃の証言をした。

しかし、「それがどうしたの」「悲惨だけどそれは戦争犯罪じゃない」「敵を虐殺したというなら、どこで誰が、何時何分に殺したか言ってごらんなさいよ」「南京ではあの後、人口が増える。虐殺なんかなかったんです」「あったと言うなら具体的証拠を出しなさいよ」…と、攻め立てる。かわいそうに。戦場から命からがら逃げてきて、85才まで生きのびたというのに、こんな新宿の場末の居酒屋で虐殺されるなんて。「敬老精神」も何もないのか。弱い者、老いた者をいたわるのが〈大和〉の心、日本精神ではないのか。ひどいよな。

事前にあんなに準備し、教えてやったのに…と元ブントの人が言っていた。君が出なくちゃダメだよ。僕だって、たまたまいたから、あの時、アドバイスしてやったのに。軍事顧問団として。でも、全くアドバイスは生かされてなかったね。まあ、アドバイスを聞くような奴らなら、もう少し何とかになっていた。それに、第1回で分かったろうよ。マルクス主義とか帝国主義とかいったって、とうてい勝てない。戦争についての具体例を知らないんだから。見かけ倒しの「プロレスラー」だったんだよ。「何でもあり」で闘ったら、一瞬にして負けちゃう。張子のブタだ。いや張子の虎だ。

反省がないんやね。1回やったら、とても勝てないと分かるはずだ。それなのに負けると分かって、なお進む。まるで大東亜戦争の日本軍じゃないか。ただ、「もうやめよう」という人はいない。ご聖断を下す人はいない。愚かな将のもと愚かな兵は竹槍で向かっていった。向こうは機関銃、大砲で狙い撃ちだわさ。「ヘイ！ ジャップ・カモン！」とか言いながら、チューインガムを噛み、楽しんで日本兵を殺したんだよ。愚かな将と兵士は「バンザイ突撃」をし、全員玉砕してしまいました。余りに、かわいそうなお話でし

た。

でも、第1Rはちょっと頑張っていたね、左翼側も。まア、野球の話から始まったしね。WBCだよ。イチローは愛国者だ。松井は売国奴か。といったつまらん話だ。スポーツはスポーツとして楽しみゃいい。なにも、むりやりナショナリズムや愛国心に結びつけることはない。イチローは野球が強い。世界に通じる。それでいい。愛国心があるかないかなんて考えるのが下らん。だって、江戸時代なら、あんなの不用な人間だよ。非国民だよ（当時はそんな言葉はないけど）。仕事もしないで、棒っ切れで石を打ったって、それがどうした。何の役にも立ちやせん。「生産活動」にならん。仕事をサボった不屈きな奴と、役人に逮捕されたわさ。

今、野球があるから英雄になってるだけだ。荒川だってそうだ。江戸時代、いや明治、大正だって、別に「愛国者」とはいわれん。「若い女がパンツ見せて、ふしだらな」「大和撫子として恥ずかしい」「売国奴」「死ね!」と言われるだけだよ。

それに、相撲を見りゃんせ。「国技」といいながら、「売国奴」の集まりじゃありませんか。モンゴル同士の優勝決定戦。三賞は全員、モンゴル人。十両優勝は把瑠都（ばると）。バルト人だ。違った、エストニア人だ。心が広いんだよ。日本人は、寛容なんだ。それが日本精神だ。

PRIDEだってK-1だって、日本人チャンピオンはいない。しかし、世界中の強豪が日本に集まり、日本で〈世界一〉を決める。それに興奮し、満足している。下らない、狭いナショナリズムなんて超えてんだよ。バカタレ！格闘技を見てる人間の方が民度が高い。意識が高い。

そうした寛容さを忘れたら、偏狭、危険な愛国心になっちゃう。ロフトの「4対4」対決で三上さんはスポーツは国境を越えると言っていた。あれはよかったね。でも、全体は、〈愛国心〉でスポーツを論じている。小さい。小さい。

しかし、第1部は、まだ左翼側も発言していた。野球だったから、論点がボケていて、〈負け〉が分からなかったんだろう。「おっ、今日は左翼側はやる気だな。頑張っているな」と思った。「そうさな、三連敗だしな、もう後がないもんな。絶体絶命の魁皇みたいなもんだな」と言い合った。（魁皇は8勝7敗で勝ち越したけど、左翼側は4連敗。完敗、惨敗、大虐殺でした）。

(3)左翼を絶滅から救おう！こいつらだって〈日本文化〉だ

第1Rが終わった時、左翼側を激励に行った。「おっ、今日は頑張ってますね」と。その時、右側の潮、遠藤氏にポロツと言っちゃった。言わなくてもいいことを。今でも悔やんでおります。

「ありがとうございます。左翼をいたわってくれて。今まで余りにも痛めつけたんで、ちょっと手を抜いてたんですね。感謝します。やはり、こいつらは絶滅寸前の野生動物ですからね。保護してやらないと。乱獲して全滅しないように、お願いしますよ」。そう言っちゃったのだ。

二人とも笑っていた。「それ、僕らに対する挑発ですか」と遠藤氏。目が笑ってない。シマッタと思った。だから、私が悪いんです。大虐殺の仕掛け人は私です。反省しちよります。

第2Rは、いきなり右側の逆襲が始まった。左翼側が何を言っても百倍返しだ。そのまま、3Rに突入。これはもう、目も当てられん。

「戦争の具体的な話をするんなら、事前に言って下さいよ。そうしたら資料を持ってきますから」と三上氏。元・新左翼の大御所にしては情けない。

「逃げるな！」と右翼側から言われる。「東京裁判は全てインチキ。南京大虐殺もなかった。従軍慰安婦もなかった。当然です。おたく達の言い分は全て崩壊したんだ」「反論があったら何でも言いなさい。全て論破してみせる！」と自信満々。塩見、三上といった左翼の英雄も、地に叩きつけられた。さらに、追撃の手をゆるめない。虐殺された死体の上に、さらに銃を乱射する。

理論で粉碎されたんなら、肉体言語でやれよ、と思った。コップの水をかけるとか。殴りかかるとか。それでも敗けただろうね。かわいそうに。

3時間の大虐殺が終わり、「もう出るもんか！」と憤然として4人は帰るのかと思ったら、「打ち上げをやりましょう」と敵にすり寄る。マッカーサーにひざまずく卑屈な日本人だよ、これじゃ。そんで、ロフトの上の居酒屋「原田村」で打ち上げになった。

乾杯の音頭は敗軍の将・塩見さん。全くめげてない。ボケてんのか。元気に「乾杯！」と叫んでおった。「乾杯じゃなくて完敗だろう！」と言ってる人もいた。そう言ったら、「いや、今日は善戦した。次は徹底的に殲滅してやる！」全く懲りてない。もう次なんてないのに…。お前らは殺されたんだよ。生き返ることはないよ。このゾンビ野郎が。

見ていた我々も茫然自失でした。もう声もなかとです。大急ぎで言っとき

ますが、「次は僕を左翼側で出してくれ」といったのは撤回します。あんな殺戮現場を見たからにや、とても出る勇氣はありません。恐ろしくなりました。すくみ上がりました。逃げ道をふさがれ、虐殺なんていやですよ。殺され、ミンチにされちゃう。いや、戦場体験の恐怖で、我を忘れて、発狂し、敵側に寝返っちゃうでしょうな。鈴木君は。うん、そういう奴ですよ。あいつは。

「戦場体験放映保存の会」の人も、この虐殺をはっきりと保存・記録しておいて下さい。

では、血なまぐさい戦場からのレポートはこの辺で終わりです。なお、このレポートは一切脚色や誇張はありません。大虐殺のありのままの描写であり、レポートです。嘘だと思うなら、実際の放映を見て下さい。多分、2週間後だと思えますから、チャンネル桜です。目のあたりにしたら、戦場はもっと凄惨です。こんなもじゃないと思うでしょう。とても涙なくしては見れません。吐き気がします。ゲッ！

桜散る 大和の左翼も散っちゃった

だから3.25は 虐殺記念日 (よみ人知らず)

【だいありー】

(1)「ヨセフ・アンド・レオン」のHP(3月24日)を見てましたら、中川文人さんが驚くべきことを書いとりました。ウーン、この男、見かけによらず深いと思いました。私は「心を読まれた」と思いましたね。「心を読む機械」を持ってるんでしょう。祖国ロシアから輸入したのかも知れません。

「左翼の長老には頭のいい人はいるが徳の高い人はいない。右翼の長老には徳の高い人がいる。何故なんだろう」と言っています。確かにそういう傾向はあるな、と私も思ってました。左翼は頭がいいから、すぐ分析し、排除するからかな。右翼は頭が悪いから、まあ誰でもいらっしゃいという。つまり、〈思想〉で人を区別せんからかな。とと思ってました。しかし、中川氏は「本と交友関係」だと言います。これはビックリですね。うん、そうだったのかと。この発見には驚きました。

〈左翼の長老よりも右翼の長老のほうが、いつの時代も徳が高いんですけど、私は交友関係の問題だと思っています。右翼の思想家は、本を読んでものを考える習慣をもちながらも、本を読んでものを考える習慣のない人を相手にしないとなりません。これは大変なことです。おそらく、その苦勞の中

で徳が育っていくのだらうと思います。徳は試練を求めらるんですよ)

ウーン。これは驚いた。ホンマに深い。よく右翼の世界のことを見抜いている。私はもう右翼じゃないし、長老も目指してない。でも、昔は目指した時もある。その時の心理はまさにこれでしたね。ギャフンと言いました。

(2)ついでにネット・サーフィンをして遊んだ。「ヨシフ・アンド・レオン」さんから、有田ヨシフさんのブログに飛んだ。ここにも私のことが書かれた。有田さんに聞かれたので東中野の骨法整体を紹介してあげた。そして、一回で身体が軽く爽やかになり、モーツァルトの「魔笛」序曲なども心地よく聴こえてきた…という。いやー、詩人ですね。名文ですね。「お前とは大違いだ」と友人に言われました。私だって、整体で頭痛、肩こりが治り、島倉千代子の「人生いろいろ」も心地よく聴こえてきたんですよ。

有田さんは自らの身体の変化をこう分析していた。

〈身体の歪みや首筋の重さなどの自覚はあったけれど、その現状を教えられ、しばらく治療をしてもらった。終わったところですぐに自覚したのは眼が楽になったことだった。左の頸骨の一部に問題があり、それを改善してもらうことで血流の流れがよくなったのだと説明された。身体が歪んでいくのも生活習慣のなかでのこと。それと同じように「知識に根拠を置いた第六感」を磨くのもまた意識しなければ身に付かないことだ〉

凄いですね。頭が冴え渡り、どんどん思考も広く、深くなるんです。長年の吐き気も整体で治ったと言っていました。〈ロフトの大虐殺〉以来、私も吐き気が続いている。治してもらわにゃ。そうそう、PANTAさんも早く行きなさいよ。

(3)3月25日(土) 1:00p.m.からロフト・プラスワン。「セイント・ロフトの大虐殺」を目撃してしまいました。

(4)3月26日(日) テレ朝の「サンデー・プロジェクト」は後半45分が特集「ビラ配り逮捕と公安」。私もインタビューされました。元公安の島袋修、真田左近、北芝健さんらも出てました。驚いたのは、公安が撮ったビデオ(裁判所に提出したものでしょう)が紹介されてたことです。郵便ポストに共産党のビラを入れる人。彼を捕まえるために何人もの公安が何回も尾行する。カメラは2台もある。マンションに入ったら、「やった！」と公安が叫ぶ。凄い映像だ。「言論は大丈夫か」というシリーズで、もう3週やるそう

です。見て下さい。

午後1:30から渋谷の勤労福祉会館。「戦場体験放映保存の会」総会。元兵士の人がたくさん来てました。満員でした。盛況でした。上田哲さんにもお会いしました。

(5) 3月27日(月) 一日原稿書いとった。

(6) 3月28日(火) 6時30分。文京区民センター第3集会室。「共謀罪の新設に反対する市民と表現者の集い」。石坂啓、大谷昭宏、斎藤貴男さんらが出てた。

(7) 3月29日(水) 7:00p.m.文京シビックホール。「週刊金曜日」600号記念。憲法集会。福島瑞穂、小森陽一、鈴木宗男さんらが出てました。

(8) 3月30日(木) 2:00p.m.慶応大学に呼ばれて、〈天皇制〉について、先生たちと話をしてきました。

(9) 3月31日(金) 夕方、関西テレビの「ムハハnoたかじん」に出演しました。日帰りでした。格闘技の話です。4月14日(金)放映です。

(10) 4月1日(土) 11:00a.m. 板垣哲雄氏の葬儀。元統一戦線義勇軍の幹部だった。木村三浩、見沢知廉氏と一緒に池子闘争などを闘った同志です。4時から靖国神社で仕事。

【お知らせ】

(1) 4月5日(水) ロフト。宮崎学さんと村上正邦さんのトーク。

(2) 4月7日(金) ネーキッド・ロフト。保坂展人さんと栗本慎一郎さんのトーク。

(3) 4月11日(火) 7時。高田馬場のライブ塾。滝大作と私が出ます。

(4) 5月15日(月) 7:00p.m.角筈区民センター。矢崎泰久さん、山根二郎さん、私のトークです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

今週の主張 4月10日

靖国奉納プロレスを見た。愛国心と格闘技を考えた

(1)毎日がエイプリル・フールなんかもしれん

4月1日(土)4時から靖国神社で仕事。…と、先週のブログに書かれとった。なんだろう、これは。と問い合わせのメールが沢山あった。うるせーな。だから仕事だよ。

「『あんにょん・サヨナラ』の討論会なの？でも靖国神社でやれるはずがないし」という人もいた。そんなことしたら右翼に襲撃されちゃう。あの映画の中でも、イ・ヒジャさんたちは右翼に襲われていたじゃないか。

「まさか靖国に参拝し、そこで演説するとか。あるいは討論会をするとか。そんなことをしたんじゃないの？」

「いや、鈴木がそんな殊勝なことをするわけではない。参拝のノルマは達成したから、もう行かないと書いてたし…」

と、いろんな憶測が乱れ飛び、疑惑が疑惑を生んじょりました。この人は、人生の全てを〈数字〉で割り切っているようです。つまり、ノルマです。計算の病気です。「ニューメロマニア（計算狂）」という病気です。

常に数を数えている。数えてないと不安なんです。本は月に30冊読む。今日は2時間読む。朝は4時間、原稿を書く。柔道は週に一回行く。ご飯は20回かむ。玄関までは10歩で歩く…と。

ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』だと思ったが、裁判官が自分の部屋を出て法廷に行くまで歩数を数えている。奇数で着いた。ヤバイ！と思い、自分の部屋に戻り、歩き直した。偶数にならなければいけないのだ。

我々もよくありますよね。電車に乗って、つい向こうに座ってる人間の数を数える。窓外に走り去るビルの数を数える。電線にとまってるカラスの数を数える。

を数える。電柱を数える。つまり、いつも、何かしら数を数えているんです。

そして一定量に達すると、どこかホッとするんです。満足するんです。40年間の愛国運動の中で、私は「君が代」を5千回歌った。「日の丸」も5千回掲揚した。靖国神社は500回参拝した。「愛国者のノルマ」は軽く超えている。だからもう何をやってもいい。何を言ってもいい。

靖国神社だって、もう参拝しなくていい。だから、参拝して、そこで「仕事」するわけではないでしょう。

さて、謎解きです。4月1日はエイプリル・フールでんがな。全部、嘘でんがな。

では、おしまい。と言いたいけど、そんなことでは終わらへん。「エイプリル・フールだ」というのもエイプリル・フールです。嘘です。やはり本当に靖国に行ったんです。桜が真っ盛りでした。多分、1年中でこの日が一番人が多いんです。8月15日よりも多いんです。中に入ったら、人、人、人で全く進めない。両側には露店も出てるし、もの凄い混雑でした。

それで、桜を見て、酒を飲んで、歌って、騒いだわけですね。おわり。「仕事」というのは見学でんがな。仕事にアブレとって、いつも遊んどる。あるいは図書館に行っとる。あまりに恥ずかしいから、「靖国神社で仕事」と書いたんですね。前に、「メイド喫茶に取材」というのがあったけど、あれだって、ただ、好奇心で行っただけやねん。仕事なんかあるもんか。無能なオラに仕事を頼む雑誌なんかあらへん。だからこれも見学。「靖国で仕事」も見学。すんませんでしたな。社会を騒がせて。はいこれでおしまい。

と、いうのもエイプリル・フールでんがな。フールが二転三転しちよる。やっぱり、本当は仕事なんです。それも、かわった仕事です。

この1週間前、一本の電話がありました。「4月1日に靖国神社で奉納プロレスがあるんです。外人も多く出て、日本のナショナリズムを前面に打ち出した試合です。これは是非、鈴木さんに見てもらって、そのあと、お話しをうかがえないかと」

エッ、本当かよ。そうか。去年も確か「奉納プロレス」はやられたんだよな。今年もやるのか。日本のナショナリズムとプロレスか。両方とも関心のあるテーマだ。「これは鈴木さんでなくては出来ないテーマだと思いますし」と、編集者も持ち上げる。うれしがらせを言う。「じゃ、行きましょう」と即答しましたよ。

「でもエイプリル・フールじゃないでしょうね」なんて聞かない。そんなことをする雑誌社はないよ。「でも寒いでしょうね。屋外だから」と聞いた。「寒いでしょうね。沢山着込んで来て下さい」と言われた。それで夕方の4時から7時まで、見ましたよ。それから、車で四谷に移動して、インタビューを受けました。9時まで。この日は朝は11時から横浜で板垣氏の葬儀があったんで、家を9時前に出た。だから一日中、大変だった。前日は、大阪に行ってきたし…。

では、靖国奉納プロレスの話だ。「プロレスなんか、どこでやれるんだ」と思うかもしれないが、相撲場があるんだ。そこでやった。遊就館は有名だよ。特攻隊の遺書が展示してある。その遊就館のさらに奥にあるんだ。相撲場が。昔はここで、よく、奉納相撲が行われていた。相撲というものは元々、神社の奉納相撲が起源だ。昔、力士は大名に抱えられ、神社の奉納相撲が主な活躍の舞台だった。靖国神社もそうだ。特にここは、「戦争で亡くなった英霊を慰める」という主旨もある。戦前・戦中は勿論、戦後も長い間、奉納相撲は行われてきた。

驚いたことに、昔、一度だけ「奉納プロレス」が行われたのだ。坪内祐三さんの『靖国』（新潮文庫）で知った。写真も出てるから間違いない。昭和36年（`61年）4月23日だ。今から45年前だ。1万5千人の大観衆で超満員だった。この5日後に奉納大相撲が行われているが、こっちは観衆は1万人。国技の大相撲がプロレスに負けている。

「奉納プロレスリング大会」と銘打ち、翌日の新聞はどこもデカデカと載せた。「靖国に捧ぐ決闘」「歓声と拍手にわく遺族」といった見出しで。45年前だから、遺族の方も多かった。それに、プロレス熱も凄かった。力道山、馬場、猪木も出ている。プロレスは当時、「憎いアメリカ人」をやっつけてくれるものだった。遺族も英霊も大喜びした。

(2)大正10年には何と「柔道vsプロレス」の奉納「異種格闘技戦」がやられた

坪内さんの本にはさらに興味深いことが書かれていた。力道山の「奉納プロレス」のさらに40年前（つまり今から85年前）、靖国神社で何と「柔道vsプロレス」の異種格闘技戦が行われていた。大正10年3月5日だ。

この日のメインイベントは怪力サンテルと柔道家の永田二段。他には、ウェーバーと増田二段の試合などがあり満員だったという。

じゃ、PRIDEと同じじゃないか。「何でもあり」だ。85年前に、PRIDEの

原点はあったのか。と思ったら、ちょっと違った。

この「柔道vsプロレス」は、ルールがひどい。プロレス技は危険だという理由で、レスラーの技はほとんど禁じられた。さらにレスラーには柔道着を着せて戦った。これじゃ、完全に「柔道の試合」だ。結果的には柔道の圧倒的勝利。投げまくり、極めまくり、落としまくった。

日本の圧勝だ。喜んだお客さんも多かったが、「ルールがおかしい」「フェアじゃない」「卑怯だ」という声も上がった。当然だろうよ。日本人が勝てばそれでいいというもんじゃない。奉納された英霊だって、「正々堂々と闘うのが武士道だ。これは卑怯だ」と思っただろう。

靖国神社は英霊をお祀りする厳粛な場だ。それと共に、そこで娯楽も奉納する。だから、エンターテインメントの場にもなっている。桜が満開になれば、露店がびっちり並び、昔懐かしい食べ物が並ぶ。又、猿回しが出たりする。昔は、サーカスがやられたりした。相撲も奉納された。今見たように、「柔道vsプロレス」の試合も大正10年に奉納された。

奉納プロレスの初めは`61年の力道山だ。そして去年、何と44年ぶりに再び奉納プロレスが行われ、今年は第2回目だ。坪内祐三さんも去年見たという。「今年も見に行く」と『en-taxi』に書いてたので探したが見つからなかった。東條由布子さん（東条英機のお孫さん）もロフトでトークした時、「靖国神社で奉納プロレスをやったんですね」と言っていた。もしかしたら見たのかもしれない。東条英機も喜んでいたのだろう。

`61年4月23日に力道山がやった時は、日本プロレスがやった。プロレス団体はこれしかない。ところがその後、プロレス団体は急増した。乱立した。去年の4月7日に行われた時は、どこがやったのか。新日や全日、ノアといった大手ではない。「ZERO-ONE」（ゼロワン）という団体だ。

元は橋本真也が中心の団体で、この奉納プロレスも彼がぶち上げた。ところが、橋本はゼロワンと決裂した。さらに急逝してしまった。だから、奉納プロレスに上る機会は永遠に失われた。去年は、代わって大谷晋二郎がメインをつとめた。佐々木健介も出場。又、小川直也も友情参加し、ハッスル一本締めを初披露した。

第2回目の今年はとにかく寒かった。4月1日にお花見に行った人なら分かっただろうが、寒い。特に夕方から夜にかけては寒い。ガタガタ震えながら見ていた。

でも試合は面白かった。実はプロレスの試合を見るのは久しぶりだ。それ

に靖国神社の相撲場に入ったのは初めてだ。常設の土俵がある。その上に、スッポリとかぶせる形でリングを作る。うまく出来ている。ナショナリズムを強調してか、日本人とアメリカ人の対決もある。謎の酔拳もある。（これは一番面白かった）。「神風vsランジェリー武藤」なんて対戦もある。安田や川田も出た。驚いたことに大仁田も特別参加し、場外乱闘をしていた。客席は土だから、そのたびに土煙が上がり、さながらイラクの戦場のようだ。イラクと一緒にいったライターの加藤さんも来て見ていた。靖国神社の神主さんたちも沢山見に来ていた。プロレス好きの人が多いなだね。

大仁田は国会議員だよ。国会議員が靖国神社で暴れちゃまずいんじゃないの。中国は何と言うだろうね。と心配したが、何も言わんじやろう。首相が闘ってるわけじゃない。そう。じゃ、首相がリングに上がりゃいい。中国、韓国の首相とリングで対戦したらいい。ああ、こうだと口で言い合ってるよりも、リングの試合で決める。小泉首相が勝ったら、「8月15日に参拝する。もう文句は言うな！」と言う。負けたら、参拝をやめる。実にすっきりしていいじゃないか。靖国の英霊だって、それで納得するだろう。と思うが、まずいかな。

(3)前日は桜庭和志、橋下徹、やしきたかじんと格闘トークでした

試合が終わってから、車で四谷に移動。ルノアールで取材された。「いやー、いいものを見せてもらいありがとうございました。英霊になりかわって礼を言います。と感謝した。小泉さんに参拝してもらうよりも奉納プロレスの方を喜んだでしょう。又、奉納大相撲よりも、こっちの方が嬉しかったはずですよ、と言った。

だって、考えても見りゃんせ。大相撲は、横綱がモンゴル人。優勝決定戦は朝青龍と白鵬のモンゴル対決。三賞は全てモンゴル人。こんなの見たら英霊はビックリするがな。「ギャ！またも元寇が来た！」と大パニックになる。安眠できんがにや。

だから、プロレスでいいんだ。これからは、他の団体も、どんどんやったらいい。大仁田も自主興行でやったらいい。靖国初の「電流爆破デスマッチ」「金網デスマッチ」「画鋏、ガラス…デスマッチ」をやったらいい。まさに〈戦場〉だ。靖国にこそふさわしいぜよ。

愛国者・前田日明もリングスを再建し、やったらいい。ロシアに人脈があるから、「日露大戦争」をやる。全試合、日本人対ロシア人にする。面白い。少なくとも本当の戦争をやるよりはいい。

お次は佐山サトルだね。彼は元のタイガーマスクだ。しかし今は極右だよ。「タイガー・ユージェント」なんて無気味な集団も持っている。佐山の門下の桜木裕司なんて、後樂園でやった試合の時にマイクアピールをしていた。「今年は日露大戦争100周年です。今日の勝利を靖国の英霊に捧げます！」

じゃ、靖国で試合をやれよ。アメリカ人、ロシア人、イギリス人、フランス人…と、かつての「敵国人」を全て呼んで、闘えよ。東條さんの孫にも出してもらおう。これは無理かな。オラも出たいな。相手に柔道着を着せたら、勝てるかもしれない。たとえ相手が大仁田でも…。でもこれは大正10年の「柔道vsプロレス」と同じになる。卑怯だよ。いかん、いかん。じゃ塩見孝也でいいよ。こいつと「左右激突デスマッチ」をやる。まア、10秒でKO出来るな。絞め落としてやる。でも、弱い者いじめをしても仕方ないか。「聖口フトの大虐殺」と同じことになっちゃうか。じゃ、やめた。

そうだ。右翼5人と新左翼5人のデスマッチなんて面白いね。桜チャンネルの「左右激突4対4」も、ここのリング上でやればいい。新左翼vs機動隊というのもいい。こうして、無限に夢はふくらむね。

では、靖国プロレスの話はおしまい。次に前日に戻る。3月31日(金)だ。関西テレビの「ムハハnoたかじん」に出た。前回12月に出た時はテーマが「三島由紀夫」だったが、今回は、「男のプライド(誇り)」。プライドを持って闘ってきた四人が出たわけだ。

「プライドをかけリングに立つ男。桜庭和志」

「プライドをかけ法廷に立つ男。橋下徹」

「プライドをかけ国を愛する男。鈴木邦男」

「プライドをかけマイクを握る？やしきたかじん」

それぞれが自分のプライドや、思いを語り合いましたよ。楽しかったですね。

桜庭さんは秋田出身だ。僕も、小、中学校と秋田だった。その話をした。東北人は口数が少ない。雪が降るからだろう。「鈴木さんの、モゴモゴ喋るのがかわいい」とキャスターの江口ともみさんに言われました。別にかわいれないけど。でも、やしきさん、橋下さんは実によく喋る。ついていけん。関西人はお喋りだ。散文だ。東北人は詩人だ。石川啄木も、宮沢賢治も寺山修司も皆、東北人だ。と言ったら、「そのうち、啄木しか知りません」と桜庭さんは謙遜して言っていた。

そうそう。本番の始まる前に、「どうやったら月に30冊読めるんですか」と江口さんに聞かれた。「速読をしてるんですか？」とも。

速読なんかしてません。速読術なんて意味がない。と私は思ってます。たとえば「速読術」をマスターしてドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』を20分で読めたとする。それが何になるのだろうか。ただ、粗筋を読んだだけだろう。何も考えてやしない。こういう長い小説は、1年かかってもいいんだ。少しずつ考え考え読む。それでいい。世界の大家作家や大思想家の本は、じっくり時間をかけて読んだらいい。そこの中で、疑問に思ったり、悩んだり、怒ったり、苦しんだりすればいい。それが自分の血となり肉となる。

まア、そんなに大家作家や大思想家の本ばかりあるわけじゃない。むしろ少ない。だから、そんな本は早く読めるだろう。そうだ、出版社に勤めてる人にも聞かれたな。

「仕事で本は沢山読んでいます。しかし、必要な箇所だけ読んでから、一冊全部を読むことにはならない。これではノルマに入らないんですか」と。

入らないですね。しかし、キッカケがあるというのはいいことだ。仕事で必要な部分を読んだのが本の5分の1だとする。そんな形で、何冊も「部分読み」した本がある。それがどんどんたまる。いいことじゃないか。本当は大事な所はその5分の1だけかもしれない。でも、その大事な部分を読んだら、ついでに残りも読んだらいい。大事な所は押さえているのだから、あとはスラスラ頭に入るはずだ。

僕は毎週木曜日に牧野先生と河合塾コスモで「読書ゼミ」をやっている。牧野先生は、理科や数学や哲学など、僕らの全く知らない分野の本を読むことが多い。僕も、まだ読んでない本を探して持っていく。90分で読めるのは60ページくらいだ。本全体の「4分の1」か「5分の1」だ。じゃ、その後も読んでみようと思う。皆と話し合ったりすると、自分の問題意識も刺激されて、本を読む意欲がわく。

それと、何だな。きちんと「×切」をもって読む。これだな。原稿だってそうでしょう。何日まで何枚、何のテーマで…ということがあるから書ける。たまにあるんだよな。「何でもいいから書いて下さい。何枚でもいいです。×切もありません」。勿論、原稿料もない。いつでもいいや、と思うと、ずっと書けない。そんな原稿を頼まれたこともあったが、何年も書いてない。

本だってそうだ。いつも言ってるが、「三島由紀夫全集」をデンと42巻

買ったなら、多分、一生読まないよ。一冊ずつ図書館から借りて、2週間で返さなきゃいかんと思うから必死に読む。仕事が忙しくて読めない時は、ジョナサンにいて深夜、5時間位読んだりする。「うん、偉いね」と自分で自分を褒めてあげる。

それでも読み切れない時は、延長してもう2週間借りる。たまにだが、そんなこともある。

ともかく、月に何冊読む、この本は何日までに読むというノルマを決めることだね。名古屋に面会に行った死刑囚の人は、「鈴木さんにならって月30冊読もうと思いましたが、出来ませんでした。でも月10冊は読んでます」と言っていた。偉いね。(このことは今出てる『創』にも書いた)。「知り合いのOLでやはり、月10冊読んでる人がいるよ」と言ったら喜んでた。

面会に行ってやったらいいよね。このOLも。「月10冊友の会」でも作って、皆も、10冊が無理なら5冊でもいい。ただ、テレビや新聞を見て、それで原稿書いてる人もいるけど、それじゃアカンでしょう。「情報は全てパソコンから取る」という人もいるが、これでは皆同じ原稿になってるよ。学生のレポートなんて、実際そうなんだ。

本も読まず、ものを考えず、悩みもしない人とはもう話もしたくないね。「月10冊以上読まない人とは話をしない」と決めるかな。それじゃ、友達がいなくなるか。でも、どうせ、元々、友達なんかいないからいいや。

【だいありー】

(1)4月3日(月) 三島由紀夫のことで取材される。今月末に「憂国」がDVD発売される。又、キネマ大森で4月8日～5月12日に「三島由紀夫映画祭」が行われる。僕の見ない映画もあるし、これは見なくっちゃ。

そういえば、天皇を描いたロシアの映画「ソイツェ(太陽)」がこの夏に上映されるそう。決まったらお知らせします。

(2)4月4日(火) 一日原稿をを書いてた。夜、柔道。

(3)4月5日(水) 1時。ジャナ専入学式。池袋の豊島公会堂。ここは第1回の「憂国忌」をやったとこだなと思い出した。記念講演は鳥越俊太郎さん。ジャーナリスト志望の学生に、熱く語っていた。夜はロフト。宮崎学さんと村上正邦さんのトークを聞きに行く。村上さんは元「生政連」(生長の家政治連盟)から選挙に出ていた。その頃、僕も応援に行った。なつかしい。

このHPの元管理人・赤坂細子も来ていた。「私も靖国プロレスを見に行っ

たのよ」。細くて分からなかった。来年は「奉納女子プロレス」に出場するんだろう。

(4) 4月6日(木)図書館でお勉強。

(5) 4月7日(金)午前11:00。河合塾コスモの入学式。夜、ネーキッド・ロフト。保坂展人さんと栗本慎一郎さんのトークを聞きに行く。

(6) 映画「ミュンヘン」はよかったですね。ああいう殺伐とした映画を見ると血が騒ぎ、やる気が湧きますね。映画「力道山」もよかったです。去年の靖国プロレスに出る予定だったが、出れず、その直後に亡くなった橋本真也が、この映画に出ていた。まるで生き返ったような気がした。横綱をやめてプロレスラーになった東富士の役で出ていた。なかなか似合っていた。力道山と闘う木村政彦には船木が扮していた。それもよかったです。

(7) 3月31日(金)に関西テレビで録画した「ムハハnoたかじん」は、放映が4月14日(金)19:24~19:57です。「プライドって、しんどい？」～何にこだわり、何と闘っているのか？ がテーマです。見て下さい。そうそう、31日は、二本録画撮りをするんだそうで、二本目に出る小田晋さんと久しぶりに会った。「確か前も大阪のテレビで会いましたね」と言ったら、「いや、名古屋のテレビです」。「誰が司会でしたっけ」「板東英二さんです」。イヤァー、記憶力がいい。かわった人だが面白い人だ。又、じっくり話してみたいです。

【お知らせ】

(1) 4月10日(月) ネーキッド・ロフトで塩見塾があるんですね。聞きに行っ
てあげて下さい。木村三浩氏と「パトリオット対談」だそうです。

(2) 4月11日(火) 7時。高田馬場のライブ塾。滝大作さんと私が出ます。

(3) 4月15日(土) 月刊「EX大衆」が発売です。女帝問題で私のコメントが
出てます。

(4) 5月15日(月) 7時。角筈区民センター。矢崎泰久さん、山根二郎さんと
私のトークです。

(5) 先週の「主張」について抗議のメールをもらいました。「残酷なのは右翼
側じゃなく、お前じゃないか。歌なんかよむ余裕があるんなら左翼を助けて

やれよ！」と。でも、本番中は静かに聞いてなくちゃいけん。声も出せないし、助けにもいけんかった。でも私が何もしないことで左翼側が大虐殺されたのかもしれない。じゃ、「未必（みひつ）の故意」かな。えっ、意味が分からんて。電子辞書でも引いてみりゃんせ。

(6)小林よしのりさん編集の『わしズム』最新号に木村三浩氏が原稿を書いています。又、骨法道場の堀辺正史先生と小林さんが対談しています。

(7)仕事で四つの美術展を一気に見ました。東京都美術館で「プラド美術展」。国立科学博物館で「ナスカ展」。国立西洋美術館で「ロダン展」。東京国立近代美術館で「藤田嗣治展」です。皆、よかったですね。勉強になりました。

(8)最近、喫茶店で本を読んでもと、よく知り合いに会う。鴻上尚史さんは脚本の直しをしてみました。「SPA!の連載、長いですね」と言ったら、「もう12年ですよ」と言っていました。連載開始したのは僕の「タコペ」と同じだったのに。もう一人、青木みつえさん（漫画家）。この三人が同時に連載スタート。僕らは6年前に終わったのに、鴻上さんは長期連載だ。うらやましい。人気もあるし、実力が違うから仕方ないか…。

(9)詩人の正津勉さんとも会った。「今日は、詩人の会で玄洋社の話をしてたんですよ」と言う。凄いですね。僕は最近、中央公論社の『日本の詩歌』（全31巻）を読破した。そのことをついつい、言っちゃった。生徒が先生に自慢げに報告するように。いやな私です。自己嫌悪に陥っちゃった。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

年

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)
[2006年](#)

今週の主張 4月17日 オラの原点は『燃えよ剣』だわさ 「新潮現代文学」（全80巻）を読破した！

(1) 学生時代の方が「質の読書」をしていたな

「新潮現代文学」（全80巻）をやっと読破した。普通、読書は「楽しみ」でやるが、これはもう「仕事」だし、「一大事業」という感じだ。それだけの決意と覚悟がないと出来ない。時間もかかったし苦勞、苦痛も多かった。大学生の頃ならばもっと早く集中して読めたらうに、と思った。

「生長の家学生道場」にいた時、谷口雅春先生の『生命の実相』40巻を読まされた。夏休みの課題だ。40日の間に40冊だ。でも、これは軽かった。1日に2冊、3冊と読んだ日もある。

又、大学の試験前には授業の先生の本を一晩に1冊、2冊と読んだ。多い時は一晩に3冊読んだことがある。それで次の日の試験を受けた。早稲田は出席はうるさくない。今は違ударろうが当時はそうだ。語学と体操は出席点がうるさいが、他は一年間出なくても試験さえ受ければいい。その先生の本を前夜に読めば、そこから問題は出る。それで「優」をとれた。大学の試験なんてチョロイもんだと思った。「よし！全優をとってやろう」と思った。1年、2年と目的は達成した。ノルマの達成だ。ところが2年の後半に早大ストが起こり、巻き込まれてしまう。授業どころじゃないし、試験も出来ない。又、あっても、運動が忙しく、授業どころじゃない。

左翼学生と闘っている時、「今は明治維新だ」と思った。「俺は竜馬だ」と思った。皆、そう思ったはずだ。だから、「全優」の夢はサラリと捨てた。国が危機なのだ。大学が危ない。そんな時に、自分の成績のことなんて小さい、小さい。そう思ったのだ。

しかし、左翼と殴り合いばかりしながらも、でも本は読んでたな。社学同は「組織された暴力を」と言っていた。でもこれじゃ「組織暴力=ヤクザ」と同じじゃないかと思った。だが、〈暴力〉は格好よかったんだ。闘う男は格好よかったんだ。僕ら右翼学生も〈暴力〉だった。知的暴力団だった。

不思議なのは、あんなに忙しく、毎日ヘトヘトになるほど運動していたのに、よく本を読んでたことだ。ヘーゲルとかカントとか、アダム・スミスとか。分からないながらに必死に読んだ。あのエネルギーは何だったんだろう。闘いながらも知的刺激があったし、又、出版社も思想全集をどんどん出した。それが、売れていた。「世界の名著」「世界の大思想」など全冊、貪るように読んだ。読んでないと学生じゃないと思われた。見栄で読んだのもある。

月に何冊位、読んでいたんだろう。もの凄く読んでた気もする。しかし、「ノルマ主義」はまだ実行していない。ノルマを決めたのは社会に出てからだ。本を読む環境、刺激がなくなり、「これでは自分がダメになる」「壊れる」と恐怖に襲われた。それで、「月に30冊読もう」と決め、自分を支える堤防にした。そのノルマ主義を実行して30年だ。

大学の時は、そんなノルマ、義務を自分に課さなくても、本は自発的に読んだ。でも、もしかしたら〈数〉は今よりも少なかったかもしれない。ヘーゲルやカントを読んでいたら、とても月に30冊は読めないだろう。それに今と違って「併読」はしてなかった。一冊の本を集中して読んでいた。朝から晩までカントを読む。それれを何日も何日も続ける。そんなことをやっていた。

思想書、哲学書が多かった。小説はほとんど読まなかった。俺達の人生がいつか小説になると思っていた。俺達は英雄になる。それを調べ書くのが小説家だ。と、思い上がっていた。

そんな中でも、闘いに「必要な小説」だけは読んだ。司馬遼太郎の「竜馬がゆく」「燃えよ剣」、それに高橋和巳、柴田翔、三島由紀夫、などだ。読んだ本は少なかったから、それだけ強烈に影響を受けた。「男はこう生きるべきだ」と指針を与えられた。自分の人生のテキストのようだった。自分の人生そのものになっていた。

だから嫌だったんだよね。今、読み返すのは。「40年前、強烈な印象を受けた」「うん、あれで人生が変わったよね」と、自分の中で会話して、確認していればいい。他人に言うことでもない。初恋の思い出のように大切にし

ておくべきだろう。

でも今はノルマ主義がある。懐かしさだけに浸ってられない。だから、何とかそういう本は後回しにした。「新潮現代文学」（全80巻）を読む時も、高橋和巳、柴田翔、司馬遼太郎、三島由紀夫、島尾敏雄などは最後の最後までとっておいた。「昔の自分」に再会するようで怖かったのだ。しかし、そうもいってられない。恐怖に立ち向かい、突き当たって、やっとこさ、読破した。

この全集は中野図書館で借りて読んだ。図書館では2週間で10冊だ。そのたびに、この全集の1冊を借りる。三島の全集も借りる。この二つが重い。図書館だけで月に20冊。あとは自分で買った本、人にもらった本などだ。だから30冊は何とか読める。この「新潮全集」は月に2冊だ。すると1年に24冊か。全部読むのに3年4ヶ月かかったわけだ。長期プロジェクトだ。

何十年かぶりに本を読み返す。これにはプラスもあるがマイナスもある。と最近思った。「新たな発見」があるというのはプラスだ。しかし、マイナスもある。昔読んでもの凄い衝撃を受け、影響を受けた本がある。それが、年月が経つほど、どんどん膨らむ。幻想が広がる。「うん、あの本のおかげで今の俺はあるんだ」「あんなに心を打たれた本はない」と思う。又、これは自己弁護でもあるし、自分で自分をかわいがってるからでもある。

子供時代や学生時代に読んだ本に心を打たれ、大事にしている。そんな自分を大事にしてるんだ。（心のどこかで）。あっ、俺って、純情だったんだな。心が優しいんだな。と思っている。自分をいとしいと思い、「いい子、いい子」と慰めている。それが何十年かたって、その本を実際に読み直してみる。「えっ、こんな本だったの」「つまらない本だな」と愕然とすることがある。

(2)当時の右翼学生には「竜馬派」と「土方派」があった

司馬遼太郎の「燃えよ剣」だ。変な話だが、これは学生時代の自分の「教科書」だった。「行動規準」だった。「法度（はっと）」だった。だから余り人にすすめたくない。読んでもらいたくない。僕だけのものとして取っておきたい。そんな気分だ。

民族派学生は大きく言って、「竜馬派」と「土方派」に分かれていた。いや、これは違うな。皆、竜馬派だ。ちょっとひねくれた奴が、「土方派」だ。当時の民族派学生は三島の小説ばかり読んでたと思うかもしれないが、

違う。司馬なんだ。それに高橋和巳だ。

司馬の中でも、圧倒的に「竜馬」だ。（これは後で分かったんだが）、左翼も好きだった。竜馬は明るく、ポジティブで、考え方も斬新だ。維新の志士だ。その点、土方歳三は、志士を斬りまくった新選組の副長だ。「保守反動」の親玉だ。殺人集団の副長だ。

でも、森田必勝氏は、「土方がいい」と言っていた。森田氏は三島と共に自決した「楯の会」の学生長だ。「竜馬より土方だよ。男の生き様は」と言っていた。

でも、土方は徳川方だ。幕府を守るために勤王の志士を殺したんじゃないか。〈敵〉じゃないか。そう思うかもしれない。しかし、違うのだ。新選組は会津藩の松平容保の命を受け、天皇を守るために京の治安の任に当たった。天皇を守るためなんだ。それに、僕らが学生運動をやってた時代を考えてほしい。主張してることは勤王の志士だよ。思想は。しかし、時代は全共闘だよ。大学はどこでも左翼ばかりだよ。世の中もそうだ。右派、民族派なんて、ほとんどいない。そんな「時代の波」に抗して俺達は闘うのだと思った。メンタリティの部分では、まさに新選組だったんだ。追いつめられ、悲壮な覚悟で〈時代〉に立ち向かう新選組だったんだよ、僕らは。

読んだ時は、凄まじい小説だと思った。『燃えよ剣』は。何やら、ピカレスク（悪漢小説）のように思った。闘い、闘い、闘いの中に生きていく。そして、内部に対しても厳しい。峻厳を極める。「仲間殺し」の連続だ。しかし、土方はいささかも動揺しない。冷血だ。冷酷だ。ここまで徹底できるのかと思った。

それに、「滅びの美学」だ。そこに感動した。敗北しかないと分かりながらも、どこまでも闘い続ける。そして、函館で壮烈な戦死を遂げる。のこのこと出頭し、捕まる近藤勇とは違う。うん、男は土方のようでなくっちゃ、と思った。

ところが、今、読み返してみて、「あれっ、こんなもんだったの」という感じだ。「内部粛清」だって、これを読んだ後に連赤（1972年）がある。又、内ゲバではないが、よど号ハイジャック、三島事件、経団連事件、赤報隊事件…と、大きな事件が頻発した。それは、リアルタイムの〈現実〉だ。凄まじい〈現実〉がどんどん起こり、続く。又、昔読んだ時は、お雪さんとの恋は、燃えるような激しい恋で、「うん、いいな、こんな一生一度の恋も」と感動した。

つまり、「激しさ」も「凄まじさ」も、「恋」も、僕の中では、ずっと心の中に宝物のように置かれていたんだ。本当は〈現実〉がはるかに凄く、超えて突き進んでいるのに。だから、読み返さないことがよかったんだ。大学生の時に読んだ感動と衝撃だけが、ずっと心の中であって、どんどんと幻想が膨らんでいったんだ。それで自分の人生の指針にしてきたのだ。

こういう本は読み返しちゃいけないんだよな。細かい筋は忘れても、「でも、あの時の感動はもの凄かったな」「そう感動する俺もひたむきで、純真だったな」とずっと思っていればいい。人生には「読み返してはいけない本」があるんだよ、きっと。

ところが、「ノルマ主義」が私の40年間の夢と幻想を打ち砕いた。…と、いうと、悪いことばかりのようだけど、新しい発見もあった。連合赤軍だって新選組と似てるな、と思った。このことは前にも書いた。お雪さんとの恋も、案外と、サラリとしたもんじゃないか。と思った。このあと、濃厚な恋愛小説を沢山読んだせいかもしれん。又、あの時は、「お前もこう生きろ」「土方のように死ね！」と言われてた。(いや、そう読んだ)。アジテーション(煽動)小説だと思った。しかし、それは誤解だった。今はもっと突き放して、大人として読んでいる自分がいた。

そして、エッ、こんなことがあったのか、という発見がいくつもあった。当時は読んでいても全く感じてなかったんだ。鈍感だから。

たとえばこんなところだ。

新選組の監察に山崎すすむ(ネットの文字コードでは漢字が出んよ)という男がいる。新選組ファンならよく知ってるだろう。情報収集に当る役だ。スパイだ。池田屋の変では、薬屋に変装して池田屋に泊まり込み、放胆な諜報活動をした男だ。

新選組が大活躍をする裏方の仕事をした。しかし、時代の流れで、どんどん徳川幕府は追いつめられる。菊は栄える、葵は枯れる、だ。そして鳥羽伏見の合戦で敗れる。幕府軍艦富士山丸は土方ら新選組隊士44人を乗せて大阪天保山を離れた。天保山というのは今は巨大な水族館があるところだ。

(3)沖田のように、猫を斬りそこねて死ぬ。いいね

負け戦さだから、重傷者も多い。山崎もその一人だ。そして船の中で息を引き取った。その時の描写だ。

〈葬儀は、洋式海軍の慣習により水葬をもってせられた。山崎の遺骸を布

でぐるぐる巻きにし、錨をつけ、国旗日の丸をその上にかけ、甲板には艦長以下の乗組員、士官、執銃兵が堵列（とれつ）した

〈そうか、海軍が山崎の葬儀をしてくれるのか〉と、士官室で病臥したきりだった近藤（勇）も、紋服、仙台平をつけて、甲板上に出てきた

山崎は日の丸にくるまれて水葬されたのだ。もしかしたら、「日の丸水葬」の第一号かもしれない。前にも書いたが、日の丸は幕府の旗で、官軍は錦の御旗だった。本来なら、賊軍の旗「日の丸」は打ち捨て、「錦旗」を国旗にするところだ。ところが、あえて賊軍の旗「日の丸」を国旗にした。これは凄いことだ。実は司馬も、文中、「国旗日の丸」の直後にカッコして、こう注を入れている。

〈嘉永6年ペリー来航以来、幕府はこれを日本の総旗じるしとしていた。鳥羽伏見の戦いでも幕府は日章旗をかかげ、幕府海軍も軍艦旗に日章旗をもちいていた。これを国旗として維新政府があらためて継承したのは、明治3年1月である〉

土方は鳥羽伏見で敗れてから、会津に行き、仙台に行き、さらに函館に行き、つねに日の丸の旗と共に戦っている。うん、いいね。新選組の旗だから国旗は日の丸がいい。待てよ、新選組は「誠」の旗じゃないのかな。でも、函館に向かって行く時は、全部、日の丸だ。そうだ。じゃ、「日の丸」にかえて、「誠」の旗を日本の国旗にしてもいいな。自衛隊は改憲したら国防軍になるそうだから、制服は、新選組の服ですよ。国歌は「新選組の歌」ですよ。マズイかな。

土方は函館で戦死した。「男の死はこうありたいね」と森田必勝氏は言っていた。実際そうだっただろう。その点、局長の近藤勇は格好悪かったね。流山で状況判断を間違った。流山に陣をしきながら、官軍が来ると、何と、わざわざ出向いて、「錦旗に手向かう者ではない」と釈明に行く。近藤の理屈はこうだ。

〈流山屯集部隊は、要するに、利根川東岸の治安維持のために駐留している、と申しひらきすればよい。不都合である、と官軍がいえば、解散させるまでで、それ以上のきびしい態度を官軍がとるとはおもわれぬ。

なぜならば、江戸府内の治安維持についても、官軍は、彰義隊を半ば公認し、それに一任しているかたちなのである。

「流山屯集隊もおなじではないか」

だから近藤は甘く見た〉

本当に甘い。土方に「あんた、正気か」と問われ、「話せばわかる」と答えている。さらにこう言う。

「賊名を残したくない。私はお前とちがって大義名分を知っている」

土方を突き放している。しかしこれは近藤が間違っている。後世の名なんてどうでもいい。最後のギリギリまで戦ったかどうか。それが男の人生を決める。近藤は楠正成を尊敬していた。一番尊敬していた。「新選組が？」と思うかもしれないが、新選組は、京都で天皇のために働いた。天皇を守るために、不逞浪士どもを取り締まり、斬りまくったのだ。「我れこそは第一の勤王」という意識がある。それなのに薩長が先に「官軍」を名乗ってしまった。

まつり上げる〈玉〉をとられたのだ。だから近藤は、悩む。逡巡する。徳川慶喜にしてもそうだ。彼だって勤王だ。なんせ水戸学だ。だから天子様に楯突くわけにはいかない。そして慶喜が最も尊敬したのが楠正成だ。「楠のようになりたい」「賊軍になりたくない」という言葉に二人とも呪縛されてしまったのだ。その点、土方は、そんなものからは自由だった。

「楠正成」はそれほどの影響力を人々に与えた。しかし、楠正成は本当のところはどうか。司馬はこう言っている。

〈徳川光圀は、それまで史上無名の人物に近かった尊氏の敵、楠正成を地下からやりおこし、史上最大の忠臣とした。勤王志士のエネルギーは、「正成たらん」としたところにあった〉

志士だけではない。徳川慶喜も、新選組の近藤も、そう思ったのだ。その為には身動きがとれなくなり、自滅した。近藤は流山で捕らえられ、板橋で斬られ、さらし首になった。土方は華々しく戦死した。沖田総司は猫を斬りそこなって死んだ。これもロマンだ。肺病で寝ていた総司は、いつも庭に来る黒い猫を斬ろうとして大刀を抜こうとした。斬れずに大刀を抱いたまま、つぶした。そのまま死んだ。慶応4年5月30日のことである。黒い猫は死の世界から自分を迎えに来る使いと見えたのだ。これもよかです。オラも猫を斬りそこねて死にたか。

【だいありー】

(1) 4月10日(月) ジャナ専 (日本ジャーナリスト専門学校) 始まる。4時限目 (2:50~4:10) で、「現代史」。45人ほど。教室が一杯だ。私の本を読んだという人もいた。嬉しい。

(2) 4月11日(火) 昼、キネマ大森。三島の「不道德教育講座」。夜はライブ塾。滝大作さんが急病。「ザ・ニュース・ペーパー」の杉浦さんと私でトークをやるうとしたら矢崎泰久さんが飛び入りで参加してくれた。ありがたい。「話の特集」を30年間続けていた。2.26事件の時、3才で、おぼえているという。凄いね。尊敬しちゃう。三島由紀夫に芝居に招待された時の話は面白かった。石原慎太郎と隣の席だった。舞台上で三島は緊張し、足が震えていた。終わって石原と楽屋に行った時、石原は、「足が震えてたね」と言った。三島はカーツとなって、「帰れ!」。矢崎さんも帰ろうとしたら、「君はいい。残りなさい」。

石原もひどいが、三島も凄いね。しかし、二人とも大人げない。子供っぽい。そう言ったら、「子供だからあんなことが出来るんだ」と矢崎さん。三島事件のことらしい。今の石原も〈子供〉なのか。

それと、山根二郎弁護士の話もしてくれた。東大全共闘の弁護をし、金嬉老の弁護をし、「行き行きて神軍」の奥崎謙三の弁護をした人だ。これは、じっくり聞いてみたい。5月15日に三人でトークをやるときに詳しく聞く。

(3) 4月12日(水) 月刊「タイムス」(5月号)に森田必勝氏のことを書いた。新選組の土方歳三が好きだという話を中心に書いた。

キネマ大森で、「潮騒`54」と「永すぎた春」を見た。快樂亭ブラックさんも来てたので、終わって飲んだ。大病をして重態だと聞いてたが、すっかり治ったんだ。日本映画については日本一詳しい人だ。飲みながらいろいろ教えてもらった。三島の「潮騒」は5回も映画化されてる。

「文芸作品ではこれが一番多いですかね」と聞いたら、いや、「伊豆の踊子」です。と言う。吉永小百合、山口百恵…と、6人の主演と監督の名前をスラスラと言う。凄い人ですね。

(4) 4月13日(木) 出版社と打ち合せ。

(5) 4月14日(金) 7:30p.m.ロフト・プラスワン。快樂亭ブラックさんの落語とトークを聞きに行く。

【お知らせ】

- (1) 4月15日(土) 月刊「EX大衆」発売。女帝問題でコメントしてます。
- (2) 4月25日(火) 「別冊宝島」の「日本を動かす組織・知られざるウラ側」発売。特捜検事、経団連、公安、中核、革マル、日共などが取り上げられます。私も書いてます。
- (3) 次の「紙のプロレス」で、「靖国奉納プロレス」について喋ってます。
- (4) 5月15日(月) 7時。角筈区民センターホール。矢崎泰久さん、山根二郎さん、私のトークです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年 2004年 2005年
2006年

今週の主張 4月24日 金閣が嫉妬する。泣いている

(1)映画「炎上」よりも「金閣寺」の方がいいと思うけど…

「キネカ大森」で「三島由紀夫映画祭」が行なわれている。5月12日(金)までだ。三島が主演した「憂国」「からっ風野郎」。それに三島の原作を映画化した「潮騒」「剣」「金閣寺」など16作品だ。

「潮騒」は5回も映画化されている。山口百恵、堀ちえみ、青山和子、あと2人だ。この3本は見たが後の2本は見てない。「金閣寺」は2回映画化されている。市川雷蔵と篠田三郎だ。

三島本人は「憂国」が一番好きだという。一番思い入れがある。しかし、一般的には「金閣寺」を映画化した「炎上」が一番評判が高い。主演が市川雷蔵だし、監督は市川崑だ。「もうこんな映画は作れない」と言われている。三島の中では〈最高傑作〉だ。しかし、原作に必ずしも忠実ではない。市川崑が三島に負けまいと、自分のオリジナリティを主張しているようだ。僕はもう一本の篠田の方が好きだ。原作に忠実だし、色っぽいところも思い切って描いている。2つの作品をちょっと紹介してみる。

・「炎上」1958年。大映。モノクロ。99分。市川崑監督。主演は市川雷蔵。他に仲代達矢、中村鴈治郎などが出ている。三島の小説「金閣寺」を原作にしながら、「金閣寺」という名前は使われてない。映画では「驟(しゅう)閣寺」となっている。金閣寺側がクレームをつけたのか。又、実際の金閣寺炎上(1950年)からそれほど年月が経ってない。妾をかこったお坊さんなど、小説に書かれたことが全て〈本当〉だと思われると困る、という不安もあったのだろう。

・「金閣寺」1976年。ATG。カラー。高林陽一監督。篠田三郎。、市川悦子、加賀まりこなど。「炎上」から20年経っている。金閣寺炎上から随分時間も経ち（26年後だ）、〈歴史〉になった。だから、「金閣寺」と名前も使えた。それに三島の自決（1970年）の6年後だ。だからその影響も多分に受けている。戦争が終わって、軍人が切腹するシーンが突如出てくるが、三島事件を暗示させる。

では、・の「炎上」だ。文芸作品として最も評価が高い。時代的制約のせいかな、「女」の生々しい描写がない。あるいは、子供から老人まで全国民に見てもらおうという「文芸的配慮」かもしれない。主人公（溝口）は母親の不倫現場を目撃するが、父は手で彼の目をふさぎ、外に連れ出す。そのシーンだけだ。「不倫現場」は写されないから、何のことか分からない。又、溝口が驟閣寺に住み込んでから、母も後を追って、ここに住み込む。原作とは違う。母と子の葛藤をコンパクトに同一画面でまとめて説明するためなのか。

又、主人公と老師の葛藤も小説では〈独白〉だが、映画ではそんな心理描写はできない。〈動き〉で見せる必要がある。だから、〈原作にはない〉老師と主人公の「口争い」「喧嘩」として表わす。（映画は「絵」だから、内面的心理の機微が描けない。小説よりも不利な道具だと思った）。

敗戦後、米兵の見物が増えた。女連れの米兵が女を殴る。そして主人公（溝口）に「女の腹を踏め！」と言う。溝口は踏む。何度も何度も。「よくやった」と米兵からタバコをもらう。女は後に、寺に文句を言いに来て、「流産した」と老師から見舞金を脅しとる。原作ではそうだが、「炎上」では、きれい事になっている。女が土足で驟閣寺に入ろうとして、大事な驟閣を守ろうとして溝口は女を突き飛ばすという設定になっている。分かりやすい。でも、三島文学をこういう風に分かりやすく変えちゃいかんだろう、と思った。

「子供が見ても分かる理屈」にしている。文芸作品として、中学生、高校生が先生に引率されて見に来てもいい。そんな映画にしたのか。でも、三島の「毒」を抜いたら、もう三島作品ではないだろう、と思った。それに、有為子のエピソードが出て来ない。僧になる前に、溝口が心をよせていたが、ふられた女だ。有為子は、脱走兵をかくまい、憲兵に捕まる。かばい切れなくなって、脱走兵の隠れ場所に案内する。怒った脱走兵は有為子を射殺する。

その死んだ有為子の幻影が何度も出て来る（小説では）。又、足の悪い友

人・柏木に何度か女を紹介される。女と交わろうとするが、そのたびに、「最も美しい」金閣が現われ、邪魔をする。小説ではそうなっている。「炎上」でもそのシーンは少しある。太宰治の「トカトントン」を思わせる。いざという時、大事な時に、「トカトントン」という幻聴が聞え、やる気をなくす。白ける。萎える。そんな小説だが、三島の「金閣寺」にも出て来る。

女と情交しようとする、金閣が現われる。「こんなものが美か」「妥協するな」と言うのだろう。そして溝口はやめてしまう。でも、女は分からんよ、男の美学が。「あら、若いくせにインポなの」と罵るだけだ。こんな露骨なシーンは「炎上」には、出て来ない。

だから私は思ったね。これは市川崑の文芸作品だ。独立したものだ。三島の原作とは別だ、と。それを見て三島の「金閣寺」を読んだ気になってもらっては困る。そう言いたいね。それに、あの一番有名な「お乳を飛ばす」シーンがない。あれがなかったら、「金閣寺」じゃないだろう。

(2) 「コーヒーにミルク」。お茶にだってミルクを

小説では、溝口は鶴川（やはり金閣寺のお坊さん）と一緒に京の町を歩いている。南禅寺を訪ねた。すると向こうの部屋に、軍服の若い陸軍士官と女性が見えた。女が男の前に茶をすすめる。信じがたいことが起こったのはそのあとだ。女は姿勢を正しくしたまま、静かに襟元をくつろげた。女は白い豊かな乳房の片方を引き出した。

そして、お茶の中に乳をピューッと、飛ばして入れたのだ。コーヒーにミルクというのなら分かるが、お茶に生ミルクだ。それを陸軍士官は厳粛な顔付きで、飲みほす。原文ではこうなっている。

〈私はそれを見たとは云はないが、暗い茶碗の内側に泡立っている鶯いろの茶の中に、白いあたたかい乳がほとぼしり、滴たりを残して納まるさま、静寂な茶のおもてがこの白い乳に濁って泡立つさまを、眼前に見えるようにありありと感じたのである〉

「金閣寺」では、この「乳飛ばし」シーンとラストの「放火」シーン。この二つが最重要だ。それなのに市川監督は大胆にカットした。子供にも見てもらえる文芸作品にしたかったのか。いや、それよりも、単なる「映画化」にしたくなかった。小説を映画に単に「翻訳」することには耐えられなかった。映画監督の大家としての意地もあった。そう思うね。

その点、この20年後に作られた高林陽一監督の「金閣寺」は、三島作品の

忠実な映画化だ。「乳飛ばしシーン」もちゃんと出ている。加賀まりこだ。豊かな乳を出し、本当にピューッと飛ばしお茶碗に入れる。思わず息を飲む。唾をゴクンと飲み込んだ。お茶も飲みたい。

加賀はお乳が出ないから、このシーンは代役だろう。さらに、足の悪い友人（柏木）に女を2人紹介される。「やっていいよ」と柏木に言われるが、その瞬間に金閣寺が現われて、不能となる。そのシーンもしっかり撮っている。さすがATGだ。それに、柏木に紹介された「生花の師匠」というのは、実は例の「乳飛ばし女」だった。軍人の子を宿したが死んでしまった。軍人は悲しんで、せめて、子供のかたみにと、乳を所望する。それで、出してあげた。その後、軍人は戦争で死んだ。

能舞台のような「乳飛ばしシーン」を見ながら、何やら「憂国」に似てるなと思った。「憂国」は自決する前に、妻と最後の交わりをする。「金閣寺」をさらに進めれば「憂国」になるんだ。そう思った。

ところで、この女だ。その後、生花の師匠になり、柏木と知り合い、出来ちゃう。溝口にも紹介される。獲物は皆で分け合う。どっかの大学のラグビー部のような。美しい同志愛だ。

「南禅寺であんたを前に見たんや」と溝口は言う。不思議な出会いに驚いて女は言うわさ。「もうお乳は出えへんけど、あんたにも同じことをしてあげる」。それで、溝口は乳にかぶりつき、いざ、性交をしようとする。金閣が現われる。邪魔をする。こう見てくると、金閣は女なんやね。金閣をめぐる三角関係や。

柳美里が言っとった。「相手が1人なら恋愛。2人なら不倫。多人数なら宗教になる」。うーん、深いですね。

しかし、何で金閣は邪魔をするのでしょうか。「美しいのは私だけ。他の女に愛を感じちゃイヤ！」と言うのか。「リサイクルセンターじゃないんだから、その辺の小汚い女に手を出すな」と嫉妬しとるんでしょうか。

そうそう、この映画「金閣寺」はお色気シーンもふんだんにある。ビデオ屋で借りて見たらいい。そして原作も読んだらよか。脱走兵をかくまう有為子も出てくる。母の不倫現場もしっかり出てくる。でも母が市川悦子じゃ、まあ、何をやってもいいやって感じになる。その不倫現場を家政婦が見てたりして。

米兵の女を踏んづけるシーンもちゃんとある。踏んづけているうちに、興奮し、陶醉する。うん、これぞ三島文学ですよ。

金閣ほど美しいものはない。この美しさは誰にも渡したくない。むしろ、

戦火で焼かれ、自分の中にだけ美が残ればいい。そう思ったのだろう。しかし、戦争は終わった。国宝金閣寺はもう戦火に焼かれることはない。金閣と共に自分も滅びようとしたのに。その愛も夢も壊されてしまった。そして思う、よし、金閣を焼こうと。

そうした内面の葛藤などもよく出ていた。こっちの方が三島の作品にぐっと近い。忠実な映画化だ。三島だって、「こっちの方がいい」と思ったろうよ。でも、死んだ後に作られたのか。

でも、世間の評価は、市川の「炎上」が上だ。皆も、見比べてみたらいい。そして原作を読んだらいい。

「炎上」を見ていて、アレッと思った。「遊動円木」のシーンが出ている。それは嬉しかった。足の悪い友人・柏木（仲代達矢）がそこに腰かけて、溝口に話をする時だ。今はないが、僕らが子供の頃にはあった。小学校の遊び場にあった「恐怖の遊び」だった。どうしてこんな危ないものがあるんだろうと、子供心に思い、大人に訴えてきた。しかし誰も私の訴えなど聞かなかった。

知らない人の為に説明しよう。『辞林21』（三省堂）にはこう出ている。

〈遊動円木（ゆうどうえんぼく）太い丸太を地上低く水平に鉄の鎖でつり下げた子供の運動用設備。乗って前後に揺り動かして遊ぶ〉

ああ、そういえばあったな、と思うのは50代以上の人だろう。大きい丸太をつり下げてある。それに跨がったり、あるいはその上に乗る。そして揺する。これだけでも危ない。さらに、その上で「落としっこ」をする。立って乗り、突いて落とし合うのだ。大きく動いてる丸太の上から落とされるのだから危険この上もない。周りの人もはやしたてる。僕なんて臆病だから乗りたくなかったが、女の子にバカにされるんで、仕方なく乗って、いつも突き落とされていた。手や足をすりむいていた。時には怪我した人もいる。

それに周りで見てる人だって安全ではない。円木の左右は、特に危ない。巻き込まれて怪我をする。当時は、テレビがないから分かんが、全国では多分、かなり多くの子供たちが怪我をし、あるいは死亡事故もあったはずだ。児童の血をたっぷり吸った忌まわしい遊動円木だ。

しかし、この「悪魔の遊戯」設備については誰も触れてない。そのうち、自分の錯覚、妄想だったんじゃないか。と思うようになった。しかし、小説

「金閣寺」を読み、やっぱりあっんだと思った。さらに映画「炎上」で、遊動円木の実物も出てきた。もしかしたら、三島自身も、この〈悪魔の乗物〉に厭な思い出があったのかもしれない。きっとそうだ。私のように突き落とされて怪我をしたのだ。

(3)待ってるだけでは「永遠の美」は手に入らん

ここでちょっと文学的エピソードを。三島は小説『金閣寺』を書き、それを基に「炎上」「金閣寺」が映画化された。しかし、金閣寺放火事件を題材にした小説は実は三島だけではない。水上勉も書いている。『金閣炎上』（新潮文庫）だ。だから、映画「炎上」はこれを基にした小説かと誤解されることもあるが違う。又、さらにややこしいが、水上勉の小説『五番町夕霧楼』（新潮文庫）にも、金閣炎上シーンが出てくる。金閣の坊さんが遊廓に来て、女郎を相手に、「近々、でっかいこをやる。新聞に出るぞ」と言うんだ。これは実際のエピソードらしい。三島もちょっと触れている。

この「五番町夕霧楼」は二回、映画化されている。主演は佐久間良子と松坂慶子だ。

他にも、金閣寺炎上を扱った小説はあるのだろう。しかし、三島と水上の小説（計3冊）を読めばいいだろう。そして、映画（計4作品）を見たらいい。

そんな時間はないよ、という人の為には三島の小説『金閣寺』（新潮文庫）を薦めたい。まあ、これだけ読めばいい。

僕は学生時代に読んだ。そして、「決定版・三島由紀夫全集」で読み、さらに「新潮現代文学」で読んだ。「現代文学」の「解説」で田中美代子は「独特な哲学小説」と呼んでいる。「私たち共同体の奥処（おくが）にひそむ地霊のようなものである」と書いている。この解説も凄い。そういわれれば、金閣は一つ的人格を持った巨大な美として、現われる。あんなに憧れていたのに、初めて、夜見た金閣は、ただあるだけで、さして感動を起ささない。これはどうしたことか。小説ではこう書かれちよる。

〈私は金閣はその美をいつわって、何か別のものに化けているのではないかと思った。美が自分を護るために、人の目をたぶらかすという事はありうることである〉

美しさ故に起こる災害や事件から自分を守るために、わざと醜く化けている。ウーン、そんなことがあるのかな。ある女性作家は言っていた。「私は

美人だから男が寄ってきてうるさい。本も読めない。だから、ダサイ眼鏡をかけ、わざと下手に化粧してブスと思わせているの。男は寄ってこない。そして自由を獲得したの」

それほどまでして〈自由〉を得たいのかね。別に「美しい素顔」で歩いたからといって災害も事件も起こらんとするけど。（その作家は誰かって？それは有料サイトの方で見てくりゃれ）。でも、金閣は戦乱の世で、常に流血の事件の真っ只中であって生きてきた。男たちが奪いあう美しい女のように…。お市の方のようだ。

〈戦乱と不安、多くの屍と夥しい血が、金閣の美を富ますのは自然であった。もともと金閣は不安が建てた建築、一人の将軍を中心にした多くの暗い心の持主が企てた建築だったのだ〉

夥しい血の中に咲いた美しい蓮の花のようなんだ。そんな美しい、金閣なのに、そこに住む老師は実は妾を持っていた。そして、でっぷりと太っていた。こんな高尚なことを言う老師なのに、どうして、デブなのか。それをこう表現する。

「和尚の精神にとっては、まさに妾のようなその肉…」

うまいですね。さらに、雪の日、溝口は天を仰いでいる。後から後から雪は降ってくる。天上から湧いてくるように。吃音（どもり）の溝口は不思議に思う。

「どうして雪は吃（ども）らぬのか？」

柏木に女を紹介され、いざ交わろうとすると金閣が現われ、邪魔をする。

「一方の手の指で永遠に触れ、一方の手の指で人生に触れることは不可能である」

でも人々は、妥協して生きている。妥協して下劣な「人生」に触れ、人生と交わっている。それではいかんと、金閣は邪魔をする。

いや、溝口を護っているのだ。

〈金閣はどうして私を護ろうとする？ 頼みもしないのに、どうして私を人生から隔てようとする？

なるほど金閣は、私を墮地獄から救っているのかもしれない〉

護られながらも、その〈支配〉から脱したい。アンビバレンツな感情が湧く。そして叫ぶ。

「いつかきっとお前を支配してやる。二度と私の邪魔をしに来ないように、いつかは必ずお前をわがものにしてやるぞ」

戦国時代、多くの寺々は焼失した。しかし、放火は少ない。火はお互いに火に親しいから、次々と、自然に燃えたという。この前の戦争の時も、いわば戦国時代だ。黙っていても焼失する可能性があった。戦火で金閣寺が焼ける。そして自分の心の中にだけ金閣は残る。何という幸福。でも戦争は終わった。戦火で燃えることはない。だったら、自分で火をつけるしかない。そう思うまでの心理描写だ。

〈そのころ火は火とお互いに親しかった。火はこのように細分されず、おとしめられず、いつも火は別の火と手を結び、無数の火を糾合することができた。人間もおそらくそうであった。火はどこにいても別の火を呼ぶことができ、その声はすぐに届いた。

寺々の炎上が失火や類火や兵火によるものばかりで、放火の記録が残されていないのも、たとえ私のような男が古い或る時代にいたとしても、彼はただ息をひそめ身を隠して待っていればよかったからなのだ〉

戦争中はよかった。ただ、待っていればよかった。戦火に焼かれ、自分の中にだけ〈永遠の美〉として残る。その幸福にひたれる。しかし、戦争はもうない。では、仕方がない。自分で火をつけるしかない。

昔、学生の時、ザイン（存在・現実）とゾルレン（当為・理想）について仲間と論争した。ある男が言った。「我々が護るのはゾルレンとしての天皇だ。その為なら、ザインとしての天皇は殺してもいいんだ」。馬鹿な！と思った。しかし、そこまで言い切れる勇気には感心した。

三島も（いや溝口も）、ゾルレンとしての金閣、を護るために、「ザインとしての金閣」を否定したのかもしれない。三島にとっての金閣寺とは何だったのだろう。日本の美か。日本文化か。天皇制なのか？

【だいありー】

(1) 4月17日(月) 2:40ジャナ専「現代史」。7時からキネカ大森。「三島由紀夫映画祭」「お嬢さん」を見る。三島はこんな軽い、ハッピーエンドの恋愛小説も書いてたんだ。でも、恋愛も理屈っぽい。やはり三島だ。

三島の作品はこれまで7本見た。全部見ようと思う。どうしても見れない時は、DVDを買おう。

快樂亭ブラックさんと友人に会ったので、近くの居酒屋で飲む。楽しかった。日本映画については日本一詳しいから、勉強になる。

(2) 4月18日(火)、19日(水)。急ぎの原稿があって、必死でやっている。イライラする。猫に当たりちらしたりしている。元公安の真田さんちの猫は家出して、彼は茫然自失らしい。「公安の仕業ですよ」「公安の復讐ですよ」と言う人がいて、本気にして心配していた。無責任なことを言う奴だ。「大丈夫。すぐに戻りまよ」と慰めてやった。

(3) 4月20日(木) 河合塾コスモ。授業が始まる。新しい校舎で気持ちがいい。

(4) 4月21日(金) 夜、志の輔さんの落語会。

(5) 4月22日(土)、23日(日) ラストスパートで仕上げている。いい本になるのか不安だ。でも三島映画も見なくっちゃ。と心は千々に乱れちよる。(だから中川さんにもらった本の紹介も遅れた。いやー、考えさせられる本だった。来週でも紹介ませう。それで私も人の心を読めるようになった。エスパーになった)。

【お知らせ】

(1)送られてきたエロ格好いい本を読んでたら生徒に、「いやらしい」と言われた。「そんな本を読んでも先生を軽蔑します」と言う。何もそこまで言うことないじゃないか。それにこれはほら、天皇特集が出ていて、私もインタビューされたんだよ、と説明した。「でも他の裸のページも見てた!」。見とりゃせんがな。自分の記事を探してただけじゃがな。でも、私から、ひったくって、インタビューを読んでいた。

「EX大衆」(5月号)だ。軟らかい本だが、いい本だよ。爆乳娘のグラビア満載の中であって、突如、超マジメな特集がある。「皇室典範改正論議のための基礎講座。天皇家万世一系歴史特集」だ。4ページのかなり詳しい特集だ。こういう軟らか雑誌の読者向けにも頑張って企画した努力は買いたい。私のインタビュー記事も出ている。まとめる人がうまい。元「創」にいた荒井香織さんだ。お世話になりました。彼は、最近、「週刊朝日」「サイゾー」などで大活躍している。

(2)『プロレス復興計画』(芸文社)が送られてきた。なかなか、意欲的で面

白い本だ。僕も書いている。

(3)先ごろ自決した三浦重周氏の遺稿集が送られてきた。『白骨を秋霜に曝すを恐れず』（K&Kプレス・2000円）だ。立派な本だ。三浦氏の政治論文が収められている。もっともっと活躍してほしい人だったのに、もったいないと思う。

(4)ちくま文庫から『右翼・行動の論理』（700円）が出た。これはいい本だ。猪野健治さんが編集。野村秋介氏、衛藤豊久氏、阿形充規氏、蜷川正大氏が発言している。

「保守化する今こそ、民族派の真情に迫る！」と帯に書かれている。文庫なので多くの人に読まれると思う。

(5)4月22日(土)「紙のプロレス」発売。「特集・プロレスと靖国神社を考える」。画期的な特集だ。私の「靖国プロレス観戦記」も出ております。

(6)4月25日(火)「別冊宝島」の「日本を動かす巨大組織のウラ側」（1050円）発売。私は公安調査庁について書いてます。

(7)5月15日(月)7時、角筈区民センター。矢崎泰久さん、山根二郎さん、私のトークです。

(8)5月31日(水)7時、ロフト。「天宮処凜のわくわくお楽しみ会」第二段。今回のテーマは「革命家が答える人生相談」。ゲストは塩見孝也さんと私です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

年

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

今週の主張 5月1日

「山根処分」への抗議集会。これが左右共闘の原点になった。

=26年前。私が「民族派の若きリーダー」だった頃=

(1)竹中労、大島渚、野坂昭如らが先頭に立って10時間の大集会を！

5月15日(月)、山根二郎さん（弁護士）、矢崎泰久さん（元「話の特集」編集長）と私の三人で、スーパーライブ「タブーを破壊する大激論」をやる。看板に偽りなしの大激論になるだろう。楽しみだ。それ以上に、一体どうなるのかという不安と恐怖で心は動揺している。連休中も気になって仕方がない。（5月15日は、午後7時から角筈（つのはず）区民ホールだ）

二人について一番印象に残ってるのは1980年。26年前の「日弁連山根処分」への抗議集会だ。東大闘争の弁護人・山根二郎さんが余りの激しい弁論活動の為、処分された。ひどい話だ。それに対し竹中労、大島渚、野坂昭如、遠藤誠、矢崎泰久などが抗議の声をあげ、大集会をやった。その時なぜか、民族派の活動家も大挙して参加し、連帯の挨拶をしている。「左右共闘」のキッカケになった。又、これ以降、新右翼運動がグンと過激化した。

見沢知廉氏は「花の80年組」といったが、一水会、義勇軍を初め、80年代に思い切り暴れた。いろんな事件があった。見沢、木村、板垣、浜地、沢井…と活動家も多く、よく捕まっていた。赤報隊の前身（独立義勇軍）も暴れていた。そんな、超過激な時代をつくる契機になったのが80年の「左右共闘」なのだ。

それを書く前に。もう一つ、矢崎さんのことで忘れられないのは、皇太子さんの結婚式の日のことだ。1993（平成5）年6月9日だ。今から13年前か。『新右翼』（彩流社）の「年表」にはこう出ている。

〈6月9日 皇太子殿下ご成婚の儀。夜、衛星チャンネルの「ジャーナリズム最前線」で激論「皇室と日本人」。「話の特集」編集長の矢崎泰久氏と鈴木邦男。「こんなお目出たい日に、何をやってるんだ。非国民だ」「よくぞやってくれた」と賛否両論の電話やFAXが集中〉

よくぞこんな番組をやったもんだと思うね。ばばこういちさんが司会の番組だ。朝日新聞社がバックで、「ASAHIニュースター」だ。でも、ばばさんは余り喋らない。矢崎さんと僕だけの真向勝負。左右激闘。天皇制是か非かの激論だ。それも3時間フルにやった。

矢崎さんは、「天皇制はいらない」とズバリと言う。反天皇論でまくし立てる。僕は、おたおたと反論する。それにしても、皇太子さんご成婚のお目出たい日だ。他のテレビは全て、〈奉祝〉一色だ。元ベ平連、元左翼の人たちも大勢出て、「おめでたい」「お喜び申し上げます」「おきれいですね」と言っている。気持ち悪い。精一杯、敬語を使って元左翼は天皇絶賛だよ。

その日に、日本で唯一人、矢崎さんだけが、「何がお目出たいのか」「お目出たいのはお前たちの頭の中だろう」とばかりに、反天皇論をぶつ。天皇制はいらない。こんなものは即座に廃止しろ！と言う。凄いですよね。

他の局なら、そして、どこの局だって、この日にこんな番組はやらない。だから、リアルタイムで反響がスタジオに入る。抗議の声・FAXが次々と紹介され、ボードに貼り出される。「よくやった」という声は少なかった。

「ふざけるな」「非国民め」という怒りの声の方が圧倒的に多かった。「矢崎はけしからん。国賊だ」と言うのなら分かる。ところが、「このお目出たい日にこんな不敬なことを話し合ってる二人は許せん。国賊だ。非国民だ！」と言うのだ。僕までが巻き添えで「国賊」「非国民」にされちゃった。

番組が終わってからも多くの右翼の人に批判された。でも僕は必死に反論してたのに、と思った。そりゃ、実力もキャリアも矢崎さんにはかなわない。だから論破されたのは仕方ない。僕の実力のなさだ。でも、僕を批判する人は、何も僕の「非力」「実力不足」を言うのではない。(それもあろうが)。

「大体、国賊・矢崎の発言を黙って聞いているのが、けしからん！」「あんな非国民と同席したのが許せん！」

と言うのだ。なんで同席したのか。それに同席しても、あんな奴に喋らせるな。全て、つぶせ。発言をさせるな。…そう言うのだ。それなのに、キチ

ンと話を聞いている。それが許せん。と言う。でも相手の話を聞かなくちゃ討論にならないでしょうが。と思うが、話が通じない。今までいるんなトークをしたが、これが一番印象に残り、実りあるトークだったと思う。



さて、次は「山根処分」抗議集会だ。実は、この日のことが一冊の本になっている。だから、それを基にしながら紹介しよう。1980年11月1日に耕索社から出た本で、竹中勇編集の『法を裁く--日弁連山根処分・抗議運動の記録』という本だ。定価は1500円。実にいい本だ。僕は3回も読んだ。

この本が出た26年前の1980年にすぐ読んだ。それから、去年読んだ。さらに今年読んだ。ジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）の図書館にあったからだ。昔読んだが手元になかったので、借りて読んだ。それに、「竹中勇ファン」のジャナ専生がいて、彼が、「いい本ですよ」と言ってたからだ。

「たしか山根支援の集会に僕も参加してたな」と言ったら、「鈴木さんはしっかり発言してますよ」と言う。「他にも花房氏や中山氏など民族派の人々も発言してますよ」と言う。エッ？そうだったの。と驚いた。読んでみたら、その通りだった。それに、いいことを言っている。僕だって、26年前の方が今よりも論理的に喋っている。「民族派の若き論客」として紹介されている。今のようにダシてない時だ。読んでいて、うーん、こんな時もあったんだと思った。

この本が、あらゆる意味で新右翼運動の〈原点〉になったのだろう。竹中人脈の多くの左翼の人と知り合った。遠藤誠弁護士とも長い付き合いになった。「人権110番」の千代丸健二さんにもお世話になり、翌号から、「反警察キャンペーン」を一水会もやることになる。又、新左翼の元気な人たちに刺激されて、一水会、義勇軍も過激な運動へとエスカレートした。デモでは

よく捕まったし、火炎瓶を投げては捕まった。独立義勇軍という、より過激な団体も生まれた。その流れなのか、赤報隊も生まれた。又、見沢氏の例の事件も起こった。80年代超過激な闘争が展開された。その起点になったのが、この日の集会だろう。1980年5月17日(土)、千代田区麴町の東条会館でこの集会は行われた。時間は何と、午前10時から午後8時まで。10時間も行なわれた。司会は竹中労だ。それも、ダレることなく、緊迫の集会が10時間だ。凄い。

(2)東大闘争。金嬉老、奥崎謙三の弁護人だよ、山根さんは

その前に、なぜこの集会が行われたかだ。それをちょっと紹介する。山根弁護士は熱血漢だ。東大闘争の弁護、さらに金嬉老、奥崎謙三の弁護もしている。他の人では躊躇するような事件ばかりだ。それを断固としてやった。火のような弁論を展開し、裁判官、検察官とも闘った。徹底的に闘った。その余りに激しい闘い故に、裁判所、日弁連から処分されたのだ。それに対し、山根弁護士を擁護し、支援する集会が開かれた、というわけだ。

東大闘争の弁護では、裁判長に食ってかかる。起立しない。なぜ起立する必要があるのか、と反駁する。何度も何度も裁判官に注意され、退廷を命ぜられる。そして、日弁連（弁護士の集まりだ）に対し、「この弁護士を処分しなさい」と言う。弁護士を守るはずの日弁連は、それを聞いて、何と、山根氏を処分する。

「これはおかしい」と竹中労、大島渚、野坂昭如氏らは立ち上がり、集会を開いた。その時の発言を元に一冊の本まで作ってしまった、というわけだ。その26年前の集会を思い出しながら今月、5月15日(月)には山根さんの話をじっくり聞こうと思う。この日のパンフでは山根さんはこう紹介されている。

〈弁護士。68年金嬉老事件、69年東大安田講堂事件の主任弁護士となり、前代未聞の激しい法廷闘争を展開して名を轟かせた硬派の弁護士。36年9月27日東京生まれ〉

では、26年前の集会記録『法を裁く』に話を戻す。竹中労さんは、「私的なまえがき」を書いている。こんな過激で危ない弁護士を我々は支援するんだ。覚悟はいいか、と問うている。

〈はっきりいってしまえば、山根二郎という人物は、弁護士の規格外なの

である。“紳士の感情”を欠落している。ゆえに同業のひんしゅくの的である。“弁護士階層”の社会的信用を傷つけ、品位を汚す異端分子とされるのである。そして（当然のことだが）、彼自身はおのれのいきかたこそ、弁護士の本然の姿であると固く信じているので、不協和音はますます高鳴るのだ。信ずるところを行なうとき、彼は仲間といえども容赦しない。完膚なきまで、論破・糾弾・粉碎してやまない。したがって人びとは、二の足を踏み、三舎を避け、敬して遠ざかるのである）

それにもかかわらず、この日の集会は超満員、10時間の熱い支援と激励。日弁連の「懲戒処分」に対する反対、抗議がいかに強く、大きかったかが分かるだろう。この時、山根さんを処分した日弁連の会長は江尻平八郎。うん、どっかで聞いたことがあったなと思ったら、何と。この話は又、あとで。

日弁連（日本弁護士連合会）は昭和54年（1979年）11月8日、山根二郎弁護士に対して、「所属弁護士会の信用を害し、また弁護士の品位を著しく失わしめる非行」を理由に、会長名で業務停止四ヶ月の懲戒処分を送達した。

懲戒委員会議決書によれば、山根弁護士が東大裁判の法廷で、「被告人らの意志に同調盲従して」「執拗なる言動の反復によって審理の進行を阻害し」、監置・過料の制裁をうけるなど、「法廷の秩序を乱し」「裁判の威信を著しく傷つけた」ことが懲戒の理由とされた。

法廷では拘束退廷させられ、裁判所構内に留め置かれた。こんなことが何度も何度も行なわれ、「こんな奴はダメだ。何とかしろ」と日弁連は言われて、処分した。ということだ。この本には「支援集会」の様子だけでなく、日弁連への質問状や、座談会なども載っている。この中で山根さんは言っていたが、当時、裁判所は大変な危機意識を持っていたという。

「1969年は公安事件だけで半年間に1000名ぐらいの逮捕・起訴者が東京地裁だけで出る。それをどうやって処理するかということから、裁判所はそれまで使わなかった強権を発動しだすわけです」。

そうなのか。山根一人のために裁判がとどこおってはたまらないと思ったのだ。そこで、東京地裁所長として日弁連に懲戒請求をする。これもひどい話だ。又、それ易々と受け入れる日弁連もだらない。

この本には「山根懲戒処分に抗議する・全署名」が載っている。小沢遼

子、玉川信明、上野昂志、竹村一、湯川れい子、など知った名も多い。それに、驚いたことに民族派の人も結構、いる。

阿部勉、四宮正貴、篠原節、鳥海茂太、中山嶺雄、…などだ。阿部、篠原氏は元「楯の会」だ。鳥海氏は米沢市議会議員だ。野村秋介さんと共に「新しい日本を創る青年集会」を立ち上げた人だ。

さて、山根さん支援の集会、逆シンポジウム「司法を裁く」だ。まず、大島渚監督の映画「絞死刑」が上映され、それから始まる。竹中労さんの司会で、開会の挨拶は遠藤誠弁護士だ。この人には随分とお世話になった。無料で、裁判の弁護をやってもらったし、ご馳走になったし、本当にいい人だった。

この集会、凄いのは「発言を希望する人が40名をこえてる」。それをどうさばくか。竹中さんの腕にかかっている。それらはとても紹介しきれないので、民族派の人々の発言だけを少し紹介しよう。26年も前に、こういう「左右共闘の芽」があったことを言いたいのだ。その前に、当の山根さんが挨拶している。

〈日弁連懲戒の論理は、一言でいえば、思想を裁いている。東大裁判の被告の思想を裁き、「これに同調盲従した」として、弁護人の思想を裁いているのであります〉

〈たかが業務停止四ヶ月ぐらいで、世間をさわがせているという批判があることも、充分承知しているわけで、いっそ除名処分になったほうが格好がついていたのかも知れません〉

と意気軒高だ。

そうだ。大島渚が面白い発言をしている。少年非行が増えてるといわれるが、それは実体ではなく、そのデータは「警察が非行少年をどれだけ検挙したか」に基づいている。

〈警察の方針によってどうにでも検挙数は変動をする。一つの例を挙げれば、昭和四十年以降のいわゆる学園紛争、それがピークに達している間に、非行少年検挙数は減少している。これをようするに、おまわりさんは学生を取り締まるのに忙しかったので（笑声）〉

うん、これは真実だろう。新発見だ。「少年非行」は相変わらず多いのに、捕まえる余力がない。それで「減少」してるように見えた。捕まらない

し、話題にもなんないから、本当に減ったのかもしれない。

今はどうか。少年の兇悪犯罪が増えている。中学生や高校生だって平気で人を殺す。「ヘエー、そういう選択肢もあるのか」とニュースを聞いて、又、殺人は増える。これは学生運動家が悪いんだ。かつてのように全国で学生運動が暴れたらいいんだ。それがあつたら、警察はその取り締まりが忙しくて、青少年にかまっていられん。かまわれなから、逮捕者も少なくなるし、本当に犯罪も減る。

(3)民族派の若手論客も次々と発言

そしてこの本の194ページ。集会も終わりに近づいた頃、竹中さんが発言する。

〈さて、このシンポジウムには、「民族派」新右翼と呼ばれる諸君も、賛同署名をよせ、あるいは発言を求めておられます。奇異の念を抱かれる方があるやと思いますが、ご本人から聞いて下さい。京都洛風会の中山嶺雄さんと、岐阜維新協議会の花房東洋さん。つづいて発言を--〉

中山氏は学校の先生で、「朝生」にも何回か出ている。「GHQによって押しつけられた憲法を否定し、くつがえさなければならない」と、のっけから言い、さらにこう断言する。

〈法が民族の精神文明を破壊し、情理による人間の生存を危うくする場合には、法を無視することは当然であり、法と闘うことはやむを得ぬ人間の義務であります。その象徴的な行動として、三島由紀夫さんの自決があつた。彼は割腹をすることによって、百人千人を殺すこと以上のことを仕遂げたと思います。また、山口二矢という勇敢な少年が、これもまた勇敢な浅沼稻次郎という社会党の委員長を刺殺しました。私どもは、これを暗殺とはいわない。なぜなら白昼堂々と、逮捕を覚悟の上で敢行されたテロルであつたからです。いうならば、それはさわやかな、純粹無垢な一少年の実行行為でありました（「バカなことをいうなよ！」と会場から声）。

ヤジはけっこうです。その程度のヤジはなれております。私がいいたいの、浅沼さんの側にも覚悟があつた。ともにおのれの思想に命をかけて、一点対決する姿勢があつた。いまそれが失われてはいないかということです〉

会場の人々を挑発しながら堂々の演説が続き、最後はこう言う。

〈山根さんは屠所の羊ではなく、獅子の時代を生きておられる。いささかホメイニ風である（笑声）。私どもが彼を支持するのは、その心情的共感からであります。ここに集まれた方々の大半と、私どもはいずれ袂を別たねばならない。それは現行の憲法を否定するか、肯定するかということにおいてです。しかしいま、過程を共闘することに矛盾はないと、私は確信しております〉

次に花房氏だ。「私は以前、ある事件をおこして体制の捕虜になりました」と自己紹介する。「被告」ではなく「捕虜」だという。その事件の話や、弁護士とは何ぞやという話をして、こう言う。

〈聞いておりますと、被告人になったみなさんは、私と同様にルンペン精神の持主でありまして（笑声）、仲間意識のようなものを感じたわけであります。みなさん、山根処分と本気で闘うためには、体制の中で何とかなるといふ幻想をきっぱりすてて、敵の土俵ではなく、自分の土俵に敵を呼びこまなあかん、最後の勝利は得られないと、ちょっとかっこのいいところを言わせていただいて、私ひっこませていただきます（拍手）〉

全く物おじしないで、堂々と喋ってますよね、民族派の人々は。さらに、全国から駆けつけた弁護士、支援者の発言が続き、羽仁五郎さんの記念講演もある。それで最後かと思ったら、中山千夏、白井新平、そして鈴木邦男の発言がある。この本は250ページだが、最後の部分、233ページのところに私が出てくる。司会の竹中さんが言う。

〈一水会の鈴木邦男さん。民族派の若きリーダーで、『腹腹時計と〈狼〉』『行動派のための読書術』など、多くの著書があります…〉

懐かしいですね。「民族派の若きリーダー」か。「若き論客」と言われたこともある。今じゃ、リーダーでも論客でもない。民族派でも若きでもない。でも、若きリーダーだった私は、堂々と4ページ以上も発言しちよる。今よりも話がうまい。マジメに訴えている。驚いた。ひたむきだ。爽やかだ。今の私には無いものばかりじゃ。

ここで何を言ったのか。「法は墮落している。退歩している」と言う。むしろ封建時代の方が「基本的人権」があった。西洋では決闘が認められ、日本では仇討ちが認められていた。その権利を国家は民衆から取り上げた。そして、黒い妊婦服のようなものを着て裁判官は壇上で威張りかえっている。

しかし、人民のための裁判はしていない。

さらに、人民の為に闘う弁護士を処分する。「学生は偉そうなことを言うな。お上にさからうな。監獄に入れて反省させてやる」と言う。それを弁護する奴も同罪だ。そういう理屈が今回の処分だ。そしてこう言ってるよ、私は。

〈ボクシングやレスリングで、逃げてばかりいると反則をとられる。失格・退場になる。しかし、“闘いすぎた”といって山根さんは負けを宣告された。こんなおかしいことがありますか。むしろ、よくぞ闘ってくれたと、勲章でもおくるのが当然じゃないですか〉

〈ちょっと長くなりましたが、話を最初に戻して言うと、これは人間の根本の命題であって、憲法とか安保体制の問題ではない。だから一緒にやれる。将来はともかく、山根さんの処分に抗議するということでは、右も左もなく一致できるということを、ぼくとしては申しあげたかったんです。

それからこれはつけ加えておかなければならないことなので…。山根さんを処分した日弁連会長の江尻平八郎さんには、ぼくら因縁があるわけなんです。三島事件の裁判ではじめこの方が主任弁護士でしたが、だんだん熱意がなくなりまして、調べてみますと日弁連の会長になるということで、共産党などと組んでおられた（爆笑）。で、まあ辞任していただいたんですが、因果はめぐって、山根処分の張本人になられたわけで。そういうこともありまして、他人事じゃなくこの運動にぼくは関わったという事情も、最後に触れておきます（拍手）。〉

なるほど、こんな事情もあったんですね。と、謎解きも終わったということで、このレポートも終わり。26年前の東条会館からお伝えしました。このお話の続きは5月15日(月)、角筈区民センターでやります。ぜひいらして下さいませ。

【おわび】

ありゃりゃ。先週、予告したけど、藤夏子さんの『銀座ママの本音』（河手書房新社）、紹介できなかったね。面白い本ですよ。これを読んで、私も人の心が読めるようになったとです。この本のサブタイトルは「男性からお金を引き出す方法」です。いくら引き出しても〈犯罪〉にはなりません。ここで語られてることは、全てに当てはまります。いやー、考えさせられまし

た。詳しくは次週に。

【だいありー】

(1) 4月24日(月) ジャーナ専。「ジャーナリストになるための三つの条件」について偉そうに話す。自分だって、もの書きとして通用してないのに、恥ずかしい限りじゃ。それと、「戦後史」として、敗戦、アメリカの占領について。夜、キネカ大森の「三島由紀夫映画祭」。「愛の渇き」を見る。渇いた友人が3人来たので、帰りに居酒屋に。喉の渇きをいやす。私は、愛よりも本に渇いている。今月は原稿が忙しくて、読書のノルマが達成できん。激しく焦る。渇く。

(2) 4月25日(火) TSUTAYAにビデオを返す。ポアロ、ミスマーブルなど。世界中の推理ものはほとんど見た。ここ2年で500本見た。今、NHK大河ドラマを見直している。「獅子の時代」「翔ぶが如く」はいいね。歴史の勉強にもなるし。

夜、柔道。あまり練習しないから、どんどん弱くなる。いかな。3段なのに。実力は初段だ。自虐的に「降段願い」を講道館に出そうかな。

(3) 4月26日(水) 午後、取材。宝島社に行く。初めて。でもすぐ隣りが某国大使館。あっ、昔、火炎瓶を投げに来たな、と思い出した。

(4) 4月27日(木) 午前中、大阪のテレビ局に取材された。午後、河合塾コスモ。佐藤優さんの『国家の崩壊』（にんげん出版）を皆で読む。私が『正論』に書いた書評も読んでもらった。

(5) 4月28日(金) 図書館で勉強。夜、お芝居。北千住で「愛の花園」。三田佳子さん、PANTAさん、大久保鷹さんが出ていた。よかったです。PANTAさんは初舞台とは思えないほど、堂々としていた。終わって、一緒に飲みました。

【お知らせ】

(1) 5月15日(月) 7:00p.m.角筈区民ホール。矢崎泰久さん、山根二郎さん、私のトークです。

(2) 5月31日(水) 7:00p.m.ロフト。雨宮処凛さんのライブ。「革命家が答える人生相談」。ゲストは塩見孝也さんと私です。

(3) 7月8日(日) 6:00p.m.ポレポレ東中野。「あんにょん・サヨナラ」の公開記念トークです。イ・ヒジャさん、私、他にゲスト。

(4) 「実話ナックルズ」(6月号)が発売中。國貞陽一さんが書いてます。「三島由紀夫の裏面史。その秘められた切腹願望」。力作です。広範な取材で、三島の切腹願望に迫っています。僕もコメントを求められました。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)
[2006年](#)

今週の主張5月8日

人の心を読めるエスパーはいたんだ！ ＝渡辺恒雄・三島由紀夫・藤夏子の場合＝

(1)靖国の英霊もプロレスを見て喜んでいました

渡辺恒雄・若宮啓文『靖国と小泉首相』（朝日新聞社）はよかった。教えられることが多く、勉強になった。渡辺は読売新聞主筆。若宮は朝日新聞論説主幹だ。月刊誌『論座』（06年2月号）で対談し、大反響を呼んだ。その時、載せられなかった分も収録して単行本にした。111ページの本で800円だ。コンパクトで読みやすい。「月のノルマ」をかかえる読書狂にも格好の書だ。

やはり、反対意見がないと言論は墮落する、と思った。違った意見にも耳を傾けないと、人間の思考も墮落する。同じ考えの人だけが集まって、「そうだ、そうだ！」「異議なし！」とやっていると気持ちがいいが、脳の活動が停止する。考えの違う人の意見も、たまには、じっくりと聞く。そして、彼らの土俵に上がって、考えてみる。そういうことも必要だろう。しかし、そんなことをやってる寛容な人は誰もいない。歴史の本を読んだって、自分に都合のいい部分だけを拾い上げて、「ほら見る！」と示す。その為だけに歴史を読む。これじゃ、いかんだらう。最近、三島由紀夫の『奔馬』を読み返してみて、アツと思ったことがある。ちょっと長いが引いてみよう。

〈歴史を学ぶことは、決して、過去の部分的特殊性を援用して、現在の部分的特殊性を正当化することではありません。過去の一時代の一部分の形にあてはめて、快哉を叫ぶことではありません。それは単に歴史をおもちゃにすることであり、子供の遊びであります。昨日の純粹さと今日の純粹さは、いかに似通っていてもその歴史的諸条件を異にすることを知るべきであり、むしろ純粹さの類縁を求めるならば、歴史的条件を同じくする現代の『反対

の思想』に求めるべきであり、これこそ特殊的小部分にすぎぬ『現代の私』のとるべき謙虚な態度であつて、そこには歴史の問題は捨象されて、単に『純粋性』といふ、人間性の超歴史的契機が問題にされてみると考へたほうがいい。そのとき、共有された同時代の歴史的條件は、方程式の定数にすぎなくなるからです)

ウーンと、唸りましたね。三島はやはり深い。歴史を読んで、自分の都合のいい所だけ発見し、「ほら、こんなこともあった」と自慢げに紹介してる人が多い。学者、評論家にも多い。僕だって偉そうなことは言えない。しかし、そんなものは「子供の遊び」だと三島は斬って捨てる。それよりも、現代の「反対の思想」にこそ耳を傾ける！」と言う。こんなこと言う人、他にいないよ。今は、「反対の思想」は皆、つぶし合っている。桜チャンネルの「左右激突・4対4」だって、ともかく相手を論破し、つぶすことしか考えない。「反対の思想」なんか全く尊重しない。耳も傾けない。朝生だってそうだ。ワイドショーだってそうだ。

そこで、渡辺、若宮対談だ。普通、「読売・産経」は右派。「朝日・毎日」は左派と思われている。ところが、「右派の読売」と「左派の朝日」が靖国問題では何故か一致している。「靖国神社首相参拝に異議あり！」と言っている。右と思われる中でも、たとえば渡辺とか、後藤田とか、戦争経験がある人は、単なる右派とは違う。同じように、改憲を言っても、「あの過ちを繰り返してはならん」という「反省」がある。今の能天気な右派には、それが無い。ただ、「行け行けゴーゴー」だけだ。

渡辺は、かつて共産党にいた。「反対の思想」も身をもって味わってきた。だから、国家権力の恐ろしさも分かる。そして、命令されて戦争に行った人間、特攻攻撃を強いられた人間と、それを命じた人間の違いも分かる。戦争で死んだ人々だが、決して〈同じ〉ではない。立場も違うし、〈責任〉も違う。全く同じにして、「戦争の犠牲者」としてしまうと、歴史から何も学ばないことになる。

強いられた死んだ者と、上から命令した者が同じ神社に祀られていいのか。これは重いテーマだ。又、「A級戦犯」が合祀された過程も、かなりおかしいと二人は言う。さらに、この合祀には天皇陛下もご不満のようで、それ以来、一度も靖国に行かれてないと言う。

それに対する反論はある。いや、今は「反論」ばかりが氾濫している。又、「外国から文句いわせん」という声も強い。そして、靖国問題を夕

ブーにしている。そんな時だからこそ、この本の意義は大きいと思う。現代の「反対の思想」は、心して読むようにした方がいい。それで自分の〈信念〉が崩れたっていいじゃないか。崩れたら、それは下らない思いこみや、偏見だったのかもしれない。そう分かる。本当の信念だったら、何があっても吸収し、さらに強くなるだろう。

靖国問題についてはもう一つ、おすすめだ。『紙のプロレス』（5月5日号）の、「検証・プロレスと靖国神社」だ。全く別の視点から靖国問題を考えている。4月1日に行なわれた「靖国奉納プロレス」を中心にして、考えている。靖国のリングに二度、上った中国人・王拳聖も証言している。「靖国側に話をもっていったら、その場で即決してくれた」と仕掛人の小路谷さんは語っている。「小泉首相が参拝するより、プロレスのほうが英霊が喜びますよ」

「戦前にプロレスがあったら、日本の戦争は起こらなかった」

と、とんでもない事を言ってる人もいる。誰だそれは。「500回、靖国に参拝した男」と出ている。あっ、私じゃないか。まア、この見出しだけ見ると誤解されるが、じっくり読んだら分かってもらえると思う（かえって反撥くうかな？）。

ともかく、格闘技から見た「靖国問題」だ。いい視点だと思うよ。「紙プロ」と朝日の本。この二冊は、これからの靖国問題を考える上で必須の本だよな。

そうそう、靖国プロレスの時は大仁田厚が出場し、暴れていた。場外乱闘までやってのけた。国会議員が乱暴狼藉。いいのかよ、と思ったが、いいんだよ。小泉さんに叱られたということもないし、中国、韓国から抗議が来たという話もない。靖国は何でもありだ。相撲は今でも奉納されてるが、昔は、サーカスやったり、見せ物小屋など興行が毎日のようにやられていた。英霊を慰めるという名目で、自分たちも大いに楽しんだんだ。いや、英霊と一緒に楽しんだんだ。だから、プロレスだって、喜んでいたよ。私の耳には英霊の喜びの音が聞えた。

(2) 「強者」が「弱者」に打ち勝ち、金を巻き上げる所です、ここは

でも、大仁田が訴えられた。「大仁田さんらに78万円賠償命令」と産経新聞（4月29日）に出ていた。えっ、靖国で暴れたからか、と思ったら、違うんだ。

平成15年だから、3年前の〈事件〉だ。プロレスラーのセッド・ジニアスが大仁田とプロレスをやった時、「顔蹴り」をされた。それは「打ち合わせ」になかった。だから1500万円支払えと、損害賠償を求めていた。つまり訴えだ。裁判官は、「プロレスでは、打ち合わせなしに相手を攻撃するのは許されない」「大仁田はセコンドの監督権限があり、使用者責任を負う」として、78万円の支払いを命じた。そうか、実際に蹴ったのは中牧だったが、大仁田に責任ありとして、訴えられていたんだ。分かりにくい。

「やっぱりプロレスは八百長だ」と思われるだけだよな、こんなことしてちゃ。それにしても、78万円の賠償か。だったら、両者で話し合っ、示談にすればよかったのに、こんなはした金で、訴訟することかよ。

他にもあるよね。大学教授が、製薬会社の人間から100万円もらって捕まったとか。小さいよな。100万円は大金かもしれないが、人生を棒にふるには小さい、小さい。大仁田だって、テレビに出たり、講演したり、稼ぎまくっている。だったら、金を出して和解したらよかったんだ。こんな形で汚名を残すくらいなら。和解したらいかんと面子やプライドがあったのかな。

男の世界は厳しい。いや、そんなことじゃないな。100万円位の金で訴えられたり、捕まったりして、一生を棒にふる人間もいる。これに反して100万でも200万でも、いや1000万でも、金をむしり取って罪にならない人がいる。クラブのママたちだ。水商売の女たちだ。この人たちは、いくら男から金をふんだくっても、罪にはならない。男だって、絶対に訴えない。たとえば、いやらしい目論見があって金を注ぎ込んでも訴えることなんて出来ない。

「私はA子と性交したいと思い1000万注ぎ込みました。でも、出来ませんでした。何とかして下さい」と訴えたって裁判所は受け付けない。3万の酒を30万で入れさせたって罪にはならん。「完全犯罪の女」たちだ。それに、この犯人たちは、何と、人の「心が読める」。エスパーなんや。まア、何でもその道を極めた人は違う、と思いましたね。藤夏子の『銀座のママの本音』（河出書房新社）を読んでそう思った。サブタイトルには、「男性からお金を引き出す方法」。

しかし、男もバカだね。何をしてもらうわけじゃないのに。何のメリットもないのに。ただ、金をむしり取られる。そのために自発的に銀座に行く。あわれな男たちだ。又、そんな男を騙して身ぐるみはぐなんて、ひどい女たちだ。悪党め！と思った。でもこの本を読んでみて、ちょっと考えが変

わった。やはり男が悪いんだ。なぜ、吸い寄せられるのかが分かった。又、気持ちよく金を出させるプロの技に感動した。「心を読む」ということは、「人間を知る」ことでもある。その奥深さが、ちらっとだが、分かった。本の帯にはこう書かれている。

〈人生に大切なことはすべて銀座のクラブで学んだ。

水商売の世界のVSOPはバイタリティ、スペシャリティ、オリジナリティ、パーソナリティ。この四つを駆使して、組織の中で成功するノウハウを、銀座一流ママが実践的に伝授する〉

読んで驚いたね。これは「人生論」になってる。又、人の心を読む技術を紹介している。そして、人は何故、ポンポンと大金を払うのかが初めて分かった。彼女らは、その人間の心の〈秘密〉を知ってるから、いくらでも男から金を引き出せる。そして、罪に問われることもない。これは必読の最強の〈武器〉だ。

たとえば、僕らは勘違いしている。彼女らは「女」を武器にして迫ってくるんだろうと思う。女の若さ、かわいらしさ。それで迫るから男は鼻の下を伸ばして金をいくらでも出すんだろう、と。しかし、違う。「こんないい女と寝てみたい」「オレの女にしてみたい」と思って、毎日毎日、通って、金を払うのだろう…。これも違う。いや、こんな客もいるし、そんなことで引きつける女もいる。しかし、本当の凄腕のママは、そんなに美人ではないし、そんなに若くもない。これは不思議だ。

又、女の肉体だけが目的なら、風俗店に行ったらいい。今は写真で選べるし、即、できる。何度もクラブに通うよりは手っ取り早いし、効率的・経済的だ。

では、何故、男は大金をはたいて高いクラブに通うのか。3万円の酒を30万円で買うのか。この本の著者、夏子さんが新人時代にママさんに聞かれたそうです。「ホステスの仕事とは何か」。

「そりゃ、お客さんにいい気持ちになってもらうことじゃないかしら」

「では、その為にどういう立場に徹すればいいのか」と聞かれます。

「えっ、分かりません」と夏子さんは答えます。僕らだって分からん。若くて、かわいい女がいたら、それだけで男はハッピーになれるんじゃないのか。〈存在〉そのものが男を喜ばせる。仕事も立場も技術もいらんんじゃないの。と思う。しかし、何度もいうように成功したママは、そんなに美人ではないし、若くもない。そんなものだけで勝負できる時間はあまりにも短

い。では、彼女たちは「どういう立場」に徹するのでしょうか。これからの話が、なるほどと思い、深いと思いました。ママさんは言います。

「ホステスの立場に徹するというのはね、女の立場に徹するということよ。もっとはっきり言うと、弱者の立場に徹するってこと。ホステスは弱者の立場を売る仕事。弱者の立場を利用して、強者である男性からお金を引き出す仕事なの」

(3)そうか。皆、自分が一番かわいいんだ。自己愛しかないんだ

凄いね。弱者が強者から金を引き出すのだ。ということは、弱者が結果的には強者になる。という事ではないか。次の説明は更に、分かりやすい。

〈ママは言います。クラブに来るお客様は、お金がある男性、地位がある男性、成功した男性、つまり社会の強者であると。そういう男性がクラブに来るのは「勝利の余韻」に浸りたいからだ。だから、ホステスは弱者の立場に徹しなければいけないと。

「夏子、お客さまはね、ホステスに金を払っているんじゃないの。自分のプライドやステータスにお金を払っているの。だから3万円のウイスキーを30万円で入れたりするのよ」〉

なるほど、と思いましたね。目からウロコでした。そうか。女のために金を払ってるんじゃない。女が可愛いから金を使ってんじゃない。「自分がかawaii」から金を使っているんだ。これは分かる。最近見た「名探偵コナン」でも、自分にプライドを持ち、自分だけがかawaii男が出てきた。女を愛しているように見えて、本当は一番自分を愛しているんだ。

うん、こういう男っていますよね。自分に、プライドを持って、自分の自慢ばかりしてる奴が。じゃいいや、こんな奴からいくら金をふんだくっても。私らのように全くプライドがない人間は、（たとえ金があったとしても）こんな所で金を使おうとは思わない。

クラブでは弱者（ホステス）が強者（金持ちのプライドおじさん）に勝利している。プロレタリアがブルジョアジーに勝利してるともいえる。これは、夏子さんも頭がいいが、聞き手も鋭いのだろう。そうですよ。あの中川文人さんですよ。「ヨセフ&レオン」の社長ですよ。元新左翼です。今も革命家です。

だから、こんな凄い本にまとめられるのでしょうか。

本に戻ります。弱者（ホステス）が強者（金持ちの男）からお金をもら

う。お客は強者だから、強者であることを証明するためにお金を払う。だから、ホステスは「弱者」に徹しなければならない。そして、ママは言いました。

「綺麗な子や、若くてまだまだ自分に可能性があると思っている子は、なかなか弱者の立場に徹することができない。それで上手くいかないのよね」

そうなのか。「フン、私は美人よ」「こんなに若い子がよりそって上げるのよ」と、(ほんの一瞬でも)客に感じられたら、もうダメなんだ。「私なんか…」と弱者に徹しなければ…。

でも、本当に金があって地位があって、皆に誉められる男は何も、わざわざクラブに来ることはない。どこだって、チヤホヤしてくれる。でも、さらに、誉められたい。評価されたい。そう思うから通うのだろう。

まてよ、社会的にはまだまだ評価されてない。あるいは、全く評価されてない。だから、せめてクラブに来て認めてもらいたい。そういう男も多いのではないか。読んでいて、ふと、私は思いました。そしたら、やはり、ママさんも「そうなのよ！」と言いました。私もママさんの心が読めるようになったんです。

〈どういう男性が常連になるかという、と、「強い男」「成功した男」ではなく、「強い男」「成功した男」と思われたいと思っている男性、「強い男」「成功した男」を演じたいと思っている男性です。自分では「強い男」「成功した男」だと思っているのに、社会からはそう評価されていない。常連になって下さるのは、そういう男性です。そういう男性の「夢」をかなえるのがクラブであり、ホステスの役目なのです〉

ウーン、凄いね。人生の全てが分かりましたね。いますよね、そういう男が、ゴロゴロと。

皆自分がかっこいいし、認めてもらいたいんだ。「オレはこんなに能力がある。でも一般の人間はそれが分からん」「こんなに勉強している。いい文を書いている。でも、下らん文を書いてる奴が売れている。オレはまだまだ認められとらん」

こうボヤいている人はいますよね。やっと金持ちになった。いい服も着ている。「しかし、世間の奴らは、ただの成り金としか見てない」「この世界ではトップになった。でも、皆は、裏社会としか見てくれない…」

そんな、不平、不満をかかえた男たちが、何と多いことでしょう。「強い

男」「成功した男」を演じたい。「本当はオレの方が上だ」とプライドのある人間。そんな人間はクラブに来ては、「本当ね。社長さんは凄いわね」「偉いわね」と言われただけで、「おっ、こいつだけはオレのことを理解してくれる」と思うのだ。単純なもんだね、男って。

ただ、誉めるだけじゃダメだ。時には、お客のコンプレックスにも優しく分け入る。そして、そこを、温かく、包んでやる。でも、男は、コンプレックスなんて見せないじゃないか。そう思うのは素人だ。ホステスは、男を誉める。誉めながら、客は何を自慢したいのか、何にプライドを持っているのかを探る。又、どの言葉にお客さまが反応するかを見る。そして、プライドが分かれば、何がコンプレックスなのか察しがつく。

ウン、その辺はカウンセラーのようでもあり、心理学者のようでもある。

「どの言葉にお客が反応するかを見る」なんて、どっかで聞いた、と思ったら、元公安の島袋修さんだ。スパイにしたい男と酒を飲む。勿論、身分は明かさないし、偶然の出会いを装う。公安は自分の話をする。自慢話や失敗話を。勿論、自分が「作った話」だ。酒や金や女で失敗したという話だ。そのどの話に相手が反応するか。又、金を払う時にわざと万札びっしりの財布をチラッと見せる。あるいは、店の女に事前に金を渡して、タッチしてもらう。それで喜ぶか、嫌がるか。そんな「反応」を見て、次の作戦を考える。よし、こいつには金でいこう、とか。女をあてがおうとか。

このことは『公安化するニッポン』（WAVE出版）でも、少し紹介していた。やはり、人を取りこむ、プロの〈心理作戦〉なんだ、と思った。

このママさんの本には、他にも、紹介したいことが一杯あるが一応、この辺で終わる。興味があったら読んでみればいい。「ホステスは男を映す鏡」「キャバクラとクラブの違い」「ホステスの特殊能力」「どんな男が暴走しやすいか」…など、教えられることが多かったです。

見沢知廉氏は、「心を読む機械」を死ぬまで探していましたが、ここにあったんですね。この人たちは皆、心を読むんです。生きてるうちに見沢氏に紹介したかった。又、ここまで男の心を読むし、特殊能力を持ったママさんたちはぜひ教授になって「生きた心理学」を教えてもらいたい。あるいは文部科学省の大臣になってもらいたい。日本もパッと明るくなるだろう。元キャバクラ嬢も国会議員になった。そのうち、元キャバ嬢や元ママさんの活動家も出現するでせう。

【だいたいありー】

(1) 5月1日(月) 東中野図書館で勉強した。

(2) 5月2日(火) 「生長の家」の講演会に行った。武道館。元「楯の会」の荒地浩靖氏、伊藤邦典氏、田村司氏らと会う。なつかしい。皆、「生長の家」の仲間だ。

学生時代、「生学連」（生長の家の学生部）の書記長を私はやっていた。当時の先生に会ったら、「鈴木君ほど事務能力のある男はいなかった」と言われた。そうか。昔は、几帳面だったんだ。今はズボラだけど。右翼になってから、繊細、几帳面では生きていけないと思い、自分で「性格改造」したんだ。自分で自分の心を読んで、騙したんよ。殺伐とした世界を生き抜くために、自分で自分を変えたんだ。保護色で染めたんだ。凄いね。自分の意志で自分を変えるなんて。と、褒めてあげた。金がないからクラブに行けないし、褒めてくれるホステスもない。だから、自分でホステスの役も演じたわいな。

夜、パンクラスの試合を見に行った。

(3) 5月3日(水) 夜、J-WAVEの「JAM・THE・WORLD」に出た。ラジオだよ。「教育基本法と愛国心」。「愛国心教育なんて必要ない!」「心を読めるクラブのママを先生にしる」と言ってやった。

(4) 5月4日(木) 河合塾コスモ。受験生は連休も関係ないんだ。我々も。

(5) 5月5日(金) 中野図書館で調べもの。月刊「創」（6月号）発売。私はジャナ専の入学式。三島由紀夫映画祭の話。それに藤田嗣治展の話を書いた。藤田展は5月末までやっている。竹橋の近代美術館で。そこで、不思議な映画（10分位）を見た。藤田が日本を外国に紹介するために作った映画だ。子供が遊んでる風景だが、チャンバラで、この中で、子供がマジに「切腹」したり、向かい合って「自刃」する。こんな遊びがはやっていたらしい。でも、「国辱的だ!」と批判され、外国には紹介されなかった。私も、もうすぐ国辱的な本を出す。他人事ではないと思った。

【お知らせ】

(1) 5月15日(月) 7:00p.m. 角筈区民ホール。矢崎泰久さん、山根二郎さん、私のトークです。

(2) 5月31日(水) 7:30p.m. ロフト。「雨宮処凛のわくわくお楽しみ会。vol2」。「そうだ！革命家に聞こう！--革命家があなただの人生相談に答えます」。ゲストは塩見孝也、木村三浩、平野悠、土屋豊。そして附録で私。

(3) 7月8日(日) 6:00p.m. ポレポレ東中野。「あんにょん・サヨナラ」の公開記念トーク。イ・ヒジャさんと私。他にゲスト。

(4) GWもなかったな。5月末に本を出すので、必死でした。他の原稿もあるし、学校の予習もあるし、図書館にも行かにならん。読書ノルマもあるし。三島映画祭も見なくっちゃ。ビデオのノルマもあるし。大変だ。お勉強の毎日で、「心は学生」ですよ。4月は30冊のノルマを達成出来ず、5月にずれ込んでやっと達成。5月3日になって、やっと4月が終わったことになる。変なこだわりだ。

「月30冊」ではなく、別な形のノルマにしてもいいかな。たとえば、「月、1万ページ」とか。あるいは、本を積み上げて、「月30センチ」のノルマとか。一度やってみよう。でも、他人から見たら馬鹿みたいだろうね。自分で自分にノルマを課して勉強してるなんて。誰も褒めてくれないけど、「頑張ってるわね」「偉いわ」と言ってくれる「ホステス」が心の中にいる。うん、そうだよね。励ましてくれる「ホステス」を自分の中に住まわせておけばいいんだ。そして、ブツブツと独り言をいってるクニョニョンでありました。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

年

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年 2004年 2005年
2006年

今週の主張 5月15日 誰が愛国心を教えるのか

(1) いっそ、愛国者認定の資格試験をやったら…

一体、誰が「愛国心」を教えるのか。教える能力と資格のある人が、どこにいるのか。それを中心に喋りましたよ。5月3日(水)の憲法記念日に。六本木ヒルズにあるJ-WAVEの「JAM THE WORLD」で。

教育基本法の改正問題がテーマだ。愛国心を明記し、愛国的な子供を育てようという。でも愛国心は「心」だ。教師が教え、強制するものではない。それに、重要な事だが、一体、誰が教えるのか。

「教師だ」と言うだろう。しかし、教師は今まで愛国心なんか考えてない。果たして愛国心があるかどうか分からない。じゃ、「専門家」に教えてもらうのか。たとえば、愛国運動を5年以上やったことのある人とか。そうすると、街宣車で演説してる人が特別講師になって、子供に教える。面白いとは思うけど、皆、反対するだろう。じゃ、誰が教える。

大体、愛国心・愛国者は「自己申告」だ。「自分は愛国心がある」「オラだって愛国者だ」と、自分で言うだけだ。それが正しいかどうか。本当の愛国者かどうかを審査する基準がない。

よし、じゃ基準をつくるるか。これも面白いな。と生番組の中で考えた。たとえば英会話や漢字の「検定試験」がある。高校中退者には大検がある。これに受かると「資格」がもらえる。もし、どうしても「愛国教育」をしたいなら、「愛国教育者」の資格検定をやったらいい。それに受かったら、一級愛国士、二級愛国士、三級愛国士になれる。

どんな試験になるんだろう。日本の歴史について。神話について。天皇について。…問われる。「日本の愛国者を20人あげなさい」という問題もある

かな。さあ、出来るかな。

しかし、これでは「知識偏重」だ。知識として知っただけではダメだ。なんせ国を愛する〈心〉なんだから。そのためには〈実践〉だ。〈実績〉だ。どれだけ君が代を歌ったか。どれだけ日の丸を掲げたか。どれだけ天皇陛下万歳を唱えたか。又、何年、愛国運動をしたか。それが問われるだろう。そうしたら私は「日本一の愛国者」だ。だって、君が代は五千回歌った。日の丸は五千回掲げた。靖国神社は五百回参拝した。教育勅語も暗誦した。愛国的街宣も870回やった。愛国的行動で警察に逮捕・ガサ入れされたことは数知れず。これだけの〈実践〉を持った愛国者は他にいない。「スーパーA級愛国士」だ。文句あっか！

今頃、愛国心に目覚めたといっている保守派の学者・評論家とは違う。私は、愛国者のノルマを軽くクリアした。君らは私の百分の一だってやらないだろう。

だから今月の20日に出す本も、そんな気持ちで書いた。その辺の、にわか愛国者、オタク愛国者、アマチュア愛国者を叱りつけてやる。私は本物の、プロフェッショナルな愛国者だ。その私が教えてやるんだ。「これが本当の愛国心だ！」「この人を見よ！」と。そんな気概で書いたんだわさ。タイトルも、『本当の愛国心』『誰も知らなかった愛国心』だ。いや、そうしようと思った。『日本一の愛国者・鈴木邦男』でもいいな。それを鈴木邦男が書く。自己賛美の極致だ。私だって、たまにはゴーマンかましたい。『愛国者クニヨニヨンの闘いを見よ！』でもいいな。

でも書き進んでいるうちに、ありやりやと感じた。昔の活動家時代の写真や書いたものを探していて気付いたんだ。いかげんなスローガンもあった。君が代もただ、「愛国者の義務」として歌っていて、正しく歌ってなかったんじゃないか。愛国者だから5人でも10人でも集まれば、まず君が代を歌う。でも、君が代は難しい歌だから、そろわない。バラバラに音痴に歌っていた。君が代さん、すみません。

日の丸も、汚れて破れたものを使っていた。俺たち活動家だって、貧乏で、ボロボロになって闘っている。だから、日の丸もボロボロでいいんだ。その方が年季が入っていて、貫録もある。と思ったのかもしれない。しかし、ひどい話だ。これは日の丸を大切にしていな。尊重してない。

国旗・国歌を最も侮辱して、尊重してなかったのは私ではないのか、と思った。自己嫌悪にかられた。

そうだ。思い出した。ある右翼の集会で野村秋介さんが、「教育勅語なん

かやめちゃえ！」と言った。驚いたね。あんなこと言える人は他にいない。当時は、右翼の集会ではどこも「教育勅語の奉読」をやっていた。国民儀礼の一つとしてだ。しかし、読む人間はつかえる。間違っ読む。心がこもってない。「そんなことならやめろ！」と野村さんが言った。それに、「型」だけを真似て何になる。時代も違うんだ！と。

その一喝で、やめた。他の団体も皆、やめた。これは凄い事件でしたね。

(2) 「量の愛国心」と「質の愛国心」があるよ

さて、私の話だ。私こそ日本一の愛国者だと思っていたのに。これはどうしたことか。私は思い違いをしていた。もしかしたら、私にあったのは「量の愛国心」だけではないか。「質の愛国心」がなかった。何でもノルマでやりゃいいってもんじゃない。それを反省しましたね。それで、タイトルを急遽変えた。『愛国者は信用できるか』。講談社現代新書。700円です。凄いタイトルですよ。編集者としては、依然としてあったんですよ。「本物の愛国者・鈴木」が「ニセの愛国者・オタク愛国者」を斬る！という目論見が。でも、書きながら、私の頭にあったのは、「愛国者・鈴木邦男は信用できるか」でした。自己批判の本になっちゃった。やっぱ、自虐本だ。そして、「自虐？いいじゃん」となっちゃいました。うん、このタイトルもいいな。

では再び、六本木ヒルズのJ-WAVEです。ここはラジオ局です。あのライブドアも入ってるビルです。ソフトバンクも入ってます。セキュリティは万全です。ということは、入るのは大変です。今まで3回ほど出演しましたが、下まで迎えにきてもらう。打ち合わせの時、トイレに行ったら、部屋に入れない。何度かカードをドアにおしつけたが開かん。電話もない。このドアも、このドアも開かん。やべー、本番に遅れるよ！と思ってたら、スタッフが心配して探しにきてくれた。「IDカードをお渡ししたでしょう」。でも、押し付けてもドアは開かんとよ。「あっ、その下のところに挿すんです」。分からんな。前は渋谷の小さなビルに入ってたのに、あそこは自由に出入りできた。渋谷に戻ってくれよ、と思っちゃったね。

では又、「愛国者」の話だ。「日本一の愛国者」と思ってた私ですら、どうも自信がない。反省しちよる。じゃ、他に誰が、「オレは愛国者だ」といえる人がいるのか。いねえよ。ましてや、生徒に愛国心を教えられる人なんていねえ。又、歴史を教えながら、「日本にはこんな愛国者がいました」と

教えるのだろうか。でも、それだって、各人各様の見方がある。楠木正成、児島高德、吉田松陰なんかは愛国者として教えるかもしれん。しかし、本当はこの人たちは愛国者じゃない。だってまだ「愛国」という言葉はなかった。明治になって、Patriotismを訳したんだよ。じゃ三島由紀夫かな。とお考えのあなた。それもちやいまんねん。三島は、「私は愛国心という言葉は嫌いだ」と言っている。そのことは、私の新しい本の冒頭にも詳しく書いた。又、三島の心情は「憂国」なんだ。「愛国」じゃない。保守的「愛国」は嫌いだ。革命的「憂国」なんだよ。愛国と憂国の違いについても、詳しく書いた。

だから、「歴史上の愛国者」も教えられん。又、時代が変われば見方が変わる。ということもある。ソ連のスパイ・ゾルゲと一緒に処刑された尾崎秀実。彼は「売国奴」と言われる。しかし、戦争を避けるためにやったんだ。本当は一番、この国を愛していたんだ。と思う人もいる。尾崎自身もそう思ってやった。又、非合法闘争を闘った共産党の人たちだって、「自分たちこそ本当の愛国者だ」と思ってやったんだろう。又、「天皇に逆らった」といって逆臣にれされた人々も、あるいは本当の愛国者だったのかもしれない。

「官軍」に逆らったとして「賊軍」にされた会津藩の人々。新選組…。この人たちだって、天皇を守るために闘った。自分たちこそが本当の忠義の士だと思ってたんだ。だから、誰が「愛国者」かなんて簡単に決められん。どーする、どーなる愛国心だよ。

もし、〈愛国心〉を教えるのなら、そんな愛国心に内在するアンビバレンツなラビリンス（迷宮）も教えたらよかとよ。そんで、生徒の頭をぐちゃぐちゃに混乱させたらよかばい。そして考えさせたらよかと。「愛国心」に安易な解決なんかはなかと。「日本一の愛国者」である私が言うんだから間違いはなか。おはんらも、まっこと混乱したらよかばい。（いかん、西郷さんが乗り移ってしもうた）。

(3)教育基本法なんて、いらねえよ

では、ちょっと現実的問題で、「教育基本法」を見てみる。自民党は能天気やから、バカのつ覚えのように「愛国心を明記しろ」だけや。でも公明党は抵抗してる。「愛国心」をズバリと書かれると、〈昔〉のことを思い出す。創価学会が戦争中に弾圧された体験を思い出す。それで、せいぜい「郷土と国を大切にし」という表現にすべきだといっている。「何をいまさら！」とか、「60年前のことをまだ気にしてるのか」と批判する人が多い

が、私は、公明党の「こだわり」は一理あると思う。同じようなことが、又、あるかもしれない。国家権力に対しては、警戒心が大切だ。

まあ、「与党改正案」の骨子は自民と公明の中をとって、こうなった。

「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできたわが国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」

自国だけじゃなく、「他国を尊重し」も入れたんだよね。「愛国心」じゃなくて、「わが国と郷土を愛する…態度」にした。「心」と「態度」はどこが違うのか。愛するなら、態度で示そうよ！ということか。だったら、なおさら難しい。愛国心検定をやって「愛国土」を育成するしかないのか。

そんな検定が出来たって誰が受けるんだろう。と学校で言ったら、「私なら受けてみたい」という生徒が何人もいた。「漢字検定や英語検定よりも確実に役立つ」と言う。これから時代は、ますます右旋回だ。愛国心教育はどんどんやられる。それを教える〈資格〉をとっておいたら、絶対に有利だ。という。うー、そういうものかな。

教育基本法の改正案は、他に、前文、義務教育、家庭教育、宗教教育…の項がある。あまり興味がない。ただ、義務教育の現行の「9年」という年限を削除した。これはいいことだろう。「6・3制」にとらわれない多様な教育が実践されつつある実状から、とったようだ。どうせなら、「義務教育」もいらんんじゃないか。

小学校、中学校なんか不登校で、ほとんど行かない人だって、卒業出来る。高校に入れる。又、大検を受けると大学に入れる。つまり、どうしても必要なことは覚えるんだ。小熊英二の『日本という国』（理論社）を読んだら、面白いことが書かれていた。

義務教育は明治から始まった。1872（明治5）年、「学制」という制度をして、小学校を全国にたくさんつくり、やがて「義務教育」というかたちにした。

〈この義務教育というのは、英語のCompulsory Educationの翻訳で、明治時代には「強迫教育」と訳されてもいた。つまり、国中の子どもは、「強迫」してでも学校に通わせるというわけだ〉

うん、「強迫」か。この方が、真実を伝えている。福沢諭吉は1883（明治16）年の『学問の独立』の中でこう言っている。

「我輩は素より、強迫法に賛成するものにして、全国の男女生まれて何歳に至れば必ず学に就く可し、学に就かざるを得ずと強ひて之に迫るは、今日の日本に於て甚だ緊要なりと信ず」

又、「強迫教育法の如き必ず政府の權威に由（より）て始て行はる可きのみ」とも言っている。そうだ。今の「教育基本法」も、「強迫教育法」に名前を変えればいいんだ。

明治の義務（強迫）教育に対しては、全国で、反対の声が起こり、学校が焼き打ちされたことも多かったという。だって、子供は大事な働き手なんだ。それを奪われてはたまらないというのだ。江戸時代なんか、5、6才から子供は、丁稚に出されたりして働いた。大切な「労働力」だった。

ところが、政府はそれらの不平不満、一揆を力づくで弾圧し、「強迫教育」を実行した。なぜか。「強い国」をつくるためだ。早い話、全員をよき軍人にするためだ。「読み・書き」が出来なければ軍人になれない。闘えない。命令を出しても理解できないからだ。教育だって、戦争のために必要だった。

明治以前は、武士だけが闘った。ところが、明治になって「国民皆兵」だ。皆が、軍人になる。そのための強迫教育法だったんだ。じゃ、今は、そんなこともない。「強迫教育」そのものが、もういらんんじゃないのかな。この問題は又、考えてみよう。小熊の本は、考えさせられた。皆も読んでみりゃんせ。

【だいありー】

(1)5月8日(月) 2:40p.m. ジャナ専の授業。三島由紀夫の話をする。元「ダカーポ」編集長・国貞陽一さんの書いた、「三島由紀夫の裏面史。その秘められた『切腹願望』」（「実話ナックルズ」）をテキストに話をした。

夜、打ち合わせ会をした。みやま荘の第二別館（と言われている高田馬場の「カフェ・ミヤマ」で）。

(2)5月9日(火) 病院に行った。もし、変な病気だったら、どうしよう、どうしようと不安だった。行きたくない。行きたくないと、抵抗してたのに、どうしても行かにならんはめになった。仕事先の命令で、「結核の検診を受けてこい」と言われた。二ヶ月位、ほっていたら、「どうしても行け」と言われた。「病院は怖いから、ヤダ」と抵抗してたのに…。

でも、「仕事をクビになっても病院に行かない」という根性もない。まだ

まだ貧乏だから、クビになったらキツイ。それで、泣く泣く行った。でも、こんな検査をしたために、とんでもない病気が発見されたらどうする。「末期の子宮癌です」「末期の乳癌です」なんて言われたら、多分、その場で卒倒し、死んじゃうだろう。あるいは、どうせ死ぬんならと、無差別殺人をして、自決するかもしれない。どっかに立て籠って、首を吊るとか。かっこ悪いな。でも、それもこれも、検査を強制し、強迫した人達が悪いんだ。オラのせいじゃない。

癌とはいかなくても、「立派な結核です」なんて言われたらどうしよう。若い身で、これから一生、山の中のサナトリウム暮らしか。そこで、悶々として一生を終える。あるいは看護婦と恋が芽生え、小説を書くとか。でも、ありえんだろうな。じゃ、前途を悲観して自殺だ。その前に、無差別大量殺人だ。うーん、ヤケになったら、やりそうだね。この人は。自分で自分が恐ろしい。だから行きたくないんや。

でも、行かにゃならん。で、(近くの)診療所に行った。民主主義的政党のポスターが随分と貼られていた。だったら大丈夫だろう。いや、かえって分からんぞ。「鈴木か。こいつは反動だ。右翼だ。民主主義の敵だ。じゃ、結核にしまえ。ついでに子宮癌にしまえ」なんて書かれたら怖い。そんなことはありえないのに、オラは病院には弱い。怖い。病院とジェットコースターは世界で一番怖い。一生行きたくない。

だから、レントゲン撮って、結果を待ってる時は不安で、不安でしかたなかった。意気地がないな。弱い奴やな、と自分で自分を嘲け笑ってました。長い長い時間を感じられました。「こんなに長いのは、もしかして…」と、どんどん悪い方向に考えがいく。逃げ出したい位だった。やっと、先生に呼ばれた。オズオズと行く。昔、捕まって、検事に呼び出された時もこんな気持ちだったなと思い出した。

「大丈夫ですよ。所見なしです」

ホッとした。思わず涙がジワリとにじみ出た。「ウワー！結核がやっと治った！」と心の中で大声で叫んでました。変ですね。別に、結核だったわけじゃないのに。でも、人間は感動した時は、こんな論理矛盾した奇妙なことを考えるものですよ。よかった、よかった。これで、大量殺人も、自決も、一時お預けだ。

そして夕方、4時半から、水道橋のアテネ・フランセに。足立正生監督のあの衝撃作「幽閉者」の試写会だ。これは楽しみだった。又、実際、面白

かったし、感動的な作品だった。1時間53分だが、長く感じない。近頃珍しいハードな「思想映画」だ。「幽閉者」と書いて、「テロリスト」とふり仮名を振っている。日本赤軍の岡本公三の物語だ。足立さんでなくては撮れない映画だ。

岡本公三には田口トモロヲが扮している。うまい。実にいい。どんどん岡本に似てくる。なり切っている。テルアビブ空港事件でただ一人、自決に失敗し、捕まる。獄中での凄まじい拷問の様子が延々と続く。その中で、幻覚を見る。ブランキ（PANTA）やネチャーエフ（大久保鷹）が現われる。この二人もいい。さらに重信房子（荻野目慶子）も出ている。重厚で、過激で、思想的な映画だ。試写会は超満員で、立見も出る。それだけ、この映画への期待が大きいのだ。

終わって、お茶の水で打ち上げ。荻野目さんとも久しぶりにお話した。高野孟さんの忘年会で以前、会った。赤軍派の事件には興味があって、植垣さんの本も読んでると、その時、言っていた。だから、今回は、はまり役だし、生き生きと演じていた。

ブランキ役のPANTAさんもいいね。前の芝居もよかったし。周りがいいとグンと伸びるんだ。これからは役者としても大成するでしょう。ネチャーエフの大久保鷹さんもいいね。僕も昔はネチャーエフの本を夢中になって読んだ。見沢知廉氏も好きだった。生きていたら、「出たかった」と言っただろう。

「幽閉者」を見て思ったが、僕が初めて本を出したのは、『時代の幽閉者たちに』（島津書房）だ。かなり難解な政治論集だ。今はとてもこんな文は書けない。一般的には『腹腹時計と〈狼〉』がデビュー作とされているが、実は『幽閉者…』の方が先なんだ。なにやら因縁を感じた。

そうだ。大久保鷹さんは本名が大久保邦雄だ。1943年生まれで、同じだ。驚いた。さらに驚いたが、以前、鈴木という女性と結婚し、彼女の籍に入っていた。「スズキ・クニオ」だったんだ。そうか！二人は元は一緒だったのか。

それで長年の謎が解けた。「スズキ・クニオの子供だ」という人がいる。三人いる。一人は実際に会った。一人はイラクで聞いた。「友人の母親がスズキ・クニオと学生時代、付き合って子供を生んでいる」。さらに、「田園調布に家があって、奥さんと子供がいる」…と。奇妙な噂だけが先行している。でも話してる人は皆、本気に言っている。でも、大久保鷹さんの話を聞いて分かった。何のことはない。全て、鷹さんの子供なんだ。

(3) 5月10日(水) 読売テレビからビデオが届いた。「たかじんのそこまで言って委員会」。4月30日に放映された「愛国心」の特集で、見たら、私も出ていた。そうだ。4月27日(木)に家で取材されたんだ。局の人が、みやま荘に入るなり、「ストイックな生活をされてますね」。エ?と思った。ただ、貧乏なだけじゃないか。「でも本を随分出してられるし、テレビにも出てるし」。まいるなー。本当はリッチだと思われてんのかな。貧乏はカモフラージュで、本当は田園調布に豪邸を持っていると思ってる人もいるし。一水会は高田馬場の「第23鈴木総合ビル」に入ってるが、「そこも鈴木さんのビルでしょう」と言う人がいるし。「かくし子が3人いる」という人がいるし。「ネコという名の女子大生をマンションにかこっている」という話もあるし。いいね。嬉しいですね。こんな噂はどんどん広めて下しゃんせ。

アマゾンで私の新しい本が紹介されていた。「申し込んだよ」と言ってた人もいた。嬉しいです。ありがとうございます。今度、田園調布の本宅に招待いたしますわ。

(4) 5月11日(木) 河合塾コスモ。現代文要約ゼミと基礎教養(読書ゼミ)。小熊英二の『日本という国』(理想社)を皆で読んだ。

(5) 5月12日(金) 里見浩太郎主演の「田原坂」と「五稜郭」を見た。昔テレビでやったやつだ。よかったね。城山で自決する前、西郷隆盛はじめ西郷軍は、肩を組んで「ラ・マルセイエーズ」を歌う。そんな馬鹿なと思ったが、ありえない話ではない。フランス留学帰りの兵士もいたからだ。五稜郭に立て籠もった榎本武揚は5年間、オランダに留学した。それで、オランダの歌をよく歌っていた。「ラ・マルセイエーズ」も歌ったろうな。「エゾ共和国」を作ったんだし。フランスの軍事顧問団もいたんだから。

吉田進の『ラ・マルセイエーズ物語』(中公新書)はいい本だった。この歌を作詞・作曲したルジェ・ド・リールは王党派だった。ところが革命は、王様を処刑し、さらに穏健派もギロチンで殺される。リール自身も捕らえられ、あわや処刑か。という所までゆく。リールと、「ラ・マルセイエーズ」の激動の、そして数奇な運命を描いている。実に感動的な本だった。いつか、詳しく紹介しよう。私も書いてみたいね。「日の丸物語」を。

夕方、雑誌の取材。夜、柔道。

(6) 5月13日(土) 九段会館に憲法のシンポジウムを聞きに行った。

(7) 5月14日(日) 2:30p.m.から月蝕歌劇団の芝居「龍馬は戦場に行った」

を見る。なかなか面白かった。

【お知らせ】

(1) 5月15日(月) 7:00p.m.から角筈区民ホール。矢崎泰久さん、山根二郎さん、私のトークです。

(2) 5月20日(土) 私の新しい本、『愛国者は信用できるか』（講談社現代新書・700円）が発売の予定です。

(3) 5月23日(火) 別冊宝島の『日本アウトロー列伝』が発売です。私も二つほど書いてます。

夜7時から一水会フォーラム。高田馬場のリサイクルセンター。世界愛国者会議（モスクワ）に出席した木村三浩氏の講演です。この会議のことは「週刊朝日」（5月19日号）にも紹介されています。

(4) 5月31日(水) 7:30p.m. ロフト。「雨宮処凛のわくわくお楽しみ会。vol.2」。「そうだ！革命家に聞こう！革命家があなただの人生相談に答えます」。ゲストは塩見孝也、木村三浩、平野悠、土屋豊、鈴木邦男。

(5) 6月6日(火) 6:30p.m. 文京シビックセンター。「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」。

(6) 7月8日(日) 6:00p.m. ポレポレ東中野。「あんにょん・サヨナラ」公開記念トーク。イ・ヒジャさんと私。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)
[2006年](#)

今週の主張 5月22日

お待たせ。『愛国者は信用できるか』が出ました！

(1)愛国心の本は手当り次第、読みました

杉山平助の『猫と愛国心』（白揚社）を今、読んでいる。昭和10年に出た本だ。ネットの古本屋で買った。何やら凄い秘密が書かれている（ようだ）。実は、今回、『愛国者は信用できるか』（講談社現代新書・700円）を書くに当って、参考のために、「愛国心」について書かれた本は全て読もうと思った。本屋で何十万円と買った。お金はないんだけど無理をして買った。本が出たら返すからと、借りた金もある。

しかし、新しい本だけではダメだ。中野図書館、東中野図書館、ジャナ専図書館で、〈愛国心〉に関する本は全部借りて読んだ。これでも足りない。ネットの古本屋を見たら、何百冊とある。読んでないものは注文して読んだ。これも金がかかった。でも、愛国心に関する古典的名著といわれる清水幾太郎の『愛国心』（岩波新書）や田中卓の『愛国心の目覚め』（至文堂）なども読んだ。何十年かぶりに再読した。完全に忘れていて、全く新しい本として読んだ。

去年の夏頃から、今回の本を考えていた。だから10ヶ月位かけて、「愛国心」に関する本を読み漁った。付箋をはさみ、メモをとりながら読んだ。その時、この本に出会ったのだ。『猫と愛国心』だ。何と魅力的な題名じゃありませんか。ハッと思った。惹きつけられた。一度見たら忘れられない。ネットで見ただ。よし、買おう、と思った。古本だし、僕だって知らない本だ。高くはあるまいと思った。でも、千円でも二千元でも買おう。題名だけで買う価値はあると思った。それで定価を見た。24000円。エ？240円じゃないの。違う。2400円でもない。何なんだ、この値段は。

その時は金もなかったし、馬鹿野郎、誰が買うもんか、と思った。しかし、原稿を書いてても気になって仕方ない。家で原稿を書いていると、うちの猫が邪魔をする。すりよってくる。仕方なく、遊んでやる。「お前には愛国心があるか？」と聞くと、「ニャー」と答える。「無い」という意味だ。こいつは売国猫だ。この前、『君が代の全て』というCDを買ってきて聞いていた。君が代のメロディは外国人のお雇い音楽家が作曲した。その他にも、いろんな人が作曲した試作盤があった。有名なところでは5つある。オペラ風のもの、雅楽風のもの、讚美歌風のもの…と。私はミッションスクール出身だから讚美歌風のが一番いいと思う。君が代はこれに変えるべきだと思う。家の中では、このメロディの君が代を歌っている。

しかし、私が君が代を歌っていても、猫は、馬鹿にして寝ている。起立もしないし、一緒に斉唱もしない。中学や高校の教師なら即、処分される所だ。猫はゴロンと寝たまま。腹を出して「フニャー」とあくびをしている。国歌を馬鹿にしている。「フニャー」とは「不同意」という意味だ。どこまでも不忠、売国、非国民の猫だ。

だから、『猫と愛国心』は気になって仕方がなかった。でも高い本だ。それに、どんなことが書かれているか見る事が出来ん。何ページかでいいから、パラパラと見る事が出来ればいいのに。そうしろよ、馬鹿。まだまだネットは遅れているな。こんなことではネットは皆に見放されるぞ。と思った。

思うということは念じることだ。たとえば仏を思うことを「念仏」という。思いはパワーになる。そして、ネットを動かした。私の念力はアマゾンまで届いた。アマゾンっていったって南米の河じゃないよ。ネットの本屋だよ。困るな、ネットのことを知らん人には、説明しなきゃならん。

「産経新聞」（5月12日）を見て驚いた。アマゾンでは今年中にやるそう。ネットの「立ち読み」を。ネット上でパラパラと本をめくれる。全体の何%かだけだが。でないと、全部立ち読みされたら、誰も買う人はいない。何ページとか、あるいは本の10分の1とか、決めて読める。それで、うん、これは買ってみよう、と思うわけだ。これはいいことだ。画期的だ。私の「念力」が実現させたのだ。皆も、私に感謝するように。

(2)犬は愛国的だ。では、猫に愛国心はあるか

さて、『猫と愛国心』だ。まだ、ネット立ち読みは出来ない。神田の古本

屋なら、手にとって見れる。「そうか、猫にも愛国心はあるのか」「フーン」じゃ、買おうとなる。あるいは、愛国心の話を書き、全く別に猫の話を書いて。ただ、並べたのかもしれない。それが分からん。これじゃ、相手と会いもしないで結婚するようなもんじゃ。と、突然脈絡のないことを思った。

昔。といっても戦争中や戦前は、「写真見合い」で結婚した人が多くいた。遠くにいて、会えないから、写真だけを見て、結婚するのだ。仲人を信用したのか。さらに凄いのは、写真も見ないで結婚した人も随分いた。ブラジルに移民するんで、「やっぱ女房がいた方がいい」と思って、急遽、仲人に頼む。「じゃ」といい娘を見つくるって、結婚させる。現地で調達すればよさそうだが、アマゾンの女じゃ不安だ。そこで日本から連れて行く。

やっぱ、アマゾンには不安だよ。よく分からんから、アマゾンは反省して、今度は、「ネット立ち読み」を実現したんだ。

しかし、「写真見合い」や、「写真なし見合い」で即、結婚した人は、果たしてうまくいったのか。それが、うまくいったんですよ。中には、「えっ、写真と違う。返品!」「チェンジ!」なんて思った人もいたろうが、大体は、そのまま一緒になった。よくいえば、「外見」よりも「人間性」で結婚したんだ。つまり、衝動的な恋で結びついた者は、別の恋が現われたら、すぐに離婚する。しかし、そんなもので結ばれたんじゃないから、別れないんだよ。

「じゃ、働き手としてもらっただけじゃないか」という反論もあるだろう。それはあるかもしれない。でも別れんのだからいいじゃないか。「家のため」「子供をつくるため」「働き手がほしいから」という理由で、(顔も見ないで)結婚しても、一緒に生活するうちに、情も湧く。愛もじわじわと生まれる。そんなもんじゃよ。まア、結婚したことのない人にこんなことを言っても分からんじゃろうが、結婚生活とはそういうものよ。そこで、子供も生まれると又、いとしさもひとしおになるんじゃない。子供もかわいいし。まア、子供を持ったことのない人間にこんなことを言っても分からんじゃろうが。

うちの両親は、見合いもしないで結婚した。写真を見なかったらしい。税務署に勤めていて、地方を回るのに、奥さんは必要だろうと言われて、もらった。ほれた、はれたで結ばれたんじゃない。だから、家庭は平穏だ。一度も離婚してない。その子供たちも皆そうだ。

えーと、何の話だったかな。そうそう、『猫と愛国心』だ。だから思い

切って申し込みましたよ。両親だって、顔を見ることもなく結婚したんだ。その息子も、顔を見ることもなく、本を買うべきだと思ったんだ。宿命だ。24000円を払って買った。果たして、猫に愛国心はあるのだろうか。

「愛」というのは双方向的だ。少なくとも、それを期待する。これだけ愛してるんだから、君も愛してくれ、と期待する。お前のことを本当に愛してるのはオレだけだ、と縛る。他の男に走ったら、「それは間違った愛だ。オレだけが本当の愛だ！」と、とめる。追いかける。そして殺す。愛は怖い。「愛」は時として凶器になる。「愛国心」だって、戦争の時に、この名のもとに、駆り立てられる。殺人だって簡単にやる。

『愛国者は信用できるか』では、その「愛の怖さ」についても書いた。又、「愛国と憂国」の違いについても書いた。「憂国」というと、「こんな日本でいいのか。ダメだ」「ぶっこわせ！」と破壊的衝動に結びつく。実際そういう事件も多い。しかし、これは個別的、部分的、限定的な現象だ。それに誰にも強制されない。ところが、「愛国」の方は（たとえば戦争の時など）、国ぐるみで、上から強制される。普遍的、強制的で逃げ場がない。だから「愛国」の方が、より狂暴で、破滅的になる。といった話も書いた。

では、猫はどうなんだ。犬は愛国的だが、猫は売国的なのか。ウーン、これも難しい。確かに犬は忠義だ。忠犬八チ公だって、ご主人様が死んだのに、毎日毎日、駅まで出迎えにいった。偉い犬だ。だから渋谷駅前にはその八チ公を顕彰して銅像が立っている。もしかしたら、ご主人だって、霊になって毎日、帰ってきてたのかもしれない。八チ公にだけはその姿が見えていた。だから幸せだったんだ。世の人々は、「主人が死んだのも知らないで、今日も迎えにきた。かわいそうに」と涙した。又、ある人々は、「やっぱ犬は馬鹿やね。死んだのも知らんで」と言った。でも、馬鹿なのはその人たちだ。なにも、あわれんで銅像にしなくても私は幸せだったんだワン。と思っ
とるでしょう。

忠犬八チ公の他にも、いろんな話があるな。火事の時、子供を救い出した犬とか。おぼれてる子供を助けた犬とか。猫はそんなことはないな。3年前、うちのアパートが火をつけられた時も、うちの猫は、危険を知らせることもしない。ご主人を助けることもしない。さっさと逃げ出してしまった。

犬は軍用犬にもなる。盲導犬にもなる。警察犬にもなる。犬に爆弾をくくりつけて「特攻犬」にしようとしたこともある。本当に忠義であり、愛国的な動物だ。人間よりも愛国心がある。その点、猫には愛国心はない。気まぐ

れだし、飼い主の恩を感じないからだろう。忘恩の徒だ。だから、軍用猫はいない。警察猫もない。盲導猫もない。役に立たん奴だ。それで、カーツとなって殺すと、崇って出る。こういう時だけは律義だ。困った奴だ。

(3)愛国者は「豆顔」だ。コスモポリタンは「イモ顔」だ

犬は愛国的だ。そうだ。次は、『犬と愛国心』を書こうかな。『愛国犬は信用できるぞ』でもいい。『吾が輩は愛国犬である』でもいいな。

この前、テレビで「世界一の愛国犬」を紹介していた。本当の話だ。タイにいる犬なんだ。タイでは朝8時と夕方の6時に、国歌が流れる。誰でも起立しなくてはならない。路上にいても、学校にいても…だ。知り合いの山本君は、たまたまタイの風俗店にいた。タイには、多くあるらしい。裸でタイ娘がサービスをしてくれた。勿論、男も裸だ。そこに、国歌が流れた。女性は急に立ち上がり、直立不動。お客さんに向かって、「立ちなさい!」。山本君は、「立ってるよ」。「そこじゃないの」。という会話があって、渋々、起立して国歌を聞いたそう。

映画館でも、映画の始まる前に国歌が流れると皆、起立する。何も知らん日本人が座ったまま、さらに、「何が国歌だよ、ペッ!」とツバを吐いた。これで逮捕された。これも本当の話だ。

私はタイには田中義三さん（よど号）の裁判で5回行った。法廷には国王陛下の写真が掲げられている。「だから、足を組んではいけません」「ワイシャツの腕まくりをしてはいけません」「腕ぐみをしてはいけません」と言われた。国王陛下に対し、失礼になるからだ。腕を組んでるのは喧嘩を売ってるようだ。だから禁止だ。これだけ愛国教育が徹底している。

しかし、それ以外は全て自由なんだ。タイの法廷では、被告人の田中さんの隣りに座って喋っても自由。原稿を書いてももらったり、本を渡したりも自由。廊下に出たら、一緒に写真を撮るのも自由。その時の写真は『創』や『SPA!』に何度も載せた。国王への尊敬さえあれば、あとは何をやっても自由なんだ。いわば「国王アナーキズム」なんだわさ。

そんな国だから、右翼なんかいない。全員が右翼だから、わざわざ黒い街宣車で叫ぶ必要はない。又、そんな国だから、犬だって愛国的になる。世界中の犬を集めたって、タイの犬が一番愛国的だ。「世界愛国犬コンテスト」では優勝できる。そうだ。タイでやればいいんだ。そうしたら、ムエタイと

愛国犬は世界最強だと証明される。

日本のテレビでやっていた「愛国犬」の話だよ。タイの犬が出てきた。朝夕の国歌が流れる時は、そのメロディに合わせて、犬が歌うんだ。歌うというか、吠えるんだよね。それが、ちゃんと国歌のメロディに合っている。凄いやね。だから、「世界一の愛国犬」だ。風俗店で立たない山本君よりもずっと愛国者だ。

うちの猫はそんなことはしない。そうだ。知り合いの人に赤ん坊がいる。二才だ。でも、もう「天皇陛下万歳！」をやる。よく舌も回らないのにやる。凄いやね。携帯で聞いたから本当だ。又、新右翼のあるゼミでは、歴代天皇陛下のお名前を暗記している。OLも憶えたそうだ。凄いな。じゃ、次は、『赤ん坊と愛国心』を書くか。あるいは、『OLと愛国心』にするかな。

ここで突然、考えた。うーん、『枝豆と愛国心』でもいいな。愛国者は何故か、枝豆が好きだ。枝豆を食べると知らず知らずのうちに愛国心が湧くようだ。その秘密に迫ってみる。大体、愛国者は、というか右翼の人は「豆顔」が多い。吉田松陰、高杉晋作、坂本龍馬、三島由紀夫、野村秋介、木村三浩…と。みんな、スラリとした豆顔だ。私だって豆顔だ。

その点、左翼の人は「イモ顔」だ。唐牛健太郎（60年安保の人だよ）、森恒夫（連合赤軍の人だよ）、塩見孝也、三上治、植垣康博…と、皆、ジャガイモ顔だ。これらの人は、食べ物も、イモが好きだ。「右翼と左翼の違いはミニスカートとキュロットの違いだ」と喝破した思想家がいたが、「豆とジャガイモ」も左右の思想的違いを表わしている。やっぱ、「クニヨニヨン思想大辞典」を作らなきゃならんな。

【だいありー】

(1)5月15日(月) 12:00 講談社に行く。講談社現代新書は毎月20日発売。今月は20日が土曜なので、19日(金)に発売だという。そして、15日に見本をもらうことになっていた。でも手に取るまで不安だった。本当に出してくれるのか。「ごめんごめん。ダメになっちゃった」「急遽、出版が中止になって…」なんてことになるんじゃないか。…と、気が小さいから不安でした。心配でした。

でも、実際に手に取って、「やったー」と思いましたね。嬉しかったですね。シンプルできれいな表紙だ。『愛国者は信用できるか』。本の帯にはこ

う書かれていた。

〈三島由紀夫は言った。「愛国心は嫌いだ」。

なぜか？

新右翼の大物が問う「天皇と愛国心」〉

そして帯の裏にはサミュエル・ジョンソン、森田必勝、田中卓、三島由紀夫の〈愛国心〉についての言葉が書かれている。なかなかいい。

この本には、しおりの他に、「新刊のお知らせ」が入っている。単行本の他、講談社学術文庫、文芸文庫、ブルーバックスの紹介があり、現代新書の紹介もある。5月の新書は5冊だ。私の本は、こう紹介されている。

〈38年前の朝日新聞で、三島由紀夫は「実は私は『愛国心』といふ言葉があまり好きではない」と書いている。それは何故か？ 新右翼の大物が問う「天皇と愛国心」、そして日本の未来図！〉

「新右翼の大物」はちょっと恥ずかしいけど、まあいいか。それに、「日本の未来図」まで書いているんだ。苦労して書き上げたけど、出来上がってよかった。嬉しい。

この日は、午後2時40分から、ジャナ専の授業。新しい本の紹介をやった。それと、この本を書くキッカケになった三島由紀夫の「愛国心」をコピーして配り、皆で、愛国心について考えた。

さらに、午後6時、角筈区民ホール。7時からトークだが、その前に打ち合わせ。「笑いとバトルのスーパーライブ」。なかなかきれいな会場で、満員。第1部は太田スセリさんの「一人コントと歌。初めて見たが、面白かった。「ストーカーと呼ばないで」は特によかった。CDをもらった。これも愛なんだよね。ただ、愛しているだけだ。それなのにストーカーと呼ばれる。うん、「愛国者」もストーカーかもしれんな。〈日本〉は「愛国者」など嫌いだし、追いかけるな！と思ってんのに、いつまでも、いつまでも追いかけてくる。もうやめてよ！と〈日本〉さんは言いたいのもかもしれない。40年間、愛国運動をやっていた私だって立派なストーカーだった。よし、次の本の題名は決まった。『愛国者はストーカーか？』。

太田スセリさんは稽古熱心な人だ。始まる前も、会場で念入りにリハーサル。又、楽屋の廊下でも歩き回りながら、喋ったり、歌ったり、唸ったり。矢崎泰久さんが、「誰か、うんうん唸っているよ。大丈夫かな？」。そした

ら太田さんだった。太田さんが入ってきたら、「唸ってるから、心配しちゃったよ」と矢崎さん。「じゃ、何か産んでみせましょうか」と太田さん。笑っちゃいましたね。でも、見たかったですよね。卵を産むところを。

太田さんのミニライブが45分。それから山根二郎さん（弁護士）と矢崎泰久さんのトーク。天皇制やら仏教やらに対する批判でヒートアップ。そして、「ここいらで鈴木さんと呼ぼう」となって、私が入り、三人で話す。矢崎さんとはたまに会ってるし、テレビで一緒に出たこともある。だから、話しやすかったが、山根さんは久しぶりだ。25年前に「山根処分反対集会」で会っただけ。それ以来初めて。つまり、会うのは二回目だ。それに、こういうふうには話し合ったのは初めて。

話には聞いていたが、こんなにボルテージの高い人だとは思わなかった。圧倒されて、私なんて何も喋れなかった。「朝生は嫌いだ」といいながら、一番、朝生的だ。でも「仏教が一番悪い」という話は興味深かった。又、「日本が目指すのは近代だ」「アメリカと仲良くしなくてはダメだ。アメリカに見放されたらどうする」という話には驚いた。昔、山根さんは学生運動をやっていたし、東大闘争の弁護をやったから、バリバリの「反米」の闘士だと思っていたのに。

でも、時代なのかもしれない。昭和11年、2.26事件の年に生まれたんだ。山根さんは。日本が敗けた時は、「解放感」を感じたという。米軍は文字通りの「解放軍」だったという。その気持ち、僕らにはちょっと理解できない。でも僕らも、中学、高校時代はアメリカの音楽、映画、テレビにどっぷりと浸かっていたな。「アメリカはすげえな」と思った。でも、段々と「進化」した。「明るく、豊かで、すげえアメリカ」だけじゃないぞと思ってきた。別のアメリカ像も知ったし、アメリカを見る眼が大人になったのだ。

ところが山根さんは69才になっても、少年のまま。少年の純真そのままなのだ。これは偉いのだろう。

激しい討論が終わって、打ち上げ。僕は、山根さんの金嬉老や奥崎謙三の弁護の話を聞いたかった。この二人を弁護できるなんて、日本広しといえども山根さんだけだ。トークの時にあまり聞けなかったので、打ち上げの時に少し聞いた。でも、やっぱり、「仏教が悪い」という話になっちゃう。あとは、スキーの話だ。「スキーはクラシック音楽だ」と言っていた。雪の上の滑走、抵抗、摩擦、動き、それはもう音楽なんだそうな。音楽の素質のない奴はスキーは上達しないという。なるほど。私は子供の時からスキーをやっ

ていた。秋田じゃ、冬になるとスキーしかないんだ。他にやる運動はない。だから、それなりに出来る。そして、クラシック音楽も好きになった。クラシック好きの有田芳生さんも、スキーをやったら、すぐに上達するだろう。水泳は得意だっていうし。水の中も、雪の上も同じじゃ。その抵抗の中でどうやって人体を動かし、リズムに人体を乗せるかだ。

山根さん、矢崎さんとは又、ゆっくり話してみたいですね。

(2) 5月16日(火) 原稿がたまっていたので、一日中、書いてた。夜、久しぶりに柔道に行く。柔道もクラシック音楽だよ。でも、最近、体が疲れて、リズムカルに動かん。ギクシャクしてロボコップになっちゃう。

(3) 5月17日(水) 2時、ロシア大使館に行く。初めて入った。昔はよく、抗議のために行ったけど。「北方領土返せ！」とか言って。ロシアで開かれた「世界愛国会議」に木村三浩氏は何回も出席し、ロシアの人達とは親しいのだ。だから私も連れていってくれた。ロシアと日本で、青少年の交流、話し合いをやりたいという。いいことだ。

(4) 5月18日(木) 河合塾コスモ。

(5) 5月19日(金) 一日中、図書館で勉強。夜、柔道。

【お知らせ】

(1) 5月23日(火) 7:00p.m. 高田馬場のリサイクルセンターで一水会フォーラム。木村三浩氏が講師で、モスクワで開かれた「世界愛国会議」の報告をします。

「別冊宝島」の「日本のアウトロー列伝」(1050円)が発売になる。私は、野村秋介、金嬉老のところを書いた。他に、見沢知廉、竹中労なども出ている。面白い。これは売れるだろう。

(2) 5月31日(水) 7:30p.m. ロフト。雨宮処凛さんのイベントに私も出る。塩見さんらも出る。

(3) 6月6日(火) 6:30p.m. 文京シビックセンター。「おかしいぞ!警察・検察・裁判所」。

(4) 7月7日(金) 慶応大学で講演。

(5) 7月9日(日) 6:00p.m. ポレポレ東中野。「あんにょん・サヨナラ」公開記念トーク。イ・ヒジャさんと私。

(6) 「月刊タイムス」(6月号)は私の連載「三島由紀夫と野村秋介の軌跡(第20回)」。それに、「見沢知廉の母の苦悩」が載っている。お母さんが7ページ、語っている。実にいい。

(7) 『危ない!人権擁護法案』(展転社・1500円)が緊急出版された。実にいい本だ。皆に読んでもらいたい。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年 2004年 2005年
2006年

今週の主張 5月29日 これぞ全く新しい歴史だよ

(1)星新一って結構、思想的だと思うけどな

星新一の本を読んでいたら生徒に馬鹿にされた。「私は小学生の時によみました」「僕だってそうです。もう卒業しました」「今頃読んでんですか。ガキですね」。

エッ、星新一って小学生の時に読む本なのか。知らなかった。でも、私は小学校、中学校、高校と、読書なんかしたことがない。その反動で今、読書している。ノルマを決めて読んでいる。

でも、星新一って、結構、思想的に深いものがあるよ。小学生で分かるのかな。もしかしたら、「子供用」「大人用」と書き分けているのかもしれない。あるいは、同じものを読んでも子供と大人は別々に感じるのか。だから、それでいいのかもしれない。その辺を生徒に聞いてみよう。

しかし、こんな話がある。第二次世界大戦前のドイツだ。貧乏な青年画家がユダヤ人の画商のもとに絵を売りにくる。でも、買ってくれない。それどころか、さんざん馬鹿にされ、追い出される。今日、食うものもない画家は必死に頼むが、無惨にも叩き出されてしまう。「この怨みは絶対に忘れない。必ず復讐をしてやる!」と叫んで…。あっ、ヒトラーの話だな。と思う。若い時は画家だったんだ。もしかしたら、こんなこともあったかもしれない。後にユダヤ人虐殺をやる「隠れた理由」になってるかもしれない。フン、フンと思って読んでると、それでは終わらない。貧乏画家を追い出して、ユダヤ人画商は呟く。

「商売をする時は、やっぱり、ユダヤ人と言っておくに限る。ユダヤ人だ

からこんなあこぎな商売をするんだろうと、怨みはそっちに行くさ」

じゃ、「ユダヤ人虐殺」はヒトラーの勘違いから生じたのか。凄い話ですね。勿論、お話です。でも、思想的に深いお話だと私は思いましたがね。小学生は、これをどう読むんでせうか。これは『やっかいな関係』（青龍社）という大判の本に出ていました。

もう一つ紹介しよう。女は最近、夢をよく見る。犬がいつも出てくる。なつかれる。変な夢だ。男がいる。こいつは、夢の中で犬になっている。何かを求めてさまよっている。でも二人とも、そんな恥ずかしい夢を見てるなんて人には言えない。そしてこの男女は今、ベッドの中で抱き合っている。

うん、これも思想的に深い。小学生はどう読むんだろうか。小学生用のにはないのかな。でも、星新一の好きな小学生は、星新一とついでりゃ何だって読むだろう。危険だ。

私は昔、夢の話の研究し、フロイトから始まって、あらゆる夢の理論を研究したことがあった。その夢博士の私からすれば、この話は、前後が逆だ。まず男女の合体がある。その感動的な体験に驚いて、各々の脳が瞬間的に物語を作ったのだ。あるいは交接中に、犬のような行為をしたのかもしれない。そして脳は、時間も支配した。だから、「うん、こんな夢は前々から見てるな…」と思う。

たとえば、夢の中で、必死でトイレを探している。それは、本当にトイレに行きたいのだ。大人なら、ガバツと起きてトイレに行く。子供はお寝しよをしちゃう。でも、おネショーの方が自然なのだ。脳が、眠りを妨げないように〈物語〉を作ってくれるのだ。「何も起き上がることはありませんよ。ほら、ここがトイレですよ。見つかりましたね。さア、しちゃいましょう」と脳は優しくささやく。子供は安心してシャーとしちゃう。ちょっと濡れるけど、眠りは妨げられない。朝までグッスリだ。つまり、眠りを中断させず、体を休めさせるために脳は必死に（それも瞬時に）物語を考えるのです。そして、前にも何度もあったように思わせるのです。脳こそが世界最高の作家であります。

こんな体験はありませんか。教会の鐘が鳴っている。皆で野原で遊んでいるのに、うるさいなー。と思って起きたら、目覚まし時計が鳴っていた。脳は思うんですね。「馬鹿め。ベルの音を、せっかく夢の物語の中に取り入れてやったのに。わざわざ起きることはないのに」。脳は、社会的ルールや、会社の規則は知りません。朝、会社に遅れたらマズイということも知りません。ただ、あなたの肉体的健康のことだけを思い、願っているのです。盲目

的な愛です。けなげな愛です。目覚しの音なんかで起きないで、十分な睡眠をとり、体を健康に維持するように。それだけを考えてくれるのです。だから、外部の邪魔な音（目覚し時計、ドアを叩く音、隣の部屋でむつま合ってる声）や事件（おねしょ、火事、ドロボー）などでも目が覚めないように、〈物語〉をつくり、夢の中に取り入れるのです。

「夢」については私は20年ほど前に出した、『現代攘夷の思想』（暁書房）に書いたと思います。

夢は時を支配するということですが。「こんな夢を毎日見てるな」「前にもよく見たな」と思ってるあなた。本当は、今日一回だけなんです。でも、前にも見たと思わせるんです。脳が。そんなことはないと思うなら、毎日、目覚めた時に「夢日記」をつけてみたらいい。私は昔、つけていた。それで実証したんです。「過去」を支配してるから、「現在」も「未来」も支配します。夢で見たことが、本当に起きていた。あるいは何日後かに起こる。こんなことがありますね。それですよ。私もよくあります。

夢の中で、ガサ入れを受けてた夢をみた。そしたら、本当にドアを叩いている。公安だった。これは夢が予知したともいえるし、察知した、ともいえる。あるいは、ドンドンと叩いている。でも夢の中だ。その朦朧とした意識の中で脳は、「公安かもしれん」と思い、「ガサ入れの物語」を夢として作るんです。千分の一秒位の短時間に。でも、ドアを叩く音が大きいから、目覚めます。公安だ。「ゲッ！夢で見た通りじゃないか」と思うのです。

さらに、時間軸は時々、ゆがみます。それを体感した側にとっては、それは未来なんです。そんなことも私はよくあります。友人が死んだ夢を見た。あるいは、さらに友人に夢で知らせた。次の日、本当に事件は起こった。

知り合いの人が逮捕された夢を見た。そうは言えないから、「A君は元気？」と聞いた。次の日の新聞を見たら、彼が逮捕されていた。不思議ですよ。だからといって私を超能力者と呼ばないで下さい。私の脳が教えているだけです。

(2)だから、全ては脳が作るんですよ

星新一の『やっかいな関係』から、もう一つ。精神科医の所に、「男たちに尾行されてるんです」という患者がくる。どこに行ってもついてくる。5人位で黒服の男たちがついてくる。朝から晩まで。話を聞いてみると、どうも妄想のようだ。別に公安につけられるような悪いこともしていない。普通

のサラリーマンだ。治療をする。少しお金はかかるが、完治した。「ありがとうございます。もう妄想は出なくなりました！」。

入れかわりに、裏口から5人の黒服の男がくる。医者はお金を払う。「又、よろしく頼むよ」。

そうか。私も公安につけられてると思ったら、妄想だったのか。いや、妄想だと思わせ精神科に行かせるための謀略だったのか。でも誰が儲かってんのだろう。謎だ。

そうだ。私の『公安警察の手口』を読んで、「尾行されてんです」というサラリーマンや主婦がよく電話をかけてくる。じゃ、医者すすめるか。そして医者からマージンをもらって。商売になるかな。

星新一の『つねならぬ話』（新潮社）からも紹介しよう。「もしかしての物語」。源義経は平泉で死なないで、エゾに脱出し、樺太から、北米に渡り、南米まで行った。アステカに着いた。いや、アステカは義経が征服し、そう命名したんだ。アスカとアタカを思い出すし。それに、ここでアマテラスの国を作ることにした。そんで、アステカと名付けたそう。

もう一つ。「さざれ神話」。昔々の大昔。地球が出来る前の宇宙だわいな。砂粒が宇宙を漂っていた。その砂の粒子たちは集まり、少し大きな塊の石となった。そうすると、まわりの粒子を引きつける力も強くなる。宙を動きながらなので、雪ダルマのように、しだいに巨大になってゆく。

それが地球になったんだ。「君が代は…さざれ石のいわおとなりて」という国歌はこれを表わした。地球誕生の壮大な物語を目撃した人が書きとめたんだよ。凄いね。だから皆も、誇りを持って歌いませう。

星新一はお父さんが星一（はじめ）。星製薬をはじめた人だったから、「はじめ」だ。おじいさんは小金井良精。この父のこと、おじいさんのことを星新一は書いている。二人とも偉い人だったから、偉い人たちと交流がある。二人について書くことは、そのまま日本の近代史になる。おじいさんは文学、医学、軍人とも付き合いがある。ずるいよね。これは。こんな家に生まれたんで、おじいさんのことを書けば、日本の歴史が書ける。『祖父・小金井良精の記』（新潮社）を読んでそう感じた。

長岡の人だったから、河井継之助が出てくる。又、佐久間象山、ベルツ、北里柴三郎、野口英世、杉山茂丸、山本五十六、小金井喜美子、森鷗外が出てくる。鷗外とは親戚になる。

おじいさんの生まれた時から書いてる。その頃すでに、星新一は、おじい

さんのことを知っていたのか。（そんなことはない）。相当なおじいさんになってから知ったんだよね。立派な人だった。〈老醜〉のない人だったという。

〈祖父から老醜という印象を受けたことはない。年齢に不相応な欲望がどこかに残っていると、それが老醜となる。祖父にはそれがなかった。歳月の流れとともに、精神的にも肉体的にも調和のとれた老いかたをしていた〉

フーン。「老醜」というのは「年齢に不相応な欲望」のことなのか。タイで女を買ったとって批判された老革命家がいた。これも老醜か。金にこだわっている老人もそうだ。老人は、静かに枯れてゆけばいい。「不相応な欲望」は持つな。

というのか。ムリをして、社会運動なんかやるな。酒ばかり飲むな。ノルマを決めて本なんか読むな。無謀なことはするな…と。チェッ。いいじゃないか「欲望」を持つのは。老醜でいいよ。

と、ここだけはカチンときたけど、あとは、いい本だ。近代史のお勉強にもなる。私もこんな本を書いてみたいですね。でも、父も祖父も平凡な人だったからな。父は名前からして平凡だ。鈴木一郎だし。銀行などで名前を書くと、「ダメダメ。サンプルを写しちゃ」といわれてた。そうだ、『イチローの偉大な生涯』を書こう。間違っ買ってくれるだろう。

あっ、いかん、いかん。こんなことで遊んでられん。今回は、もっと偉大な本を紹介しようと思ってたんだ。話のマクラが長くなっちゃった。

(3) 『夜明けのあと』は文句なしに傑作だ！

星新一の『夜明けのあと』（新潮社）を読んだんだ。ビックリした。これはいい本だ。凄い本だと思った。1991年2月に出た。もしかしたら星新一の最大傑作だ。そのわりには、それほど話題になってない。不思議だ。

多分、星新一の「小説」ではないからだろう。明治時代の新聞を丹念に読み、それを紹介している。「なんだそれだけか」と言わんでほしい。これが、面白い。キチンと新聞の出典を示し、そのあと、コメントを加えている。知られざる「歴史」がゴロゴロしている。これを読んで私は、驚きのあまり、精神的に30才は成長した。だから、一挙に百才になってしもうたがな。だからいつまでもガキの頭のままでいた人は絶対に読まんことじゃ。星は、明治の新聞について、こう解説する。

〈徳川時代の長い鎖国のあと、文明開化の大変化。普通だと内乱状態だろうが、意外に平静で、ユーモアもある。落語を育てた社会のつづきを感じる。

ラジオもテレビも、週刊誌もなかった時代。新聞は、娯楽性を持つ必要があったのだろう。悲惨な事件や理屈の主張は、あまりない。現代のテレビのニュースショーと共通したものがある〉

いや、ニュースショーより、ずっと高尚だ。面白いし、ためになる。悲惨な事件は今、これでもか、これでもかと繰り返し、繰り返しやる。朝から晩までやるから、全国で何千、何万と「子供殺し」があるように錯覚する。

「じゃ、おれもやってやろう」と思う不屈者も出る。いかんよな。それと、今は「理屈の主張」ばかりだ。偉そうに、ああやれ、こうやれと、モデルの押切もえまでがコメンテーターで出て、「警察はもっとバンバンやってもらわなくちゃ」と言っていた。やめとけ。アナウンサーが事件を伝えるだけでいいよ。

では、『夜明けのあと』だ。明治元年から、終わりまでだから、膨大な内容だ。その中でも、私が面白いと思ったのを抜き書きしてみる。

明治元年（1868）

○当時、ストーブを「へやぬくめ」と呼んだ。それが原因で外人居留地で火事ある（崎陽雑報）。

○米人スネル、敗れた会津藩の住民を数十人つれ、カリフォルニアに移住させる。米の耕作も可能なり（中外）

これが後世、コメの大量生産となり、日本をおびやかす。

（「中外」などの出典のあとは星のコメントだ。さらに私のコメントを付ける時は（ ）にする）

明治3年（1870）

○外国行免許状（パスポート）発行条令きまる。

（こんな昔にパスポートは出来たんですね。136年前か）

明治4年（1871）

○この年末より、天皇も肉、牛乳を召し上がるようになる。羊毛のフランス式軍服を日常服とし、革の靴をはく。

（こんなに早く肉を食べてたんですね。いやだったでしょうね。革の靴をはいた初めての日本人は坂本龍馬でしょう）

○旧大名の藩邸を処分したいが、新政府の信用がなく、千坪二十五円でも買手なし。青山邸はどうしようもなく、墓地にした。現在の青山墓地。

(知らなかったです。元は大名屋敷だったんですか)

○長寿への祝。88才は8両。百才には10両に改正（太政官）

(いまもやれよ。でも国家財政が大変か。百才以上は2万人もいる)

(4)図書館、皇后のおはぐろ、夫婦げんか、仇討ち…etc

明治5年（1872）

○獄中で死亡した男、親族に引き渡した後に、生き返る。残りの刑期をどうする（日東）

(本当にどうしたんでしょうね。引き渡したんだから、と釈放でしょうね。今なら、もう一回、刑務所に戻すだろう)

○大阪の古道具店。外国人にヤカンの値を聞かれ「八百（文）だ」と答えたら、八百両を置いていった。役所に申し出て、相手に伝えたら、「不足なのか」とさらに二百両くれた（東京日日新聞）

(ホンマかいな。落語みたいだ)

○春画の販売が禁止される。名匠の浮世絵であろうが（新聞雑誌）。二束三文で外国へ。

(こんな猥褻なものは恥ずかしいと思ったんでしょうな、政府は。西欧列強と肩を並べるためには、こんな遅れた風習はやめさせなくてはと思った。ところが、モデルとした西欧がドッと買った)

○京都に図書館ができる。和漢、翻訳書、各地の新聞あり、有料（日東）。やがて東京の湯島にも。

(今年で図書館設立134年か。有料というのがいい。たとえ10円でも100円でもとればいい。あるいはカードで入るとか。でないと、寝るためだけに入ってくる人がいる)

○麴町に住む男。妻と口論し、「出てゆけ」と叫ぶ。外出のために着がえ、化粧した妻を見て、美人だったのに気づく。あわてて表と裏の門をしめた（東日）

(閉めてどうしたのか。いい話ですね。今の新聞にはこんな美談は絶対に載らん)

○横浜で、各国人200人による射撃大会。鹿児島出身の村田経基（つねよし）大尉が第一位となる。（新聞雑誌）

彼はこのあと海外に留学し、銃の研究をし、小銃の国産化に成功する。そ

の村田銃は世界から評価された。

明治6年（1873）

○仇討ち、禁止される。

○天皇、断髪なさる。皇后も少し前に、オハグロをおやめになった。

○銭湯に犬を連れてきて入浴させるのが、禁止となる。（東日）

（知らなかった。明治6年までは、皇后さまはオハグロをしていたのか）

明治7年（1874）

○天皇お通りの時、平伏しなくてよい。車や馬を下り、帽子をとり、道ばたに直立し頭を下げればよい（東日）

（これまでは土下座してたわけだ。目を上げて天皇を見たら眼がつぶれると言われた。でも、土下座はやめても、やはり、頭を上げちゃいけない。正視してはいけないんだ。今のように、カメラに写したり、キャーなんて叫んだら、「不敬罪」だったんだ）

○山形の県庁内に天皇の写真をかかげたところ、賽銭（さいせん）をあげて拝礼する者おおし。万歳を叫ぶ者も（新聞雑誌）。

（これも面白い記事ですね）

○天皇23才。新しい侍女と深い仲となり、皇后ご立腹。岩倉具視、その和解のために苦心。なんとかおさまり酒宴となる。その帰途、岩倉は食違坂（くいちがいざか）で暴徒に襲われ、あやうく命を失うところだった。

（凄いな。こんなことまで新聞に書いてるんだ。今よりも皇室報道は自由だったのかもしれん）

明治9年（1876）

○相撲の親方の多くが、マゲを断髪にする。いずれは力士たちもが（曙）

○廃刀令公布。士族のなかには腰がさびしいので、長いキセルを代わりに差すのが流行。

明治10年（1877）

○戦争の記事が面白い。いま金を払うから今後の一ヶ月分をまとめて渡してくれと社に来た人がある（朝野）。気分はわかるな。

と、この辺でやめとこう。ラストは面白いね。新聞は戦争で売れたんだ。戦争があったんで宅配制度が出来たんだ。戦争のあとに夏目漱石などの新聞小説がそれに代わった。

ここまで見ただけでも実に面白いね。星新一の書いてる中のほんの一部

だ。それなのに、まだ明治10年までしか書いてない。明治は45年までであるのに。どうしよう。これから毎週10年分紹介するか。あるいは、コンパクトに来週一回で書いて、やめるか。ウーン、考えとこう。では、おわり。

【だいありー】

(1) 5月22日(月) 2:40 ジャナ専。教育基本法の改正問題について話をする。6時から、京橋。ソクーロフ監督の「太陽」の試写会。PANTAさんと会う。皇室評論家の松崎さんとも会う。

「太陽」は昭和天皇を主人公とした映画だ。凄い映画だ。似ている。天皇制擁護とか打倒といった対立軸を超えて、人間天皇を描こうとした、ニュートラルなヒューマンな映画だと思った。8月、銀座シネパトスで公開の予定。外人から見ると、昭和天皇はこう映るのかと、思った。見て、考えてほしい。

(2) 5月23日(火) 12:30 下北沢のシネアトロン下北沢。井上修監督の「出草の歌・台湾原住民の呐喊」の試写会。驚いた。実にショッキングで、考えさせられる映画だった。6月24日(土)～7月7日(金)まで、同劇場で公開される。民族とは何か。国家とは何か。戦争とは何かを考えさせられた。骨太の、思想映画だと思った。終わって、監督、それに、映画を手伝っている鈴木義昭さんとお茶を飲みながら、話をした。

夜、7時から、一水会フォーラム。木村三浩氏が、ロシアで行なわれた世界愛国者会議の報告をする。

そうだ。この日、講談社から電話があった。「重版になりました」という。「エッ！先週の土曜日に出たばかりじゃないですか！」と言った。実際5月20日(土)に出た。取次の関係でまだ並んでない書店もある。それなのに、大型書店の売れ行きを見て、重版を決定したという。ありがたい話だ。

(3) 5月24日(水) 午後、出版社の人と打ち合わせ。大きな仕事を終えたから、もう今年はいいだらうと思うが。

(4) 5月25日(木) 河合塾コスモ。現代文要約ゼミ。基礎教養ゼミでは、筆坂秀世さんの『日本共産党』（新潮新書）を生徒と一緒に読む。

(5) 5月26日(金) 4:30からジャナ専の会議。そのあと、講師と生徒の飲み会。7時からウェブマガジン『直言』発刊記念パーティ。遅れて参加する。宮崎学氏、佐藤優氏、植草一秀氏らと会う。

(6) 5月27日(土)、28日(日)、図書館でお勉強。

【お知らせ】

(1) 5月31日(水) 7:00p.m. ロフト。雨宮処凛さんのイベントに私も出る。

(2) 6月5日(月) 「論座」(7月号)発売。特集「愛国心と私」。私も書いている。

(3) 6月6日(火) 文京シビックセンター。「おかしいぞ!警察・検察・裁判所」

(4) 6月7日(水) 月刊「創」(7月号)発売。私は「愛国心なんていらない」を書いている。

(5) 7月9日(日) 6:00p.m. ポレポレ東中野。「あんにょん・サヨナラ」公開記念トーク。イ・ヒジャさんと私。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン/丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)
[2006年](#)

今週の主張 6月5日 〈明治〉は、日本の出発点・原点ですよ



(1)故郷・仙台は危うく「北京」になると

こだった

これは知られざる日本の国民史であり、又、天皇の歴史でもある。星新一の『夜明けのあと』（新潮社）だ。普通の、一般の人々の視線から、社会、政治、天皇制を見ている。当時の（明治時代）の新聞は、社会を見る眼があたたかい。おもしろい。先週は明治元年（1868）から明治10年（1877）までを紹介した。では今回はその第二回だ。

明治11年（1878）

○天皇ご帰還。計427里2丁55間と数尺の旅。ありがたきこと（東日）

明治12年（1879）

○金沢の近郊。コレラを追い払おうと、旗、ワラ人形、笛、太鼓で「あっちへ行け」と行列を作って進む。その方向の住民たち、来るなど乱闘となる。（曙）。各地で発生。

明治14年（1981）

○西郷隆盛、じつはインドで健在。近く帰国との本を売る者が大阪に出現（郵便報知）

（この本は読んでみたいね。アマゾンであるかな。ロシアに行ったという話はあるが、インド説は初めて聞いた）

○やとわれていた車引きが、主人の一家四人を殺す。住職一家を殺した事件もあった。いずれも共犯者たちと逮捕され、斬首。これが最後。翌年からは絞首刑。

（「これが最後」というから、もう殺人事件はなくなったのかと思ったら違う。「斬首刑」の最後だ。首斬り浅右衛門が代々執行していた。綱淵謙錠が詳しく書いている。『斬』だったかな。西欧列強と肩を並べるために、国家の殺し方も近代化したんだ）

○医学部のベルツ博士、米飯は洋食よりすぐれた食品と講演（東日）

（ベルツのことはよく出てくる。嬉しいですね。『ベルツの日記』は名著。私の『愛国者は信用できるか』にも紹介してるよ）

明治15年（1882）

○軍人勅諭

○東京があり、西京（京都）がある。東北地方の振興のため北京を作れとの説（東日）

（元々は京があって、「東の京」ということで東京が出来た。じゃ、東北にも京を作ってやろう。そうすると仙台（宮城県）あたりが「北の京」になる。「北京」だ。ペキンと呼ぶのか。私は「北京出身」になっちゃう。それに、皇居のことを以前は宮城（きゅうじょう）と呼んだ。「おそれ多い」と宮城（みやぎ）県知事は思い、「宮城県をやめます」と政府に打診した。しかし、「かまわぬ」とのことので「宮城県」は生きのびた。「宮城県北京市」だったら、これ又、奇妙だよ）

明治16年（1883）

○銭湯の女湯をのぞこうとする外国の男、巡査がつかまえた。ドイツ人。名

はオンナスキーだそうだ（朝野）

（ホンマかいな、と思った。でも、ドイツにはこんな名前もあるんやろう。日本に来て、朝生かTVタックルに出たら人気者になるやろう。私は、シオサバスキーという革命家を知っている。エダマメスキーという売国奴も知っている）

○大阪。造幣局の桜の通り抜けが、はじめて許可される。四月二十日。

（今も桜の名所だ。私も何度か行った。いろんな種類の桜があって素晴らしい。こんな昔から開放されてたのか）

明治17年（1884）

○東大前の文房具店。洋行帰りの教授のすすめで、大学ノートを製造。丸善で万年筆を購入し、発売。

（大学ノートも万年筆も、この年、生まれたのか。ありがたいことじゃ。これがなかったら、私は何も書けなかった。勉強もできなかった）

明治18年（1885）

○華族の女性は、名のあとに子（こ）をつけ、省（はぶ）かぬようと通達（改進黨新聞）

（これは重要な記事だ。今でも続いている。日本文化を守るためなのか。元皇族の竹田さんから直接聞いた。今でも、女性は子をつけるように慣習となっていると。さらに、宮中に嫁ぐ女性も皆、子がついているし。「生まれた女の子も、子が必ずつく。美智子、雅子、紀子、愛子…と。つまり、「ありさ」「あやか」「くるみ」「れもん」「すいか」なんて名前の女の子は宮中には嫁げんのだ）

○京の本願寺の御堂再建のため、材木を寄付する者が多い。その運搬には髪の毛の綱がいいと、新潟の未婚女性たちが献納。18万人が尼の頭になる。感心だと、縁談も早い。

○熊本の本願寺へ。長崎の遊女を身うけして献上した者あり（朝日）。なんの役に立つのか。

○西洋にならい、高知に競争健足会が出来、賞を与える（自由灯）。マラソンのこと。

明治23年（1890）

○明治時代の詔勅、合計二千を超える。

（えっ、こんなにあったのか）



(2)インド？ロシア？ 西郷隆盛は生きている

明治24年（1891）

○宮中に勤める者、上等な服を制定しなければ、給仕とまちがえられると申し出る。

天皇、給仕の服をさらに質素にすればと。

（これは天皇の方が正しい。グンと質素にしたら間違われない）

○公卿の出で維新に功績のあった三条実美（さねとみ）、インフルエンザに感染。55才の高齢のため、ベルツの手当てもむなしく、死去。

（ベルツは凄いな。日本の偉い人は皆、ベルツがみてたんだ）

○天皇、西郷隆盛が戻ったら、西南の役での勲章を、将校たちから取り上げようかと。

（単なる「風説」かと思ったら、新聞にも載ったのだ。前はインドで生きてるといふ説もあったが、実はロシアにいて、ロシア皇太子の来日の際に、随行で帰国する。という噂があった。まさか天皇は信じてないと思う。しかし、こんな説が流れ、それを信じて巡査、津田三蔵はニコライに斬りつけた。風説、おそるべしだ）

○日本で最初の、靴みがき業が出現（国民）

（ということは、靴をはく人が増えたからだろう。天皇が靴をはいたのが明治5年。その後、急に増えたのか）

○独身ぐらしの男性に、月三円で、土曜から日曜にかけての、女性派遣業がはやる。

（これはいい。ぜひ復活してほしい）

○11月1日、外国の王族へ危害を加えた行為への刑の法案を作成。同日、犯人の津田、北海道の網走にて死去。

明治25年（1892）

○大阪で興信所が開業した。企業や個人の信用調査を引き受ける。

○大分県の村で、母の眼病の治療にと、妻を殺して肝臓を取った男。妻の浮気に立腹してたとの説もある（朝野）

（親孝行な息子だ。母親は肝臓を食べたのだろうか。最近の事件だが、子供

がおじいさんを殺した。いじめられてる父に同情したのだという。近年にな
い親孝行の息子だ。文部科学省は表彰し、「親孝行の見本」にすべきだろ
う)

明治26年 (1893)

○東京弁護士会が設立。予想どおり、発言者が多く、大声ばかりの混乱の会
議 (東日)

明治27年 (1894)

○京都で飼い犬に保険をかける保犬会社が作られた (読売)
(保犬か保険かまぎらわしい。今もあるんだろうか)

明治28年 (1895)

○屈辱外交を批判の演説会。どの弁士の発言も中止を命じられる。勅語を読
みはじめても中止となる (日東)

(ひどいね。中止させた巡査の方が「不敬罪」になったのか?)

○東京の神田に、ローラースケート場が出現した。車滑りと呼ぶ。

明治30年 (1897)

○奈良へ出張した役人、勅使河原 (てしがわら) という男。宿帳に署名した
ら、勅使 (ちやくし) の河原さんまがと、大歓迎され、警察も来る (毎
日)。

(ルーツをたどると、元々は、勅使だったのかもしれない。僕も、勅使河原さ
んを何人か知っている。でも歓待なんかしてない)

○岡山県のある村。16才の娘が、ふっと家出。なんの連絡もないまま、90
年たって帰宅。どこにいたのか (東朝)

(この頃から北朝鮮の拉致はあったのか。「遠野物語」に出てくるような話
だ。でも、帰ってきた時は106才。誰も知っとる人はおらんがな。もしかし
たら、娘か孫かもしれない。あるいは全くの別人か。勿論、遺産を狙っての犯
行だ。横溝正史の小説の舞台になっているのは岡山が多い。犯罪の宝庫だ)

明治32年 (1899)

○年賀郵便の特別扱いを開始。元旦に配達してくれる (日本)

(こんな昔から元旦配達はやられてたのか。驚き。明治はやはり日本の夜あ
けだった)

明治33年 (1900)

○子供がタバコを吸えば、親から罰金。それで親をおどす子供の漫画（時事）

（「おこずかいくれないとタバコすってやる！」と脅してたんでしょ。マンガも紹介ませう。面白いね。今もやればいい。20才以下がタバコ、酒飲んだら親から罰金をとる。こんなに罰金払えんと、親は思い余って子供を絞め殺すかもしれん。民族浄化になるかな）

明治34年（1901）

○ペスト予防のため、東京市内では、ハダシで歩くのを禁止。下駄屋が繁盛する（毎日）

（えっ、まだハダシで歩いてる人がいたのか。天皇が靴をはいたのが明治5年。靴磨きが出現したのが明治24年。もう、皆、靴をはいてたと思ったのに）

○講習会が流行。著名人の名を並べて客を集め、話は代理人というひどいのも多い（時事）

（この頃からいたんだ。講演屋が。今でも、下らない話をして1時間100万円も稼ぐ作家、教授、タレントがいる。それも、「他人を思いやる心が大切」「お金が全てではない」といって、100万円を要求する。いかんよな）

○日本アルプスの呼称が定着（春秋）

（時代小説を読んでたら、「日本アルプス」が出てきた。まだなかったのにな）



(3)ノゾキ男。ブタと交尾した男。これも愛国者か

明治35年（1902）

○郵便ポストを黒から赤に変える。評判がよくて、遠くから入れに行く人あり（読売）

（目立つけど、赤は共産主義だから黒にしてたんだらうか。でも、ロシア革

命の前か。じゃ、それを予知してたんだ。黒いポストも見てみたい)

明治36年 (1903)

○東京帝大の学位ある教授7名、満州問題で露国に強硬な主張をし、桂首相に意見書を提出 (東朝)

(いつの時代にもアホな教授は多い。今だって、一杯おるがな。専門バカのくせに、世のオピニオン・リーダーだと錯覚しちよる)

明治37年 (1904)

○名古屋の九才の男児が、ためた金を軍に献金。安易な流行になるのが心配だ (万朝)

(平成の今の世ではもっと凄い「愛国ベビイ」がいる。友人の2才の赤ん坊。「天皇陛下万歳!」をやる。又、レストランで食事してたら、突然立ち上がり、「北朝鮮に気をつける!」と大声で言った。「テレビを見ておぼえたらしい」と親。じゃ、街宣でやってもらったらいい。なんなら、「愛国ベビイ」を集めて、大演説会をやったらいい。うちの子供も出そう。これにならって、幼稚園でも「愛国心教育」がやられるかな)

○移動のため兵士の一隊が、高輪泉岳寺に宿泊。人数が47名。隊長は大石良弼。偶然だが、墓前に努力を誓った (国民)

明治38年 (1905)

○露国の首都ペテルスブルグで、皇帝への請願デモ十数万人に。軍隊が発砲。

○島根県のある村、地主で金持ちの村長の口調がどもるので、みなそうなる (読売)

(うーん、ありうる。ここじゃ、どもらない人間は非国民だ。いや、非村民だ)

○執行猶予の法律が成立 (官報)

(こんなに早くからあったんだ。驚き)

○日本は韓国の皇室を尊重し、その下に総督府をおき、外交の事務をする (官報)

(ヨーロッパでは王室外交があり、仲がいい。アジアでも王室外交、王室の交流、結婚はあったんだろうか。中国、韓国、タイ、カンボジア、日本…の間で。「アジアの君主国家は連帯せよ!」と言ってたんだろうか。ないような気がする。日本の右翼だって、中国、韓国の反王朝の志士たちを応援して

いたし)

明治39年 (1906)

○無電の完備で、海軍の伝書鳩が不要となる。横須賀で二百数十羽、払下げ
(東朝)

(鳩料理になったんやろか。いえいえ、きっと新聞社がもらったんやろう。
30年ほど前まで、新聞社は伝書鳩を使っていた。元「サンデー毎日」編集長
の鳥井守幸さんから聞いた)

○戦争での死者をしのび、各地で碑を建てる計画があるが、中止を望む。靖
国神社だけで充分。寺内陸軍大臣 (日本)

(これは賢い。愛国心競争で、日本中が碑だらけになったら大変だ)

明治40年 (1907)

○山手線に電車が走る。それまでは、すべて石炭による蒸気列車 (東朝)

(山手蒸気列車だったのか。昔は省線といった。鉄道省だから。次に国鉄に
なった。そして今は、E電。いわんかな)

○華厳の滝で、大法要。藤村操から。計185人 (都)

(随分多くの若者の命を呑み込んだんだ。この滝は。国賊だ。警察も見張っ
ていて阻止すればいいじゃん。見つけたら、タックルして、「貴様だな。毎
日、飛び込んでんのは!」)

○フィリピン社会が不安定。米紙に「いっそ、日本に売ってしまえ」の説
が。

(買わなくてよかった。「植民地にした」と又、批判される。でも買って
いたら、日米戦争はなかったかな)

○日露戦争の功での授爵。山県、伊藤、大山は公爵に。乃木、小村は伯爵に
(官報)

○韓国皇帝、国是を公布。その第一条。上下心を一つにして盛んに経綸を行
うべし。

(あれっ。日本のマネじゃないか。日本が押しつけたのか)

明治41年 (1908)

○裁判所で芸者が、印を押せと言われ、忘れたと答えた。拇印 (ぼいん) で
もと言われ、意味を知らず、そのボインも忘れてきたと。

(きっと、謙虚な芸者だったんよ。ボインなんか持っとらへん。どうせ私
は、ペチャパイよ)

- 湯屋をのぞいた亀太郎、美人に熱をあげ帰途を襲い、さわがれて殺した。歯が出ているので、デバガメと呼ばれる（東日）
（今でものぞき、盗撮は盛んだ。もしかして、のぞきは「日本文化」だったのだろうか）
- 静岡のある村で、隣家の豚と関係した男あり。怒られ、高価で買わされて幕。めでたく同居となったわけ（国民）
（この本の中で、この記事が最も感動的だった。美談だ。愛は全てを超える！ バリアフリーだ）
- 靖国神社中央の大村益次郎の像。催しの邪魔だが、移すわけにもいかない（東日）
（サーカスをやったり、相撲をやったり、見せ物小屋が出たり。靖国神社は一大イベント会場だったんだ。亡くなった人を慰めるという名目で、生きてる人々が思いっきり楽しんだ。いいんだよ。それを見て、英霊も喜んでたんだから。じゃ、大村さんの像も移したらいい。これも分祀・分霊になるのかしらん）
- 侯爵・松方正義。六十歳を越す夫人が男児を出産。役所に庶子としての扱いを依頼し、孫にしたらとか（東朝）本当の話か。
（最近、アメリカでもあったから、本当の話だろう）

(4) 烈士になりそこなった老壮士。そして、偽善者の社会主義者

明治42年（1909）

- 内藤鳴雪の句集が刊行。なかの一句。
元日や 一系の天子 富士の山
- 自動車、東京だけで、なんと三十八台。うち、国産は八台。馬車、人力車は、ほとんどふえない（国民）
（なんと、たったの38台か。静かだったでしょうね、東京も。タイムトラベルしてみたい）
- ピアノの国産化は、山葉（やまは）氏だが、バイオリンも鈴木政吉氏が成功（大朝）
（ヤマハって、人の名前だったんだ。知らなかった）
- 小説の原稿二重売りは耳にするが、評論にも出現。題のみ少し違い、内容は大差なし。しかし同じ月の雑誌にとは（読売）
（最近でもあるよ。あの人も、この人も。全く同じような内容ばっかじゃないか）

○政友会十周年の会場で、老壮士が黨員を短刀で殺す。恋のうらみのため
(報知)

(これじゃ、「烈士」にはなれん。国のために死のうと思ひながら、こうした下らない事件、事故で捕まったり、死んだりした男達が、たくさんいたんでしょう。『烈士になりそこねた男たち』でも書くかな)

○社会主義の北山という男。美人に一目ぼれ、同居。同志の平林という男、すきあらばと近づく。決闘は、仲裁が入り中止。美人は仲裁男と消えてしまった(報知)

(これも感動的な話だ。「ブタと交尾した男」と1、2位を争う。しかし、この美人は、誰でもいいのか。ポリシィがない。アナキストか。それに社会主義者も美人が好きなのか。おかしい。社会主義者は、世の弱者、虐げられた人の味方じゃないか。だったら、「美的弱者」(つまり不美人よ)と連帯し、不美人の為にこそ闘うべきじゃないのか。偽善者め!嘘つきめ!)

明治43年(1910)

○雄弁会主宰。野間清治。雑誌「雄弁」を発行。好評のため、講談社を設立し、「講談倶楽部」を発行の方針をきめる。

(この講談社から私の本を出してもらった。ありがたい。雄弁ではない。「口べた」な私が)

○出版界に小型本の文庫が流行。表紙の銀杏(いちよう)の葉がしゃれている。

(文庫本は、大正デモクラシーで出現したのかと思ったら、明治に出てたんだ。銀杏の表紙は。ギンナンを食べると頭がよくなるからだ。中に入っているビタミンIが脳を刺激し、愛国者にする。健康食でもある。胃腸(イチョウ)によい)

明治44年(1911)

○大阪の梅田駅、新橋に次いで乗降客が多い。入場券の自動販売場が設置された。煙草販売機を改良したもの(大毎)

(こんな昔に自動販売機があったのか。煙草を買ったら切符が附録で出てきたりして)

○歴史教科書、北朝支持派と南朝支持派とで、学者、代議士が大論争(東朝)

○天皇、南朝が正統と勅裁。教科書の文を少し手直しする(官報)。南朝を吉野朝に。

(北朝って、北朝鮮のことかと一瞬思った)

○警察庁、指紋法実施。

(困るがな。これから我々は仕事がやりにくくなったがにイ)

○大逆事件を機に、警視庁に特別高等課を設置。略して特高。

(これが悪名高き特高で、今の公安に続いている)

明治45年 (1912)

○英国の大型客船、タイタニック号。北大西洋で深夜、氷山に激突して沈没。乗客約二千二百人のうち、死者は約千五百人。

(こんな昔のことだったのか。100年近く前なんて。つい最近だと思ったが。あれは映画か)

○(天皇の)ご病状は、一日に五回発表(万朝)

○ひつぎは午後八時。号砲とともに宮城を出て、青山祭葬所へ。

○その号砲を聞き、乃木希典大将と妻、自殺。希典64才、静子、54才。

希典の辞世

うつし世を神さりましたし 大君の
みあとしたひて我はゆくなり

夫人の辞世

出てましてかへります日のなしときく
けふの御幸にあふぞかなしき

○新渡戸稲造の談

「私はキリスト信者だが、乃木さんの切腹は、純粋な武士道のあらわれだ」

(キリスト教では自殺は罪だ。でも新渡戸は武士道として認めている)

これで終わりです。やはり、明治の御代が近代日本をつくったのです。

「えっ、これもそうか」「これも…」と思われるものが明治に生まれている。そして、新聞の書き方も、どこかあたたかい。いい時代でした。二回にわたって紹介したのは、星新一『夜明けのあと』の、ほんの一部分だ。このHPを読んで、アマゾンに申し込んで、この本を買った人もいた。嬉しいですね。ぜひ皆様も買って読んだらいい。又、当時の新聞、雑誌なども、図書館で読んでみたらいい。近代日本のルーツを発見することでしょう。

【だいありー】

(1) 5月28日(日) 午後6時。アレクサンドル・ソクーロフ監督と対談。7月に雑誌に出る。8月5日から銀座シネパトスで映画「太陽」がロードショー。昭和天皇を描いた話題作だ。6年前にも監督に会っている。「10人以上の人に会ったが、皆反対した。『撮るべきだ』と言ったのは鈴木さんだけだ」と言っていた。意欲的な作品だ。なぜ撮ったのか。世界はどう見たのか、を聞いた。日本の歴史をよく勉強しているし、僕よりずっと「親日家」だ。「ロシア人は皆、日本が好きです。日本を守った昭和天皇に向きあい、映画にしたかった」と言っていた。衝撃的な話も、たくさん聞いた。

(2) 5月29日(月) 2:40 ジャナ専の授業。ルポライターの元祖・竹中労さんの話をした。二年生で、竹中労のことなら何でも知っている岩崎君にも喋ってもらった。竹中さんの本は全部読んでみようと岩崎君に、初期の本を借りた。『処女喪失』（弘文堂）。女性誌の記者をした時の思想的なルポルタージュだ。でも、電車の中や学校では読めない。恥ずかしい。「いやらしい」と言われそうだ。他に、『団地妻・七つの大罪』という本もある。「『団地・七つの大罪』ですよ」と岩崎君に訂正された。ネットで6千円位するらしい。でも、買おうかな。

夜6時半から、椿山荘。元木昌彦さんの出版を祝う会。500人以上が詰めかけ大盛況だった。珍しい人に、随分と会った。

(3) 5月30日(火) 朝8時の新幹線で名古屋に。「大阪・木曾川・奈良川。連続殺人事件」で死刑判決を受けている小林正人君の面会に行く。「鈴木さんにならって、月に30冊と思ったんですが、できないので、月10冊にします」と言っていた。偉いね。他には、木村ゼミの生徒が3人、ジャナ専の生徒が一人、「月10冊」読んでいる。じゃ、僕も入れて6人で「月10冊連盟」を作ろうかね。

(4) 5月31日(水) 7:30 ロフト。雨宮処凛さんのライブ。塩見さん、私もゲストで呼んでもらう。満員。とても楽しかったです。

(5) 6月1日(木) 河合塾コスモ。

(6) 6月2日(金) 中野図書館。3時半。「蟻（あり）の兵隊」の試写会。考えさせられる映画だった。6時から、都ホテル。6月、7月と海外からも研究者、学者を呼んで慶応大学の「現代社会史」のセミナーをやる。そのレセプション・パーティ。

【お知らせ】

(1)月刊「自然と人間」（6月号）が発売中。特集が「戦争する国なんか愛せない！」。私もインタビューされました。「『愛国』を誰が教えられるのか？」。

「自然と人間」は1部400円。電話は03(3495)7189
FAX03(5996)9020。

6月5日(月)発売の「論座」（7月号）に「愛国心と私」。6月7日(水)発売の「創」（7月号）には「愛国心なんていない」を書いてます。

(2)6月6日(火) 6時半、文京シビックセンター。「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」。

(3)7月9日(日) 6:00p.m. ポレポレ東中野。「あんにょん・サヨナラ」公開記念トーク。イ・ヒジャさんと私。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

今週の主張 6月12日 いいじゃん。「君が代」の替え歌だって

(1)これは文句なしに傑作ですよ

えっ、それほどの大問題かよ、これが。と思った。5月29日(日)の産経新聞、一面トップだ。

〈「君が代」替え歌流布
ネット上「慰安婦」主題〉

しかし、それほどの大事件なのかな。「許せない！」と喚くような問題でもないだろう。「でも、君が代そっくりですよ」と電話をくれた人もいる。

「多分、こういう風に歌ってるんだろう」と私は口ずさんでやった。
「えっ、そっくりですよ。どうして知ってるんですか？」

「だって、私が作ったんだよ。あの替え歌は」と言ったら、ビックリしてた。勿論、ジョークですよ。

その「替え歌」だが、産経新聞によると。

〈卒業式、入学式での国歌斉唱が浸透するなか、「君が代」の替え歌がインターネット上などで流布されている。「従軍慰安婦」や「戦後補償裁判」などをモチーフにした内容だが、本来の歌詞とそっくり同じ発声に聞こえる英語の歌詞になっているのが特徴で、はた目には正しく歌っているかどうか見分けがつきにくい。既に国旗掲揚や国歌斉唱に反対するグループの間で、新車のサボタージュの手段として広がっているようだ〉

そして、替え歌の歌詞と訳が全部でている。一読して驚いた。なかなかよ

く出来ている。たとえば、こうだ。

kiss me, girl, and your old one.

Till you're near, it is years till you're near.

(私にキスしておくれ、少女よ。このおばあちゃんに。

おまえがそばに来てくれるまで、何年もかかったか。そばに来てくれるまで)

ちゃんと反戦歌になっている。それに、「kiss me…」を重々しく歌えば、「君が代は…」に聞こえる。「Till you're…」は「千代に八千代に…」と聞こえる。うまいね。これは傑作ですよ。「匿名の作詞家」じゃ、もったいない。「実は俺が作ったんだ」と言いたくて、うずうずしてるんでしょう。だったら私と対談しましょうよ。秘密は厳守しますから。

しかし、ちょっと同情しますね。「君が代」の「反対運動」「抵抗運動」がどんどん小さくなって、追いつめられて、劣勢だ。それで今や、「サボタージュ」しかないのか。「君が代反対！」くらい、思い切りやらせてやれよ、と私は思いますね。

だって、国旗国歌法が出来た時は、政府は、「これは強制するものではありません」と言っていた。しかし法律なんて、出来ちゃえば独り歩きする。どんどん強制している。反対する人間はどんどん処罰・処分する。

だったら、あの法律が出来た時、ついでに〈但し書き〉もつけ加えればよかった。市民運動も、そう注文をつければよかった。

「ただし、学校などで強制するものではない」と。それに奇妙なのは、もっぱら公立の中学・高校だけだ。子供にだけ押しつけている。企業ではやらない。「君が代」は大切だ。歌え！というなら、そう発言している文部科学省、産経新聞社で歌うべきだ。国会で歌うべきだ。文科省や企業では、毎朝、朝礼を開き、君が代を歌ったらい。ちゃんと背筋を伸ばして起立してるか。ちゃんと口を開いて、正しく歌っているか。歌っている時、他のことを考えてないか。たとえば、隣のOLの胸がふくらんでるとか。付き合いたいな、と考えてるとか。

こんな奴らも、正しく歌ってないんだ。でも、こんな監視はやらん。自分たちは君が代を歌わないし、教えもしないくせに、子供たちに強制している。おかしいだろうよ。

反対する人も、その点をついたらいい。又、クビを覚悟で堂々と闘ったら

いい。ところが、どうも戦いは消極的だ。後ろ向きだ。前は、起立しないで処分された人もいた。それだと嫌だからと、今は、いやいや起立するが歌わない。しかし、写真やビデオを撮られて、「口を開いてるかどうか」をチェックされる。そして処分される。

だから、処分されずに「抵抗」するための最後の作戦が、この「替え歌」なのだ。産経によると。

〈国旗掲揚、国歌斉唱に反対する運動を展開するグループのホームページなどでは、「君が代替え歌の傑作」「心ならずも『君が代』を歌わざるを得ない状況に置かれた人々のために、この歌が心の中の抵抗を支える小さな柱になる」などと紹介されている〉

何とも、いじましい。涙ぐましい抵抗だ。ここまでやるんなら、いいじゃないか。まるで「隠れキリシタン」のようだね。観音様の仏像を持っている。しかし、よくよく見ると、マリア様だ。そんな形で、幕府の目を逃れた。今の君が代サボタージュ運動にも通じる。

(2)私だって賛美歌風の「替え歌」を歌ってるよ

この「替え歌」をネットで聞いてみた。よく出来ている。僕は気に入っている。だから、ダウンロードして、携帯に入れて、毎日聞いている。着メロもこれにした。ただ、ちょっと暗いね。原曲が暗いから仕方がないのかな。もうちょっとアップテンポのものに私が作り直してやろう。

前に書いたが、「君が代」は実は5つのバージョンがあった。雅楽風のもの、賛美歌風のもの…と。その中では、賛美歌風が一番いい。今のものよりずっといい。だから、君が代を歌う時は、起立していつもこの賛美歌を歌っている。だから私だって、「替え歌」を歌ってるんだ。さあ、どうだ、処分してみる！

でも、教職員じゃないから、処分もされないか。つまんない。さびしい。処分されてみたい。

そうだ。国家だって実は「替え歌」を作ってる。「君が代行進曲」というのがある。マーチ風に変えてるんだ。「君が代」は陰気だからと、軍歌風になっている。こんな「替え歌」を作ってたよ。じゃ、民間人がやったっていいだろうが。

大川興業のライブを見に行った時、「君が代」をアメリカ国歌の曲で歌っていた。「君が代」はどうも暗いし、のんびりしてる。闘う気になれない。

曲がスローだからだ。じゃ、アメリカ国歌のノリでやろうと。聞いてみたら驚いたね。ババ、バンバンと、やけに戦闘的だ。躍動感がある。よし！闘おう！という気になる。「もう一遍、アメリカと闘うぞ！」という気分になる。

面倒だ。「君が代」は、曲をアメリカ国歌にしちゃえばいい。それで、第二次日米戦争だ。すると、どちらからもアメリカ国歌が流れる。うん、いいね。歌詞は違うが、曲は同じだ。まぎらわしい。戦争なんて、「もう、やめた」となるかもしれん。

あるいは、中国、北朝鮮、フランスなどの国歌の曲で歌ってみる。面白いかもしれない。曲を「国際化」するだけじゃなく、歌詞も国際化してみたらいい。「替え歌」だって英語なんだ。原曲の方も英語訳ぐらい作れよ。憲法だって英語訳があるんだから（あっ、英文が原典で、それを翻訳しただけか）。

たとえば、大相撲だ。初日に歌わない。「闘いの歌」としてはふさわしくないからだ。千秋楽。全ての戦いが終わり、「みんな頑張ったね」「ごころうさん」という意味を込めて「君が代」を歌う。平和な歌なんだ。

でも、白鵬は、日本語で歌ってるんだらうか。又、朝青龍は日本語で歌ってるんだらうか。これからは、ヨーロッパの相撲取りも優勝する。日本人はもう優勝できんかもしれん。じゃ、「英語訳」だけでなく、「モンゴル訳」、「ロシア語訳」も作らにゃならん。あるいは、モンゴル人が優勝したら、「モンゴル国歌」を流すとか。それでもいいんだよ。ここまで国際化した大相撲なんだから、その位の太っ腹でやってみなよ。

ところで、白鵬は日本語で「君が代」を歌ってるんだらうか。日本語は難しいし、モンゴル訳もない。仕方なく、例の「替え歌」を歌ってたりして。「kiss me,girl…」と。

この「替え歌」について、高橋史朗氏（明星大学教授）が「陰湿な運動だ」と産経にコメントしていた。

〈国旗国歌法の制定後、正面から抵抗できなくなった人たちが陰湿な形で展開する屈折した抵抗運動だろう。表向き唱和しつつ心は正反対。面従腹背だ。（中略）この歌が歌われる教育現場では、論義の趣旨と全く反する教育が行われる恐れすらある〉

面従腹背か。難しい言葉だ。僕はまだ使ったことがない。今度使ってみよ

う。でも、強制する側としては、「表向き唱和」してたら、それでいいんじゃないの。だって心の中はのぞけない。それとも心の中まで強制しようとするのか。「歌っているが、心の中では昼メシのことを考えていたろう」とか。「いやいや、歌っていただろう」「こんなことはおかしいと、疑問を持ちながら歌っていただろう」と。

「意味を正確に知らないで歌う」のも、正しく歌ってないことになる。

「さざれ石」が「いわお」となる。果たしてこんなことがあるのか。疑問を持つ人は多い。「いや、ありうる」という人もいる。神社でその証拠の石を置いてる所もあった。でも、そんなことを含めて、正しく納得し、理解して歌っている人は少ないだろう。じゃ、これも「面従腹背」なのか。

(3)15の姉やは、追われて、しのびねもらしたんですよ

誤解して歌っていた歌は他にも沢山ある。「夏は来ぬ」の歌だ。「しのびね洩らす夏は来ぬ」という一節がある。忍び音なんだろう。なんかいやらしいなと、中学の時に思っていた。夏の夜に、新婚の妻が、シーツをくわえて、音をたてないように、乱れ、よがっている。そういうシーンを思い出してしまう。誰だってそう思う。でも、この「しのびね」をもらす主語は、ほととぎすだ。でも、でも、「しのびね」だけが独立して、健全な中学生にあらぬ妄想を掻き立てる。「有害唱歌」だ。

それと「赤とんぼ」。「おわれてみたのはいつの日か」とある。長い間、「追われて」だと思っていた。特に、砂川基地闘争の頃、デモ隊の間から期せずしてこの「赤とんぼ」の歌が流れた。そんなことも知ってた。だから、権力と闘い、警察と闘う歌だと思っていた。警察に「追われて」いた時に見た光景だと思った。

そうすると、「赤とんぼ」の赤は共産主義か。と勝手に納得して学校で歌っていた。全く、「面従腹背」の子供でしたよ、私は。ところが、後で正確な意味を知った。「追われてみたのは」ではなく、「負われて見たのは」なんだ。つまり、背負われて見たんだ。赤ん坊だった私が。ヒャー、こんな意味だったのかと驚いた。じゃ、何十年間も、間違っ歌っていたんだ。

じゃ、赤ん坊だった私は誰に背負われていたんだろう。姉やだ。「姉やは15で嫁に行き」とある、あの姉やだ。この部分も凄いやね。15といたら中学三年だ。中学三年で嫁にいったのか。オラも中三の嫁をもらいたいと思ってましたよ。でも、そんなことは出来ん。淫行で処罰される。

だから、この部分はカットして、今は歌われないそうだ。「淫行をあお

る」からか。「公序良俗に反する」からか。でも、日本文化だよ。

今、思い出ただけで、これだけある。ゆっくり考えたらいくらでも出てくる。歌なんてそんなもんよ。又、外国の歌を意味も知らないで歌ってる歌手もいる。下らないCMソングをつい口ずさんでみたりする。そんなこともある。いいじゃないか。歌なんて、そんなもんだ。人の心の中はのぞけない。だから、「君が代」を歌う人の心をのぞこうなんて無理なことだ。

そうそう、産経にこのコメントをしていた高橋史朗氏（明星大学教授）だ。実は、知ってる人だ。早稲田の後輩だ。それだけじゃない。「生長の家学生道場」の後輩だ。同じ寮に住み、修業した。毎朝、4時45分に起床して、お祈りし、聖經を読み、講話を聞き、それが終わると中庭に集合して国旗掲揚をした。夕方は降下式がある。ほとんど帰省しないから、350日位、国旗を掲げ、君が代を歌う。朝夕だから1年で700回だ。僕はここに6年いた。4200回は君が代を歌い、日の丸を掲げた。その後、右翼になってからも、年に何回かはやってる。だから軽く、5000回は超えてる。だから、「愛国者のノルマ」は超えとる。

この話は、『愛国者は信用できるか』（講談社現代新書）に書いた。高橋史朗氏も一緒に「君が代」を歌い、「日の丸」を掲げた。さらに私は、毎日のように大学で全共闘と闘っていた。荒ぶる戦士だった。大学の勉強なんておろそかにしていた。高橋氏はまじめな学生だった。成績も優秀だった。頭もよかった。だから、今は教授だ。偉くなっている。「学生道場」というスタート地点は同じだが、「勝ち組」の高橋氏と、「負け組」の私は、はっきり差がついてしまった。悲しい。

【だいありー】

(1)6月2日(金) 午後6時。港区の都ホテル。慶応義塾大学経済学部「現代社会史」レセプション。4月から7月にかけて、開講される「現代社会史」の参加講師を集めてのレセプションだ。歩平、池明観氏など、中国、韓国の学者も招いている。日本側では、鳶信彦、金子勝、加藤紘一、子安宣邦、小川和久、加藤哲郎、阿部知子…などが参加した。

加藤紘一さんのスピーチを聞いて驚いた。お父さんは、石原莞爾の「又いところ」なんだそうだ。終わって、その辺のことをいろいろ聞いた。意外だった。

私は、今の「愛国者の覚悟」について話した。30年、40年前は、愛国

心、改憲、天皇というだけで命がけの覚悟が必要だった。学生から突き上げられ、大学を追われる。世論からも「右翼!」「反動!」として、袋叩きにされ。その覚悟をもって言っていた、三島由紀夫、村松剛、福田恆存にしても。又、東大では林健太郎が全共闘に何十時間も監禁された。しかし、妥協せずに節を貫き、全共闘が逆に感心していた。そんな話をしたら、次に話した人が、

「林さんを監禁したのは私たちです」。

エッと思った。社民党の阿部知子さんだった。もっとずっと若い世代だと思ったのに。「凄い人でしね」と言っていた。「鈴木さんとは同じ時期に私もイラクに行っていましたし」と。驚きました。

東大闘争を終焉させた学長は加藤一郎だ。「その娘が民主党の小宮山さんだよ」と小川和久さんが教えてくれた。えっ、小宮山さんとはテレビで一緒に出たことがあるよ。知らなかったな。

その小川和久さんだが、同志社大学神学部で黒ヘルをかぶっていたという。あれっ。『国家の罨』の佐藤優さんも同志社大学神学部じゃないか。たしか、黒ヘルをかぶっていたという。「佐藤さんは私の14才下です」と小川さん。そうなのか。でも、別に、アナーキストというわけじゃない、と言っていた。学生運動はやったが、同志社は皆、黒ヘルだったのか。

(2)6月3日(土) 夜、久しぶりに柔道に行った。柔道着が乾燥してかたい。激しく稽古していたら、擦れて乳首が痛い。血が出てきたので、仕方なく、バンドエイドを貼った。ちょっと、いやらしい。こんなところを見られたら恥ずかしい。

(3)6月4日(日) 夜、北芝健さんと会う。池袋のメトロポリタンホテル。編集者、ライターなど10人ほど。まるで合コンみたいだ。忙しい人で、携帯電話ばかりかけている。「今、秋田の豪憲君殺害容疑者で彩香ちゃんのお母さんが逮捕された」と、あたふたとテレビ局に行っちゃった。「明日は6本の取材が入ってるそうです」と隣りの人が言った。彼は元公安で、「警察の味方」だ。でも、昔から知ってるし、話し合える友人だ。『公安化するニッポン』(WAVE出版)にも出て、対談してくれた。

(4)6月5日(月) 2:40 ジャーナ専の授業。日本国憲法の成立について。憲法の原文(英文)を読みながら、考えた。最近読んだが、ジェームズ三木の『憲法はまだか』(角川書店)はなかなか、いい本だった。

夜7時から、雑誌の座談会。3時間。きつかったけど、楽しかったし、有意義だった。7月下旬に出るだろう。

(5)6月6日(火) 3時半。園子温監督の「紀子の食卓」の試写会。ネットの「自殺サークル」を取り上げた衝撃作だ。傑作だ。時間も2時間36分と、衝撃的だ。でも全く長く感じない。凄い映画だ。9月からk'sシネマで上映される。おぼえておいて見たらいい!

6時半から文京シビックセンター。「おかしいぞ!警察・検察・裁判所」。安田弁護士の話などがあり、勉強になった。満員だった。

(6)6月7日(水) 図書館。夜、芝居を見る。君が代問題を扱った「歌わせた男達」の脚本を書き話題になった永井愛さんの芝居だ。「やわらかい服を着て」。新国立劇場小劇場。いやー、面白かった。今度は、イラク戦争に反対する日本の市民運動のお話だ。会議で激論し、もめるシーンは、何か身につまされた。私も昔は、あんなに熱く闘い、熱く激論していたっけ。と懐かしかった。皆さんもぜひ見て下さい。

(7)6月8日(木) 河合塾コスモ。「基礎総合」では斎藤貴男さんの『ルポ改憲潮流』(岩波新書)をテキストに読み合い、話す。月刊「現代」(7月号)の斎藤さんと小林よしのりさんとの対談はよかった。「SAPIO」に小林さんが斎藤批判をやり、それがキッカケになった対談だが、かなり、深く話し合い、内容の濃いものになっている。

(8)6月9日(金) 朝の新幹線で大阪に行く。よみうりテレビの「そこまで言って委員会」に出る。この日は収録で、放映は11日(日)だそう。

(9)6月10日(土) 夜、静岡。植垣康博さん(元連合赤軍兵士)のスナック「バロン」の5周年記念パーティ。盛大でした。実は私は、絶交されていて、結婚式の時は、「来るな」といわれてたが、絶交がやっと解けて、呼ばれた。

(10)6月11日(日) お昼から河合塾コスモの保護者会。

【お知らせ】

(1)月刊「論座」(7月号)が発売中です。「私と愛国心」の特集で、私も書いてます。月刊「創」(7月号)では、「愛国心なんていらぬ」を書いて

ます。

(2)かなり前に、宮台真司さん、高岡健さんと鼎談しました。それがやっと本になりそうです。株式会社ウエイツから。7月か8月に出るでしょう。

(3)7月9日(日) 6:00p.m. ポレポレ東中野。「あんにょん・サヨナラ」公開記念トーク。イ・ヒジャさんと私です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年 2004年 2005
年 2006年

今週の主張 6月19日 愛するものは何ですか？

(1)格闘技よりも習字とソロバンですよ。身を守るのは

「先ほどから『愛国』とか『愛国者』『愛国主義』という言葉が出てきましたが、あなたは、『愛○主義』ですか？ 一斉にどうぞ！」と司会の辛坊治郎さんが言う。それに答えて各「委員」がフリップを出す。これが面白かった。「愛○主義」の○(ナニ)の所に、自分の好きな言葉を入れるのだ。愛国心ブームだといわれながら、皆、本心はもっと身近な、別なものを愛しているんだ。

6月9日(金)。大阪の読売テレビに行った。この日は収録。放映は6月11日(日)の午後1時から3時。やしきたかじんの「そこまで言って委員会」だ。関西の人気番組だが、東京では放映していない。でも、そのことがかえって人気を高めている。

家に帰ってきて驚いた。「見たよ。よかったね」という電話がジャンジャンかかってきた。「本読んだよ」「これから読むよ」という人も。四国の人も、「見たぜよ」と、電話をくれた。四国でも放映してるんだ。「下関のおばあちゃんが見て感動しとったわ」と言ってた人もいた。「ネットでは凄い人気ですよ。鈴木さんがよかったって」と教えてくれた人もいた。いえいえ、私なんてダメですよ。ゲストでちょっと出ただけで。それにパネラーの皆さんから集中砲火を浴びて、オタオタしてしまいました。

「ニコニコしてますが、実は強いんです。柔道3段、合気道3段です」と辛坊さん。いえいえ、弱いですよ。今や体力もないし、闘争心もありません。非武装中立です。街を歩けば子供や犬に喧嘩を売られてます。学校では生徒にいじめられてるし。それに、「もっと面白い話をしろよ。つまんね

え」と、生徒はゾロゾロと帰っちゃうし。そのうち学校もクビでしょう。努力してるつもりなのに、私は、無能だ。無力だ。

格闘技も全く役に立たない。生徒や一水会の後輩に技をかけることもできない。時々、家の猫にかけてるだけだ。「ほら、払い腰だ」「次は一本背負いだ」「よし、ともえ投げだ」と。でも柔道は背中から投げないと一本にならない。猫は空中でクルリと一回転して、四本足で立つ。だから何回かけても一本にも有効にもならん。チクショー、猫相手にも勝てやしない。

じゃ、段位返上だな。今度から、「柔道3級」「合気道3級」と言おう。そうだ。格闘技の段位よりも、習字、算盤の級の方が、ずっと役立ってるよな。習字（5級）を習ってたおかげで、こうしてうまく字が書ける。又、算盤（4級）をやったおかげで毎年、税金の申告の時は助かっている。又、「今年は何冊、本を読んだか」「月平均は何冊か」を計算する時も算盤が役立っている。『人生に大切なことは全て習字と算盤から学んだ』という本でも書こうかな。

そうそう。ビッグニュースです。講談社現代新書の『愛国者は信用できるか』が、「本立て」に入った。というか、講談社で、「本立て」を作ってくれた。

うーん。説明するのが難しい。何せ、生まれて初めての体験じゃけん。本屋に行くと、新書がズラッと並んでるよね。そこで、何とか目立たせようと各出版社は必死だ。「売れてます」とか「著者のサイン本」という小さなのぼりを立てたり。レジの横に置かせてもらったり。「書評で取り上げられています」と書いたり…と。

つまり、少しでも目立たせ、「差異化」しようと思死、躍起なんです。そこで、私の本も、小さな「販売台」を作ってくれました。10冊位が入る台です。「いまの時代の一冊！」と大きく書かれています。そして、私の言葉が入ってます。

「この国を愛するというなら、
小さな所から出発すべきだ」

本の中から取った言葉だ。活字ではない。私の字だ。書道5級の腕を買われて頼まれたのだ。必死に書きましたよ。それで5枚ほどを送った。最もよく出来たものを出してくれた。ちょっと恥ずかしいが、誇らしい気もする。

「でも、ヘタな字ですね」と露骨に言う人もいる。ひどいね。「いやいや、味のある字ですよ。枝豆のようです。あいだみつをのようです」と言う

人もいる。いないかな。じゃ、言えよ。

そうだ。今度、新宿で地べたに座り込んで、いろんな文字を書いてやろうかな。「失敗したって、いいじゃない。人間なんだもん」とか。間違っ買って買う人がいるかもしれんじゃない。

そんなことで、味のある字の「本立て」は書店で見て下さいな。

(2)私は何だろうか。「愛本主義」か「愛豆主義」か

大幅に横道に外れちゃった。いつもの話だが。この「愛○主義」だ。これが面白かったんで、学校で生徒に聞いてみた。君らは愛○主義だ、と。そしたら、出るわ、出るわ。

愛酒主義、愛服主義、愛靴主義、愛母主義（親孝行だ）。愛鍋主義、愛海主義、愛空主義、愛金主義、愛パチ主義。愛己主義（自分が好きなんだそうな）。

面白いが、ちょっと平凡だ。では、プロの回答を紹介しよう。「そこまで言って委員」8人の回答だ。

飯星景子さん。「愛虎主義」。子供の虎を飼ってるんです。かわいいですね。そのうち大きくなったら、どうすのでしょうか。食われちゃいますよ。又、首輪をつけて散歩にも行くのでしょうか。と思ったら、ちやいまんねん。阪神タイガースが好きな人やそうです。ジャイアンツが好きな人は「愛巨主義」か。でも、これじゃ巨乳が好きだと誤解されちゃう。この反対は「愛薄（ペチャ）主義」か。

次は、田嶋陽子さん。「愛猫主義」。分かりやすい。猫が好きで、家も引っ越したんだそうです。私の知り合いの赤坂という編集者も「愛猫主義」で、35匹も飼ってます。貧乏なので、キャットフードを買えず、自分の母乳で育ててるそうです。素晴らしいですね。猫にとっては「愛乳主義」です。でも、虎も猫科です。だったら、愛虎主義も愛猫主義の一環じゃないのかな。違うかな。

次に三宅久之さん。「愛妻主義」。ほのぼのとして、美わしいですね。年をとると、みとってくれるのは妻だけだから、と言ってました。じゃ、「国益」じゃなくて、「自益」を考えてのリップサービスというか、作戦ですよ。

橋下徹さんは、「愛家主義」。さすがお子さんが5人もいらっしゃるから。と私が言ったら、「6人ですよ」と皆に言われました。6人の子供と3人の妻のために必死で稼いでいるんです。えっ、妻は一人なの。大変です

ね。重労働ですね。偉いですね。少子化日本はこのままでいいのか！という「愛国」の情で決起したんでしょう。「橋下さんこそ日本一の愛国者です！」と私は言っちゃいました。（そしたら、「ゲストのくせに司会してるよ」と言われちゃいました）

森達也さんは「愛人主義」。人間が好きだから、と言ってましたが、「愛人をつくりたいんだろう」と皆にひやかされてました。「そう言われると思ったんだよな」と本人。だったら別の言葉にすりゃよかった。「愛裸主義」とか、「愛乱交主義」とか。「愛舐主義」とか。かえってまずいか。

でも、西郷隆盛は、「敬天愛人」と言ったとです。天を敬い、人を愛す、だ。いい言葉だ。これにならったんだろう。でも、隆盛は、やっぱり愛人は多くいた。

宮崎哲弥さんは「愛仏主義」。フランスが好きなんですね。ボインのパリジェンヌがよか。日本女なんて嫌いだ。そういうんでしょう。でも、違った。仏教が好きだという。仏教徒なんですって。まぎらわしい。仏教学者は仏学者か。フランス人の仏教学者は仏仏学者か。

勝谷誠彦さんは分かりづらかった。「愛ルケ主義」。何のこっちゃ。ちなみに、学校で生徒に聞いてみたけど誰も分からなかった。ルカーチという哲学者がいたけど。それかな。あるいは、ルケという名の愛人がいるのかな。それとも男娼かな。だから、聞きましたよ。

「えっ、鈴木さん。知らないんですか。渡辺淳一の『愛の流刑地』ですよ」。

「だから、どうなの？」と皆に言われてた。「要は、それをやりたいの？」「あこがれてるの？」と集中砲火だ。だったら、「愛欲主義じゃないか」と私は言いましたが、本人は頑強に否定してました。他人には言えない秘密の恋をしちやるのかもしれませんが。今度会ったら、じっくり聞いてみましょう。その前に、淳一さんの本を読んでみなくっちゃ。しかし、忙しいな。読まなくちゃならんノルマの本がたくさんあるのに。それに書評を頼まれた本も随分あるし。

最後に、桂ざこば師匠のお答えです。これは最高に難しい。何と、「愛電主義」だ。あっそうか。電化製品が好きなんだな、と思った。ところが、ちゃいまんねん。「電話」なんだそう。何でも、最近、ピザを注文したら、ベーコンがベチョベチョになっていた。そんで電話して文句を言った。…と、いった話が長々と続く。要は、「電話があると便利だ」「すぐ抗

議しやすい」ということじゃないのかな。

私はゲストだから聞かれなかった。ホッ。聞かれたらどうしようかと不安じゃった。枝豆が好きだから、「愛豆主義」か。あるいは、パンより米が好きだから、「愛米主義」か。でも、これじゃ「親米は許さん！」と反米主義者に襲われそう。友達もいないし、愛するものもない。「愛無主義」だね。虚無ですね。アナーキーですね。

(3)そうか、オラの本は、ロードムービーなんだ！

話変わります。『愛国者は信用できるか』（講談社現代新書）。売れてるようです。2刷で、計1万8000部です。おかげ様です。講談社では、本屋におく「本立て」を作ってくれました。やる気です。書評も、出ています。朝日新聞、週刊朝日、日刊ゲンダイ…と。かなり大きく取り上げてます。一部分ですが紹介ませう。

「朝日新聞」（6月11日）

40年も右翼運動をしてきた著者も、最近の過激な右傾化は「戸惑うほど」という。「愛国心という言葉が好きではない」という三島由紀夫の言葉を発端に、「愛国心は小声でそっと言うべき言葉」であり、強制すべきでないと言

「週刊朝日」（6月23日号）

青木るえか「新書の穴」

（一頁の半分ですから、かなり長く書いてくれる。ラストの部分だけ紹介する）

この『愛国者は信用できるか』では、『国家の品格』で藤原正彦が「愛国心」という言葉をやめて「祖国愛」にしよう、と言っていることに反論している。「愛国心」の方がいいと。その理由には深く共感した。ぜひ読んでみてほしい。本の最後の、ほんの短い文章だが、『国家の品格』に対する最初に見たまっとうな批判であったと思う。

「日刊ゲンダイ」（6月5日号）

森達也「マイベストブック」

（7段のコラムです。くわしく紹介し、書評してくれている。これも最後の部分だけ紹介する）

教育基本法の前文に愛国心を入れようとする与野党の攻防。中国や韓国へ

の激しい敵意と蔑視。国歌斉唱をめぐる都教委の露骨な強制。そんな世相を横目で眺めながら、これで本当によいのだろうか鈴木は煩悶し続けている。

本書は愛国心をめぐる新右翼の旗手のロードムービーだ。読者はその旅の同行者。さまざまな風景を眺め、さまざまな友人に出会いながら、今のこの国を考えたい。

○知りませんでした、**「高校生新聞」**という月刊紙があるんですね。立派な新聞です。その別冊増刊号で、『イマ、これだけは読んでおきたい200選!』という本が出てます。その中に、私の『ヤマトタケル』（現代書館）が入ってました。嬉しいですね。高校生が読むべき200冊の中に入ってるなんて! こう紹介しています。

〈ヤマトタケルを語ることは難しい。それはこの「神話」が政治的、社会的に縛りを掛けられ、冷静に向き合うことができなかったからだ。しかし神様も、怒り、だまし、血を流し、愛し合い、自由に生きた。そう、人間のよう。固定観念にとらわれず。ヤマトタケルと正面から格闘した著者の言葉が、21世紀に新しいヤマトタケル像を誕生させた〉

【お知らせ】

(1)「月刊TIMES」（7月号）が発売中です。大きな書店にはありますが、ない時は、TEL 03(5269)8461まで。私の連載「三島由紀夫と野村秋介の軌跡」は第21回です。「三島が見せた人間性の意外」です。金嬉老、山根二郎、矢崎泰久、石原慎太郎にも触れています。

又、「夭逝した奇才の作家・見沢知廉の母の苦悩」の第2回目も載っております。貴重な証言です。

(2)星新一の『夜明けあと』（新潮社）を前に紹介したら、「もっと面白いところがあった」とメールをよこした人がいた。ちゃんと読んで、おすすめの部分を書いている。ありがたいですね。では紹介します。

○（明治4年）岡山の北の、津山の森のサル。一匹が地面で死んだふり。鳥が舞いおりクチバシで突つくと、ほかのサルたちが木かげや枝から飛びかかり、川に入れて殺す。さすが、開化の世なり（新聞雑誌）。食肉鳥タカへの対抗か。

（凄いですね。文明開化になるとサルも近代化し、智恵がつくんだ）

○（明治7年）凧（たこ）をあげて、電線に糸をからませた者がいて、十日

の刑だが、五歳の子なので無罪。（新聞雑誌）。七歳まで刑はなし。

（ということは8才からは大人と同じく逮捕され罰を受けるのか。子供も大変だ）

○（明治10年）戦争がえりがもてるので、負傷兵をよそおい、花街でばれて罰金（東日）。

（うーん、学生運動が盛んな時もいたな。「機動隊にやられた」といってニセの包帯をした奴が。女にもてようと）

○（明治13年）新潟県の村。村会を開いたが、議案の字をだれも読めず、勉強会となる（新潟日報）。

（いいじゃないか。勉強会なら）

○（明治20年）宴会の流行はいいが、立食式だと食物の奪い合い。急ぎ食いで、戦争のようなさわぎ。みっともない（東日）。

（えっ、こんな昔からやってたのか。ずーっと、みっともないままじゃん。もう、こんなことやめようよ）

○（明治24年）壮士は、つまらぬ。美女に演説を教え、政治活動をさせよ。その養成所を作る計画（朝野）。

（イギナーシ！ 賛成じゃ。民族派もやればよかじゃ。愛国ベイビーも街宣をしる！ 愛国犬も君が代を歌え！）

○（明治26年）徳島県のある村の、男の赤ん坊。生れて二十日で下の前歯が生え、飯やイモを食い、酒を与えたら、喜んで飲んだ（読売）。

（ホンマかいな。でも読売新聞が書くんた。嘘じゃないだろう。この前、静岡岡に行ったら、生後5ヶ月の赤ん坊がスナックで酒を飲んでた。「インター」も歌っていた。将来、立派な革命家になるだろう）

○（明治41年）ふざけた死亡広告。西園寺内閣、病状悪化で死去。本人の遺言で、同情は無用。嗣子、桂太郎。後見人、山県有朋（二六）。

（何が面白いんだか。よく分からん。個人じゃなくて内閣の死亡広告ということか。つまらん）

(3) 6月22日(木) 7:00 一水会フォーラム。講師は亀井洋志氏（ジャーナリスト）。タイトルは『小泉政権と属国日本』。場所は新宿リサイクル活動センター。

(4) 7月9日(日) 6:00p.m ポレポレ東中野で、「あんによん・サヨナラ」の公開記念トーク。イ・ヒジャさんと私です。

(5) 7月10日(月) ロフト。『愛国者は信用できるか』出版記念トーク。

【だいありー】

(1) 6月11日(日) この日の1:00~23:00に、よみうりテレビ「そこまで言って委員会」が放映された。見た人から、随分と電話がきた。ありがたいです。

(2) 6月12日(月) 2:40 ジャナ専。三島の『青の時代』と光クラブの話をする。この日、べ切の原稿を書いて送る。必死でやったんだが、どうも不十分な気がする。そんで、もう二日もらって全部、書き直す。いかな。未熟だ。

(3) 6月13日(火) 午後、病院にお見舞いに。大きな病院で、上には見晴らしのいいレストランがある。うん、いいな。ここで原稿書いたり、本読んだりしよう。空いてるし。そんで、「やっぱ健康はいいな」と実感できるし。雑誌社の人と打ち合わせをする時も、ここを指定しようかな。驚くだろうな。

夜、柔道に行く。怪我をした乳首は治った。

(4) 6月14日(水) だから一日中、家に閉じこもって原稿を書き直したんですよ。もー。

(5) 6月15日(木) 河合塾コスモ。最近、本を読んでも、猪野健治編『右翼・行動の論理』（ちくま文庫）はいいですね。売れている。野村秋介、衛藤豊久、阿形充規、蜷川正大の四氏が発言している。「いい本だ。これは民族派のバイブルだ」とメールをもらった。「それに比べてお前の本は民族派のバイブルだ」って。自己満足で、他人に訴えるものが何もない。ということらしい。どうせ、あたしゃ、大人のオモチャですよ。夜、ヤケで渋谷ギャルとパラパラを踊る。

(6) 6月17日(土) 久しぶりにプロレスを見に行く。昔、プロレスラーになりたいと思ったことがあったなーと思い出した。

(7) 6月18日(日) 出版社の人と「愛国心」の話になった。「この国を守る」とか、「この土地を守る」というけど、この「土地」はあんたのもんじゃない。銀行とか、大会社とか金持ちの土地ばかりだ。それでも「この土地を守る」といえるのか。そう言ってた人がいた。ウーン、難しい。「土地なんか

持ってない。アパート暮らしの人間」が「この土地を守る」というのは矛盾じゃないのか。という人もいる。アッ、オラのことかよと思った。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

今週の主張 6月26日

映画にも思想とフィロソフィがある。そんな映画をたんと見んしゃい

骨太で、思想的な映画を5本、立て続けに見た。社会派映画であり、昔なら、「傾向映画」とでもいったのじゃろう。考えさせられた。ハラハラ、ドキドキして、ただ面白いだけなら、ハリウッド映画だけで十分だ。もっともそういった映画も私は好きで、よく見ている。「ダヴィンチ・コード」とか「ポセイドン」とか「オーメン」だ。「ミッション・インポシブル」なんかもそうだ。この点、日本映画はダメだ。とてもかなわない。「日本映画なんてもういらないだろう」と思っていた。「映画においては日本はアメリカの植民地でいい」と売国的なことも言った。「親米派」どころか、「愛米派」だ。だから、米（ごはん）も好きだし、「あいまい（愛米）主義者」とも言われちよる。

そんな「愛米反日」の私が衝撃を受けたのが、これから紹介する5作品だ。全て試写会で見た。だから、これからやる映画だ（1本だけはもう公開されている）。4つは日本映画。1つはロシア映画だ。まず題名だけを紹介すると、「太陽」「出草之歌」「幽閉者」「蟻の兵隊」「紀子の食卓」だ。

今でも映画の衝撃は残っている。日本でもこんないい映画を作っていたんだ、と驚いた。それに、ドキュメンタリーが多い。劇映画でもオリジナル・シナリオだ。松本清張とか藤沢周平といった大作家の力をかりて、その映画化でヒットさせようというものでもない。余り宣伝もされず、見過されるかもしれない。しかし、いい映画だ。この5本は私が自信を持って薦める。見て、つまらなかったと思ったら、私がお金を返してあげる。

そうだ。大急ぎで付け加えるが、7月8日(土)から、ポレポレ東中野で、「あんにょん・サヨナラ」が上映される。9日(日)はイ・ヒジャさんと高橋

哲哉さん、それに私のトークもある。もちろん、これもいい映画だ。ただ、このHPでは何度も紹介したし、「創」にも書いたので、皆は知っているじゃろう。だから繰り返さない。又、森達也さんなども参加してトークがある。そちらのHPも見て、参加して下さいな。では始めるとしよう。

(1)ビューアーな天皇映画。ソクーロフ監督の「太陽」



まず第一に、世紀の衝撃作「太陽」だ。ロシアの巨匠・アレクサンドル・ソクーロフ監督の作品だ。昭和天皇を描いた映画だ。題材が題材だけに、日本上映が危ぶまれていた。映画は出来たのに日本上映のメドがつかず、「日本では上映されないだろう」とも言われていた。しかし、遂に上映が決定した。8月5日(土)から銀座シネパトスだ。

私はすでに見ていた。アメリカにいる人がビデオを送ってくれたのだ。アメリカではすでに上映され、ビデオも出ている。私がこの映画に、(わずかにだが)関わっていることを知って、送ってくれたようだ。この映画のことは「創」に2回書いた。(「これも不敬か?」「太陽(ソソツェ)」という題で)。このHPでも触れた。それを見て送ってくれたようだ。ありがとうございました。さらに、5月22日(月)に試写会を見た。そして5月28日(日)にソクーロフさんに再会した。

8月からの日本上映を前にして緊急来日したのだ。それも3日間の滞在だ。28~30日。朝から夜まで1時間ずつ、新聞社、週刊誌、テレビ、映画雑誌の取材を受ける。私は「映画秘宝」という雑誌のインタビューで会った。7月に雑誌は出るだろう。それと、7月7日発売の「創」にも書いたの、詳しくはそちらを見てほしい。



ソクーロフさんに「再会」したと言ったが、実は6年前に会っている。まだ映画を撮る前だ。「昭和天皇の映画を作りたいが…」と日本に来て、10数人に会って相談した。大学教授や歴史学者、映画関係者に会った。全員、反対した。「そんなことをやったら命の保障はない」と。「唯一賛成してくれたのは鈴木さんだけでした」と言っていた。今回、再会した時も、そのことを開口一番、言われた。「だからこの映画は我々二人の合作です」と。そこまで言ってくれるのかと驚いた。嬉しかった。

これはサービスだ。僕の発言にそれほどの力はない。それに、「どんなに反対があっても作ろう」と思っていたのだろう。さらに驚いたのは、ソクーロフさんが、天皇に対する尊崇の情がとても強いということだ。敗戦時の危機的日本を救ったのは昭和天皇だ。日本は天皇がいて幸せだったと断言していた。これは世界史の中でも奇蹟だし、そのことを映画に撮ったと言っていた。又、日本の歴史に対しても、もの凄く勉強している。その具体的な例については「映画秘宝」と「創」にも書いた。

それに、8月上映される映画を見てほしい。ロシアから見た昭和天皇の物語だ。日本人ならば、こんな撮り方は出来なかつたらう。ビューア（透明）な映画だと思った。

(2)国家なんていない。井上修監督の「出草之歌」



これは、6月24日(土)から7月7日(金)まで、「シネマアートン下北沢」で上映している。台湾原住民の闘いの映画だ。「出草」とは「首狩り」のことだ。「オレっちの先祖は首狩り族で、蕃族と呼ばれていた」と自虐的に言う。台湾立法院委員・高金素梅さん。それに原住民音楽グループ「飛魚雲豹音楽工団」が主人公だ。闘い、そして歌いまくる。

2003年夏、ウズベキスタン共和国の国際音楽祭に招待された「飛魚」は、「我々は中華民国ではない」と国家扱いされることを拒否。国旗も拒否。いいねえ。これは。そして、あくまで台湾原住民代表としての自負と誇りを貫く。

又、高金さんは、毎年のように来日しては、靖国神社で「我々は日本人ではない。だから祖先の魂を返せ」と抗議。「祖霊奪還」のスローガンもいい。2005年9月30日。大阪高裁。「小泉首相の靖国参拝は違憲」との判決。だが原住民の「祖霊を故郷へ」の訴えは却下された。勇壮な「出草」(＝首狩り)の歌をはじめ、音楽が会場に鳴り響き、これは胸踊る音楽映画になっている。又、「国家なにするものぞ」という原住民のレジスタンスの映画になっている。

この映画についても「創」(8月号)に詳しく書いた。井上修監督は、25年ほど前、「アジア懺悔行」を撮った監督だ。その「上映と講演の集い」で、僕は竹中労さんとに会い、意気投合した。それが、「左右共闘」のスタートになったし、いわゆる「新右翼」のスタートにもなった。つまり僕らの運動の〈原点〉になったのだ。その辺のことを詳しく書いた。ともかく、考えさせられた映画だ。

(3)戦争ミステリーだ。池谷薫監督「蟻の兵隊」



こんな酷い、不条理な話があったのか。敗戦で、外地にいる日本軍は全て帰ってきたのだと思った。ところが中国の山西省では、現地の「治安維持」のために残留させられた部隊がいた。さらに国民党の指揮下に入り、共産党軍と闘わされた。こんな馬鹿な話はない。日本の軍司令官は、国民党と密約を結んで、2600人の部隊を捨てて、自らはさっさと逃げ帰った。残された兵隊は戦死者が相次ぐ。生き残った者は捕虜生活を経て帰国。しかし、帰国した彼らを待っていたのは「逃亡兵」の扱いだった。彼らは、「残留は命令だった」と国を相手に軍人恩給を求め、最高裁に上告した。

この映画は元残留兵、奥村一（80才）が、歴史の闇に葬られようとしている「日本軍山西省残留問題」の真相を明らかにしようとして孤軍奮闘する姿を追ったドキュメンタリーだ。かつて闘った中国の戦地にも行く。「敵として闘った元・共産党軍」が言う。

「日本兵は勇敢だった。天皇陛下のためには命を捨てて闘う。それは尊敬できる。しかし、なぜあんな腐敗した国民党軍のために命をかけて闘ったのか」と。まさにその通りだ。彼らは、トップ同士の取り引きで、国民党軍に売られたのか。ミステリーだ。彼らを売り渡した日本軍司令官がひどい。

「行き行きて神軍」の奥崎謙三だったら、この軍司令官を躊躇なく殺そうとしただろう。さらに、映画「日本鬼子（リーベン・クイズ）」を思い出した。監督に挨拶したら、「リーベン・クイズと同じく、渋谷のイメージ・フォーラムで公開します」と言っていた。7月下旬から公開だそうだ。

そうだ。この映画にも靖国神社が出てくる。奥村さんが靖国に行くと、小野田寛郎さんが大勢の前で講演をしている。あの戦争の意義を説いている。話の終わった小野田さんに奥村さんが近づき、聞く。「小野田さん。あなたはあの侵略戦争を美化するのか？ 正しかったと言うのか？」。その瞬

間、普段はおとなしい小野田さんの顔色がサッと変わり、激怒した。「何を言ってんだ！…」と。命をかけて戦った旧軍人同士の「内ゲバ」だ。このシーンには驚いた。戦争を知らない僕らなど、何も言えないなと思った。

「出草之歌」にしる、この「蟻の兵隊」にしる、まだまだ〈戦争〉は続いているんだと痛感した。

「私たちは上官の命令に従い、蟻のようにただ黙々と戦った」と奥村は言う。そこから映画の題名は付けられた。蟻というと、小さく弱い兵隊のようだ。しかし、被害者であると同時に、自らも加害者だった。それが戦争というものの残酷さだ。自らの「加害体験」を語る奥村も辛い。「リーベン・クイズ」とも重なって見えた。

(4)日本赤軍兵士・岡本公三の闘い。足立正生監督の「幽閉者」

足立正生監督の「幽閉者（テロリスト）」だ。このHPにも何度か紹介した。5月17日に試写会を見た。2時間以上の映画だが全く長く感じない。日本赤軍のリッダ闘争（テルアビブ事件）から話は始まる。三兵士の中で心ならずも一人だけ生き残った岡本公三の闘いだ。前半はイスラエルの警察・刑務所の取り調べ、拷問の様子が、えんえんと続く。これでもか、これでもか、と。妄想も見る。ネチャーエフやブランキも現われる。はじめ、岡本公三役の田中トモロヲは似てないと思ったが、似てくる。拷問される中で、革命家としての本能が呼びさまされるのか。どんどん似てくる。岡本公三が演じているのでは、と思ったほどだ。重信房子役の荻野目慶子もいい。他に、特別出演で平岡正明、若松孝二らも出ている。

試写会の時は、平岡さんと久しぶりに会った。昔、太田竜、竹中労、平岡正明の三人は「三バカ大将」と呼ばれ、若者にとってはカリスマ性のある指導者だった。凄い三人だった。本もよく売れた。

この「幽閉者」。タイトル通りの映画だ。日本赤軍だから、ハイジャックなど、ド派手なシーンの連続かと思ったが、そんなものはない。アクション映画ではない。なぜイスラエルとアラブ諸国の戦争はあるのか。国家とは何か。闘いとは何か。を、問いかける。考えさせる。やはり、思想映画なのだ。今年の夏に公開が予定されている。

若松孝二監督の「連合赤軍」の方も、そろそろ、撮影に入る。早く、撮ってほしい。そして、次は「山口二矢」をやりたいと言っていた。期待している。

そうそう。岡本公三は、三島由紀夫が好きなんだ。日本赤軍の人たちは、

ナショナリストが多いし、北一輝や宮崎滔天が好きだ。岡本は三島の中でも特に「奔馬」が好きだと言っていた。これについては、どっが書いたような気がする。私も最近、「奔馬」を読み返した。やはりいいね。三島文学の最高傑作だ。

(5) 鋭く現代を抉る。園子温 (その・しおん) 監督の「紀子の食卓」

紀子 (きこ) ではなく、紀子 (のりこ) の食卓なのだ。地方の女子高生・紀子はネットの「自殺サークル」を見ているうちに、家出して上京。でもここでは「レンタル家族」の派遣をやっている。やがて、紀子の妹も上京。一緒の仕事をする。「家族」とは何か。「自殺サークル」とは何か。その二つのキーワードを軸に物語は展開する。2時間40分という長い映画だが、実にスリリングで、ひき込まれてしまった。宮台真司さんが、パンフレットで絶賛していた。「戦後日本映画の5本の指に入る！」と。いくら何でもそれは誉め過ぎだと思った。ところが、見終わって、決して大袈裟ではないと思った。

家出した娘の父が、上京する。自殺サークルの人間に会う。サークルの人間は言う。「自殺サークルの人間が全て自殺するわけではありません。一般の世間の方が自殺が圧倒的に多いのです。1年間に3万人以上が自殺してまゝ。世間の方が“自殺サークル”です」。ゲツと思った。そうなのか。ネットで知り合って自殺するなんて、気が知れないと思う。なんでそんなに死ぬのか。死に急いでいるのかと疑問に思っていた。しかし、我々だって「自殺サークル」の会員なんだ。

「自殺者は年間3万人」と言われるが、実際はもっと多いんですよ、と元刑事の北芝健さんは言っていた。交通事故で年間1万人が死んでいる。しかし、その何割かは自殺だ。又、病院で病気で死んでる人が多いが、その中にも自殺者がいる。又、「行方不明」「失踪」とされた人の中にも自殺者は多い。だから、「年間3万人」どころじゃないと言う。公安のスパイになって、党と公安の板ばさみになり、悩んで自殺する人もいる。そう言っていた。今度、北芝さんに、又、詳しく聞いてみたい。

この「紀子の食卓」だが、もう一つのキーワード。「レンタル家族」だ。星新一の『夜明けあと』（新潮社）にも出ていたね。独身者用に奥さんを派遣する仕事が出来たって。明治時代からあったんだね。「レンタル家族」は。私も欲しいな。

この映画では、父親が娘を追って上京。友人を使って、姉妹を呼びよせ

る。つまり、「客」としてレンタルの「子供たち」に会うのだ。初めは戸惑うが、子供たちはキチンとお仕事をする。「お父さん」「お父さん」となつく。本当の子供のようだ（実際そうなんだろうけど）。いや、お金をもらって仕事している分、「本物の家族」より、サービスがいい。これはいいやね。

でも、楽しい団欒も終わる。「お客さん、時間です」と子供が言う。「お客さん、延長しますか？」と聞く。「何を馬鹿な。オレたちは本当の家族じゃないか！」と父は激怒する。しかし、これは父親が悪い。「延長」してやればいい。そして、ずーっと「延長」したらいい。（どうせ、子供には金を使うんだから）。

だって、家族は、元々、みんな演技してるんだよ。「役」を演じてるんだよ。と私は感じましたね。夫と妻だって元は他人だ。「夫の役」を演じている人がいる。「妻の役」を演じている人がいる。子供だって、子供の役を演じるために、この舞台（この世だわさ）に出てきただけだ。芝居が終われば又、次の舞台（あの世じゃ）に行く。

つまり、この世だって、「レンタル家族」じゃないか。と私は思いましたね。人間はこの世で「役」を演じるために生れてきたんだ。違いますかね。又、ただ、生きてるだけではつまらない。「蟻の一生」だ。自分の「役」を演じながら、一体、自分は何が出来るのか。自分は何なのかを考えている。

「自分探し」をしている。それは「役」を考え、「役づくり」を考えてることだろう。

それと同時に、人は一人では生きていけない。又、自分のことだけを考えて生きていくのも淋しい。社会に認められたい。社会の為になることをしたいと思う。つまり、他人の「役に立ちたい」。社会の「役に立ちたい」と思う。やっぱ、「役」なんだよ。

そう考えると、この映画は、やけに思想的だ。実存的、哲学的な映画だと思ひ、私は驚嘆しましたね。園子温さんとは又、会ったらこの点をじっくりと話し合ってみたいですね。ともかく見て下さいな。文句なしの傑作ですよ。9月にk'sシネマで上映だそうです。

【だいありー】

(1)6月19日(月) ジャナ専の授業。1949年、一連の列車事故が起きた。下山事件、三鷹事件、松川事件だ。「一連の」といったが、当初、「すべては共産党の仕業」といわれた。それから10年たって、松本清張は、180度ひっ

くり返し、「すべてはGHQと日本の反動政府の仕業」と断定した。そして最近では、この「松本史観」に対する疑問の書がドッと出ている。「謀略史観」だけでなく、はじめて冷静、客観的に見れる時代になったのか。それにしても遅すぎたが。そんな話をした。

(2) 6月20日(火) 昼、「ゴルゴ13」について取材される。この劇画はもう40年近くも続いている。5年前に出した『ゴルゴ学』では、さいとうたかをさんに私がインタビューした。「男に必要なことは全てゴルゴ13から学んだ」と私は言っている。「ゴルゴ信奉者」というか「ゴルゴ道実践者」である私に、今のゴルゴ観を聞かれた。この4年でタイには5回行って、ライフルの実弾だけで千発以上撃っている。百発百中だ。A級スナイパーだ。「老後はゴルゴ13のような立派な殺し屋になろうと思ってる」と答えちゃった。

その後、中野図書館まで歩いた。往復で五千歩だった。さらに新宿のTSUTAYAに行ったり、本を読むために遠くの喫茶店に行った。今日だけで1万1千歩あるいた。脳内に埋め込まれた万歩計がちゃんとカウントしてくれた。デブを治すために1日1万歩をあるく。又、ノルマが増えたわい。

(3) 6月21日(水) 雑誌の取材が3件。ずっとジョナサンにいて、順番に会った。本が売れて急に仕事が増えたわけじゃない。偶然、重なっただけですよ。

(4) 6月22日(木) 11時、ジョナサンで新聞社の取材。

3時から河合塾コスモ。現代文。5時から「基礎教養ゼミ」。星新一の『夜明けあと』（新潮社）をテキストに生徒と読み合い、話し合った。夜は一水会フォーラムに行く。亀井洋志さん（ジャーナリスト）の「小泉政権と属国日本」。

【お知らせ】

(1) 7月1日(土) 「別冊宝島」の「日本の自殺・怪死事件」が発売。私も書いてます。

(2) 7月2日(日) この日の東京新聞に、私のインタビューが載る予定。『愛国者は信用できるか』について話した。

(3) 7月7日(金) 慶応大学で、加藤哲郎さん（一橋大教授）と討論。「天皇制と民主主義」。

(4) 7月9日(日) 6:00p.m. ポレポレ東中野で、「あんにょん・サヨナラ」の公開記念トーク。イ・ヒジャさんと私です。それに大物ゲスト、高橋哲哉さん（東大教授）です。

(5) 7月10日(月) ロフト。『愛国者は信用できるか』出版記念トーク。森達也さん（映画監督）と私です。

(6) 8月5日(土) 7:00p.m. 池袋ジュンク堂。森達也さんと私でトーク。「天皇制と愛国心」。

(7) 大浦信行監督の映画「9.11-8.15 日本心中」が10月下旬、ポレポレ東中野で上映。監督と私のトークもあります。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年 2004年 2005年
2006年

今週の主張 7月3日

わしらは皆、トリなんよ。だから今週はスズメの話

(1)動物虐待反対！今こそ「生類憐みの令」を！

そういえば、ここ数年、スズメの姿を見ていないな、と気付いた。街は危ないから森に逃げ込んだのではない。森には住めない。森は敵が多過ぎるからだ。スズメは元々、街に住んでいる。人間のいる所でしか住めない。それに、雑食だ。人間の食べるものは何でも食べる。特に米が好きだ。「親米派」だ。日本の保守派のようだ。

米ならば、たとえ生でも、炊いたものでも食べる。人間と同じだ。だから、スズメは本当は人間なのだ。顔だってよく見ると人間そっくりでしょう。

米が好きだから、米でおびき寄せれば簡単につかまる。米をばらまいておき、上に大きなカゴを立てかける。カゴにはヒモをつけておく。スズメが米をついばんでる時に、ヒモを引く。カゴがバタリと落ちて、スズメは捕まる。

又、こんな手もある。米を酒につける。それを撒いておく。酒の沁みた米だから、スズメは酔っ払って、バタバタと倒れる。それをとる。まるで漫画か落語のような話だが、本当だ。そうやって獲る。獲ったスズメはどうするのかって？スズメ焼きにして食うんだ。残酷だ。日本人は残酷だね。スズメが可哀想だ。

それに、スズメは元・人間だった。前世で人間だったのだ。それを食うんじゃ、「共食い」だ。「内ゲバ」だ。スズメに限らず、鳥そのものが人間だ。鳥は元・人間だったし、人間は元・鳥だったのだったから、鳥を食べるのはやめませう。

絶滅したスズメの話だ。なぜ絶滅したのか。誰がスズメを殺してるのか。
「いやいや、そんなことはない。見たことがある」という諸兄。それは錯覚
です。多分、5、6年前に見たのを昨日の記憶と思っているのです。もう、
スズメはいないはずですよ。

「少なくとも北海道では絶滅しました。カラスに食われたんです」

と、ゾッとする話を聞いた。まさか、と思った。同じ鳥同士で襲ったり、
食ったりするはずはない。人間とは違うんだと思った。しかし、事実らし
い。スズメはよく他の鳥に襲われ、食われている。カラスやタカなどに襲わ
れている。元々は、スズメの巣が狙われた。卵や幼い子鳥が襲われた。これ
は頻繁にある。しかし、最近はカラスも餌がなくなり、大人のスズメを襲う
のだそうなの。

スズメは小さくて手頃だ。襲いやすいのだ。動きも鈍いし。まるで人間の
ようだ。ツバメなどはその点、すばしっこいから狙われない。飛んでいて、
いきなり方向転換をしたりする。ツバメ返しだ。その素早い「ツバメ返し」
を、これ又、目にもとまらぬ技で斬るのも「ツバメ返し」と言われちよる。
佐々木小次郎の得意技だ。

でも、斬れるのは小次郎ぐらいだ。他の人間はツバメなど斬れないし、取
れない。だから食べない。食べてもまずい。肉も付いてないし。その点、ス
ズメは丸々としておいしい。米を食べてるから、牛や豚を食べるのと同じ
だ。だから日本人は昔から、ずーっとスズメを焼いて食べてきた。それを見
て、カラスは思った。「人間の食べるものならおいしいのだろう」と。それ
でカラスはスズメを食べるようになった。カラスによる「スズメ大虐殺」

「スズメ・ホロコースト」はこうして始まった。だから、「見本」をみせた
日本人が悪いんだ（外人は食べん）。日本人を代表し、私が「大虐殺」を謝
罪します。申し訳ありませんでした。昔々、いじわるなバアさんがスズメの
舌を切りました。「舌切りスズメ」ですわな。あんな比じゃありません。カ
ラスを使いスズメを襲い尽くし、焼き尽くして、食い尽くしたのです。これ
以上の戦争犯罪はありません。

さて、仇敵のカラスですが、大昔からの敵同士です。スズメは稲作と共に
日本に来たんです。米が主食ですから。米が日本に伝来した時、一緒に来た
んです。そんな伝来の仕方は猫にもいえます。エジプトには三千年以上昔か
らペットとして飼われてましたが、日本に来たのは仏教と共にです。中国か
ら仏典を船で運ぶ時、ネズミに食われないように、猫を乗せたのです。つま

り、猫は「仏典の守り神」だったんです。仏典の守り神だから偉かったんです。お釈迦様より偉かったんです。そんな偉い動物なのに、猫を殺す人がいます。でも、その人は必ず仏罰を受けております。アメリカの犯罪学者の調査では、凶悪犯罪をやった人の半分以上は子供の時に猫を殺しているとレポートされています。日本では8割以上でしょう。猫は仏典の守り神であり、それだけでなく、執念深い動物です。必ず崇ります。殺したら、その人は自殺するか、あるいは殺人犯となって死刑になるのです。だから、猫は絶対に虐待してはいけません。殺してはいけません。たわむれに柔道技をかけて投げ飛ばしてもいけません。

さて、スズメとカラスの話だ。この両者の仇敵関係は何と、縄文、弥生時代にそのルーツがあるのです。又、よた話と思うでしょうが、これは本当です。私の言うことは全て本当です。唐沢孝一の『スズメのお宿は街のなか』（中公新書）に書かれています。1989年に書かれた本です。カラスがスズメを襲う話が詳しく書かれています。

カラスは縄文時代を象徴し代表する鳥です。「縄文時代はユートピアだった。差別もなく殺人もなかった」と馬鹿なことを言う元革命家がありますが、まっ赤な嘘です。（共産主義者だから嘘も赤いのです）。縄文時代は、いわば弱肉強食のルールなき殺し合いの世界です。人間が猪や熊をとり、木の実を食べて、自由に、平和に暮らしていたといえます。でも、別の面から見たら、猪や熊も自由に生き、人間などを自由に食べて生活してたんです。

たとえば、宮沢賢治の『注文の多い料理店』は、人間が「食材」になる話です。肉食獣が人を食べる話です。唐沢孝一は、それをこう解釈します。

〈人も自然にあっては、捕食の対象とされ、危険と恐怖に曝されていたであろう。賢治の世界には、こうした長い間狩猟採集生活を行ってきた人類の不安と恐怖が描かれており、日本文化の基層として、縄文文化の影響が色濃く残存していることを教えてくれる〉

(2) 「縄文」を代表するカラス、「弥生」を代表するスズメ

そうなんですね。私達人間は「捕食の対象」だったんです。「動物の餌」だったんです。もしかしたら、人間は猪や熊にとらえられ、「家畜」として育てられていたのかもしれませんが。まるで「猿の惑星」ですね。そうです。未来は過去なんですよ。

その縄文時代を代表するのがカラスです。縄文時代さながらに何でも食べ

ます。鳥のルーツは始祖鳥です。恐竜のようなもんです。その頃は人間を捕食してました。映画「ジュラシック・パーク」の第3部かな。出てましたよね。大きな怪鳥が人間の子供をさらい、自分の巣に持って行って子鳥（でも、でかい）に与えるんです。コーラスの子供のように大きく口を開けて、ピーピーって餌をねだる。そこに人間の子供を餌として与えるんです。

まア、映画ですから、この人間の子供は危機一髪助かります。しかし、昔々は、このように人間は捕食され、餌にされてたんです。その貪欲な肉食獣（鳥）の子孫のカラスのことです。隙あらば人間だって食べたいんです。でも人間は体が大きいから、襲えない。それで、同じく米を食べていて、肉体構造が全く同じスズメを襲って、食べているのです。スズメは我々人間の「身代り」に殺されているんです。かわいそうです。だったら、法律をつくり、スズメを保護するべきじゃありませんか。

縄文・弥生のことも唐沢の本にはきちんと書かれています。私が嘘を言っていない証拠に引用します。

〈ところで、スズメが弥生時代の申し子であるとすれば、縄文時代を象徴する鳥は、カラス（ハシブトガラス）であろう。カラスの行動や習性には、躍動的で神秘的な縄文人の雰囲気を感じられるし、森林に結びついた生活がある。それに対して、賑やかなスズメの生活は、広々とした明るい水田や華やいた都市生活環境がよく似合う〉

どうですか。ちゃんと書いとるでしょう。今の都市にも、地方にも、「縄文」と「弥生」の区分は生きている。そして、それぞれ、カラスとスズメがそこを代表しているんですね。さらに唐沢は言うとります。

〈村の鎮守の森に営巣し、その周辺に広がる農耕地で採餌するカラスから見れば、明治神宮は縄文時代を象徴する森であり、都市に広がるビル街や住宅地、繁華街や埋立地は、弥生時代を象徴するスズメの生息地を意味している。東京はカラスの目から見れば、鎮守の森とその周辺に開けた耕作地帯をそなえた農耕文化の延長線上にあるに違いない〉

スズメは稲作と共に日本に来た。だから北海道にスズメが進出したのは明治以降だという。そうなのか。それまでは狩猟生活だったんだ。五稜郭に立て籠った榎本武揚や土方歳三の奮戦も空しく、薩長軍に敗れ、明治政府が北海道を支配した。それから北海道に稲作は定着し、スズメも渡っていった。

そして今、北海道のスズメは全て、カラスに食い尽くされ絶滅したとい

う。明治元年は1868年だ。それから今年で138年か。138年で北海道のスズメは絶滅したのか。短い命だった。

さっき、犬の話を書いたが、実は、犬は「縄文時代」を代表し、猫は「弥生時代」を代表すると、唐沢は面白いことをいう。犬は実際、縄文時代からいた。狩猟採集時代に家畜化されたものだ。猫は、農耕時代以降だ。正確には「弥生時代」にはまだいなかった。しかし、「弥生」的な動物なんじゃ。

元々、猫は3000年前に、エジプトで野生ネコのリビアネコから家畜化された。収穫した穀物を食べあらしたり、ペストの媒介者としてのイエネズミの駆除として利用されたのが最初らしい。

そして日本に来たのは奈良時代です。ちょっと前に書いたけど、仏典を守るために遣隋使が船に乗せてきた。だから、弥生時代にはいない。しかし、「弥生」的な動物なのだ。

3000年昔から、猫は人間のために闘ってきた。ネズミを追い払って、穀物を守り、ペストを防ぎ、そして日本では仏典を守ってきた。これだけ人間の為に尽くした。人間に尽くす「絶対量」はクリアーした。「ノルマ」は達した。だから、もう寝てばかりいてもいいんです。「絶対量（ノルマ）を果たした愛国者」のようですね。

さて、話を戻します。弱い、かわいそうなスズメです。カラスだけでなく、いろんな鳥に襲われています。多摩動物園では、マナヅルの親が、スズメを捕らえて雛の餌にしてるそうです。ツル、コウノトリ、ゴイサギなどもスズメを食べてます。まア、スズメも悪いんですな。こうした鳥たちの餌を狙ってくるんです。そして、逆に、食われちゃうんです。ゴイサギなんかはスズメを頭からバリバリ飲み込んでいるそうです。

でも、一番の天敵は、カラスです。鳥の中でもカラスが一番の悪食です。犬や猫の死体を食べるし、ハトも襲って食べちゃいます。

そういえば、先日、東中野図書館で面白い本を見つけました。遠藤ケイの『こども遊び大全』（新宿書房）です。「懐かしの昭和児童遊戯集」と書かれています。つまり、僕らの子供時代の遊びが紹介されてます。懐かしかったですね。当時の子供たちは、全くお金をかけずに、こんなに面白い遊びを作っていたんですね。頭がよかったんですね。創意工夫にあふれてたんです。アーティストでした。草笛、たが回し、石けり、クギ遊び、カン蹴り…と、元でのかからないものばかりです。

中には、動物相手のものもあります。トンボ釣りとか。カエルのお尻に
麦わらで空気を入れてふくらませるとか。アリの触角をとって、グルグル回
らせるとか。残酷ですね、これは。いくら、タダとはいえ、こんなことは私
はやりませんでした。こんなものもある。「アブの目をつぶすと直線に空に飛
んでゆく」「煙草のヤニをカマキリになめさせると、酔っ払ってフラフラす
る」。いやだね。

(3)ことわざ、慣用句。難しい漢字。人間は昔々、鳥だったからなんだ

動物遊びの中に、「スズメ捕り」というのがあった。さっき書いた、シン
ブルな捕り方がまず紹介されている。大きなザルを立てかけて、餌を撒いて
おき、スズメが来たら、ザルにつけたひもを引っばって捕まえる。そのとこ
ろの説明なんですけど、こんなふうになっている。



〈こどもたちは、学校から帰ると、パチンコや手作りのワナを持って原っ
ぱや空き地に出かけてスズメを捕った。計算どおりスズメがかかると“やった
やった”と大騒ぎするたわいない遊びではあったが、食料難の時代、ときには
その場で毛をむしり、焼いて食べた。骨についた小さな肉塊は、ひとときの
空腹を満たした〉

えっ！そんなこと俺ら、しなかったぞ！かわいそうだよ。そうそう、今
紹介したザルで捕るのは「バツタリ」というそう。他にはもうちょっと高
度な「ヒッコグシ」や「ヒッカグセ」などもあったという。悪知恵の働くガ

キたちだ。やめさせろよ。私は、動物相手の遊びは一度もしたことがない。心の優しい子供じゃった。スズメを捕まえて食おうとしてる子供がいたら、お金をあげて引き取り、逃がしてやった。だから、スズメのおかげで、今、こうして元気に暮らしていただける。ありがたいことです。

「バッタリ」や「ヒッコグシ」でスズメを捕って食べた人は、大人になって復讐されてるはずです。話は変わりますが、赤軍派の金廣志さんという人がいます。M作戦（資金強奪作戦）に従事してました。革命のためだから銀行から金を取ってもいいと思ってたんですね。ある銀行を襲った時でした。金庫の中に大きな袋と小さな袋がありました。大きい方が大金が入っていると思い、それを持って逃げました。ところが重いなのなんの。あとで見たら、小銭ばかりでした。小さい袋の方に1万円札が入ってたんです。「あっ、舌切り雀の教訓は本当だった」と反省したそうです。でも彼は、時効まで15年間逃げ回り、今は自由の身です。偉いですね。でも子供の時に、スズメを捕まえたことがあるのでしょうか。今度、聞いてみませう。

唐沢の本によると、1989年に、「白スズメ」が発見されたそうです。今は、全て科学的に考えるからつまらんですね。それは突然変異で、メラニン色素が形成されんから、そうなったとか。そんな説明をするとでしょう。昔は、素直に、「ヒャー、珍しか」「いいことがあるじゃろう！」と喜んでたんです。皇極元年（542）には蘇我入鹿の子が白スズメを捕獲したら、よき印じゃとして、「瑞兆」として天皇さまに献上されたそう。いろんな珍しい動物が見つかって、喜んだ天皇さまは、皆にも「おすそ分けだ」と元号を改めたこともある。新しい時代にして、一緒に祝おうとしたのだ。いいことじゃないですか。

それと、私の故郷の仙台は元・伊達藩です。伊達家の家紋は「竹に雀」です。（今、これと同じ名前の酒もあります）。スズメは弱々しい鳥ではあるが、他方、幸福をもたらす鳥として認識されもしてたんです。

まア、カラスだって、獯猛な鳥ですが、反面、重宝もされた。神武東征の時は、軍神として先頭に立って案内した。又、カラスの超能力にちなんで、各地で神事が行なわれてもいる。唐沢孝一は、『カラスはどれほど賢いか』（中公新書）という本も書いている。

あーあ。鳥について書いてたら切りがないのもうやめよう。スズメだけでなく、鳥は元々は人間なんです。だから、鳥は大切にしませう。食べたらいけません。右の翼（右翼）と左の翼（左翼）があってはじめて、鳥も人間

も飛べるのです。フランス革命の直後、議会を鳥だと思い、右の席（右の翼）にいた保守派を「右翼」と呼び、左の席にいた急進派を「左翼」と呼んだ。そこから右翼・左翼という言葉が生まれた。それだって、人間は元々、鳥だったからです。でなければ、そんな発想をしません。

それに、ことわざだって、慣用句だって、鳥に関するものが多いでしょう。「鳥肌が立つ」「巣を作る」「（乳を）わしづかみにする」「カラスの行水」「雀百まで踊り忘れず」「燕雀いづくんぞ鴻鵠の志を知らんや」（バカな奴に私の大志は分からん）。「トビがタカを生んだ」…と。数え上げたら切りがない。ことわざ、慣用句は半分近くが鳥に関するものだ、という人もいる。そう、人間は鳥だったからな。

ところで、今、気がついたが、鳥の漢字は皆、難しい。哺乳類は易しいのに。牛、猫、犬、猿…と。鳥なんて、大変だよ。仮名がなかったら読めへん。人間同様に高級な種だからか。

鷹（たか）。鳶（とび）。鷲（わし）。梟（ふくろう）。鷺（さぎ）。燕（つばめ）。蝙蝠（こうもり）。朱鷺（とき）。雉子（きじ）。

こりゃー読めんよな。嘴（くちばし）からして難しい。鳥にちなんだ人もいる。親鸞（しんらん）。「おやばと」と読んだ人がいた。でも、あながち間違いじゃない。前世は鳥だったんでしょ。

ということで終わり。疲れた。力作だったな。まるで学術論文じゃないか。喉も渴いた。じゃ、ビールを飲みにいこう。焼き鳥でも食いながら。

【お知らせ】

(1) 7月6日(木) 「創」（8月号）発売。私は「天皇とレジスタンス」を書きました。

(2) 7月7日(金) 慶応大学で加藤哲郎さん（一橋大教授）と討論。三田キャンパスで。10:45a.m.から。「天皇制と民主主義」

(3) 7月9日(日) 7時、ポレポレ東中野。高橋哲哉さん（東大教授）、イ・ヒジャさんと私でトーク。「あんにょん・サヨナラ」について。

又、この日の「東京新聞」に私の書評が載る予定。見沢知廉の『愛情省』（作品社）について書いた。

(4) 7月10日(月) 7時、ロフトプラスワン。『愛国者は信用できるか』出版

記念トーク。森達也さん、斎藤貴男さんと私。

(5) 7月11日(火) 「月刊タイムス」(8月号)。映画「MISHIMA」と、その上映反対運動について書いた。

(6) 7月14日(金) 慶応大学で、「現代社会」総括トーク。

(7) 7月15日(土) 「EX大衆」発売。特集・靖国問題。私も書いてます。

(8) 7月19日(水) 「わしズム」(vol.19) 発売。大型座談会「超・戦争論」が載ってます。出席者は、小林よしのり、大塚英志、香山リカ、富岡幸一郎、そして私です。(「わしズム」誌上最大の闘いが始まる!)と予告されています。

(9) 7月22日(土) 「蟻の兵隊」の監督、出演者挨拶があるそうです。渋谷のイメージフォーラムで。聞きに行こうと思っております。

(10) 岡留安則さんの本が2冊出るそうです。7月末から8月に。「サイゾー」の対談をまとめたのと、「テレビ 噂の真相」をまとめたのを。両方とも私も出ています。

(11) 宮台真司、高岡健、私のトーク本も、月末に出るでしょう。

(12) 「週刊読書人」に頼まれて、趙甲済『朴正熙・最後の一日』(草思社)の書評を書きました。とても重厚な、いい本でした。書評は月末に出るでしょう。

(13) 映画「太陽」の監督・ソクーロフさんに「映画秘宝」でインタビューしました。7月中に出る予定です。プロレスの原稿を10枚書いた。そのうち出るでしょう。「ゴルゴ13論」はいつ出るのかな。やたらと原稿を書いたな。手が痛い。

(14) 8月5日(土) 7:00 池袋ジュンク堂で、森達也さんとトークです。
「天皇制と愛国心」

【特別版・お知らせ】

何と、「赤旗」に私の本の書評が載りました。嬉しかったですね。BBSに教えて下さった方、ありがとうございました。さっそく読みました。講談社

にも送りました。喜んでました。

では、ここに紹介ませう。「背表紙」というカコミの書評コーナーです。

く『愛国者は信用できるか』 ---新右翼の右翼批判の説得力

『愛国者は信用できるか』（講談社・700円）の著者・鈴木邦男氏は「愛国運動四十年」、命をかけてきたという新右翼。天皇を敬愛し、学生時代は朝晩、日の丸を掲げ、君が代を歌い、その回数は五千回以上。「愛国者のノルマ」を達成し、だれよりも愛国心について発言する資格があると自負します。そんな著者でさえ危うさを感じる最近の世相に、疑問と義憤を持って書いたのがこの本です。

かつて右翼学生同士で、だれが一番愛国的かを競った著者の達した結論は「声が大きくて粘る奴（やつ）が勝つ。要は、皆に嫌われる、性格の悪い奴が勝つ」、なぜなら「マルクス・レーニン主義を勉強しなくては」なれない左翼と違って愛国者は愛国心があると自己申告すればいいから。

さらに著者は、「愛国心」という言葉は、愛といいながら、対立・憎悪をあおるとき、他人を糾弾し排撃するときが一番よく使われる、と喝破します。

日本共産党については「最も愛国的な党かもしれない」「選挙のポスターには富士山が描かれている」と評価。「中国になめられるな」「北朝鮮をやっつけろ」とあおる雑誌は日本古来の美徳に背いていると憂えます。

なんといっても、「君が代五千回」の著者が言うだけに説得力抜群。巧まざるユーモアにもあふれた本です。（亨）

【だいありー】

- (1) 6月26日(月) ジャナ専の授業。
- (2) 6月27日(火)、28日(水) 2日間、家に閉じこもって原稿を書いた。
- (3) 6月29日(木) コスモの授業。
- (4) 6月30日(金) 慶応大学。小川和久さんと土井たか子さんの討論を聞きに行く。
- (5) 7月1日(土) 図書館にずっといた。

(6) 7月2日(日) 韓国のテレビの取材を受けた。靖国問題について。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

今週の主張 7月10日

誘拐はやめませう。もしやるならキチンと計画的に

(1)テレビやお笑い芸人も「共犯」や

「ダーレも同情しない。セレブ女医の娘誘拐事件」と大きな見出し。駅でつい買っちゃいましたよ。「日刊ゲンダイ」6月29日号だ。28日(水)の発売だ。よく、ここまで言えるね、とビックリした。あの、カリスマ整形外科医 令嬢・池田果菜子さん(21)誘拐事件だ。

犯人グループは「テレビで母親が財産家であると知った。それで犯行を思いついた」と供述している。テレビも罪づくりだ。母親の優子さん(47)は、「セレブ女医」としてテレビに出まくり、「時給100万円」「月に1億円以上。昨年は12億円以上稼いだ」と語っていた。「日刊ゲンダイ」はそこで言う。

〈母親の優子さんは、華麗な私生活を公開していた。まるで「襲ってくれ」と言わんばかりに…〉

凄いことを言うね。「襲ってくれ」と言わんばかりに、か。確かにそうだよね。犯人にはそう見えた。

テレビも変だよね。「皆は知らないだろうけど、日本にはこんなに金持ちがいるんだ。信じられないリッチな生活をしている」と、よく紹介している。お笑いタレントが「お宅」にうかがって、「凄いですねー」「立派なお風呂ですね」「ヒャー、こんなに車があるんですか」と驚いている。一体、何なんだあれは、と思っていた。

でもこれは、犯人に「情報」を提供してるんだね。「どうもありがとう」と犯人は思っているんだ。テレビは「共犯」なんだよ。無防備なんだよね。

外国だったら、こんな番組はないだろう。「金持ち」を自慢するとしても、「でも、これだけガードマンがいるぞ」「ちょっとでも近づいたら射殺するぞ」と脅しているよ。

その点、日本は何らガードなくして、公開している。そう、「襲ってくれ」と言わんばかりに。

それを紹介するテレビもお笑いタレントも「善意」なんだろう。「仕事」なんだろう。あるいは、ただの「アホ」なんだろう。でも、結果的には「犯人」に情報を提供している。もっと言うならば、「犯罪を誘発」している。別に誘拐なんか考えていなかった人間に、ヒントを与えている。僕らだったら、金持ちを見て、ただ、「うらやましーな」と思う。「でも、それだけ必死でがんばったんだろうな」と思う。しかし、「何かやって金をつくらにゃ」と思いつめてる人間は、これを見て、「神の啓示」だと思ふ。「エサ」だと思ふ。「ほらほら、ここにいい獲物がいるでしょう。襲いなさいよ」。そう教えてくれると思うんだ。犯罪者の気持ちなんて、そういうものなんですよ。

たとえば、ドロボーに入ろうかどうか迷ってる男がいる。その前に、自販機でジュースを買った。「アタリー！」と行って、もう一本出た。

「ヒャー、ついてる。これは、決行しろというサインだ！」と思う。こんなことで、背中を押されるんだ。本当はもっと冷静に、合理的、科学的にやるべき「仕事」なのに、こんなたわいもない、情緒的なことで決行してしまう。

テレビの「お金持ち紹介」も同じこと。繁華街の「風俗店無料紹介所」のように見えるんだね、犯人には。そうか、ここにこんないいターゲットがいるのか。テレビよ、ありがとうと思う。まさに「無料紹介所」だ。

(2)人間もマネしてるんやね。「カラスとオオカミ」の共闘関係を

唐沢孝一の『カラスはどれほど賢いか』（中公新書）を読んでたら、こんなことが書かれとった。ワタリガラスは獲物のいる場所にオオカミを案内し、おこぼれにあずかるという。

〈オオカミが狩りに出るとワタリガラスもついていく。そして、カラスは獲物を見つけると、一休みしているオオカミをせき立てるといふ。カラスは鳥類としての特徴を発揮し、上空からはるか彼方を見渡して獲物に関する豊富な情報を得る立場にある。この情報を地上を徘徊するオオカミに提供し、

狩りを代行させ、その利益の一部を分配してもらうのである。オオカミのほうでも、カラスの情報がどれほど有効かを知っているに違いない。冬のアラスカやシベリアといった極北で生き延びるための、カラスの知恵であろう)

この話は、バリー・ホルスタン・ロペスの『オオカミと人間』（草思社）に詳しく書かれとるらしい。ネットで買って読んでみよう。

つまり、オオカミは「誘拐犯」であり、犯罪者たちです。オオカミに情報を提供するのにはマスコミであり、お笑いタレントなんです。「何かいい金もうけはないかな」と思いながら、ボーッとテレビを見ている人に向かって、「ほら、ここにガードの甘い金持ちがおりますよ」と教えてくれる。一休みしている「犯罪者」に対し、「ほら、仕事に行きなさいよ」とせきたてるんだね。

犯人グループは中国、韓国、日本の混成チームだ。政治家たちは靖国や領土をめぐる喧嘩をしてるのに、彼らは何と仲がいいことか。政治問題は棚上げして、ともかく一緒に「お仕事」をしてるのか。いや、政治問題なんかどうでもいいんだらう。自分たちが「生きる」ことの方が先決だ。

テレビでは、コメンテーターが、「裏には巨大な多国籍犯罪シンジケートがあって、彼らはただ使われてるだけだ」なんて言ってる人がいた。そんなことはない。巨大な組織があったら、もっとマトモに「仕事」してますよ。緻密に計画を立てるよ。つい最近知り合った、食いつめ者同士がやったから、あんなガサツなことをやったんだ。

「誘拐をするのに、レンタカーを借りるってのはないですね。それも自分の本物の免許証を出して。普通、こういう時は盗難車を使うもんでしょう」と、コメンテーターが言っていた。おいおい、又もや、犯人に教えているよ。「そうか。盗難車でやるのか」と、次の犯罪者はメモしているよ。

「誘拐事件で、実際に金を手に入れた例は一件もありませんからね」と、したり顔で言ってるコメンテーターもいた。何も知らんくせに。偉そうなことを言うなよ、と思いましたね。

確かに誘拐は、わりの合わない犯罪だ。今回だって、レンタカーを借りたり、下見したり、ターゲットの写真を撮ったり…と、手間をかけ、金をかけ、準備した。ズサンだが、それなりに努力した。しかし、何も報われな。これから何年か、あるいは10年以上の刑務所生活が待っているだけだ。かわいそうだ。そんな苦勞をする位なら、地道に働いた方がいい。

誘拐は一獲千金を狙う。しかし、ほとんど成功はしない。でも成功してる

人はいる。ここにもテレビの「詐術」がある。「誘拐は皆、失敗してる」というが、正しくは、「警察に届けた誘拐」はほとんど失敗している。と言い直すべきだ。届けてない誘拐では成功している例がいくらでもある。

「でも、誘拐事件は全部警察に届けるだろう」と、思うかもしれない。違うんだ。今回のセレブ女医だって、「警察に届けるか迷いました」と言ってる。結果的に届けた方がよかった。日本の警察は世界一優秀だから、任せた方がいい。

女医は、迷ったが、何故届けたかだ。要求された金が大きすぎだ。3億だ。犯人だって、つくるのにいくら時間がかかるか分からん。金については女医の方がプロだ。「すぐには出来ない」といって引き延ばす。それに、犯人は何度も何度も、「請求」の電話をよこす。娘の声も聞かせる。犯罪者として「甘い」。まるでシロウト集団だ。

誘拐する時も、覆面もしない。顔もバッチリ見られてる。じゃ、万が一、3億円を手に入れても逃げられない。一体、どうする気だったんだろう。計画性がないじゃないか、と腹が立った。計画性がないということは、より残虐になるかもしれない。顔も見られた。仕方がない、人質は殺して埋めてしまおう。と思うかもしれない。

そんな「危険性」を感じたんだろうね。金持ちの本能で、セレブ女医は…。もし犯人が要求額を十分の一にして、電光石火でやっていたら、成功していたかもしれない。

前にこんな事件があった。会社の社長が出勤途上、誘拐された。そのまま一緒に銀行に行き、金をおろした。そして犯人は逃げた。2千万だ。その位の金なら銀行からよく下ろしている。怪しまれない。社長も、「この位の金なら」と思い、あきらめた。警察にも届けなかった。しかし、これで味をしめた犯人が、二度、三度と同じ手を使った。同じ人に。「こりゃ一生、しばらく取られる」と思い、社長は思い余って警察に届けた。それで犯人は捕まった。

つまり、何回もやらないで、1回だけなら、捕まらなかった。他にいくらでもある。それに、3億なんていわずに、3千万とか、1千万なら、すぐに出す。金持ちも、「ちょっと高い授業料だったが、これから気をつければいいや」と思う。これで完全犯罪だ。アッ、いかな。私も、オオカミに情報を教えてるカラスだよ。

それに、若い女や子供を狙うから、家族もすぐに警察に届けるんだよ。引きこもりの息子だとか、グレて、両親に暴力をふるう息子だとか。あるい

は、寝たきりの老人を狙ったらいい。きっと警察に届けられないよ。お金もすぐに出すよ。「何なら、ずーっと面倒を見てもらえませんか」と言うだろうよ。

それに今回の犯人たちは、キチンとしたポリシーがないね。犯罪のフィロソフィ（哲学）がないね。「いくら位、出せばいいの」「いくらならすぐ出せる」「100万ならすぐそうえられる」「娘の価値がそれだけか」と、つまらん会話をしている。「朝生」の討論じゃないんだから、そんなことしてんなよ。

(3)またまた新手の誘拐事件があるかもしれんぞ

前に、関西であった誘拐事件の時は凄かったね。「いくら出せるんだ」「1万円なら、今すぐにでも…」。

おいおい。「1万円の娘」かよ、と思ったね。キロ100円かよ。豚肉より安いよ。解放されたからよかったけど、こんな「通話記録」を新聞で読んで、娘はガックリきたでしょうな。今回もそうだけど、犯人の「通話記録」は発表すべきじゃないよ。あれだって、「情報提供」のクラスだよ。

それに、最近はやってるのは、ペット誘拐だ。500万位だったら、すぐに出す。あの時だって彼らはすぐに出した。あっいかん。自分のやったことを書きちゃ。（勿論、冗談でんがな）。それに、解放された時も、「チョー、こわかった」「チョー、身動きがでしんかった」なんて証言しない。犯人の顔を見ても、言えない。証言能力がない。だから大丈夫だ。

でも、危険はある。もし、容疑者が捕まったら逃げられない。人質のペットは「証言」はしないが、「証拠」は残す。犯人の服や居間に、そのネコやイヌの臭いがある。毛が落ちている。「あっ、これはこのセレブ猫の毛だ」とすぐに分かる。だから、誘拐は大変だ。割りに合わない。そんなことは推理小説家にまかせて、あなたは地道に働くことを考えなさいよ。

誘拐といえば、北朝鮮の金英男さん（44才）。28年ぶりにお母さんに会って、抱き合って泣いてたんだね。涙、涙でしたね。でも、マスコミは冷たい。「ウソばかりの会見だ。怒りがわいた」「北の代弁者だ。許せない！」と。でも、金さんは誘拐の被害者でしょうが。まるで「加害者」のように叩かれている。かわいそうでしょうが。「遭難して北の船に助けられた」と話してました。「あ。その手があったか」と私は思いましたね。そんな説明の仕方があったのかと思った。

多分、嘘だろう。本当は暴力的に拉致されたんだらう。でも、そんな

「話」を思いつく。あるいは北に押しつけられて、喋る。悲しいじゃありませんか。同情しましたね。お姉さんが言ってました。「本当かどうか分かんが、私は信じてあげたい」。偉いお姉さんだと思いました。嘘かもしれない。言わされてるのだろう。でも、そう言うことを強制された弟に同情し、弟をいじらしく思っている。そういう〈情〉が伝わってきました。それなのに、「許せん！」はないでしょう。

どんな手がかりでもいい。北に利用されてもいい。拉致被害者をとり返そうという韓国の必死な姿勢が伝わってきましたね。

キム・ヘギョンさんは、キム・ウンギョンさんと言うんですね。改名したのでしょうか。前はお母さん（めぐみさん）の話をしていたのに、今度は、「おぼえてない」。たしかに矛盾だらけです。そのあとは、「新しいお母さんに悪いから」そう言った。出来すぎですね。変ですね。それだったら、横田さんも会いに行ったらいいんじゃないでしょうか。前にその話があった時は、「北に利用されるだけだ」といって中止になりました。たしかに利用されるでしょう。相手は嘘ばかり言うでしょう。でもヘギョンさんとも話し合えます。その中で、100のうち1つ位は〈真実〉も言うでしょう。頭のいい横田夫妻ですから、彼らの矛盾もついて、真実を突き止めるでしょう。ともかくあらゆる手を使って、「拉致解明」をすべきではないでしょうか。

でも、「それは甘い」と言われるでしょうね。「北への経済封鎖しかない」「戦争をやる覚悟で断固とした態度を貫け！」と言われるでしょう。それも必要でしょうが、北の手に乗ったふりをして、北に乗り込み、そこで闘うのも必要ではないのでしょうか。

北では、姜東権という人が、「会見」のシナリオを書いた。と言われてます。それにしても、ズサンなシナリオだ。拉致の全貌を全て話し、全員を解放したらいい。ところが、それはやらない。どっかで幕引きをしようとしている。又、日本のテレビをやたら気にしている。

金英男さんの背広がダブダブで、腕時計がゆるゆるだとテレビが言った。つまり、「借り物だ」と言ったわけだ。そしたら次の日は、ピッタリした背広と時計になった。金さんの子供（少年）が腕時計をしていた。「北では少年がするはずがない」と日本のテレビが言うと、次の日には外していた。何やら、学芸会のような。「茶番劇だ」「嘘と矛盾ばかりだ」と言うが、28年ぶりに会った母子の再会は本当でしょうか。

あるいはこう言うのだろうか。28年前に拉致された金英男さんは、その時は「被害者」だった。でも、北で教育され、今は北を弁護する「犯罪者」

「加害者」になり果てた、と。だったら、なおさらかわいそうではないのか。でも、そんなことは言えないような日本の雰囲気だ。「馬鹿野郎、お前は甘いんだよ！」と言われるだけだろう。それに7月5日、北朝鮮は何とミサイルを7基も発射した。何を考えてるか分からん国だ。やり方が下手くそだ。もうこうなったら又、小泉さんが一人で行ったらどうか。もう首相はやめるんだ。失うものは何もない。死ぬ覚悟で対決してくれるでせう。7月7日の夕刊フジは「クーデター」。日刊ゲンダイは「金正日・国外脱出」と出ていた。でもよく見たら、「金正日、クーデターを警戒」。「国外脱出説」だ。まるで戦争になったのかと思っちゃった。今こそ、「白船訪朝団」で行かにかいけんな。

【だいありー】

(1) 7月2日(日) 韓国のKBSテレビに取材されました。靖国神社問題について。友好的な取材でした。

東京新聞に出てましたね。『愛国者は信用できるか』の紹介が。「この人、この本」というコーナーです。私の写真も出ています。ジョナサンの横で撮ったんです。腕を組んで首をかしげています。自分では気がつきませんでした。カメラマンがうまいんです。「今の風潮はいかんよなー」と言ってるようです。東京新聞文化部の大日方公男さんがインタビューして、書いてくれました。ラストの部分を紹介する。

〈明治の国家主義団体・玄洋社の愛国心の定義や、三島由紀夫の「憂国」的姿勢などを確認しながら、愛国心を批判するのでなく、その持ち様をうったえる。自らの体験も踏まえ、鈴木さんの姿勢と言葉は実にしなやかだ。

「自分の愛国心は本物かと自省した本にもなりました。愛国心は難しいです」〉

実は、これを書いた大日方さん、ジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）でも週一回、教えている。私と同じ文芸創作科の講師だ。ジャナ専の会議の時に会ったら、「インタビューをお願いします」と頼まれた。

驚いたことに、同じ紙面では、柴田昭彦「旗振り山」の書評を永瀬唯さん（評論家）が書いていた。実は、この永瀬さんもジャナ専の講師だ。同じ紙面に三人もジャナ専の講師が出ている。凄いね。

(2) 7月3日(月) ジャナ専。前日の東京新聞をコピーして学校の事務局にあ

げた。そして生徒にもあげて読んでもらった。

授業では1950年の朝鮮戦争の話をした。そういえば、「別冊宝島」はどうしたんだろう。たしか、7月2日に発売のはずだが、送ってこないな。少し遅れてるんだろう。と思って、弁当を買いにコンビニに入ったら、何と、あった！

『日本「怪死」事件史』（別冊宝島・840円）だ。なかなか、エキサイティングな本だ。鈴木宗男さんが「中川一郎自殺」を語る。三浦和義さんが、自らに降りかかった事件を語る。有田芳生さんがテレサ・テンの自殺について書いている。尾崎豊、岡田有希子、田宮二郎の自殺についても、「関係者」にインタビューしている。松岡利康さんが阪神スカウトの自殺の謎に迫る。本橋信宏さんが、「よど号」田宮高麿の死について、「病死か謀殺か」と迫る。巻頭は、ライブドアの「野口氏怪死事件」について寺澤有さんが書いている。又、深笛義也さんが書いている。安部譲二さん、上野正彦さんが喋っている。豪華な内容で、さすがは別冊宝島です。

「疑惑の死”から見える日本の闇とタブー」と表紙には書かれています。その中で私も書いてます。「作家・見沢知廉が飛び降り自殺（2005年）」についてです。タイトルは、

〈見沢を一番知る男・鈴木邦男の懺悔録。「私が断った見沢に関する赤報隊からのある提案〉

何やら意味深ですね。いまさら、一体、何を書いてるんでしょうか。一回書いた原稿を自らボツにして、もう一度、全面的に書き直したそうです。

「もう書いていいだろう。でもヤバイかなと迷いながら書いた」と鈴木氏は言うております。

(3)7月4日(火) 鹿砦社の「名誉棄損」裁判は実刑判決でしたね。ひどいですね。言論弾圧です。控訴すると言ってます。がんばって下さい。

2時、雑誌の取材。

7時から本多劇場。ザ・ニュース・ペーパーの本公演。面白かったです。産経新聞（6月20日付）に、メンバーの渡部又兵衛さんのことが出ていた。

「お笑い魂。義足で支え」と。糖尿病で左足のひざ下を切断し、義足で舞台に出ている。私らは全く気づかなかった。凄い精神力だし、努力だ。そして、私たちを笑わせてくれる。驚きました。今回の舞台でも、その話をしてました。偉い人だと思いました。

「東京新聞」（7月4日）の「こちら特報部」は、「テロに備え---自民検討チーム提言。日本版CIAの中身とは」。「長いウサギの耳が必要」と、町村信孝前外相が座長になって検討している。かなり突っ込んだ取材記事だ。私のコメントも出ていた。

「日米で情報を共有化していくという流れの中で、こうした話が出てきたのだろう。だが、むしろ米国にべったりしているからこそテロ組織に狙われる可能性がある。やたら危機感をあおって対外情報機関をうんぬんする前に、日本がどういう外交方針をとるのが問われているはず。順序が違うのではないか」

(4)7月5日(水) 「論座」（8月号・朝日新聞社）発売。『愛国者は信用できるか』の書評が出てました。長山靖生さん（評論家）が書いてます。ありがたいです。こんな点も指摘していました。

〈そもそも思想は社会と人間の幸福のためにこそ意味があるのだが、しばしば思想闘争の場ではこの関係が逆転してしまう。「憂国」の認識は、そうした捻（ねじ）れへの鈴木氏なりの警鐘と理解できそうだ。

右翼、左翼といった思想の差よりも、より重要な共通項があるという認識が「憂国」には含まれている。たとえば自由主義史観の人たちから見たら「自虐的」と糾弾されそうな日本卑下の歴史観を「謙の美德」に由来すると看破するあたりは憂国者ならではの視点だろう〉

(5)7月6日(木) 河合塾コスモ。「基礎教養ゼミ」では、元皇族・竹田恒泰さんの『語られなかった皇族たちの真実』（小学館）を読んで天皇問題を考えました。

(6)7月7日(金) 慶応大学で「現代社会史」の講演・討論会。テーマは「日本の選択(?)・天皇制と民主主義」。午前中は私が講演をし、午後は加藤哲郎さん（一橋大教授）が講演。さらに討論。5時間に及ぶ講座でした。学生は460人。熱心に聞き、討論に加わってくれました。

(7)7月8日(土) 一日中、図書館で勉強。

(8)7月9日(日) 昼、コスモで全体会議。7時からポレポレ東中野。「あんにょん・サヨナラ」の公開記念トーク。イ・ヒジャさん。高橋哲哉さん（東大教授）、そして私です。とても刺激的で、楽しいトークになりました。

【お知らせ】

(1) 7月10日(月) ロフト・プラスワン。『愛国者は信用できるか』出版記念トーク。森達也さん、斎藤貴男さん、そして私です。

(2) 7月11日(火) 7時からロフト・プラスワン。高須基仁さんのイベント。テレンス・リー、三浦和義、猪瀬直樹さんらが出演。私も出ます。

「月刊タイムス」(8月号)が発売です。私は映画「MISHIMA」のことについて書きました。見沢知廉氏のお母さんも書いてます。3回目です。

(3) 7月14日(金) 慶応大学で、「現代社会」総括トーク。

又、「アエラ」(朝日新聞社)が発売です。「現代の肖像」で、あの全世界に知られたヒーローが取り上げられています。私もよく知ってるので、コメントしています。

(4) 7月15日(土) 「EX大衆」発売。靖国特集で私も書いてます。

(5) 7月19日(火) 「わしズム」発売。特集「超・戦争論」。小林よしのり、大塚英志、香山リカ、富岡幸一郎、そして私の大座談会です。

(6) 8月4日(金) 「CIRCUS」(8月号・KKベストセラーズ)発売。特集「30代、オレたちの脳裏に焼き付いて離れない未解決事件」。私は、あの事件について、今だから言える、衝撃的な真実を話しています。

(7) 8月5日(土) 7:00p.m. 池袋ジュンク堂で、森達也さんとトーク。「天皇制と愛国心」です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)
[2006年](#)

今週の主張 7月17日

おかげで、三刷です！『愛国者は信用できるか』は信用
できる！

(1) 「左翼に利用されてるだけだ」と言われますが、違います

皆様のおかげです。ありがと・ございます。『愛国者は信用できるか』（講談社現代新書）、第三刷です。5月20日に発売されて1ヶ月半で、もう三刷です。嬉しいですね。「まだまだ売れる」と講談社では言っております。

今が旬なテーマだということもあったでしょう。新書で買いやすいということもあったでしょう。朝日新聞、週刊朝日、東京新聞、日刊ゲンダイ、東洋経済、論座…。そして何と赤旗も取り上げてくれました。これに対し、「左翼に媚びてまで本を売りたいのか」と批判する人もいますが、私の脱右翼的・自虐的姿勢は、かなり前からのものです。昔、『天皇制の論じ方』（株式会社IPC）という本を出しました（その後、ちくま文庫で『言論の不自由』の題で出ています）。今回の本は、いわば「愛国心の論じ方」だと思います。私はこう思うが、皆で論じようじゃないか、という本です。

いろんな書評で書いてる人は、そのオープンな「論じ方」の姿勢を評価してくれたんだと思います。僕としては天皇制は必要だと思うし、日の丸・君が代も好きだ、とちゃんと書いてます。三島由紀夫も好きだし、全集ももう少しで読破します。僕の本を取り上げてくれた人は、別に、僕の天皇観、日の丸・君が代観を支援してるわけではない。僕の愛国心を認めているわけでもない。ただ、オープンに話そうよ、という〈姿勢〉を是としてるのでしょう。

それだけ、今の状況は息苦しいし、言論が不自由だということです。「で

もお前の本は左翼に利用されている。敵に塩を送っている」といって批判する人もいます。了見の狭い人だなと思います。又、利用されたっていいじゃないか。敵にも味方にも塩を送り、「共通の土俵」に上げて堂々と闘う。いいことじゃないでしょうか。

「愛国心、日の丸、君が代の強制はおかしい。ほらみろ、右翼の鈴木だっ
て言ってるじゃないか」という形で、左翼に利用される。だから悪いとい
う。でも、悪いのは、「強制」している人々だ。それに対し、右であれ左で
あれ、アナキストであれ（もういないか）、反対するのは当たり前じゃな
いか。私は、そう思いますね。

思い出しました。昔々、僕らはこんな風に考えてました。左翼は悪い。だ
から左翼の言ってることは全て悪い。一点でも認めたら、我々の立場がな
くなると。天皇制、防衛、憲法については初めから対立点がはっきりしてい
る。しかし、他の細々とした問題については、聞かれてもよく分からん。
「その時はな、左翼の反対を言えば間違いはない」と先輩に言われました。
「フェミニズムだ」といえば、「反フェミニズムだ」という。「自由だ」と
いえば、「統制だ」という。「日中友好だ」といえば、「中国とは国交断絶
だ」という。

17年前、初めて「朝まで生テレビ」に出ました。「日本の右翼」でした。
右翼が7人出ました。「七人の侍じゃん」と思いました。事前にその七人の
侍が会って打ち合わせをしました。といっても、細かな事は打ち合わせ出来
ない。ただ、「向こう側（左翼）の言うことには全面的に対決しよう」「こ
ちら側（右翼）では絶対に内ゲバをしないように」。この二点だけでした。
つまり、右翼でも考えの違うテーマはある。しかし、それは触れない。とに
かく一致団結して「敵」に向かい、勝利しよう。というわけです。

僕も、これは賛成だった。ただ、本番が始まると困った。右の側では、
「女に参政権はいらない!」「テロは必要だ!」と言う人がいる。「いや、
ちょっと違うんじゃないの?」と思ったが、内部で反論は出来ない。又、左
翼（小田実、大島渚、小沢遼子ら）の言い分にもいい点はある。もっともだ
と思う点もある。「そうですね」と言いたいが、そうすると「敵の味方をす
るのか」と言われちゃう。だから、じっと我慢していた。

(2) どうせオイラは裏切り者よ。それは「朝生」から始まった

でも司会の田原さんはうまいんです。さりげなく踏み絵をふます。「いつ

の時代がよかったと思うの？」 「本島長崎市長への右翼テロは支持するの？」と。前者では「戦前がよかった」「万葉の時代がよかった」などと右側は答える。おいおい、そうかよと思った。そんな時代じゃ、言論の自由はないし、街宣車で演説も出来なかったよ。そう思ったが、「党議拘束」を破るわけにはいかん。じっと我慢の大五郎でした。

しかし、「長崎市長へのテロ」には困りましたね。皆は、「テロは当然だ」「支持する」と言う。究極の選択だ。私は「テロは支持できない。反対だ」と言った・これは右の仲間からは「裏切り」と思われた。「党議拘束を破った」と思われた。さらに、終わってから、右翼の人達に批判され、集中砲火を浴びた。「何だ、仲間が命をかけてやったことを否定するのか！」「それでも右翼か！」「裏切り者め！」と。

番組中に、小田実が発言した。「ここで話し合えるのは鈴木さんくらいだ。他の人はテロを支持するという。何かあったら殺すという。そんな人と話は出来ない」。

今、考えてみると当然の話だ。「自由に話をしよう」といって出てきても、気に入らないことがあったら殴るかもしれん。天皇批判をしたら殺すかもしれん。…これでは安心して話も出来ない。

ところが、あの時は、皆そんな冷静なことは考えられない。「何だ、鈴木は左翼にすり寄っている。だから敵の小田もメールを送ったんだ」と思われた。ますます私は窮地に立った。

これが「朝生」に出た一回目だ。二回目は「天皇」で、右からは野村秋介さん、大原康男さん、私が出た。私は何とか、右翼の「統一と団結」を守って発言したつもりだ。しかし、未熟で、そこから逸れることもあった。一人だけ浮いてる場面もあった。野村さんに叱られたりもした。

そして第三回の「憲法」だ。これが決定的だし、私の「転機」になった。この時は右側は私一人だ。「党議拘束」もない。悩んだ。考えた。そして、自分の頭で考え、自分の言葉で話すしかないと思った。当然のことだが、この時、初めて自覚したのだ。それまでは、まだまだ「右翼用語」を使っていたし、それで「武装」していた。一方的な右翼の考えを言って、煙にまくこともあった。それも「集団」対「集団」だから出来たことだ。

(3) 「間違っ、左翼の論客を二人呼んじゃった」と慶応では言われちゃった

でも、今度はたった一人だ。よく分からないことを言って相手に突っ込ま

れても、集団ならば、誰かがフォローしてくれる。ところが今回はない。だったら、自分としてはよく分からない「右翼理論」や「右翼用語」は使っちゃいけないと思った。自分の頭で考え、自分で納得したことだけを話そうと思った。

今の憲法はアメリカから押しつけられた。それは間違いない。だったら、認めるかどうかを国民投票にかけたらいい。それで「認める」ことになれば、もう立派な日本の憲法だ。又、自衛隊を認めるのなら、それが強大にならないよう、暴走しないように「縛り」を考えるべきだ。たとえば、「徴兵制度はしかない」「核は持たない」「海外派兵はしない」…といった点だ。その「縛り」を決めてから、後は自由に9条を論議すべきだ。

又、昔は僕らは「憲法廃棄」とか「全面改正」と言っていた。しかし、読み返してみると、なかなかいい点もある。「戦争を世界中からなくそう」という〈理想〉もある。その理想は大事だ。ただどうやって実現するのか。それも考える必要がある。…と言った。今の憲法でもいい点はたくさんあると指摘したのだ。

その時だった。本番中なのに野村さんが入ってきて、後ろのギャラリー一席に座り、発言した。「あまりに下らない議論をしてるのでアタマにきて、川崎からタクシーを飛ばして来た」という。イライラしている。明らかに僕に対して頭に来てたのだ。かなり厳しいことを言われた。「おっ、新右翼の内ゲバか」と思った人もいたようだ。

何でも、野村さんは川崎のすし屋でテレビを見ていた。でも、鈴木はどうも変なことばかり喋る。まるで左翼じゃないか。多分、仲間も言ったんでしょ。「こりゃ、マズイですよ。右翼が誤解されますよ」と。「鈴木は野村さんの後輩でしょう。言ってやんなくっちゃ」とも言われたんでしょ。

それで、タクシーを飛ばしてテレ朝に来た。当時は、朝生は5時間だった。だから、タクシーで駆けつけても間に合った。

まあ、こんなこともあったんだ。平成になったばかりだから、今から17年ほど前だ。その頃から、自分の疑問、悩みは正直に言うようになった。そして、右翼からは「裏切り者」と言われるようになった。だから、昨日今日じゃない。「裏切り者」には長い歴史があるんです。

ここで、慶応大学の大讨论会の報告もしよう。前にも書いたけど、7月7日は460人が集まり、まさに立錐の余地もない。(左翼側)の加藤哲郎先生(一橋大学教授)と私の天皇制をめぐる激論だ。

朝の10時45分から夕方5時頃まで、やった。疲れ果てた。「天皇制と民主主義」というテーマだった。加藤さんは、「民主主義の日本で天皇制はいらない」と主張。主催者側にしたら、「よし、天皇支持の鈴木をぶつけて、大激論をさせよう」と思ったらしい。

司会は慶応大学教授の松村高夫先生で、終わりの総括の時に言っていました。「右と左の論客を呼んで激論してもらおうと思いましたが、私達が間違ってた。どうも左翼の論客を二人呼んでしまったようで」

生徒はワーツと笑ってました。そうかなーと思ったけど、まあいいか。僕は「左翼」に進化しちゃったのか。でも、決してナアナアの話になったわけではありません。その場にいた人がレポートし、そのことを実証してくれるでしょう。

【だいありー】

(1)7月9日(日) 東京新聞に私の原稿が載ってました。見沢知廉『愛情省』（作品社）の書評です。それにしても、東京新聞にはお世話になりました。だって、7月2日(日)に、私の『愛国者は信用できるか』が取り上げられ、私がインタビューされている。7月4日(火)の「こちら特報部」の「日本版CIAの中味」では、私のコメントが出ている。さらに7月9日(日)には、原稿を書いている。1週間のうちに3回も載った。これは驚きです。

見沢氏の本は、死後も続々と出版されている。作品社から『ライト・イズ・ライト』『七号病室』『愛情省』だ。さらに別冊宝島では「日本アウトロー列伝」「日本『怪死』事件史」に取り上げられている。どちらも売れている。又しても「見沢ブーム」だ。

今回、書評した『愛情省』もいい。これは46才で自殺した見沢氏の遺作となったものだ。単行本化に当って、もう二本が収められている。未発表の異色作「ニッポン」と、デビュー作の「天皇ごっこ」だ。だから、贅沢な本だ。見沢知廉の全てが凝縮されている。

12年間も地獄の刑務所において、〈言葉〉の通じない世界であがき、苦しむ。人間としては扱われない。でも、人間であることを見失うまいとする。時には、発狂したのではないかと思われることもあった。しかし、生きのびた。「出たら小説に書いてやる」と思って耐えたのだろう。絶望の極限にありながら、でも、「これは小説にしたら面白いだろうな」と見ている「小説家の眼」がある。

政治犯を矯正するのは、国家から見れば「愛情」なのかもしれない。そう

シニカルに見ている。

又、「ニッポン」は驚いた。こんな作品も書けるのかと思った。だって、刑務所や政治運動といった自分の〈体験〉が基になった小説が多いがこれは違う。まあ、背景は政治運動ではあるが、テーマは〈愛〉だ。主人公は何と、一人の母親だ。息子はアナーキズムの運動をやっている。そのうち新右翼に入る。非合法活動もして、刑務所にも行く。でも見沢氏ではない。当時は、そんな若者が多勢いたんだ。

この母親は病院に勤めている。そして東南アジアから来てる若い男と知り合い、激しく萌えるセックスシーンも濃厚だ。まるで渡辺淳一文学のようだ。おっ、今度は新しい境地に挑戦したんだな、と思った。どんどん成長する作家だよ。でも、考えてみたら（当然のことだが）、死ぬ前に書いてたんだ。見沢、おそるべし。と思ったね。

まだまだ眠ってる作品があるし、これからも出るだろう。楽しみだ。

この日は午後1時から河合塾コスモの全体会議。

終わって、夜7時から、ポレポレ東中野で「あんにょん・サヨナラ」の公開記念トーク。イ・ヒジャさん、高橋哲哉さん（東大教授）、そして私。超満員だった。「三人のおかげです」と主催者は言ってたが、「いや、ヒジャさんと高橋さんの力ですよ」と私は言った。「僕がいなかったら、この倍は集まりました」。

座席は勿論、通路にも前にもビッシリと人が座り、後ろは立っている。「それでも入れなくて帰ってもらった人がいたんです」と主催者。実際（後で聞いたが）知り合いの長谷川さんは入れなくて帰ったとってた。申し訳ありませんでした。

トークは、スリリングで、かつ楽しかったですね。その場にいた人が写真とレポートを書いてくれるでしょう。お二人にいろいろと私も質問し、とても勉強になりました。

終わって、サイン会。私の『愛国者は信用できるか』は売り切れで、パンフレットやシャツにサインを書かされました。こんな体験は初めてです。嬉しかったですね。

それと、映画『あんにょん・サヨナラ』には、野中広務さんと私のコメントは入っていない。「戦闘的でないから」とカットされたようだ。しかし、「お二人のコメントを入れたビデオが出来ました」と、この日、一本もらった。ありがとうございました。

(2) 7月10日(月) 2:40p.m. ジャーナ専。一学期の最終だ。レポート×切。

「私の愛○心」。たかじんの番組でヒントを得て、これにした。「愛国心」について書いたのが一番多い。他に愛本心、愛母心、愛金心なんか。

7:30p.m. ロフト。前半、「創」の篠田編集長が「死刑問題」のトーク。9時から森達也さん（映画監督）、斎藤貴男さん（フリーライター）、私を加えて、「愛国心」のトーク。『愛国者は信用できるか』について、森さんは「日刊ゲンダイ」で、「この本はロード・ムービーだ」と書いていた。いい言葉だ。気に入っている。その話を中心にしながらか、話を始める。この本を担当してくれた講談社の岡部さんも駆けつけてくれたので、話に加わってもらった。篠田さんいわく。「鈴木さんの本は語り口が面白いし、売れますよ。公安、愛国心と続いて、もう一冊いけますよ」

ありがたいですね。めったに人を誉めないシビアーな篠田さんに誉められたんで嬉しかったです。終わって、岡部さん、斎藤さんたちと、「では次は何の本を…」と打ち合わせをしました。

(3) 7月11日(火) 夕方まで家で原稿を書いていた。夜、ロフトに。高須基仁・出演10年記念イベント。

「変態性欲ナイト45回を記念してこの日、芸能・ジャーナリズム・格闘・エロ・SM・ロック・AV・右翼・左翼・変態すべてが大集合！怖いもの見たさで来ても（たぶん）大丈夫ですよ！」と案内には書かれている。右翼も左翼も「変態」なのかもしれん。その代表で私は出た。

ただ、初めは、8:30から猪瀬直樹とトークしてくれといわれた。次に、予定が変わって、10時から鈴木宗男と対談してくれといわれた。そんで、別冊宝島の『日本「怪死」事件史』を持っていた。宗男さんは「中川一郎の死」に関係あると中川氏の奥さんに非難された。この「宝島」ではその「死の真相」を語っていた。よし、今日は、その話をしよう。この本では僕も見沢知廉氏の怪死について書いてるし、又、中川一郎と青嵐会で一緒に闘った玉置和朗さんに「生長の家」出身の政治家だ。僕もとてもお世話になった。その話もしようと思って、勇んで行ったわさ。

ところが、宗男さんは急遽、欠席。猪瀬直樹、三浦和義、テレンス・リーなど会いたかった人もすぐに帰ったあと。私は篠原光さん（女子格闘家）有澤幸司さん（格闘家）たちと一緒に舞台上げられて、10分ほど話をして、終わった。

でも、このあとが凄まじかった。SM縛り師の実演。又、激ヤバAV嬢が出

てきて、スッポンポンになり、とてもここでは書けないプレーをしてました。ヒデーな。世も末だ！と思いながら、なぜか私も必死に見てしまいました。

(4) 7月12日(水) 図書館で勉強。夕方6時半から学士会館。上田哲さんの『戦後60年軍拡史』出版記念会。ぶ厚い本だ。データ・ハウス刊。1023ページ。1.6キロ。5800円。凄い本だ。「書棚に常備すべき戦後史事典」と田原総一郎さんは言ってます。

その田原さんが、記念講演。「もっと悪くなる日本」。そして、上田さんとトーク。なかなか勉強になりました。

この日発売の『SAPIO』（7月26日号）に、「わしズム」（夏号・7月19日発売）の予告が大きく出ていた。小林よしのり、大塚英志、香山リカ、富岡幸一郎の白熱180分討論「超・戦争論」だ。「SAPIO」の「ゴー宣」の中でも、チラリとワンシーンを紹介している。私もチラッと出ている。

(5) 7月13日(木) 河合塾コスモ。1学期の最終の授業で、5時から、若松孝二さん（映画監督）が来て、「17才の風景」のメイキング・ビデオを上映し、トーク。そのあと、食事会。次の「実録・連合赤軍」の撮影にいよいよ入るそうだ。それを撮り終えたら、「山口二矢」を撮るそうです。

(6) 7月14日(金) 朝の10:40から慶応大学。「現代社会史」の連続講義・討論の「総括フォーラム」。「日本の選択(3)。どこに思想の基点を置くか」。夕方までびっちり討論。5時から、打ち上げパーティ。

この日、『アエラ』（7月24日号）が出ました。「現代の肖像」は、いつもは実在の人物なんですが、今回は初めて、劇画の主人公です。「デューク東郷」です。通り名を「ゴルゴ13」と言います。朝日新聞の『アエラ』がこんなイキなことをやるなんて、いいですね。「人生に必要なことは全てゴルゴ13から学んだ」と言っている私も、コメントしております。

(7) 「週刊読書人」（7月21日号）に私の原稿が載ってます。趙甲済『朴正熙、最後の一日』（草思社）の書評です。「ギリギリの場面で人間はどう行動するか」を教えられた重厚な本です。

(8) 「月間TIMES」（8月号）に私の連載。映画「MISHIMA」の上映中止事件、そして、見沢知廉氏のお母さんの手記（3回目）が載ってます。

(9) 7月15日(土) 「EX大衆」（8月号）発売。靖国問題特集で、私も喋っ

ています。「そこが知りたい。靖国神社特別授業」。

【お知らせ】

(1)7月19日(水) 「わしズム」(夏号)発売。私も座談会で出ています。木村三浩氏も書いてます。

(2)7月21日(金)「映画秘宝」(洋泉社)発売です。「太陽」の監督ソクーフさんと私の対談が載ってます。

(3)8月4日(金)「CIRCUS」(8月号・KKベストセラーズ)発売。特集「30代、オレたちの脳裏に焼き付いて離れない未解決事件」。私も、あの事件について〈最終報告〉をしています。

(4)8月5日(土) 7:00p.m. 池袋ジュンク堂で、森達也さんとトーク。4階の喫茶室です。「近代天皇制と愛国心」。会場が狭いので、予約した方がいいでせう。

tel 03(5956)6111 fax 03(5956)6100

(5)8月6日(日) ロフト。午後7時、沢口ともみさん追悼ライブ。「愛国心」をめぐり、塩見孝也さんと私の討論も予定されています。

(6)9月10日(日) 午後1時。ネーキッド・ロフト。大浦信行監督の映画「9.11～8.15。日本心中」の上映記念トークです。なかなか凄い映画です。この日は私も出ます。

(7)9月15日(金) 午後7時。社民党の保坂展人さんと私のトークです。「愛国心」についてです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)
[2006年](#)

今週の主張 7月24日

勿論、「お言葉」の政治利用は避けるべきだろうが…

(1)やっぱり〈あの噂〉は本当だったんだ

これは大事件ですよ。他の新聞社の人達は、「やられた」「これほどのスクープは近年ない」と言って頭を抱えてました。

7月20日(木)の日本経済新聞の朝刊一面です。

「A級戦犯靖国合祀。昭和天皇が不快感」

「参拝中止『それが私の心だ』」

アッと驚きました。他の新聞は遅れて夕刊で必死に伝えてました。夕刊のない新聞は次の日です。驚いたと同時に、「そうだったのか」「やっぱりあの噂は本当だったのか」と思いましたね。「ガセだ」「嘘だ」と言う人もいますが、多分、本物でしょう。元宮内庁長官の富田朝彦氏が1988年、天皇陛下のご発言をメモしていて、それが発見されたのです。

昭和天皇は靖国神社を戦後8回参拝しているが、75年11月の参拝が最後となった。現在の天皇陛下も89年の即位以降、一度も参拝されていない。昭和天皇が何故、参拝をやめたのかについて理由はいくつか噂されていた。

「78年にA級戦犯が合祀されたからではないか」という憶測があった。

又、「三木首相の靖国参拝が『公人か私人か』をめぐって政治問題化したので自粛した」とか。いろいろ理由は言われていた。

しかし、それまで8回も参拝は行かれていたのに、「合祀」以降はピタリと参拝されてないし、現在の天皇陛下も行かれてない。「時期的な理由」から考えると、やはり「合祀」問題が大きいと思われていた。読売の渡辺恒雄氏をはじめ多くの人がそう言っていた。しかし、保守派の人は、それに対

し、「絶対にそんなことはない」「天皇陛下は“A級戦犯の合祀”に不快感をもってない」「みな、愛国者だと思っている」と言っていた。

むしろ「政府が弱腰だからだ」「政府が阻止しているのだ」と言う人までいた。「いや、靖国に行かれないのは天皇陛下のご意志だろう」「合祀にこだわっておられるのでは」と言う人に対しては、「そんなことはない」「そんなことを言うなら証拠を示してみろ」と反論していた。

この時、「もし万が一、昭和天皇が“A級戦犯合祀”に反対でも、首相は行くべきだ。天皇のご意志などは関係ない」と言った人は一人もいない。ところが今回、メモが発見されるや、「たとえ天皇でも、政治利用してはいけない」と言っている。もし、逆な意味のメモだったら、彼らは大々的に「政治利用」しただろうに。

昭和史に詳しい秦郁彦氏（日大講師）によれば、富田氏は昭和天皇の信頼を得た律義な人柄で、メモの信用性は高いという。

天皇陛下がなぜ参拝をやめたのかについては関係者の証言が乏しく、憶測だけで議論が続いてきた。ところが今回、決定的とみられるメモが出てきたため、今後はこの「事実」をふまえた議論になるだろう、と言う。

つまり、たとえ天皇陛下の「人間的感情」が出たメモであるにせよ、あるいは、本来は発表してはならないものが出たにせよ…だ。「昭和天皇独白録」だって、出るはずがなかった。だが、出たあとはその「事実」を踏まえて、論議しなくてはならないだろう。

「たとえ天皇陛下のお言葉であっても、これは軽率だ」と御諫めすべきなのか。そう言う人もいる。あるいは、たとえ「人間的感情に基づいた発言でも天皇のお言葉なのだから、尊重すべきだ。という人もいる。

「政治利用するな」「メモに惑わされるな」で片付く問題ではない。それに、靖国に祀られている英霊は「首相万歳」と言って死んだ人は誰もいない。「天皇陛下万歳」と言って死んでいった人々だ。だったら天皇陛下に来て頂きたいだろう。天皇陛下もその思いが分かり、心を痛められたから8回も行かれたのだ。

天皇陛下が参拝できるのが望ましい。今の天皇陛下は昭和天皇のみ心を大事にし、継承されている。

「いや、昭和天皇の意志やメモは関係ない。昭和天皇のご意志に関わらず、今の天皇陛下には参拝してもらおう」と政府が強制したら、これも又、「政治利用」になる。日本国憲法下における天皇の地位・役割を含めた議論

になるだろう。

66年に厚生省からA級戦犯の祭神名票を受け取りながら、合祀しなかった筑波藤麿・靖国神社宮司に対し、「メモ」では、昭和天皇は「筑波は慎重に対処してくれたと聞いたが」と発言している。

一方、終戦直後に最後の宮内大臣を務めた松平慶民氏と、その長男で78年にA級戦犯合祀に踏み切った当時の松平永芳・靖国神社宮司については、「メモ」で昭和天皇はこう発言している。

「松平の子の今の宮司がどう考えたのか、易々（やすやす）と。松平は平和に強い考えがあったと思うのに、親の心子知らずと思っている。だから、私はあれ以来参拝していない。それが私の心だ」

かなり強い言葉で言われている。なにか、2・26事件の時の発言のようでもある。どちらも、人間的な発言かもしれないし、感情的なお言葉もあるかもしれない。しかし、2・26の時は、天皇に政治的力があつたので、決起将校は鎮圧された。今回は、憲法下で政治的力を持ってないし、発言すら出来なかった。政治的発言はいけないと自制されたのだ。ただ、ごくごく側近の長官には個人的な感想を話された。この「事実」を踏まえ、どう論議すべきか。…だ。全く無視していいのだろうか。

(2)天皇陛下に靖国参拝してもらいたい

ちなみに、前出の秦郁彦さんは、こう言っている。

〈故松平宮司は遺族の了解をとらず、天皇の内意も確かめずに、密かにA級戦犯を合祀してしまった。東京裁判を全否定する松平宮司の信念はともかく、必要な手順を踏まずにまつべきではなかった〉

これに対し、翌21日付の産経新聞の「主張」では、「富田長官メモ。首相参拝は影響されない」と断言している。

〈戦犯は旧厚生省から靖国神社へ送られる祭神名票に加えられ、これに基づき「昭和殉難者」として同神社に合祀された。この事実は重い〉

つまり、「現実の政治」の方が重いのであり、天皇の個人的感情を超える、というのだろう。又、筋から言えばその通りかもしれない。なんせ天皇の地位も役割も憲法に明記されているからだ。天皇は政治的力はない。

又、政治的力を行使すべきではない。

だから、産経は「小泉純一郎首相は富田氏のメモに左右されず、国民を代表して堂々と靖国神社に参拝してほしい」と言う。

「メモに左右されず」というのは、「天皇の御意志にかまわず」とも読める。でも、それでいいのかな、と思う。何度も言うように、靖国神社は天皇のために死んだ人を祀っている。首相ではなく、天皇陛下に来てほしいはずだ。その忸怩たる思いはあってもいい。又、たとえ首相が参拝するにしても、「合祀」の経過はきちんと説明し、秦氏らの疑問にもきちんと答えるべきだろう。

三島由紀夫は『英霊の声』で、2・26事件の時の天皇の発言や、「人間宣言」は人間的な感情に走った言葉であったと批判している。勿論、小説の中での話だ。もし、生きていたら、今回のメモについて、天皇に「諫死」するのだろうか。あるいは北一輝なら、どうするのか。そんなことをあれこれと考えてしまった。これは〈天皇論〉をめぐる、新たな課題かもしれない。次週で、それは考えてみる。

2・26事件で刑死した北一輝は『国体論及び純正社会主義』の中で、こう言っている。

「あゝ今日四千五百万の国民は殆（ほとん）ど拳（こぞ）りて乱臣賊子及びこの共犯者の後裔（こうえい）なり」

日本人は昔から天皇を愛し、守ってきたと思っていたが、違うと言う。そんな忠良な国民ではなかった。むしろ、天皇を軽んじ、いじめ、迫害し、時には島流しにしている。「乱臣賊子」ばかりだと。

たとえば、女帝論議をめぐる皇室への限度を超えた注文、要望、期待にもそれは言える。自分たちの家庭では出来ないことを求めている。残酷な国民だ。今回の「メモ」も、昭和天皇のご意志に関わりなく、論じられているとしたら、同じことではないのか。と僕は心配する。

それに対し、反論する人もいる。

「北の言葉は、たとえ乱臣賊子になっても天皇を諫める時は必要だ。そういう意味なのだ」と。

2・26で刑死した磯部浅一は、天皇への怨みの言葉を残している。三島はそれを基に『英霊の声』を書いた。果たして、今回の「富田メモ」は、否定されるべき「天皇の感情的言葉」なのか。そう断じていいのだろうか。もっ

と重大なものがあると思うが…。私も分からない点が多い。次からも又、考えてみたい。

【だいありー】

(1) 7月16日(日) この日の「読売新聞」(朝刊)に私の『愛国者は信用できるか』の書評が出ていた。実にいい書評で、驚いた。ちょうど私は原稿を書いている時だった。さっぱり書けない。オラは無能だな。文章は下手だし、漢字も口々に知らん。もの書き失格だな、と落ち込んでいた。「老後はスナイパーになる!」という大きな夢だって、もう無理じゃろう。そう思い、悲観していた。その時、FAXで送ってくれた人がいた。読んで、電流が走った。涙が出た。この文章に救われた。全部紹介したいが、長いので、前の部分と、ラストの部分を紹介する。竹内洋さん(関西大学教授)が書いてくれている。

〈左(派)の姜尚中(東大教授)には右(派)の鈴木邦男(本書の著者)を並べたい。論客という意味だけで並べるのではない。左右を問わず論客は、正論をぶつから、どこかいかかわしさをめぐいきれない。しかし、この二人に共通するのは、「この人は嘘をいわない」とおもわせるキャラである。反対陣営の意見にも十分考慮する軟らかさも共通している。九州弁(姜)と東北弁(鈴木)の訛りがかすかにまじる話しかたも共通で、親しみを感じさせる〉

姜さんと並んで取り上げられるなんて、光栄です。私なんて、とても、とても。でも、嬉しいですね。ジーンとききました。「愛国心」について紹介し、そして、最後にこう書いてます。

〈本書カバー裏著者略歴欄には住所が掲載されている。批判や質問をいつでも受けつけるという意味で載せているのだろうが、「みやま荘」という1960年代木造アパート的名称が著者好感度をアップさせずにはおかない〉

いやー、嬉しいですね。こんなに、「みやま荘」が誉められたなんて初めてです。「みやま荘」も喜んでおりました。

感動的な書評でありました。ありがとうございます。

(2) 7月17日(月) 図書館。

(3) 7月18日(火) 家で原稿。夜、柔道。

(4) 7月19日(水) 小林よしのり責任編集の『わしズム』（夏号・小学館 1000円）発売。180分の白熱座談会「超・戦争論」が載っている。小林よしのり、大塚英志、香山リカ、富岡幸一郎、鈴木邦男の5人。12ページの大特集だ。読みごたえがあるでしょう。私は圧倒されて余り喋れなかった。

又、この本には、堀辺正史先生と小林よしのりさんの武道特別対談・第3弾も載っている。又、木村三浩氏も書いている。「君は世界愛国者政学会議を知っているか?」。実に充実した号だ。

この日、午前中、新聞社の取材を受ける。ソクーロフ監督の「太陽」について。

(5) 7月20日(木) 午前11時と午後2時半に取材を受ける。日経の「富田メモ」についても聞かれる。口下手だから、疲れる。ひきこもって一人で本を読んでもる方がいいだ。

(6) 7月21日(金) 日帰りで大阪に行く。たかじんさんの「そこまで言って委員会」に出る。この日が収録で、放映は7月23日(日)。

『映画秘宝』（9月号・洋泉社）発売。「太陽」の監督のソクーロフさんと私の対談が載っている。

(7) 7月22日(土) 朝10時から渋谷のユーロスペースで「蟻の兵隊」を見る。監督や元兵士の人々が挨拶する。お話をした。いい映画です。ぜひ見て下さい。

午後2時から、寺山修司の芝居を見る。主演は三上寛。久しぶりに会った。彼は元楯の会の阿部勉氏とも親友だった。東北出身者は、皆、朴訥で信用できる。と、皆、言ってる。

【お知らせ】

(1) 8月4日(金) 「CIRCUS」（8月号・KKベストセラーズ）発売。あの未解決事件について私は喋った。ちょっと喋り過ぎたかな。そこまで言って委員会だな。

(2) 8月5日(木) 7:00p.m. 池袋ジュンク堂。森達也さん（映画監督）とトーク。4階の喫茶室で。「近代天皇制と愛国心」。

(3)8月6日(土) ロフト。午後7時。沢口ともみさん追悼ライブ。第三部では塩見孝也さんと私の「愛国心トーク」をやる予定です。塩見さんは藤原正彦の『国家の品格』（新潮新書）を読んで、いたく感激。国家と祖国愛について語りたいたいという。「藤原さんの本はいい。それに比べたら、鈴木君の本はグッと落ちるけど。まあ、取り上げてやるよ」とのこと。温かいお言葉で涙が出ますだ。將軍さま。

(4)9月10日(月) 午後1時。ネーキッド・ロフト。大浦信行監督の映画「9・11～8・15。日本心中」の上映記念トーク。私も出ます。

(5)9月15日(金) 午後7時。社民党の保坂展人さんと私のトークです。「愛国心」について。

【さらにお知らせ】

(1)「週刊金曜日」（7月14日号）に載ってました。7月9日(日)のポレポレ東中野のトークが。「日韓共同映画封切り。主演者ら語る」と。写真も大きく出てました。なごやかに、かつ真剣に、熱く語っている様子がよく出ています。「あんにょん・サヨナラ」のイ・ヒジャさん、高橋哲哉さん（東大教授）、そして私です。

(2)『1分でわかる！ キーワード辞典。くるダス』（アスコム・1000円）が送られてきました。「アホでもわかるニュースのアンチョコや！」と、やしきたかじんは言ってます。「私をはじめ66名の専門家が本質だけをズバッと解説！」と三宅久之さんも書いてます。政治、経済、社会、文化…と、あらゆるテーマを完全網羅。凄い本だな。面白いと思って、読みふけていたら、何と、私が出ていた。「あっ！そうか。あの時取材されたんだった」と思い出しました。ありがたいですね。こんな豪華な、カラフルな本に、一緒に出して頂けて。かなり売れてるそうです。

私は「ナショナリズム。どんな風潮がくる?!」を喋ってます。

元気な「右」と消えかける「左」

日本一の愛国者、鈴木邦男さんに聞く！

と出ています。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

2005年 2006年

ページデザイン / 丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)
[2006年](#)

今週の主張 7月31日 「ゴルゴ13」は私です。いえ、「ゴルゴ13」は私の教科書です

(1)だから〈革命〉だって言ってるんじゃ。「アエラ」も「朝日ジャーナル」に戻れ！

これは〈大事件〉ですよ。だって、「アエラ」（朝日新聞社・7月24日号）の「現代の肖像」が何と、「ゴルゴ13」を取り上げてるんですよ。職業も「スナイパー」と書かれている。狙撃手、つまり殺し屋ですよ。

朝日新聞がこんなことをしていいの？と驚くような企画です。「現代の肖像」は、今、最も注目されている人間を取り上げている。政治家、作家、俳優、スポーツ選手…と。ここに載りたいために必死で画策している人も多くいると聞きます。日本だけでなく、世界の〈ビッグ〉が登場します。

ところが、ゴルゴ13は、実在の人物ではありません。劇画の主人公です。フィクションです。そんな人物を「現代の肖像」に取り上げるなんて、「アエラ」は凄い。その辺の保守派雑誌などでは思いもつかないでせう。さすがは、〈革新〉雑誌です。「革新とはこういうことよ」と保守派雑誌に教えてくれてます。快挙です。革命です。

そんな革命的企画に私も参加し、コメントを喋らせてもらいました。幸せです。「アエラ」では、こう前書きしています。

〈「超A級の腕が抱える原罪と公平中立。

国情にもイデオロギーにも一切左右されず、「仕事」をまっとうする。

この腕は正確無比。どんな状況であれ沈着冷静。そして神出鬼没。

40年近く劇画界に君臨する男。デューク東郷が背負ったものとは何か。〉

連載が「40年近く」続いている。凄い。1968年11月28日、ゴルゴは「ビッグコミック」（1969年新年号）で初めて登場した。この時は、まだ三島由紀夫も生きていた。私は学生運動をやっていた。昔々だ。それから38年。この連載は続いていた。全ては変わり、全ては死滅したのに、ゴルゴだけは〈不滅〉だ。生き続け、闘い続けている。「ゴルゴ13」がスタートした1968年は、「あしたのジョー」の連載が始まった年でもある。しかし、もう、ジョーはいない。とっくの昔の話だ。「われわれは“あしたのジョー”である」といって北朝鮮に飛び立った「よど号」グループも今や、忘れられている。世界革命の夢もしぼんだ。「何年刑務所に入ってもいいから日本に帰りたい」などと望郷の念を語っている。ゴルゴだけが闘っている。



連載は休みなく続き、それこそゴルゴのように正確に、そして、ノルマをこなすように持続している。今年の7月で、何と556話だという。

今から6年前の2000年に、「連載400回」を記念して、オフィ

シャル解説本『THEゴルゴ学』（小学館・1800円）が刊行された。ともかく詳しい本だ。巻末に「ゴルゴ13」の作者・さいとうたかをのロングインタビューが載っている。光栄にも私がインタビュアーに抜擢された。嬉しかった。〈男にとって必要なことは全て、「ゴルゴ13」から学んだ〉という私の言葉も、本の裏表紙には書かれている。この40年間は、私の支えは「ゴルゴ13」でしたね。

だから、「アエラ」でも、私は取材されましたよ。最もゴルゴに心酔し、ゴルゴを生きる支えにしてきたんですから。

「ゴルゴ13」は別に、「正義の味方」ではない。冷酷な殺し屋だ。でも、かえって「正義の味方」は、時代に合わせ、時代の要請に合わせて、コロコロ変わる。時代によって「正義」も変わるからだ。その点、「ゴルゴ13」は不変だ。どんな時代でも、どんな環境でも通じる〈男の生き方〉を教えている。「アエラ」から、少々、紹介する。私のコメントも出てくる。



〈生みの親である作者のさいとうたかをでさえ、はたして読者が「職業暗殺者」の物語を受け入れるものかどうか、危惧したくらいである。

「いくら大人向けといっても、正直、不安でした。でも読み方によっては、ゴルゴが正義の味方に見えるような中途半

端な描き方はあえてしませんでした」

読者は圧倒的にこの作品を支持した。長年の愛読者である「一水会」元代表の鈴木邦男は、「ゴルゴの影響は左右の学生運動にも深く及んでいた、と回想する。

「事にあたっての心構えや、極限での覚悟、その手本をゴルゴは日本人に教えてきたと思う」

学生時代から非合法闘争をしていた鈴木は、三島由紀夫や友人の見沢知廉のように命をやりとりする時が自分にも来ると腹をくくる一方で、「そのとき自分はゴルゴのように動揺せずにやり遂げられるだろうか？」と繰り返し反問していたというのだ。

「それに僕たちの世代では、ゴルゴで国際政治や社会の別の側面を知った人はかなり多いはず。漫画で学んだと言うのは恥ずかしいから隠しているだけです」

だが、内部対立で殺害を繰り返した連合赤軍や、「我々はあしたのジョーである」と高らかに宣言して北朝鮮に飛び立ち、やがて日本人拉致事件に関わる「よど号」メンバーのように自壊することなく、ゴルゴだけは冷戦を超えて劇画界の頂点に君臨し続けたのである〉

(2)私もプロになりたい。「けだもの！」と言われてみたい

ゴルゴのファンは実に多い。外相の麻生太郎も熱心な読者で、国会答弁でも、ゴルゴを例にとって答えたこともある。又、「インサイダー」編集長の高野孟もそうだ。なんせ、『ゴルゴ13. 世界情勢。裏ナビ』（小学館）という本の監修者でもある。「誰の側にも与（くみ）しない、非常にクールなプロフェッショナリズムは、日本社会に一番欠けていることですから」と言う。

しかし、ゴルゴのような〈完璧な男〉はいない。狙撃を完全にやり遂げ、逃げ切る男はいない。又、どんな時も、動揺しない。「あれだけの人を殺し

続けていながら、なぜ超然としているのか」。それは、最大の謎だ。それに対し、勝谷誠彦（コラムニスト）は「アエラ」で、こう答えている。

「彼の倫理観にはいささかの揺らぎもありません。コレが一番大切なことで、日本人はコロコロと立場をかえることを非常に嫌うのですが、ゴルゴには揺らぎがないから何をしても不快感を与えないのですよ」

「ゴルゴのやっていることは、一種の個人的独裁ではあるのだけれど、独裁といえども非常に公平に統治がなされれば、それは理想の統治形態としてうまく機能するのです」

なかなか深い読みをしている。「揺らぎがないし」「公平」なのか。そういえば、ゴルゴは殺しの仕事をしながら、野鳥の卵を踏まないように走ったりする。これは、あらゆる生命の去就に関わらないというルールを無意識に備えているのではないかと、「アエラ」で杉森昌武は書いている。なるほど。哲学的信念だ。

「言い方を変えると、人間を含めてあらゆる種類の生命の価値の違いはなく、運命に従って生も死も受容すべきだという倫理観がゴルゴにはあるといえる」。

うーん、凄い。こうなると、宗教だ。「ゴルゴ教」だ。
そして再び勝谷の発言が続く。

「ゴルゴこそ日本国憲法そのままの、9条の非武装を除いたような存在ですよ。だって、どこか一方の側に与せず孤高に生きていく道をゴルゴは選んでいるじゃないですか」



他にも、「アエラ」では、いろんな人が出て、ゴルゴを熱く語っている。『THEゴルゴ学』の方では、格闘家の鈴木みのるが、ゴルゴの闘い方は一番理想的だと喋っている。素手で殴って手を傷めたりしない。必ず、肘や膝を使って倒している。骨法道場の堀辺正史先生は、「ゴルゴを倒すには金的攻撃しかない」と語っている。みんな、熱くなって語っている。だったら、一度、朝生でやったらいい。「朝まで生ゴルゴ」だ。この男ほど、日本を代表し、日本を背負って闘っている男はい

ない。この男を見ながら日本の男は生きてきた。闘ってきた。

ゴルゴは、40年も闘い続けているんだから、若く見積もっても今は50代後半だ。あるいは60過ぎなのか。それにしても、たいしたもんだ。男の教科書ですよ。あこがれですよ。最強だし、精神力も強靱だ。性的にも強靱だ。〈仕事〉の前には必ず女を抱く。女をヒーヒー言わせる。いいですねー。「けだもの！」なんて言われてみたい。我々、「ミッション・インポ」世代では夢のまた夢の話だ。それも含めて、ゴルゴは男のあこがれだ。バイブルだ。

私も、いつかはゴルゴのようなスナイパーになりたいと本当に思った。「よど号」の田中義三さんの裁判でタイに行った時は、一日で300発以上、銃を撃って練習した。5回行ったから、1500発は実弾を撃っている。ほとんど命中している。人の形をした「ターゲット」を的にして撃つ。自分の撃った「ターゲット」をもらってきたから本当だ。ピストルは反動があるから、外らすことがあるが、銃は精神を統一すれば百発百中だ。私には〈才能〉があるようだ。でも、まだ生きた的は撃ってない。

「アエラ」に出てくる人達は、もっともっと話をしたのだろう。ゴルゴについては話が尽きない。私もそうだが他の人たちも同じようだ。「男のあこがれ」だし、皆、いくらでも話せる。だから、残念ながら大部分はカットされたんだろう。

ゴルゴに終わりが来るのか。あるいは作者のさいとうたかをが死んでも、ゴルゴは生き続けるのか。どちらにしる、ゴルゴは世界を股にかけて、日本人を代表し、闘っている。唯一人、〈戦争〉をしている。だから、もし、ゴルゴが死ぬことがあったら、それは、戦後唯一の「名誉ある戦死」だ。当然、靖国神社に祀られるべきだろう。国葬にして、1週間は国民は喪に服するべきだろう。

私はそんな話もしたが、カットされちゃった。それと、赤報隊がらみの話をしたら、これもカットされた。朝日の「アエラ」で赤報隊のことを喋っちゃいけなかったのかな、と思った。

私は今まで、いろんな人々を見ている。「殺人者」だけで30人以上の人と会っている。昔のテロリストがいる。戦後のテロリストがいる。左翼の内ゲバで殺した人がある。右翼の「スパイ粛清」で殺した人がある。パリで女性を殺して食った人がある。元警部で強盗殺人をした人もいる。集団で襲って、勢いで3人殺した人もいる。

うん、こう見てくると、30人じゃきかないのかもしれない。もっと多くの〈殺人者〉を知っている。なかには、「俺はゴルゴ13だ」と言う人もいる。彼のことは、「夕刻のコペルニクス」に書いたので、興味のある人は読んでみんしゃい。

(3)ゴルゴを目指しながら、皆斃れた。そう、あの男を除いては…

でも、我々凡人にとって、なかなか、殺人は出来るもんじゃない。それ以上に、「逃げ切る事」は難しい。激情にかられて殺人をしたら、ほとんどが捕まる。完全犯罪を狙ってやっても捕まる。日本の警察は優秀だから、甘く見てはいけな。だって、元警部が何人も捕まっている。警察にいたんだから、いくらでも〈迷宮〉にする方法は知ってると思うが、出来ないのだ。明日までにサラ金の金を返さなくては…とって、切羽詰まった中でやる。だからダメなのだ。

じっくり計画を立てて、金も使って準備しなくてはならない。そんな余裕のない人間は、犯罪をおかす資格はない。追いつめられて、切羽詰まってやった犯罪は、かわいそうだが、「美しくない」。「弁護士費用も払えないような奴は、大体、犯罪をおかす資格はない」と三島由紀夫は何かの小説に書いていた。けだし、名言だ。だから、皆も、犯罪はやめた方がいい。

右翼のテロリストは、逃げることを考えてない。その場で捕まっていっている。あるいは、自決する。他の〈殺人者〉も、殺すことに全力を使い果たし、その後のことを考えてない。ゴルゴ13のように、まず「逃げ道」を確保した上で、殺しを実行する人はいない。

「殺し」までは全く動揺せずに、完璧にやる人はいる。見沢氏なんかもそうだ。実に冷静だ。時には冷酷だ。そのあと彼は「逃げる」と言った。だから、僕らは協力した。彼ならやれるだろうと思った。しかし、ムリだった。「埋め直し」の共犯者も捕まった。その点では、「アマチュア」だった。いや、〈人間的〉だったというべきかもしれない。

その点、「逃げ道」を確保した上で殺しをやり、実際に悠々と逃げおおせたのは赤報隊しかいない。殺人のあとも、名古屋、静岡の朝日支局を襲っている。全く〈揺るぎ〉がない。〈ブレ〉がない。こういう男こそゴルゴ13だと思った。

8月5日発売の「CIRCUS」でも書いたが、凄い男だ。殺人の技術だけでなく、襲撃、脅迫、そして逃走、変装を含めて、あらゆる点で「プロ」だ。

一体、どこでこんな技術を学んだんだろう。

まさか陸軍中野学校にいたわけじゃないだろう。年齢が合わない。ともかく不思議だった。疑問だった。会った時に聞けばよかったと思ったが、余り、知りたがっては、こちらがヤバくなる。そう思って自制心が働いた。さらに、もう何人か、「凄い男」はいる。いつか、書いてみたい。

その点、私なんて、単なる傍観者ですからね。情けない話だ。「老後はゴルゴ13のような立派な殺し屋になりたい」と思いながら、そのうち体がきかなくなって、朽ちて死んでしまうんでせう。淋しいです。

(注) 実はこれは先週書いたのです。でも、「富田メモ」が出たので急遽、差し替えました。だから、ちょっと古いところがあるかもしれません。

【先週の続き】

僕らが学生のころ、右翼学生の中に、「天皇アナーキズム」「スメラギ・アナーキズム」という言葉が一時、はやりました。今、考えると左翼の影響かもしれません。天皇制の下の階級とか、官僚機構などは一切認めないという思想です。革命前のフランスでは王の下に、僧侶とか貴族とかの階級がピラミッドのように、ガッチリと築かれている。日本はそうであってはならない。日本はピラミッドではなく、むしろ「円」だ。中心に天皇がいる。権力・権威はその中心点（天皇）だけあればいい。あとは自由だ。アナーキーだ。中心点以外のいかなる階層も階級も認めない。そういう威勢のいい理論だった。

もう一つ、天皇について、ザインとゾルレンという言い方をした。ドイツ語で、ザインとは「存在」「現実」のことで、ゾルレンというのは「当為」「あるべき姿」「理想」「理念」ということだ。

民族派学生のくせに、こんな難かしいことを言った。つまり、我々が護るのは「ゾルレンとしての天皇」であって、「ザインとしての天皇」ではない。ゾルレンのためならザインなど殺してもいいのだ！と言っていた。

かなり乱暴な話だ。学生の書生論と笑ってしまえばそれまでだ。しかし、それは形をかえ、今も生きている。

天皇のどの面がザインで、どの面がゾルレンか分からない。「富田メモ」は天皇の個人的発言であり、公式発言ではない。だから無視しろ、という人々が多い。小泉首相は、「これには全く影響されません。靖国に行くのも自由、行かないのも自由。各人の勝手です」と言っている。「人生いろいろ、

参拝もいろいろ」と言うことか。でも、だったら天皇の発言も、「一億人のうちの一つ」にしかならない。これはおかしい。サンプロで田原さんもそう言っていた。これは賛成だ。「いや、天皇の個人的発言だから影響されてはならない」と小泉さんは言うのだろう。

では、「公式発言」なら全て認めてきたのか。違う。公的発言、公的行動でも「おかしい」「政治利用だ」と言われたことは多くある。今の天皇陛下が、「日本国憲法を守り」と言われた時だ。僕は陛下の本心だと思う。しかし、「政府が言わせたのだ。政治利用だ」と言う人が多くいた。又、天皇陛下が中国に行かれた時、これも「政治利用だ」と言われた。「天皇訪中反対！」というビラも電柱に貼られていた。右翼のポスターだ。天皇陛下を騙して中国に行かせ、政治利用している。という意味だ。しかし、「天皇訪中反対！」では天皇制そのものに反対してるようにも思える。

さらに、皇太子さまが、イギリス留学から帰ってきた時、「警備が厳しすぎる」と言われた。しかし、その後、その点が改善されたという話も聞かない。

「公的発言」でも自分たちの気にくわなければ、反対している。天皇に反対とは言えないから、「政治利用」反対といっているだけだ。皇太子さまが雅子さまのバッシングにたまりかねて記者会見をすると、「そんな個人的なことを言うべきじゃない」とう人がいた。中には保守派雑誌に、「皇太子殿下に諫言する」という文を書いた大学教授までいた。ひどい話だ。自分のことは棚に上げて、そんなことを言える資格のある人間なんていやしない。

つまり、「公的発言」や「公的行動」だって、自分の気にくわないものは、「政治利用されてる」と片付けようとする。これでは天皇を守るのではなく、天皇発言の部分でいいところを「つまみ食い」してるだけだ。つまり、自分がかわいいだけだ。これでいいのだろうか。

ましてや、天皇の「私的発言」に至っては、「そんなものは取り上げるな」「もともと、発表する予定のないものだ。発表した人間が悪い」と言われちゃう。

しかし、「天皇独白録」だって、出しちゃいけないものだろうが、出てきた。天皇はかなり激しい事を言ってるし、感情的な発言もしている。出てきた以上、それを踏まえて論議せざるをえない。又、マッカーサーと天皇の会見だって、オフレコだった。「発表しない」前提で行なわれた。しかし、マッカーサーは自分の本で書いた。天皇は、「自分の身はどうなってもいい

から、国民を助けてくれ」「戦争犯罪人といわれているが、日本から見ると功労者だ」と言った。

マッカーサーの本だって、〈暴露〉だ。富田メモや独白録と変わらない。天皇の私的な会話を、「発表しない」という条件を無視して、自分の本で公表した。

だが、「さすがは天皇だ」「だから天皇制は必要なんだ」と皆で「政治利用」したのではないか。僕だって、左翼との論争の時、何度も何度も引用した。

結論を言うと、天皇の発言は公的であれ、私的であれ、重いものだ。「気に入らない天皇発言は認めない」というのなら、それは天皇制を支持してないことだ。自分に都合のいい部分だけを支持するのでは、「自分を支持」しているだけじゃないのか。

このままでは天皇は何も言えなくなる。日本一、言論の不自由な人だ。僕は何でも言ってもらっていいと思う。時には感情的になり、怒りの発言もあるだろう。でも、その方がいい。それでこそ天皇制だと思う。

小泉さんも、「個人の自由だ。勝手だ」と言うが、天皇発言を無視している。どうしても参拝するなら、「天皇陛下に申しわけないし、陛下のご遺志に反して行きますが、今はこれしか方法がないのです」と、きちんと陛下に謝罪してから行くべきだ。それに、英霊は「東条首相万歳！」と言って死んだ人は一人もいない。「天皇陛下万歳！」と言って死んだ。だから、天皇には参拝してほしいのだ。だから戦後8回も参拝している。それを中断させたのは〈政治〉だ。

なにも、すぐに「A級戦犯を分祀しろ」と言ってるのではない。これは又、別に論じたらいい。ただ、天皇発言は、たとえどんなケースでも、重くとらえるべきだと思う。天皇発言を聞いて、「その通りにします」と思う人も多いし、又、時には、「お上、それは違います」と諫言する人があってもいい。昔の宮内大臣、侍従長には、そうしたサムライがいた。

明治天皇の若い時は、かなり軟弱だったという。夜な夜な女官の所に行っては遊んでばかりいた。侍従だった山岡鉄舟は廊下で待ち伏せて、いきなり天皇を柔（やわら）の技で投げ飛ばした。「余は天皇だ」「そんな軟弱な人は天皇のはずがありません」

それで天皇も反省し、雄々しい君主になった。随分荒っぽい君主教育だし、皇帝学だ。山岡だって、いつでも腹を切る覚悟があった。だからこそ出来たことだ。

しかし、最近はこうしたサムライはいない。宮内庁長官も侍従長も、他の官庁から回ってくる。在任期間も短い。これでは、命をかけてといった覚悟も生まれない。

「EX大衆」（8月号）では靖国特集をしている。7月15日の発売だ。「富田メモ」など出るずっと前だ。しかし僕は、言っている。「天皇陛下は、A級戦犯が合祀されるようになってからは靖国神社に参拝していないらしいですよ」

のっけからこう言っている。何も僕が先見の明があるというわけじゃなく、広く伝わっていた「話」だった。ただ、証拠はなかった。保守派の人は「そんなことはありえない」「それが正当だと言うのなら証拠を出してみろ！」と息巻いていた。でも、証拠があったんだ。「やっぱり」と思った人は多い。

「噂」や「話」だけが流布され、あとで「やっぱり」と分かったことは多い。美智子さまが「いじめ」に会っていると報じられた時も、保守派の人々は「そんなはずはない。反天皇論者の謀略だ」と言ってきた。しかし、本当だった。雅子さまだって、大変なご苦労をされた。宮中だって、人間の集まる場所なのだ。美智子さまが皇室に入られた時、「これで日本は終わりだ」と嘆いた皇族もいた。そんな中に入ってゆかれたのだ。大変なご苦労だったと思う。

三島が自決した時、これは天皇への「諫死だ」と言う人がいた。天皇をいさめるために死んだのだと。三島は確かに、2・26事件の時の天皇発言を批判している。「人間宣言」も批判している。小説『英霊の声』の中でだが、ゾルレンの天皇を求めたのに、ザインとしての天皇は、忠良な臣や英霊を裏切ったと言ったのだ。2・26事件で刑死した磯部浅一は、もっと露骨に天皇批判をしている。「何というご失政ですか。皇祖皇宗におあやまりなされませ」と言っている。天皇に「あやまれ！」と言ってるのだ。

三島も、その絶叫に動かされて『英霊の声』を書いた。その後、自決の前に書いた「豊饒の海」第2部の「奔馬」では、無死無心の「恋けつの情」を言っている。「恋けつ」とは、天皇に熱い握りめしを差し上げることだ。

「そんなものを食えるか」と拒絶されたら腹を切ればいい。逆に、受けとって食べて下さっても、「おそれ多いことだ」と腹を切る。それこそが純心な天皇信仰だと。そこまで三島も精神が高まったのだろう。

昔、末松太平さんに会って話を聞いた。2・26事件の関係者で、数少ない

生き残りだ。「磯部の日記は凄いですね。天皇への恨みつらみが、ここまで出るなんて…」と聞いた。そしたら、「別に天皇批判じゃないよ、あんなもの」と言う。「お母ちゃんのバカ、バカ！とって胸の中で泣いてる子供のようなんだ」という。

これには驚いた。凄い達観だ。歴史の大きな波から見ているのだ。たしかに、流血の事件で、残酷な事件だ。重臣を殺され天皇も激怒した。「そんな激怒は人間的感情で、君主としては示すべきでない」という人もいる。しかし、それは違うだろう。あらゆることを含めて、天皇制を守るかどうか問われている。磯部だって、今では三島のいう「熱い握り飯」の境地に入っているのではないか。あるいは最も、天皇のことを考えて行動した人々かもしれない。だったら、靖国神社にお祀りしてあげたらいい。

「そんな個人的感情をする天皇なら、もういない」と言う人もいるだろう。「天皇抜きナショナリズム」だって、あるかもしれない。実際、「アエラ」（7月31日号）の特集「天皇vs小泉劇場」は興味深かった。宮崎哲哉氏は言う。

「このメモが本物なら、ナショナリズムと天皇主義の間に亀裂を入れることになるかもしれませんよ」

それはあるかもしれない。あっていいだろう。皆で論じたらいい。僕はこう思う。たとえ、ナショナリズムの高揚に〈邪魔〉になっても天皇制は必要だと思う。何も、中国や韓国になめられない為に天皇制はあるわけじゃない。又、北朝鮮をやっつけるために天皇制はあるわけじゃない。天皇の前には自由主義国も、共産主義国もないんだ。中国にも行かれた。ロシアや北朝鮮にだって、「行って下さい」と言ったら、行かれるだろう。「いや、そんな軟弱な、ポリシーのない天皇ならいない」と言うのなら、「天皇制はいらない」とはっきり言ったらいい。

時には軟弱に、時には、怒り、人間的感情も出しながら、それでも天皇には自由に発言してほしいと思うし、それは大きな目で見て、日本の将来にとってプラスだと思う。

「アエラ」の中で、櫻井よし子さんはこう言う。「天皇陛下の発言を政治的に利用する前例をつくれれば、泥沼にはまる可能性がある」

小林よしのりさんになると、もっと凄いことを言う。

「陛下がこう言っておられるからその御心にひれ伏せ、ではまるで戦前回

帰で一番危険な思想。わしは天皇制は支持するけど、天皇を個人崇拜はせん」

よく、ここまで言い切ったと思う。最も、急進的だ。さらに言う。

「だいたい天皇の私的な言葉が影響力を持つのは問題。もし、今後の世論調査で靖国参拝に慎重な意見が高まったとしたら、わしに言わせりゃ日本人は天皇が大好きな右翼的な国民だというまでだな」

いや、よくも言ったりだ。どんどん論議しませう。「わしズム」で又、特集の座談会をやったらいい。では又、この問題については考えてみましょう。

【だいありー】

(1) 7月24日(月) 2:30p.m.から、「創」の緊急鼎談。8月4日から上映される衝撃の天皇映画「太陽」(ソクーロフ監督)についてだ。この映画に侍従長役で出た佐野史郎さん、森達也さん(映画監督)、そして私。翌日にはゲラが出て、校了という慌ただしさだ。でも、撮影中の貴重な話も聞けたし、勉強になった。楽しかった。8月7日発表の「創」じゃけん。読んで下さい。

(2) 7月25日(火) 又もやカゼをひいてしまった。だらしが無い。能力以上の仕事を引き受けてるせいかもしれない。いかな。午後2時から元日本共産党のNo.4の筆坂秀世さんと対談。カゼで熱があったが、そんなこと忘れて語り合った。実に楽しい2時間だった。憲法改正問題を中心に、国家、組織、革命について話す。月刊「旬なテーマ」(中経出版)だ。

筆坂さんは著書『日本共産党』(新潮新書)が売れに売れている。僕の『愛国者は信用できるか』を読んでくれて、そこから対談はスタートした。『旬なテーマ』は8月10日の発売だそうだ。

(3) 7月26日(水) 熱があるのに、図書館、ビデオ屋に返しに行った。7時から、維新の党「新風」躍進の集い。はあといん乃木坂(旧健保会館)で。学生時代に生活していた「生長の家学生道場」のすぐ向かい側にある。ここの食堂には食べにきたことがあった、と昔を思い出した。「新風」躍進会では、東条由布子さん(東条英機のお孫さん)と会った。「あら、こんな所にも出席するの」と言われた。ロフトで二回会ってるから、左翼と思われてたのかな。「新風」代表の魚谷哲央さんとは学生時代から同志ですよ。と、私

の運動のルーツの話をしました。8月7日(月)の「TVタックル」に出ると言っていました。見て下さい。

又、岡留安則さんの『噂の真相おかわり!』（講談社）が出ました。私も出ております。面白いです。読んでみて下さい。

(4)7月27日(木) 11時。三島事件とその頃の民族派学生運動について新聞記者に取材される。その頃の話なんて記事になるのだろうか。でも、ありがたい。

この日の朝日新聞にソクーロフ監督の映画「太陽」について書かれていた。「終戦前後描く映画『太陽』来月公開。『人間天皇』想像交え造形」と。僕のコメントも紹介されていた。

(5)7月28日(金) 朝8時の新幹線で名古屋に。拘置所の小林正人君（死刑囚）の面会に行く。すぐに大阪に。よみうりテレビの「たかじんのそこまで言って委員会」に出る。さらに飛行機で東京に戻り、「朝まで生テレビ」に出る。私にとってはこれは〈大事件〉でした。こんなハードな日程は初めてです。

【お知らせ】

(1)7月31日(月) 「Dynamism! vol7」として『格闘家アウトロー伝説』（芸文社）が出ます。私も書いてます。

(2)8月4日(金)「CIRCUS」（8月号・KKベストセラーズ）発売。あの赤報隊事件について私は喋ってます。

(3)8月5日(土) 7:00P.M. 池袋ジュンク堂。森達也さん（映画監督）とトーク。4階の喫茶室で。「近代天皇制と愛国心」

(4)8月6日(日) ロフト。午後7時。沢口ともみさん追悼ライブ。第3部で塩見孝也さんと私のトークがあります。「愛国心について」

(5)8月7日(月) 月刊「創」発売。連載では慶応大学での講演会。ポレポレ東中野のトークの報告をしています。又、佐野史郎、森達也、そして私の鼎談も載ってます。

(6)8月10日(木) 「Quick Japan」（9月号）発売。特集が、「日本をよくするための40の法律」。私も書いてます。ある「法律」を提案しています。

(7) 8月10日(月) 『旬なテーマ』 (9月号。中経出版) 発売。元日本共産党のNo.4、筆坂秀世さんと私の対談が載ってます。

(8) 8月11日(火) 「月刊タイムス」 (9月号) 発売。見沢知廉氏と赤報隊を結ぶ糸、そして野村秋介氏について書きました。

(9) 9月10日(月) 午後1時、ネーキッド・ロフト。大浦信行監督の映画「9・11～8・15。日本心中」の上映記念トーク。私も出ます。

(10) 9月15日(金) 午後7時。ネーキッド・ロフト。社民党の保坂展人さんと私のトークです。「愛国心」についてです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)
[2006年](#)

今週の主張 8月7日 「ミッション・インポシブル」な一日でしたよ。7月 28日は

(1) 肉体君と心君の内ゲバで、熱が出てしもうた

そんなの無理だ！と叫びましたよ。1日のうちに名古屋で死刑囚に面会し、大阪でテレビに出て、その3時間後には東京に戻り「朝生」に出る。不可能だ。特に最後だよ。7月28日(金)の「朝まで生テレビ」を見た人は知っちよるだろうが、この日は収録だった。夜の8時半～11半だ。それをこのまま夜中の1時40分から放映した。

さて、その前には大阪よみうりテレビの「たかじんのそこまで言って委員会」に出るんだ。それが3時から5時半。つまり、大阪で5時半に終わって、その3時間後の8時半に東京の「朝生」に出る。こりゃーとても不可能だ。「ミッション・インポシブル」だ。3時間で大阪～東京間を移動できない。「無理ですよ。だから、出れません」と言った。「朝生」のオファーが来たのは7月24日(月)だった。その時、朝生のプロデューサーに言った。

「そうですか。残念ですね。じゃ次の機会にお願いします」とプロデューサーは言うのかと思った。ところが、思いがけないことを言う。「新幹線は無理でも飛行機がありますよ」。ゲツと思った。あんたは十津川警部かいな。「えーと、大阪の伊丹発6時半に乗ると羽田に7時40分に着きます。タクシーに乗ってもらえば8時半に間に合うでしょう」

バカな。間に合いっこないよ。大体、よみうりテレビを5時半に終わって、急いでタクシーに乗っても、6時半の飛行機に乗れるんだろうか。又、それが可能だとして、次は無理だ。インポシブルだ。羽田に7時40分に着いても、飛行機は着陸後、まだまだ滑走路を走り回り、乗客が降りるまでには

時間がかかる。そして、空港内を長々と歩き、出口にたどり着くのは早くて8時だろう。それからタクシーをひろって、六本木のテレ朝だ。30分じゃいかない。それに、金曜の夜だ。渋滞になったら、9時過ぎにテレ朝に着くだろう。あーあ、ダメだ、ダメだ。

でも、プロデューサーは落ちついている。こういう時のパネリストの宥(なだ)め方を知っているのだろう。「大丈夫ですよ。タクシーで40分あれば着きますから。万が一遅れても、駆け込みで入って下さい」。

でもな。「朝生」が始まって30分も1時間もたったあと、「すみません。遅れまして」なんて一人だけ入ってきたら格好悪いな。「なんだ偉そうに」「わざと遅れて目立とうとしてんじゃないか」とテレビを見ている人は思うだろうな。パネラーやスタッフもそう思う。「それまでして来る必要はねえだろう。お前なんか」と皆、思う。そんな視線に私は耐えられないよ。

「やっぱり無理ですよ、これは」と言ったが、プロデューサーに最後にダメ押しをされた。「『愛国者は信用できるか』を読みました。鈴木さんでないと書けないですね。天皇制、愛国心にあんな視点から迫るなんて、ビックリしました。だから今回も、『富田メモ』を中心に、天皇論を大いに喋ってもらいたいんですよ」

エッと思った。これは効きましたね。それに、オファーがあって断わったなんてバレたら大変だ。「なんだ。ロクに喋れないから断わったのか。臆病者め！」と言われる。「普段は“言論の覚悟”なんて言ってながら、逃げたのか。馬鹿野郎。卑怯者！」と言われるだろう。「お前の母ちゃん、デベソ」と言われるかもしれない。いや、子供の喧嘩じゃないから、それはないか。

分かった、分かった。分かりましたよ。出ますよ。「でも、きっと遅れますよ。途中から入りますよ」と念を押しておいた。まア、その時はその時、何も私のせいじゃない。と思いましたよ。

それに、たかじんの「委員会」も「朝生」も天皇問題だ。「富田メモ」をめぐる討論だ。気が重い。大体、皆で激論するテーマじゃないよ。一人か二人で、冷静に、じっくりと話すんなら分かる。とても多人数でワイワイがやがやと討論するテーマじゃない。それに、ゆっくり話せないから、「ちょっとだけ」話に割り込むことになる。それじゃ誤解される。何いってんだこの野郎は…となるだろう。思ってることをキチンと言えない。でも逃げたらアカン。

そう思って、悲壮な覚悟を固めましたよ。「言論の悲壮な覚悟」だ。自分

では、ふっ切れて、「どうとでもなれや」と思いながらも、まだ身体が100%は納得してなかったんでしょうね。「おいおい、やっぱり無理だよ」と「肉体」はクレームをつける。「しょうがないだろう。逃げちゃダメだよ」と「心」が主張する。二人の間で、闘いが続く。私は傍観者になって、ただ、オロオロと見ているだけ。

そしたら、肉体の方がレジスタンスに入った。月曜の夕方から、急に熱が出たのだ。子供の知恵熱のようなものかもしれん。「あたしゃ、やってられないよ。ストを起こすけんね。私は身体を守る義務がある」と肉体は言うてゐるんです。つまり、病気というのは、こういう理由・経過で起こるんです。

28日(金)は、やらにゃいけんけど、でも出来るのかな。行けるかな。行けても、遅れて入るのは恥ずかしいな…と、心の中でジクジクと思い、悩み、後悔してたんです。その心の乱れ、不安が肉体に現れて、病気になるんですな。

7月24日(月)は、「朝生」のことを聞いた日だ。このあと、「創」の緊急鼎談だった。佐野史郎さん、森達也さん、私だ。ソクーロフ監督の映画「ソイツェ」の話だ。神田のスタジオでやったんだが、場所がよく分からん。かなり探した。早く出てきたからよかったが、大変だった。やっと、探し当てて、間に合った。動揺している。だらしない男だな、と自分で自分を叱った。

家に帰って、たまってた原稿を必死に書く。

(2)不吉だな。これは「神のサイン」だろうか。心は千々に乱れちよる

次の日、25日(火)は、筆坂秀世さん（元日本共産党のNo.4）と対談。嬉しかった。よく引き受けてくれたと感謝した。又、こんな場をつくってくれた『旬なテーマ』に感謝した。実に楽しい対談だった。でも、熱があって、頭がガンガンする。「だから休めって言ったんだよ！」と肉体はクレームをつける。「バカ！こんなチャンスを逃したら、もうないぞ。死んでも出るよ。お前は俺の家来だろうが」と心が言う。「何言ってるんだ。俺の方が主人だ！お前なんかいなくても生きていけるが、俺なしではお前は生きていけないのだ！」と肉体が猛反撃をする。そのたびに熱が出る。

「まあまあ、二人とも喧嘩しないで…」と私は必死になだめる。頭が痛い。クーラーが寒い。腹が痛い。でも、話はスリリングだし、興味深かった。

「また、ぜひお会いしましょう」と言って別れた。本当に思った。熱烈に

思った。そしたら何と、3日後にその願いが叶った。やはり私の「念」は強いんだね。と自分でも驚いた。「だから、肉体君も協力してくれよ」と私は頼みました。

そうだ。肉体君にはご褒美をやるよ。週に一回、柔道に行って、暴れさせてやるよ。1日1万歩あるくよ。ストレッチもやるし、夜更かしはしないで、十分寝るようにするよ。まず肉体だよ。君のことは、本当に大事にすっからよ。酒も飲まないようにするし、体にいいものを食べるようにするよ。だから、機嫌を直してくれよ。

…と頼みました。「うーん、じゃ考えてみるかな」と肉体君は言いました。ありがとう、と私は感謝しました。贅沢だとは思いながら、タクシーで帰りました。肉体君は喜んでました。「キツイ時はケチケチしないで、タクシーでも何でも使えよ。お金がもったいないと言っても、肉体が一番もったいないだろう！」と肉体君に叱られました。「分かりました」と私は素直にうなずきました。でも、夜も又、仕事で、まだ頭は痛いし、寒気がする。

26日(水)、維新政党「新風」のパーティに行きました。帰りに、夜の乃木神社に行ってお参りしました。ここは昔、生長の家の学生道場にいた時、よく来ました。玉砂利の上に正座して、お祈りしました。「若さ」は何でも可能にするんですね。昔のことを思い出したら、力も湧き、カゼが治ったような気がしました。

27日(木) 11時、ジョナサンで新聞記者の取材を受けました。まだ熱があって、ボーッとしたまま喋ったような気がします。すみません。夕方、7時から一水会。他の仕事があり、二次会だけ参加。「富田メモ」について、皆はどう思ってるのかも聞きたかったし。しかし、二次会の場所が分からない。大体のところを教えてもらって、「分からなかったら携帯に電話して下さい」と言われてたが、通じない。一水会の人、何人にも電話したが皆、通じない。多分、地下なんだろう。事前にキチンと聞いておかない私がいけないのだ。それに公衆電話なんて、今時、あまりない。高田馬場を1時間以上探し歩いたが分かんない。仕方ないので、ルノアールで本を読んで、帰ってきた。「一水会30年史」にも記載される〈事件〉かもしれん。明日は、問題の日なのに。その前日、こんなことじゃ思いやられる。「もう、やめとけよ。ムリだよ」という神のサインなのだろうか。

「そうだよ。かまわないから、ドタキャンして、明日は、一日、寝てなよ」と肉体君は囁く。「そんなことしたら、もう誰もお前のことを使ってく

れないよ」「死んでも行くべきだ。たとえ、みやま山荘に戻ってこれなくても行けよ！」と心君は絶叫する。荒野で悪魔と闘うイエスのようだ。

家に帰って、原稿を書く。書くのが遅いから、どんどんたまる。それに、たかじん「委員会」の「回答」を必死で書く。この番組では4つか5つの「コーナー」があり、そのたびに、この問題についてパネラーはどう思うか、聞かれる。その「回答」を前日までに書いて送る。本番では、その〈回答〉が、隣のボードに出る。（電光掲示板だったかな）。

今回は、「富田メモをどう思いますか」「小泉首相の靖国参拝はどう思いますか」「靖国神社はどうしたらいいですか」「A級戦犯の合祀はどう思いますか」…と。かなり多い。大変だ。他にもやることがあって、3時過ぎに寝た。疲れているのに目がさえて、眠れん。自分の気持ちもコントロールできないようじゃ、世の中はこうしろ、ああしろなんて言えんと思った。少し、ウトウトとしてたら6時に目覚しのベルが鳴った。

28日(金)。7時に家を出て8時の新幹線に乗る。10時に名古屋に着き、拘置所へ。小林正人君(31才)に面会する。前々から決めてたので、急にやめるわけにはいかん。「カゼだから、やめて来週行くわ」と電話するわけにもいかん。拘置所は不便だ。それに、いくら体がキツイといっても、向こうは死刑囚だ。もっと大変だ。彼の苦勞を思ったら、こっちなんて遊んでるようなものだ。「やめようかな」と、一瞬たりとも考えた私が恥ずかしい。「ダメじゃないか。バカ」と叱ってやった。

小林正人君のことは、「創」(06年5月号)に書いた。12年前、まだ彼は未成年だった。悪い仲間と集団で遊んでいた時に、ささいなことから喧嘩して、仲間を殺した。さらに、他の地方へ逃げる途中で、又もや、通りすがりの人と喧嘩になり殺している。止める人もなく、集団の中で、意地と見栄の張り合いでエスカレートする。それで3人を殺してしまう。「大阪・長良川・木曾川事件」と呼ばれている。でも、実際は、ぽっちゃりとした色白の、かわいらしい青年だ。野村さんや僕の本を昔から読んでいて、右翼になりたかったという。だったら、もっと早く野村さんの所へ行けばよかった。残念だ。「月に最低10冊は本を読んでいます」という。いいことだ。「これから大阪でたかじんの番組に出るんだ」と言ったら、「たかじんは好きです」と言う。そして、たかじんのこの歌がいい、これもいい。…と、歌の話になった。たかじんの大ファンなんだ。

面会が終わって、名古屋駅に。新幹線で新大阪に行く。新幹線の中で弁当

を食べる。午後2時、よみうりテレビに着く。打ち合わせのあと、3時から5時半まで本番。今日、収録で、30日(日)に放映だ。

(3)大阪では三宅さんに怒鳴られたけど、無事終わった。次は「朝生」だ

今日のテーマは「富田メモ」をめぐって昭和天皇と靖国問題。それに、若者問題。誰が若者を甘やかしているのか。誰か、ガツンと言ってやる人間はいないのか。という特集だ。

ゲストは、靖国問題は大原康男さん。それに、若者の就職支援をしている神瀬邦久さん。司会は、やしきたかじん、辛坊治郎。

「そこまで言って委員」(つまり、パネラー)は次の8人。

三宅久之、勝谷誠彦、宮崎哲弥、橋下徹、桂ざこば(以上レギュラー)、筆坂秀世、山口もえ、私。

筆坂さんは3日前に会ったばかりだ。「又会いたいですね」と言ったら、「念」は通じ、実現したのだ。やはり、いい言葉を使うべきでしょうね。言葉には力がある。

「じゃ、筆坂さんにさっそく挨拶に行こう」と思ったら、向こうから来てくれた。「筆坂さんが一緒だと心強いですね。同志のようですね」と私は言いました。事実、そう思ったんです。筆坂さんは、少し前に、この番組に「ゲスト」として出たそうです。「でも、パネラーはきつそうですね」と言う。そうなんだ。皆がワーツと喋るから、なかなか、入ってゆけない。でも他人を怒鳴りつけて、無理に割り込むこともないだろう。出番が少なくとも自分の思っていることを言ったらいい。と言いました。

もえさんにも挨拶された。きれいな人だ。又、宮崎哲弥さんに挨拶したら、「鈴木さんもこのあと、朝生があるんでしょ。じゃ、一緒に行きましょう」と言う。「はい、ご一緒させて下さい」と言った。

しかし、宮崎さんは伊丹発6:00で、羽田着7:10の券を買ったという。僕よりも30分前だ。「でも、収録は5時半までですよ。30分じゃ伊丹に行けないでしょう」と言ったら、「もう少し早く終わるよ。鈴木さんもチケットを買い換えたらいい。6時半じゃ、朝生に絶対、間に合いませんよ」と言う。僕は、5時半に出て、途中から朝生に入ってもいいやと思ったが…。

そうこうしてるうちに本番は始まる。開始早々、三宅さんに怒鳴られた。私の本を持参していて、「このページのここは間違っている!」「愛国者だと聞いていたが、とんでもない!」「未熟だ!」と怒鳴られる。未熟なの

は自分でも知ってるので、ただただ、平身低頭して、謝り、聞いていました。しかし、あれだけ思い切って怒鳴れる人はいいいね…。うらやましい。僕なんて自分に自信がないせいか、あんなに熱くなれないし、怒鳴れない。

でも、学生時代は左翼学生を相手に熱くなって怒鳴ってたかな。そうだ。日比谷の野音の「個人情報保護法案」反対集会で左翼と喧嘩した時は熱くなってやり合ったな。「創」のタイトルに出てる写真だ。このHPにも載ってる。うん。。あの時は、熱くなって怒鳴ってたな。と思い出した。

大原さんも出てきて、かなり専門的な話になった。レギュラーの3人ばかりが喋っている。慣れているから、仲間だけでボールを回しっこしている。そして三宅さんが時々、怒鳴る。筆坂さんも、ざこばさんも、もえちゃんも喋れない。特に、ざこばさん、もえちゃんなんて一言も喋ってない。思い余って、「二人にも聞いてみたらどうですか」と私は言った。

「では、もえちゃん」と司会。「基礎的な質問でもいいですか」。「いいですよ」。そしたら何と、思いがけない質問。

「あの一。合祀って何ですか」。

もう1時間もずっと、A級戦犯の合祀問題をやってたんだ。「そんなのも知らんで出てたのか！」と普通なら怒鳴られる。「帰れ！」と言われる。でも美人は得やね。隣の勝谷さんがすかさず助け船。「それを分かって今まで聞いてたの。きつかったでしょうね」と、いたわる。大原さんも、「えー、合祀というのはですね」と、急に分かりやすく話す。

さらに激論は続き、普段は5時半まで収録があるのに何故か、5時10分で突如終わった。宮崎さんとスタッフの間で話し合いがあったのか、分からない。でも、早目に終わった。「放映は1時間半だから、十分に収録はとれますよ」と宮崎さんは言っていた。

それから二人でタクシーで伊丹へ。道がすいてて、6時に、悠々間に合う。しかし、空席はない。「やっぱり、6時半で私は行きます。遅れますと朝生の人に言って下さい」と私。「悪いね。じゃ」と宮崎さん。まア、これもドラマですよ。「ミッション・インポシブル」ですよ。

私は6時半、伊丹をたち、羽田に向かう。飛行機に乗るなんて久しぶりだな。窓から下を見てたら、人間がアリのように見える。そしたら通りかかったスチュワーデスが、「あれはアリです」。エッ?と思ったら、「だってまだ離陸してません」。

…という会話が交わされた気がした。オレってアホやな。それとも熱で頭

がポーズとしてたんで、もしかしたら、この会話は、昔、どっかの本で読んだ知識かもしれない。それを、あたかも実際に会話してるように思い出したのだ。メールやチャットばかりしてるから、現実とネットの区別がつかなくなった。いかな。バーチャン・リアリティだ。いや、ジーチャン・リアリティだ。

そんな妄想と雲の中を飛行機は飛ぶ。7時40分を少し過ぎて羽田に着く。しばらく飛行機は走り回る。やっと止まっても、すぐには降りられん。イライラする。降りて、走って出口に。タクシー乗場についた時は8時01分。8時半には朝生は始まるよ。とても無理だ。あーあ。30分位、遅れて入るのかな。格好悪いな。でも仕方ない。と思ってタクシーに乗った。ハラハラし通しだった。でも昔は、あの事件、この事件と、ヤバイことをやった。捕まったら死刑か無期か。あの非合法時代を考えたら、今は楽なもんだ。と自分に言い聞かせた。高速は、途中、渋滞してる。あーあ、ダメだよ、と思ったら、タクシーは高速を降りる。(かなり前だと思うが)。そして、一般道路を走る。ひた走る。そして何と、奇跡が起こった。テレ朝の正面玄関に着いたのが8時25分。局の人に案内されてスタジオに。打ち合わせは終わり、皆、スタジオの横に並んでいる。着席順に並んでいる。

「よく間に合いましたね」と局の人に声をかけられた。メイクの人が、あわただしく、顔をパタパタとたたいてくれる。「フーツ」と大きく息をついた。よかった。間に合った。

そこで奇妙なことに気がついた。宮崎さんがいない。「まだ来てませんよ」とスタッフ。僕よりも30分早い飛行機に乗ったのに。そして8時半。まだ来ない。始まる。司会が喋り出す。出演者が紹介され、歩いて行って着席する。その時になってやっと宮崎さんが、駆けつけた。「いやー、飛行機が遅れて…」でも、後で聞いたら、6時10分着のが、6時40分に着いた。僕より早く着いている。タクシーが渋滞に巻き込まれたのか。ともかく、奇妙な話だった。

よかった。よかった。間に合った。「ミッション・インポシブル」の使命も果たした。不可能を可能にした。いやー、奇跡だった。と安心した途端、どっと睡魔が襲ってきた。そんで、本番中、机に突っ伏して、グーグー寝てしまった。だから朝生では何も喋れなかった。

…なんてことはないよな。朝生で寝込む位の余裕があればいいやね。昔は、酒を飲んで、立ち上がり、グルグルとスタジオを歩き回ってた豪傑もい

た。酔って、スタッフに抱えられて客席した人もいた。でも、寝込んだ人は一人もいないね。

私は、寝込みはしないけど、やっぱり、あまり喋れなかった。話にひよいと入りこむのが難しい。未熟だ。でも、他にも喋れない人がいると、「あっ、いい人だな」と思ってしまう。人間の性格が出るよね。朝生を見てた人から次の日、電話があった。「姜尚中さんだけはカメラの移し方が違う」と。アップの仕方が違う。横から撮ったり、下から撮ったりする。いい男をさらにいい男に撮っている。そう言うのだ。

「鈴木さんや他の人が喋ってる時は、どうでもいいようだし。その人の顔を離れて、全体を撮ったりしている。でも、姜さんだけは違う」

気のせいだろう。そんな差別はしとらんやろう。と思ったが、思い出すと、たしかに姜さんが喋っている時は、カメラマンがフロアーに座り込んで、下から撮ってアップにしたりしている。他の人と声がかぶさっても、音声さんは姜さんの声をひろうようにしている。いや、そんな気がした。勿論、そんなことはしてないんでしょうが、我々の癖みですよ。それだけ姜さんはスターなんだよ。

そうそう。今回のテーマだ。「激論・昭和天皇と靖国問題」。パネラーは。

武見敬三（自民党）、山本一太（自民党）、細野豪志（民主党）、岡崎久彦、香山リカ、姜尚中、小森陽一、高橋紘、宮崎哲弥、八木秀次、私。

全部で11人だ。いつもより少ないのかもしれない。その分、少しは話しやすかったような気がした。それに、8時半～11時半に収録。夜中の1時40分からそのまま放映。だから、本番の時は、ギャラリーはいない。ガラス室に入った電話をかける女性もいない。ガラーンとした巨大な倉庫で、我々だけが討論しているようだ。朝生の出演はこれで9回目だ。こんな経験は初めてだ。それに、岡崎、武見、細野さんには初対面だ。多くの人に知り合えるというのはいいですね。これはありがたい。

朝生の内容についても触れようと思ったけど、長くなったので、又の機会にする。それに関心のある人はすでに見てるでしょうし。田原さんが言いましたが、天皇制、靖国…と、今まで、本音で語られなかった。これから大いに語る必要がある…と。その通りだと思いました。

終わって、姜さん、小森さん、宮崎さんたちといろいろ話しました。貴重

な示唆も受けました。これからも、もっと勉強し、考えていきたいと思いません。

ともかく、無事、みやま荘に辿り着き、本当にホッとしました。フロにも入らず、歯も磨かず、フトンもしかず、そのまま、倒れるように寝込んでしまいました。ご苦労さまでした。と、心君と肉体君に言ってあげました。横になったら、ボタンキューで寝た。目覚めたら、朝でした。チュンチュン、スズメが鳴いちよりました。でも東京ではスズメは絶滅したんだから、私の幻聴でしょう。ホッペには畳の跡がついていました。オワリ。

【だいありー】

(1) 7月30日(日) 「若冲と江戸絵画展」を見る。伊藤若冲（じゃくちゅう）の絵はいいね。凄い人出だった。上野の東京国立博物館・平成館。

(2) 7月31日(月) 昨日は伊藤若冲に会いに行ったが、今日は、テリー伊藤さんと対談。「アサヒ芸能」。午後3時45分から全日空ホテルで。天皇問題や愛国心について。テリーさんとは、かなり前に対談した。いや、塩見孝也さんと三人だったな。10年ほど前かもしれない。「又、三人でやりましようよ」と言っていた。

夜、7時から紀伊国屋ホール。佐藤優、宮崎学、魚住昭の話を聞きに行く。（優、学、昭と三人とも名前は一字だ。不思議だ）。会場は満員だった。佐藤優の話が特に面白かった。大川周明についての本を出してるが、今は、「血盟団」の井上日召に興味があると言っていた。その話を次は、じっくりと聞いてみたい。

(3) 8月1日(火) 家に閉じこもって原稿を書く。夜は柔道。

(4) 8月2日(水) 北芝健さんが「徹子の部屋」に出とったね。びっくり。

5時に、住宅産業研修財団の松田妙子さんと会う。木村三浩氏と共に。松田さんは、かつて、「楯の会」に対抗し、「横の会」をつくり、藤本敏夫、小林興起、私などを集めて月に一回、勉強会をしていた。凄い人です。久しぶりに会い、食事をご馳走になる。

その後、新宿に。桜マミさんの店に。昔、ロマンポルノの女優で、「新しい日本を創る青年集会」の山形会議にも一緒に行った。野村秋介さんの本にも出てくる「伝説の女性」だ。やはり、久しぶりに会う。

家に帰ったら、FAX、メール、留守電が一杯入ってた。「お誕生日おめで

とう」だって。やだな。忘れたいのに。それに、どうして個人情報、なぜ洩れるんだろう。不思議だ。

(5) 8月3日(木) 11時。「ダ・カーポ」の取材。北朝鮮問題。夕方、スポーツ会館に。肉体君に約束したので、体を解放し、体内の犬を解放してやる。犬は喜んで走り回っていた。

(6) 8月4日(金) 図書館。夜、柔道。

(7) 8月5日(土) 7時から、池袋のジュンク堂で森達也さんとトーク。会場が狭くて、かなり早く、電話予約が終了した。「電話したけど満員で断われた」という人がかなりおりました。申し訳ありませんでした。もう少し大きいところで、今度はやりませう。

(8) 8月6日(日) 7時から、沢口ともみさん追悼ライブ。沢口さんのビデオや、高橋伴明監督の「火火」ダイジェスト上映。そして沢口さんの人生を語る。私も出ました。

【お知らせ】

(1) 8月7日(月) 月刊「創」発売。私の連載では慶応大での講演報告。又、映画「太陽」をめぐり、佐野史郎、森達也さんと私の鼎談が載ってます。

(2) 8月10日(木) 「Quick Japan」(9月号) 発売。「日本をよくするための40の法律」について書いてます。

「旬なテーマ」(9月号・中経出版) 発売。元日本共産党員No.4の筆坂秀世さんと私の対談が載ってます。

(3) 9月10日(月) 午後1時。ネーキッド・ロフト。大浦信行監督の映画「9・11～8・15 日本心中」の上映記念トーク。私も出ます。

(4) 9月15日(金) 午後7時。ネーキッド・ロフト。社民党の保坂展人さんと私のトーク。「愛国心」についてです。

(5) 9月17日(日) 7時、ロフト。中野ジロー司会による「堀の中で懲りちゃった面々」。安部譲二、塩見孝也、蜷川正大、木村三浩、雨宮処凛など。私も出ます。

【お知らせ・追加】

今日、8月7日(月)発売の「週刊朝日」(8月18日・25日合併号)は靖国特集をしております。そして、木村三浩氏(一水会代表)が衝撃的論文を発表しています。

「エセ右翼・小泉純一郎に靖国参拝の資格なし!」

これは凄いですね。勇気をもった発言です。ぜひ読んでみて下さい。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン/丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年 2004年 2005年
2006年

今週の主張 8月14日 これぞ、アダルトで、革命的な勉強法ですよ！

(1)子供には読ませられん。大人だけの「和田式」だ

しかし、この人達は一体、いつ勉強するのだろうと思っていた。テレビに出まくっている評論家や学者やコメンテーターの人々だ。何を聞かれてもペラペラと喋る。政治問題も、スポーツも芸能も、犯罪も…。何でも知っている。こんなに忙しいのに、いつ本を読み、考えているのだろう。

ずっと疑問だった。「いや本なんか読まないさ。耳学問だよ」と言う人もいる。テレビの本番の直前に資料を渡されて、サッと目を通し、自分の考えをまとめる。あるいは秘書やブレーンが資料を読み、「こんなことを言ったらどうでしょうか」と箇条書きにして本人に渡す。まあ、そういう人もいるだろうが、それでは長続きしない。どこかで必ず化けの皮がはがれる。

頭の弱いタレントが、クイズの答を事前に教えてもらった。あまりに馬鹿だと思われちゃ恥ずかしいからだ。ところが、間違っ、次の問題の解答を言っちゃった。それでヤラセがバレた。そんな例はいつももある。だから、長く頑張っている人々は、それなりに苦労して勉強してるはずだ。しか、どこで、どうやって勉強するのか。

だって、一日の時間は皆、同じだ。それをやりくりするのだ。「新幹線など、移動の時間に勉強する」という人もいる。あるいは、ノートパソコンをいつも持っていて、疑問点はすぐに調べる。という人もいる。さらに、友人のネットワークを利用している人もいる。テレビに出ているうちに、いろんな専門分野の人と知り合う。分からないことは、そういう人に聞く。そして、さも「自分の考え」のように言う。中には、その「情報」にお金を払っている人もいる。

でも、それだけではないはずだ。こんなことでは、「表面的な知識」は増えても、本人の深い考えは出てこない。作れない。やはり、一人で考え、調べ、本を読む。そういう「孤独な営為」が必要なはずだ。それがなかったら、他人の心に伝わる思想など生まれない。

だから、きっと公言はしないけど、皆、密かに「孤独な時間」を作って勉強しているはずだ。そして、何かを捨てて、「自分の時間」を作っているはずだ。つまり、何かを犠牲にして、勉強する時間を作っているはずだ。

たとえば司馬遼太郎は、仕事人間で、マージャン、ゴルフなどの遊びは一切やらなかった。松本清張もそうだろう。あるいは、そんな遊びよりも、ものを書いて発表する方が楽しかったんだろう。仕事そのものが「大きな遊び」だったんだろう。

でも我々凡人にしたら、そんな境地にはなれない。一日は皆、24時間だ。その中で、寝なくちゃならんし、食わなくちゃならん。では、どこを切りつめ、どこを犠牲にして、勉強する時間を作るんだろう。分からない。

そう思い悩んでる時だった。精神科医の和田秀樹さんに会った。朝生などによく出ている童顔の人だ。ともかく頭のいい人だ。朝生のパーティだったと思う。「鈴木さんには会いたかったんですよ。生き方に興味があったんですよ」と言う。「えっ、犯罪心理学の対象として興味があったんですか」と聞いたら、「違いますよ」と言う。思想的、運動的に興味があったという。

別れてから、あっしまった！勉強法のことを聞けばよかった、と思った。だって、この人はとても頭がいい人だが、勉強家でもある。いろんな資格をとっている。又、勉強法の本をたくさん書いている。『新・受験勉強入門』『和田式・書きなぐりノート合格法』『新・赤本の使い方』『学力崩壊』…と、たくさん本がある。

でもそれは受験生のための本じゃないか、と思われるかもしれない。しかし、我々〈大人〉の為の本も書いている。そして、これは驚きだった。『大人のための勉強法』（PHP新書・660円）がある。さらに、その続編ともいえるべき、『大人のための勉強法・パワーアップ編』（PHP新書）がある。

特に、「パワーアップ編」ですね。「エッ、そうなのか！」「そこまでやっていいのか！」とビックリした。これは革命的な本だと思った。それに、今まで出ている全ての本は、要は「子供向け」の勉強法だ。この本だけが、本当の「大人のため」の勉強法だと思った。

子供は、夢がある。無限の夢がある。いい中学に行って、さらにいい高校、大学に行き、いい企業に勤め…と。夢だけは無限にある。そのために今は「勉強」する。ストイックに勉強する。時間だって無限にある。まわりの人々も理解がある。いくらでも、思うがままに勉強できる。勉強時間を邪魔する人はいない。敵は自分の「なまけ心」だけだ。それに打ち勝って勉強すればいい。

しかし、「大人」は違う。勤めている。家庭もある。そこでさらに勉強しよう。資格をとろうと思っても、まわりの人々は理解がない。そんなことやめる、という人も多い。又、教養をつけるために勉強しようと思っても、時間がない。土日に集中して本を読もうと思っても、家庭サービスがあって、ディズニーランドに行かなくちゃならん。こんなんじゃ、勉強もできん。

「勉強なんか必要ないでしょう。子供の時にやったんだから。これからは会社と家庭のことだけ考えてればいいのかよ」と奥さんは言う。

(2)まるで邪道やね。「欲望は我慢するな！金で済むことは金で…！」

そんな中で、どうやって勉強するか。その私の永年の疑問に答えてくれたのが、この本だった。だって、こんな大胆なことを言う。大人のための勉強法のエッセンスだ。

第1に、我慢しない

第2に、自分のバイオリズムを知る

第3に、金で済むことは金で解決する

えっ、こりゃ何だ、と私は思いましたね。勉強は、全てを犠牲にして、我慢してやるんじゃないか。ストイックにやるもんじゃないか。それに、金で済むことは金で解決する。なんて、ヒドイ。人間として許せないことじゃないか。と思った。ところが読んで行くうちに、ウンと唸った。そうか、これが「大人のための」勉強法か。と私は納得しましたね。

つまり、「逆説的」勉強でもある。全てを犠牲にして勉強するというストイックな、悲壮なやり方を拒否するのだ。たとえば、こう言う。

〈禁欲的な勉強法は勧めない。独身男性の場合は、風俗でもマスターベーションでも、自分がいちばんリフレッシュできる処理法を知っておくとよい。可能なら前述のように勉強のごほうびにそれを使えばよいのだ〉

ここが「子供の勉強法」と大きく違うところだね。いい大人だし、働いてるから金もある。だったら、子供のように我慢する必要はない。モヤモヤし

てたら、ソープでもヘルスでも行きんしゃい。と言う。凄いやね。こんな勉強法の本なんて初めてみた。

ここで「前述のように」と書いてるが、恋愛も我慢しないで、上手に使いばいいと言う。「恋愛を断って勉強に専念する」という禁欲主義はいかんといい。

〈逆に恋愛を勉強に活かすという手もある。私は勉強の持続にはごほうびが必要と述べたが、1週間の勉強が予定通りにいけば、デートは時間を増やすとか、その時はホテルに行ってもよいとか、勉強のごほうびに恋愛を使うのである〉

ヒャー、凄いやね。一週間、勉強がうまく行ったら、ホテルで情交か。それを楽しみに、勉強する。革命的な勉強法の本ですよ。テレビでも映画でも芝居でも、どうしても見たいものがあったら、我慢しないで、見たらいい。その方が、「ああ、見たかったな」とジクジクと悩みながら勉強し、能率が落ちるよりはいいという。

これも言えるな。やらなくちゃならんのに何となく気分が乗らない。そんな時、あえて映画を見に行く。帰ってきて、「しまった。こんなことをしてはいられない」と焦る。それで自分を追いつめて勉強に集中できる。うん、こんなことはよくあるやね。

次に「お金」のことだ。まず、私のことだ。レーニンさんにある日、言われた。あっ、あのロシアの革命家じゃない。礼仁さんという人だ。本名だ。儒教の礼と仁からとったらしい。編集プロダクションの社長をしとる。「鈴木さんは偉いね。いくら遅くなってもタクシーで帰ろうといわないから」。エッ？そんなこと自分でも気づかなかった。たしかに、タクシーはほとんど乗らない。いつも電車だ。又、電車のあるうちに帰る。遅くまで酒を飲むのが嫌いだし。

それに貧乏だからだ。「タクシーなんて贅沢だ」と昔から思っていた。どんなに疲れても、そんな贅沢をしちゃいけない。ブルジョア的墮落だ。と思っている。（それに電車の方が本を読めるし…）。

ところが、「和田式」には驚いた。

〈金で済むことは金で解決する。これは勉強が必要な時は、なるべく疲れを残さないために投資をしたり、あるいは時間を金で買うという発想である〉

疲れ果てて家に帰る。帰っても原稿がある。そんな時は、「勿体ない」と思わずタクシーに乗れ、という。新幹線も、グリーン車にしる。その方が、本が読めるし、睡眠不足も取り戻せる、と。これも仕事の効率を上げる為と、割り切って考えるべきだ、という。なるほど。ものは考えようだ。

和田さんは、家の配置がえをする時に、贅沢だと思ったが、便利屋に頼んだ。大量の資料や荷物を素早く配置がえしてくれ、値段もたったの4千円だったという。これを自分一人でやったら何日もかかる。「金で済むことは金で解決すべきだ」という。なるほどと思った。「和田式」を更に進めると、(本人は書いてないけど)当然、こんなことも言えるはずだ。

原稿を書いている、悶々とした時は、恋人に会う。でも、恋人に会うと時間をくう。何時間も付き合わなきゃならん。彼女のグチも聞いてやらなきゃならん。それよりは、性の専門家のところに行って、1時間か2時間コースで素早く抜いてもらおう。これも「金で解決する」のだろう。金で「欲望の満足」を買うし、金で、「時間」も買ってるわけだ。まあ、獣欲を卒業した我々「ミッション・インポ」世代には関係のない話だが。

(3)これぞ決定打。「下らん友人は始末しろ！」

実は、結論としては、〈時間〉の問題なんだ。時間をどうやって作るかだ。まず、寝る時間を削るという人がいるが、これは最悪だ。必ずダメージがたまる。夜眠い時、ムリに起きてやるよりは、眠たい時は寝る。そして朝早く起きて仕事をする。うん、これは賛成だ。私も、これはやっている。

それから、いくら忙しいからといって、食事を抜かしたり、立ち食いで済ますのはマズイ。又、仕事をしてる人なら、それも削れない。そうしたら、何を削るんだ。

和田さんは言う。「下らない人間との付き合いを削れ！」と。早くいえば、「友人を整理しろ！」という。これも革命的な提案だ。この本の一番の〈大提案〉だ。

〈時間の無駄をどうつぶしていくか。

週に十時間は自分のための勉強や読書の時間を取りたいなどと考えている際は、付き合う相手に優先順位をつけるという方法がある。会っていてもためにならない人、精神的にも役に立たない人などとの付き合いは勉強が大切な時期には無理に続ける必要はない)

たしかにそうだ。でも、当人には言えない。「和田さんが言ってたし。お

前は役に立たない人間だからもう付き合わない」なんて言ったら、喧嘩になる。殺人事件になるかもしれない。密かに手帳に書いて、「不要な人リスト」を作り、一人一人、ア行から消してゆくしかない。でも、なかなか出来ない。僕なんて40年間、何千、何万という「愛国者」と付き合ってきた。中には教えられた人もいたが、ほとんどは時間の無駄だった。「時間を返してくれ！」と愛国者たちに叫びたい。あの時間を全て勉強に投入したら、大学の先生になれたかもしれん。税理士か弁護士になれたかもしれん。そう思うと、かわいそうだね。鈴木君が…。

今でも、切ってしまいたい付き合いがある。名前は言えないが、凄い革命家がいる。いや、昔、凄かった革命家がいる。でも、何十回か討論し、対談し、もう、その人の〈全て〉を吸収した。だから、もういい。70回以上、会ってるから、もう友人として会う「ノルマ」というか「絶対量」もクリアした。

でも、時々、誘われる。ロフトに呼ばれる。「あんたはもう友人としての絶対量はクリアしたから会わない」とは言えない。「学問的、精神的にも役に立たない人だから」と言って、断わることもできない。私が気が弱いからだ。

和田さんも言う。「人間関係を切れない」のは、友人としての優しさがあるからだろうと。そう認めるが、でも、こう言う。

〈どうしてもいい人間関係を切れないもう一つの理由は、付き合いが悪ければ、それをきっかけにして、いろいろ悪口をいいふらされるのではないかという懸念だろう。確かに最近は、ストーカーになるような、ちょっと人格がおかしい人間が増えているので、その懸念はなきにしもあらずだが、相手が人格障害の場合、犠牲者は一人ではないはずだから、通常はその人に多少悪口をいわれたり、陰口を叩かれたりしても、それほどこたえないものなのだ。

ここでも、私は行動療法的アプローチを勧めたい。つまり、優先順位の低い、メリットのない時間の無駄と思える付き合いは、あれこれ悩まずに切るということだ。現実に行ってみると思ったほどダメージがないことに気づくはずだ。まずは行動なのです〉

だから皆さんも、即、行動に移したらいい。でもな、和田さんのように著名で、世間に認められ、いくらでも仕事のある人はいいいよ。そうではない我々は、難しいよな。自分が切るよりも、相手に「役に立たん」といって切ら

れる方が多い。「こんな右翼くずれと付き合っても何のメリットもない」「時間の無駄だ」と思われる。うーん。難しい。和田さんの本には共鳴しつつも、実行できないでいる優柔不断な私でありました。情けない。

それに今、気がついたけど、私らは〈運動家〉を40年もやってきたから、こんな発想は全く出来なかったのだ。「運動の論理」はまず人を多く集めることだ。質は問わない。量だ。「100人結集した!」よりは、「500人結集した!」の方が〈正義〉になる。だから右も左も、必死になって、オルグし、動員し、人を集める。

今でも、そう考えてる人が多い。今でも僕にもそんな「案内」が来る。ともかく、「結集してくれ」というのだ。別に僕が必要なわけじゃない。集まる人が「一人」増えればいいのだ。だったら僕のかわりに別の「二人」が行ったらどうか。多分、そっちの方が嬉しいのだろう。

つまり、何でもかんでも、〈数〉を集め、数が多い方が正義だ。「これだけの人間が集まった。我々の正しさが証明された!」と言える。だから、たとえどんな人間でも、「友人を整理」するなんて思ってもみない。

だからこそ、和田式「勉強法」には素直に驚いたんですよ。

最後にもう一つ。今までは『大人のための勉強法・パワーアップ編』を紹介したが、その前の『大人のための勉強法』にも革命的な提言がされている。

〈技術の世界は日進月歩で変化しており、勉強をし直して知識をリフレッシュする必要があるが、それ以外の分野でも、五十年も前に勉強したことは、ほとんど化石になっていることが少なくなる。高齢になればなるほど、どこの大学を出てるかより、大人になってから何を勉強してきたかのほうがモノをいうのである〉

ウツと思った。ガーンと頭を殴られたような感じだ。だって、右も左も、運動家の人は、40年、50年前の理論をそのまま言ってるだけで。私だってそうだ。いかな、こんなことじゃ。10年に1回は全面的に見直さなくては。その通りだよ。

と、ショックを受けつつ、今週は終わる。

【だいありー】

(1) 8月7日(月) 図書館から借りた本を読むために、喫茶店を三軒ハシゴして、ひたすら読書した。どうせ友人はいないし、「付き合っても役に立た

ん」と思われてるから本は読める。孤独だ。友人は本だけだ。だから、こういう時は便利やね。

(2) 8月8日(火) 午前中、原稿書き。午後、ファミレスで本を読む。夜は柔道。「書・読・斗(しょどくとう)」の理想的な一日だ。これも、友人がないから出来る。いいことだ。柔道の練習で頭を打って朦朧とする。合気道をやったから受け身はうまいのに。捨身技をくって、受け身をとれなかった。このまま死んだら、〈戦死〉かな。靖国神社に祀ってもらえるのだろうか。

(3) 8月9日(水) 図書館で一日、調べものをした。夜、柔道。体の調子がいい。「一週間に一回では現状維持です。二回は来ないと強くならない」と講道館の先生に言われた。先週と今週は二回ずつ行った。少し強くなった。

(4) 8月10日(木) 『旬なテーマ』(9月号・中経出版)発売。元共産党No.4の筆坂秀世さんと私の対談が出ている。〈真の「愛国者」対談〉となっている。「靖国、憲法、共産党の真相」。読んでみて下さい。

又、『Quick Japan』(9月号・太田出版)もこの日発売。「日本をよくするための33の法律」特集。「左翼保護法を作れ」と、とんでもない事を言ってる人がいました。誰か?と思ったら、私でした。その他、小林よしのりさんと森達也さんの対談も載ってます。盛り沢山です。

(5) 8月11日(金) 仕事もないし、ヒマだったから、夜、柔道に行こうと思ったら、今日から一週間、講道館はお盆休みでした。そんで代わりに2万歩あるきました。

【お知らせ】

(1) 8月21日(月) 7:00p.m.。一水会フォーラム。講師は前国会議員の小林興起氏。「主権在米経済について語る」。高田馬場のサンルートホテル(旧大正セントラルホテル)です。

(2) 9月10日(月) 午後1時。ネーキッド・ロフト。大浦信行監督の映画「9・11～8・15 日本心中」の上映記念トーク。私も出ます。

(3) 9月15日(金) 午後7時。ネーキッド・ロフト。社民党の保坂展人さんと私のトーク。「愛国心」についてです。

(4) 9月17日(日) 7時、ロフト。中野ジローさん司会による「塀の中で懲りちゃった面々」。安部譲二、塩見孝也、蜷川正大、木村三浩、雨宮処凛、そして何故か私も出ます。

【お知らせ・スペシャル】

我がMIFメンバーが頑張って、[「鈴木邦男をぶっとばせblog出張所」](#)が出来ました。好評です。まだ見てない方はどうぞ見て下さい。
<http://blog.goo.ne.jp/kunyon-s> をクリックして下さい。なかなかよく出ています。私の出てるイベントの写真、レポートなども出ています。

管理人の方では、「リンク貼って飛べるようにする」と言ってますから、もう出来る頃でしょう。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年 2004年 2005年
2006年

今週の主張 8月21日 明治天皇と大逆事件

(1)自分を殺そうとした者をも許す大御心

罪あらば我をとがめよ天つ神
民は我が身の生める子なれば

明治天皇の歌だ。大逆事件の時によんだ歌だ。この歌を聞いた時の衝撃は忘れられない。だって、自分を殺そうとした人間すらも許し、彼らに罪はない。私をとがめてくれ、と言っている。まさに神だと思った。神の心境だ。

私が天皇信仰に目覚め、愛国運動をする契機になった歌だ。大学時代に初めて聞いた。もう40年も前のことだ。それ以来、ずっとこの歌が気になり、この歌のことを考えてきた。

大逆事件について、少し説明する。『辞林21』（三省堂）から引く。

〈大逆事件 1910年（明治43年）5月。幸徳秋水ら多数の社会主義者・無政府主義者が明治天皇暗殺を計画したとして、大逆罪のかどで検挙・処刑された事件。検挙者は全国で数百名にのぼり、翌年1月、24名に死刑が宣告され12名が処刑された。幸徳秋水事件。〉

12名も殺されたのだ。しかし、本当に〈事件〉はあったのか。〈計画〉らしいものはあったとしても、どこまで本気だったのか分からない。奇妙な事件だ。「幸徳秋水事件」とも言われているが、幸徳は全く関係がない。冤罪だ。「天皇暗殺」を同志が、たわむれに相談した時も、はっきりと断わっている。しかし、殺された。12名のほとんどの者が冤罪だった。この『辞林21』でも、「明治天皇暗殺を計画したとして」と書かれている。〈計画〉そ

のものが本当だったか分からない。疑問だからだ。

2, 3人の跳ね上がりの急進派がいて、「天皇暗殺」を口走り、その場の雰囲気「そうだ、そうだ」と言った者はいた。ただ、どこまで本気に計画し、準備したものか分からない。百歩譲って、2, 3人は本当に計画していたとしても、あとのほとんどの人間は全く関係がない。冤罪で殺された。

『新編日本史』（原書房）によると、大逆事件に至る時代背景が説明されている。

日露の関係が急を上げる頃、ロシア討（う）つべしの声が高まる。その中で、黒岩涙香（るいこう）の主宰する新聞『万朝報（よろずちょうほう）』は、内村鑑三・幸徳秋水・堺利彦らキリスト教徒や社会主義者を起用して、日露非戦の主張を展開した。当時としては勇気のいることだ。

しかし、明治36年（1903）に黒岩は開戦論に転ずる。（翌37年。日露戦争だ）。社長自らが裏切ったのだ。幸徳たちは怒って退社。このうち社会主義者が集まって平民社を結成し、「平民新聞」（週刊）を発行し、非戦論をつらぬいた。

国家としては近代化と軍備増強が優先され、社会政策や労働者の保護がおろそかになり、そこを社会主義者に突かれた。日本社会党が結成された。しかし、この頃から、内ゲバが始まる。

木下尚江、安部磯雄、石川三四郎などのキリスト教社会主義者と、幸徳秋水、堺利彦などの唯物論的社会主義者との分裂・対立だ。

さらに、アメリカにわたって無政府主義に影響された幸徳が、議会主義を批判して直接行動を主張したので、明治40年（1907）、治安警察法違反で日本社会党は結社を禁止された。翌年には、大杉栄・堺利彦・山川均・荒畑寒村・菅野スガなどが検挙された。

明治43年（1910）、明治天皇の暗殺をはかったといわれる「大逆事件」で幸徳らが処刑され、国民に衝撃をあたえ、以後、社会主義は「冬の時代」をむかえたる

…と、書かれている。社会主義運動は盛んになり、より過激なグループも出、警察もあわてた。しかし、都合よくも、「大逆事件」を起こしてくれ、墓穴を掘り、社会主義運動は一辺に潰れた。だからといって、結果から見て、「権力の謀略」だったというつもりはない。権力はその〈結果〉を利用して、大弾圧をし、つぶしたのだ。いや、あるいは、より過激に突き進み、自爆・自滅するようにスパイを放ち、工作をしたのかもしれない。

〈以後、社会主義は「冬の時代」をむかえる〉と書かれている。社会主義に同情的に見えるが、違う。この本は、その昔、「偏向教科書」に対抗してつくられた誇りある高校教科書なのだ。黛敏郎氏らが中心になってやつた、いわば「新しい歴史教科書をつくる会」の前身だ。その後、あまり採択する学校もなく、原書房から一般書として出ている。でも、なかなかいい本だ。

ともかく、〈大逆事件〉は当時の日本にとって大事件だった。連赤事件の比じゃない。神とおおぐ天皇を殺そうとしたのだ。「許すな!」「極刑にしる!」という声が全国に満ち満ちていた。集団ヒステリーのようなものだ。こんな不敬、大逆の奴らは根こそぎにしる!皆殺しにしる!と声が上がった。社会主義者など潰されるのは当然だ。

しかし、そんな仲で、明治天皇お一人だけは冷静だった。自分の命を狙った人間に対し、この歌をよんだのだ。当時は桂内閣だ。桂首相がこの大逆事件を報告した。その直後によんだという。なかなか出来ることではない。

(2)あれは「ガセ」だ。「ニセもの」だ。と言う人がいて…

40年前、「生長の家」の学生運動をしてる時に、この歌を知った。

生学連（「生長の家」の学生部）の練成会（合宿）で、講師の先生に聞いたのだ。それ以来、ずっとこの歌のことが心の中にあった。

でも、ちょっとひねくれてたんでしょうな。私も。「だったら、許してやればいいじゃないか」と思った。「無罪にしてやれよ」と。「罪あらば我をとがめよ」と言ってるんだから。でも立憲君主制だから出来なかったのか。憲法にとらわれず、自由に権力を振るえる絶対君主ならば、「許してやれ」と言うことも出来たのかもしれない。それにしても…と、ずっと考えていた。

何年前か、奇妙な話を聞いた。

「鈴木さんは、あの歌は素晴らしいといってるけど、本当に明治天皇のお歌かどうか分からないんですよ」…と。

エッ? まさか、と思った。じゃ、調べてみればいいじゃないか。「どの本にも出てないんです」と言う。それに明治天皇は生涯で10万首の歌をよんでいる。とても全てを探せない。

ウーン、と唸った。じゃ、あの歌は何なんだ。「あの時の明治天皇のお気持ちはこちらだったんだろう」と誰かが作ったのではないかと彼は言う。そんな馬鹿な!「お気持ちを推測して…」と言ったら言葉はいいが、本当は自

分が明治天皇になりかわって歌を作っているのだ。だったら、こんな「不敬」なことはない。

『愛国者は信用できるか』でも書いたが、「日本国歴代天皇御真影」という掛け軸がある。写真も紹介した。神武天皇から始まって歴代天皇の御真影を並べている。明治天皇からは写真があるが、それ以前は「肖像画」だ。といっても、実際の天皇の姿を見て描いたのではない。だから〈想像画〉だ。もっと言うならば〈妄想画〉かもしれない。これは〈尊崇〉するふりをしながら、侮辱しているのではないか。と思った。あるいは、形だけの尊崇は、極まれば不敬になる。とも言える。

実は、これに類したことが、かなり多くある。「天皇さまはこう言われた」「こんなことがあった」と伝わっている話で、信憑性が定かでないものが多い。「尊崇してるんだからいいだろう」といった感じなのだ。ズサンだ。

「罪あらば…」の明治天皇の歌も、あるいはそうかもしれない。と、友人は言う。不安になって、いろんな人に聞いた。皆、「分からない」と言う。大学の先生や、朝生によく出てる人、皇室評論家などに聞いたが、分からない。ウーン、「ニセもの」なのかな。だったら、ひどいな。じゃ、一体、誰がこの歌を作ったんだ。それも分からない。まア、いつか、分かる時があるかもしれない。と諦めていた。

そんなある日のことだ。思わぬところから解決の糸口が見えた。「新潮現代文学」（全80巻）を読んでる時だった。初めはどんどん読んでたが、最後の10巻は、スピードが落ちた。重いテーマの本や、学生時代に衝撃を受けた本などは後回しにしていたからだ。再読して、どんな感じを持つか。楽しみでもあるが恐かった。それで司馬遼太郎の『燃えよ剣』、三島由紀夫の『春の雪』、島尾敏雄の『死の棘』、柴田翔の『されどわれらが日々』、高橋和巳の『我が心は石にあらず』などは最後まで、とっておいた。最後の最後になんとか読んだ。それで80巻を読破した。

その高橋和巳だ。「我が心は石にあらず」の他に、「散華」と「墮落」が入っている。「墮落」を読み進めている時に、何と、出会ったのですよ。明治天皇のこの歌に。

主人公の青木はかつて、満州国の建国に参加した。「五族共和」「王道楽土」の建設を夢みて、命をかけた。ところが敗戦。全ては無に帰した。日本に帰ってきた青木は絶望と廃虚の中にいた。そして、路上に捨てられ、あふ

れる孤児、混血児たちを見て、これではいけないと思い立つ。苦勞の末に孤児たちの「兼愛園」を作る。

一時は順調に行った兼愛園も、行き詰まりを見せる。そして、県の協賛を得て、全額国庫の緊急援護費を請求するために趣意書を書く。これが、思想的というか、政治的、イデオロギー的な趣意書だ。とても孤児園の趣意書とは思えない。

〈戦争によって社会に投げだされた戦災孤児、占領によって産み出された混血児が現在どのような状態におかれているのかは、すでに御承知の通りであります〉

と書き出す。ドブ川や、公園、列車の網棚に捨てられ、餓死し凍死してゆく。幸いにして生きながらえた者も、路上で生活し、食堂の残飯をあさり、年齢もいかずして世を呪う非行少年と化しつつある。

〈半ばはその両親の罪であるとはいえ、かつて国家が徴兵徴用の権利によって親を子よりひきはなし、さらに国家が無条件降伏して異国の兵の進駐を招いたのである以上、戦災孤児や混血児は本来、国家が養うべき責任を持つものであります〉

(3)三島由紀夫、里見岸雄にも並びますよ。高橋和巳の天皇論は

うん、そうだよな、と思った。負ける戦争、勝てるはずのない戦争をした人間は責任がある。勝手に降伏し、異国の兵を招いた責任も彼らにある。だから、その被害を受けて死んだり、生まれたりした子供は国家が全て責任を負うべきだ。うん、これも正しい。さらにこう言う。

〈大東亜戦争の開始にあたって、天皇陛下は、『朕力衆庶八各々、其ノ本文ヲ尽シ億兆一心国家ノ総力ヲ挙』ぐべきことを勅諭され、国民はその御意志に従いました。また敗戦に際しては、『堪へ難キヲ堪へ、忍ビ難キヲ忍ビ』と国民に呼びかけられ、また国民はそれに従いました。

しかしながら、今にして思えば、忍びがたきを忍んだのは衆庶のみ。国家権力は巧みに自らを衛（まも）って生きのび、衆庶にのみその皺寄（しわよ）せがなされたかのごとくであります〉

痛烈な権力者批判だ。天皇批判も入っている。三島由紀夫の「英霊の声」を思わせる文章だ。しかし、これからが違う。天皇への批判、恨みだけでは

終わらない。ちょっと長いが、読んでほしい。

〈幸いにして衆庶は勤勉、廢虚にバラックを建て、防空壕に家庭を築いて立ちなおりましたが、未だ生活に自立力のない孤児、混血児に、耐えがたきを耐えるどんな術（すべ）があるでしょうか。かつて幸徳秋水の大逆事件の際、明治天皇は

**『罪あらば我をとがめよ 天つ神
民は我が身の生める子なれば』**

と詠ぜられたとききます。私は、国家は自らに叛（そむ）く者を弾圧する権利をもつことを冷厳なる権力の論理として認めますが、その叛逆者すら、自らの子と観ぜられた明治天皇の御心がまことでありますならば、神聖不可侵の者より国家の象徴に転ぜられたとはいえ、この孤児も混血児も国家の子、天皇の子であるはずであります。

しかも、戦争の惨禍を受けた国民も、戦争によって産み出された孤児、混血児も決して叛逆者ではありません。ただただ、その犠牲者であり、ひたすら救いの手をさしのべられるのを待つ、か弱い存在であります。もし、それをして見棄てられるならば、為政者は、自らの説かれた論理によって、直系卑属の殺害者として告発されることを認められねばなりません…」〉

これは小説だが、この部分だけでも大論文だし、堂々の〈天皇論〉になっている。三島由紀夫や里見岸雄にも比すべき天皇論になっている。この「趣意書」について、小説では、こう続けている。

〈その文章はおよそ趣意書や要望書の体裁を逸脱しており、ほとんど国家に向けた脅迫状に近かった。たしかにそれは脅迫状だった〉

激しい脅迫だ。しかし、〈天皇論〉としては正鵠を衝いている。そう思った。

それと、「やはりあの歌は本当だったのか」と思った。この小説は40年近く前に読んでいた。高橋和巳は好きで、全集を読破した。三島よりも、むしろ、ピッタリとくると思った。当時、ノートを取りながら読んだ。明治天皇の「罪あらば…」も知っていた。しかし、この時は、「へエー、高橋もこの歌を引用してるのか」という位にしか思わなかった。明治天皇の歌として、全く疑っていなかったから、スウーッと入り、スウーッと抜けていたのだ。

ところが今回は違う。友人に、「本当は明治天皇の歌じゃないかもしれな

い」と言われ、そのことをズーッと考えていた。そして、ここで出会った。右翼の人が「天皇の御心」を強調し、利用しようとして引用するのではない。左翼的といわれた高橋和巳が引用してるんだ。じゃ、少なくとも、この歌は本物なんだ。明治天皇の歌なんだ。と思った。高橋和巳が言ってるんだから、本当だろうと思った。

「いや、それも甘い」と言われるかもしれない。高橋だって、どっかの本で読んで、「へエー、こんな歌があるのか」と安易に引用したのかもしれない。それは又、これから調べてみたい。私の課題だ。

しかし、いい歌だ。天皇制の本質を考えさせられる歌だ。実は、この話は、（部分的だが）、8月5日のジュンク堂での森達也さんとのトークの時にした。関心のある人は、高橋和巳を読んで、共に考えてもらいたいと思う。

何十年と年月を経て、同じ本を読み返してみる。昔は全く分からなかったことが分かる。新たな発見がある。又、長い間、抱いていた〈疑問〉が少しずつ解ける。本を読み、考えるからだ。パソコンで一瞬にして解決するような〈疑問〉は、本当の〈疑問〉じゃないんだ。朝までネットをしたり、チャットをしたりして時間を浪費している諸君。つまらない友人と朝まで生ビールを飲んで騒いでいる諸君。これでいいのか。つまらない友人は整理して、〈孤独〉になりんしゃい。友人なんか捨てる。本を読みなせえ。

【だいありー】

(1)8月14日(月) 三島の「仮面の告白」を読んだ。3度目だ。これはいいね。騒々しいファミレスで、ひたすら読んだ。おばさんや、ガキの声も気にならない。普段は、「うるさいなー。オレは勉強してるのに」と思うが、この日は気にならん。それだけ没頭していた。騒ぐなら騒げ。バカヤロー。俺はもっと凄い体験をしている。凄いものを読んでるんだ。という優位な気持ちになっていた。三島全集も、もうすぐ読破できる。5時間もファミレスにいて本を読んだ。友人がいないし、携帯がないから出来る「快拳」だ。携帯やメールをやってる奴らは、ツール（道具）に支配されている奴隷だ！悔しかったら、ツールを捨てる。友人を捨てる。女房を捨てる！

(2)8月15日(火) 小泉首相は行きましたね。靖国参拝。「いつ行っても文句いわれるから15日にした」と。今まで周りの人（加藤紘一たち）や外務省

に、「8・15だけは避けてくれ」と言われてきたんだろう。その鬱憤晴らしだ。まア、「男の生き方」「美学」としては立派だが、「外交」がないやね。「アジアの平和のため」に英霊は戦って死んだ。それなのに、自分たちへの参拝が原因で又、アジアがもめたら、英霊だっていやだろう。又、中曽根さんが言うように、天皇陛下にお参りしてもらいたい。それを考えるべきだ。

夜のTBS「ニュース23」では靖国特集だった。宮崎哲弥、潮匡人さんと共に私も出演して喋った。

この日の東京新聞を見て、ビックリ。反骨のジャーナリスト・むのたけじさん（91才）と作家・元新右翼メンバーの雨宮処凛さん（31才）が対談していた。見開きで、終戦特集大型対談で、「巻き込まれていく怖さ。許した責任国民にも」「日本は今、惰性。一番悪い」…と語っている。年齢差60才の画期的な対談だ。

(3)8月16日(水) 「東京新聞」の朝刊に、私のコメントが出ていた。「英霊の願いは平和」と題して。明治の政治家なら参拝を1, 2回やめても、その間に近隣諸国を説得する外交があった。今は、交渉したり、譲り合ったりという手を探すということがない。国民から「毅然としている」「戦っている」という評価を得たいためだけになっている。

といったことを喋った。もう一人姜尚中さんが、「本質は日米関係に」と題して話をしていた。

この日の「朝日新聞」（夕刊）にも私のコメントが載った。靖国じゃなく、加藤紘一氏の実家への右翼の襲撃（放火）について、「メディアの論調、右翼を追い込む」と題し、こう喋った。

〈自分も4、5年前に自宅アパートに放火されたことがある。これまでいんな脅迫があり、少々のことでは驚かないが火は本当に怖かった。ちょっとした脅しのつもりでも大事になる。

最近のメディアの論調の中には、「反日的な言動にとどめをさせ」というような直接的な行動を促すような発言もあり、過激な言葉も多い。右翼にしてみると、「もう体をはるしかない」と思ってしまう状況もあったのではないかと

加藤氏の実家が放火され全焼したのは8月15日の夕方だった。小泉参拝に対し、加藤さんは批判していた。そのことで放火されたようだ。僕も、自宅

アパートに放火された時のことを思い出し、ゾツとした。

16日の朝、11時すぎに朝日新聞社から電話があって喋った。そしたら、午後2時頃、もう東中野のキヨスクでは夕刊が売っていた。早い。驚いた。

夕方、6時から、歌舞伎座で「南総里見八犬伝」を見る。八犬士は、僕も何人か知っている。犬塚氏、犬井氏は友人だし、中学の同級生に犬飼君がいた。もう5人、探しあてれば、八犬士だ。そして里見家、再興だ！頑張ろう。

(4)8月17日(木) 「東京新聞」の朝刊の「こちら特報部」は「加藤紘一さん宅放火」の特集。私のコメントも載っていた。加藤さんとは、慶応大学のセミナーのパーティで今年、会った。お父さんは石原莞爾の又いとこだと言っていた。だから小さい頃から、石原の思想や民族主義の話は聞いていたという。それなのに…。

午後、打ち合わせ。9月からスタートする雑誌に連載を頼まれる。私じゃ力不足だと思ったが…。大変だ。どうしよう。そのあと、新聞社の取材が二つ。おかげで、ジョナサンにずっといた。昼メシも晩メシもジョナサンだった。

(5)8月18日(金) 山形新聞にコメントが載った。又、「北海道新聞」(夕刊)の連載「自由からの逃走。2006夏」の4回目として私の原稿「思考停止の末の愛国心」が載った。

【お知らせ】

(1)8月21日(月) 7:00p.m. [一水会フォーラム](#)。高田馬場駅前の[サンルートホテル](#)です。講師は前衆議院議員の[小林興起氏](#)で「[主権在米経済](#)について語る」

(2)8月29日(火) 「アサヒ芸能」発売。テリー伊藤さんと私の対談が載っております。

(3)9月6日(水) 「ダカーポ」発売。北朝鮮問題特集で、私も書いてます。

(4)9月10日(月) 午後1時。ネーキッド・ロフト。大浦信行監督の映画「9.11～8.15 日本心中」の上映記念トーク。凄い映画です。日本にこだわり、戦争、天皇制を考える思想的な、骨太な映画です。監督、重信メイさん、それに私が出ます。

(5)9月15日(金) 午後7時。ネーキッド・ロフト。社民党の保坂展人さんと私のトーク。「愛国心」についてです。

(6)9月17日(日) 7時、ロフト。中野ジローさん司会の「塀の中で懲りちゃった面々」。安部譲二、塩見孝也、蜷川正大、木村三浩、雨宮処凛、そして私も出ます。

(7)BBSへのカキコ。ダンケです。NSRやまとさん。『証言昭和維新運動』（島津書房）を読んで下さったんですか。ありがとうございます。何とか復刊したいですね。あるいは文庫にでも。2.26事件の時の「天皇の怒り」や磯部の発言。末松太平氏の証言など、又、「主張」で取り上げ、考えてみたいと思います。

それと、亀田の判定ひどかったですね。国辱ものですね。又、T-BOLANのARASHI MORIMOTOの「君が代」独唱もひどいね。難しい歌なんだから、ソロで歌うなよ。過去、石川さゆりや坂本九なども歌ってるけど、無理だ。メロディだけ流せばいい。5千回も「君が代」を歌った私でさえ、まだうまく歌えんのじゃから。

(8)「富田メモ」には、「A級戦犯」を合祀した松平宮司について、「親の心子知らず」と思っている。だから、私はあれ以来参拝していない。それが私の心だ」とある。「親の心」の親とは松平宮司の父親のことだ。しかし、初め読んだ時、「親の心、子知らず」の「親」とは天皇のことかと思った。「朝生」の時も、言おうと思ったが…。だって、明治天皇の歌がずっと心に残っていたからだ。「民は我が身の生める子ならば」と明治天皇はよんでるのだし。あるいは、「富田メモ」にも、そういうニュアンスは少しはあったのかもしれない。今後の宿題です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)
[2006年](#)

今週の主張 8月28日

やられた人でないと分からんよ。放火の恐怖は…

(1)火は生きものだ。グレた息子だ。親の心、子知らずだ

放火は怖い。自分が襲われ、殴られ、刺されるよりも怖い。一瞬にして全てを焼き尽くす。

8月15日(火)の夕方、加藤紘一氏の山形の実家が放火され全焼した。そのニュースを聞いて、3年前、自分のアパートが放火された事件を思い出してゾツとした。もう思い出したくない。忘れたいのに…。

放火の恐ろしいのは、思った以上に被害が大きくなることだ。放火する人間にとっては想像をはるかに超える〈効果〉を上げられる。ということだ。〈効果〉といったが、これは放火者にも降りかかってくる。

それに、火は生きものだ。人間がコントロールできない。人間の手を離れて、全ての人間に襲いかかってくる。

放火は「手かげん」が出来ないということだ。放火する人間は、「予行演習」も「練習」もしない。出来ない。ぶっつけ本番でやる。「ちょっと警告のつもりでやるんだ」と思って、「ちょっと」火をつける。でも、火は人間の手を離れてアツという間に襲いかかり、全てを舐めつくし、放火者にも襲いかかる。

放火する人間は、ガソリンや灯油をまき、その後、自分が火傷を負わないように、離れたところから火をつける。そして、全速力で逃げる。距離をとってるから大丈夫だと思う。しかし、火は、じわじわと広がるわけではない。一気に襲ってくる。距離を飛びこえてくる。そして、火をつけた人間にも襲ってくる。

火は人間が作るものだ。山の中で、嵐か何かで、木同士がこすれて自然発火することはある。しかし、大体は、人間が作る。人間が作らない限り、火は生まれぬ。人間は親だ。マッチをすったり、ライターで火をつけたり。ともかく、人間が火をつける。人間によって、火は生命を得る。親である人間によって、火は生命を得て、この世に生まれる。人間の〈子供〉だ。しかし、この子供は親の希望通りには動かない。この世に生んでくれた親にすらも猛然と襲いかかる。不良な子供たちだ。放火犯がよく、火傷を負うのもそのためだ。火は親不孝だ。「親の心、子知らず」とはこのことだ。

今回の加藤氏実家放火事件にからんで、「そういえば昔にも右翼の放火事件があった」と新聞には出ていた。野村秋介さんの河野一郎邸焼打ち事件（昭和38年）のことだ。

ここで「焼打ち」と書いた。「放火」ではない。実は、「河野邸放火事件」と言って、野村さんに叱られたことがある。「放火じゃない。焼打ちだ!」と。エッ、同じじゃないか。どう違うんですか、と聞いたら、説明してくれた。「放火」は、個人的感情でやる。面白半分にやるとか、彼女にふられたとか。相手に恨みがある時だ。それに対し、個人的恨みを超えて、思想的、政治的な理由でやる場合は「焼打ち」という。

そういう説明だった。なるほどと思った。同じことをやってるようでも、思想があるのと、ないのでは呼び方が変わるんだ。日本語は正しく使わなくちゃいかん。

「自殺」でも、思想のある場合は「自決」と言う。「ひきこもり」のように見えても、思想のある場合は「立てこもり」という。銀行強盗や企業恐喝でも、思想があれば「M（マネー）作戦」「経済活動」と言われる。裏切り者を殺すんでも暴走族では「リンチ」「仲間殺し」といわれ、思想のある人達がやると「粛清」といわれる。民族大虐殺だって、思想があると「民族浄化」といわれる。

「浄化」なんて、きれいな言葉だ。「広末涼子浄化作戦」というCMがあった。コカコーラで出してるお茶のCMだ。広末はもう終わったタレントだから薬殺処分するのかと思ったら、どうも違う。もう一度、きれいにするという意味らしい。無駄な努力だ。早稲田に入りながら、逃げ出した女だ。早稲田の敵だ。浄化でも醜化でもしたらいい。

そうそう。河野邸焼打ち事件のことだ。火事に巻き込まれて火傷をする人が出たらまずいと思い、野村さんは家の人間を外に出した。書生やお手伝い

さん達だ。それで、ガソリンをまいて火をつけた。遠くから火をつけた。風はない。ところが、遠くに火をつけたはずなのに、いきなり飛びこえて自分に襲いかかってきた。あわてた。「火は生きものだ。だから君も気をつけるよ」と言われた。

「気をつける」といわれても、僕は放火なんかしませんと心の中で言った。いや、「焼打ちなんかしません」と再び心の中で訂正した。でも、それからかなりたって、放火されることになったんだ。あるいはそのことを予知して、僕に警告してくれたのかもしれない。と、今になって分かった。

河野邸焼打ち事件の時、家人は全部外に出したはずなのに、お手伝いさんが逃げ遅れた。何と、腰を抜かしたんだ。だらしが無い。なんて言っちゃいけないな。こんな体験は普通ないよ。びっくりして腰だって抜かずわさ。それで野村さんは再び火の中に飛び込み、お手伝いさんを背負って逃げた。人命救助だ。野村さんの英雄的行為がなかったら、お手伝いさんは確実に焼け死んでいた。野村さんは、警視総監賞でももらい表彰されていいところだ。ところが、懲役12年の刑で千葉刑務所にぶち込まれてしまう。

(2) 3年前、さすがの私もビビリまた。パニックりましたよ

日本の刑法は昔から放火には重い。江戸時代なんて、放火は全て死罪だ。たとえ死者が出なくとも、火をつけただけで死罪だ。「八百屋お七」も未成年なのに焼き殺されてしまった。でも変だね。放火は死罪なのに、その犯人は火で殺している。矛盾だ。火をつけるのが悪いなら、殺すのも火はやめろよ。せめて、水に漬けて殺すとか。その位の温情は見せてやれよ。個人が火をつけるのが悪いなら、国家が火をつけて殺すのも悪いだろうよ。

野村さんの河野邸焼打ち事件については、僕の『ヤマトタケル』（現代書館）に詳しく出ているので、関心のある方は読んでほしい。野村さんがお手伝いさんを背負って逃げているイラストまで入っている。

又、この本では、ヤマトタケルが火攻めにあって、草薙の剣によって、やっとのことで脱出する話も出ている。3年前、火攻めにあった私も、まさしくヤマトタケルだ。



火は生きものだ、という話だ。親の心、子知らずだ。3年前の「火攻め」の時の写真を紹介しよう。左端のものが洗濯機だ。原型をとどめてないから、何なのか分かん。ドアも焼け、上のガラスは溶けて、火が部屋の中に入ってきた。上のブレーカーも焼け、アパートの6世帯は3日間、電気がつかなかった。消防車はかけつけ、パニックになった。次の日、「警告文」が郵送されてきた。「放火」ではなく、思想的な「焼打ち」のつもりなんだろう。

でも、犯人も、ここまで被害が大きくなるとは思わなかった（と思う）。ちょっと「警告」のつもりで火をつけたんだ。新聞紙にガソリンを染み込ませ火をつけて、洗濯機の中に入れた。中学の理科で習ったよね。酸素がないとすぐ火は消えるって。洗濯機のフタを閉めたんだから、すぐに火は消える。翌朝、私が見たら、中が黒く焦げている。そして「警告文」が届く。私はビビル。…そういう〈効果〉を期待してやったんだ。

勿論、予行演習はしてない。だから、こんな惨劇になるとは思ってもみなかった。又、洗濯機は紙でも木でもない。燃えるはずはないと思った。ところが石油製品なんですな。簡単に燃える。

もう少し発見が遅れていたら、アパートが全焼だった。加藤さんの実家のようになった。それで夜中だ。逃げ遅れた人がいて怪我人か死者が出たら大変だ。私は放火の被害者だが、もし、人が死んだら、私は「加害者」になる。「お前がいたから、こんなことになった」と非難される。その時は死んでお詫びするしかないと思った。かわいそうな鈴木君だ。何らいいこともなく、短い一生を終えるんだ。ただ涙ですよ。



去年だったかな。フリーライターの山岡俊介さんの家が放火された。全焼に近い大被害だった。言論に対するテロだ。牛乳受けから、火をつけた。犯人は、玄関をちょっと焦がして警告を与えるつもりだった（ようだ）。普通、玄関は何もないから、ちょっと焦げるだけで終わる。ところが山岡さんの家は玄関に新聞を積み重ねていた。資料だ。そこに火がついて大火事になった。

放火は「手かげん」が出来ないし、「予測」も出来ないのだ。山岡さんを励ます会があって、そこで、山岡さんと私の「放火対談」をやった。放火された体験なんて、なかなかあるもんじゃない。その二人の被害者の対談だ。でも、「放火対談」というと放火した当人同士のようだ。いかな。

放火は、予測出来ないということだ。もう少し、書く。ガス自殺をしようとして、ガス栓をひねる。苦しくなって、無意識に止める。「あ～あ、こんな苦しいのなら死ぬのはやめよう」と思う。そうだよな、生きてりゃ、いいことがあるかもしれない。それで、気をとりなおし、タバコを吸う。ところが残ってたガスに火が引火して、ガス爆発だ。死ぬ気がないのに再び自殺させられる。〈ガス自殺〉のほとんどはこのケースだという。つまり、もう死ぬ気はなくなったのに、死ぬ。「ダメじゃないか。せっかく決心したんだから」と火が人間に襲いかかるのだ。やっぱり、火は怖い。

もっとも、今のガスは、（よく分からないが）、死ねないようになってるそうなの。

(3)加藤さんとは、6月2日に会って話をしたばかりだった。愛国者なのに…

もう一例。大阪の運送会社に男が立てこもった事件があった。「給料を払ってくれない」とかいう理由だった。そんなことなら、何もそんな強行手

段に出なくてもいいのに。とにかく男は、切羽詰まって、灯油を床にまいた。「金を払わないと火をつけるぞ！」とライターを取り出した。「わかった、わかった。払いますよ」と会社の方は男の家に送金をした。外では駆け付けた警察官が取り囲んでいる。

「はい、払いこみました。これが証拠です」と男に見せた。「うん、そうか」。と男は言った。それで、男は外に出て、逮捕。それで終わるはずだった。ところが、ここで大爆発。男は死んだ。会社の方も死んだ。外にいた警察官も死んだ。悲惨な大事件になった。

なぜなのか。男は、「仕事」が終わり、ホッとして、ついついもの癖でタバコを吸った。タバコを吸う人はどんな状況でも、ホッとして必ず、吸うものらしい。習慣だね。床に灯油をまいたのは知っている。でも、直接そこに火をつけなければ大丈夫だ。と思った。それでタバコにライターの火をつけた。ところが、灯油は気化して、部屋中に充満してたんですね。ちょっとした火でも、大爆発になる。これだって、「予行演習」出来ない悲しさだ。

「せっかく計画したのに、途中でやめんじゃないよ！」と火が脅迫したのかもしれない。親の心、子知らずだ。親に襲いかかり、親をも殺す。火は怖い。

加藤さんの実家に火をつけた右翼の人も、そこまで一気に全焼するとは思ってもみなかったのだ。火をつけて自決するという覚悟は凄い。そこまで決意したのなら、ちょっと批判も出来ないが。でも、焼打ちはいけない。直接、加藤さんを襲うよりも悪い。火をつけて、少し離れたところで悠然と自決しようと思ったのだろう。ところが一気に火は襲ってきた。自決するどころではなかった。

加藤さんについてだが、実は、今年の6月2日(金)に会って話をしたばかりだった。こんな偶然もあるもんだ。火の引き合わせかもしれん。

前にも紹介したが、慶応大学経済学部で「現代社会史=東アジア・スタンダードの創造」と題する連続講座があった。僕は7月7日に「天皇制と民主主義」と題し、加藤哲郎さん（一橋大教授）と討論をした。

加藤紘一さんは田中秀征さんと、4月28日に討論をした。「国際政治の観点からみた東アジアと日本」だった。連続講座は4月14日から7月14日まで、3ヶ月も続いた。中国、韓国からも学者を呼んだ。それで6月2日に、「レセプション」があり、そこで加藤紘一さんと会った。お父さんは石原莞爾のまたいとこだと言っていたし、子供の頃からその思想は聞いていたとい

う。それなのに今回は、右翼に放火された。加藤さんは、「自分だって愛国者なのに…」という気持ちがあり、悔しかっただろう。

今回の放火事件について、「東京新聞」（8月17日）が一番詳しくかったし、精力的に取材していた。「こちら特報部」で、見開きで大々的に報道していた。今回の事件だけでなく、右翼のテロの歴史を振り返り、最近の「右傾化」の風潮についても書いている。

加藤氏は、首相の靖国参拝を批判しただけで、どっと脅迫が来て、「中国の手先」だと言われた。3年前も「朝鮮征伐隊」によって弾丸が送りつけられた。「異論排除」の風潮は強まる一方だ。「識者」たちも、ウケを狙って過激発言を競っている。「右翼は何をしてるんだ！」と煽る者さえいる。「行動しかない」と焦る右翼が出るのも当然だ。

又、ネットではこうした発言はさらにエスカレートしている。差別的な言説も顕著だ。これが、「識者」の背中を押す。そして、ネット右翼と変わらないレベルの発言をする。嘆かわしい。

斎藤貴男氏は、この風潮について、「東京新聞」で発言している。

〈斎藤氏は今回の事件を目の当たりにして「頭に来るから火を付けてしまえと。そういうことができてしまう空気が、この国にはっきりあると思った」と語る。

「世間の人々もこういう事態を予想していた部分がある。実際に事件が起きても、みんなりつ然とはしていない。『このぐらいは仕方がない』とか『加藤氏も言い過ぎた』と、受け止める空気があるのでは」

さらに事件の真相や犯人の動機とは別に、今回の事件が社会に与える萎縮効果を次のように懸念する。

「やはり、言論にかかわる人々は『表現に気を付けなくては』と思うようになってゆくのではないか」

そうですね。こうして言論が萎縮し、後退してゆくのはマズイですよ。そういえば、外務省の田中均さんが「北朝鮮寄りだ！」と言って、爆発物を仕掛けられたことがあった。「朝鮮征伐隊」がやったのだ。その時、石原都知事は「あのぐらいやられても当然だ」と放言した。ひどい話だ。テロ容認だ。それに対し、「都知事はやめろ！」という声も起きない。国民も異常だ。斎藤さんが言うように、「このぐらいは仕方がない」と国民も思ったのか。いやな雰囲気だ。これでは国民もテロの〈共犯者〉ではないか。

と怒りに駆られながら、終わる。おやすみなさい。火の元だけは気をつけて下さい。「火の用心」

【だいありー】

(1) 8月21日(月) 午後7時、一水会フォーラム。前衆議院議員の小林興起氏が講師で、「主権在米経済について語る」。満員だった。小林さんとは20年ほど前から知っている。ある勉強会で知りあった。藤本敏夫さんもいた。その時は小林さんはまだ通産省に勤めていた。

その後、国会議員に。ところが、郵政民営化に反対して、自民を追われ、選挙では刺客を送られ、落選した。郵政民営化ではない。「郵政米営化だ」という。とって、単なる〈反米〉ではない。アメリカ人にも友人は多いし、小林さんは東大卒業後、通産省に入り、政府派遣留学生としてペンシルベニア大学大学院に入り、MBAを取得している。最近出版した『主権在米経済』（光文社）は世界中の人に読んでもらおうという意図だろう。英語表記が多い。だから、読んでいて、英語の勉強にもなる。「郵政米営化 (*Postal Americanization*)」といった具合だ。「郵政国会」では、せめて50人でも踏みとどまってくれたらと悔やまれるが、すべては後の祭りだ。という記述がある。そして、「後の祭りだ」に英語が添えられている。*(The doctor after death)*。なるほど。こう言うのか。と大いに勉強になりました。受験生にもお勧めの本ですね。

(2) 8月22日(火) 一日中、原稿書いてました。夜は柔道に行きました。講道館も、ずっとお盆休みだったので、体もなまった。大いに汗をかいて闘うのはいい気分だ。

(3) 8月23日(水) 午後、雑誌の打ち合わせ。夜、柔道。2日続けて練習したので、体も、引き締まった。強くなった。「どっからでもかかって来いや！」と夜空に向かって叫んでみた。「何を言ってるんだ」と月に笑われた。

(4) 8月24日(木) 午後、教育関係の雑誌からインタビューされる。「教育基本法」の改正について。教育基本法、それに与党や民主党の改正案。それに国会の質疑を調べて読んだ。かなりひどい質疑、答弁がされていて驚いた。別に教育基本法があるから、子供の非行が増え、学力の低下が起きたわけじゃないだろうに。これさえ変えれば全ては解決する、…といった言い方は

おかしいよ。特に、「愛国心を教える」なんて、ひどい話だ。誰が教えられるのか。といった話を中心にした。

夜、早稲田大学に。「とらとろん」の第三回公演「僕らのつるつる讃歌」を見た。コスモの卒業生が出ていた。なかなか思想的な芝居で、よかった。

(5) 8月25日(金) 河井塾コスモに行く。30日(水)に合宿があるので、その資料を届けに行く。

(6) 8月27日(日) パンクラスを見に行った。

【お知らせ】

(1) 8月28日(月) 鳥越俊太郎さんが編集長のHP「オーマイニュース（日本版）」がこの日からスタートする。楽しみです。

(2) 8月29日(火) 「アサヒ芸能」発売。テリー伊藤さんと私の対談「靖国問題について」が載っている。

(3) 9月6日(水) 「ダカーポ」発売。北朝鮮問題について原稿を書いた。

(4) 9月10日(月) 午後1時。ネーキッド・ロフト。大浦信行監督の映画「9.11～8.15 日本心中」の上映記念トーク。大浦さん、重信メイさん、私が出ます。

(5) 9月11日(火) 「月刊TIMES」発売。「三島由紀夫と野村秋介」について書いてます。

(6) 9月15日(金) 午後7時。ネーキッド・ロフト。社民党の保坂展人さんと私のトーク。「愛国心」について。

(7) 9月17日(日) 午後7時。ロフト。中野ジローさん司会の「塀の中で懲りちゃった面々」。安倍譲二、塩見孝也、蜷川正大、木村三浩、雨宮処凛、そして私。

(8) 『サイゾー』の岡留安則さんの連載対談が単行本になります。私も「天皇問題」で対談しております。9月の中旬には発売だそうです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

2005年 2006年

ページデザイン / 丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年 2004年 2005年
2006年

今週の主張 9月4日 保守派からも始まった靖国神社批判

(1)驚いた。「正論」が靖国神社を批判してたよ！

やっぱり、と思った。保守派からも靖国神社批判が始まった。といっても、A級戦犯分祀論ではない（それは勿論、保守派内部で激論が闘われているが…）。今、問題にしてるのは遊就館のことだ。

8月24日（木）の産経新聞の「正論」欄を見て驚いた。ここまで来たか、と思ったのだ。親米派の逆襲が始まったと思った。

元駐タイ大使の岡崎久彦さんが書いている。タイトルも凄い。

「遊就館から未熟な反米史観を廃せ」

今まで遊就館を批判してきた人は左翼の人ばかりだった。「あの戦争を美化し、侵略戦争を正当化している。許せない！」と。靖国神社は「慰霊」だけでなく、「顕彰」の施設だという。「よくやった」「あなた達の死で私達は救われた」と讃えるのだ。そうすると、「自衛の戦争」「やむを得ぬ戦争」の側面を前面に出し、強調しなくてはならない。アジア解放のための「正義の戦争」だ。と言わなくてはならない。

「あれは誤った戦争だ」「義のない戦いだ」と言ったのでは、〈犬死〉になる。だから、「慰霊・顕彰」するためにも、〈戦争〉そのものも〈大義ある戦争〉だ、と言わなくてはならない。それが靖国神社の理屈だ。又、遊就館の理屈だ。何もそこまで無理して、戦争を正当化し美化することはないだろう。と、僕は思うが。

この「正当化」が進めば、「悪のアメリカ」に「善の日本」が立ち向かったのだ。という構図になる。そんな理屈になる。物量の差で負けたけど、

〈正義〉はこちら側にある。

さらに進むと、こうなる。アメリカは無理矢理、日本を追いつめて戦争に向かわせた。パールハーバーだって、わざと日本にやらせたんだ。アメリカ大統領は知っていて、誘ったのだ。その謀略に日本は乗ったのだ…と。そんな「謀略説」まで出る。昔からあった。今でも信じている人は多い。

遊就館では、さすがに「パールハーバー謀略説」は言わない。しかし、似たような謀略説や、未熟な反米史観があると岡崎氏は言う。日本の誇りを取り戻し、英霊を顕彰するのはいい。しかし、行き過ぎると今の日米関係を壊してしまう。岡崎氏は、それを恐れているのだ。それも、アメリカ人の論説を取り上げながら、遊就館批判をしている。まず、こう書く。

〈8月20日の米紙ワシントン・ポストに保守派の論客として知られるジョージ・ウイル氏が論説を掲げ、安倍晋三氏は新総理になったら靖国に参拝すべからずと論じている〉

特に、遊就館についてだ。ウイル氏は激しく攻撃している。

〈遊就館の展示によれば、『大東亜戦争』は、ニューディール政策が大不況を駆除できなかったので、資源の乏しい日本を禁輸で戦争に追い込むというルーズベルト大統領の唯一の選択肢として起されたものであり、その結果、アメリカ経済は完全に回復した、と言う。

これは唾棄すべき安っぽい（あるいは、虚飾に満ちた、不誠実な=disgracefully meretricious）議論であり…〉

日本の戦争を正当化するために、不当にアメリカを貶めている。これは全くの言いがかりだ、と言う。岡崎氏は（ウイル氏論文の全体には批判的だが）、この部分については全面的に賛同、支持する。さらに、日本では、政府も民間人も、又、教科書も、不当に〈反米主義〉が強調されていると批判する。

〈この展示には、日本では他の国より弱いかもしれないが、世界的にどこでもある反米主義の一部が反映されている。

過去4年間使われた扶桑社の新しい教科書の初版は、日露戦争以来、アメリカは一貫して東アジアにおける競争者・日本の破滅をたくらんでいたという思想が背後に流れている〉

うん、確かにそれはあるな。移民を制限し、「ABCDライン」で日本を経

済封鎖し、日本が暴発するしかないように追いつめた。そう言ってる人は多い。教科書だってそう書かれているのがある。そして、教科書について、さらに凄い話をする。

(2)さらに驚きだ。靖国神社は非を認めて、遊就館の「記述」を改めると言う

〈そして文部省は、その検定に際して、中国、韓国に対する記述には、時として不必要なまでに神経質に書き直しを命じたが、反米の部分は不問に付した。

私は初版の執筆には全く関与しなかったが、たまたま機会があって、現在使用されている第2版から、反米的な叙述は全部削除した〉

エッ！そうだったのかと思った。「新しい歴史教科書をつくる会」の扶桑社の教科書から、「反米的な叙述」は全て削除したという。驚きだ。又、それだけの力があるんだ、この人は。岡崎氏はさらに言う。

〈戦時経済により、アメリカが不況の影響から最終的に脱却したことは客観的な事実であろうが、それを意図的にやったなどという史観に対しては、私はまさにウイル氏が使ったと同じような表現--歴史判断として未熟、一方的な、安っぽく、知性のモラルを欠いた、等々の表現--しか使いようがない〉

これは岡崎氏の言う通りでしょうな。いくら戦死者を顕彰する為とはいいいながら、アメリカに対する言われなき誹謗中傷は許されまい。「結果」から見て、全てを判断してはならない。

日本だって、たとえば1950年の朝鮮戦争の特需で助かり、日本経済は復興した。だからといって、「朝鮮戦争は日本が起こしたのだ。日本の陰謀だ」などとは言えない。それと同じことだ。

ともかく、遊就館の「反米叙述」は目に余る、と岡崎氏は言い、こう断言する。

〈私は遊就館が、問題の個所を撤去するよう求める。それ以外の展示は、それが戦意を鼓吹する戦争中のフィルムであっても、それは歴史の証言の一部であり、展示は正当である。ただこの安っぽい歴史観は靖国の尊厳を傷つけるものである。

私は真剣である。この展示を続けるならば、私は靖国をかばえなくなると

まであえて言う)

最後の文章は凄味があるね。俺は本気だ。これを撤去しなければ、「反靖国」に回るぞ。と言ってるようだ。さあ、靖国はどうする。そして、靖国を全面的に支持する人々はどうする。反米派の人々はどうする。

靖国は今まで、中国、韓国からの批判に対しても、分祀の要求に対しても、一切、耳を貸さなかった。靖国のやってることは全て正しい。それが英霊の声だ。文句を言うな。という態度だった。だから、今回だって、「あんたに言われたくない。かばってもらわんでもよか。勝手に批判、反対闘争でもやってくれ！」と言うのかと思った。それだけ毅然として岡崎氏と闘うのかと思った。今までの頑なな姿勢を考えたら、それしかない。

ところがだ。又しても驚くべき事が起こった。次の日の産経にこんな記事が出ていた。

[「靖国・遊就館。米戦略の記述変更。第二次大戦『誤解招く表現』」](#)

エッ、昨日の今日じゃないのか。8月24日に岡崎氏が抗議、25日には「はい。わかりました。撤去します」と靖国側は言ったのだ。一体、何が起こったんだ。靖国が全面的に誤りを認めるなんて…。

記述を変更・撤去する部分は、勿論、岡崎氏の主張している箇所だ。

〈靖国神社が運営する戦史博物館「遊就館」が、館内で展示している第二次世界大戦での米国の戦略に関する記述の一部について、「誤解を招く表現があった」として見直し作業を始めたことが、24日、わかった〉

24日の「正論」を見て、靖国神社は即座に、「はい。悪うございました。直します」と言ったのだ。こんなことがあるのか。

〈この記述をめぐっては、遊就館の歴史観に理解を示す言論人からも「一面的な歴史観」との指摘があり、同館としても主観的な表現があることを認め、内容を変更することを認めた。同館展示物の大幅な記述の変更は異例〉

本当に「異例」だ。今まで靖国は一切、「妥協」も「話し合い」もして来なかった。たとえば、A級戦犯分祀、国家護持、中国・韓国からの批判。そして韓国・台湾の遺族による「祖霊奪還」要求にも、全て、耳を貸さず、頑なに拒否し通してきた。それなのに、今回はどうしたことか。前日に岡崎氏が、このままでは靖国をかばえなくなる、と言ったからか。「私は真剣であ

る」と言ったからか。そんなに岡崎氏の言葉は重いのか。

日本を戦争に追いつめて、アメリカは参戦することにより、経済復興した。この「歴史観」は大幅に訂正される。岡崎氏の力も大したものだ。産経も、それを認めている。

〈この記述をめぐっては、元駐タイ大使の岡崎久彦氏も24日付本紙「正論」で、「安っぽい歴史観は靖国の尊厳を傷つける」と指摘、同館に問題の個所の削除を求めている。岡崎氏は「早急に良心的な対応をしていただき感動している」と話している〉

(3)テリーさんとの対談で、「遊就館はイデオロギー過剰だね」と批判した直後だった

「正論」で批判されたので靖国神社は一日にして、「削除・変更」を決めたのか。ところが新聞をよく読むと、そうでもないらしい。(靖国の面子かもしれないが)、実は前から考えていたという。それと岡崎氏の批判が時期的に重なり、「実は、私たちも削除しようと思ってたんですよ」と発表した。ということらしい。

〈こうした記述について、同館では4月ごろから見直しの検討を始め、7月ごろから本格的に見直し作業に入ったという〉

靖国神社だって、「記述」の一方的なことや、不備なことは前から認めていたんだ。ただ、直すのはシャクだ。でも、親米派の岡崎氏に言われた。このまま放っておくと、アメリカの圧力がかかるかもしれない。そんなことを考えたのかもしれない。だから、「実は私達も見直しを考えてたんですよ」と言ったのかもしれない。

まア、経過については、問題もあるが、「安っぽい」「一面的」な歴史観が訂正されるのはいいことだ。他にも、まだまだ訂正することはあるだろう。その第一歩になった。

ところで、この日(8月25日)の産経には「遊就館」のいわれについて書いてあった。中国の古典「荀子」の「遊必就士(高潔な人に就いて交わり学ぶ)から2文字を取ったという。中国の「荀子(じゅんし)」から取ったのか。その割には中国に批判的、蔑視的だよな、靖国は。それに、今の日本は。中国だって、複雑な気持ちだろうよ。

英霊を祀るのに何故、「遊」という字が入ってるのか。これで疑問が解け

た人もいるだろう。「遊」には「あそぶ」の他に、「学ぶ」の意味があるのだ。「学ぶ」の反対が「遊ぶ」だろう。と反論する人もいるだろうが、そこが「遊」の深さだ。たとえば、『現代漢語例解辞典』（小学館）を引いてみる。

「遊」には、「あそぶ」「ぶらぶらする」「およぐ」の他に、「家を離れる・旅をする。仕官、勉学などのために他国へ行く」という意味がある。離れて学ぶのだ。たとえば「遊学」。けっして、遊ぶのではない。遠くへ行っ
て学ぶのだ。

又、「離れて存在している。一定の場所に所属せず、自由に動く」という意味もある。「遊軍」「遊牧」などだ。決して、ブラブラと遊んでるわけじゃない。遊軍は、いつ声がかかってもいいように準備している。実際、新聞社では「遊軍記者」が一番忙しい。遊牧だって、旅から旅で忙しい。「遊説」という言葉もある。全国を回って、演説をする。大変だ。

この『辞典』には「遊就」もちゃんと出ている。

遊就（ゆうしゅう） 故郷をはなれて善良の士のもとに行き交わること。立派な人々について、その行いを見習うこと。

じゃ、遊就館を見て、国のために死んだ人々のことを学び、あとに続きたいということか。遊就館は、「戦没者顕彰」と「近代史の真実の明示」を目的としている。でも、「慰霊」だけでいいんじゃないのか。「歴史観」を示すとなると、ついつい、「自衛戦争」「聖戦」だといいたくなる。そうすると相手の国を誹謗し、批判しなくてはならない。

8月29日（火）発売の『[アサヒ芸能](#)』でテリー伊藤さんと対談した。靖国の話が中心になった。テリーさんはこう言っている。

「僕はこの前、靖国神社の中の遊就館に行ってきたんですけど、あそこはムチャクチャですね」

「かなり、イデオロギーが過剰ですね」と私は応じている。さらにテリーさん。

「まさにタイムスリップしてて、これはいくらなんでも違うだろうと。英霊を祀っているのと意味が違うんじゃないかと」

そして私。

「そうですね。かつては侵略戦争に利用されたんだ。犬死だと言われたときがありましたから、その反動で、あの戦争そのものが全部正しかったんだ

というところまでいっちゃってるんですね」

「そうか。余裕がないんですね」とテリーさん。

この対談をした直後に、岡崎さんの発言があり、靖国神社の「記述変更」発言があった。「富田メモ」以来、揺れ動いている靖国神社だ。

ところで、「遊び」について、もう少しこだわってみる。オランダの歴史家・ホイジンガの説によれば、遊びとは自由で、日常生活とは切り離されて「ここで」、「このときに」営まれるものである。という。スポーツや芸術はそうだ。彼の『ホモ・ルーデンス』（中公文庫）によれば、「遊び」はさらに拡張して、宗教や政治も「遊び」の中から生まれたものだという。なるほど、それは言える。

廣中直行の『やめたくてもやめられない脳--依存症の行動と心理』（ちくま新書）を読んでたら、このホイジンガの「遊び」のことが書かれていた。面白い記述がある。

〈この本（注：ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』）には日本の例も載っている。私たちは高貴な人のなさを「遊び」と考えている。例えば「死んだ」と言わずに「ご薨去（こうきょ）遊ばされた」と言う。つまり日本人の感覚では高貴な人々は真剣に生きてはいけないのだ。それはともかく、文明を作った脳の余力は現代の私たちにも残っていて、私たちは「遊ぼう」とする〉

ウーン、そうなのかと唸りましたね。高貴な人にとっては全てが「遊び」なのか。生きるのも、食べるのも、交わるのも、亡くなるのも…。「お食べあそばす」し、「お亡くなりあそばす」のだ。「Hあそばされる」のだ。でも、敬語というか、丁寧語にするための語尾変化のような気もするが。今度、古文の先生に聞いてみよう。

じゃ、「遊就館」で顕彰されている英霊の方々も、国のために、お亡くなりあそばしたのかもしれない。うるさい世間を超えて、自由に遊んでいるのかもしれない。「まあ、そうカタく考えずに…」と言わっしやり遊ばされているのかもしれない。

【だいありー】

(1)8月28日(月) 午後2時から、中日新聞の取材を受ける。愛国心、天皇制、テロなど、今の日本の危機・不安について話す。

今日から「オーマイニュース」（日本版）がスタートした。随分と話題に

なっている。コラムは月曜が斎藤貴男さん。火曜は僕。水曜以降は見てのお楽しみということだ。

(2) 8月29日(火) 「オーマイニュース」の僕の連載は、タイトルが「『愛国』の座標軸」。編集部が考えてくれたが、いいタイトルだ。これから毎週か。大変だ。プレッシャーだ。週刊の連載なんて久しぶりだ。「SPA!」の「夕刻のコペルニクス」以来だ。がんばってやろう。靖国神社のことを書いたが、「随分と反論、批判されてますよ」と見た人に言われた。そうか。いいことだ。「一番批判の多いコラム」を目指そう。

『アサヒ芸能』（9月7日号）発売。テリー伊藤さんとの対談が載っている。「天才テリー伊藤。オフレコ厳禁」。靖国や愛国、市民運動の話で盛り上がった。今回は第472回。じゃ、日本中の主だった人々は全て会ってるんじゃないか。「そうですね。2回以上出てもらった人もいます」と言っていた。

「僕も鈴木さんみたいに、立場を越えてどんどん話し合っていく姿勢を見習いたいなあ」とテリーさんは締めてくれていた。うれしいですね。でも、テリーさんこそ、立場を越え、いろいろな人と話し合っている。偉いし、うらやましい。6年ほど前、塩見孝也さん、テリーさん、私の三人で話し合ったこともあった。

(3) 8月30日(水) 河合塾コスモの合宿。といっても牧野剛先生が忙しくて、1日だけの合宿。ひたすら本を読む。

(4) 8月31日(木) 1日中、図書館。調べることが多くて大変だ。

(5) 9月1日(金) 10時半、山形新聞社の取材。1時半から雑誌社の打ち合わせ、取材。4時からJR東労組の勉強会と暑気払い。松崎明さんとも久しぶりで会った。週刊誌で大々的に取り上げられ、叩かれてたので心配してたが、元気だ。『愛国者は信用できるか』を組合で読んで、勉強しましたよ。と言っていた。ありがたいです。

【お知らせ】

(1) 9月6日(水) 『ダカーポ』発売。北朝鮮問題について書いた。

(2) 9月10日(月) 午後1時。ネーキッド・ロフト。大浦信行監督の映画

「9.11～8.15 日本心中」の上映記念トーク。思想映画だ。日本のこと、戦争のこと、天皇制のことを熱く語り、問いかけている。トークには、大浦監督、重信メイさん、そして私が出ます。

(3)9月11日(火) 『月刊TIMES』発売。私の連載「三島由紀夫と野村秋介の軌跡」は第23回だ。

「決定版・三島由紀夫全集」(新潮社)の「補巻」を読んでたら、巻末に「主要参考文献目録」が出ていた。何と、「月刊TIMES」の連載も出ていた。又、『スタジオ・ボイス』(猪瀬直樹さんと対談した)、『中州通信』(三島特集号)、『武道通信』(三島特集号)も出ていた。詳しい。よく調べていると驚いた。

(4)9月14日(木) 14日か15日に、中日新聞に載るそうです。

(5)9月15日(金) 午後7時。ネーキッド・ロフト。社民党の保坂展人さんと私のトーク。「愛国心」についてです。

(6)9月17日(日) 午後7時。ロフトプラスワン。中野ジローさん司会の「塀の中で懲りちゃった面々」。なぜか私も出ます。

(7)10月29日(日) 神奈川で講演会を頼まれました。私なんかを呼んでくれて、ありがたいです。詳細は又、後ほど。

(8)8月5日(土)に池袋ジュンク堂で森達也さんと対談したのが、あるサイトに全文発表されるそうです。今、校正しています。

(9)岡留安則さんの『サイゾー』対談をまとめたのが、もうすぐ出るはずです。宮台真司、高岡健、私の鼎談本はまだ出ないのだろうか。

(10)面白い羊羹をもらった。北海道で発売されている。筒状になっていて、押し出して、糸で切って食べる。でも、糸を巻きつけて、切り取るなんて、ちょっと残酷だ。山口県の中谷歩(あゆみ)さんも学校の研究室で紐で、首をしめられて殺された。それを思い出しちゃった。「ごめんなさい」と羊羹に謝りながら、糸を羊羹の首に巻いて、切り落として、食べている私です。罪深い私です。お許し下さいませ。

でも、あゆみさん、あやかちゃん、あすかちゃん、あいりちゃん、あいちゃん、あややちゃん、あいふるちゃん…と「ア行」の人ばかりがなぜ殺さ

れるのだろうか。「ア行殺人事件だ」と呼んでた犯罪評論家もいました。神の見えざる手が働くのでしょうか。いや、神じゃない。悪魔の見えざる手だ。あるいは、犯罪者の集合的無意識なのか。犯罪者（特に殺人者）というのは妙に几帳面な所がある。「ア行から始めよう」と思うのかもしれない。では、「ア行の女」はどうしたらいいのか。「ラ行」か「ワ行」に名前を変えるんですな。自衛の為に。そんなことを真面目に論じてましたよ。その犯罪評論家は。凄いですね。それは誰かって？ そんなことは、詮索しても仕方なかとでしようが。

(11)関口君が「太陽」の感想を書いてくれました。ありがとうございます。関口君もコーナーをもって連載して下さいよ。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

1999年 2000年 2001年 2002年 2003年 2004年 2005
年 2006年

今週の主張9月11日 おめでとうございます。 =紀子さま男子ご出産=

おめでとうございます。9月6日は日本列島が喜びで沸き返ってました。紀子さまが男子ご出産。皇室は41年ぶりの男子です。

私も一日、テレビを見てました。号外が出る。お祝いの行進がある。夜になると提灯行列まで行なわれる。街を歩く人々も、皆、「おめでとうございます」と言っている。「これで皇室も安泰ですね」と言っている。「経済も上向きになりますよ」「少子化問題も解決ですよ」と言う人もいる。

不思議なことに、秋篠宮さまも、紀子さまも、「生まれるまで性別は分からなかった」と言う。「あえて聞かなかった」と。自然に任せた方がいいと思ったようだ。でも、永田町や新聞記者の間では、かなり前から、「男の子です」と断言する人が多かった。勿論、医師は分かっていた。しかし、秋篠宮さまにも伝えないのだ。政治家や新聞記者に伝えるはずはない。

でも、どこかから洩れた。前日、5日には、ある大臣は「男の子であることを期待します」と言っていた。問題発言なのに、騒がれなかった。「分かっている」ことだから、なのか。

「経済界の動きを見ていると完全に男の子出産なんですよ」と打ち明けてくれた記者もいた。永田町もそうだったのだろう。それを前提にして動いていたという。

又、号外は、「親王（男の子）なら4ページ」「内親王（女の子）なら2ページ」という話も事前に聞いた。多分、どこの新聞社も4ページのものを用意したのだろう。

今の天皇陛下が生まれた時と似ている。お祝いのサイレンが、「親王なら二回、内親王なら一回」と決まっていたのだ。

昭和天皇は良子皇后と結婚されたが長い間、男の子が生まれなかった。女

の子ばかり4人。「やはり側室だ」と側近の者はすすめた。しかし、昭和天皇は断固として拒否した。そしてやっと第5子誕生。男の子だった。今と同じように号外が出る。日の丸のパレードがある。提灯行列がある。花電車が走る（これだけは今回ないか）。

待ちに待った男子誕生という点では同じだ。この時は、「皇太子さまお生まれなった」という歌まで出来ている。実にいい歌だ。（今回も、これを流したらよかったのに）。北原白秋作詞、中山晋平作曲だ。こんな歌だ。

日の出だ 日の出に 鳴った鳴った ポーオポー
サイレン サイレン ランランチンゴン
夜明けの鐘まで
天皇陛下 お喜び みんなみんな かしわ手
うれしいな 母さん
皇太子さま お生まれなった

親王だったから、サイレンサイレンと二度鳴ったのだ。素朴な、喜びの感情がよく出ている。今回も、これで皇室典範改正問題も、しばし沈静化だろう。中曽根さんは、もう「この問題はなくなった」と言っていた。しかし、安定した皇位継承を考える上では又、出てくる問題だ。ある解説者が言っていた。「次の代の人にいい知恵を出して考えてもらいましょう。少なくとも30年間の猶予を頂いたんですから」。なかなか、含蓄のある言葉だ。

皇室典範改正案提出は、次期通常国会見送りだと6日の夕刊には出ていた。

でも論議が高まった今こそ皇室典範問題は、はっきりすべきだという人もいる。以前のように切羽詰まった地点での論議ではない。だったら、余裕を持ち、一つの安心感をもって、論議できるかもしれない。いろんな論議があっていい。その上で、あとは天皇陛下に決めて頂ければいいと思う。

〈ここまでは、急遽、書いた文です。以下は、いつもの原稿です。でも、大正天皇の話です。あのベルツが見た大正天皇の姿がいきいきと描かれています。そんな貴重な本に出会ったのも、この喜ばしき日のご縁でしょう〉

今週の主張 9月11日

「日本の近代医学の父」ベルツと再会した

(1)ドイツに帰国して、ローザ・ルクセンブルグに会う

『ベルツの日記』（岩波文庫）については、このHPにも以前、詳しく書いた。それに、『愛国者は信用できるか』にも書いた。第6章の「謙遜の日本史」に紹介した。〈『ベルツの日記』に描かれた自虐的日本人〉だ。

ベルツは「お雇い教師」としてドイツから招かれ、明治9年（1876年）から26年間、東大にいて教えた。「日本の近代医学の父」といわれた。その間、首相や政治家はおろか、天皇、皇后、皇太子とも親交を重ね、病氣も診ている。特に皇太子（のちの大正天皇）とは深い付き合いがあり、皇太子も心を許しているんなことを話している。

ベルツの眼を通し、我々も大正天皇のこと、日本の皇室のことを知ることが出来る。又、当時の日本人のことも…。ベルツは日本人に、進んだドイツの医学を教える。と同時に、日本人から日本の素晴らしさや歴史を学ぼうとする。それで、日本の知識階級に、そのことを言う。「日本の歴史を教えてください」と。それに対する日本人エリートの答えがこうだ。

「われわれには歴史はありません。われわれの歴史は今からやっと始まるのです」 何とも自虐的だ。「何もかもすっかり野蛮なものでして」と日本のことを恥じている。ベルツの方が驚き、怒っている。でも、こうした自虐的というか、「極度の謙遜」の精神を持った人々が、明治の日本を創ったのだ。そうした話を書いた。

ともかく、刺激的で、教えられることの多い本だった。

でも、その「続編」があったなんて…。全く知らなかった。26年、日本にいてベルツは明治38年（1905）、ドイツに帰る。しかし、3年後、一度日本に来ている。皇太子の病気を診るためにだ。その時の、皇太子について話すベルツの文章が実にいい。この時は、3ヶ月半しか日本にいない。又、ドイツに帰り、1913年、亡くなる寸前まで日記をつけている。それがこの本だ。ベルツが病氣だと聞いて、大正天皇は自ら見舞いの手紙を書き、お見舞いのお金を送ってよこす。こんなにも親しくしてたのだ。さらに、ヘルツがアメリカを訪問した時の日記もある。

又、これは衝撃的だったが、来日間もない頃、日本の「ムスメ」と同居していた。その愛と、悲しくも残酷な別れ。その時の日記も載っている。

ベルツは後に、別の日本人と正式に結婚し、子供もつくった。だから、遺

族にとってはこれは「スキャンダル」であるし、載せてほしくなかった。

『ベルツの日記』（岩波文庫）では一切、触れていない。僕も知らなかった。

彼女のことを「エラ」と書いてるが、本名ではない。「タツ」というらしい。発音しづらいので、ベルツが「エラ」と呼んだのだ。旧古河藩士、浅野救七郎の娘らしい。

この本は、若林操子監修、池上弘子訳だが、「序文」で若林は「エラ」について言う。

〈世俗的には「ラシャメン」と呼ばれる種類の女性であった。ベルツは夫人ハルを知るずっと以前、来日して2年目に彼女を雇い、愛し、そして裏切られた。その日記は喜びと苦悶の告白だが、生身の人間の真摯な記録として、本人や友人の人格を傷つけることにはなるまいと確信して訳出することにした〉

では、ドイツに帰ったベルツの話だ。1876年、27才の時に日本に来て、1905年、ドイツに帰った時は56才だ。ドイツでは1906年、貴族に叙される。1907年、東京から二枚の写真が届く。ベルツの胸像の除幕式を撮った写真だった。

又、この年の8月18日から24日まで、シュトラットガルストで「第2回インターナショナル第7回大会」が開かれる。このために日本から来日した加藤時次郎（医師）に誘われてベルツも参加している。植民地問題、婦人参政権についても議論されている。婦人参政権については、「これは資本主義を助けるものだ」という発言が多くあったという。まだ婦人の意識も低かったのだろう。日本でも敗戦後婦人参政権は認められたが、「かえって保守派の票が倍になる」と思われた。妻は皆、夫に従って一票を投ずると思われていたからだ。

この第2インターには、ベーベルや、あの有名なローザ・ルクセンブルグも出席していた。ローザといえば、日本の新左翼には絶大な人気がある。ドイツ共産党設立に参加し、1919年、逮捕され監獄に連行される途中で虐殺された。「レーニンかローザか」といわれる位、日本の新左翼の人気を二分した。京大助手の滝田修は「ゲリラの教祖」といわれたが、彼の専攻はローザ・ルクセンブルグだった。

そんなに凄い女性革命家だ。伝説の人だ。その人にベルツは会っている。さぞや感激したのかと思ったら、違うのだ。何と、こう書いている。

〈私の真下のすぐ前の席にローザ・ルクセンブルグが座っていた。こんなにいやな女はめったに見たことがない。醜悪にむくんだユダヤ人のやり手婆か、おんな女衞（ぜげん）といったタイプだ。

それはそうと、ルクセンブルグは絵心があるらしく、まわりにいる人間たちを大胆なタッチでスケッチしては時間をつぶしていた〉

さんざんな書きようだ。個人的にも嫌なことがあったのだろうか。高校の世界史の教科書にはローザの写真が出ていた。鼻筋の通った美人だった。それで頭がよくて、革命家だ。凄い人だと思った。しかし、オバちゃんになってからは見るかげもなく醜くなったのか。まわりの人達も、「ローザ浄化計画」をしてやればよかったのに。

(2)日本再訪。大正天皇との再会

1908年。ベルツは日本を再訪する。3月30日、皇太子（のちの大正天皇）に会う。

〈皇太子を診察することこそ、日本への旅の唯一の目的であり、東宮は古くからの友人のように私を歓迎された。1時間もあれこれと雑談を交わす。体調はきわめて良好とお見受けした。日に焼けて太られたようだ〉

そして皇太子の生活を紹介している。これは外国人のベルツだからこそ書ける。神と崇めた日本人では、こうした人間的側面は書けなかったろう。（ソクーロフの「太陽」を一瞬、連想した）。ベルツは書いている。

〈皇太子の家庭生活。こんなに気持ちのよい、あたたかな家庭は、日本広しといえどもかつて見たことがない。しかも、ヨーロッパ人の感覚に照らしてもそうなのだ。ご一家は洋服を着て、椅子に座り、さっそうと歩く生活を送っておられる。そのため、おじぎしたり、ひざまずいたりといった日本式の仰々しい作法もおのずから影をひそめていた。それだけでも、家族どうしの関係はどれだけ開放的になっているかわからない〉

日本人ではこうした観察や〈視点〉がない。なるほどと思った。大正天皇というと子供の頃から弱く、精神的にも病気を抱えていた。と言われていた。しかし、ベルツの伝える皇太子は、元気で、明るく、いつもベルツに優しい。（原武史の『大正天皇』朝日選書も、大正天皇の知られざる実像を伝える貴重な本だ）。ところで、ベルツはそうした親しさからか、何と、こん

なことまで言う。

〈皇太子ご一家がこうして親子水いらずの生活を送っておられるのは、僭越ながら私の力も幾分かはずかかってのことである〉

エッと思った。そんなにベルツは偉いのか。よく読んでみると、こういうことだ。それまで、皇室には「一家団欒」がなかった。子供が生まれたり、引き離されて臣下に預け、乳母に育てられた。「皇室のメンバーをたがいに遠ざけて疎遠にし、結束の芽を摘むことで国の実権を奪われないようにするのが將軍家のねらいだった」とベルツは書く。

それはあったかもしれないが、それだけではない。又、徳川幕府がつぶれ、明治になってもこの「制度」は続いていたのだし。

親の元で育てると、つい甘くなる。厳しく「帝王教育」しなくてはならない。だから離れた。それと、何かあった時、クーデターとか革命とか。皇族が一ヶ所にまとまっているよりも、分散してる方が、危険も分散できる。…そう考えたらしい。

しかし、「一家団欒」が出来ないことは事実だ。実に淋しいことだ。だから、ベルツはずっと言っていた。

〈私はあらゆる機会をとらえて、この無意味な習慣に口を酸っぱくして異議を唱えたが。長い間いっこうに実を結ばなかった〉

しかし、やっとのことで実現したのだ。ベルツの提言が通ったのか。あるいは、保守的な側近が亡くなったということもある。又、体の弱い皇太子にはお子たちが一緒にいた方がいいと考えたのか。いろんな理由があったのだろう。多分、明治天皇の意向が大きかったのかもしれない。この年、5月19日の日記にはこうある。

〈天皇と皇后に謁見。皇太子の治療に効果がみられたことに対して、おふたりからお礼の言葉を頂戴した。その後十二時から宮内大臣田中伯爵が、°天皇の名において」芝の浜離宮で私のために午餐会を催してくださった〉

凄いね。こんなに大事にされてたんだ。もしかしたら、皇太子も、ベルツが外国人だからということで、自由に話し、接することが出来たのかもしれない。日本人なら皇太子に対し、おそれいり、かしこまり、とても自由に話せなかったろう。外国人だから、（時には遠慮なく。神とも思わず）、自由に話した。それが、皇太子には嬉しかった。心を許したし、明るく話せた理

由かもしれない。

敗戦後、昭和天皇は皇太子の家庭教師にアメリカ人のヴァイニング夫人をつけた。これも同じ理由かもしれない。又、「笑わない愛子さま」と週刊誌に書かれていた愛子さまも、オランダでは本当に嬉しそうに笑っている。これだって同じ理由、同じ効果かもしれない。

さて、ベルツだ。日本に3ヶ月半いて再びドイツに帰る。1909年、悲しい知らせが届く。伊藤博文がハルピンで暗殺されたのだ。ベルツは、伊藤とも親しかったし、随分と面倒をみてもらった。「無二の友を失ってしまった」と日記に書く。そして。

〈伊藤は日本の政治家のなかで最も穏健な政策を主張してきた。朝鮮でこれ以上苛酷な措置がとられずにいるのは、ひとえに伊藤公のおかげだ。よりにもよってその伊藤を朝鮮人が暗殺するとは、悲惨きわまりない〉

1910年8月29日の日記。

〈今日をもって大韓民国は消滅した。併合が正式に発表されたのである。

朝鮮の王室は日本の皇室に吸収され、将来は日本に移るだろう。結論からいえば、朝鮮人は日本の支配下に入った方が以前よりも確実によくなると考えられる。イギリスもロシアもなんら異議を唱えていないのが注目に値する〉

日本びいきだからか。あるいは、親友・伊藤公を殺されたからか。さらに、当時は、植民地を持つことは別に悪いことではなかった。そういう、世界のリアルなパワー・ポリティックスからか。ベルツもやはり、「時代の子」だ。

〈1912年4月1日 タイタニック号の沈没。

7月26日 日本の天皇が臨終の床にある。

7月28日 天皇に関する個人的な思い出を書き送ってほしいという新聞の依頼が、あちこちから殺到している。不謹慎と思われるので、すべて断わっている。〉

この頃から、もうあったんだね。「予定稿」を書いておくのが。昭和天皇が亡くなった時、問題になった。何ヶ月も前から、亡くなった時を予測して、多くの人が原稿を頼まれていた。新聞社やテレビ局が天皇の歩みや時代

背景を集めて、準備するのは分かる。しかし、識者、学者が、「とても悲しい」「残念だ」と事前に原稿を書く。これはおかしいと思う。僕のところにまで依頼がきた。断わった。それで、そこからはもう注文が来ないかもしれない。そう思ったが断わった。ベルツと同じだ。不謹慎だよ。

(3)大正天皇のことを案じながら、ベルツは死んだ

〈7月30日 本日、午前0時3分、天皇睦仁が東京にて死去された。

7月31日 世界中の新聞紙上に天皇を称賛する最大級の死亡記事が発表された〉

1913年。1月13日、ベルツは64才になる。病気がちだ。

〈2月4日 東京の渡辺宮内大臣から封書が届いた。中には天皇（注：大正天皇）みずから私の健康状態を気づかわれる手紙と、壱千円の御下賜金が入っていた〉

大正天皇はベルツのことを「無二の友」と思っていたのかもしれない。わざわざお見舞いを書いている。それに、この時は、大正天皇自らも病気だったのだ。ベルツは死の床にありながら、自分のことよりも、天皇のことを心配している。

1913年5月23日。この日が日記の最後だ。これから3ヶ月後の8月31日にベルツは亡くなる。その最後の日記がドラマチックだし、感動的だ。

5月23日、「ノイエス・タークブラット」紙の記者から電話があり、天皇嘉仁が肺病のため急死したと知らせてきた。しかし、それは誤解だった。その直後の日記だ。

〈しかし、（公式に伝えられるところによれば）天皇が肺炎を起こしておられることは確かだ。それとも新たに結核が発病したのであろうか？ われわれの進言によって天皇はスポーツマンらしい筋骨たくましい体になられたが、内外ともにますます難問の多い昨今、治世をつかさどることによる興奮に耐えられるものかどうか私は疑問視していた〉

大正天皇が亡くなるのはこの13年後だ。ベルツは3ヶ月後に亡くなる。でも、自分のことよりも、ひたすら天皇の健康を心配している。日記はこう続いている。

〈健康ならば、すぐにでも東京へ向かわなくてはならないだろう。私の力が役に立つ時には、いつでもうかがうと約束したのだから、今、あちらではきっと私を必要としているのだろう。だが悲しいことに、自分自身の具合がすこぶる悪い〉

これが最後だ。最後の日記はこうして終わっている。あとは、ペンを執る気力もなく、3ヶ月後に亡くなる。64才だった。

亡くなる直前まで、天皇のことを思い、日本を思って死んだ。日本の「近代医学の父」だった。「近代日本の父」だったかもしれない。日本人の一人として、ベルツには感謝したい。ありがとう。

と、感動的な所で終わろうと思ったが、愛人「エラ」のことがあったね。幕末日本で、ハリスの面倒を見た女性は「唐人お吉」といって芝居や小説にもなった。しかし、同じ「ラシャメン」のエラはそういう風に描かれることはない。遺族が隠していたからだ。又、この女が「性悪女」だったからでもある。

誰かがお世話したらしい。貧しくて病気の父をかかえた、かわいいムスメがいる。女中がわりにお側において下さいよ、と言った。1877年10月。来日して1年ちょっとだ。ベルツは28才だ。元気だし、たまっている。「彼女はひたむきに私を愛しており、私も心底から好意を抱いている」と日記に書く。メロメロだ。1878年10月の日記には…。

「私はわが身を犠牲にしたこの娘をものにしたくなかった。その貞操を代償にとることなしに、金を払った方がよいと考えた」

立派ですね。偉いですね。だったら、お金だけ払って、何もしないで家に帰してやればよかった。かわりに、ブタでも飼うとか。でも、28才のベルツだ。若いムスメっ子と一緒にいたら、そりゃ我慢できんとですよ。だから、自然に、なるべくしてなった。

しかし、その愛の花園は数年で破局を迎える。何と、純真でかわいらしいムスメっ子が、ベルツを裏切ったのだ。浮気をしたのだわさ。

〈1881年3月19日。〉

おお神よ！ これはたった一週間の出来事だったのか！ 極度の緊張を強いられ、恐るべき幻滅を味わった一週間。苦痛に満ちた一週間だった！ すべてが真実であり、私が聞いていたよりも、これまで予想したよりもはるかにひどいではないか！

エラの恋人は一人ではなかった。いや三人もいたのだ。順番にあげれば、最初は私の別当、それからいとこのオトキチ、そして--ある博徒。今、エラはこの博打うちと市中に所帯を持ち、私の金で暮らしている。厚かましく私に嘘をつきながら、何年も騙してきたのだ。かつて、私ほど手ひどく裏切られた人間がいるだろうか？

(……)

エラは泣き崩れ、すべては為にする中傷だと弁明した)

かわいそうなベルツ。大正天皇を治療し、伊藤首相の「無二の友」のベルツ。近代日本の父であるベルツ。日本にとってそんなに大事な、偉い人を騙すなんて、いかんがな。

しかし、よくこんなことを日記に書いておくよね。几帳面だったんだね。普通なら、思い出したくもない。何十年かたって、書くのなら分かる。リアルタイムで書いたら、かえって怒りが強まり、キレて、チクショー、殺してやる！となるだろう。今の若者なんか皆そうだ。「裏切られた！許せん！」と殺す。うるさい母親も友人に頼んで30万で殺してもらおう。メールをしたのに返事がない。「オラを、なめとんのか！」と殺す。「女はすべて敵だ。じゃ、ア行から殺していこう！」と殺す。今は皆、衝動的だよ。衝動殺人の時代だよ。

ベルツだって、殺したいと思ったろうね。ベルツなら、殺したって、「殺人罪」にはならなかったろう。「無二の友」伊藤たちが、警察に命じて、「事故死」にしてくれたんじゃないかな。酒に酔って妻を斬り殺した黒田清隆だって、殺してもおかまいなしになったんだし。

でも、ベルツは耐える。かわいそうだね。ただ、こんなに俺は金を出したのに…と、グチる。

〈私はおまえを受け入れ、きちんとした着物を着せ、面倒を見てきた。人もうらやむ身分にしてやった。おまえの父や兄弟が病気になれば、なおしてやった。その私に、おまえは何をしてくれたんだ。なにを？ おまえは私を欺いた。こんな騙され方をした者はいない〉

と、グチや未練が綿々つつづられている。そんなメソメソとした状況の中で、この原稿も終わるのだがに。ベルツさんご苦労さま。エラの裏切りはすみませんでした。日本人を代表して私が謝ります。

【だいありー】

(1)9月3日(日) 一日中、中野図書館にいた。明治天皇の歌だとされる「罪あらばわれを咎めよ天つ神 民は我が身のうみし子なれば」の出典を探していた。ネットで検索したら、明治天皇の歌を収めた「持出禁止」の貴重書があった。それを2冊借りて、図書館で調べた。でも、なかった。

ただ凄い本を見つけた。『明治天皇御製読本』（聖書房）で、昭和7年発行だった。なぜ日本が神国なのか。忠とは何か。誰が愛国者だったのか。歴史的、論理的に書いている。知らないことも多かったし、読み耽ってしまった。厚い本だが、5時間も図書館にいて、読破した。大事なところは、コピーした。いつか、このHPで紹介しよう。「忠」について考えさせられた。

(2)9月4日(月) 一日中、原稿を書いていた。夜、スポーツ会館に行く。最近、運動しているせいか胸が大きくなった（ような気がする）。ペチャパイの人には申し訳ないが。

(3)9月5日(火) 午後2時四谷に。天皇問題で取材を受ける。何人かが喋って、本になる。

(4)9月6日(水) 秋篠宮妃の紀子さまに男子誕生。お目でたい。ずっとテレビを見ていた。夜、柔道に行く。

(5)9月7日(木) 今日から河合塾コスモが始まる。忙しくなる。ジャナ専は9月25日(月)からだ。夜、元「楯の会」の伊藤邦典君が上京し、会う。「楯の会」が共同通信で取材され、9月2日(土)～9月4日(月)の全国40紙に掲載された。凄い。私のコメントも載っている。。

(6)9月9日(土) 11時から見沢知廉氏の一周忌墓前祭。午後から、雑誌の対談。夕方、横浜で大久保鷹さんの芝居を見る。ベケット生誕100周年記念の「しあわせな日々」（劇団世界劇場）。意欲的な芝居で、面白かった。

(7)9月10日(日) 午後1時、ネーキッド・ロフト。映画「9.11～11.15。日本心中」の公開記念イベント。監督の大浦信行さんと久しぶりに会った。土屋豊さん、それに映画に出た重信メイさんも出席してくれた。この思想的な問題作について大いに語り合った。映画は11月4日(土)よりポレポレ東中野でレイトショー（8:20から）が行なわれます。

【お知らせ】

(1)山形新聞では、「鶴岡・加藤氏実家放火事件。識者インタビュー」を連載していますが、その第3回目として私が出ました。9月3日(日)の朝刊です。8段の大きな記事です。「言論には言論で挑む」「オープンな議論期待」と見出しが付けられています。山形から私の家まで来て取材してくれました。なかなかよくまとまっています。

(2)『ダカーポ』（9月20日号）が9月6日(水)に発売になりました。特集が「朝鮮半島との正しい付き合い方」。天木直人、石破茂、宮台真司、志位和夫、福島みずほ、鈴木宗男…など、11人が書いてます。私も書いてます。

(3)9月11日(火) 「月刊TIMES」発売。

(4)9月14日(木) 7時～一水会フォーラム。ホテルサンルート高田馬場会議室。講師は中国民主運動海外聯席会議アジア代表の相林さん。演題は「靖国参拝を問題化した中国共産党の日本への内政干渉」

(5)9月15日(金) 中日新聞にインタビュー記事が載るそうです。

(6)9月15日(金) 午後7時半。ネーキッド・ロフト。社民党の保坂展人さんと私のトークです。「愛国心」についてです。

(7)9月17日(日) 午後7時。ロフトプラスワン。『塀の中で懲りちゃった面々』。安部譲二、塩見孝也さんら。何故か私も出ます。

(8)9月19日(火) 『噂の真相・闘争外伝』（インファバーン）が出ます。岡留安則さんが月刊「サイゾー」で連載した対談をまとめたものです。私も出ております。

(9)9月25日(月) 「季刊教育法」（⑭エイデル研究所）が発売です。教育基本法改正問題について喋ってます。「誰が愛国心を救えるのか--大人にこそ必要な『愛国心教育』」です。

(10)10月3日(火) 午後7時。青山ブックセンター。『噂の真相・闘争外伝』の出版記念トーク。岡留安則さんと私です。

(11)10月29日(日) 神奈川県で講演です。

(12)「太陽」「蟻の兵隊」は好評上映中です。これはぜひ見て下さい。考えさせられます。

武蔵野館でやっている「ユナイテッド93」も衝撃的な映画です。〈9.11テロ〉の際、四機ハイジャックされました。二機はビルに、一機はペンタゴンに突っ込み、残る一機は、突入に失敗。それは乗客がテロリストと闘ったからです。アメリカの柔道家やラグビーの選手たちが立ち向かったのです。凄い映画でした。

(13)前にこのHPでも紹介した映画「出草之歌」がアンコール上映されます。9月25日(月)～10月6日(金)です。渋谷の「アップリンク・ファクトリー」です。台湾原住民の現在の闘いです。靖国神社にも行き、「祖霊奪還」を訴えます。国家とは何か。戦争とは何かを考えさせられます。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

今週の主張 9月18日 やはり「噂」は本当だったんだ

(1)皇太子さま御成婚で、「日本ももうだめだ！」と…

やはり本当だったんだ。と、後で分かったことが多い。皇室に関する〈噂〉の数々だ。「富田メモ」もそうだった。又、美智子さまへの「いじめ」、雅子さまのご心労もそうだった。「そんなはずはない」と保守派の人々は言ってきた。「そんな馬鹿なことはない。左翼マスコミの為にするニセ情報だ」と言っていた。「そんな下劣なニュースをお前は信じるのか！それでも天皇制支持者か！」と右翼の先輩に怒鳴られたこともある。

でも本当だったんだ。一番衝撃を受けたのは、梨本宮伊都子妃の「日記」が公表された時だった。美智子さまが皇室に入られることに反対する人々が皇族の中にも多かった。又、いろんな「いじめ」に遭われた。という「噂」は、やはり本当だったんだと思った。昭和33年11月27日の「日記」にはこう書かれている。

〈午前十時半、皇太子殿下の妃となる正田美智子の発表。それから1日中、大さわぎ。テレビにラジオにさわぎ。

朝から御成婚発表でうめつくし、憤慨したり、なさげなく思ったり、色々。日本ももうだめだと考えた〉

こんなに正直な日記はない。遺族もよく発表してくれたと思う。おかげで当時の事情がよく分かる。本来ならば伊都子妃の死後、焼却処分するものかもしれない。「富田メモ」の時も、「なぜ焼き捨てなかったのか」と遺族を責める人がいた。しかし、発表してくれてよかった。やはり、噂は本当だったんだ、と分かった。

伊都子妃の死後、「日記」のこの部分が発表され、大問題になった。「こ

んなことまで公表しなくてもいいのに」と言う人もいた。その時の衝撃は忘れられない。皇族も人間なんだな、と思った。「雲の上」「神様」の世界と思っていたら違うんだ。勿論、「ひどいな」とは思ったし、「美智子さまはかわいそうだ」「大変だったんだな」と思った。同時に、『ヤマトタケル』を書いた時の思いが甦ってきた。神々も迷い、嫉妬し、争い、殺し合う。神々の子孫の天皇もそうだ。又、それを『古事記』『日本書紀』に正直に書く。実に正直だ。あえて理想化せず、美化しない。実に人間的な物語だ。

その人間的な物語が今も続いている。生きている。そんな感じがした。去年（2005年）6月に出された島田雅彦編著の『おことば--戦後皇室語録』（新潮社）にも、この伊都子妃の「おことば」が紹介されている。しかし、これも「おことば」なのかと思った。「正田美智子」と呼び捨てにし、美智子さまを罵倒し、「日本ももうだめだと考えた」とまで言う。それでも、「おことば」なのか。

さらに最近、新宿紀伊国屋で他の本を探している時に、偶然、見つけた。『梨本宮伊都子妃の日記』（小学館）だ。小田部雄次の編だ。大型の本で、2856円だ。すぐ買った。そして家に着くのも待ち切れず、喫茶店に入り、読んだ。凄い日記だった。1991年11月に出版されている。この「日記」について書く前に、島田の『おことば』だ。

怨みに満ちた伊都子妃の言葉を島田は紹介した後、当時の状況について解説する。初めて民間人が皇室に入るのだ。それは秘密裡に進められた。小泉信三と黒田侍従のみで進められたという。



〈お妃選びの相談役を自ら任じ、常盤会会長も務めていた松平信子は蚊帳の外に置かれ、地団駄踏んで悔しがることになった。ご成婚後も容易に怒りは解けず、昭和天皇はみずから頭を下げて了解を願ったという〉

本当かよ、と思った。事実ならば、ひどい女だ。昭和天皇に頭を下げさせたなんて。さらに島田は書いている。

〈良子皇后も、正田家のご家族とのお食事には決して同席しなかった。正田家を「戦後のわか成金」と見做す華族もいれば、正田家の人々を「皆殺しにする」とすごむ右翼もいた。一時期、警察は二十四時間態勢で正田家を警備した〉

ホントかよ、と思った。正田家の人々を皆殺しにする、なんて言った右翼がいたのかよ。まさか、と思うけどね。「民間人のくせに皇室に入るなんて不敬だ」と思ったのか。しかし、皇太子さまは勿論、昭和天皇も喜んで皇室に迎えたのに。これでは「天皇・皇太子に反対する」ことになるだろう。

しかし、理屈では分かっているけど、戸惑った右翼が多かったんだろうな、と思う。「民間人の血を入れるなんて許せない！」と思い怒ったんだろう。あるいは、「女帝を認める」のと同じ位の衝撃だったのかもしれない。いや、それ以上かな。だって、女帝は過去、何人もおられたが、民間人からの皇太子妃は例がない。（少なくとも近現代では、ないと思う）。

その当時、右翼の間で、どんな「反対運動」があったのか。それは又、調べてみたい。右翼の先生、先輩方がどんどん亡くなられてしまい、聞く人があまりいない。

そだ。猪野健治編の『右翼民族派・総覧』（二十一世紀書院）があった。そこには何か書かれてるかもしれない。それで読んだ。巻末の「右翼民族派運動史年表」を見た。1958年（昭和33年）11月27日に、「皇太子妃に正田美智子さん決まる」と出ている。私は中学三年生で、仙台の二中の生徒だった。アホな田舎の生徒で、右翼、左翼という言葉も知らなかった。日本に天皇がいることも知らなかった。だから、「皇太子妃に決まる」というニュースは新聞で見ても、何のことかよく分からなかった。

ご成婚は翌59年の4月10日だ。結婚パレード、沿道に53万人参集したという。このパレードを見たいが為に、人々はテレビを買った。（さらに東京オリンピックで、今度はカラーテレビが普及する）。

(2)右翼も反対したのか。そして皇后さまも…

さて、1958年11月27日の「皇太子妃発表」だ。この日、正式に発表されたが、この前から、ニュースでは流れていたのだろう。「右翼民族派運動史年表」には、この「発表」を受けて、こんな記述がある。

〈12月1日。皇太子妃問題で末永節、松林亮、本多葵堂、福田素頭、大植喜久麿が発起人となって会合〉

どんな話をしたのだろう。さらに3週間後。

〈12月22日。佐郷屋嘉昭、小山田剣南、荒原朴水ら世話人となって皇太子御婚約祝福を決議〉

この「祝福を決議」というのが凄い。当時の右翼の戸惑いと苦悩が表われているようだ。だって、たとえば今回の紀子さまの男児生誕に対し、右翼が集まって「祝福すべきかどうか」を議論したりしない。皆、「おめでとう」と言う。皇太子さまと雅子さまのご成婚の時もそうだ。でも、美智子さまの時だけは、右翼が集まって協議し、「祝福すべきかどうか」を議論し、やっと、「祝福すべきだ」と決議したのだ。ということは、「冗談じゃない。許せない」と思った右翼もいたのだろう。「天皇制の危機だ!」「民間人が皇室に入ったら、天皇制は終わりだ!」と思った人もいたのだろう。

そうだ。荒原朴水さんは『大右翼史』を書いてたな。この時の当事者だから、きっと、この本には詳しく書かれているだろう。昔、読んだのに忘れていた。ネットで探して、もう一度、読んでみよう。

ところで、『梨本宮伊都子妃の日記』だ。この中にも、「右翼の反対」のことが書かれている。『日記』を編集した小田部雄次はこう書く。



〈皇太子の婚約発表は昭和33年11月27日。伊都子は旧佐賀藩主、元侯爵家の出で、美智子の婚約には不満があった。華族女学校卒で、学習院女子部の同窓会組織である常磐会の有力な会員でもあった。実妹の松平信子は常磐会会長。愛国団体を動かして反対運動を推進した中心人物である〉

又しても凄い記述が出てくる。「愛国団体を動かして」というのは、右翼のことだろう。皇族が右翼と一緒にあって共闘し、天皇・皇太子の意向に反対していいのかよ、と思う。

そして伊都子妃は、憤懣やるかたなく日記に書く。前にも紹介したが、こう書く。

「もうもう朝から御婚約発表でうめつくし、憤慨したり、なさげなく思ったり、色々。日本ももうだめだと考えた」(昭33.11.27)

さらに、当時、和歌も詠んでいる。「右は結婚に付あまりにもかけはなれたる御縁組、おどろかされて心もおさまらず」と、次の5首を詠んでいる。

思ひきや 広野の花を つみとりて 竹のそのふに うつしかゑんと

(野原の花か。民間の娘を宮廷に輿(こし)入れさせるなど、誰が思っ
たろう、という意味だ)

あまりにも かけはなれたる はなしなり

吾日の本も 光りおちたり

(身分の差がありすぎる結婚をするとは、日本の威光も地に落ちた、とい
う。まるで江戸時代か平安時代のような感じだ。でも、たった40年前なの
に、こんな身分意識があったんだ)

つくりごと どこまでゆくか しらねども

心よからぬ 思ひなりけり

(天皇陛下が認めたことなのに、「つくりごと」はないだろうと思うが、
余りにも素直な反応だ。「政略的なことをどこまでやるかわからないが、い
い気持ちはしない」という意味だろう。と、小田部は解説している)

心から ことほぎのぶる こともなし

あまりの事に 言の葉もなし

(心から祝辞をのべることもない。あまり身分差がある結婚に言葉もでな
い」と小田部は解説している。「あまりの事」なのか。やはり、「女帝」以
上の衝撃なのだろう)

国民が こぞりていはふ はずたるに

みせものごとき さわぎ多かる

(「見せ物」か。ここまで言うかよ、と思う)

ここまで、あからさまに書かれているということは、他の皇族たちも美智
子さまに対しては皆、不満、怒りを持っていたのだろう。当時は〈噂〉だっ
たが、やはり本当だったのだ。その当時の〈空気〉を知る上でも、この伊都
子妃の日記は第一級の資料だ。世に出て、本当によかったと思う。編者の小
田部雄次は、さらにこんな事実を紹介している。一般の皇族だけでなく、実
は昭和天皇の皇后さままでが大反対だったという。

〈近年公刊された入江相政(すけまさ)侍従長の『日記』によれば、昭和
33年夏ごろから良子(ながこ)皇后は、「東宮様の御縁談について平民から
とは怪(け)しからん」と、松平信子や秩父宮勢津子、高松宮喜久子らにこ
ぼしていたという。さらに翌昭和34年、大礼のときの自分の馬車が四頭立て
だったのに、こんどの結婚では六頭立てだと「憤慨」している。けっきょ

く、昭和天皇が「六頭でいい」と理解を示し、話はおちついた

やっぱり、この〈噂〉も本当だったんだ。しかし、天皇も大変だ。松平信子には頭を下げ、皇后の怒りをなだめ…と。伊都子の『日記』はさらに続く。

〈よるとさはると、このせつは正田のはなし。タクシーの運転手まで色々うはさをする（昭33.12.13）〉

(3)そして、その日。三島由紀夫は何をしていたのか

凄い怨みようだ。「私の時なんか…」というひがみもあるのだろう。だって、伊都子妃は、元々は佐賀藩主・鍋島さまのお姫様だ。そして梨本宮殿下と結婚。そこまではいい。しかし、生まれた娘・方子（まさこ）は、朝鮮の李王家最後の皇太子李垠と結婚。うむをいわず結婚させられたのだ。又、夫の梨本宮は軍務についていたことで、敗戦後、戦犯指定された。悲劇の皇族だ。「私だけがこんなに不幸だ。それなのに民間出の正田美智子は…」と思い、恨む気持ちも分かる気がする。そういう環境で育ったのだ。やむを得ぬところもある。島田誠彦は『おことば』の中で書いている。

〈伊都子妃は昭和51年まで生き、死後日記が公開された。乳母日傘のお姫様が時代に翻弄されてゆく様は、太宰治の『斜陽』さながらに生きたという趣がある〉

（注：乳母日傘（おんばひがさ）乳母をつけ、外出には日傘をかけて、大事に守り育てること。過保護に育てること）

伊都子妃は昭和51年8月19日に亡くなっている。95才だった。では、美智子さまの御成婚に話を戻す。昭和34年（1959）4月10日、御成婚の日だ。伊都子妃は、その日のことを詳しく書いている。そして…。

〈2時35分ごろ御行列御出まし。丁度（ちょうど）よい所で拝見してから、控室にてテレビをみて、仮東宮御所へ御入りの所までみる。それから陛下に御悦（よろこ）び言上申上で退出。午後4時30分。（昭和34年4:30）

いつものごとく土曜会に行く。相もかはらず御成婚のうはさばなしで、とてもにぎやかな事。（昭和 34・4・11）〉

編者の小田部はこう解説する。この解説がいい。

〈この結婚に理解を示した昭和天皇の意向もあったのだろう。結婚当日の伊都子の日記には批判的言辞はなく、事実のみが記されている。テレビを見たり、見物にいい場所をとったり、伊都子自身がミッチーブームの渦中にいるのがおかしい〉

伊都子妃は昭和51年まで生きたから、実にいろいろのことを書き残している。70年の「よど号」ハイジャック、三島事件についても書いている。その他、紹介したいところはあるが、又の機会にしよう。編者・小田部は「おわりに」でこう書いている。

〈資産家の侯爵令嬢、皇族妃という輝かしい日々が永久に不動のものであったのなら、伊都子は、これほどの「書き魔」ではなかったのかもしれない〉

そうなんだ。「斜陽」の皇族だった自分だけでなく娘のこと、夫のこと、身の不運を嘆き、悲しみ、怒った95年だった。さらに小田部は言う。

〈なぜ伊都子は日々の日記を綴（つづ）りつづけ、さらにまた、多くの手記や回想録を残したのだろう。変転する時代のなかで、自己の位置をたしかめたかったのだろうか。〉

伊都子の気丈な性格・激しい感情・厳格な生活態度。これらは先天的なものであったろうが、急激に揺れ動く時代を生きるなかでいっそうつよまったようだ。明治以来の近代天皇制国家の生成・発展・衰退の歴史が、彼女に気丈さを要求していたともいえる〉

『日記』公開までには随分と苦労があったらしい。

〈梨本日記は、かねてからその存在に注目していた共同通信社の高橋紘氏（現・社会部長）が、「昭和の終わり」にさいし公開したい旨を梨本家に打診、同家の快諾を得て準備作業をすすめた〉

そうか。高橋紘さんの力か。ありがたい。高橋氏は今は共同をやめ、静岡大教授・評論家だ。今年2月と7月の「朝まで生テレビ」には一緒に出た。僕の本を昔から読んでくれて、「ぜひ会いたいと思ってました」と言ってくれた。こっちこそ、高橋さんには、話を聞き、教えてもらいたい。

では、激動の『日記』ともお別れだ。最後に、エピソード。昭和34年4月

10日。皇太子さま御成婚の日、三島由紀夫は何をしていたか。『決定版・三島由紀夫全集』42巻の「年譜」によると。

〈4月10日(金) 皇太子明仁成婚。馬車行列の中継中、投石した若者が警官に組み伏せられた様子をテレビで見て、衝撃を受ける。夜、芥川比呂志とともに、テレンス・ラティガンの英国大使館でのレセプションに出席。その後、NHKホールの皇太子ご成婚祝賀演奏会に行き、「祝婚歌」（作詞・三島、作曲・黛敏郎、演奏・NHK交響楽団、指揮ウィルヘルム・シュヒター、合唱・東京放送合唱団、東京混声合唱団、二期会合唱団）を聞く。その模様は、NHKラジオ第一、NHKテレビ（午後7時30分～8時）で放送、放映。帰り、黛夫妻にマルタへ夜食に招かれる〉

知らなかった。三島は「祝婚歌」を作詞しているのか。ぜひ聞いてみたいものだ。もしかしたら当時、聞いていたのかもしれないが…。それにしても、やけに詳しい「年譜」だ。伊藤秀明、井上隆史編になっている。この日、誰に会い、何の話をしたか。歌舞伎に行き、何を見たか。又、決起に向けて、「今日は、こんな計画を立てた」「今日は変更し、こうした…」ということが詳しく書かれている。凄い本だ。

【だいありー】

(1)9月11日(月) 午後3時。宮崎学氏と「テロリズム」について話をした。

「テロは必要だ。やるのは当然だ」という宮崎氏。かつて「テロリスト志願」だった私も、挑発され、たじたじ。「テロリストの美学」を信奉していた昔のことを思い出した。危ないな。夜、又別の対談。

(2)9月12日(火) 朝4時半に家を出る。6時半の飛行機で熊本へ。熊本刑務所にいる田中義三さん（「よど号」メンバー）に面会。刑務所に入ったら、家族以外は一切、面会できなかったが、最近、「友人面会」が少しずつ許可されている。それも、出獄後の「更生」に役立つ人だけ。私は、役立つ。

「出たら又、ゲリラ闘争をやろう」なんて〈悪の道〉に誘うわけじゃない。言論の場で、一緒に合法活動をしようと言ってるのだし。

「きのうは眠れませんでしたよ」と田中さん。感動の対面だった。獄中の話、見沢知廉氏の話、など、話は尽きない。面会后、西南戦争の激戦地、田原坂に行った。そして桜山神社に。三島由紀夫も『奔馬』執筆のために通ったところだ。神風連ゆかりの神社だ。さらに、熊本城、水前寺清子公園を見

た。（水前寺公園だったかな）。学生時代に何度か来たが、なつかしい。夜7時の飛行機で帰京。

(3)9月13日(水) 午後2時から、佐高信さんと対談。「言論の自由とテロリズム」。放火された加藤紘一さんは山形県鶴岡。佐高さんは山形県酒田出身。私も山形（宮城県だったかな）。同じ東北人なので、話が合う。やっぱり、テロはいかんだろう。どうしたらテロをなくせるか。言論の場に上げられるか。それを考えてみた。

(4)9月14日(木) 11時、雑誌の取材。皇室問題について。3時から河合塾コスモ。「現代文要約」と「基礎教養」の授業。7時から一水会フォーラム。中国民主運動の相林さんが講師。遅れて行く。

(5)9月15日(金) 夕方まで図書館で調べものをしていて。7時からネーキッド・ロフト。社民党の保坂展人さんとトーク。愛国心について。教育基本法、日の丸・君が代強制、共謀罪…と、保坂さんは国会で果敢に闘っている。野党はこの人しかいないんじゃないか。と思うくらい、孤軍奮闘だ。偉い。

(6)9月16日(土) 新潟県の新発田に行く。「大杉栄メモリアル 2006」に参加する。大杉豊さん（大杉栄の甥）の講演を聞く。二次会で色々、大杉栄の話聞く。勉強になった。夜、12時、党今日に着く。

(7)9月17日(日) 午後3時。松元ヒロさんのライブを見る。面白かった。『愛国者は信用できるか』はよかった。思想の勉強になりました、とヒロさん。実際に、この本をネタにしたコントもあって楽しかったし、感動した。

7時からロフト・プラスワン。中野ジロー司会の『塀の中の懲りちゃった面々』。安部譲二、塩見孝也さんら獄中体験者が多数出た。「体験者」じゃないが、なぜか僕も呼ばれて出た。

【お知らせ】（その1）

(1)9月10日(日)の深夜0:25から日本テレビで「ドキュメント`06 私は人を殺した…元日本兵と女子大生」をやっていました。よかったですね。感動的なドキュメントでした。「戦場体験放映保存運動」の活動がこうして取り上げられるのは素晴らしいと思いました。

(2)7月28日(金)にやった「朝生」の「激論！昭和天皇と靖国神社」が本にな

るそうです。10月末頃、出る予定です。

(3) 8月5日(土) 池袋ジュンク堂で森達也さんと対談した「近代天皇制と愛国心」が『早稲田文学』に載るそうです。今月の末の予定。10月末には早稲田文学会のサイトに載るそうです。

(4) 今年の4～7月にかけて慶応大学経済学部でやった連続討論「現代社会史」が岩波書店から単行本になるそうです。加藤哲郎さんと私の討論「天皇制と民主主義」も入ります。加藤紘一さんと田中秀征さんの「国際政治の観点からみた東アジアと日本」も入ります。13回の講演、討論をまとめるので、時間がかかり、発売は来年早々になるそうです。

(5) 見沢知廉氏の追悼集『見沢知廉よ永遠なれ』（1000円）が発売中です。見沢氏を知る主だった人が全て書いてます。

新宿区下落合1-2-5 第23鈴木総合ビル4F 一水会で取り扱っております。

【お知らせ】（その2）

(1) 9月19日(火) 『噂の真相・闘争外伝』（インフォバーン）が発売。私も出てます。

(2) 9月25日(月) 『季刊教育法』（株）エイデル研究所）発売。私も出ています。

(3) 10月3日(火) 午後7時。青山ブックセンター。『噂の真相・闘争外伝』の出版記念トーク。岡留安則さんと私です。

(4) 10月29日(日) 神奈川で講演です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

今週の主張 9月25日 「決定版・三島由紀夫全集」(全42巻+補巻・別巻) を読破した！



(1)皆も挑戦してみんしゃい。前からでも後ろからでも

やりました！偉業を達成した。『決定版・三島由紀夫全集』を全巻読破した！全42巻。それに「補巻」と「別巻」があるから、44冊だ。1巻が800ページ位あるから全部で3万5千ページだ。それを読破したのだ。「よくやったね」「偉いね」と自分で自分を褒めてあげた。誰も褒めてくれないから。

2年をかけた大プロジェクトだった。苦労した。しんどかった。

こんな大仕事をやったからといって、誰に評価されるわけでもない。報酬が入るわけでもない。祝賀会を開いてくれる人もいない。「おめでとうございます。今の気分は？」と新聞社やテレビ局が取材に来ることもない。自分としては、スポーツの大会で新記録を出したとか、何かの文学賞をとったとか…。それと同じ位の偉業だと思うのだが、世間の人はその見ない。「そんなこと、個人的なことだろう」「ヒマがあるから本を読んでただけやろう」「友達がいらないから出来るんだよ」と言う。やだね。淋しいね。

「全集」は中野図書館で借りて読んだ。1巻からだと読みづらいので、後ろの方から読んだ。バックから攻めた。だって、後ろは「対談」や「座談会」とか「書簡」とか「評論」だから、読みやすい。そして「短編小説」

「長編小説」と読み進めた。これで三島は征服したな。巨大な山脈を踏破した。ノルマを達成した。全巻読破した人なんて、ちょっといない。僕の周りにもいない。「楯の会」の人間だっていないだろう。三島由紀夫だって読んでない。だって「解説」とか、いろんな人が書いてる「月報」もあるんだし。この日本で私だけだ。天上天下唯我独尊だ。

と思ったけど、違うな。この本を編集した人、校正した人たちは読んでいる。それと、三島研究家といわれる数人の人は読んでいる。じゃ、日本で8人位かな。うーん。分からん。じれったい。誰か調べてくれよ。ネットで検索してもそんな数字は出てこない。おかしい。本当に必要なこと、知りたいことはネットでは分からんち。遅れてる機械だ。

そうだ。出版社の新潮社が調べてくれよ。全集を出した責任があるだろう。今まで何十万部（何百万部かな）出版し、これだけ売れましたと、巻別の売上数を公表する。全42巻（+別・補巻）を買った人はこれだけいて、実際読破した人はこれだけいると。出来たら名前も公表したらいい。名誉なことだから、公表されても構わないだろう。そのためには、「全巻読破した方はお知らせ下さい」と広告を出す。なーに、新潮文庫の広告のところに小さく入れればいい。そうすると分かる。日本人の文化程度も分かる。さて、何人いるのでしょうか。

新潮社への願いは終わり。では「全集」の概要、構成を紹介ませう。

〈1巻～14巻〉長編小説だ。三島文学の華だわさ。だから、先頭に並ぶ。「仮面の告白」「金閣寺」「鏡子の家」「禁色」「愛の渴き」「潮騒」「宴のあと」「午後の曳航」「美しい星」「音楽」「複雑な彼」「春の雪」「奔馬」「暁の寺」「天人五衰」…などだ。これぞ三島文学、という代表作ばかりだ。特に「春の雪」以下4冊の「豊饒の海」は三島晩年の傑作だ。ライフワークだ。14巻は「暁の寺」と「天人五衰」だが、900ページ以上ある。読み度がある。だからこそ、これらの長編は後まわしにして、じっくりと読んだ方がいい。

〈15巻～20巻〉。短編だ。「心のかがやき」「檜扇」「真夏の死」「海と夕焼」などだ。

〈21巻～25巻〉戯曲だ。「綾の鼓」「鹿鳴館」「黒蜥蜴」「サド侯爵夫人」「癩王のテラス」「わが友ヒットラー」などだ。映画、芝居になったものも多いし、ここから読み始めてもいいだろう。

〈26巻～36巻〉評論だ。政治的文章が好きな活動家諸君は、これが一番、興味をひかれるだろう。ここをまずクリアーして、他の小説の山脈に挑戦してもよからう。「行動学入門」「葉隠入門」「文化防衛論」「革命哲学としての陽明学」「反革命宣言」「太陽と鉄」「私の遍歴時代」「文章読本」「不道德教育講座」「旅の絵本」「小説家の休暇」「アポロの林」「平岡公威自伝」…などだ。「自衛隊二分論」、「愛国心」。「北一輝論」もある。

〈37巻〉詩歌。余り知られてないが、三島は詩も短歌もつくっている。これは全く知らなかったので、新鮮な感動だった。小学生時代の詩もある。まだ「三島」になってない頃だ。

〈38巻〉書簡。こんなにも沢山、手紙を書いてたんだ。ドナルド・キーンとの手紙はいい。「三島幽鬼夫」とお茶目に署名している。ただし、自決の次の日にキーンに届いた手紙にはこう書かれている。「前略：小生たうたう名前どほり魅死魔幽鬼夫になりました」。これは怖い。でも、外人相手だからこそ三島も内心をさらけ出している所がある。「同じ日本人だから分かるだろう」という「決めつけ」と「強制」がない。大正天皇はベルツに心を開いた。今の天皇は皇太子時代にヴァイニング夫人を信頼した。昭和天皇はヨーロッパ旅行が一番楽しく、心に残ってるというし。「笑わない愛子さま」と週刊誌に報じられた愛子さまもオランダでは本当に楽しそうに笑われていた。

〈39巻～40巻〉対談。対談においても三島は天才だ。手を抜かない。いつでも真剣勝負だ。石原慎太郎なんて子供扱いだ。林房雄との「日本人論」もいい。高橋和巳との対談もいい。東大全共闘との討論では、わけの分からん抽象的な術学的なことを言う学生を相手に、三島は、キチンと丁寧な答えている。偉い。他の人だったら、頭にきて怒鳴るか、帰っちゃうだろう。今、生きていて「朝生」に出たらどうだったろう。圧倒されて、他の人達は喋れんだろうな。それでも偉そうに、ワーワーと三島に喰ってかかるんだろうか。見たいような、見たくないような。

〈41巻〉音声（CD）。三島が朗読したものだ。他に、カセットで、「対談」やら、大学での講演なども出ている。

〈42巻〉年譜・書誌。これは、「その他」だろうと軽く見ていたら、大違

いだ。凄い「年譜」だ。三島の日々の行動の全てだ。この日は歌舞伎に行っ
て、何を見た。誰と食った。誰に手紙を書いた。さらに、「楯の会」の決起
に至る過程も書かれている。（あとで詳しく触れる）。

〈補巻〉補遺・索引 他

〈別巻〉映画「憂国」(DVD)

(2)日本を震撼させた70年11月25日。その直前の行動が書かれている



これが全てだ。さて、「42巻」に戻って、も
う少し書く。凄いといった「年譜」だ。三島が
自決したのは昭和45年（1970年）11月25日
だ。この昭和45年から少々、ピックアップして
みよう。

昭和45年1月1日。

自宅恒例の新年会。丸山明宏、村松英
子、川島勝、横尾忠則ら来宅。丸山は、三

島には（2.26事件の）磯部浅一の霊が憑いていると指摘。

1月中旬。「楯の会は宝塚の兵隊である」と発言した防衛庁長官・中曽根
康弘から釈明の電話があったことを、山本舜勝に電話し告げる。

1月末 韓国陸軍の元少尉と山本舜勝を自宅に招く。元少将の辞任後、
「やりますか」と言う三島に対し、やるなら私を斬ってからにして下さい、
と山本は返答する。

2月10日(火) 村松剛に電話で、木村俊夫官房副長官を通じて佐藤栄作首
相から楯の会を支援する（毎月100万円）という申し出があったことを伝え
る。

2月 3日から15日まで銀座松坂屋で開催の「NUDE”篠山紀信展」に出
かけようとしたところ、未知の高校生が三島宅を訪れ、先生はいつ死ぬん
ですか、と問う。

2月～3月 齊藤直一弁護士宅を訪れ、法律上の遺言状の作成法について
問う。

3月末 日本刀を携えて山本舜勝宅を訪問。帰り際に冷たいですな、と言
う。

5月中旬 自宅において、森田必勝、小賀正義、小川正洋に対し、楯の会と自衛隊がともに武装蜂起して国会に入り、憲法改正を訴える方法が最も良い旨を語るが、その具体的な方法は未定。

6月13日(土) ホテルオークラ821号室に、三島、森田必勝、小賀正義、小川正洋が集合。三島は、自衛隊は期待できないから自分たちだけで実行する。その方法として、自衛隊の弾薬庫を占拠してこれを爆破すると脅すか、東部方面総監を拘束するかして自衛隊員を集合させ、自分たちの主張を訴え、決起する者があれば、ともに国会を占拠して憲法改正を議決させることを提案。討論の結果、総監を拘束する方策を取る。さらに三島は、11月の楯の会2周年記念パレードを総監に観閲してもらい、その際、総監拘束を実行しようとする。

7月11日(土) 小賀正義は三島から渡された20万円で、`41年型白塗りのコロナを武器搬入用として購入。

7月13日(月) 吉兆で保利茂官房長官の招きによる会。村松剛、木村俊夫官房副長官、安岡正篤同席。この頃、三島は保利と数回懇談し、防衛に関する意見を述べた。保利が三島に接触したのは、自民党内に翌年の東京都知事選に三島を推す動きがあることを踏まえ、三島の考えを内々に確かめるため。

夏 四日市市へ帰省した森田必勝は、旧知の上田茂に、三島にあって自分の考えが理論化出来たので、三島を一人で死なせるわけにはいかん、などと語る。

10月7日(水) 「天人五衰」執筆のため後楽園を取材。事実上絶縁状態になっていた村松剛は、伊沢甲子麿に仲介を頼み、四谷の蔦屋(つたや)で三島と会食。君は頭の中の攘夷をまず行なう必要がある、と三島は村松に言う。

10月23日(金) 都内の火葬場や給電指令所で、楯の会の演習を行なう。夜、山本舜勝宅を訪れる。

10月 磯田光一に、本当は宮中で天皇を殺したい、と言う。(磯田光一・島田雅彦「模造文化の時代」)。また、この頃、浅草の刺青(いれずみ)師(彫長)に刺青を彫ってくれるよう頼むが、断られる。

11月4日(水) 陸上自衛隊富士学校滝ヶ原分屯地に体験入隊（リフレッシュコース）。6日まで。訓練終了後、三島らは御殿場別館において、他の楯の会会員、自衛官らとひそかに別れを惜しむ。この期間中に、三島は川端康成宛に最後の手紙（万一の時は後のことをよろしくとの文面）を出す
が、川端は一読後焼却。

11月12日(木) 池袋・東武百貨店大催事場で「三島由紀夫展」開催。17日
まで。

新宿の深夜喫茶パークサイドで、森田は小川に介錯を依頼。

11月19日(木) パレスホテルで、楯の会班長会議。三島ら5名、新宿伊勢
丹会館後楽園サウナに集合。連隊長拘束後、三島の演説三十分、他の四名の
名乗り各五分、楯の会残余会員への訓示五分、楯の会解散宣言の後、天皇陛
下万歳を三唱するなど、当日の時間配分を打ち合わせる。要求が通らない
場合は連隊長を殺しても良いかと森田必勝が問うたのに対し、連隊長は無傷
で返さなければならないと三島は答える。

11月21日(土) 森田必勝は三島の命を受け、三十二連隊長の存室の有無を
確かめるため、三島の著『行動学入門』を届けることを理由に市ヶ谷駐屯地
に赴いたが、決行当日連隊長が不在であることが判明。中華第一楼に三島ら
5名が集結した際、森田は連隊長の不在を報告。協議の結果、拘束の相手
を、東部方面総監に変更する。三島は、総監部に電話し、25日午前11時総
監と面会する約束をとりつける。

11月22日(日) 夜、小賀正義は森田必勝から、三島の介錯が出来ない時は
頼むと依頼され、これを承諾。

11月24日(火) 三島ら5名は、新橋の料亭、末げんで別れの宴をひらく。
帰りの車中で、三島は古賀浩靖に、自分の日程を記した手帳を渡して焼くよ
うに頼む。



そして、翌25日は決起・自決だ。なまなましい。
「年譜」には、もっともっと詳しく書かれている
が、よくここまで調べたものだと思う。

**(3)皇太子御成婚パレードを襲った「投石少年」
について。三島はこんな衝撃的文章を書いていた**

この中のどの一日を取り出しても、それだけでドラマになる。一つの映画になる。凄いね。自衛隊の山本舜勝を全面的に信頼し、裏切られる三島。三島は自決を考えているのに、「金を出そう」「都知事選に出てくれ」と考える政府・自民党。しかし、三島らは着々と決起の準備をする。電話で同志と連絡しあっても、公安に盗聴されることはない。ノーマークだったからだ。まさか、あんなことをするなんて思わない。政府も、自衛隊も、警察も。そして、楯の会の人間も…。その中で、なかば堂々と準備をしてゆく。

「要求が通らない時は殺してもいいですか」と聞く森田に対し、ダメだと三島は答える。このへんのやりとりも凄い。又、決起の4日前に、「ターゲット」を変えたなんて…。驚きだ。「本当は天皇を殺したい」と三島は言ったそう。怖い話だ。

それにしても、三島を訪ねてきて「先生はいつ死ぬんですか」と聞いた高校生。無気味だね。でも、どうして高校生と分かったのだろう。それに、この高校生は三島しか目撃していない。家人の誰も目撃していない。もしかしたら、三島にだけ見えた高校生ではないのか。何のために。自分が後戻り出来ないように、文に書くことによって、自分にタガをはめたのではないかと私は思う。この推測は間違っているかもしれない。しかし、三島なら、やりかねない。この部分だけは「日記」ではなく、「小説」だろうと私は思う。本当に事実なら、この高校生は名乗り出てほしい。今なら多分、52才位だろう。「私がその時三島先生を訪ね、死の決意を固めさせたのです」と証言したらいい。

先週のこのHPでは皇太子さま（今の天皇陛下）と美智子さまの結婚のことを書いた。この「年譜」にも、その日（昭和34年4月10日）のことが書かれている。三島は「祝婚歌」を作詞していたのだ。それに、こんな記述もあった。

「皇太子明仁成婚。馬車行列の中継中、投石した若者が警官に組み伏せられた様子をテレビで見て、衝撃を受ける」

この「衝撃を受ける」という中味は何だろう。その辺の右翼のように、「不敬だ!」「殺せ!」と思ったのか。いや、そんなことはない。小説家らしく、この不慮の事件にも並々ならぬ興味を持ち、興奮しているのだ。芥川龍之介の「地獄変」のようだ。これは、娘が焼き殺される現場に出会って、驚き、狼狽しながらも、つい絵筆を取って描いてしまう絵師魂を書いたもの

だ。三島だって、この〈投石事件〉に興奮しながら、こんなことを書いている。「全集」第30巻の「評論5」の中の、「裸体と衣装」の中に詳しく書いている。ちょっと長いが、衝撃的な文だ。あえて紹介しよう。（実は、「全集」を読んで図書館に返す時、重要な所や、感動した所は大学ノートに写した。あるいはコピーした。そのノートが5冊になる。それがあるので、こうして、書くことができる）

〈四月十日(金) 嵐は忽(たちま)ち晴れ、6月の日照りになった。一時半起床。庭で素振りをしてから、馬車行列の模様をテレビジョンで見る。皇居前広場で、突然一人の若者が走り出て、その手が投げた白い石ころが、画面に明瞭な抛物線をえがくと見る間に、若者はステップに片足をかけて、馬車にのしかかり、妃殿下は驚愕のあまり身を反らせた。忽ち、警官たちに若者は引き離され、路上に組み伏せられた。馬車行列はそのまま、同じ歩度で進んで行つたが、その後しばらく、両殿下の笑顔は硬く、内心の不安がありありと浮かんでゐた。

これを見たときの私の昂奮は非常なものだつた。劇はこのやうな起こり方はしない。これは事実の領域であつて、伏線もなければ、対話も聞かれない。しかし天皇制反対論者だといふこの十九歳の貧しい不幸な若者が、金色燦然たる馬車に足をかけて、両殿下の顔と向かひ合つたとき、そこではまぎれもなく、人間と人間が向かひ合つたのだ。馬車の装飾や従者の制服の金モールなどよりも、この瞬間のほうが、はるかに燦然たる瞬間だつた。

われわれはこんな風にして、人間の顔と人間の顔とが、烈しくお互を見るといふ瞬間を、現実生活の中ではそれほど経験しない。これはあくまで事実の事件であるにもかかわらず、この「相見る」瞬間の怖しさは、正しく劇的なものであつた。伏線も対話もなかつたけれど、社会的な仮面のすべてをかなぐり捨てて、裸の人間の顔と人間の顔が、人間の恐怖と人間の悪意が、何の虚飾もなしに向ひ合つたのだ。

皇太子は、生れてから、このやうな人間の裸の顔を見たことははじめてであつたらう。と同時に、自分の裸の顔を、恐怖の一瞬を、人に見られたこともはじめてであつたらう。君侯がいつかは人前にさらさなければならない唯一の裸の顔が、いつも決つて恐怖の顔であるといふことは、何といふ不幸であらう。

それにしても人間が人間を見るといふことの怖しさは、あらゆる種類のエロティシズムの怖しさであると同時に、あらゆる種類の政治権力にまつはる

怖しさである〉

三島は興奮している。この瞬間こそが「燦然たる瞬間だった」と書く。今だったら、こんなことは書けない。多分、新聞や雑誌は「自主規制」でカットするだろう。三島は「祝婚歌」をつくりながら、一方、このような凄い怖い文章も書いている。並みの作家ではない。

今は、こんな文章は書けないし、もし出たら、「不敬だ！」と攻撃されるだろう。それに、テレビに映し出された「投石少年」は今ではもう絶対に流さない。おかしい。〈歴史〉なのにかかわらず、テレビ局は自粛して流さない。自分たちだけが〈歴史〉を一人じめして、人々には見せないのだ。おかしい。そして、毒にも薬にもならん評論家だけに喋らせている。「日本も、もうだめだ」と思いました。

【だいありー】

(1)9月18日（月）取材。図書館。

(2)9月19日（火）午後1時。赤坂プリンスホテル。雑誌の座談会。「日本の不安」について。学生の時に読んだ本の解説を思い出した。キルケゴールだったか、誰かの解説だ。ある大学教授は言っていた。同じ「怖さ」でも恐怖と不安は違うという。山のつり橋を渡る時、橋が落ちやしないかと心配するのは「恐怖」だ。一方、橋を渡っているうちに、自分が飛びおりるのではないかと思うのが「不安」だ。…と。不安は自己に対する内在的、実存的〈怖さ〉だ。

自分が怖い。又、大衆になって暴走した時の自分が怖い。そんなことを今再び、感じている。そのことを話してみた。

(3)9月20日（水）11:00a.m.ジョナサン。新聞記者に取材される。時効になった赤報隊事件について。もういいだろうと思うが…。又、いつか書かにならんのかな。

(4)9月21日（木）河合塾コスモ。現代文要約、基礎教養の授業。加賀乙彦の『悪魔のささやき』（集英社文庫）をテキストにして〈悪〉について話をする。悪党が悪について話すのだからピッタリだ。

深夜、マイクシィからカキコ。「作家は皆、猫を殺すものなの?」。何ば言うちよるか。猫を殺してるのは、あの直木賞をとった女だけじゃ。許せんよな。子猫は全部崖から投げ落として殺したなんて、シャアシャアと自供

し、それでも警察に捕まらん。オラなんて、何ら悪いことしてないのに、何度捕まったことか。いくら文章がうまいとか、金持ってるとか、社会的地位があるといっても、人間として最低の奴はいる。それにしても猫もだらしがない。昔は、殺された猫は皆、祟ったんだ。猫にまつわる怪談は沢山あった。今は、人間に飼い馴らされて、化けることも、復讐する元気もなくしたのか。情けない。決起せよ。全国の猫族よ！同輩が虐殺されているのだ。祟ってやれよ！反撃を開始しろよ！

(5)9月22日（金）取材。図書館。

(6)9月23日（土）一水会物故者慰霊祭。一水会ならびに関係者で亡くなった人を慰霊し、思い出を語り合った。

【お知らせ】

(1)9月25日（月）「季刊教育法」（（株）エイブル研究所）発売。教育基本法改正問題について私も喋ってます。

(2)10月1日（日）月刊「現代」（11月号）発売。皇室問題の特集で、私も書いてます。

(3)10月3日（火）午後7時から、青山ブックセンター本店。A空間。「サイゾー」別冊、『噂の真相・闘論外伝』（岡留安則vs12人の論客）（インフォバーン）の出版記念トーク。岡留安則さんと私。テーマは「日出づる国の最新タブー」です。定員は80名ですので、申し込んで下さい。

(4)10月5日（木）月刊「論座」（朝日新聞社）11月号発売。宮崎学さんと「テロル」について語ってます。

(5)10月7日（土）月刊「創」11月号発売。佐高信さんと、「テロと言論」について対談しています。

(6)10月10日（火）桜チャンネルに出る予定。

(7)10月11日（水）「月刊タイムス」発売。三島の書かれなかった〈事件〉について書いてます。

(8)10月12日（木）～13日（金）浅草公会堂（展示ホール）で、「戦場体験を語り継ぐ元兵士・軍属1000人展」が開かれます。ぜひ見て下さい。午前

11～午後6時です。

(9)10月29日(日)夜6時から神奈川で講演。

(10)11月4日(土)から、ポレポレ東中野で「9・11～8・15。日本心中」が封切られます。11月11日(日)(土)夜の回が終わってから、監督と私のトークです。

(11)11月8日(水)ロフトに出る予定。

(12)正狩炎さんの書いた力作『反戦ストリッパー、白血病に死す。沢口知美伝』(グラク社・1238円)が10月10日、発売です。実に感動的でいい本です。塩見さん、平野さん、木村氏などの貴重な証言もあります。私も話します。又、僕らも知らなかった沢口さんの全く新しい面も紹介されています。見本誌をもらい、私は一気に読みました。涙が出ました。素晴らしい本です。ぜひ、読んでみて下さい。

(13)12月9日(土)講演(予定)。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

今週の主張10月2日

驚きました。「皇太子妃」反対運動がこんなに激しかったなんて…

(1) 「皇太子がこな屋の娘と恋愛騒ぎでは外国に聞こえて恥ずかしい」と反対が…

やはり、本当に激しい反対運動があったんですね。48年前の美智子さまのご結婚の時は。前々回に書いたと思うが、皇族からも右翼からも、「とんでもない」「許せない」という声が上がった。「日本ももうだめだと考えた」と梨本宮伊都子妃は「日記」に書いた。皇后さままでが反対した。

右翼の中でも反対意見が随分と出た。反対の方が多かったのかもしれない。「民間人を入れるとは何たることだ！」と。皇太子さまが決め、天皇陛下が認めたことなのに、反対する人々は多くいた。『右翼民族派・総覧』（二十一世紀書院）には、その辺のことが出ている。

昭和33年（1958年）11月27日、『皇太子妃が正式に発表になった。この発表を受けて、

〈12月1日。皇太子妃問題で末永節、松林亮、本多葵堂、大植喜久磨が發起人となって会合〉

さて、どうしたらいいのかを協議したのだ。すでに、いろんな団体が反対運動をしている。中には正田家に対し、「辞退しろ！」と迫る団体もある。右翼全体として団結し、「美智子妃反対！」の運動をすべきか。それとも…。と話し合ったのだ。

今から考えたら奇妙だ。「どうする」もないだろう。天皇さま、皇太子さまが決めたことだ。国民としては素直にお喜び申し上げたらいい。何を考える必要があるのだろうか。しかし、「これでは皇室が変わってしまう」「日本

はダメになる」と不安にかられたのだろうか。この右翼トップの話し合いの3週間後には…。

〈12月22日 佐郷屋嘉明、小山田剣南、荒原朴水ら世話人となって皇太子御成婚祝福を決議〉

皇太子妃「発表」された時は、ただ戸惑い、どうしようか協議し、1ヶ月もたって、やっと「じゃお祝いしよう」と決まったのだ。何だか、はがゆい。でも、どれほどの反対意見、反対運動があったのか。大体、どんな理由で反対したのか。それが疑問だった。それを聞こうにも、当時を知る先生、先輩たちは、どんどん亡くなっている

その時、気がついた。荒原朴水さんは『大右翼史』という大判の本を出していた。これには出てるだろう。「祝福決議」の世話人になってるんだし。必ず出てるはずだ。

それで、ネットで探した。あった。この点、ネットは便利だ。5千円、1万円、1万5千円…と、いろいろある。1万1千円のを買った。やっぱり詳しい。この問題では抗議して自決した人もいるという。知らなかった。

「12月1日に協議」と前には出てるが、荒原さんの本では、1日に案内状を発送し、12月6日に後楽園ホテルで右翼の幹部連中が集まったという。発起人が同じだから、12月6日に行なわれたんだらう。そこではこんな発言があったという。

〈このご婚儀は一言にしてカトリック教の世界的大陰謀である。小泉信三もカトリック教徒だし、美智子さんもカトリック教徒だ。彼等は宇佐美宮内庁長官を抱き込んでいるのだ〉

〈日清製粉のお嬢さんが皇后ではどうも天皇制護持も今後は考えなくちゃいかん。そもそも天皇が恋愛騒ぎをすることは何事であろうか〉

〈皇太子様ともあろうものが、高が粉屋の娘にほれて騒ぐとは外国に聞こえても恥しい。皇后様は皇后様と崇（あが）められる様なお方でなくてはいけない〉

〈皇太子様にお退きになって頂いて義宮様に立って頂こう。正田家に対して辞退するように進言しよう〉

こんな意見が次々と出たのだ。ひどい話だ。これが右翼の会合か。まるで

「天皇制反対集会」じゃないか。まア、それだけ天皇制への「自由な言論」があったということかもしれないが。又、この会合と別に、こんな意見を出す人がいた。

〈やがて天皇になるべき皇太子が民主主義的精神しか知らないとしたら、日本の壊滅は必然不可避である。共産主義者が喜ぶのは当然である〉

これはある大きな右翼団体の代表が書いた意見書だ。今の「女帝を認める奴らは国賊だ」「認めたらもう天皇制ではない」という論調と似ている。あるいは、これ以上かもしれない。又、こんなことを言う人もいる。

〈魂を失ったインテリ、文化人、進歩学者などに歓迎される結婚に皇室までが同調して行く姿は、日本崩壊の前兆でなくて何んであろう。

天皇には天皇たるの本質要素があり、使命がある。天皇が之を忘れた場合、もはや天皇ではなくなり半帝となり、廃帝コースを辿るのみだ〉

今から48年前だ。でも同じことを言っている。今、「女帝では天皇ではない。半帝だ」と言っていた人もいる。しかし、失礼な話だ。皇室は存在してくれるだけで、ありがたい。それなのに、皇室に対し、ああしろ、こうしろと強制する。こうしなければお前は「半帝だ」「廃帝だ」という。これでは、どちらが天皇か分からん。「愛国者」の方が偉くて、天皇は愛国者の意のままになる〈影〉なのか。おかしいよ。

(2) 「正田家は辞退しろ！」と圧力をかけた！

さらに、当時は右翼のリーダーで、大きな新聞を出していた人は、こう言う。

〈尊皇護国の大義に則り敢えて勧告す。正田家は直ちに辞退せよ〉

凄いね。これは。これを書いた人は、昔、私も会ったことがある。火を吐くような演説をしていた。『大右翼史』には、全て、実名で載っている。しかし、いくら何でも、こんなひどい事を言い、その後は反省していると思う（いないかな）。それで実名は出さない。ただ、こんな「意見」がかなり、右翼陣営にはあったのだろう。そう思って紹介する。

正田家に辞退を勧告する理由として、こんな事をあげている。

第1に、婚約者のあったこと

第2に、カトリック教徒である

第3に、皇室の尊厳を傷つけること

第4に、皇后としての心構えのないこと

第5に、果たして真正なる恋愛か

その理由が、詳しく書かれている。読んで驚いた。今の週刊誌以上に、スキャンダラスで煽動的なのだ。「皇太子妃」をここまで罵倒し攻撃している。「天皇制打倒」の人々だって、ここまでデマをふりまき、個人的中傷を加えないだろう。「愛国者」であり、「皇室を思うから」許されることなのか。ひどい話だと思う。

その第一は、こんなふうだ。

〈其の第一は、婚約者のあった事である。本人美智子は、本年己に二十六歳の晩婚で今日迄に二十五回も見合をし何れの男性側より拒絶され成立せず、しかもその理由が、何れも「あんな元気のいい強い女では嬪天下で亭主を尻の下へ敷き家の中を引っかきまわされ、将来が思いやられるから…との事だったといわれて居る〉

昔なら「不敬罪」だし、今だって、「名誉棄損」になるだろう。それに、いくら「皇室を思つてのこと」といっても、「美智子」と呼び捨てにしているよ。又、「25回も見合いした」という。皆、断わられたが、一人だけ付き合った人がいるという。

〈其中で一人、波多野氏だけは婚約が出来、相当深き関係まであり、今回の話が進行したため、昨年正田家より之を解消したとの事であるが、かかる婚約者があったとしたら、之れは全く、身心の純潔を欠くもので到底、皇太子妃として、其の資格なき事は論ずるまでもなき事である

加うるに正田家血縁者中に肺患で療養所入りせる者及び、精神異状者ありとの事なるが、かかる事実ありせば、之れ重大なる問題であつて当然、この点よりすれば辞退すべきものである〉

ここまで言うかよ、と思うね。右翼だから許されるのか。（そんな言葉は使いたくないが）、こんなデマを流し皇室を冒瀆する者こそ〈国賊〉ではないのか。

其の二の「カトリック教徒である事」。これも詳しく「事実」？を並べて批判し、「美智子」や、小泉信三らは、「皇太子をカトリックに引き入れる

為め選ばれた選士」で、「日本の国体破壊を企てる大叛逆」だという。

〈正田家にしてかかる野望なしとするならば、直ちにエホバの神像を踏み
にじってかかる事のない事を示すべきだし若しこの事なしとせば明らかに之
れを是認する事となる〉

つまり、皆の前で「踏み絵」をしてみせろ、と言う。ひどいやね。その三
は、「皇室の尊厳を傷つけ皇室に対し、民心を離反せしめた事」。国民は
皆、失望してるという。

〈それは皇太子妃は将来の皇后となるので国民尊敬の的となるべきもので
ある。然るに選びに選んで「こな屋の娘」では何がなんでもおかしくって頭
が下げられるかという声が澎（ふつ）ふつとして日本全土に拡がって居る〉

その不満の声をマスコミが取り上げないのは皆、金で買収されてるからだ
という。それはカトリックや共産主義者の陰謀で、それが成功しているのだ
と。だから、

〈見よ現在、皇居解放問題。天皇退位問題等、無遠慮露骨に論ぜられる様
になり全く天皇の権威失墜の結果を生み出して居る〉

でも、反天皇論や皇居解放論の方が、まだいいんじゃないの。立場をはっ
きりさせ、理論的にやっている。でも、この「天皇主義者」は理論じゃな
い。自分の考えに合わない天皇は認めない。だったら、「反天皇論者」にな
ればいいのに…。「愛国者」の方がよほど無遠慮、露骨だ。「愛国無罪」だ
し、「愛国無敵」なのか。そして言う。

〈正田家にして日本人としての血の一滴でもあり、皇室に対し一片の尊崇
の念あればこの際直ちに辞退すべきであろう〉

**(3) 「美智子はちぢれ毛で、ガニ股だからいかん！」と右翼が言う。ひどい
やね**

では第四の理由。「皇后としての心構えのないこと」。ここまでひどい事
が書けるかと思ったが、読んでると、まるでマンガだ。そして、子供の口喧
嘩低度の感情的罵倒だ。だって、小泉信三は必死になって、民間人から探し
て、「こんな立派な女性はいない」と言った。それに対し、こう文句を言
う。

〈全国には美智子程度、否、それ以上の女性は何千何万人とある〉

〈新聞によると「生まれながらにして気品があった」と書いてあるが、天下の大新聞も広告料には筆を曲げるものと見えるが本人は、頭の毛はちぢれていて、「こな屋のちぢれ毛の娘さん」といわれていたとのことだが昔だったら「ちぢれ毛」だと嫁に貰い手がなかった位である。

また本人は「ガニ股」で昔から「ちぢれ毛ガニ股」は○婦の相といわれている。その人の相は専門家の説だと「三白眼で勝気で、温味やまた憐むが如き心なく才気が強く冷かな性格だ」といってるが、当日、新聞記者会見の時、両親をソッチ除けにして臆面もなくやってのけたが、これは到底普通の女性や殊に処女に出来る事ではない〉

この凶太い性格を見込んで、小泉信三は皇室破壊とカトリック化のために「美智子」に目をつけ、皇室に送り込んだという。「美智子」はまるで女忍者か工作員だ。

〈それであればこそ、（小泉信三は）テニスクラブに入れて接近の機会をつくり、世間知らぬ皇太子にサービスの腕をふるわせ、遂に今日まで持ち込んだものである〉

第五には、「果して真正なる恋愛か」。皇太子さまが見初めて好きになった、というのは嘘だという。野望をもつ「美智子」が近づき、サービスの腕をふるって、おとしたのだという。そしてこう言う。ちょっと、面白いことを言っている。

〈美智子は皇太子妃という事に魅力を持ったもので、恋愛に基づくものではない。皇太子を愛していたにせよ、自分の様な身分のものが、日本の伝統を破ってその地位に上る事の如何にそれが破壊的であり、引いては皇太子の地位に影響する事を考え辞退する事が皇太子を真に愛する事である。さもないければ、皇太子の立場を離れて結婚して呉れと申出るべきだ〉

凄い事を提言しているね。イギリスでは、そんな例があったね。しかし、これは問題が違う。「身をひくのが本当の愛」なんて、愛を論じてる。もし、皇太子でなかったら「美智子」はハナもひっかけないだろうという。これは違うな。その方が、迷うことなく、すぐに受けたと思うよ。でもこの「右翼の大物」はこう断定する。

〈結局、皇太子妃となれるが故に進んで承諾したものであって、人間明仁という方との結婚ではなく、皇太子という地位にあってこそその結婚で、恰度、金色夜叉のお宮がダイヤモンドと結婚したのと同じ心理に基くものであろう〉

「美智子」はとうとう、「お宮」にされちゃったよ。大変だったんだなと思う。右翼は毎日のように集まり、「けしからん」と議論してたのだろう。さらに新聞をつくり、各方面に配り、正田家にも申し入れをした。右翼の中でも心ある人々はこれを憂慮し、12月22日、全国から右翼が集まり、協議し、やっとのことで、「ご婚約祝福」を決議した。そこまでの過程が又、大変だったろう。それに、「それでもイヤだ」と反対論を捨てない右翼もいた。「祝福決議」をする上で一番大きかったのは世話人の佐郷屋嘉昭氏の力だろう。佐郷屋氏は、かつて浜口雄幸首相を殺したテロリストだ。佐郷屋留雄といった。獄に入り、10年後、出てから右翼のリーダーになる。この人が中心になり、「いろいろ反対もあるうが、これは天皇陛下のお心だ。従おうじゃないか」と説得したのだ。

その時の、いい分がふるっている。実に大時代的だ。

〈御聖断はすでに下っている。

反対を唱へて御聖慮に逆き奉るとは何事ぞ
大義を失ってどこに右翼の真めん目があるか〉

「聖断下る」というのが凄いな。二・二六事件の時を思い出す。反乱軍として討伐される前に、帰順しろ、と言った。又、戦争をやめる時もそうだ。御聖断が下ったのだ。武器を捨てて降伏しよう、となった。

つまり、この「こな屋の娘反対！」も〈戦争〉なのだ。いくら論争しても、相手は又、反論してくる。どちらがより皇室を思っているか。どちらが愛国者かを競ってもラチが明かない。もう、有無を言わさず「御聖断下る！」。これしかないのだ。表現は仰々しいが、初めからこれでやってれば問題はなかった。皇室のことは皇室に決めてもらう。それでいいだろう。天皇陛下が、「皇太子にはこな屋の娘がいい」と決めたのだ。国民の側から、あれこれと文句いう資格はない。女帝問題で、私が言ったことと同じ結論じゃないか。

この『大右翼史』は、実にいい本だ。詳しいし、面白い。ちょっと他にはない。1万1千円で買ったが、たとえ5万円、10万円でも、その価値はあ

る。山口二矢や小森一孝（嶋中事件）のこともとても詳しく書いている。又、紹介してみよう。

【附記】

(1)こんな右翼の「反対騒ぎ」を尻目に三島由紀夫は「祝婚歌」を作詩していた。やはり三島の方が先を行っていた。すなおに祝福している。

(2)「あの高校生」は本当にいたんだそうですね。昭和45年2月に三島宅を訪ねてきて、「先生はいつ死ぬんですか」と問うた高校生ですよ。三島の「小説」かと思ってた。後戻りは出来ないように言葉で覚悟を決めたのかと。

「あの高校生は私です」と後に手紙が来たそうだ。それに、当日、三島以外にも、お手伝いさんなども会っている。これは「決定版・三島由紀夫全集」の42巻の「年譜」を編集した井上隆史さんが教えてくれた。

実は先週、井上さんから電話があって教えてくれた。「HPに取り上げてもらい、ありがとうございます」と言う。「鈴木さんとは三浦重周さんを偲ぶ会で会いました」と言う。あっ、そうか。あの時の井上さんか。「全集」の編集をしてとは思わなかった。嬉しくて、いろんな事を聞いちゃった。三島については生字引だ。何でも知っている。これから、分からないことがあったら何でも聞ける。ありがたい。井上さんと知り合ったのも、「全集読破」した御褒美かもしれない。

(3)皇太子さまの結婚パレードに投石した少年がいた。この少年のことは三島は興奮して書いていた。その少年は捕まった。そのあと、かなりたってから週刊誌に登場した。それは読んだ。その後、どうしてるんだろう。会ってみたいね。ある雑誌社の人に言ったら、「出来るかどうか分かりませんが、探してみます。見つかったら、ぜひ対談して下さい」と言う。いいね。話を聞いてみたい。それと、「嶋中事件」の小森一孝氏だ。僕と同じ年だから、どこかで生きているだろう。名前も変えて、ひっそり生きているだろう。この人にも会ってみたい。

(4)最近やたらと仕事が増えて忙しい。たいした能力がないのに能力以上の仕事を引き受けてるのか。疲れて夕方ちょっと寝て、朝までずっと書いてたりする。地方にもかなり行った。腰が痛くなって、動けなくなり、骨法整体で治してもらった。2日行きました。近くにあるので、体がピンチの時は助かります。ありがとうございます。

(5)和田式勉強法で、眠くなったら、少しでも寝て、起きて仕事をするようにしている。目覚めて、朝か夜か分らん時がある。真夜中（だと思った）に電話をとったら変なアクセント（東北弁？）で、「カンガルーです」。何をからかってんだよ。「嘘つけ、お前は人間だろう！だから日本語を喋ってんじゃないか！」と怒鳴ったら、「カンガルー便です」。何だ宅急便かよ。

「みやま荘の何号室か分らなくてがす」「ウルセーな。803号室だよ」「8階なんかないですよ」

そのうち、「飛脚です」「コウノトリです」「ネコです」なんて言ってくるのかな。化け猫、祟り猫は来るなよ。おらは動物愛護主義者じゃけん。猫殺しの女性作家に祟ってやれよ。

【だいありー】

(1)9月25日(月) 今日からジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）が始まる。1限目（9:00～10:30）はライター科で「時事問題」。2限目（10:40～12:10）は文芸科で「現代史・」。喋ったり、教えたりするのは下手くそだから大変だ。必死にやっちょるけど。

月曜はHPの更新があるし、火曜更新のオーマイニュースのコラムがあるし、忙しい。「別冊宝島」の原稿も急遽たのまれて書いた。

(2)9月26日(火) 骨法整体に行きました。23日(土)に続いて2回目。3時間も丁寧にやってくれました。柔道で腰をひねった為かと思ったら、首でした。頸椎を治してもらったら、スーッと腰の痛みが消えました。

(3)9月27日(水) 2:00p.m.雑誌の取材を受けました。現在の保守論壇について。この日、発売の「SAPIO」（10月11日号）を見たら、「ゴー宣」の欄外に私のことが出てました。小林さんの高等戦略が分からんで、失礼なことを言っちゃった。申しわけないです。

(4)9月28日(木) 河合塾コスモ。

(5)9月29日(金) 東京新聞（夕刊）に、デカデカと出てました。「あの人に迫る」として私が、全6段。紙面の半分です。愛国心についてです。「宝にも兇器にも、愛国心は化ける」です。

【お知らせ】・

(1)「季刊教育法」(150号。2000円。エイデル研究所)が発売中です。特集は「教育基本法改正の本質は何か」。巻頭で私のインタビューが8ページで載っております。教育雑誌に登場するのは初めてです。タイトルは、〈誰が愛国心を教えるのか--大人にこそ必要な「愛国心教育」〉です。

(2)前にこのHPで紹介し、絶賛した映画「紀子の食卓」が9月23日より、K'Scinema(新宿)で上映中です。映画の宣伝チラシには私の文章が載っております。

園子温監督の衝撃の作品です。集団自殺、レンタル家族を通し、〈幸せ〉って何だろう。この世の「役割」とは。リアルとは? について考えさせられました。「今、目撃すべきだ!だれよりも早く!そして打ち震える!」と書かれています。宮台真司さんは、「文句なく戦後邦画ベスト5に入る」と言ってます。見逃したら後悔します。

【お知らせ】・

(1)10月2日(月) 月刊「現代」発売です。皇室問題の特集で、私も「本音の皇室論」を書いています。

又、「AERA」(10月9日号・朝日新聞社)が発売。日の丸・君が代強制に対し、違憲判決が出た。そのことについてコメントしてます。

(2)10月3日(火) 午後7時、青山ブックセンターで岡留安則さんと対談。テーマは「日出ずる国の最新タブー」です。岡留さんの『噂の真相・闘論外伝(岡留安則vs12人の論客)』(インフォバーン)の出版記念トークです。

(3)10月5日(木) 別冊宝島『日本黒幕列伝part・』が緊急出版です。凄い中味です。私も書いております。

(4)10月5日(木) 月刊「論座」(朝日新聞社)11月号発売。宮崎学さん(作家)と私の対談「何が彼らを追い詰めるのか」が巻頭で載ってます。「言論とテロ」について激しいバトルを展開しております。14ページにわたる対談です。

(5)10月7日(土) 月刊「創」(11月号)発売。佐高信さん(評論家)と私の対談が巻頭で載っております。「右翼の言論とナショナリズム=加藤紘一代議員放火事件を考える=」です。佐高さんから衝撃的事実が語られています。

(6)10月10日(火) 桜チャンネルに出演。

(7)10月11日(水) 「月刊Times」(11月号)発売。三島の隠された事件、二つについて書いてます。

(8)10月12日(木)～13日(金) 浅草公会堂(展示ホール)で、「戦場体験を語り継ぐ元兵士・軍属1000人展」が開かれます。午前11時から午後6時までです。

(9)10月18日(水) 「わしズム」発売です。小林よしのりさんたちと一緒に私も座談会に出ています。

(10)10月23日(月) 7時、一水会フォーラム。講師は宮崎学さん(作家)です。「突破者が見た安倍政権」です。

(11)10月27日(金) 夜、シンポジウム。

(12)10月29日(日) 夜、神奈川で講演。

(13)11月4日(土)から、ポレポレ東中野で「9・11～8・15 日本心中」が公開されます。11月11日(土)、夜の回が終わってから監督と私のトークがあります。

(14)11月8日(水) 7:30p.m.からロフトプラスワン。いよいよ、決まりました。ビッグイベントが。元日本共産党No.4の筆坂秀世さんが登場します。私とトークします。筆坂さんの『日本共産党』(新潮新書)は20万部を越すベストセラーです。読んでから、ロフトにいらして下さい。

(15)12月9日(土) 都内で講演。

(16)「早稲田文学」(9月号)が発売中。森達也さんと私の対談「近代天皇制と愛国心」が載ってます。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)
[2006年](#)

今週の主張10月9日

生まれて初めてですよ。新聞にこんなに大きく取り上げられたのは



東京新聞9月29日付夕刊

月刊「論座」11月号

(1)愛国心について。中日新聞と東京新聞が同時掲載

9月30日(土)、「東京新聞を見ましたよ。よかったですね。頑張ってますね」という留守電が友人から入っていた。久しく会ってない人だ。「何だ今頃」と思った。先月か先々に東京新聞のインタビューに応じた。又、見沢氏の本の書評を書いた。加藤紘一氏実家放火事件でコメントを喋ったな、と思い出した。どっちにしるかなり前の話だ。

そしたら他の人からもFAXがあった。又、HPを手伝っているMIFのメンバーからも、「東京新聞に載るなら知らせて下さいよ」ときつく叱られた。「あれっ変だな」と思った。それで、「最近、又、載ったのかな？」と考えた。何でも、9月29日(金)の夕刊に載ったらしい。全く知らなかった。土、日をはさ

んで、月曜にでも掲載紙を送ってくるだろう。それまで待つかと思ったが、10月1日(日)は東中野図書館に本を返しに行く日だ。じゃ、図書館で見てみよう。と思った。

お昼ごはんを食べてから、図書館に向かった。途中、東中野駅の構内を通る。売店に「AERA」が並んでる。もしかと思って買った。ページをめくった。出ていた。「日の丸・君が代の強制は違憲だ」というあの画期的な判決。それに対し、私のコメントが大きく出ていた。

私のコメントをこんなに大きく出していいのかな。申し訳ないなと思った。だって入学式で起立しないで処分された人々が訴えていた。その闘いをやった人々、弁護士さんの闘いを紹介しているのに、最後の「解説」のような形で、私が出ている。「民主的な我々の闘いに、何で右翼がコメントしてるんだ。邪魔だ!」と思われたんじゃないのかな。申し訳ないと思った。でも、日の丸・君が代は大好きだし、だからこそ強制には反対している。そういう立場のコメントもあっていいかもしれない。そう思った。この「AERA」については又、触れよう。

ともかく東中野図書館だ。着いてすぐ新聞閲覧コーナーに行く。東京新聞もあった。えーと、9月29日の夕刊か。と、パラパラと紙面をめくって探した。アッと思えましたね。思わず声を出しちゃいました。だって、4面の上半分全部なんです。全6段だ。写真だけでも4段だ。新聞に、こんなに大きく取り上げられたことはないよ。

そして思い出した。これがあの時、中日新聞に取材された記事か…と。中日新聞と東京新聞は同じ会社だ。8月28日(月)に名古屋から来た中日新聞の人に取材された。「ルノアール」の会議室で話をした。9月15日頃、中日新聞に載るといっていた。だから、このHPの「お知らせ」にもそう書いた。載ったら送ってくるはずだが、来ない。あらら、ボツになったのかなと思った。「あのう、ボツになっちゃったんですか?内容がないから」と電話して聞くわけにもいかん。ボツならボツで仕方ないな、と思っていた。

ところが、それから2週間して、載ったんですな。中日新聞と東京新聞に。ありがとうございました。

こんなに大きく載せてもらい、これは私の「お宝」です。子供や孫にも見せてあげたいと思います。わが家の誇りです。ですから、記念にその写真をアップしてこのHPにも載せました。

「あの人に迫る」というコーナーでタイトルは「宝にも凶器にも愛国心は化ける」。リードはこうなってます。

〈臨時国会が開会し、教育基本法の改正案をめぐる再び、「愛国心」論議が高まろうとしている。そんな世相を歓迎しているはずの新右翼の代表的な論客、鈴木邦男さん（63）が、『愛国者は信用できるか』という題名も内容も挑発的な本を出した。右翼運動に四十年、「日本一の愛国者」を自認する彼が、右傾化する日本を憂うのはなぜなのか〉

リードも、なかなかうまいですね。そして、記者が質問しています。教育基本法の改正について。愛国心は果たして危険か。愛も危険なのか。愛国心を教える必要はあるのか。…それに私が答えています。なかなかいいですね。いえ、私の答えは、タドタドしいのですが、まとめてくれた記者が優秀なんです。だから、立派な記事になっています。本当にありがとうございました。

最後に、「あなたに伝えたい」という囲みがある。レイアウトもお洒落ですね。私の言葉が入っている。

〈愛国心で国が救えるというのは幻想でしょう。自民党が卑劣だと思うのは、自分たちがだらしなかった責任を憲法と教育基本法のせいに行っていることです〉

そうですね。少年犯罪があるたびに、憲法と教育基本法があるからだ、と言う。昔は教育勅語もあって国民は一人一人、しっかりしていたし、筋が通っていた。公德心があり、優しさがあった。それが根こそぎ失われ、憲法と教基法が押しつけられた。日本精神を奪われた上に、アメリカ製の憲法、法律を押しつけられた。それで日本は子供も大人もダメになったんだ…そう言うんですよ。私だって昔はそう思ってましたがね。「諸悪の根源・憲法！」だなんて言うてました。

でも、違うんですね。少なくとも、それだけではないんです。何か、「犯人」探しをして、目に見える「犯人」がほしかったんでしょう。安易ですよ。ね。

(2)お歌会始の儀になぜ相関歌がないのか。君側に人なし。「天声人語」の思い切った提言、批判が凄い

でも、新聞に私の記事がこんなに大々的に出てるから、広げて見ると、照れる。恥ずかしい。それで、そっとコピーをして、返した。家に帰ってゆっくり読もうと。そして、借りる本を探していた。そこで、面白い本を見つけた。多分、前に読んでいたはずだ。しかし、その時は問題意識がなくて気がつかなかったんだ。

先週書いた「美智子さまご結婚」のことだ。『「週刊朝日」の昭和史』（第三巻・朝日新聞社）だ。「皇太子妃が決まるまで」という記事だ。「週刊朝日」の昭和33年12月7日号に載った記事だ。先週も書いたように、美智子妃の結婚には右翼はもとより、皇族、華族にも反対が多かった。しかし、よく決断したものだと思う。だが、何も、はじめから「民間人を」と考えたわけじゃないという。この点について、こう書いている。

〈おそらく、結果としては庶民の出を選んだが、これは何も優生学その他から、そうした血を皇室に入れた方がよいというので最初からその方を選んだのではないと見てよい。

最初は、やはり昔からのしきたりの通り、まず皇族の枠内で調査をして行き、やがてだんだんと華族の方へ広げて行ったことだろう。ところが、結局、そういう枠の中には適当な人が見つからないということで、枠がさらに広げられたと見るべきである。だから選考の人々は、皇太子としてふさわしい人という考えを推しすすめて行くうちに、今までの常識の枠を超えて行ったのであるが、それにしても最後に選考に当たった人々にそれを決意させたのは、まったく皇太子の“御意志”によるということである〉

最初から、「民間人を」と思ってたわけじゃなかったんだ。でも、それにしても、今までの「常識の枠」を超えるのは相当な覚悟が必要だったのではないか。取材していた記者たちですら、「民間人」なんて初めから頭になかった。ところが、〈華族と民間人〉について、ある人がこんなことを言った。それで、「もしかしたら…」と記者は思ったらしい。その人の話だが、これも枠を超える発言だ。

〈…たとえば、選考に当たる人々が民間の出を選ぶことに踏み切ったかどうか、われわれの最大の関心事だ。だが、なんとなく華族と民間人の問題を出してみると、ある人はこんなことをいった。

現在、貴族と、それ相当の地位にある人の娘さんを比べて、どちらが貴族的であるか、どちらがどうということはないではないか。

華族といったって、たとえば、日清戦争で師団長で出征した人は男爵になる。さらに日露戦争に軍司令官になって行くと子爵になる。ところが、そういう人が明治初年になんてであったかということ、長州や薩摩の足軽かなにかという場合が多い。

そういうのに対し、明治のはじめに何かの業種に着目し、海外に留学して帰って、実業方面で国につくした庶民とを比べて、そうした華族と実質的にど

れぐらい違うか、というのである。

それは、暗に、庶民の出でもかまわないということを意味すると、われわれは受けとった)

なるほど。そうなんだ。「華族と庶民」の違いはそんなに絶対的なものじゃない。この話を聞いて、私も納得しましたね。さらに言うならば、「皇族」だってそうだ。だって、戦国時代の武将は、さかのぼれば皆天皇だった。源氏も平氏も天皇から出ている。清和源氏、桓武平氏といわれ、清和天皇、桓武天皇の末裔だ。今だって、家系図をつくる人がいるだろう。つくってもらったら、皆、天皇に行く。日本は一家なんだし、親は天皇だ。だから、皇族、華族、庶民の差も絶対的なものではない。絶対的だと思わせられ、制度がつくられてきただけだ。

図書館で、もう一冊、凄い本を見つけた。『摘録・天声人語。昭和天皇』(朝日新聞社)だ。「天声人語」のうち、昭和天皇を扱ったものだけをまとめた。これば実にいい本だった。今、借りてきて、読みふけている。天皇制について私は少しは知ってると思ったが、これを読んで驚いた。恥ずかしくなった。何も知らなかったと思った。

昭和天皇について、あたたかく見守りながら、時には「提言」をし、時には激しい批判もする。又、何十年か後に、その「提言」通りになったこともある。時代を見越していたのか。あるいは宮内庁の人たちが、これを読んで、影響されたのか。

たとえば敗戦直後の昭和21年5月9日の「天声人語」だ。

〈皇太子さまが幼い頃、動物園にゆかれた。初めての試みとして交通止めのない行啓だ。だが、何が一番面白かったですかとお付がお尋ねしたら、電車が動いていたとおっしゃった。電車はいつも止まっているものと思っておられたのだ〉

〈今のウィンザー公がシンプソン事件で、皇帝退位の時、バーナードショウ翁は、平民の味を覚えて皇帝稼業が嫌になったのだと論評した。

皇族の結婚の範囲もせまく、優生学的にもどうかと思う。皇族はもっともっと人間に降りてこなければならない〉

特に最後の部分だ。卓見だ。当時として、かなり思い切ったことを言った。「馬鹿な」とか、「不敬だ」「妄想だ」と思われたかもしれない。しかし、これから12年後には、民間の皇太子妃が生まれた。「天声人語」はまさに予言

者だし、〈天の声〉だ。

他にも、「歌会始の儀」に相関歌（恋愛の歌）は万葉、古今、新古今…と続く、日本の和歌の伝統であり主流だ。それが無いと言う。他には、元号のこゝと、紀元節、などについて辛口の批評もしている。天皇の巡幸はいいが、そのために莫大な金をかけて、ありのままを見せない。これでは「裸の王様ではないか」という批判まである。思い切ってズバリと言っている。

それに何よりも、これは、貴重な「皇室事典」になっている。昭和天皇の数々の心温まるエピソードも紹介されている。その上で、提言し、苦言を提し、時には厳しい批判をする。これは勉強になった。考えさせられた。又、詳しく紹介してみよう。皆も、読んでみたらいい。驚き、感激するだろう。

(3)これは画期的な判決でしたね。〈流れ〉が変わるかも

さてさて、最後になったが『AERA』（10月9日号・朝日新聞）だ。

〈都立校の卒業式などをめぐり、あの…。「違憲」判決の理路整然〉

〈勝った教職員側もびっくりした。「意に反して歌うか、処分されるか」それを裁判所が強制不当と全面的に認めた〉とリードはある。

私も驚きましたね。画期的な判決だ。

9月21日、東京地裁（難波孝一裁判長）の判決は、処分を前提にした都教委の通達や職務命令は、憲法の19条が認める思想・良心の自由を侵し、教育基本法10条が禁じた「教育への不当支配」にあたりと判断。教職員に起立・斉唱の義務までではないことを確認し、原告全員に1人、3万円の慰謝料を払うよう都に命じたのだ。

これは勇気のある判決だ。判決は、実は、かなり時の世論、風潮に支配される。今なら、右傾化の中であって、「日の丸・君が代」強制を認める方が大方の賛成、支持をえられる。しかし、この裁判長は、そんな「欲」は出さない。あくまで憲法に照らして、これは違憲だと言った。これは立派だ。

1999年8月、「国旗・国歌法」が成立した。しかし、これは〈強制〉とは関係ない。「日章旗（日の丸）が国旗だ」。「君が代は国歌だ」と認めただけだ。つまり〈確認〉しただけだ。「これでは淋しい。尊重の義務を入れた方がいい」という自民党議員もいた。しかし、入らなかった。ただの無味乾燥な〈確認〉だけだ。だから、この時は、「強制するものではありません」と政府も文部省も言っていた。これは大事なことだ。

ところが、法律は出来れば一人歩きする。又、使いたい人間が出る。2003

年10月、都教委が、入学式・卒業式などでの国旗掲揚・国歌斉唱の詳細な実施指針を、都立学校長に通達。これが又、細かい。ねちねちと書かれている。

〈国旗掲揚・国歌斉唱にあたり、校長の職務命令に従わない場合は、服務上の責任を問われることを、教職員に周知すること〉

こう脅した上で、こんな、こまかに指示をした。

〈国旗は壇上正面に向かって左、都旗は右に掲揚する。式次第に「国歌斉唱」と記載する。司会者が「国歌斉唱」と発声し、起立を促す。教職員は国旗に向かって起立し、国歌を斉唱する。斉唱はピアノ伴奏者により行う…〉

この通達が出てから、今春までに処分された教職員は延べ345人だ。ひどい話だ。「通達」を見て思うのは、二重、三重に「忠誠心」をチェックしていることだ。「君が代」のテープを流す、という方法もあるが、それは認めない。必ず伴奏をつけ、皆で口をあけて歌う。起立しない人間は処分。起立しても歌わない人間も処分。口をあいてるふりをしてるが声を出さない人間も処分…。

教職員が起立しているか、口をあいてるか、本当に歌っているかを監視する人間がいる。都教委の人間だし、保守派の議員や、PTAも監視する。しかし、こうした監視する人間は、監視に忙しくて、自分では歌ってない。こんな連中こそ一番、国歌を侮辱し、冒瀆してるんじゃないのか。

それに、「国旗は左、都旗は右」っていうが、都旗って何だ。あるんだろうが、見たことはない。都民だから大切にする義務があるのかな。でも知らん。「愛国心」じゃないが、私には「愛都心」が全くない。いかんな。「売都奴」だ。「非都民」だよ。

この画期的な判決に対し、都教委側は「1%も予想しなかった」という大敗北。でもすぐに控訴した。しかし、奇妙なのは都知事の石原さんだ。「日の丸・君が代」を強制し、従わない者はどんどん処分しているが、でも、本人は「君が代」は別に好きでもないらしい。「AERA」に出てたが、かつて、1999年3月13日付「毎日新聞」でこう言っている。

〈--日の丸・君が代を学校の行事に強制しますか。〉

石原 日の丸は好きだけれど、君が代って歌は嫌いなんだ。個人的には、歌詞だってあれは一種の滅私奉公みたいな内容だ〉

じゃ、本人は歌ってないんだ。教職員じゃないから強制される場はないか。いや、スポーツ大会などで、その場合はあるはずだ。その時は、「嫌いだか

ら」歌わないんだろう。あるいは、個人的には嫌いでも、「都知事」として、いやいや歌うふりをしているのか。ぜひ聞いてほしいね。

僕らが学生の時、三島と石原は二大スターだった。右派学生にとっての知的リーダーだった。でも三島は、石原とよく論争していた。「守るべきものは三種の神器だ」と三島は言う、「又そんなことを言う」と石原は馬鹿にしていた。「自民党に入りながら自民党の悪口を言う。卑怯だ」と三島が言うと、「体制内改革だ」と石原は言い返す。「君には士道がない」と三島は言っていた。

又、石原は「昭和天皇は戦争責任を取って退位すべきだった」と言っていた。

そんな発言の流れからすると、「君が代は嫌い」というのも分かる。納得がゆく。でも、現実には強制している。大いなる矛盾だ。

又、かつてヒラの教師の時は「強制反対！」を叫んでいたのに、校長になるや、一転して「強制」している人もいる。「生活」のためなのか。「家庭を守るため」なのか。だったら、そんな「生活」など捨ててしまえ。まるで「転びバテレン」じゃないか。遠藤周作の『沈黙』を思い出すね。卑劣な「転向者」だよ。

「AERA」を読んでいて、もう一つ気になったことがある。2004年8月に、処分を受けた都職員に「再発防止研修」実施。と出ていた。この「研修」って何だ。犯罪者や交通事故を犯した人に対するのと同じなのか。「再発」を防止するための「研修」なんて。

「ダメじゃないか。君が代を歌わなくちゃ」「もっと口を大きくあけて歌うんだよ」と指導するのか。もともと、口の小さな人はどうするのか。指を入れて左右にひっぱって、歌わせるか。でも、これでは不格好だ。君が代に失礼だ。でも難しい歌だから、キチンと歌えない。よし、5千回、君が代を歌った「君が代博士」を呼んで研修してもらおう。…と、なるのかな。とにかく、不気味だよ。この「再発防止研修」は。私も見てみたい。受けてみたい。でも「日本一の愛国者」に研修できる人間なんているのかよ。「いたら出て来いやー！」と雄叫びを上げて、今週は終わり。

あっ、付記だ。今、10月3日（火）だが、「中日新聞」（9月29日・夕刊）が送られてきた。東京新聞と同じだよな、と思って見たら、「インタビューを終えて」というのが出ている。ここだけは「東京新聞」と違う。名古屋からわざわざ取材に来てくれた記者が書いている。これも、なかなかいい。

最後に紹介しよう。

〈東京の自宅アパート近くの喫茶店で取材。「ゆずティのホットがおいしいんですよ」と勧められた。口調は穏やか。激することがない。が、右翼の負の側面を語る言葉の中身は鋭く、自由だった。

「愛国心とコスモポリタニズム（世界市民主義）は両立しますか」と問うと、「両立しますよ」との答え。鈴木さんの愛国心は、閉ざされた愛国心と闘う、開かれた愛国心だ。「愛国心があるから戦争になる」と言う左翼がいなくなったから、僕が左翼的なことを言わないといけないんです--と苦笑する鈴木さんには「超右翼」の名がふさわしい〉

【だいありー】

(1)10月2日（月）9:00p.mから12:10までジャナ専の授業。「時事問題」と「現代史」。午後、新宿で雑誌の取材。終わって武蔵野館の前を通ったら、「記憶の棘」をやっていた。「生まれかわり」の映画だ。「生まれかわり」の映画は全部見ている。これは見なくちゃと思って見た。夕方、ちょっと寝て、朝まで原稿を書いた。

(2)10月3日（火）1:30p.mから「スペースFS汐留」で熊切和嘉監督「フリージャ」の試写会。近未来の日本だ。2、3年後かもしれん。「敵討ち（かたきうち）」が合法化される。被害家族は泣き寝入りさせない。きちんと仇が討てる。又、仇を討ってくれる代理人も選べる。うーん、やられたな。目のつけ所がいいな。と思った。面白かった。終わって、熊切監督と話をした。「前もここで試写会を見ましたね」と僕が言った。ここが、徳間ホールといった頃だ。1998年だから8年前か。熊切監督の「鬼畜大宴会」を見たのだ。連合赤軍事件を描いた映画だ。そこで監督に初めて会った。あれも凄い映画だった。それでSPA!の連載で書いた。そんなことを思い出した。「フリージャー」は正月からロードショー。ぜひ見て下さい。

この日、7時から青山ブックセンターで岡留安則さんとトーク。80人ほどのスペースは満員。『噂の真相・闘論外伝』（岡留安則と12人の論客。インフォバーン）の出版記念トークだ。「日出ずる国の最新タブー」というテーマ。3時間、まじめに、激しく語り合いました。このトークは映像で記録して出版する予定だという。終わって近くの「東方見聞録」で打ち上げ。岡留さんから、オフレコの面白い話が聞けて、大いに見聞が拡がりました。

(3)10月4日（水）午後2時、雑誌社の打ち合わせ。毎日、打ち合わせや取材

で人と会っている。急に仕事が増えた。先週の金曜なんて、一日のうちに4件も原稿依頼があった。まあ、今だけだろうが。とにかくがんばって書いている。よく本を読み、よく勉強し、怠惰な自分を超えなくちゃ。「超右翼」なんだから。

(4)10月5日(木) 河合塾コスモ。「現代文要約」と「基礎教養」の授業。太田光・中沢新一の『憲法九条を世界遺産に』(集英社新書)を皆で、読んだ。

この日、月刊『論座』(11月号)発売。凄いね。だって、表紙のトップに、「言論テロと右翼」(鈴木邦男×宮崎学)と出ている。他にいろんな人が書いている。53ページもある。「正気塾」の中尾征秀郎さんも喋っている。これだけの特集はちょっとないよ。ぜひ、皆も読んで下さい。

この日、別冊宝島の『日本黒幕列伝2』(宝島社・840円)も発売になった。井上日召、児玉誉士夫、宮本顕治…といったいろいろな〈黒幕〉が出てくる。面白い。私も、「右翼と黒幕の違い」について書いた。

(5)10月7日(土) 4時から、元「週刊金曜日」編集長の和多田進さんから招待を受け、銀座の「お取り寄せダイニング・十勝屋」のオープン披露宴に行く。鈴木宗男さん、十勝花子さんらに会った。

又、月刊「創」(11月号)発売。私は佐高信さんと「言論テロとナショナリズム」について対談している。加藤紘一さんもインタビューを受けている。他に浅野健一さんらが書いている。これも必読ですよ。

【お知らせ】

(1)10月10日(火) 桜チャンネルに出演。

(2)10月12日(木) 「月刊TIMES」に書いてます。

(3)10月12日(木)～13日(金) 浅草公会堂(展示ホール)で、「戦場体験を語り継ぐ元兵士・軍属1000人展」。午前11時～午後6時まで。

(4)10月13日(金) 午後6時15分。「おかしいぞ!警察・検察・裁判所」の第5弾。第二部では辺見庸さんの特別講演もあります。場所はいつもと違い、牛込筆筒(たんす)区民会館です。大江戸線「牛込神楽坂」A1出口より0分です。

(5)10月18日(水) 「わしズム」発売。座談会に出ています。「サイゾー」(11月号)発売。皇室問題について書いてます。

(6)10月23日（月） 7時。 [一水会フォーラム](#)。 [高田馬場駅前、サンルートホテル](#)。講師は[宮崎学](#)で「突破者から見た安倍政権」です。ぜひいらして下さい。

(7)10月27日（金） シンポジウム。

(8)10月29日（日） 午後6時から、神奈川県民センター・ホール（横浜駅西口徒歩5分）。先着200名。主催は「週刊金曜日」を応援する会・神奈川です。

「どうなってんだ、日本は！ 今、愛国心を考える」と題し、北村肇さん（週刊金曜日編集長）と私の対談です。参加費は千円。予約申し込みはインターネットのみです。

http://www.fi_berbit.net/user/jo8c79/T1.htm

mail:jo8c79@fi_berbit.net

(8)11月4日（木） から、ポレポレ東中野で「9・11～8・15 日本心中」が公開されます。11月11日（土）夜の回が終わって、10時40分から監督と私のトークがあります。

(9)11月8日（水） 7:30p.m.からロフトプラスワン。元日本共産党No.4の筆坂秀世さんと私のトークです。興味深い話が聞けると思います。お早目においで下さいませ。ロフトの案内を見たら、「改憲の是非を問う」とテーマが出てました。他にも豪華ゲストが出席する予定です。



[1999年](#)

[2000年](#)

[2001年](#)

[2002年](#)

[2003年](#)

[2004年](#)

2005年 2006年

ページデザイン / 丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

今週の主張10月16日 「皇太子さまお生まれなった」と三島の「祝婚歌」

(1) 「鳴った 鳴った ポーオ ポーオ」。実にいい歌だ

「皇太子さまお生まれなった」を久しぶりに聞いた。実に、いい歌だ。歌まで作って全国民が喜び、お祝いしているのだ。昭和8年12月23日、皇太子さま（今の天皇陛下）が生まれた。その喜びの歌だ。

今年9月に秋篠宮妃に親王さま（男の子）が生まれた。あっ、昔なら歌が作られたろうに、と思った。そうだ、「皇太子さまお生まれなった」という歌だ、と思い出した。昭和8年だから、私はリアルタイムで聞いたわけじゃない。NHKだと思ったが、昭和の歴史を放映してる時、紹介されたのだ。小さな子供たちが歌っている。いい歌だ。こんなにも皆が、喜んで、日本人として全員が一体になっている。ほのぼのと温かいものを感じた。うらやましかった。



その歌が入ったCDを、探していた。やっと手に入ったのだ。その前に、一冊の本から、この日の喜びを紹介しよう。工藤美代子『ジミーと呼ばれた日。若き日の明仁天皇』（恒文社）という本だ。明仁天皇は今の天皇だ。ヴァイニング夫人が来日し、皇太子さまの家庭教師になった。又、学習院でも教えた。その時、生徒全員にアメリカ名を付けた。皇太子さんは「ジミー」だ。凄い話だ。でも、抵抗はなかった。その頃の話を書いている。最近、又、読み返してみても、いろんな発見があった。さて、皇太子さまが生まれた日のことだ。

待ちに待った誕生だったし、歌まで作られた。それほど国民が喜んだのには訳がある。昭和天皇と良子皇后の間にはすでに4人のお子さまが生まれていたが、内親王（女の子）ばかり。そして、やっとのことで、第5子が男の子。だから、国をあげての慶祝となったわけだ。今と違い、天皇は国家の元首だ。現人神だ。工藤の本から引く。

〈待ちわびていた皇太子の誕生で、日本中が慶祝行事に沸いた。花電車が走り、昼は旗行列、夜は提灯行列と人々が万歳を叫びながら続いた。国民は、北原白秋作詞、中山晋平作曲になる「皇太子さまお生まれなった」と題された歌を口ずさんだものだった〉

「お生まれになった」ではなく、「お生まれなつた」だ。「に」を取ったところに北原白秋らしいこだわりがある。このCDは必死に探して、やっと見つけた。Victorから出ている。「戦中歌年鑑」の第一巻に入っていた。ここ

には、全部で21曲入っている。「入営の歌」「討匪行」など有名な歌から、こんな歌もある。

「満州行進曲」「満州国国歌」「満州国皇帝陛下奉迎歌」「肉弾三勇士」「東郷行進曲」…などだ。当時の歴史を知る上では貴重な曲だ。では、「皇太子さまお生まれなった」の歌詞を紹介しよう。

皇太子さまお生まれなった

作詞・北原白秋 作曲・中山晋平

日の出だ 日の出に
鳴った 鳴った ポーオ ポーオ
サイレン サイレン ランラン
チンゴン
夜明けの鐘まで
天皇陛下お喜び
皆々かしわ手 うれしいなお母さん
皇太子さま お生まれなすった

日の出だ 日の出に
鳴った 鳴った ポーオ ポーオ
サイレン サイレン ランラン
チンゴン
夜明けの鐘まで
皇后陛下お大事に
皆々涙で 有難うお日さま
皇太子さま お生まれなすった

日の出だ 日の出に
鳴った 鳴った ポーオ ポーオ
サイレン サイレン ランラン
チンゴン
夜明けの鐘まで
日本中が大喜び
皆々子供が うれしいな有難う
皇太子さま お生まれなすった

昭和8年12月23日の誕生に流された。それから、しばらく流れたのだろ

う。さらに、このレコードは翌昭和9年1月に発売されている。

三島由紀夫はこの時、8才。勿論、この歌を聞いている。その全国民の喜びの歌を覚えていたから、「祝婚歌」（昭和34年4月）を作詞したのだろう。今の天皇陛下は誕生した時も、結婚の時も、歌が作られ、祝福された。いい話だ。しかし、それ以後、こうした喜びの風潮がない。ちょっと淋しいではないか。三島の「祝婚歌」の歌詞は『決定版・三島由紀夫全集』の37巻（詩歌）に載っていたので紹介しよう。いや、その前に、「皇太子さまお生まれなった」の話をもう少しする。

タイトルは「お生まれなった」で、歌詞の中では、「お生まれなすった」になっている。北原白秋の詩人としてのこだわりなのかもしれない。

歌詞の中で、「サイレン サイレン」とあるのは、内親王（女の子）なら一回、親王（男の子）なら二回、サイレンが鳴りわたる決まりになっていた。それを言ったのだ。新聞記者に聞いたが、今回の秋篠宮妃の出産でも、号外は「親王なら4ページ」「内親王なら2ページ」と決まっていたそう。それで、皆、4ページになった。さらに、最後のページはどこも英語版になっていた。各社で打ち合わせをしたのだろうか。

(2)何と、軍部、米軍、中国が「皇太子拉致」を考えていた！

工藤美代子の『ジミーと呼ばれた日』には、明仁天皇（今の天皇）の誕生が、いかに国民に喜ばれたか、待たれたかが詳しく書かれている。昭和天皇と良子皇后の間には続けて4人の内親王が生まれた。女の子ばかり4人。国民も不安になる。そして、いろいろな〈対策〉が検討される。

〈そのため、天皇に側室を持たせるという計画が水面下で秘かに進められたのは、今ではあまりにも有名な話である。

ここで暗躍したのが元宮内大臣・田中光顕（みつあき）だった。田中が、自ら側室候補として三人の令嬢を選んだ。健康で多産系の家柄であることが条件だった〉

でも昭和天皇は断わったのだ。第5子が男の子だったから良かったが、危うい賭けだ。奇蹟というか「神風」だろう。今回の秋篠宮妃出産だってそう。おめでたいことだが、かなり危ない綱渡りでもある。

でも、田中光顕の選んだ3人は、どんな人だったんだろう。「健康で多産」の3人だ。見てみたい。歴史には登場しない3人だ。

もし、このまま男の子が生まれなかったらどうする。昭和天皇も考えた。

側近も考えた。天皇の弟宮たちがいるから、「男系男子」が絶えることはない。でも、心配だ。やはり天皇・皇后さまに生まれた親王が次の天皇になってもらいたい。そう思った。それで、「じゃ、側室を」という人がいる。さらに、こんなことを考えた人もいたそう。

〈良子皇后が第5子を出産する時期も近づいた昭和8年9月には、奇妙な噂が宮中とその周辺を駆けめぐっていた。

それは、もしも今度、皇后が親王を出産しなかったら、天皇は退位をして、弟の秩父宮に譲位するだろうという噂だった〉

実際は、「そうすべきだ」と言った人もいたのだろう。憲法や皇室典範でも譲位など認めてないのに、「譲位すべきだ」と不敬なことを口走る奴がいるんだ。ひどいね。前に紹介したが、今の天皇が美智子さまと婚約した時、「こな屋の娘が皇后では尊敬できない」と反対した右翼が多くいた。又、「恋愛ごっこにうつつを抜かしている皇太子ではダメだ。弟の義宮に皇太子を譲れ！」と言う人もいた。さらには今回、秋篠宮妃に親王が生まれたら、この親王が次の皇太子になれるようにすべきだ。そのためには、今の皇太子はやめて、秋篠宮を皇太子にすべきだ、といった評論家もいた。いつの世も、臣下から皇室に対し、ああしろ、こうしろと失礼なことを言いつのる人々はいるもんだ。

工藤美代子は、ご出産前の〈奇妙な噂〉を書いているが、この本にはさらに、敗戦直後の〈奇妙な噂〉もいくつか紹介している。ホントかな、と思うのも多い。一体、どこから聞いたのだろう。実は、こんな噂だ。

〈東京でも無条件降伏を納得しない陸軍の少壮将校グループが宮中になだれ込む事件があった。それと同じように宇都宮連隊の一部抗戦部隊が皇太子を拉致して会津若松に籠り、徹底抗戦を継続しようとする動きがあったのである〉

ホントかなと思う。でも、「宇都宮連隊」「会津若松」と具体的な名を出している。「幻の皇太子拉致事件」について書いたものは他にあるのだろうか。知りたい。

でも、会津若松については別の噂も聞いた。敗戦の時、「万歳！」をやったという噂だ。役所でも民間でも、「これで薩長の日本が滅びた！」と言って喜んだという。まさか、と思ったが、「いや、本当です」と言う人が何人かいた。明治維新では〈賊軍〉とされ、抑圧され続けた会津。西南戦争の時

は、警察官に志願し、「戊申の恨み、思い知れ！」と西郷軍に斬りかかったという。ここまでは本当だ。しかし、大東亜戦争で日本が敗れた時、「これで薩長の日本が敗れた！」と言って喜んだのだろうか。にわかには信じられないが。

さて、工藤の本に戻る。敗戦直後の〈噂〉だ。

〈これに続いてもう一つの情報が奥日光にもたらされた。それは憲兵隊からのもので、アメリカ軍が本土に進駐してきた場合、皇太子を人質としてアメリカ本土に強制拉致する可能性があるという内容だった〉

又しても「拉致」だよ。北朝鮮よりずっと前に、軍人や米軍は拉致を考えていたんだ。でも、米軍の拉致は、報告した憲兵の「恐れ、作文」かもしれない。でも、憲兵のいうことだ。そうなったらどうするという対策も練られたという。

〈そこで、もし進駐軍が押し寄せて来たら、同級生の1人を身代りに立てて、皇太子は会津若松に避難させるという案が出された〉

「身代り」を立てて、アメリカに送るのか。かわいそうに。まるで歌舞伎の「寺子屋」のようだね。それに、又しても会津若松だ。会津は「薩長の日本が敗けた！」と喜んだんだよ。皇太子を連れてこられても迷惑だろう。ましてや、皇太子を立てて、徹底抗戦なんかしないよ。戊辰戦争の時にあれだけ会津は戦った。だから今回も戦ってくれ。という一方的な願望があるんだろう。やっぱり、迷惑な話だよ。そうそう、皇太子の「身代り」の話だ。続きがある。

〈学友を身代りに立てるのは、いくらなんでも乱暴な話で後世のそしりを受けるのではないかと反対する侍従もいたが、皇太子の軍事教育御用掛である高杉善治は、身代りに立つ生徒も父兄も国のため喜んで引き受け、一世一代の栄誉だと思うはずだといひ張り、いざという場合の準備をした〉

ウーン、全くの無責任な〈噂〉じゃないのか。だって高杉善治と具体的な名前まで出ている。さらに調べる課題が増えた。昭和史研究家の人々に聞いてみよう。

〈これとは別に、天皇と皇太子が中国に戦犯として連行されるかもしれないという情報も流れていた〉

次から次と「衝撃の事実」が明らかにされるんですね。いや、「事実」か

「噂」かは分らんが。しかし、皇太子さまも大変だ。生まれた時は、歌も作られてお祝いされたのに、11年後には敗戦。軍人に拉致されて会津若松に行くか。アメリカに拉致されるか。中国に拉致されるか。各方面からの拉致の危険にさらされていたのだ。

(3)天才三島の荘厳な「祝婚歌」。心して読め

ちょっと話は変わるが、ヴァイニング夫人は皇太子に「ジミー」という名前をつけたが、姉宮にも名前をつけていた。

〈皇太子のすぐ上の姉宮である順宮（よりのみや）も学習院女子部に在籍しており、夫人は週に一回、授業をしていた。女生徒たちにも英語の名前がつけられ、順宮はパトリシアと呼ばれた。その名前が好きだと、順宮は皇后に語っている〉

語られた皇后さまも心中複雑だったでしょう。でも、「あら、よかったわね」と言ったのか。「毛唐の名前なんかつけられて、喜ぶなんて…」と思いながらも…。ついこの前までは「鬼畜米英」で戦ってたのに。変われば変わるもんだ。皇太子はジミー。姉宮はパトリシア。お父さんはチャーリー。まるでアメリカ人の一家だ。

天皇が「チャーリー」と外人記者から呼ばれたという話は、映画「太陽」に出てくる。本当かよと思ったら、マーク・ゲインの『ニッポン日記』（ちくま学芸文庫）に出ていた。だから本当の話だろう。なんでもチャーリー（チャーリー・チャップリン）に似てるからだろう。失礼な話だね。でも、アメリカに負けたんだから、何を言われても仕方ないと思ったのか。耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍びだ。

でも、順宮のように案外、みんな喜んでいたのかもしれない。じゃ、私も学校の生徒に英語名をつけて呼ぼうか。君はメロンちゃん。君はアップルちゃん。君はポインちゃん。君はペチャパイちゃん。君はナッシングちゃん…とか。クビになっちゃうだろうな。

では最後に、三島由紀夫が作詞した「祝婚歌」だ。作曲は黛（まゆずみ）敏郎。昭和34年10月10日(金)。ご成婚パレードのあった夜、NHKホールで「皇太子ご結婚祝賀演奏会」が行なわれ、そこで演奏された。三島も出席している。演奏はNHK交響楽団、指揮はウィルヘルム・シュヒター、合唱、東京放送合唱団、東京混声合唱団、二期会合唱団。この模様は、NHKラジオ第

一、NHKテレビ（午後7時30分～8時）で放送、放映された。

この時、私はラジオで聞いたのかもしれないが覚えがない。その後、黛敏郎の「題名のない音楽会」で演奏したそうなの。これはいい番組だったし、よく見てたが、この回は記憶がない。ビデオは出してないのだろうか。それで誰かビデオを録ってる人はいないかと、メールを世界に向けて発信した。そうしたら、オーストラリアの人が一人、ビデオを録ってるという。ただ、いま、アフリカを旅行中で、帰るのは来年の2月だという。それからでもいいから送ってくれと頼んだ。手に入ったら、又、ここで報告ませう。

さて、三島の「祝婚歌」だ。これが、何と、難解だ。聞いている人でも意味の分かった人はあまりいないんじゃないかな。少なくとも手元に歌詞がなかったら、分からん。あっても難しい。「皇太子さまお生まれなった」のように、分かりやすく、手放しで喜んでる歌ではない。三島34才だが、文豪・三島の名にかけて、北原白秋とは又、別の文学作品を作ろうと意気込んだのだろう。では紹介する。心して読むように。

〈 祝婚歌（カンタータ）

--日本書紀卷十七

勾大兄（まがりのおひね）の皇子と春日の皇女の婚姻の相聞歌のパロディー

（皇子唱ふ）

貴人（あてびと）に妻求（ま）ぎかねて

鞠競（まりくら）べ その庭もせに 賢（さか）し女（め）を 有りと聞き
て

麗（くは）し女を 有りと聞き 人目避く 菊の帷（とぼり）を 押し開
き 我出で立ち

妹（いも）が手を 我に纏（ま）かしめ 我が手をば 妹に纏かしめ さ婚
（よば）ひに 婚（よ）ばんとすれど

たまかぎる はるかの声に 声のみぞ 天馳使（あまはせづかひ） 庭つ
鳥 鶏（かけ）は鳴くなり

路つ鳥 車は動（とよ）む 愛（は）しけくも いまだ言はずて 明けにけ
り 我妹（わぎも）

（妃唱ふ）

信濃なる 軽井の沢ゆ 流れ来る 竹の 茂（いく）み竹 吉竹（よだけ）

本辺（もとへ）をば 柄（え）に作り 末辺（すゑへ）をば 網に作り 長

居（ながみ）る 鞠場（まりば）の上に
 下り立ち 我が見せば 天霧（あまぎ）らふ 雲場の池の 水下（みなした）ふ 魚も上に出て歎く
 やすみしし 我が大君の 結び垂る 領（えり）の御帯（みおび）の 紅に 頬赤らけみ
 声のみぞ 天馳使 汝（な）を除（お）きて男（を）は無しと言ふ
 （春祝 34.4）

今、書き写していて、やっと「パロディ」という意味が分かった。一番は勾大兄の史実。そして二番は、現在になっている。軽井沢のテニス場で、ラケットをもって、鞠競（まりくら）べをされる皇太子さまと美智子さま。それが日本書紀の物語のようだと三島は歌っている。さすがですね、この大文豪は。パロディというと、あまりいい意味では言われませんが、これは違う。あくまでも日本書紀に題材をとって書きましたよ、という意味の謙遜なのだ。難解だ、と言ったけど、こうして書き写してみると、よくわかる。実にいい歌だ。

(4)まさに、「インペリアル・ルーレット」なんだ！

ついでにもう一つ紹介しよう。三島は開戦の時も詩を作っている。「大詔」と題する詩だ。昭和16年12月8日の真珠湾攻撃及び米英との戦闘状態に入ったことを受けた書かれた詩だ。「文芸文化」（17年4月号）に載っている。これを書いた時、三島は16才。この年にして、こんな凄い詩を書いていた。やはり天才だ。

大詔

やすみししわご大皇（おほきみ）の
 おほみことのり宣（のたま）へりし日
 もる鳥は啼きの音（ね）をやめ
 もる草はそよぐすべなみ
 あめつちは涙せきあへず
 寂（せき）としてこゑだにもなし
 朗々とみことのりはも
 葦（あし）はらのみづほ国原
 みなぎれり げにみちみてり
 時しもや南の海 言拳（ことあげ）の国の首（かうべ）に

高照らす日の御子（みこ）の国 流涕（りゅうてい）の剣（つるぎ）は落ちぬ

眩しき声放たれぬ 敵共（あだども）の流（けが）しし海ゆ

海神（わたつみ）ら怒りきそひて 撃たれてし敵（あだ）の船人（ふなびと）

玉藻刈る沖にしづめぬ

かちどきは今しとよめど

吉事（よごと）はも いよいよ重（し）けども

むらぎものわれのころは いかにせむ

よろこびの声もえあげずただ涙すも。

〔文芸文化・17・4〕

三島は16才の時だ。高校1年か、その年でこれだけのものを書けた。万葉調で大東亜決戦を詩にしている。天才だ。

ここで終わろうと思ったが、ちょっと気づいたことがあるので、再び「皇太子さまお生まれなった」の歌について書く。

元・楯の会の伊藤邦典氏が上京し、共同通信の記者と三人で飲んだ。共同では楯の会の人々取材し、実にいい記事にまとめていた。「三島由紀夫と楯の会」と題し、「重い体験、次代に伝える」「語り始めた元会員たち」と見出しが書かれている。

僕もコメントを求められて喋った。「神に出会った幸せと悲劇」と題して語った。〈神〉とは三島だ。共同発だから全国40紙くらいに載ったようだ。（9月20日に）その新聞をもらった。その時、僕が「皇太子さまお生まれなった」の話をした。秋篠宮妃のご出産で思い出したのだ。実にいい歌だった。…と。HPにもそれを書きましたよ、と言った。そしたら、共同の記者は、「倉田さんも今回、その歌を思い出したとって、原稿を書いてくれましたよ」と言う。皇室問題に詳しい倉田保雄さん（評論家）だ。あとでFAXしてくれた。「『万世一系』常にリスク」という原稿だった。倉田さんはロンドンのロイター通信にいたりして、世界の王室事情に詳しい。これは読んで勉強になった。

イギリスなどの王室は外国の王室と縁つなぎで、「万世多系」だ。ロンドンで発行された『100人の英王位継承者』によると、1986年現在の英王位の継承順位は、チャールズ皇太子に始まり、ウィリアム、ヘンリー両王子を経て、50人目はノルウェー王家、52人目はルーマニア王家、70人目はユー

ゴスラビア王家、71人目はロシアのロマノフ王家、100人目がプロイセンのマリー・セシル王妃となっている。

これは凄い。これでは断絶の危機はない。ヨーロッパの王室は皆、万世多系で、さらに女王容認、長子継承制など柔軟に時代の流れに対応しているため安泰だ。さしあたり「王冠安保」は確立している。

倉田さんが、英人記者に日本の「万世一系」を説明したら、驚いたという。「インペリアル（皇室）・ルーレットだ！」と。つまり、「賭け」だと。今回の秋篠宮妃のご出産も、「ルーレット」を感じた。さらに昭和8年の「皇太子さまお生まれなった」を思い出し、「ルーレット」という言葉を思い出したという。

〈戦中派の私はいまの天皇の誕生前のルーレット状況を子供ながら感じていた。それだけに昭和8年12月23日早朝にサイレンが鳴り始め、ラジオ（JOAK）の臨時ニュースで皇太子誕生の報を聞いたときにはとてもうれしかった。〉

街中に提灯行列が繰り出され、お祝いムードは盛り上がった。JOAKは早速、皇太子さまご誕生奉祝の歌を流し始めた〉

そして、「日の出だ 日の出に 鳴った鳴った ポーオ ポーオ」の歌が紹介されている。そして、こう結んでいる。

〈まさか十年ほど後に、同じサイレンが空襲警報として鳴り響くとは----〉

そうですね。大東亜戦争に突入し、初めはよかったが、米軍の本土空襲を受け、その時のサイレンになるんですよね。なかなか含蓄のある文章だ。いい文だ。オワリ。

【だいありー】

(1)10月10日(火) 5:30p.m.から「桜チャンネル」で潮匡人さんと対談しました。放映は10月14日(土)の夕方7時から。

(2)10月11日(水) 昼・取材。夕方、雑誌の打ち合わせ。夜、柔道に行った。腰もやっと治ったようだ。おそろおそろ体を動かした。治って、本当に命びろいした。一時は、椅子に座ってられないほどで、寝床で腹ばいになって原稿を書いていた。喫茶店で座って本も読めない。腰が全体に痛くて、まるで生理の時のようだ。しゃがめない。トイレも出来ない。うん、こ

うしてはられない。と思うが、できない。地獄だった。だから何日も出来ない。たまっちゃう。このままじゃ憤死しちゃうよ。苦しい。腹ふくるるわざじゃ。でも、腰が痛くて、しゃがめない。いきめない。このままじゃ腹がパンパンになって、カエルの王様になっちゃう。苦しい。思い余って、病院に駆け込み、「お願いだ！帝王切開してくれ！」と叫んだ。いや、駆け込みそうになった。

そこで、骨法整体に2回、通った。それから、スーッと治っていった。忙しくて、眠れないし、いろいろ無理をしたかららしい。柔道で受け身を取りそこねて腰を打ったのだと思ったが、どうも頸椎の歪みだという。それを治してもらって、腰がスーッと楽になった。

帰りに、薬局で便秘薬を買った。恥ずかしかった。でも、子供時代からクスリは飲んだことがないから、すぐ効くだろうと思った。さらに、牛乳を飲むと腹をこわすので、ずっと「封印」してきた。今こそ、その封印を解く時だ。そこで薬二錠と牛乳をガブガブ飲んだ。そしたら何と、1時間後に無事、オギャーだ。単純な肉体だ。一時は帝王切開まで考えたのに。よかった。よかった。骨法整体のおかげです。ありがとうございました。

(3)10月12日(木)11:00a.m. 新聞社の取材。3:00p.m.から河合塾コスモ。夜、取材。

(4)10月13日(金) 昼、浅草公会堂に行く。「戦場体験を語り継ぐ元兵士・軍属1000人展」を見る。とても勉強になった。実にいい展示だった。

夜、牛込筆筒(たんす)区民会館。「おかしいぞ！警察・検察・裁判所」の第5弾。

(5)10月14日(土) 2:00p.m. 雑誌の座談会。

7:00p.m.から「桜チャンネル」。木曜に収録した、潮匡人さんの「桜戦略研究所」が放映された。

【お知らせ】

(1)10月16日(月) 「漫画実話ナックルズ」発売。見沢知廉特集。見沢氏の闘いが漫画になってます。又、塩見さんなど多くの友人が思い出を書いてます。私も書きました。これは是非読んで下さい。

(2)10月18日(水) 「わしズム」(秋号)発売。特集は「真の不安・偽りの不安」。座談会では、小林よしのり、森達也、富岡幸一郎、稲田朋美氏らと

共に、私も出ています。

「サイゾー」（11月号）発売。皇室問題について書きました。

(3)10月23日(月) 7時、[一水会フォーラム](#)。高田馬場駅前、[サンルートホテル](#)。[宮崎学](#)さんが講師で、「突破者から見た安倍政権」です。

(4)10月29日(日) 午後6時から、神奈川県民センターホール。「週刊金曜日」を応援する会・神奈川主催で、「どうなってんだ日本は！ 今、愛国心を考える」。北村肇さん（週刊金曜日編集長）と私の対談です。予約申し込みはインターネットで下記へ。

http://www.fi_berbit.net/user/jo8c79/T1.htm

mail:jo8c79@fi_berbit.net

(5)11月4日(木)から、ポレポレ東中野で「9・11～8・15 日本心中」の公開。11月11日(木)は夜の回の上映後、10時40分から監督と私のトークがあります。

(6)11月8日(水) 7:30p.m.からロフトプラスワン。元日本共産党No.4の筆坂秀世さんと私のトークです。テーマは「改憲の是非を問う」。

(7)12月9日(土) 弁護士さんの集まりで講演。

【追伸】

(1)保坂展人さんの国会レポート「元気印通信」(No.56)に載りました。ネーキッド・ロフトでやった対談（9月15日）です。よくまとまっています。

学校で愛国心を教えるというのが、大体、愛国心を教えられる人なんているのか。愛国心検定をやって、「教える人」を育てるのか。あるいは、「有識者会議」でもつくるのか。それなら僕も入れてほしいと言ったら、保坂さんが言っていました。

「その前に、教育基本法特別委員会の参考人に社民党推薦、あるいは野党枠で来てもらいましょう（笑）」

「いいなあ。ぜひ呼んでください」と私も答えました。もしかしたら実現するかもしれませんよ。

(2)「日の丸・君が代強制」に違憲判決が出た。「アエラ」（10月9日号）

で私がコメントした。でも、私なんかが「解説」したんでは申し訳ないと思っていた。ところが次週の「アエラ」（10月16日号）の「読者の声」でこんな投書が載っていた。ホッとした。

〈今回の判決について、裁判長を批判したり、卒業式が混乱すると言う人もいたり、反響は様々だが、新右翼の鈴木邦男さんが指摘しているように、日の丸・君が代を使って教員を強制したり、その忠誠心をはかったりすることが問題なのだ。

新聞に載った投書を読んでも、ポイントがバラバラで、誰か整理してくれないかと思っていたところだった。鈴木さんの意見は的を射ており、とてもわかりやすく良かった〉

(3)足立正生監督の衝撃の映画「幽閉者（テロリスト）がユーロスペースで07年正月第2弾としてロードショー公開されます。日本赤軍のテルアビブ事件と岡本公三を描いた映画です。ともかく、凄い映画です。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)
[2006年](#)

今週の主張10月23日 ジミーとご学友の物語

(1)立ち小便をし、トンボを食べ。「茶色のブタ」とあだ名されていた

「ジミー関連本」を最近、5冊、一気に読んだ。天皇陛下は皇太子の時、ヴァイニング夫人に教えられた。家庭教師として、又、学習院で。夫人は、クラスの全員に英語の名前をつけた。皇太子は「ジミー」と付けられた。

その時の事情をもっと知ろうと本を探して読んだのだ。一冊は、何度か紹介したが、工藤美代子『ジミーと呼ばれた日＝若き日の明仁天皇』（恒文社）。これは一番読みやすいし、手に入りやすい。

二回目は、同じく工藤美代子の『マッカーサー伝説』（恒文社21）。ヴァイニング夫人はマッカーサーに皇太子を会わせている。それが日本の将来に明るい希望を与えたという。

三冊目は、当のエリザベス・グレイ・ヴァイニングの『皇太子の窓』（文芸春秋）。何ととっても、これが一番詳しい。「ジミー」について書かれた全ての事、記録のネタ本はこれだ。



四冊目は、やはりヴァイニング夫人の『天皇とわたし』（山本書店）。これは『皇太子の窓』のかなり後に書かれている。皇太子から天皇になり、訪米した時に再会した。その話などを織り込みながら書かれている。勿論、皇太子を教えた時の話が中心である。又、前の本では書けなかった宮中の様子なども書かれている。

五冊目は、藤島泰輔の『孤獨の人』（読売新聞社）だ。これだけは、前の4冊と違う。4冊が「光」とすれば、これは「影」だ。いや、「正史」に対する「裏面史」か。「冗談じゃない。俺の方が正史だ」と藤島は怒るかもしれない。だって、彼は「皇太子のご学友」なのだ。そして、ヴァイニング夫人に学習院で教わった。



1950年、皇太子と著者。

例の「ジミー」について、前の4冊は「皇太子も喜んでた。クラスの皆も喜び、ヴァイニング夫人を尊敬していた」という〈美談〉になっている。

ところが、藤島の本だけは、これに反撥している。「英語の名前なんて、ふざけんな」と。ヴァイニング夫人への敵意をあらわにしている。

驚いた。しかし、学習院とはいえ、反撥する子、反抗期の子供もいる。これの方がリアリティがあった。

又、この本は三島由紀夫が序を書いている。そして、「戦後ニッポンを読む」シリーズとして1997年に復刊した時は、佐高信が「解説」を書いている。僕は学生時代に藤島に何度も会ったし、講演も聞いた。彼は三島とも仲がよかった。

実は、「ご学友」の証言は他にもある。たとえば、『昭和天皇の時代』（文芸春秋刊）には、「皇太子のご学友」の実に、自由な、楽しい「思い出」が語られている。たとえば、こんなふうだ。

「女子学習院に向かって一緒に立ち小便をした」

「授業中、かくれて弁当を食べていた」

「“雨夜の品定め”をした」（つまり、女性論を語り合った、ということだ）

「色白丸ポチャの女の子が好きだった」

「トンボを揚げて食べちゃった」

ヒヤ、驚きですね。トンボなんか食べちゃったのか。ヤンチャで過激だったんだ。かなり自由にやっていたんだ。学校では。さらに驚いたことがある。ヴァイニング夫人は「ジミー」と呼んだが、クラスメートは、別な徒名（あだな）をつけた。ブタの形をしたセトモノの蚊取り線香がある。そのブタに皇太子は似ていた。それに色が黒かったから、「チャブ」と呼ばれていた。「茶色のブタ」の略だ。

失礼な話だ。昔なら、「不敬罪」で逮捕だよ。こりゃ、いじめじゃないか。いじめを苦にして自殺などされたらどうする。ひどい「ご学友」たちだ。

でも皇太子は無礼と思わず、かえって楽しんでいた。愛称というか徒名をつけるほど親しくなっている。自分を特別扱いしないで、「仲間」と見てくれた。そう思ったのかもしれない。それで、ブタ蚊取りマークのスタンプを自ら作って自分のノートにベタベタと押していた。うーん、「自虐的」というか。いやいや心が広がったのだ。

では、「ジミー」の話に戻る。なぜ、英語の名前をつけたかだ。工藤の

『ジミーと呼ばれた日』によると、こうだ。

〈彼女（ヴァイニング夫人）の記憶によると、外国人教師は往々にして、生徒の名前をきちんと発音できない。それが子供たちの嘲笑の的となるのだった。夫人はある奇策をねって、これに対抗することにした。生徒全員に英語の名前をつけてしまおうと思ったのである〉

なるほどね。私も体験がある。学校で、難しい名前は読めん。「違います！」とすぐ文句を言われる。面倒だから英語の名前をつけちゃおうか。

ヴァイニング夫人の『皇太子の窓』では、さらにこう言う。

〈そう決心するには他の理由もあった。その理由の一つは、生徒のもっている英語の教科書では、子供の名前が、太郎、次郎、芳子、文子というように、全部日本名になっているので、英語の名前を発音することを教えなければ、と思ったのである。それに、すくなくとも自分の教える一時間だけは、できるだけアメリカの教室の雰囲気をつくろうと私は思った。

それからもう一つ、一生に一度だけ、敬語も一切つけられず、特別扱いもまるで受けず、まったく他の生徒なみになることも、皇太子殿下にとってよい御体験になるだろうと考えたのである。〉

なるほど、凄いことを考える。やはり日本人ではこんな思い切った発想はできない。

(2) 「いいえ、私はプリンスです」と皇太子。「韓国併合と同じだ」と騒ぐご学友も…

それで、「はい、あなたの名前はアダムです」「あなたはビリーです」と、次々とつけていった。

〈とうとう皇太子の番になったので、私は言った----「このクラスでは、あなたの名前はジミーです」。たまたまこの名前が私の好きな名前だったという以外に、ジミーという名をおつけしたのに特別の理由はなかった。

殿下は即座にお答えになった。

「いいえ、私は皇子（プリンス）です」

「そうです。あなたは明仁親王（プリンス・アキヒト）です」と私は心から相手に同意して言った。「それがあなたの本当のお名前です。けれどもこ

のクラスでは英語の名前がつくことになっているのです。このクラスではあなたの名前はジミーです」

私はちょっと固唾（かたず）をのみながら待った。

殿下は愉しそうに微笑された。そこで組全体が晴れやかにほおえんだ

ちょっと緊張した瞬間はあったが、皇太子も他の皆も、英語名を喜んだのだ。これからは授業は全て、英語名でやった。

〈生徒たちはみな自分の英語の名を呼ばれると返事をし、皇太子殿下も手をあげて、私は「はい、ジミー」と言うと、他の生徒同様にお答えになるのだった〉

和気あいあいとして、全てはうまくいった。ヴァイニング夫人の本ではそうなる。しかし、一部には不満を持つ生徒があったし、父兄も騒ぎ出したという。当然だろう。工藤の『ジミーと呼ばれた日』によると…

〈しかし、皇太子と同窓であり、後に作家となった藤島泰輔は、英語名で呼ばれるのを不快に思っていた友人もいたと証言している。

ジョンとつけられた生徒は、これでは犬のようだと内心怒り、藤島自身も「戦勝国人の独善的な驕（おご）りではないかと語っている。〉

〈少年（12才位）は面白かったが、父兄はそうはいかなかった。保守的な考えをもつ一部の父兄が騒ぎ出したが、結局どうすることもできなかった。その沈静化には、秩父宮勢津子妃の母であり、前宮内大臣松平恒雄の夫人である松平信子が尽力した。〉

その時、説得に持ち出したのは、「天皇陛下がヴァイニング夫人を希望したのだから」という一点だった。「だとすると、ヴァイニング夫人の教育方針に反対するのは天皇に異議を唱えるのと同じことになる」。

これも「ご聖断」なのか。昭和天皇が自ら希望した、というのは本当だ。ヴァイニング夫人の『天皇とわたし』の帯にはこう書かれている。

「わたしのしたことで成功したのがある」とすれば、ヴァイニング夫人にこちらに来るよう求めたことであった」（昭和天皇）

まるで昭和天皇が、推薦の言葉を書いてるようだ。でも松平信子さんは、この時、「天皇のご意志だから」といって説得した。ところが、皇太子さま

が成長し、美智子さまと結婚する時は反対している。天皇、皇太子さまが決めたことなのに…。

では、藤島泰輔の『孤獨の人』だ。これは一応、小説になっている。しかし、ほとんど事実だろう。でも小説だから、ヴァイニング夫人は「ベントン夫人」になっている。夫人の通訳兼秘書の高橋たねさんは「沢田恵子」になっている。ベントン夫人が風邪で休み、そのことを沢田が生徒に伝えるシーンから始まる。騒いでる生徒に沢田は言う。「Quiet Please!」と。それに対し生徒は…。

〈---日本語で言え、日本語で。

---オウ・ノウ・ミス・サワダ

---俺達は。ジャップだ。どうせジャップだ。

と唄うようなものもある。恵子は唇を噛みしめた。舌がもつれ何の話も出なくなった。

---毛唐の婆さんにヨロシク。

---早く帰ってベン公の湿布でも取替える。

---出てけ、用はないぞ。〉

〈---それが決定打かのようにだった。恵子は机の上にひろげた出席簿と書類挟みをつかむと、よろけるようにハイヒールを踏み出して扉に駆出した。薄い香水の匂いがよぎった。完全な致命傷がそのとき聞こえた。

---パン助。〉

ひどいね。これが学習院かよ。まるで暴走族のアンちゃんじゃないか。ヴァイニング夫人は「毛唐の婆さん」と言われてるし、通訳は「パン助（売春婦）」だよ。いくら何でもひどい。さらに、英語名をつけられたことについて、生徒たちは憤慨して語り合う。

〈---俺達は日本中の誰よりもアメリカを憎んでいた。誰よりもひどい目にあった。勿論それは俺達の考えで、もっとひどい目にあった奴がいて、それを特権階級のたわ言と聞けばそれっきりさ。でもとにかくアメリカなぞこん畜生と思ってたことは確かだろ。

---そうさ、俺も嫌いだった。

---それがだよ、《Good morning Mrs.Benton》と声をそれえて言い、揚句の果にベントンのつけたイングリッシュ・ネーム、俺はエドウィン、貴様は…。

---マークだ。

---そう、そんなのだったよ。そんな名前を組全部がつけられて、呼ばれて《Yes,sir》と答える。無血占領だ。韓国併合だ。まるで。しかも誰も不思議に思わないで、ひどいグループになるとお互いにイングリッシュ・ネームで呼びかわしてやがった。俺だって初めはそうさ。その中に莫迦莫迦しくなってきた。みな寛容さのためにね。寛容だよ。そうじゃないか。生れた時の名前があらあ、それもつい一年半前まで鬼畜米英だったオナゴにそう呼ばれて《Yes,sir》もないものだ

これは思い切ったヴァイニング批判だ。「韓国併合だよ」という言葉に注意してもらいたい。つまり、「創氏改名」だと言ってるのだ。日本は韓国を併合し、朝鮮神宮をつくり、名前を日本風に変えさせた。これは許し難い暴挙だ。日本の保守派の論客の中には、「いやあれは韓国の人々が言い出したことだ。だから強制ではない」と日本を弁護する人もいる。確かに、中には少しはいたかもしれない。しかし、日本が強制したのだ。許し難い行為だ。もし、韓国の人の中でそう申し入れた人がいても断るのが常識だ。「いやいや、あなたの国は私の国より長く立派な文化があるのです。大切にしてください」と。

「韓国併合」と同じことだと藤島は言う。これは凄い。皆がアメリカ名を付けられて、喜び、はしゃいでいるのかと思ったら、違うんだ。この頃のことを今の天皇陛下はどう思っておられるのか。記者会見で聞いてほしい。

「ジミーと呼ばれて嬉しかったのか」「創氏改名だと思ったか」「“チャブ”と言われて傷ついたか」

いやいや、心の広い天皇さまだ。「とても楽しかった」「皆と一体感を持って嬉しかった」と言われるだろう。

(3)辛さんなんて凄いのよ。逆「創氏改名」をしちゃうんだから

辛淑玉（しん・すご）さんに聞いた話だ。彼女は美人で背も大きい。「在日」だからといっていじめられたりしない。むしろ、ガキ大将で男の子を従えていた。小学生の時だ。ボスだった。この時、クラスの男の子に全員、名前をつけてやった。朝鮮式の名前だ。「君はパク君」「君はリン君」「君はキム君」「君はキョ君」「君はコン君」…と。ヴァイニング夫人の「子供版」だ。又、逆「創氏改名」だ。先生が生徒にこんなことをしたら大変だ。騒がれて、多分、クビになる。しかし、子供の遊びだ。つけられた子供も、

喜んでいた。「わーい。オラはキムチだ！」「オレはナムルだ！」「オレはサンチュだ！」…と。

そのうち、他のクラスの子まで押しかけてきた。「僕にも名前をつけて！」と。自ら志願して「創氏改名」してるんだ。これを聞いて笑っちゃった。「自虐的な子供だ」なんて怒ることもないだろう。ほのぼのとした話だ。でも、朝鮮名をつけたのは男の子だけなのか。女の子には付けなかったのかな。「君はヒジャさん」「あなたはペチャさん」「あなたはパイさん」とか。（こりゃ、朝鮮名じゃないかな）。

それとも、「志願」してきた男の子だけに付けたのかな。今度、聞いてみよう。そうか、分かった。きっと男子校だったんだよ。だから男子だけに付けた。「じゃ、なんで辛さんは男子校にいたの？」と次なる疑問が生まれる。不思議ですね。強い女性だから、例外的に男子校に入れたんだ。そうに違いない。あるいは一人、決然と「志願」して男子校に入ったとか。

さて、藤島の『孤獨の人』だ。ここでは皇太子がご学友と一緒にお付きの人間をまいて、銀座に行き、喫茶店に入った「冒険談」が紹介されている。喫茶店に入るくらいで「冒険」なんだ。本当に不自由な生活だ。

今も、「ご学友」という人々が、いろんな所で発言している。藤島自身も「ご学友」なのだが、「ご学友」ということに疑問を持っている。こんな発言は今まで、全くなかったので、エツと思った。驚いたし、何か「新鮮」だった。こんな箇所がある。

〈陛下とだって本気で友達になっている奴がいるのかい。…光栄だとか、得をするとか、御学友だと女の子が寄って来るとか、そんなことを全部抜きにして、ほんとうに殿下と友達になっている奴がいるのかい。岩瀬ぐらいじゃないか。そうして彼奴はみんなから嫌われてるじゃないか。〉

あとはみんな殿下を喰い物にしてるんだ。誰一人、親身になって、《人間》を作ってやろうとしないんだ。…そのくせ、殿下という利権を争うには、役人顔負けの図々しさを発揮してやがるんだ。〉

うーん、ここまで言うかね。と思った。小説とはいっても、ほとんど事実だろう。それに本の扉には、「心からなる敬意と友情をもって この書をクラスメート 皇太子殿下に捧ぐ」と書かれている。又、この本は映画化もされているのだ。

三島由紀夫は「序」で、『孤獨の人』について、こう言っている。

〈この『孤獨の人』は、存在論的孤獨の人なのではなく、ただ制度によって孤獨なのであるが、孤獨といふことの深く人間的な側面と、制度の非人間性とが、鋭い対照をなして、この少年を不幸にしてゐる。そして二つの側面は互に他を反映しつつ、他を強めてゐるのであるから、この少年の孤獨をただ人間的に救済するといふ企ては、はじめから矛盾を含んでゐる〉

確かにそうだろう。もし三島だったらどう書くだらうか、と思った。三島は藤島の先輩だ。在学中に藤島が雑誌に書いたものは読んでいる。その上で、「序」ではこう言う。

〈…そのころから見ると、格段の進境であり、部分的には巧すぎるぐらい巧い。文芸部のOBたる私としては、獲得した巧緻を適度に引き締め、気取り屋と皮肉屋の精神を最高度に発揮して、文章にも、表現にも、折目の正しいズボンを着きつづけてほしいといふことしかない。どんな時代が来ようとも、これを高く持するといふことは、気持ちのよいことである〉

これが「序」のラストだ。褒めてるようで、批判し、注文をつけているようでもある。オレならもっと、キチンと折り目のついた文章を書いてみせる、と言ってるようでもある。

佐高信さんは「解説」を書いている。8頁にわたる詳しい解説で、これ自体が一つの「三島論」になっている。例の「ジミー」問題についても書かれている。又、こんな指摘もしている。

〈この内側からの「皇太子小説」は実に興味深く、一読巻を描かせたい。学習院のそのクラスにおいて「宮」（しばしば、「あいつ」と表現される）に近いかがクラスを支配するカギとなり、「親衛派」に抜擢されるかどうかをめぐって、烈しい嫉妬の火花が散る。ただし、表面はお上品であるだけに、それは陰湿なものとなる。〉

うーん、ではこれは男の嫉妬物語なのだろうか。

この藤島の『孤獨の人』は映画になったと書いたが、よく映画をつくれたものだ。右翼の反対はあっただろうに。前に紹介したが、『摘録・天声人語。昭和天皇』（朝日新聞社）の中に、この映画に関する一文がある。昭和32年1月13日の「天声人語」だ。

〈皇太子をモデルにした映画“孤独の人”に学習院大学の一年生が出演したことから、退学さわぎが起こっている。

(中略)

太陽族映画の不評から方向転換したつもりだろうが、皇太子のような若い人の生き方を勝手に画面にさらしものにするやり方は感心できない。基本的人格と大上段にふりかぶるまでもなく、人間的ないたわりの心で見守ってあげなければならぬ人である〉

その通りですね。正論だ。しかし、当時、どんな反応だったのか。三島由紀夫はどう対応したのか。右翼の反対運動もあったろうが。調べてみなくっちゃ。当時は私は田舎の中学生だ。何も分からなかった。高校2年になるまで、日本に天皇がいることも知らなかった。アホな中学生だった。だから、この映画も見ちょらん。

しかし、今、見れないのか。ビデオになっいるはずはないし、見る方法はないのだろうか。残念だ。と、課題を抱えたまま終わる。

【だいありー】

(1)10月16日(月)朝9時からジャナ専の授業。「時事問題」と「現代史」の二つ。

この日、「漫画実話ナックルズ」(12月号・ミリオン出版)発売。マンガ「見沢知廉物語」が掲載されている。漫画・池田鷹一。原作・深笛義也だ。これはいい。実にいい。その人生がこうして漫画になったなんて。民族派では見沢氏ただ一人だ。たいしたものだ。似てるし、かわいい。



又、「追悼見沢知廉」として、塩見孝也、雨宮処凛、高橋京子（見沢氏の母）、そして私がそれぞれ思い出を書いている。お母さんは、「カラスと話す不思議な息子」と書いている。胸を打つ文章です。

(2)10月17日（火）午後、雑誌の取材。

(3)10月18（水）朝、産経新聞を見て驚いた。『わしズム』（秋号）の広告が大々的に出ていた。朝日新聞などにも出たようだ。徹底討論「不安な時代への不安」が11ページ載っている。小林よしのり、森達也、富岡幸一郎、稲田朋美の各氏と私だ。赤坂のプリンスホテル旧館で3時間対談をした。写真も出ているが、旧くて、なかなか趣のあるホテルだ。



又、この日、『サイゾー』（11月号）が発売になった。特集が「テレビが隠した7つの罪」。なかなか意欲的な特集だ。その中で、「ニュースのミカタ」があって、辛酸なめ子、川端幹人、室井佑月、森暢平氏と共に私も書いている。

(4)10月19日（木）河合塾コスモの授業。

(5)10月20日（金）仕事で大阪に行く。「週刊金曜日」（10月20日号）発売。雨宮処凛さんが私の本（『愛国者は信用できるか』）の書評を書いてくれた。「靖国に癒される若者たちの飢え」と題し、なかなかいい。ありがとうございました。

(6)10月21日（土）昼、取材。夜、志の輔さんの落語を聞く。

(7)10月22日（日）2時から河合塾コスモの会議。

【お知らせ】

(1)10月23日（月）7時、[一水会フォーラム](#)。高田馬場駅前[ホテルサンルート](#)。[宮崎学](#)さんが講師で、「突破者から見た安倍政権」。

この日、『ゴング格闘技』発売。特集「知られざる格闘書 私のおすすめの2冊」に原稿を書いた。格闘技の原稿は久しぶりだ。今年4月に『紙のプロレス』で靖国プロレスを取材して以来だ。

(2)10月29日(日)午後6時から、神奈川県民サポートセンターホール。

「週刊金曜日」を応援する会・神奈川主催で、「どうなってんだ日本は！
今、愛国心を考える」。北村肇さん(週刊金曜日編集長)と私の対談です。
予約申し込みはインターネットで下記へ。

http://www.fi_berbit.net/user/jo8c79/T1.htm

mail:jo8c79@fi_berbit.net

(3)11月4日(木)から、ポレポレ東中野で「9・11～8・15 日本心中」の公開。
11月11日(木)は夜の回の上映後、10時40分から監督と私のトークがあります。

(4)11月8日(水) 7:30p.m.からロフトプラスワン。元日本共産党No.4の筆坂
秀世さんと私のトークです。テーマは「改憲の是非を問う」。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

今週の主張10月30日

つまらぬ男と結婚するより一流の男の妾におなり！



(1)そんなことをされたら我々「つまらん男」は死ぬしかない

つまらぬ男と結婚するより一流の男の妾（めかけ）におなり。凄い言葉ですね。よくぞ言いましたね。別に私が言ったんじゃないかなかですよ。私はこんな反社会的、反道徳的、反体制的な言葉は言わん。こんな危険思想も持ちちょらん。つまらぬ男とつまらん女でも、大人になったら、平凡な恋愛をし、平凡な結婚をするべきだと思います。そして普通に子供を産み、普通に年を重ねてゆく。それが人間の幸せだと思っちょります。

普通が一番です。他を侵さず、侵されず、普通に生きていく。そういう人々が社会をつくり、国家を支えてゆくんです。違いますか？ 50代、60代になっても結婚しない男は変です。普通ではありません。

普通に生き、普通に結婚するのが一番です。それなのに、「つまらん男」

とは結婚するな！と言うんです。この人は。それよりは「一流の男」の妾になった方がいいという。恋愛・結婚にも究極の〈自由競争〉を導入しようとしてします。アメリカの謀略ですよ。危険思想です。アナキストです。もしかして大杉栄の信奉者でしょうか。

考えてもみて下さい。こんな過激思想が世に広まったら大変です。結婚制度はなくなります。「一流の男」にドッと女が集まって「寡占」「独占」状態が生まれます。それでなくても女性に縁のない我々「つまらぬ男」は、この社会から弾き飛ばされてしまいます。トドやアザラシの世界になります。一匹のオスが何十匹のメスを所有するのです。恋の「ブルジョワジー」と、恋の「ルンペン・プロレタリアート」がはっきりと分かれます。究極の格差社会です。金持ちと貧乏人の格差社会どころではありません。我々「つまらん男」たちは恋にも結婚にも一生縁がなく、子供も作れません。いわば生きながらにして〈死〉です。生存権、人権を否定されるのです。

そう考えると、「結婚制度」というのは、つまらぬ男（圧倒的に多くの男）の〈救済制度〉です。人類が1万年かかって辿りついた人類の知恵です。まあ、〈妥協策〉とも言えますが。だから人類は一人の男と一人の女の「つがい」を「普通のこと」「正義」と認めてきたのです。それに反する者は「重婚罪」で処罰されます。国家権力をもって抑えてきたのです。その「重石（おもし）」をとったら、社会はメチャクチャになるからです。

動物の世界も同じです。最近、山極寿一の『オトコの進化論』（ちくま新書）を読みました。「男らしさの起源を求めて」とサブタイトルがついてます。ゴリラが胸をたたいたり、相撲の仕切りのようなディスプレイをする。それを真似て人間の男もやっている。つまり男らしさは獣（けだもの）らしさなんですね。

それで、昔々、獣らしい男は女を独占していた。そんな男は狩りもうまいし、女を養う「生活力」もある。自然と女も集まってくる。一点集中・格差社会だ。「つまらぬ男」たちは弾き出されて、死にたえるしかない。でも、「一流男」の生殖能力にも限りはある。このままでは人類は滅びる。少数の「一流の男」だけが細々と生きのびるよりは、「つまらぬ男」にも女を回してやって、人類全体が太く、大きく生きる方がいい。だって、マンモスとか、いろんな外敵があるんだし…。

つまり、「一流の男」のおなさけによって、我々「つまらぬ男」の先祖たちは生かさせてもらい、「性のおこぼれ」にあずかり、やっと子孫を残すこ

とができた。だから、それから1万年たって、我々も生まれた。そういうことになる。

あるいは、こんな状況も生まれたんですな、大昔は。「一流の男」だけでコミュニティを作って、生活しとった。女も沢山いる。そのうち、どれが誰の所有物か分からんようになる。「俺のものをとった」「いや、これは俺のものだ」と喧嘩になる。殺し合いになる。それでは人類は生き延びられん。だから、妥協策としてルールを作った。それが一夫一婦の結婚制度なんでせう。山極寿一は言ってます。

〈初期人類は複数のオトコやオンナが共存する集団の内部は、独占的な配偶関係をつくらうとしたのである。そこには嫉妬や闘争が渦巻く危険が常に潜んでいる。そこで、人類は性交渉を互いに回避する近親どおしで集団をつくり、性交渉を夫婦だけに限定して、それを人前から隠す習慣をつくった〉

そうか。家族だけで生活したら、性交渉をする必要はない。他の男共に狙われることもない。つまり、「嫉妬と闘争」を防ぐために〈家庭〉は生まれ、〈結婚制度〉は生まれたわけだ。これは説得力のある理論だ。

ともかく、結婚制度は人類の知恵だったし、だからこれだけ長く続いてきたのだ。それなのに、その人類社会の叡知に対し、真向うから異論を唱えるんですよ、この人は。「一流の男」の妾になれ！と言って。これではギャートルズの原始社会への逆戻りじゃないか。と私は思いますね。

(2)岸信介の妾となり、生まれた子供は孫として届けた

実は、『つまらぬ男と結婚するより一流の男の妾におなり』は本の題名です。書いた人は樋田慶子。出した出版社は草思社。2000年6月に発行です。6年前か。この時も話題になりました。気にはなっていたんですが、買うのも恥ずかしいし、買いそびれていました。レジに持っていったら、女店員に、「ペッ、つまらん男のくせに」「お前なんか読む資格はねえよ」と睨まれるのに決まっています。だから買わなかったんです。



でも、最近、中野図書館で見つけ、思い切って借りました。まず、表紙の写真にハッとしましたね。子供を抱いている美女。凄い美人です。だから、この表紙をアップしました。写真の上に文字がかぶっているのに、さらに本の中にある写真をアップしました。いたんですね。こんな古典的な美女が。さらに年を知って驚きました。何と、57才なんだそうです、この美女は。じゃ、20代なら、どんなに美しかったか。時の総理大臣がカーッとのぼせて、妾にしたのも分かります。

こんな話がかかれてあります。著者が料亭で働いていた時のことです。

〈次期総理と噂されていた岸信介が、それまで二、三回お目にかかっただけなのに、ことのほかこの私をお気に召したというのだ。ある日、竹の間で二、三人いたはずの客がいなくなり、係の女中さんまで用あり気に立って行ってしまい、後は岸氏と私、二人だけになってしまった。

…いきなりテーブルの上に置いていた私の手をムギュッと握られた。紺のスーツの彼の斜めの縞模様のネクタイが目の前に近づいて来るではないか。(キャッ、どうしよう)。時の有名人に恥をかかせてはいけない。だからといって怖い。私はすぐそばにあった床柱によじ登ってしまった〉

お前は猫か、と思いましたね。床柱に登るかよ。岸信介というのは、安倍首相のおじいさんです。おじいさんのスキャンダルを暴いていいんだろうか。

さて、猫のように床柱に登った美女は、どうなったんでせうか。無理やり、下ろされ、組みしだかれ、服を脱がされ、なるようになったんでしょう。そして、「首相の妾」だ。本当に「一流の男」の妾になったわけだ。自

分で証明してみせた。じゃ、抱いてる赤ん坊は？ 57才の時だから、子供ではない。孫だ。となると、今の安倍首相じゃないか。凄い！

でも、何故、この本は、安倍首相のスキャンダルにならないのか。新聞記者は皆、知らないのか。だらしが無い。だから、オラがこうして教えてやってんだよ。

はい、これで終わり。大スキャンダルが発覚したところで、お開きだ。と、思ったが、物語はまだ終わらない。大ドンデン返しがあるのだ。

もう一度、表紙を見てほしい。タイトルは『つまらぬ男と結婚するより一流の男の妾におなり』。子供を抱いている美女の写真がある。著者は樋田慶子だ。ああ、この美女が樋田慶子なんだと分かる。そして、私は「一流の男の妾」になった。「つまらぬ男」と結婚して、つまらぬ人生を送っている女たちを見下している。そんな表紙だ。誰だってそう思う。

しかし、違うのだ。先入観というのは恐ろしい。いや、こんな本の作り方をする人間がズルイのだ。だって、婉然とほほえむこの美女は樋田慶子ではない。じゃ他人か。いや、樋田のおばあちゃんだ。そして、抱かれている一才の赤ん坊が樋田慶子なんだ。こりゃないだろうと私は思いましたね。それに、驚いたことに、『つまらぬ男と結婚するよりは一流の男の妾とおなり』と言ったのは、このおばあちゃんなんだ。

だから、これは、「おばあちゃんの知恵」本なのだ。おばあちゃんは、明治の総理大臣・伊藤博文公のお妾さんだった。うーん、この美女なら、博文は放っておかん。57才のこの美しさ。20代だったら、日本一の美女やろう。

何でも、このおばあちゃんが若い時、料亭で働いていた。「この子がほしい」という伊藤公の元に、おつかいに行かされた。「この桐の箱を届けてちょうだいな」と。伊藤公、箱の中を見ると一通の手紙が。そこには、「この使いの者、4、5日おとめ下さい」という口上書。いわば、「人間宅急便」だ。デリヘルだ。それで、伊藤公の寵愛を受けることになったのだそう。いいな、うちにはそんな宅急便は来やせんよ。

ところで、この著者の樋田さんだ。おばあちゃんと同じように、料亭で働いていたが、その後、新派に入り、女優になって、芝居や映画に出る。脇役としては重きをなしたという。林与一は彼女のいとこだという。彼女の家は有名な料亭「田中家」なので、作家の林房雄さんも来ていた。又、右翼の大物の児玉誉士夫、岡村吾一といった人々も来ていた。

そうだ。本の巻末に著者のプロフィールが出ていた。昭和44年にフリーになり、シェークスピアからブレヒト、さらには時代劇まで、幅広くこなした。たかな存在感のある女優といわれた。とある。

本人の写真もある。美人だとは思いますが、表紙に出ているおばあちゃんほどではない。でも、色気はあったんだろう。岸信介が手ごめにしようとしたくらいだから。せっかくだから、この「一流の男」の妾になってればよかったのに。そしたら、だんなは総理大臣。孫も総理大臣だ。おいしいことをした。

〈「つまらぬ男と結婚するより一流の男の妾におなり！ そのほうがどれだけ幸せか、あんたはまだ世の中のことが何一つわかっていないのや。お祖母ちゃんのいう通りにしたらええのや」と噛んで含めるようにいった〉

しかし、「お祖母ちゃんが何といおうと私は嫌よ！」と抵抗したんだそう。それで首相との「良縁」も蹴ってしまった。柱に登って逃げた彼女を見て岸信介も、「そんなに嫌いか」といって苦笑いして、あきらめて下さったそう。でも、彼女は別に、清廉潔癖に生きたわけではない。男出入りは随分とあったようだ。ある時、別れを告げると男は半狂乱になって暴れた。それを見ながら、「ほら、男はこんな時にこんな暴れ方をするのか」と冷静に見て、「芸の参考」にしたそう。恐ろしい女子（おなご）や。だから、本人もポロリともらしちよります。

〈「つまらぬ男と結婚するより一流の男の妾になりな」という祖母の生き方が、理屈では拒否しながらも、ニカワが革にくっついて離れぬように、いつも私のなかに息づいているのを認めざるを得なかった〉

(3)あなたは「生まれかわり」を証明できますか

だったら、あの時、岸信介の妾になりゃよかったんだよ。

そうだ。芥川龍之介が言っとった。「田舎の踏み切り番と結婚し、平凡な一生を送るより、ビスマルクの何十番目かの愛人になる方がいい」と。あるいは、樋田のおばあちゃんの行き方を見て、言ったのかもしれませんが。

では、ついでに、もう一つ、インモラルな愛について。前にちょっと紹介したよね。映画「記憶の棘」だ。

アナは10年前に愛する夫、シヨーンを亡くした。ジョギング中に公園で死んだのだ。いつまでも夫のことを忘れられない。でも、熱心にプロポーズし

てくれるジョゼフに負けて、婚約する。

そのお祝いパーティの席に、10才の少年が訪ねてくる。「結婚はしてはいけない」と言う。何いうちよるのよ、このガキは、と思う。でも少年は言う。「僕だ。ショーンだ！」

生まれかわりだったんですな。「そんな馬鹿な！」と思うが、言ってることは全て当たっている。二人だけの寝室の秘密も知っている。「こんなのはインチキだ」と周りの者たちは言う。特に婚約者のジョゼフは激怒し、少年に殴りかかる。

でも、本当だったんだ。10年前に死んだ夫の生まれかわりだった。さあ、どうする、どうなるアナちゃんだ。二人を同時に愛したらいいが、そうはいかない。アナは二つはない。どっちをとるか比べると、やっぱり私は夫を愛していたんだわ、と思う。

しかし、夫は今は10才だ。「私の欲求に応えられる？」と挑発的に聞いたりする。「言ってることは分かるよ」と10才の少年。そして、一緒にお風呂に入ろうとする。

そんなこんなで、アナちゃんは悩む、苦しむ。どうすりゃいいのさ、この私だ。そしてとうとう結論を出す。婚約者を捨てて10才の少年と逃げよう。愛の逃避行だ。本当は夫とよりを戻すだけなのに、「かけ落ち」をしなくちゃならない。なんという不条理だ。10年、逃げ回ったら、あなたは20才。晴れて結婚できるわ。「それまでは…」「うん、そうしよう」と結論。

ところがだ、ここにもう一人の30女が現われる。「ショーン、どうして私の所に先に来てくれなかったの！」と。ショーンの愛人だったんですな。アナと婚約者と元夫の三角関係がある。さらにもう一つ、アナとショーンと愛人の三角関係。あわせて六角関係になって、話は、もつれにもつれて、驀進する。

凄いやね。10才の少年の運命やいかに。あとは映画館で見てくれっそ。

ついでに、もう一つ愛のもつれ映画だ。どうせ私らは「つまらぬ男」だから、もつれた愛には縁がないが、でも、こういうギリギリの「If」というのは面白い。「もしも昨日が選べたら」という映画だ。これも洋画だ。

平凡な家庭がある。夫は会社員。「つまらぬ男」ではないが、かといって「一流の男」でもない。ともかく平凡な男。そして妻。息子、娘、まあ、平凡だが理想的なファミリーだ。

家には一杯、リモコンがある。テレビをつけようとするすると天井の扇風機が

回る。あれ、じゃこれかなと手にしたリモコンでガレージのドアが開く。ちくしょう、その次のリモコンでは、おもちゃの車が急発進して、ぶつかってくる。やってらんねーな。

そう日本でもあるよね。クーラーを止めようと思ったおばあちゃんが必死でリモコンを探すけど分かんない。そのうち凍死してしまった。そんな事故が、なかったかな。

そうだ。「万能リモコン」がある、と映画の中の会社員は気付く。買いに行く。そしたら何と、最先端「万能リモコン」があった。家で使ったら、あーら、不思議。テレビやクーラーだけじゃない。何でも「操作」できる。うるさく鳴く犬に「音量ダウン」のボタンを押すとどンドン音が小さくなる。「消音」で消せる。これはいい。私も欲しい。喫茶店で本を読んでいる時、まわりがうるさい。全部「消音」にしたら、心ゆくまで本が読める。

この最先端「万能リモコン」は、人の動きを「一時停止」させることもできる。うるさい小言は「早送り」できる。これはいい。そして、「巻戻し」ボタンを押すと、過去の楽しい時間に戻れる。「再生」を押すと現代に戻る。

さらに、「同時場面」というのがある。いやな人と話してたり、下らない授業の時は、これを押す。TV画面があらわれる。勿論、本人にしか見えない。これはいい。いつでも退屈しなくていい。

これで、「巻戻し」でたわむれに過去に行ってみた。思ったほど楽しくない。いじめられ、バカにされ、苦しい少年時代だ。「思い出」の中にある過去だけが美しいのだ。

じゃ、「未来」に行ってみよう。そんで「早送り」を押した。まず10年後だ。妻は浮気して、離婚。自分の友人と結婚していた。何だこりゃ。20年後に行く。ヤケで食い過ぎでデブになっていた。動けない。30年後、大病して病院にかつぎ込まれた。もう命もわずかしかない。そしてご臨終。

なんだ、なんだ。夢も希望もない映画じゃん。でも、ご臨終の寸前に「再生」ボタンを押したのかな。「現在」に戻る。やっぱ、ここがいい。ここにこそ幸せがあった。というメーテルリンクの「青い鳥」のようなお話だ。会社の仕事もほどほどにして、家庭を大切にしよう。とりわけ、妻は大事にしよう。そう思うご主人でした。でも、この人は「早送り」で未来を見ちゃったんだろう。じゃ、10年後に「離婚」は変えられないんじゃないの。だったら、いくら家庭を大事にしても、妻を大事にしても、役に立たない。どうせ、妻に捨てられるんだから。だったらいっそ、自分の方から暴力を振るっ

て、追い出しちゃえばいい。いかんかなー。

こう紹介すると、あまり面白くないようだけど、それは私の紹介の仕方が下手なんじゃ。本当はめっちゃ、オモロイ映画でっせ。私も将来のことをいろいろ考えました。みやま荘に引き籠もって仕事ばかりしないで、たまには田園調布の本宅に帰って、本妻と本子供と本ペットに優しくしてやらんといけんな。と反省しました。

【だいありー】

(1)10月23日（月）9:00からジャナ専の授業。「時事問題」と「戦後史」の2時間。夜7時から一水会フォーラム。講師は宮崎学さんで「突破者から見た安倍政権」。会場は超満員でした。

(2)10月24日（火）午後6時から赤坂プリンスホテル。国会議員の「井脇ノブ子さんを励ます集い」。井脇さんは学生運動をやってた時の同志だ。久しぶりに会った。懐かしかった。今度、ロフトか一水会でトークをやりましょーうよ、と言った。実現するかもしれん。

(3)10月25日（水）午後、雑誌の取材。

(4)10月26日（木）河合塾コスモ。「現代文要約」と「基礎教養ゼミ」。

(5)10月27日（金）山形県鶴岡市で、シンポジウム「言論の自由を考える」。8月に放火された加藤紘一さんの地元だ。加藤紘一さん、佐高信さん、小森陽一さん、早野透さん、そして私の5人で話す。6時半から3時間。何と500人以上の人が集まった。皆、真剣に聞いている。東京でもこれだけの会は開けない。感動しました。

(6)10月28日（土）鶴岡から車で塩釜へ。加藤さんの地元の人が送ってくれた。ありがとうございました。朝10時半から塩釜で父親の法要。午後帰宅し、夕方から座談会。

(7)10月29日（日）午後6時から、神奈川県民サポートセンターホール。

「週刊金曜日」を応援する会・神奈川主催の「どうなってんだ日本は！今、愛国心を考える」に出た。北村肇さん（週刊金曜日編集長）と対談した。満員だった。熱く、真面目に討論した。終わって、打ち上げ会に出た。

【お知らせ】

(1)11月4日(木)から、ポレポレ東中野で「9・11～8・15 日本心中」の公開。11月11日(土)は夜の回の上映後、10時40分から監督と私のトークがあります。

(2)11月8日(水) 7:30p.m.からロフトプラスワン。元日本共産党No.4の筆坂秀世さんと私のトークです。テーマは「改憲の是非を問う」。

(3)「創」(12月号)は11月7日(火)発売。「月刊タイムス」は11日(土)発売。又、別冊宝島から『日本の右翼と左翼』が11月8日(水)に発売されます。

7月の朝生「天皇制」が本になります。11月下旬に発売だそうです。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#)
[2006年](#)

今週の主張11月18日 痛快！井脇ノブ子物語

(1)学生時代から、男らしい活動家だったんや

会うなり言われました。「鈴木君、来てくれてありがとう。最近は何を一杯出してるし、頑張って発言しとるじゃないか」。「はっ、ありがとうございます。先生もご活躍で」とつい、へりくだってしまった。この人は僕より年下なのに。でも昔から、「鈴木君！」と言われてる。そして叱られている。

あの井脇ノブ子さんに会ったんですよ。久しぶりに。「やる気！元気！いわき！」の衆議院議員・井脇ノブ子さんだ。ピンクのド派手なスーツを着た、男のような女性だ。ああ、あの人かと分かるでしょう。「郵政選挙」で「刺客」として送られ、見事当選。長年の夢がかなってやっと当選したのです。



井脇ノブ子さん(右)と(10月24日)

松浪健四郎さん(右)と(10月24日)

10月24日(火)の午後6時から。赤坂プリンスホテル。「井脇ノブ子・躍進の集い」に出た。それも、木村三浩氏（一水会代表）に誘われて行った。

「そりゃぜひ行かなくちゃ」と勇んで行った。井脇さんと知り合ったのは35年ほど前だ。彼が、もとい彼女が別府大学の学生だった頃だ。生学連（生長の家学生部）の同志だった。この日は国会議員大勢来ていた。松浪健四郎さんとも久しぶりに会って話し込んだ。この人とは昔、プロレスの本と一緒に作ったこともある。お世話になった。

僕らが学生の頃、森田征史さんが生学連の委員長、僕が書記長だった。全国をオルグして回った。全国の大学で生長の家学生会をつくり、サークルをつくり、そして自治会に進出しろ！と説いて回った。長崎大学では安東巖、樺島有三、犬塚博英といった人々が中心になり、左翼と闘い、自治会をとった。「長崎大学に続け！」というわけだ。（その後、安東氏は生長の家本部に入り、樺島氏は「日本会議」の事務局長。彼の後輩たちが「新しい歴史教科書をつくる会」の事務局に入っている。犬塚氏は右翼・民族派の大物になった）

長崎大に続き、広島、大分などでも自治会をとり、「よし！民族派全学連をつくろう！」と気運も盛り上がっていた。その時の民族派全学連委員長には犬塚氏が内定していた。しかし、これは日学同との内ゲバでつぶれてしまった。

ちょっと話が先走った。全国を回り、「自治会に出ろ！」とハッパをかけていた時だ。「はい、やります」といって果敢に挑戦し、別府大学の自治会委員長になったのが井脇ノブ子さんだ。僕が政治への目覚めを引き出したのかもしれない。

その後、昭和44年5月、生学連が中心になって、幅広く民族派学生を結集する「全国学協」が出来る。この時、僕が委員長、井脇さんが副委員長だった。しかし、直後に内ゲバが起きて、あわれ、無能な委員長は解任されてしまう。指導者として能力がないし、やる気がないと断罪されたのだ。それから僕の苦難の時代が始まる。そして一水会をつくることになる。その辺の詳細は『増補版・新右翼』（彩流社）に書いている。

一方、井脇さんは、政治家を目指して、選挙に出続けるが、何度やってもダメ。「もう無理だから、やめなよ」と皆に言われていた。しかし、今回、7回目にしてやっと初当選。これは嬉しかったでしょう。

井脇さんを励ます会には学生時代の仲間も来ていた。元生学連の松下昭氏、田村司氏も来ていた。田村氏は元「楯の会」でもある。今月11月24日の野分祭では記念講演をお願いしている。田村氏は、全国を回り、楯の会会

員たちの軌跡をまとめた『火群（ほむら）のゆくへ』（鈴木亜絵美著・柏艫舎発行）の監修をしている。これは実にいい本だ。

昔の仲間たちと、昔話に花が咲いた。「学生の時から、井脇さんは男に間違われてたよなー」と。そうなんだ。「男のくせに何で髪を伸ばしてるんだ！」とか、「男のくせに女便所に入るな！」とか言われちゃったよなー。

街頭でチラシ配りをしたり、デモをしたり、ビラ貼りもした。ある時、夜中、ビラを貼ってたら、お巡りに見つかり、僕らは逃げた。運悪く、井脇さんが捕まった。お巡りが後ろからタックルして、とりおさえたのだ。後ろから抱きついたら、ムニツとして柔らかい手触りがする。「ありゃ、おめえ、オナゴか！」とビックリしたそう。

しかし、昔から変わんないな。この人も。この日も、演説は元気一杯だった。凄い演説だ。声は大きいし、身ぶりは大きいし、演劇的だ。迫力がある。挨拶に立った国会議員も皆、負けてる。井脇さんは「男装の麗人です」と誰か言ってたが、会場は大爆笑。「どこが麗人だよ」と思ったんだね。これは、ヨイショしすぎ。逆効果じゃ。

井脇さんは凄い人気だ。皆握手を求め、一緒に写真を撮ろうと混雑する。そんな中で我々も、やっと近づき、話をし、写真を撮った。それを紹介しよう。「いやー、鈴木君、よく読んでるよ。頑張っとるなー」とお言葉。「ハハー」と私は聞いていた。大学生の時から、ずっと、この調子だ。私は書記長で中央から九州に派遣されたのに、井脇さんは「鈴木君」と言っとった。

「ワンちゃんは元気かね」と言う。「ハッ、元気です」と答えた。ワンちゃんというのは犬塚氏のことだ。犬だからワンなのだ。これも凄いやね。でも、井脇さんには何を言われても文句言えん。

井脇さんは、選挙をやってただけじゃない。「少年の船」を主宰し、国際海洋学園を設立し、一貫して教育に情熱を燃やしてきた。井脇さんに救われた子供たちはどけだけいるか分からない。文科大臣になってほしい。この人なら日本の教育を変えられる。

(2) 「お前らがかわいいけん、なぐるんや！」



帰りに井脇さんの本をもらった。『親革命、子革命』（さんが出版）だ。「修羅場で親子は泣いて笑った！」とサブタイトルが付いている。2000年12月に出した本だ。まだ議員になる前だ。子供の教育の話が主だ。教育については実践の成果があるし、実に説得力がある本だ。前に出した『子供は変えられる。7日間あれば十分だ』（青春出版社）は何と47万部の大ベストセラーになった。他に、『お前らがかわいいけんぐるんや』（住宅新報社）がある。

そう。殴るんですよ。井脇さんは。僕もよく殴られた。いや、井脇さんにじゃないですよ。小学校、中学校の話ですよ。先生に殴られた。先生は必ず、「お前がかわいいから」殴ると言う。「嘘つけ！オラのことを嫌いだからだろう」と私は心の中で叫びました。「かわいいと思わんでいいから、殴らないでよ！」と、悲鳴を上げました。ほとんどの先生が、カーッとなって、生徒を殴るんです。私情です。

でも井脇さんだけは違う。本当にかわいいから殴る。この『親革命、子革命』にも、殴る話が出てくる。ひきこもり、不登校、暴力少年など、問題のある子供たちが親に連れられてくる。井脇さんはよく殴る。でも、必ず子供が分かるんだね。皆治る。まア、こんな大人に会っただけで子供はビックリする。こんなバイタリティのある大人を見ることはないよ。そのショックでまず子供はびくらかくわさ。

でも、子供にハッパをかけるだけではない。まず親だという。親が変われば子供が変わる、と言う。「親革命」を説くのだ。やはり「生長の家」的だなと思う。自分が変われば世界が変わる、と生長の家では教えている。自力救済だ。

そうだ。生学連をやってた時は、「日本を共産革命から守るんだ！」と言っていた。そのために全共闘と闘っていた。「左翼は、いくら学生のためといっても嘘だ。革命のためにやってるんだ！」と僕らは叫んでいた。「革命」は敵だった。どんな「革命」でも許せないと思った。

ところが、今は、井脇さん自身が『親革命、子革命』という本を出し、〈革命〉を使っている。時代も変わったもんだ。私だってそう。よく使っている。それだけ〈革命〉という言葉の悪魔性・恐ろしげなイメージが抜け落ちたからだろう。

おしゃれ革命、着こなし革命、キッチン革命…と、気軽に使われている。ちょっとした「変化」ぐらいの意味あいだ。

30年も前だったら、とてもとても使えませんでしたよ。「キッチン革命」なんて言ったら、そうさな。敵対党派の人間を拉致し、台所に閉じこめて、包丁や俎板や、スリコギを使って査問・総括・粛清をする。そんな光景を思い浮かべるでせうよ。

「お風呂革命」は水を張った風呂の中につけて、拷問し、水責めで殺すんだよな。「文房具革命」は、指に鉛筆をはさんで、ポキポキ折る。ボールペンで心臓を刺す。ホチキスで指をとめる。口をとめる。ハサミであそこを切る。うっ、やだな。そんなことはやめろよ！（あっ、私が勝手に妄想しとるだけか）。

連合赤軍の時も、どうせ総括するんなら、「日替りメニュー」にすればよかった。今日は「文房具革命」の日。次の日は、「お裁縫革命」の日（糸で首をしめ、針で急所を刺す）。さらに、「お風呂革命」の日。「焚き火革命」の日。「雪合戦革命」、「おトイレ革命」…と続く。こんなことなら、いくらでも考えつくね、私は。変かしら。

オラなんて、その場にいたら、きっと、「名プランナー」になったでしょうね。「永田さん、こんなプランはどうですか」「これも考えてみたんですが」と、次々と斬新なプランを出して、かわいがってもら。でも逆に、「お前がかわいいけん総括するんじゃ！」なんて言われて真先に殺されるかもしれんな。こわいな。

まあ、話が横道に外れちゃったけど、『親革命、子革命』はいい本ですよ。読んでいて、さすがは井脇さんだと感動しましたね。そして、さわやかな感動の涙の中で読み終えた。そして、「おわりに」を読んだ。

普通、こうした「おわりに」とか、「あとがき」は、「読んでくれてあり

がとう」だけだ。この本を作ってくれた出版社さん、ありがとう。担当者の誰々さん、お世話になったね、という感謝の言葉で終わりだ。読む方も、「ああ、やっと読み終えたぞ。もう、どうでもいいやね」と帰り仕度だ。いや、本を置く仕度をして、読んでいる。

ところが、この本の「おわりに」は、〈終わり〉ではない。むしろ、「はじめに」だ。こんな衝撃的な「おわりに」は読んだことがない。生まれて初めてだ。なんと、これだけで本を何冊か書ける。映画にも出来る。

だって、こんなことを書いとるんだ。井脇さんは1946年に大分県の漁師町で生まれた。僕より3才下だから、59才だ。若いね。学生時代から、「金ちゃん」と呼ばれていた。金太郎に似てたからだよ。でも、女性につけるあだ名じゃないよね。

〈兄が3人、姉が5人の9人兄弟の末っ子として生まれた。網元の父の名は庄市、母は米子だ〉

凄いね。9人兄弟なんて。姉が5人か。皆、似てるんやろうか。せひ公開すべきだ。国会議員は国民の代表なんだから、大臣は資産を公開するんだから、彼女も資産と同時に姉も公開すべきだよ。

(3)事件に巻き込まれ、一家心中…そして

ところで、彼女が小学4年の時、大事件が勃発する。何と、兄が殺人容疑で逮捕されたんだ。読んでいて、ウワー！と叫んじゃいましたね。テレビドラマか、映画のような展開だ。実は、お兄さんは連合赤軍事件で逮捕されたんです。「水商売革命」の日に、アイスピックで同志の心臓を刺して殺したんです。

いや、これは嘘です。彼女が小学4年だったら、1956年だ。まだ学生運動も起こっとらん。何の容疑かよく分からんが、お兄さんは殺人罪で逮捕。

「そこから、私の一家は奈落の底に落ちたのだった」と言う。「人殺しの家族」といわれて皆にいじめられる。村八分だ。弁護士を雇い裁判費用をつくるために土地も家も売り払い、一家はどん底の苦しみにあえぐ。兄弟も皆、働きに出る。男3人は土方、女6人は遊廓に売られる。でも一番下は「使いものにならん」と言って返品される。

いやいや、そんな時代じゃないか。でも兄弟皆が働いて家を助ける。納豆売りや豆腐売りをしたんだらう。

〈私は学校へ行く前に、二時間、海にもぐってアワビかサザエを採り、わずかな金に代えて生活を助けた。

小学校6年の時には、もう、どうにも行き詰まり、一家首吊り寸前のところまでいった。一家心中するのではないかと四六時中見張ってくれた近所の人がその寸前に助けてくれたのだ〉

凄まじい話だ。兄弟が9人、父母を合わせて11人。11人もぶら下ったら壮観だ。いや悲惨だ。それにしても小学校に行く前に2時間もアワビ採りか。大変だ。親孝行だ。しかし、おぼれたら大変だろうに。危ないよ。

彼女が国会に当選して、スポーツ新聞や週刊誌に派手に取り上げられた。大学生時代の水着写真もあった。グラマーだ。ともかく体格はいいし、胸囲はある。でも、何故か鍋を持っている。「どうして鍋なの！」と書いてあった。「きっと、アワビを採ってたんだよ」と私は解説してやったが、当たっていた。大学生になってもまだアワビ採りをしていたのか。

「11人の首吊り」は近所の人々が阻止してくれたが、多くの人々が、「人殺しの一家が…」と白い目で見ると、「ずっと苦難の少女時代を過ごすことになった」。井脇さんも「少女」だったんだ。さらに苦難は襲ってくる。

〈小学6年のときの修学旅行には「人殺しの妹だ」ということで連れていってもらえない。さすがに、この時ばかりは悔しくて、泣いてしまった。泣いたこなどなかった子だったから、母は驚いた。

「ノブどうしたの？」

そして事情を知るや、母は学校に抗議に行った。だが、ダメだった。学校から帰ってきた母は、私を抱きしめて涙を流しながら、こう言った。

「ノブよ。大きくなったら、人を差別しない先生になるんだ。一介の学校の先生じゃダメだ。本当に心のある教育者になるんだ」

この母の言葉に私は大きな決断をしたのだった。父も私のために大きな決断をした。

「この子を道連れにすることはならん。強く生きるんだ」と、一家心中を思いとどまったのだった。〉

ヒャー、もの凄い体験ですね。それにしても、ひどい学校があったもんだ。「人殺しの妹だ」といって修学旅行に連れてかないなんて。オラだったら抗議の自殺をしてやる。「この先生と、この子とこの子がいじめた！」と実名を書いて新聞社に送ってやる。ついでに、「憲法改正。北方領土奪

還！」と書く。そうしたら単なる自殺ではない。政治的主張があるから、「自決」だ。「小学校6年生、憂国の自決！」と大々的に新聞に出るだろう。

しかし、今からでも遅くない。この時の先公を糾弾しなよ、国会で。名前をあげて、国会に喚問したらいい。ちょうど「いじめ自殺」で論戦がやられとる。「私だって、いじめで、死ぬところだった」といって、加害者を呼び出したらいい。でも、この頃の校長や教師はもう死んでるかな。

ドラマですね。これはきっと映画になりますよ。前半は「潮騒」だね。アワビ採りの美女。まあ、美女にしないと映画にならんけん、そうするとよ。そのあとは、「赤い衝撃」だ。両方とも山口百恵主演じゃった。じゃ、彼女に主演してもらおう。もう無理か。だって主婦生活が長いし、スターの面影はない。

10年以上前だが、熱烈なストーカーが山口百恵の家に侵入した。ぶさいくな太ったお手伝いさんがいたので、ナイフを突きつけて、「山口百恵に会わせる！」と言った。お手伝いさんはキャーッと叫んで逃げ出し、犯人は警察に捕まった。ところが、このお手伝いさんと思ったのが、実は山口百恵本人だった。取り調べ室で聞いて犯人は愕然としたそうなの。かわいそうに。あっ、いかん。いつも犯人に同情してしまう。この話を聞いて、今度は百恵本人も愕然としたそうなの。でも、お前が悪い。お手伝いさんに間違われるなんて。もっと、キチンとし、キレイにせんかい。

では、井脇さんの話だ。普通なら、そんなにいじめられたら死ぬよ。「11人の首吊り」にも率先して加わるよ。でもお母さんが偉い。この事件を反面教師として、「人を差別しない教育者におなり！」といったんだ。一介の教師じゃダメだ。皆を教え、救う教師になれ、と。だから、井脇さんは結婚もせずに独身で闘い続けた。小学生の時から、「よし、政治家になって、この国の人々を救おう」と思ったのだ。これは「励ます会」でも言ってたから本当だ。

自分が結婚し、母となっても救える子供は4、5人だ。それよっか、日本中の子供を全て「我が子」と思い、教育し、救ってやろう。そう思ったんですな。すばらしい。「平凡なアワビ採りの正妻になるよりも、日本中の母親におなり」とお母さんが言ったのかもしれない。うん、先週とも話がつながる。こう決意すると周りも変わるんです。個人が変われば、世界が変わるんです。中学2年の時、何と真犯人が現れて、お兄さんの容疑は晴れたので

す。奇蹟が起きたのです。宗教的です。でも、どんな容疑で、なぜ逮捕されたのか。今度、会った時に聞いてみませう。そうだ、ロフトでぜひ呼んでくれよ。ロフトの人が、これを見てたら、ぜひ企画してくれよん。

というわけで、今週はハッピーエンドでした。おつかれさまでした。

【だいありー】

(1)10月30日（月）9時からジャナ専の授業。「時事問題」と「現代史」の授業。昔TBSで放映した「三島vs全共闘」。それに松本清張の「三島由紀夫事件」のビデオを見せた。よく出来たビデオだ。ある出版社で文学全集を出すことになった。三島は編集委員だ。それに清張を入れることに三島は反対した。文学者じゃないと思ったのだ。清張も恨みに思ったろう。でも、その恨みを押えて、淡々と三島事件を語っている。偉い。アワビ採りの少女のようだ。

(2)10月31日（火）図書館で勉強。夜、講道館へ行く。醍醐先生がいらしたので、三島由紀夫のことを聞く。「三島全集」を読んだら、昭和28年に、醍醐先生たちと座談会をしたのだ。それで聞いたのだが、思い出して話してくれた。歴史の証人だ。凄い。

10月は腰が痛くて、それに忙しくて、2回しか柔道に行けなかった。ノルマの4回は達成できん。そのかわり、本はよく読んだ。図書館の本を返さなくてはいかんし、ネットで買った本もあるし、かなり集中して読んだ。今月は40冊読んだ。「木村ゼミ」に参加してるOLは「月10冊ノルマ」で読んでいるし、社員男性は「月15冊ノルマ」を実行している。プロの私も負けるわけにはいかん、と頑張ってるわけじゃ。

(3)11月1日（水）取材。

(4)11月2日（木）河合塾コスモの授業。「基礎教養」のゼミでは姜尚中さんの『愛国の作法』（朝日新書）を皆で読んで、話し合った。

(5)11月3日（金）映画を観た。

(6)11月4日（土）図書館。取材。

【お知らせ】

(1)11月8日（水）9:30p.m.からロフトプラスワン。元日本共産党No.4の筆

坂秀世さんと私のトークです。「改憲の是非を問う」。天皇制、憲法、靖国、などについて話し合いたいと思います。筆坂さんの著書『日本共産党』（新潮新書）は11万部のベストセラー。天木直人氏との共著『九条新党宣言』（展望社）も売れている。私の本についても触れています。又、今発売中の『諸君』（12月号）でも、筆坂さんは「東大脳が国を亡ぼす」という座談会に出ています。

当日は、他にも何人がゲストを予定しております。ぜひいらして下さい。

(2)11月11日（土）ポレポレ東中野。夜8時20分から「9・11～8・15。日本心中」。その後、監督と私のトークがあります。

(3)11月24日（金）7時。三島由紀夫・森田必勝両氏追悼の野分祭です。高田馬場のホテルサンルートです。記念講演は元楯の会の田村司さんです。

(4)お待たせしました。宮台真司、高岡健編の『ころ「真」論』（発行・ウエイツ・1600円）がいよいよ11月上旬に発売です。2回にわたるシンポジウムとその後に行われた鼎談の全記録です。第一部には、宮台、高岡、そして私の鼎談が入ってます。第二部は、藤原知博、藤井誠二さんです。なかなか面白いものになってます。

(5)別冊宝島『日本の右翼と左翼』が11月8日に発売予定です。木村三浩、筆坂秀世さん、それに私も書いてます。かなり意欲的な本です。

(6)7月28日にやった「朝生」が本になります。『昭和天皇と靖国神社』。話題の人、民主党の細野さんも出ています。山本モナカ（山本モナだったかな）と路上接吻した人です。勇気のある人です。「朝生」が終わったあとも、いろいろ話しました。スカッとして、いい人だと思いました。10月28日、法事で仙台に行ったので、帰りに名物「三色モナカ」を買って来て、今食べてます。モナカはおいしいです。それに「ずんだ餅」も仙台名物です。

(7)11月10日（金）と15日（水）にテレビに出る予定です。「テロと言論の自由」のテーマのようです。

(8)12月9日（土）は、弁護士さんの集会に呼ばれています。それから、いろんな集まりに呼ばれています。

(9)慶応大学でやった講演、対談が来年の1月に、岩波書店から本になりま

す。いろんな人が入ってます。加藤紘一さんも入ってます。

(10)10月27日（金）に、鶴岡市でやった「言論の自由」を考えるシンポジウムも、本になるかもしれません。今、計画してるそうです。

(11)10月31日（火）の「朝日新聞」（夕刊）の「今月の論考」に「第7位」として佐高信さんと私の対談が入ってました。ありがたいです。「創」11月号の「右翼の言論テロとナショナリズム」です。

(12)武智鉄二の映画特集がやっています。11月17日まで、渋谷のイメージフォーラムです。「黒い雪」は裁判になり、三島由紀夫が証言したのは有名です。他に、「白日夢」「源氏物語」「戦後残酷物語」などを上映しています。

(13)「週刊ポスト」（11月10日号）に「安倍首相が絆を結ぶ『本気の国家主義』人脈・徹底研究」が出ています。「日本政策研究センター」代表で、元生長の家の伊藤哲夫氏も出ていました。「生学連出身者には他にも日本会議事務局長の樺島有三氏、民族派右翼の鈴木邦男氏といった大物がいる」と出てました。井脇ノブ子さん、衛藤晟一さんもそうですし、明星大教授の高橋史朗氏もそうです。「生長の家」出身者は頑張っていますね。まあ、私はダメですけど。

しかし、伊藤哲夫氏は凄いですね。「SAPIO」の「ゴー宣・暫く」でも取り上げられていました。

(14)エスパー清田さんが逮捕されました。何とも残念です。大麻を譲り受けた容疑だそうです。清田さんはロフトで何度か一緒に出ました。前田日明さんも一緒でした。目の前で「スプーン曲げ」を見せてもらいました。驚きました。

(15)「世界」（12月号）で魚住昭さんが「聞き書・村上正邦」を連載しています。玉置和郎さんと知り合い、「生長の家」に入り…と、詳しいです。私も「生長の家」の時にお世話になりました。その話も、これから出てくるでしょう。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)

2005年 2006年

ページデザイン / 丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

今週の主張11月13日

別冊宝島が凄い！『日本の右翼と左翼』だ！



(1)私はいわば、長崎の「出島」です

「別冊宝島」の決定打だ。極め付けだ。タイトルが何と、『日本の右翼と左翼』だ。ズバリ、そのものだ。本屋でも平積みされている。目立つ。コンビニでも売っている。値段も1000円と手頃だ。実際、売れている。左右の関係者だけでなく、「右翼・左翼」を全く知らない人も買っている。単に、センセーショナルに〈事件〉を紹介してるだけではない。左右の根元的な〈思想〉に迫っている。左右の活動家・思想家の憂い、怒りを紹介している。その意味ではこれは画期的な本だ。

今ハヤリの保守派文化人、保守派オピニオン雑誌をも撃つものになっている。かつての〈事件〉を紹介しながら、「ここまで命をかけて闘った人々がいた」。「お前たちにその覚悟があるか！」と問う本になっている。まず買うべし。読むべし。驚くべし。そして大いに語るべし。

この『日本の右翼と左翼』は表紙からして凄い。「思想と歴史をわかりやすく解説」と書かれている。そうか。入門書、解説書なんだ。写真も凄いし、レイアウトもうまい。どんどん引き込まれて読んでしまう。漫画に対抗するにはこの方法しかないな、と思った。

さらに表紙には、こう書かれている。「テロ、クーデター、暴力革命、内ゲバ…その“思想”と“行動”のすべて!!」

そうなんです。〈全て〉が語られている。フィルムの一コマ一コマのようにして、表紙には、その“行動”の断片が紹介されている。「右翼」のところでは、「二・二六事件と北一輝」「日本右翼の源流・玄洋社」「三島事件」「山口二矢が社会党委員長刺殺」。

そして「左翼」のところでは、「幸徳秋水の大逆事件」「よど号ハイジャック事件」「連合赤軍あさま山荘事件」「小林多喜二虐殺事件」。

この本は、「事件」や「人物」「思想」の紹介だけではなく、「第1部・右翼」の締めとして、木村三浩氏のインタビューがあり、「第2部・左翼」の締めとして、筆坂秀世さんが話している。この左右二人の大物の話が重厚で、説得力がある。

木村氏は一水会代表。「新右翼の現役リーダーが語る“言論と直接行動”」について語っている。僕は「全てのテロを否定する」と言ってるし、「右の頬を殴られたら左の頬を出せ」と言っている。無抵抗主義だ。「生長の家」の教えを受け、ミッションスクールで学んだ影響もあるのだろう。まあ、運動の現場から引退した気安さもあるだろう。ところが木村氏は現役の、第一線の活動家だ。日々、闘いの現場にいる。僕のように甘っちょろいことは言ってもらえない。基本的に考えは同じだが、テロについての考えは〈温度差〉がある。これはいいことだ。どんどんと違いを主張し、独自性を貫いたらいい。共産党とは違うんだから、皆が同じことを言う必要はない。木村氏はこう言う。

「鈴木邦男さんのことは尊敬しています。また勇気ある発言でテロを放棄すると言っている。でも、私はそこまで悟りきっていない。温度差がある。テロについては、私は留保という立場です。テロリズムと言うより、抵抗運

動として、法を超える行為がありうると思っています。だから、その行動の向かう先を抵抗運動のギリギリのところは留保しておきたい」

「私はイラクをはじめとして、アラブの人々との交流がありますが、彼らが反米をいう立場で抵抗運動をするのは当然。しかし、全部テロにされてしまう。これは残念なことです」

確かに、これは言える。昔は、新聞も「抵抗運動」「レジスタンス」と書いたが、今は、一様に「テロ」と書く。「自爆テロ」とも言う。それは違うだろう、と木村氏は言う。さらに、「テロを否定した鈴木」について、こんなことを言っている。これは面白かった。

「右翼の世界には、昔から活動している大先輩がいるわけです。そんな大先輩たちから、鈴木邦男は左翼みたいになっちゃったと言われたりして、風当たりが私のところに直撃する。私も対米自立を主張してますから、言われますがね。でもそういうのは誤解で、鈴木邦男さんは実はものすごく気骨のある人なんです。見た目とか発言はソフトだけど、民族派としての意識は誰よりも強い。じっさい、若いころは左翼とガンガン殴り合いをしていたわけだし、私も鈴木さんが怒りの鉄拳をふるうところを見たことがある。

鈴木さんはテロを否定しているけど、素質は充分ですよ。誰よりも。ただそんな自分が分かっているから、あえて否定してタガをはめているのでしょう。先日、正気塾の中尾征秀郎さんが『鈴木邦男は出島みたいだ』と指摘したのが面白かった。徳川時代の長崎の出島みたいに外国と交流を持っているようなものだ。左翼や文化人とも交流を持っている鈴木さんを表してうまいことを言うなと思いましたね」

出島か。いいねえ。私も気にいってます。ありがとうございます。一度、長崎の出島にも言ってみなくちゃ。今でもあるんだらう。私の「故郷」ですから。相撲とりにも出島というのがいる。今はちょっと不調だが、一気の押しが得意で、「出る出る出島」と言われた。私も、このスローガンで再起をはかりますか。

(2) 「民主党と選挙協力をしろ」と筆坂氏

それに、「テロリストの素質は充分だから、自分でタガをはめているんでしよう」という木村氏の発言、ギクッとしましたね。私は心を読まれている。こわい。見沢知廉氏は「人の心を読む機械ができたらしい」と言ってい

たが、木村氏が持っているのだろう。

さて、左翼運動の締めは筆坂秀世さんだ。「元・日本共産党ナンバー4が語る。“革命政党”の内情と問題点。共産党に未来はあるのか？」

40年も共産党にいてNo.4にまでなった。しかし党を出て、初めて見えたことも多い。「共産党は絶対に正しい」という原則だけの党だ。党員の多くは真面目で、潔癖だ。しかし、「妥協すべき部分はすべきだ」と筆坂さんは言う。

「立派な公約を掲げても、やはり政権を獲らなければ、実現できないわけですから、潔癖を貫くのもいいけど、妥協できる部分は妥協するという姿勢もあっていいと思う。消費税を上げない、憲法9条には手をつけないという確約を取れるのであれば、民主党と手を組み、選挙協力をしてもいいと思う。綺麗事ばかり言っても、国民には届かない」

これは又、思い切ったことを言ったもんだ。確かにその通りだ。「ベスト」が今すぐ無理なら、「ザ・ベター」を選ぶべきだ。政治の世界では当然だが、共産党は絶対に認めない。妥協して伸びる位なら、信念を貫いてつぶれる方がいい。と思っているのだろう。

筆坂さんは決して共産党を罵倒してるのではない。好意をもって注文しているのだ。これはかえって、共産党にとってはプラスだと思う。しかし、そうは思えないのか。筆坂さんは党の問題点は「高齢化」だという。これは右翼も左翼も、同じだ。そしてこんなことを言う。

「共産党の目下の課題は、若い党員が入ってこず、党員の高齢化が進行していることだ。一昔なら、共産党の青年組織である、民青（日本民主青年同盟）に、相当な数の学生が入ってきたものですが、当時から比べると、今は壊滅状態に近い。昔は、エリートが人民のために奉仕するという意識があり、『君は勉強できるんだから共産党に入る責任がある』などといって構成員を獲得できる雰囲気があったんです。

月日を経るにしたがって、若者の価値観の多様化、進むべき道が広がり、民青の魅力も薄れてしまったんでしょう。現在の共産党の構成は、60代の党員が若手と言われるような非常に厳しい逆ピラミッド。“革命”だ何だと言ったって、そんな活力はどこにもないという憂うべき現実です」

60代で若手か。じゃ、僕も若手だ。嬉しいな。それにしても、昔は、「君は勉強できるんだから共産党に入る責任がある」といって誘ったのか。凄い

ね。〈責任〉だよ。誘われた方も、「うん、そうかな」と自尊心をくすぐられたんだろう。頭がいいから、この日本を変え、その運動をやる責任がある。人民を指導していく責任がある。そうなる。じゃ、頭の悪い人はどうなるんだろう。「仕方がない。君は頭が悪いんだから、右翼にでもなりな」と言われるんだろうな。うーん、これは「日本の右翼と左翼」の最も根元的な問題かもしれない。

この本は、左右の事件、人物を中心に書かれ、筆坂、木村両人の重厚なインタビューで締めている。巻頭の「なぜ日本は右傾化するのか」と、「第1部・右翼」の「右翼とはいったい何なのか」を僕が書いた。他はノータッチだが、読んでると、知ってる人が沢山出てくるし、僕のことも出てくる。又、それぞれが有機的につながっている。

たとえば太田龍だ。1957年、革共同（日本革命的共産主義者同盟）をつくった。日本にトロツキズム理論を持ち込んだ最初の人だ。しかし、70年以降、どんどん右傾化し、エコロジー、玄米、反ユダヤ主義…と進み、今では、靖国神社に参拝し、玉串料を捧げるナショナリストになっている。元は「太田竜」といったが、今は「太田龍」に改名。「旧字体を使わないようにすることは、日本語を破壊しようとするユダヤの陰謀」だからだそう。太田龍の写真は、「週刊SPA!」（1997年12月31日・1月7日号）からとったと書かれている。ロフト・プラスワンで私と対談した時の写真だ。あの時は戦時中の米軍の話をしていて。米軍がどれだけ日本でひどいことをしたか。特に、日本の婦女子をどれだけ陵辱したかを語る。そして、涙をポロポロと流して語り、怒る。つい昨日のことのよう…。まるで身内の者が暴行されたように…。なんて純真な人なんだろうと僕は感動した。又、ロフトに呼んでもらいたい。

(3) 浅沼刺殺事件に影響を受けた田宮高麿と鈴木

他に革マルの黒田寛一、中核の本多延嘉が出ている。重信房子も出ている。「『血盟団員』だった右翼の父と語った“世界同時革命”」と出ている。ライターの桃井四六さんが書いている。



〈重信房子の父、重信末夫は戦前の右翼テロ事件「血盟団事件」に関係した男である。このことを発掘してはじめてインタビューしたのは、まだ産経新聞の社員だった鈴木邦男である。民族派の「やまと新聞」紙上に掲載されたインタビューで、鈴木の問題に重信の父はこう言った。

「警察が何回捕まえようと、マスコミがどうこう言おうと自分の初心を貫くことは立派だと思う〉

〈鈴木は重信の父の態度と言葉に心を打たれる。鈴木が原稿を書き、記事になって原稿料を手にしたのはこの時がはじめてであり、このインタビューをきっかけとして産経新聞を辞めて民族運動に専念することになる〉

そうか。重信のお父さんとの出会いから、私は民族運動に専念することになったんだ。古いことだから、自分でも忘れていた部分だ。

重信房子は「全共闘のマドンナ」だった。なんせ、運動資金をかせぐために皆バイトしたが、彼女だけは銀座のクラブで働いた。つまり、「銀座のクラブ」で通用する「唯一の女闘士」だったんだ。「全共闘のジャンヌ・ダルク」とも呼ばれた。ハイジャックで北朝鮮に渡った田宮高麿は「史上最高の女は重信房子だ」と叫んだ。重信は長い間、アラブにいた、「日本赤軍」の闘いを指揮した。なぜ、日本脱出をしたのか。日本には展望がないと思ったからだ。しかし、桃井は驚くべきことを言う。ハイジャックの田宮高麿がらみだ。

〈重信のパレスチナ行きには、その田宮が関連しているという話がある。赤軍派議長の塩見孝也から重信房子に北朝鮮に渡って田宮と結婚せよという指令があり、それを嫌った重信がほとんど思い付きでパレスチナ行きを決意

したというのである。これは事実だと思われる〉

エッ！本当かよ、と思ったが、「事実だと思われる」と、わざわざ書いてある。塩見さんは本当にそんな指令を出したんだろうか。今度会ったら聞いてみよう。もし、本当なら、戦後史は大きく塗り換えられることになる。それほど的美女ならば、普通、組織のトップが、結婚しようとするだろう。でも、田宮が熱を上げている。「史上最高の女だ」と絶叫している。じゃ、田宮に譲ってやろうと思った。それで親切心で仲をとりもってやったのに重信は嫌ってパレスチナへ。フーン、そんな動機で、日本赤軍は生まれ、テルアビブ事件も起きたのか。

それにしても塩見さんは偉いね。「史上最高の美女」を田宮に譲っただけでない。他にも重信に次ぐ美女は一杯いた。しかし、そんな美女とは結婚しない。そんなことをしたら、女性を表面（容貌）だけで判断することになる。ブルジョア的だし、反動的だ。それで、あえて、最も、地味な女性と結婚した。なかなか出来ることではない。またもや塩見さんを尊敬してしまった。（元新左翼の人に聞いたら、田宮は実は永田洋子と結婚させられそうになった。それを嫌って、ハイジャックして北朝鮮に逃げたという。まさか。そうなったら、全ての革命史は「男女の愛欲史」になってしまう）

ところで田宮高磨だが、勿論、彼のこともこの本には大きく出ている。親分肌の男だったという。1943年、岩手県生まれ。僕も同じ東北人だ。それに同じ年だ。ハイジャックされた「よど号」には共産党系の組合関係者も乗っていた。こう言っている。

「田宮の統率力、判断力はかなり優秀だと思った。いまはあやまったトロッキストの道を進んでいるが、はじめから正しい民主革命路線の方向にのびていれば、いい革命家になれたろうに」

そうしたら、日本共産党のNo.4か5になって筆坂さんと争っていたかもしれない。でも田宮の性格じゃ、すぐ党を追い出されただろうよ。



H/K（話かわって）。右翼の部の山口二矢のところを讀んでいた。1960年、浅沼次郎社会党委員長を刺殺した17才の少年だ。最近、沢木耕太郎の『テロルの決算』（文春文庫）を讀み返したばかりだったので、この山口のことは、じっくり讀んだ。いろんな偶然が重なって成功したテロだ。誰に教唆されたわけでもなく、17才の少年が、自ら考え決行し、そして、逮捕後、自決している。浅沼委員長を刺殺するためだけに生まれてきて、去った。そんな人生だ。この山口二矢のところの最後はこう結ばれている。



〈二矢のテロに強烈な衝撃を受けてのちに運動に走ったふたりがいる。日航ハイジャックの田宮高磨と一水会の鈴木邦男である〉

エッと思った。ここで切れている。この後の説明はない。僕は同じ17才だったし、同じ年の山口二矢がここまでやったことに衝撃を受けた。それが後々、運動をやるキッカケというか、トラウマになった。そんなことは何度も書いている。しかし、田宮はなぜ?と思った。

しばらく考えて、やっと分かった。田宮が僕に手紙をくれたのだ。いや、手紙じゃないな。彼の本の中に書いてたんだ。何の本だったろう。ちょっと思い出せない。なんでも、「鈴木と俺は同じ年だ。山口二矢の事件の時は同じ17才だ。それで鈴木は右翼になり、僕は反撥して左翼になった」。そんなことを書いていたと思う。それを覚えていて、ライターはこの『日本の右翼と左翼』に書いたわけだ。凄い。僕ですら完全に忘れていたことまで、書いている。頭が下る。

ともかく、読んで下さいな。この本を。時間の経つのも忘れて、読みふけてしまう。そして、新たな発見、感動があるでせう。

それにしても「別冊宝島」はやるね。最近は、「日本タブー事件史」「日本アウトロー列伝」「日本の怪死」「日本『黒幕』列伝」…と出て、決定打はこの「日本の右翼と左翼」だ。

これらのシリーズには私も書かせてもらった。新井将敬、野村秋介、見沢知廉、児玉誉士夫のことを書いた。さてさて、「別冊宝島」。次は何をやらかしてくれるのでせうか。楽しみだ。

【だいありー】

(1)11月6日(月)夜中起きて「オーマイニュース」の原稿を書く。毎週火曜は僕のコラムだから、前日までに書いて出している。やっと書き終わったら、朝になっていたんで、そのまま、ジャナ専に行く。9時から授業が二つある。でも着いたら、学校の様子が変わる。机が乱雑におかれ、講師室は誰もいない。「あれっ、どうしたんですか」と職員さんに言われた。「今日は休みですよ」。何と、ジャナ祭(11月5日)の後かたづけの日で休みなんだ。知らなかった。確認しなかった私がバカでした。

でも、間違っただけで休むよりはいいだろう。そんなことが前に1回あった。あの時は平謝りだった。「心配しましたよ。内ゲバで襲われたのかと思いましたよ」と言われた。他の職員さんが「いや、鈴木先生のことだから、襲いに行ったんだと思いました」。

空いた時間、喫茶店で、ひたすら本を読んだ。沢木耕太郎の『テロルの決

算』（文春文庫）を再読した。今、読み返すと又、感動が違うね。

夜、6時半から四谷のスクワール麹町。保坂展人さん（社民党）の議員生活10周年と、出版記念の夕べ。菅直人、阿部知子、辻元清美、加藤紘一…と党内外の人がかけつけ大盛況。私も挨拶させられた。国会の中では一番頑張っている。貴重な人だ。



(2)11月7日（火）取材。夜、柔道。早めに行く。柔道の練習の前に、醍醐先生から話を聞く。三島由紀夫に『にっぽん製』という小説がある。柔道家を扱った唯一の小説だ。醍醐先生に三島は取材をして書いたという。その辺の話を聞いた。

(3)11月8日（水）7:30からロフトで筆坂秀世さんとトーク。日本共産党時代の話。辞めてから、どう世界が変わったか。憲法はどうすべきか…などについて。かなり突っ込んだことを聞いた。党にいた時なら、とても答えてくれなかったことも、丁寧に教えてくれた。お客さんも一杯で、ひと安心した。二人だけで3時間半、ぴっちり喋った。

(4)11月9日（木）河合塾コスモ。現代文要約と基礎教養ゼミ。

(5)11月10日（金）大阪。読売テレビの「たかじんのそこまで言って委員会」に出る。この日は収録。放映は11月12日（日）。いつものレギュラーの他に鴻池祥肇（自民党）、田嶋陽子、花田紀凱、江本孟紀が出た。教育、週刊誌について話した。

(6)11月11日（土）朝10時から、中野。知り合いの塾の先生に頼まれて、勉強会で話す。

夜8時からポレポレ東中野で、映画「9・11～8・15日本心中」を見て、

その後、大浦信行監督とトーク。満員だった。「心中」と「玉砕」をキーワードにしなが、日本精神、天皇、文化について語った。映画は12月1日まで上映。ぜひ見て下さい。

【お知らせ】

(1)『こころ「真」論』（発行ウエイツ・1680円）が出ました。295ページと、かなり厚い本です。宮台真司、高岡健、前原和博、藤井誠二、そして私が出ています。

第一部が 子どものリアルと成熟社会

第二部が おとなの自覚

第三部が 犯罪とこころの復権

（私は第二部に出ています）

(2)月刊「創」（12月号）発売中です。私は、連載で、「国土」について書きました。今月から連載陣に佐藤優さんが加わりました。

(3)11月15日（水）5時から、朝日ニュースターに出演。「テロと言論の自由」について。

(4)11月24日（金）7時、三島由紀夫・森田必勝両氏追悼の[野分祭](#)。高田馬場の[ホテルサンルート](#)です。記念講演は元楯の会の田村司氏です。

(5)12月9日（土）弁護士さんの集会で講演。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

今週の主張11月20日 その後の「楯の会」

(1) 「なぜ自分は選ばれなかったのか」と考えて、36年

「神に出会った幸福と悲劇」だ。やはり、そう思った。再確認した。三島事件と「楯の会」のことだ。元「楯の会」会員たちが、いろいろなところで発言し出した。本も出している。皆、60才を迎えようとしている。「語っておきたい、伝えたい」という思いがあるのだろう。

「あのとき、自分がなぜ選ばれなかったのか、悔しい思いは今でもあります」と伊藤邦典は共同通信のインタビューに答えて言う。皆、そう思っているのだ。三島が声をかけたら、全員が決起しただろう。全員が死んだだろう。一緒に死にたかった。なぜ自分は選ばれなかったのか…。

百人の「楯の会」会員たちはそんな悔しさを噛みしめながら、「その後」の36年を生きてきた。まるで「生なう団」のようだ。しかし、勝手に死ぬことは出来ない。暴発することも出来ない。「三島先生の精神を穢す」ことを恐れているのだ。

「忠臣蔵」は幸せだった。全員が決起し、本懐を遂げた。さらに、「その後、どう生きるか」を考える余地がなかった。全員切腹だ。だから、芝居になり、小説、映画になって400年も生き続けた。一人一人も、生き続けたのだ。

しかし、「楯の会」は決起に連れて行ったのは4人。そのうち自決を許されたのは森田必勝一人だ。あとの100人近い会員たちは、決起の「その後」を悶々として生きるしかなかった。これから何十年生きようと、三島のような凄い男に会うことはない。つまり、彼らは〈神〉に出会ったのだ。又、自分たちがいくら努力してもその〈神〉に近づくことは出来ない。ありえない。

若い時に、余りに偉大な人間に出会った〈幸せ〉と〈不幸〉だ。その〈幸せ〉の思い出からは、逃げることは出来ない。鈴木亜繪美『火群（ほむら）のゆくへ』（柏艚舎・1700円）を読んで、さらにその思いを強くした。「元楯の会会員たちの心の軌跡」とサブタイトルはなっている。元「楯の会」会員の田村司が監修をしている。これは実にいい本だ。それに、両人は自らの病気を押して取材し、全国の元楯の会会員に会う。これだけでも大変な苦労だ。



楯の会・四期・向井敏純の証言には驚愕した。向井は神奈川大学だった。大学の先輩、古賀浩靖の紹介で楯の会に入会した。

事件を聞いて、「置いていかれた!」「乗り遅れた! みんな死んでしまった…」そんな思いで、小雨降る夜の道を歩いた。

〈いずれ、自分も死ななければならないかもしれない…。いわゆる『後が続く』という気持を持っていました。会員の中には『これから毎年、楯の会の会員が一人ずつ自決すれば、百年続けられる』と言った者もいます。私もそれはよい考えだと思いました。

世間を震撼させた『三島・森田事件』を、世の中の人々に忘れられないようにアピールし続けねばと、決してオレは死にたいわけではないが、皆がやるなら自分も後が続く…。そのためには最も効果的な方法で死ななければ…。事件直後は、そんなことを考えていました〉

この話は初めて知った。三島事件については全てが出し尽くされ、僕も、ほとんど読んだつもりだったが、これは初耳だった。毎年、一人ずつ死ぬ。多分、11月25日に死ぬのだろう。これは凄い。ただ、初めのうちはいいが、そのうちまわりの者が監視する。その監視の眼を潜り抜けてやる。あるいは、「バカな事をするな」と家族が「座敷牢」に閉じ込めるかもしれない。そしたら脱走するしかない。全国を逃げ回りながら、来年の11月25日を期す。でも順番がある。中央の秘密センターで予定を調節するのだから、「あっ、向井君は18番目です」。そう言われたら、18年間、逃げ回り、健康を保たなくてはならない。ただ〈自決〉するためだけに。これはキツイ話

だ。又、「百年続けられる」というが、「百番目」になった人は大変だ。120才まで生き続け、その年で自決しなくてはならない。「後追い自決」のおかげで、かえって長生きしてしまう。変な話だ。

実は、三島事件の後、「後追い自決」をした人々がいた。たしか、20人近くいた。若い男たちだ。今ではあまり取り上げられないし、忘れられているが。それも普通の大学生や高校生だ。でもそれは、「文学ファンの自殺」として片づけられた。太宰治のファンだって随分と死んでいる。それと同じように扱われているのだ。中には鹿児島からナイフを持って上京した小学生もいた。警察に保護されたが、「三島のごたるやっちゃん」と言ってたという。三島由紀夫のようなことをやってやるというのだ。立派な小学生だ。やらしてやればいいのに。この話は上野昂志さんの『戦後再考』（朝日新聞社）に出ていた話だ。

「文学ファンの自殺」といわれた20人の中にも、「政治的な問題」として拡がることを恐れて、警察は「文学ファンの死」と発表したのかもしれない。これは又、調べてみよう。

(2) 「会員が万引きで捕まったら私は腹を切る」と三島が



昭和43年4月 一期生と共に。

「文学ファンの死」の報に接して、「楯の会」一期生の大石晃嗣は僕に言っていた。「本当なら、そのうちの半分以上は楯の会であるはずなのに…」。これも凄い言葉だ。死ぬべき「楯の会」の人間は生きのび、「関係のない」一般の文学ファンが死んでいる。これに疚（やま）しさを感じているのだ。

だから、向井が言っている。「毎年一人ずつ自決」も、何人かが口走っていたのだろう。そんなに、「うしろめたさ」を感じ、「後追い」をしたいのなら、今からでも遅くない。やってみたらいいだろう。と悪魔的なことを考えた。でも今、60才位か。じゃ、続いたとして10年位だな。70代、80代じゃ、自決できない。それよりも、心配しなくても、どんどん「自然死」していくよ。病気や老衰で死んでいく。もしかしたら、毎年一人位死んでるだろう。だったら、それも、「覚悟の自決」として発表したらいい。そしたら、「毎年一人ずつ自決」の壮大な夢もかなえられる。

さらに、向井敏純は、三島のこんな〈覚悟〉も紹介していた。これは衝撃的だった。

〈ある例会の時、三島先生がこんなことを話されたことがあります。

『諸君が訓練中、誰か一人でも大怪我をし、半身不随になったとか、死者が出たとか、諸君のうちの誰かが、デパートで万引きで連行された場合、それを私が知った。その場で、私は腹を切る』と。〉

そこまで三島は覚悟を決めてたのか。と驚いた。そんな事故や不祥事がなくて、本当によかった。もし、楯の会会員が万引きで捕まり、それが大々的に報じられて、三島が割腹自決したら、目も当てられない。大体、「自決」にならない。部下の責任を取って死ぬのだから、政治性はない。ただの「自殺」になってしまう。それが分かってたからだろう。楯の会の会員たちも身を慎んだ。自分たちの不祥事で先生を殺してはならないと、自重した。

それに、例会などで集まる時は、必ず自宅から制服を着てくること。これが義務づけられていた。あの派手な制服を着ていては、人にジロジロと見られる。万引きも出来ないし、痴漢も出来ない。路上で女性と接吻も出来ない。かわいそうだ。

この本、『火群のゆくへ』には、元会員の貴重な証言が数多く記されている。今のうちに言っておかなくては、という焦りもあるのだろう。あの派手な制服について、どう思ったか。それについても各人各様だ。別に会員の希望を聞いて、三島が考えたわけではない。三島がデザイナーに頼んで作り、一方的に会員に与えたのだ。会員としてみたら、いろんな反応がある。「うわー派手だな」「いや、格好いい」「ちいと恥ずかしいな」…と。村田春樹の証言は、もっと切実だし、重々しい。

〈最初制服を着た時は嬉しかったですけど、その後は複雑でしたね。先生が、『これがお前たちの死に装束だ』とか、みんなも『先生は死にそうだ。本気だ』とか言うでしょう。真に受ける方ではないけれど、そりゃ19歳で死に装束着てりゃ複雑な心境。なんて言うか…一言で言えば、恐かったですよ。冗談でやってるわけじゃないし、しかも左派的な大衆啓蒙運動でもない。そういうことがわかってたら、結論は血を見ることだって、誰が見たってわかるわけです。

それで、9月頃、自分は腹も切れないし、刑務所にも行けない。退会させてくれって、言ったんです。〉

これは正直だ。なかなか、こうは言えないものだ。勇気のある証言だと思う。19才で、そりゃ、恐かっただろう。「死に装束だ」なんて三島に脅されりゃ、なおさらだ。特攻隊のようじゃないか。村田は他の仲間、先輩に相談する。

〈村田は、自分の班の班長勝又武校にそのことを伝え、森田必勝に相談することになった。

「新宿で会って、森田さんは『村田、俺だってシヨンベンちびって逃げるかもしれないんだから。人間なんて、いざとなったらみんな弱いもんだよ。だから、もうちょっといろよ』こんな感じでした。確かにそういう風に言っただけです。それで僕は『わかりました。じゃ、しばらくいます』と答えました。

その時点では、もうストーリーができあがっていたと思うんですよ。先生と森田さんの間でストーリーができていて、村田が見送る方、俺たちは行く方と。私も行く方だったから、それはいろんな話があっただろうけど、こいつは見送る方だと。俺の死に様見てる。大丈夫だよ、お前は生き残れると。そこまで言えないから、『ま、いなさい…』と。森田さんと二人だけで話したのは、それだけ。面接とやめる時の二回だけです」

村田たち、五期の間では、三島由紀夫が死ぬかもしれないという不安がずっとあったという〉

初めに相談を受けた勝又武校の証言もある。

〈五期の村田君がやめたいと言って、新宿の西口の喫茶店で森田さんが止めたんだよね。「そんな馬鹿なこと言うなよ、死ねないなんて言うなよ」って。その時点では、もう森田さんは覚悟していたはず。俺は気づかなかった。先生や森田さんが思う程思っていなかった…。村田君は感受性があったんだろうね〉



(3)さまざまな人間ドラマがあって。 まるで忠臣蔵だ

まるで忠臣蔵の中のドラマのようだ。一つ一つの話がお互いに噛みあって、織りなされていく。そして一服の絵になってゆく。「俺は気づかなかった」という

馬込三島邸にて銃剣道の段位免状授与式勝又だって、〈決起〉はあると思っていた。班長は皇居の中の済寧館（さいねいかん）で居合の稽古をしていた。皇居の居合の練習のために、班長と副班長合わせて約20人が通行証をもらっていた。

「刀は先生のも合わせて九振りありました。熊本で二百振り程民家で見つけたことがあって、先生は全部買おうと言ったこともありました」

さらに、過激な決起プランが練られ、皆で話し合われていた。

「皇居の御門に車を突っ込む。火炎瓶を投げるなどの訓練もあった。陛下を守りたい。御璽（みしるし）のそばにいたい、というのが先生にはあったと思いますよ」

凄いことを考えている。皇居に突っ込むなんて。長州藩の過激分子のようだ。そんな不穏なことを考えていた楯の会に、よくも皇居の居合道場に入りを許したものだ。又、自衛隊だって、「体験入隊」を歓迎し受け入れている。皆、安心し切っていたのだ。いくら体験入隊をしても、「軍隊」ごっこ、だと思っていた。又、「あの三島さんがまさか」と安心していた。そう安心させておいて、三島はやった。それだけ三島の〈信用〉があったのだろう。その辺の右翼だったら絶対に皇居には入れない。自衛隊も入れない。

田村司はこう証言している。

〈「楯の会」のことは、兄事していた従兄から知らされてきました。週刊誌でも見ていた。グループサウンズの衣装のような制服を着て、チャラチャラしている印象を持っていたけれど、先輩たちから、自衛隊で体験入隊して半端じゃない訓練をすることや、三島由紀夫という有名な作家の話聞いて、真剣な組織だと思いました。それで、それは面白いと入会するの願いをしたんです〉



鈴木、井脇ノブ子さん、田村司氏、
針谷大輔氏

田村司は昭和25年（1950年）生まれ。神奈川大学。「生長の家」出身だ。前出の向井も神大の生学連（「生長の家」の学生部）。又、三島の決起に参加した古賀浩靖、小賀正義も、共に神大の生学連。又、彼らを入れたのは伊藤邦典だ。神大は生学連、楯の会にとっては「拠点校」だったのだ。その伊藤は僕とは小学生の時から知り合いで、僕の入っていた「生長の家学生

道場」に入ってくる。僕は知り合いの持丸博（「楯の会」初代学生長）を伊藤に紹介する。伊藤は「楯の会」に入る。そして神大で仲間を集め、古賀、小賀、向井、田村らをオルグする。神大では、生学連、日学同の幹部を呼んで講演会をやったりもした。活発にやっていた。

「楯の会」は、初期のメンバーは半分位、生長の家だ。あとは日学同などが多い。三島も「生長の家」には一目置いていた。谷口雅春先生は尊敬し、「こんな素晴らしい学生を育てたのだから」と驚嘆していた。

「生長の家」の学生は皆、素直だった。大体、親が「生長の家」だから入った人がほとんどだ。つまり、親に言われて、入るんだから、実に素直だし、親孝行な子が多いのだ。オウムや統一教会のように親の反対を押し切って入信したわけじゃない。又、大病をしたからとか、とんでもない不幸があって死を思いつめて、入信した…という人もいない。実に素直に親に言われて入ったのだ。かく言う私だってそうだ。

中学や高校生の時から「生長の家」の集会に出た。田村氏は宇都宮高校時代、生高連（生長の家高校生連盟）の栃木県委員長だった。「朝生」によく出てる四宮正貴氏は生学連の東京都委員長。私は仙台の委員長だった。

その田村氏が11月24日の野分祭で講演する。ぜひ、参加し、事件のこと、「楯の会」のことを聞いてほしい。

【だいありー】

(1)11月13日（月）9:00からジャナ専。「時事問題」と「現代史」の授業。

(2)11月14日（火）昼、取材。後は、ずっと原稿。

(3)11月15日（水）図書館。夕方5時から朝日ニュースター。テレビの収録

だ。放送は18日（土）。加藤紘一さん、「創」の篠田編集長と三人で「テロと言論の自由」について話す。朝日ニュースターは以前、築地の朝日新聞社の中にあっただが最近、原宿に引っ越した。東郷神社の隣りだ。もと所属していた「生長の家」本部も近くにある。懐かしかった。行くまでに、近くを歩き回った。生学連を中心にして「全国学協」をつくった時も、この近くに事務所を置いたな、と探したが、もうそのビルもなかった。

(4)11月16日（木）阿佐谷のカバン屋に。いつも使ってるショルダーバッグが寿命が尽きた。チャックがいかれ、ショルダーの紐がぶち切れた。重い本ばかり入れてるからだ。革じゃないし、安いカバンだが使いやすい。それで同じものを探したが、どこにもない。仕方がないので本社に注文し、取り寄せてもらったのだ。

午後3時から河合塾コスモ。現代文要約と基礎教養のゼミ。

(5)11月17日（金）午前中、取材。午後、「三島事件」について取材される。夜、お世話になった雑誌社の人々の送別会。

(6)11月18日（土）昼、民族派運動について取材される。

(7)11月19日（日）一日中、図書館で調べものをしていた。

【お知らせ】

(1)11月24日（金）7時、三島由紀夫・森田必勝両氏追悼の[野分祭](#)。高田馬場の[ホテルサンルート](#)です。記念講演は元「楯の会」の田村司氏です。ぜひご参加下さい。

(2)映画「9・11～8・15 日本心中」はポレポレ東中野で絶賛上映中です。12月1日までです。連日、豪華なゲストを呼んで上映後、大浦信行監督とトークをやってます。僕は11月11日に出了ましたが、「後半にもう一回お願いします」とのこと、又、出ます。11月27日（月）夜8時30分から映画があり、終わって10時40分からトークです。30分ほどですから終電には間に合います。

(3)12月1日（金）月刊「現代」（1月号）発売。溝口敦さん、魚住昭さんと私の座談会が載ります。「言論の自由とテロ」。溝口さんは、自分と自分の息子さんが襲われた体験を持っています。どうしたら「言論テロ」をなくせ

るか。真剣に話し合いました。

(4)12月9日（土）午後1時より4時半まで。「自由人権協会」主催のシンポジウム「言論・暴力・ナショナリズム」があります。中央大学駿河台記念館（お茶の水）です。パネラーは、半藤一利（作家）、岡留安則、弘中惇一郎（弁護士）、そして私です。

(5)12月19日（火）7:30より、ロフトに出ます。第1部は、本橋信宏出版記念トーク（ゲストあり）。

第2部は、「創」連載陣のトーク。「ナショナリズムと言論の覚悟」です。佐藤優さん（予定）、森達也さん、そして私です。佐藤さんとは初めてのトークです。楽しみです。

(6)10月27日（金）に鶴岡でやった「言論の自由を考えるシンポジウム」が、「世界」（岩波書店）に載るそうです。嬉しいですね。「世界」に載るなんて、初めてです。

慶応大学でやった連続シンポジウムも来年1月に、やはり岩波書店から本になります。『連続講義・東アジア。日本が問われていること』です。

(7)PARC（アジア太平洋資料センター）では、「自由学校」を開き、毎日のように講演会、セミナーをやってます。僕も一度、呼ばれて「公安」の話をしました。

又、PARCでは「オルタ」という月刊誌も発行しています。そこで原稿を頼まれて書きました。「今ヨムこうヨム時代の書」のコーナーです。「現在は話題にされることが少ないが、実は現代の混迷を切り拓く鍵を持っていると思われる名著を、現代の若い人向けに紹介し、世界への眼差しや思考の転換の場としてもらおう」という意欲的な企画です。今まで取り上げられた本は、中山千夏『からだノート』。鎌田慧『自動車絶望工場』。立花隆『田中角栄研究』。有吉佐和子『複合汚染』。藤原新也『東京漂流』。石牟礼道子『苦界浄土』。などです。皆、いい本だ。

「最終回の12月号で沢木耕太郎『テロルの決算』を取り上げたいと考えており、今の日本でこの本について書ける方は鈴木さんを置いて他にないと考えています」

うっ、と思った。ありがたい。ここまで言われたら、書くしかない。苦闘して、書きました。昔の自分を思い出すようで怖かったのですが、立ち向か

い、読みました。そして書きました。『オルタ』の来月号に載ります。

(8)『愛国者は信用できるか』（講談社現代新書）が四刷になりました。皆さまのおかげです。ありがとうございます。私の本の中では一番、刷を重ねました。姜尚中さんの『愛国の作法』（朝日新書）が売れていて、その相乗効果もあるのでしょうか。「負けるもんか」と、『信用できるか』も頑張ったのでしょうか。ありがとうございます。

(9)別冊宝島「日本の右翼と左翼」も増刷になりました。バカ売れしています。面白いし、為になる本です。

(10)11月25日（土）の朝日新聞では三島事件を特集する予定です。僕も取材されました。

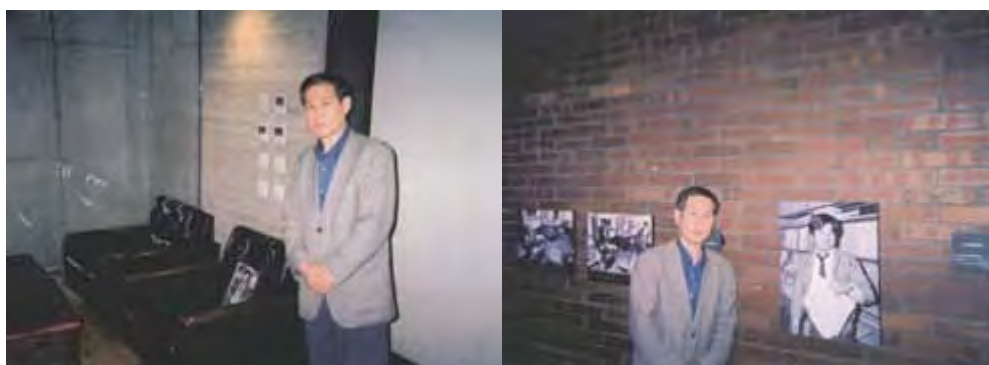
[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

ページデザイン／丸山條治

HOME

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#) [2005年](#) [2006年](#)

今週の主張11月27日 キーボード革命



朝日新聞阪神支局にて

(1)一生の間にいくら書けるか…



夢枕獏さん（右）と

「書きたいテーマがありすぎて困っているんですよ」と夢枕獏さんは言う。夢枕さんは「陰陽師」「餓狼伝」などで知られるベストセラー作家だ。熱狂的な格闘技好きとしても有名だ。格闘技会場ではよく会う。今まで200冊以上の本を出している。書きまくっている。

空手の試合の時は来賓席にいて原稿を書いていた。書きながら時々、試合も見る。「あまりに忙しくて、歩きながら書いたこともありますよ」と言う。首から吊るす写生用の画板の上に原稿用紙を置いて書いたという。ともかく書きまくっている。

「でも人間には寿命があるでしょう。それが困るんです。だって、書きた

いテーマを、これとこれと…と、書き出してみたんです。これは半年、これは1年かかる…と書き出したら、もう100年分あるんですよ。書くテーマが。とてもやれません。どうしたらいいんですかね」

うらやましい話だ。普通の作家は、そんなに書きたいテーマがない。書く媒体がない。又、たとえ書いたとしても出版社が出してくれるとは限らない。夢枕さんは幸せだ。書いたものは必ず本になり必ずベストセラーになる。

「もう100年分もあるんですか。楽しみですね。これからの人生、退屈しなくていいですね」

「でも、寿命が…」

「何も問題ないでしょう。今50才でしょう。だったら、150才まで生きりゃいいだけじゃないですか。簡単ですよ」。120才まで生き抜いて自決しようという「楯の会」の人だっているんだし。それに比べりゃ楽だ。

今は平均寿命が80才位だが、ぐんぐんと伸びている。80才まで生きる人は100才まで生きられる。それが、「平均」の魔術だ。赤ん坊の死亡数、大人の自殺、病死…いろんなものを入れての「平均」だ。健康で80まで生きた人の8割は100才まで生きる確率になる。それが統計上の「平均」の実態だ。又、50年後には日本人の平均寿命は150才になる。だから夢枕さんの書きたいテーマも全て書けます。

「いい加減なことを言わないで下さいよ」と反駁するが、決して嘘ではない。人間の肉体の組織・細胞は元々、200才まで生きようようにできている。大事に使えば、それだけ生きられるんだ。

「だから、もう150年は大丈夫です。えっ、書くテーマは100年分しかないんですけど。困りましたね。もう50年分を新たに考えて加えて下さいよ」

「……」

ウーン、困ったなー、信用してもらえない。じゃ、こうしましょう。もっと具体的で、今、すぐにできるプランを伝授しましょう。

「手書きをやめて、パソコンにきなさい。手書きなら親指と人差し指の2本しか使ってない。キーボードなら10本だから、5倍の速度で書ける。100年でできることが20年でできる。70才までで、全てのテーマは書き尽くせる。今の平均寿命でも、もう10年あまる。さあ、どうする」

「そう簡単にいきますかね」

「いきます」

そうって私はノートパソコンを開いて、実際の計算をしてみせた。私のパソコンには、算盤（そろばん）のソフトが入っている。キーボードを押しながら、算盤の玉をはじいてみせた。

「へー、便利なもんですね」

「えーと、手書きだと1日に100枚は書けませんね。50枚が限度です。それに毎日続けたら、腱鞘炎になって書けなくなります。でも、キーボードを打つのなら、1日に100枚は軽く打てます。400字原稿用紙で100枚ですよ。3日で300枚です。300枚あると、大体、一冊の本になります。1ヶ月では10冊の本ができます。1年で120冊です。凄いでしょう。10年間で1200冊です。これから80才まで30年間、キーボードを打ち続けたら、3000冊の本を書けます。この位書いたら満足でしょう」

「ウッ」と、ビックリしていた。しかし、これは、ハツタリで言ってるのではない。実証的な数字だ。科学だ。

「そうかなー」と夢枕さんは疑っていたが…。でも最近、パソコン関係の本を読みあさっていて、「おっ！」と驚いた。私のお話を実証してくれる人がいた。諏訪邦夫さんだ。名前からして信用できる。同じ名前じゃん。彼の『キーボード革命』（中公新書）だ。「情報電子時代への基本技術」とサブタイトルがついている。（最近、穂坂邦夫さんの『教育委員会廃止論』（弘文堂）を読んだ。いい本だ。これも邦夫さんだ。邦夫さんの本は皆、面白い。「全国クニオ連合」でも作ろうかな）。

諏訪さんは、「一生かかって書ける文章の量」を計算しています。名前が同じだけに、発想も似ちよります。

キーボードを使って一生かかって書ける文章の量を、頭脳の働きを考慮せずに、「物理的な」限界から計算してみるのです。まず、打鍵速度を2ストローク/秒とします。連続で打つとしたら、まあ、かなりの高速です。この速度で1日8時間、1年250日、40年間打ち続けると仮定します。1時間に7200ストローク。40年間で5億7600ストロークになります。1ストローク、すなわちアルファベット1文字が1B（バイト）ですから、一生かかって打つ情報量は570MBです。日本の文字を2ストロークで1字とすると3億字です。現在のハードディスクは、500MB～1GB（ギガバイト、1000MB）が標準サイズですから一生かかって、ようやく中型ハードディスクが一杯になる程度です。

さて、一生かかって打てるのが3億字です。それは原稿用紙にして何枚で

しょうか。3億を400で割ると、70万枚です。一冊の本が300枚として、2300冊ですね。新書なら、200枚ちょっとで1冊になりますから、3500冊は出版できます。

「さっきは、粗計算で3000冊としましたが、大体、ピタリと合ってるでしょう。あれは休み時間を考えずに、360日書き続けるとしての話ですから。こっちは1年に250日で40年間打ち続けるとしています。どうです。私の説を専門家も認めてくれたのですよ」

「おそれいました」

…となったのです。

(2)満員電車の中でも原稿は書ける

でも、これでもまだローテクです。だって、これだと、1日に8時間、ずっと家にいて打ち続けなくてはなりません。まあ、気分転換にルノアールに行っておくのもいいでしょうが、電車の中では打てません。

では、これからが「必殺技」の公開です。「必殺・鷹の爪」です。本当を言うと、人には教えたくないんです。自分だけで密かに使っていたい。うーん、悩むな。よーし、仕方ない。教えちゃおう。もってけ、ドロボー！

実は、電車の中でも原稿を書ける方法があるんです。それも、満員電車の中で、立ちながらやれるんです。「そんな、馬鹿な！」と驚きの諸兄。君たちは遅れてます。ローテクです。時代は進んでるんです。

「首から画板を吊り下げて、そこで原稿を書くんだらう」とお思いかもしれませんが、満員電車の中ではできません。実を言うと今までは、電車の中ではせいぜい「メモ」をとる程度でした。ポーツと電車に乗ってる時に、パッとひらめくことがある。忘れちゃいけないと思い、ポッケから紙を取り出して、メモをする。飲み屋でも、思いついたら、箸袋にメモをする。書くものがなければ手に書く。つまり、「メモをする」のが限度だと思っておりました。

ところが、「コロンブスの卵」です。こんな方法があったんです。それはメールを使って原稿を書くんです。私が使ってるドコモだと…。あっ、いかん。携帯は持ってないことになってたんだ。まア、携帯の機種によって違うけど、ドコモはメールで1万字打てます。1万字といえば400字の原稿用紙にして25枚だ。

だから、電車の中で、メールで原稿を書く。4～5枚のコラムなんて、す

ぐ書ける。10枚の連載だって、立ったまま書ける。それを自宅のパソコンに転送する。夜、家に帰ったら、原稿ができています。ちょっと直して、そのまま出版社に送る。簡単だ。

それに、これだと、「仕事をしている」とバレない。満員電車の中で、ピコピコとメールを打ってる。「オッサンが若い女にメールを打ってんだな。いい年をして…」と周りの人には思われる。「そうですよ。オラは遊んどるんよ」と思わせて、きちんと仕事をしている。自虐的、謙遜、卑屈…。まさに日本文化です。

さらにこれは、どこでも使える。下らない講演会の時も、机の下でピコピコ打てる。飲み屋で皆と飲んでる時も、「あっ、メールを返さなくっちゃ」と言って、ピコピコ打てる。誰も気にしない。でも、本人は密かに、仕事をしてるんだ。実は、このHPも高田馬場の飲み屋「膳丸」でワイワイと飲みながら、打っている。便利な世の中になったもんだ。

この「メールで原稿」は河合塾コスモの先生から教わったのだ。世界史の若い先生だが、授業で忙しいが、原稿はこの方法で書いてるという。

じゃ、メールで書いて、そのまま雑誌社や出版社に送ればいいじゃないか。と思うかもしれない。でもそれはメールの現状を知らない人の言うことじゃわいな。機種によって、キャパが違うし、とても1万字は送れない。それに、やってみたらいい。そんなに大量に送ったら、文字化けしたり、トラブル続出だ。だから自分の家のパソコンに送ったらいい。それから出版社に送る。

そうすると、自分の携帯から自分のパソコンに毎日、送るだけ。つまり、「独（ひと）り言」のようだ。ハイテク・独り言だ。でも、いいだろうよ、それで。原稿を書くというのは本来、孤独な営為なんやから。

「独り言」といえば、以前は、テープに吹き込んで本にする人がかなりいた。今もいるのかな。秘書に聞き取らせる「口述筆記」。又、一人だけで吹き込むのもある。忙しい作家は使う。松本清張もよく使った。でも、若い女性記者を相手に、愛欲場面を口述するのは恥ずかしいだろうな。「セクハラです」とも言えない。二人で真っ赤っかになりながら、うつむいて「仕事」してたりした。

志茂田景樹（作家）に会った時、彼は、「一人でテープに吹き込んで出版社に渡す」と言っていた。彼の小説には愛欲場面が多いから、口述では恥ずかしいらしい。又、若い娘を相手に口述している内に自分の小説に興奮し、

ムラムラと獣欲を起こすこともある。いきなり襲って、口吻（す）い（＝接吻）をするかもしれない。これも、「口述」なのか。

それを怖れて、一人でテープに向かうという。ある時、新幹線の個室に入った。以前は、個室があったんだ。ところがAV撮影によく使われるんで、JRは廃止してしまった。その個室で東京から新大阪まで3時間、テープに向かって喋る。新大阪に着く時には「一冊の本」になっている。凄いね。でも、一度、「ガサ入れ」された。車掌が慌ててかけつけ、大声で叫ぶ。「お客さん、開けて下さい。何をやってるんですか!」「ダメですよ。中で変なことをしちゃ!」「警察官を呼びますよ!」と。

ちょうど愛欲場面を口述していた。男が襲う。女が抵抗する。やられる。挿入される。アエぐ…という場面だ。力も込み、声も大きくなる。息も乱れる。隣室のオバさんが、「まア、いやらしい。女を連れ込んで、セックスしてるんだわ」と思い、車掌に密告したんだ。それで「仕事」は中止。新大阪に出迎えてた出版社の社員は、「あれっ、どうしたんですか。できてないんですか?」と不思議に思ったそう。

その事件以来、「一人よがり口述」はしていない。いや、電車の中ではしていない。だったら、これからはメールにしたらいい。今度会ったら、教えてやろう。

話変わって、パソコンです。勿論、パソコンの進化も負けてはおりません。キーボードを打たなくても、喋っただけで文字になる新製品の開発が行われています。「音声入力」です。これだと、若い女を相手に恥ずかしい思いをしなくてもいいんです。速記者も必要ありません。テープ起こしも必要ありません。全部パソコンがやってくれます。『キーボード革命』で諏訪は言います。

〈近いうちにもっとすごいことが起こります。音声入力が導入され、パソコンに向かってものをいうと、その通りがパソコン画面に出てくるので、あとはキーを打って少し手直しするだけになります。あるいは講演や座談会のテープ録音をパソコンにつなぐと自動的に文章になってしまいます。〉

(3) 「音声入力」の可能性は?

さらに製本のソフトにつなぐと、自動的に本にまでなる。「朝生」で3時

間喋ると、終わった時には、もうそれが「本」になっている。そうなるんですよ。「でも、言い間違いや、モタモタしたところは直したい」というなら、終わった時点で手直ししたらいいでしょう。ともかく便利です。さらに諏訪は書いてます。

〈…そういう時代がすぐそこまで来ています。明確な根拠のない勝手な推測ですが、10年後、つまり2005年ぐらいには一般の私たちが使用しているのではないのでしょうか〉

残念ながらこの予測は外れましたね。この本は、10年前に書かれたんですね。だから、そんな夢を見れたのでしょう。「音声入力」はまだまだ難しいのです。人それぞれのクセがあり、なまり、方言があり、その全てに対応できないのですね。パソコンも。何度か試作品を作ってみました。あまりに不安定でした。ゲラを直す人も大変です。「これじゃ、初めから書いた方がいい」となったのです。これじゃ、座談会をやった意味がない。それで、人間の「速記」を又、雇ったのです。

問題は、多数の人の声を文字にしようとしたことです。これは、かなり難しい。それ用の喋り方を参加者に訓練させる必要がある。それがダメなら、パーソナルの機種だけで勝負すればよかったです。

個人用ですから、その人のなまり、方言、声の強弱、クセなども覚え込みます。その上で使ったらいいんです。そしたら完璧な「音声入力」ができます。

それを基盤にして、多人数にも対応できるものを作ったらよいでせう。今、テレビに出ている評論家や大学教授なんて、いつも言ってることは同じです。フロッピーディスク一枚で収まります。それがその人の〈全て〉です。政治討論会は、本人がいなくてもいいんです。写真を並べ、その下にパソコンだけを置く。どんな問題でも各人（各パソコン）が答えてくれます。パソコン同士で怒鳴り合い、罵倒し合うのです。これも面白いでしょう。だって、相手がいくらいいことを言っても、「認める」ことはない。自分の「言い分」だけを主張してるだけです。これなら、パソコンが出てくれば十分です。本人はいりません。

「オーマイニュース」で私は毎週火曜日にコラムを持っています。「愛国者の座標軸」です。2, 3週間前に書きましたが、朝日新聞阪神支局を訪ねた時のことを書きました。時効になったとはいえ、赤報隊事件の「容疑者」

だった私は、怖いものがありました。でも、勇気をもって行ってきました。3階は「朝日新聞襲撃事件資料館」になってました。銃撃された椅子、ソファはそのままだけがありました。血だらけの原稿、弾が当たってひしゃげたボールペンなども展示されてました。さらに、「犯行声明文」を打ったのと同じワープロ「書院」が置かれてました。

「あっ、懐かしい！」と思わず叫んでしまいました。マズかったかな、と思いましたが、大丈夫でしょう。かなり出回っていたし、初めてワープロの練習をした人は、これが多いのです。私もそうです。偶然ですよ。赤報隊も私も、この「書院」を使った。ただそれだけの話です。上の方に細長い窓があって、一行ずつ、字が出るんです。だから、全体がどうなるかは分かりません。この「書院」で練習したんです。声明文もこれで一行ずつ打ちました。いや、私ではなく、犯人は打ったのです。

これで練習したおかげで、今では、ブラインド・タッチ（＝タッチタイプ）ができます。「別に手元を見ながらでもいいだろう」と言う人がいますが、これは大違いです。

手元を見て打ってるのでは、丁寧に字を書いているのと同じです。あるいは習字をしているのと同じです。一字一字、きれいに書き、格調ある字を書こうと、そればかりに気を使って、センテンスが書けません。つまり、思考を進め、文章を書く障害になるのです。これは諏訪も言ってます。

〈現代の日本でも、毛筆で美しい字を書ける人は多数いるでしょう。しかし、その技術を使って論文や小説を書く方はいないでしょう〉

その通りですね。私も書道4級ですから、どうしても一字一字、丁寧に書く癖が出ます。だから書くのが遅くなるし、論理、思考についていけません。とって、草書体やなぐり書きをしたら誰も読めません。その点、キーボードは「草書打ち」や「なぐり打ち」をしても、ちゃんと、文字にしてくれます。又、タッチタイプで打ってこそ、キーボード入力には真価を発揮します。

(4) パソコン、ピアノ、そして飛行機、バレエ

子供の頃、ピアノを習ってた人は、パソコンの覚えも早いといひます。これは本当です。ピアノを習わなかった私は、だから、覚えが遅かったので

す。だから、これからピアノを習おうと思っちょります。諏訪も言ってましたよ、これは。両社の共通点は…。

第1に、「考えを弾く」。頭の中のメロディやリズムを楽器に移す。これが考えを文字と文章に表現する能力です。

第2に、「聴いて弾く」。弾いたことのない曲を耳で聴きながら弾いていく。講演のメモやインタビューメモの能力です。

第3に、「初見（しょけん）」。弾いたことのない曲を、譜面だけを見てすぐ弾く。つまり、自分の心を指の動きとキーボードで表現するという点が、ピアノとキーボードは共通しているからではないでしょうか、と諏訪は言います。



今村茂男『神風特攻隊員になった日系二世』（草思社）という本は、衝撃的な本でした。一家でアメリカに渡り、アメリカ人になった。しかし、戦争前に日本に帰る。日本で教育を受けているうちに、日本人としての愛国心に目覚め、何と特攻隊に志願する。特攻に行く直前に戦争は終わる。そして、今度は、米軍の通訳をする。変転極まりない人生だ。国家とは何か、忠誠とは。愛国心とは何か…を考えさせられた。

もし、アメリカに残っていたらどうなったか。強制収容所に送られたか。あるいは多くの二世GIたちと同じように、アメリカ合衆国のために戦って死んでいったかもしれない。どっちみち、二世は命をかけるしかなかったのだ。

でも、彼は戦争が終わって、子供たちに英語を教えたり、機会があって、米軍の通訳をやったりした。しかし、再び、飛行機に乗ることはなかった。戦争中、飛行機に乗ってた人で戦後も民間機の操縦士になった人はいる。しかし、高橋和巳の小説に出ていたが、「死の操縦」（＝特攻）を習った人間で、戦後、民間機の操縦士になった者は一人もいない。

さて、キーボードとピアノは、指を使う。その指は脳に直結する。その点でこの二つは似ている。連動する。

では、飛行機の操縦は何に似ているのか。手、腕を使う。手を使って、飛行機全体を動かし、飛ばし、着陸させる。これは実は、バレーボールの手の

動きに似てると、今村茂男は言う。

〈優秀なパイロットはバレーボール競技も上手だということだ。私が思うに、この二つは精神的なバランス感覚、あるいは身体的なバランスの良さに関連するものだと思う〉

これはかなり、深いことを言っていると私は思う。パソコンの話も、特攻隊の話も、まだまだ書きたいことがあるが、又の機会にしよう。佐々木俊尚『グーグル』（文春新書）、梅田望夫『ウェブ進化論』（ちくま新書）、吉田文和『IT汚染』（岩波新書）、東谷暁『IT革命？そんなものはない』（洋泉社新書）…は面白かった。では又。再見（ツアイチェン）。

【だいありー】

- (1)11月20日（月）図書館。9:00a.m.からジャナ専の授業。「時事問題」と「現代史」。夕方、テレビ局との打ち合わせ。
- (2)11月21日（火）図書館。7:00p.m.から志の輔さんの落語会。安田生命ホール。
- (3)11月22日（水）雑誌の取材。
- (4)11月23日（木）4時から、大阪の朝日放送テレビに出る。「ムーブ」で、「日本の右翼と左翼」のコーナーに出る。
- (5)11月24日（金）昼、山の上ホテル（お茶の水）で打ち合わせ。新しくスタートするメルマガのことで。
午後7時から野分祭。元楯の会の田村司氏が記念講演。多くの人が集まってくれ、いい会になった。田村氏の話も感動的だった。
- (6)11月25日（土）朝日新聞で「三島特集」をやると聞いていたが、ちょっと小さな記事になった。「今日のうんちく」と題し、「三島由紀夫の自決」。僕のコメントも出ていた。
午後2時、大阪の新聞社から取材される。

【お知らせ】



ポレポレ東中野で大浦監督と

(1)11月27日（月）映画「9・11～8・15 日本心中」が8:20p.m.から上映。その後10:40から大浦信行監督と私のトーク。30分ほどです。映画は12月1日まで上映される。ポレポレ東中野（東中野駅すぐ）です。

(2)12月1日（金）月刊「現代」発売。溝口敦、魚住昭さん、私の座談会が載ってます。

又、月刊「世界」も発売。10月27日に鶴岡市で行われたシンポジウムが載ってます。又、魚住昭さんの連載「聞き書る村上正邦」で、私もコメントしています。

(3)12月9日（土）午後1時より4時まで。「自由人権協会」主催のシンポジウム「言論・暴力・ナショナリズム」。中央大学駿河台記念館（お茶の水）です。パネラーは、半藤一利（作家）、岡留安則、弘中惇一郎（弁護士）の各氏と私です。

(4)12月10日（日）昨年自決された三浦重周氏の一周忌（早雪忌）。午後3時より、九段会館地下宴会場で。遺稿集第二弾『国家の干城、民族の堡壘』も当日発売されるそうです。

(5)12月19日（火）7:30p.m.よりロフト。第一部は本橋信宏出版記念トーク。第二部は森達也さんらと私が出ます。「ナショナリズムと言論の覚悟」です。

(6)12月25日（月）7:00p.m.、ネーキッド・ロフト。國貞陽一さんの『寿（kotobiki）魂』（太田出版）出版記念パーティー&ライブがあります。私も出席します。

[1999年](#) [2000年](#) [2001年](#) [2002年](#) [2003年](#) [2004年](#)
[2005年](#) [2006年](#)

今週の主張

私もひしと抱きしめたダワー。この敗北の日本を！

今週の主張12月4日

バックナンバー

(1)だらしのない民族だ。ペッ！と思っていたのに



ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』（岩波新書）

「何読んでんの？先生」と聞かれた。

ウルセーな、と思いながら答えた。

「ジョン・ダワーだわ」

「ダワーダワって人の名前ですか？」

「ちやいまんねん。ジョン・ダワーが名前だよ。その後の“だわ”は強調の接尾語だ。助詞かな」

あっ、いかん。読書を邪魔されちゃった。早く読まなくちゃ。東中野図書館に返す日がもう過ぎている。でも、いい本だね、これは。ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』（岩波書店）だ。敗戦直後の日本人に対して、私は、今までは、「何とだらしが無い」「ふがない民族だ」と思っていた。

「鬼畜米英」がコロリと変わり、「ギブミー・チョコレート」だし、「民主主義万歳！」だし。何と節操のない国民かと思ってきた。押しつけ憲法も有りがたく受け入れるし。マッカーサー万歳だし、英語か仏語を国語にしるという奴はいるし…。

病人だと思った。日本が病んで、熱にうなされて、あらぬことを口走っているのだ。そう思っていた。「占領下だったし、仕方ないか」と。日本の歴史の中のエア・ポケットだ。「空白」だ。目を覆って通り過ぎればいい。そう思っていた。

ところが、「空白」と思われていた時代にも、民衆の力強い生活があった。まぎれもなく、ここも、「日本の歴史」だった。敗北に打ちのめされ、絶叫し、あらぬことを口走っても、それだって「日本人」の現実だった。それを含めて、この日本を慈しみ、抱きしめる必要があるのだろう。私はそう思いましたね。この本を読んで…。本の帯には、こう書かれている。この本の内容をよく表わしている。

〈1945年8月、焦土と化した日本に上陸した占領軍兵士がそこに見出したのは、驚くべきことに、敗者の卑屈や憎悪ではなく、平和な世界と改革への希望に満ちた民衆の姿であった。勝者の上からの革命に、敗北を抱きしめながら民衆が力強く呼応したこの奇跡的な「敗北の物語」を、米国最高の歴史家が描く。

20世紀の叙事詩。ピューリッツァー賞受賞〉

上、下二巻あるが、とても読みやすい。珍しい写真も沢山あるし、「日本再発見」の旅でもあった。こんないい本を教えてくれた太田さんに感謝します。太田さんて、あの太田総理ですよ。「太田総理と秘書田中」の。別に、本人に直接聞いたわけじゃないが、本に書いてあったんだわ。太田光・中沢新一の『憲法九条を世界遺産に』（集英社新書）だ。

これもいい本だ。「憲法九条は改正しろ！」と思ってる人にも読んでほしい。それに、宮沢賢治や田中智学、石原莞爾の話が出てきて、二人で熱く語る。田中智学は国粹的な宗教団体「国柱会」の創始者だ。そこに賢治も石原も入っていた。ここから二人の対談は始まる。太田が聞く。

〈あれほど動物や自然を愛し、命の大切さを語っていた賢治が、なぜ田中智学や石原莞爾のような日蓮主義者たちの思想に傾倒していったのか〉

〈彼の感情を信じたいと思う。彼の感性を信じるならば、むしろ田中智学の思想を「間違いだった」ですましてきた戦後の判断を疑うべきではないか。賢治を信じる限り、「田中智学は悪だった」ではすまなくなる〉

この太田の「疑問」をスタート台に壮大な対話が展開されてゆく。太田も勉強家だ。深いね。この問題は「賢治」研究者・ファンも避けていた問題だ。又、右翼の側も深く入っていない。それをこの二人が解き明かしていく。「右翼の思想史」にもなっている。中沢は言う。

〈西欧的な見方によるんじゃないくて、日本人のやり方で世界史をまるごと理解してみせたいうで、危機的な状況の新しい日本の方向性を示そうとした。そういう田中智学の思想に、宮沢賢治は深い共感を覚えて、それこそ、雨にも負けず風にも負けず、その活動に邁進していこうとしました〉

(2)宮沢賢治、石原莞爾。そして憲法第九条に行くダワー



さらに二人の話は深まってゆく。それはぜひ本を読んでみて下さい。さて本題だ。「太田さんはどんなシチュエーションで、『憲法九条を世界遺産に』というすばらしい発想を思いついたんですか」と中沢が聞く。それに対し、太田が答える。

〈最初は、ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』（岩波書店）を読んだときですね。この本で、日本国憲法ができたときの詳しい状況を知って、ああ、この憲法はちょっとやそっとでは起こりえない偶然が重なって生まれたのだなと思ったんです。まさに突然変異だと。（中略）

戦争していた日本とアメリカが、戦争が終わったとたん、日米合作であの無垢（むく）な理想憲法を作った。時代の流れからして、日本もアメリカもあの無垢な理想に向かい合えたのは、あの瞬間しかなかったのじゃないか。日本人の、十五年も続いた戦争に嫌気がさしているピークの感情と、この国を二度と戦争を起こ

させない国にしようというアメリカの思惑が重なった瞬間に、ぽっとできた。これはもう誰が作ったとかという次元を超えたものだし、国の境から超越した合作だし、奇跡的な成立の仕方だなと感じたんです〉

これを読んで衝撃を受けたんだわ、私は。河合塾コスモの「基礎教養」ゼミで、この本を生徒と一緒に読んでいた。エッ！太田はこの本を読んでものか！ チクショー、負けてる。と思った。岩波だし、外国人の書いた本だし、2巻もあるし、難しくて読みにくい本だと思っていた。ところが、「爆笑問題」が読んでも。負けちゃいらねえ。オラも読むだわ、と思ったんだわ。

続いて、太田はこう言うちよっただわ。

〈この憲法は、アメリカによって押しつけられたもので、日本人自身のものではないというけれど、僕はそう思わない。この憲法は、敗戦後の日本人が自ら選んだ思想であり、生き方なんだと思います〉

ウンと、唸った。私はここまで言い切れる自信はないが、あるいは、「進んで選んだ」と思い、喜んで受けとった国民も多かったのかもしれない。〈もう一つの日本〉があるのかもしれない。「あの時代」を見る時、人々は初めから、「立場」「視点」を決めてから見ている。右の人は右からしか見ない。左の人は左からしか見ない。初めから「結論」を持っていて、それに都合のいい「事実」を探すために歴史を見る。これではいかんだろう。白紙の立場で、「あの時代」も見る必要がある。ジョン・ダワーは書いている。

〈アメリカ人たちの多くは、日本にやってきたとき、狂信的な天皇尊拝者たちとの不快なぶつかり合いを予期していた。

ところが完全武装した先遣部隊が日本の浜辺に上陸してみると、女たちは「こんにちは」と声をかけ、男たちはお辞儀をして、何がお望みでしょうかと勝者たちに聞いたのであった。

アメリカ人たちは、素敵な贈り物や娯楽、そして日本人の丁重な物腰に（自分で気づいている以上に）魅了された。なにより、アメリカ人たちが見たのは、人々を破滅に追いやった軍国主義者を憎み、戦争を嫌悪し、破壊された国土で現状の困難に、ただただ圧倒されている民衆の姿であった。ほかの何よりも敗者が望んでいたものは、過去を忘れ、過去を乗り越えることであった〉

特に最後の一行だ。確かにこれはあっただろう。単なる「敗北感」や「虚脱感」だけではない。「過去を忘れたい」というニヒルで、デスペレートな感情だ。前に紹介したが、『ベルツの日記』を思い出した。明治に東大に呼ばれたお雇い教師（医者）のベルツは、「私は医学を教える。皆さんからは日本の歴史を教えてもらいたい」と言ったら、日本人（それもインテリだ）は、口々に、「日本に歴史なんかありません」と言い、「歴史はこれから始まるんです」と言う。何とも自虐的な人々だ、と思ったが、これも「謙遜」なのだろう。そして、こうした人々によって明治の日本はつくられていった。

敗戦直後の日本も同じなのだろう。「過去は忘れたい」のだ。

今、ことさら敗戦を「屈辱的な時代」として描いている人が多い。保守派マスコミやオピニオン雑誌だ。敗戦の時、日本人全てが、「今に見ている、アメリカめ！」と思ったと報じる。しかし、これは「嘘」だし、意図的なものらしい。この本では言う。

〈現代の日本には、新ナショナリズム的な強い主張があり、そのうち、もっとも強力な声のいくつかは、まさに本書が論じた敗戦後の年月に照準をあてている。それは敗北と占領の時期を、自由な選択が実際には制限され、外国のモデルが強制された、圧倒的に屈辱的な時代として描きたいのだろう〉

あっ、確かにこれは言える、と思った。どこかに〈敵〉を求めたいのだ。今の日本がダメなのは、「あの時」のアメリカの圧力があったからだ。それが「憲法」や「教育基本法」として、今も残っている。だから、それを改めなくてはいけない。アメリカによって奪われたものを取り戻す。あの「屈辱的な日々」から、今こそ脱却しよう…。そういうことなのだ。

(3)オラも「パンパン遊び」をバンバンしたかったダワー

つまり、敗戦直後の「占領期間」は、日本人は、日本人でなかった。日本も日本でなかった。恥ずべき空白の時間だった。そういう認識だ。実際、僕もそう思ってきた。しかし、ジョン・ダワーは、「それは違ふだろう」と言う。あの「空白」の日々にも日本人はいた。しっかりと生活していた、と。

〈私自身は、この時代がもっていた活力と、また日本の戦後意識の形成において日本人自身が果たした役割の創造性を（どのくらい実際に証明できるかは別として）、このような見方よりも積極的に評価している。

大切なことは、当時、そしてその後、敗戦というみずからの経験から、日本人自身が何を作り上げたかということである〉

白状するが、今まで、こういう「視点」は僕には無かった。だから大いに勉強になった。「空白」ではなく、日本人はしたたかに、希望を持ち、たくましく生きていたのだ。あの時代を無視し、「見ないようにしよう」というのは、いけないことだろう。

でも、一億国民が虚脱状態になり、皇居の前では人々が土下座し、泣き崩れていたじゃないか。そう思うだろう。僕も思っていた。新聞、雑誌、テレビでも「敗戦」というと、その写真が出る。しかし、奇妙なことに、「その写真」は一枚だけだ。他のバージョンは見たことがない。ジョン・ダワーは、それについて驚くべきことを言う。

〈人々が皇居前の玉砂利にひざまずき、天皇の期待にこたえられなかったことをわびて、悲しみに頭を垂れている写真がとられ、これが後に、敗北の瞬間の決定的な映像とされるようになった。

実は、これは人を誤解に導く映像であった。皇居前に集まった人の数は比較的少数であった〉

エッ、そうなのか！と思った。だから、あの写真しかないのか。普通の人々は各地で涙を流したが、それは天皇を思っただけの悲しみもあったろうが、それ以上に、苦悩、後悔、死別、だまされたという思い。怒り、突然の目標喪失と空虚感、不幸と死の恐怖が終わったことへの単純な喜び。…そういったものが混ざった無数の感情の表われであったという。ウーン、これはありうるな、と思った。

「敗戦で、皇居の玉砂利で土下座する人々」「天皇への期待に応えられないことをわびる人々」…というのは、確かに「絵」になる。その写真ばかり見せつけられていたから、「一つの物語」として、僕らは刷り込まれてしまったのだ。現実はそのほど単純なものではなかったのだろう。

さらに、こんな凄い記述もある。

〈内大臣で、天皇裕仁がもっとも信頼した側近であった木戸幸一は、皇居前で実際喝采していた

人々がいたことを日記に書いており、明らかに解放感がみられたことを証言している)

「土下座して泣き崩れた人」は本当は少なかったのだ、という〈事実〉だけでもショックなのに、さらにショッキングだ。戦争が終わって「万歳！」を叫んだのだ。苦しい思いをしたり、軍人に痛めつけられていた人々からすれば、いたのかもしれないな。前に書いたと思うが、会津若松では、「薩長の日本が敗けた!」「万歳!」と叫んだ人々がいたというし…。明治維新で賊軍にされた恨みを根強く持っていたのだ。

歴史は、単純化してはならない。「分かりやすい」ものだけを見てはならない。もっと複眼的に見なければいけないということだろう。

この本を読んで、さらに驚いたことがある。「パンパン遊び」の写真だ。こんなの見たことないよ。貴重な写真だ。多分、米軍側が保管していた写真ではないのか。他にも、「国辱的」な写真が紹介されていて、驚いた。こんな珍しい写真だけでもこの本の価値はある。「パンパン遊び」の写真はアップしたので見てほしい。こう説明が書かれている。

〈米軍兵士と売春婦に扮する「パンパン遊び」は、幼い子供に人気のある遊びであった。子供たちは、ほかにも闇市ごっこや、労働者のデモのまね、すし詰め列車のまねをする遊びなどを発明した〉



「パンパン遊び」をする子供たち

この写真の男の子は、頭に帽子（のようなもの）を載せている。米兵だ。パンパン（売春婦）に扮した女の子は、その「米兵」と腕を組んでいる。この後、何をするのか分かっているのだろうか。それにしても、ヤケに明るく、笑っている。

「わー、いいわね」「いい兵隊さんをつかまえて、よかったね」と祝福しているようだ。

もしかしたら、「ねえ、兵隊さん。私の方がずっといいわよ」「あーら、私はもっと安くするわよ」と誘っているのかもしれない。それにしても、「人気のある遊び」だったという。そうなのか。私は、東北の田舎で、メンコかカン蹴り遊びをしてたから全く知らなかった。東京のガキたちは、こんな楽しい遊びをしてたんだ。オラもやってみたかった。女が群がってオラ（米兵）に寄ってくるんだろうな。

よりどり見どりだ。バンバンとやり放題だ。いいなー。

…と、悔しがったところで終わる。でも、「パンパン遊び」をしてる所に右翼が来たら大変だな。子供とはいえ、叩き殺されるかも知れん。じゃ、田舎にいてメンコやってた方がよかったんだわー。

【だいありー】

(1)11月27日(月) 9:00p.m.からジャナ専の授業。「時事問題」と「戦後史」。シンプソンの



マッカーサーに感謝する盆踊り大会

「告白本」の話。それに、「60年安保」の話をする。

午後、8時20分。ポレポレ東中野。映画「9・11～8・15 日本心中」を見る。3回目だ。見るたびに感じることもある。金芝河さんが言っていた「神話解釈の革命」について主に話をした。私の『ヤマトタケル』（現代書館）も、それを目指したところがある。「今度、見沢知廉の映画を撮りたい」と監督は言う。これには感激した。「ぜひ、お願いします!」と言った。見沢氏こそ、日本と「心中」した作家だ。撮ってもらいたい。楽しみだ。（注：この時の話はブログで関口君が詳しく報告してくれてます。謝謝）

(2)11月28日（火）昼、取材。夕方5時から雑誌の座談会。「カレッタ汐留」の46Fのレストランで。驚いた。こんな巨大なビルがあったんだ。東京湾のそばで、夜景がきれいだ。多分、「東京で一番」だろう。感動した。おかげで座談会も皆、張り切り、盛り上がった。

(3)11月29日（水）一日、原稿を書いていた。夜、久しぶりに柔道に行く。

(4)11月30日（木）今日発売の「週刊新潮」を読んで驚いた。「皇室中傷」芝居のことが出ていた。こんな芝居をやる方もひどいが、それを報じる週刊誌の〈報じ方〉もひどい。「これでいいのか。右翼は何をしてるんだ」と煽っているようで。昔の「東郷健事件」を思い出して、暗い気持ちになった。

昼、週刊誌の取材。3時から河合塾コスモ。「現代文要約」と「基礎教養」。

(5)12月1日（金）図書館。

(6)12月2日（土）森村泰昌の「烈火の季節」を見に行く。「浅沼委員長刺殺事件」「三島由紀夫事件」といった大事件の写真に自らが出演して、なりきって撮っている。不思議な写真展だ。新聞で見たので、これはぜひ見なくちゃと思った。とてもよかった。感動的だった。清澄のシュウゴアーツで。TEL 03(5621)6434。12月16日まで。

【お知らせ】

(1)12月9日（土）午後1時より4時まで。「自由人権協会」主催のシンポジウム「言論・暴力・ナショナリズム」。中央大学駿河台記念館（お茶の水）です。パネラーは、半藤一利（作家）、岡留安則、弘中惇一郎（弁護士）の各氏と私です。

(2)12月10日（日）昨年自決された三浦重周氏の一周忌（早雪忌）。午後3時より、九段会館地下宴会場で。遺稿集第二弾『国家の干城、民族の堡壘』も当日発売されるそうです。

(3)12月19日（火）7:00p.m.一水会フォーラム。講師は歳川隆雄さんで、テーマは「安倍政権の今後」。高田馬場のホテルサンルートで。

(4)12月19日（火）7:30p.m.よりロフト。第一部は本橋信宏出版記念トーク。第二部は森達也さんらと私が出ます。「ナショナリズムと言論の覚悟」です。

(5)12月25日（月）7:00p.m.、ネーキッド・ロフト。國貞陽一さんの『寿（kotobiki）魂』（太田出版）出版記念パーティー&ライブがあります。私も出席します。

HOME

今週の主張

「新硬派の時代」が始まった

今週の主張12月11日

バックナンバー

(1) 「日本の右翼と左翼」がテレビで紹介された

いいですね。これからは〈硬派〉の時代だそうですね。我々の時代ですよ。なんせ、「アエラ」（12月4日号）が言うんですから間違いない。巻頭で書きちやります。



「アエラ」（12月4日号）

〈時代の気分は、新コーハ〉

そして続きます。「もう、あおられない。飛びつかない」。

いいですね。自立した硬派の時代ですよ。

〈「流れに身を任せていたらいい時代は終わった。しかし、周りを見ても頼もしい価値観は、ない。渾沌。これからどうなるのか。不安が募る。そして行き着く。最後の頼みの綱は自分なのだ」

そうですね。嬉しくなりますね。ムードで、なびいてちゃダメだ。保守化、右傾化の中で、「そうだ、そうだ！」と言ってるだけじゃダメだ。これじゃ自分がないんだ。竹中労が言っちゃいました。

「無力だから群れるのではない。
群れるから無力なのだ」



「ムーブ！」（11月23日）

さて、「アエラ」です。「新コーハ」を表わすものとして、いろんな現象が取り上げられてます。まず、大阪のテレビがグンと知的、コーハになった。又、出版界ではコーハな本が出るようになった。哲学、思想、古典文学の復権だ。さらに、「他人の意見も聞こう」という「誠実な生き方」に気づき始めた…という。

その「新コーハ」現象のトップに挙げられている大阪テレビ界の「激変」だが、私にもちよっぴり関係がある。

関西の夕方時間帯では、硬派な論客が「本音トーク」をする朝日放送の「ムーブ！」が6月から視聴率トップだという。そうです。11月23日

(木)に私が出た「ムーブ！」です。元気、やる気が感じられました。だってこの日は、特集が「日本の右翼と左翼」でしたし。そして、別冊宝島に書いた私の文章がまず朗読される。さらに、鳥の絵が出てくる。フランス革命直後の議会だ。議長席を頭とすると、鳥が大きく羽を広げているように見えた。議会がですよ。右の翼(議席)には保守派が座っていたので「右翼」と呼ばれた。左の議席は「左翼」だ。その起源がまず絵で説明される。そして、今の「右傾化」について説明が続く。

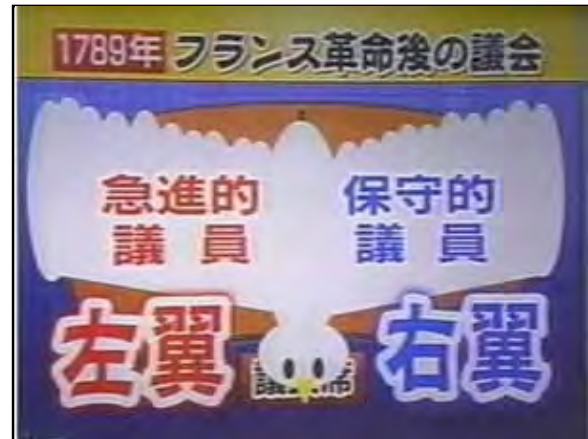
自分の文章がアナウンサーによって朗読されたなんて初めてだ。司馬遼太郎の『街道をゆく』みたいだなと思った。嬉しかったけど、ちょっと恥ずかしかった。

しかし、こんな思い切ったことを、よくもやったもんだと思った。それは、「ムーブ！」だからなんですね。

再び、「アエラ」の記事に戻る。「ムーブ！」の成功にはテレビ局や大阪人もビックリ。だって、夕方のこの時間帯は見てる人は主婦が圧倒的だ。コアな番組など当たるはずがないと思われていた。それが「常識」なんだ。関西では夕方のテレビ番組の「勝利の方程式」があった。「グルメ(商店街の安売り情報)・温泉・お笑い」の3点セットだ。これが「常識」だった。それ以外のものは「大阪のおばちゃん」が見るはずはない。そう思われていたのだ。

それを変えたのだ。番組を変えることでさらに大きな変化があった。「大阪のおばちゃん」もコアなものを見るんだ。飢えていたんだ。固定観念にこりかたまっていたはいかん。そう思ったんだ。又、この番組によって、見てる人の意識も変わった。

しかし、「ムーブ！」を立ち上げるのは大変な苦勞だったらしい。



〈関西のテレビ界とお笑い界。これは切っても切り離せない関係だ。両者の暗黙の了解で、時間帯ごとにお笑い芸人の「出演枠」があった。朝日放送の幹部は、芸能事務所を回り、「出演枠」の撤廃を頼んだ〉

そこまで思い切ったことを、なぜやったのか。余りに危険で無謀な賭けだ。しかし、朝日放送は考えた。奈良修プロデューサーは言う。

〈「大阪の主婦代表」という存在で芸人を交ぜて出演させると、コメンテーターの人が、話す内容のレベルを下げてしまう。ニュースはそもそもいるんな背景があって、白黒つけにくいんだから、高度な言葉で語り合うのがリアルだ〉

うーん、これは言えるね。意識的に「分かりやすく」喋ろうとして、かえって、レベルを落とす。又、自分も「面白いこと」を言い、笑いをとらなくちゃと思ったりする。これではかえって見てる人を馬鹿にしている。そう思ったのだろう。それを又、実行したところが凄い。

(2) 「ワセダ・ナショナリズム」で支えられてるんですよ、今も

「ムーブ！」のコメントーターは宮崎哲弥、福岡政行ら約20人。日替りで3～4人が出演する。奈良プロデューサーは言う。

〈コメントーターの共通点は「物書き」であることだ。集めた情報を整理して文章を書く人の話し言葉には、説得力があると考えた〉

僕が出た11月23日（木）も、このことを痛感した。テレビなのに、やけに字が多い。見た人は分かるだろうが、画面一杯、文字が出る。文字の説明が多い。本を読んでもような錯覚すらする。これは知的だ。別冊宝島の『日本の右翼と左翼』の文章が紹介され、説明される。入門書になる。

この日は午後4時から6時までが本番。3時集合で打ち合わせ。早目に行こうと2時10分新大阪着の新幹線で行った。宮崎哲弥さんと中で会った。降りる時、神足裕司さん（評論家）と会った。久しぶりだ。神足さんは、これから読売テレビだと言っていた。「ムーブ！」のライバル番組らしい。

宮崎さんと一緒に朝日放送に行こうと思ったら、「本屋に寄りますから」。それで僕が一人で先に行った。宮崎さんは勉強家で、大阪ではいつも大量に本を買って帰るらしい。それに、新大阪駅の地下の書店は大きいし、いい本、変わった本が多い。僕も帰りなどに寄って、結構買っている。

3時から局で打ち合わせ。入念にやる。この日は、宮崎さん、橋下弁護士、大谷昭宏さんだ。大谷さんは早稲田で、学生時代は右と左で敵対し、喧嘩していた。今は仲がいい。なんせ、「早稲田ナショナリズム」という言葉さえある。左翼は「インター」の前に、校歌の「都の西北」を歌っていたというし。国家、国歌、国旗を否定しても、早稲田と校歌、校旗は大事にするんだ。

「子供時代と学生時代。人はこの二つに郷愁を感じる。この二つが〈郷土愛〉になるのかもしれない」と私は思った。先日、雑誌の座談会で、そんな話をした。両方とも社会の歯車に組み込まれず、〈遊んで〉いた時代だからなのか。そんなことも感じた。

しかし、大阪は、「ムーブ！」にしる、「たかじんのそこまで言って委員会」にしる、知的な、本音のトーク番組が多い。東京よりも進んでいる。

今年は僕も大阪に随分と行った。あまりしゃべれないし、僕なんかじゃ面白くないと思うが、呼んでくれてありがたい。今年は大阪に4、5回行ったかな。待てよ。「ムハハのたかじん」に出た。「委員会」に4回出た。その前に、ビデオ出演したから5回か。そして「ムーブ！」だ。計7回か。

東京では「朝生」に2回出た。（2月と7月）。

「サンプロ」と「ニュース23」にも出た。朝日

ニュースターには3回出た。（「噂の真相」で公安、天皇の2回。加藤紘一さんの「もう一つの時代」）。それに桜チャンネル。そしてインターネットテレビで計9回か。大阪と合わせて16回か。今年はこのように出たのか。出過ぎだね。反省しちよります。出るたびに自己嫌悪にかられ



る。いかに自分は頭が悪いか。勉強してないかと痛感する。喋り方も下手やし。



さて、「アエラ」だ。テレビだけでなく、出版の世界でも、「新硬派主義」の現象が出てるといふ。

〈光文社は9月、古典の新訳文庫を創刊した。ラインアップは、カント、レーニン、ドストエフスキーら「歴史上の人物」が並ぶ。ハウトゥー本全盛の今、古典を読む人がいるのか、と社内から心配する声もあった。が、創刊時8冊のうち、カントの『永遠平和のために/啓蒙とは何か』やドストエフスキーなど6冊は追加で印刷をした。駒井稔編集長は、学生や就職間もない層が予想以上に読んでいることに

驚いたという。

「古典は読んで自分自身の頭で考えないと深く理解できない。でも、古典には真理が詰まっている。これがいまの空気とマッチしたのでしょうか」

いい傾向ですね。これで日本も大丈夫でしょう。皆さんも、携帯やメールばかりやってないで古典を読みませう。私も、もう一度読み返してみよう。

(3)右派論壇の「仁義なき戦い」が始まった

「アエラ」（12月4日号）には、実はもう一つ興味深い特集がある。「右派論壇・仁義なき戦い」だ。僕もコメントしてるけど、暗くなるね。討論はいいけど、ルールを守って、公明正大にやるべきだよ。『愛国の作法』の前に、『論争の作法』が必要だよ。右が右を攻撃している。「朝日におもねる」「サヨク」「国賊」「白い共産主義」…etc。中には、自らの師匠を批判する人もいる。でも、先輩を立て、お世話になった人には感謝する。これは「日本文化」じゃないのかな。「いや間違っていたら、師であっても批判し、正す」と言うのだろうが、礼儀をもってやるべきだろうよ。これからは「左右激突」はなく、「右右論争」の時代になる。だからこそ、「礼節ある討論」「ルールある論争」が必要だと思うね。

さて、再び「ムーブ！」の話だ。11月23日（木）、6時に本番が終わって帰ろうとしたら、局の人が、「珍しい人をお連れしました」と紹介してくれる。25年前に会った人だ。「あの頃は事業が失敗して、死のうかと思ってたんです」と言う。だが今は、立派に立ち直って、一流企業になっている。凄い。「これで救われたんです。読んで下さい」と、雑誌の一ページを示す。といっても宗教の本ではない。囲碁の本だ。囲碁の師匠に救われたという。そこにこう書かれていた。

「仕事も人生も手順を間違えれば失敗する。時には冒険するのもいいが、無理は良くない。最近自殺者が増えているそうだが、碁を打つ人には少ないとも聞く」

エッと思った。これは考えてもみなかった。もしかしたら将棋や碁をやる人には自殺者は一人もいないのではないか。このことは気になって、いろんな人に聞いている。学校でも将棋や碁好きの先生、生徒に聞き回っている。「うーん、そういえば知り合いには一人も自殺者はいないな」と先生は言う。新聞だって、将棋や碁のプロが自殺したという話は書いてない。アマチュアだっていないだろう。

「私の知り合いで、ノイローゼになった人はいますよ」と一人の生徒が言う。「でも、生きてるだろう」と私は言った。死ぬ人は「二者択一」だ。これがダメ。だから死ぬしかない。そう思う。いくら考えても、それしかない。いや、「一者」しかないのか。どこから、何を考えても、「やっぱり死ぬしかない」と思う。

その点、将棋や碁は、先の先まで「手」を考える。十手先、二十手先まで考える人もいる。「一人将棋」をやって、相手の立場に立ってまで考える人もいる。選択肢は無限だ。だから人生も、何があるのか分からん。〈死〉だけが解決だ、なんて下らん。と思う。

つまり、先まで読める、広い視野で見れるんだろう。でも、こんな人と結婚すると大変だろうね。浮気はすぐバレる。言い訳しても、その先の先まで読む。十手先まで読んで、もう二度と浮気も出来ない。将棋や碁をやってる人同士の三角関係なんて、もっと悲惨だろうな。碁盤が人生だ。お互い、心の読み合いだ。何手先まで読めるか。ウッ、考えただけでもうっとうしくなる。

でも、いたよな。そんな人が。林葉直子だけ。お相手は中原名人だったかな。こっちの方がリアル・ファイトだ。

「だから、将棋や碁のプロが、人生でも先が読めるというのは嘘です」と言う人がいた。「碁盤の上で全精神、全精力を集中し、闘う。そこで使い果たすんです。だから、それ以外は抜け殻で、ドジを踏むんですよ」とその人は言う。そうなのか。不倫もすれば、園遊会で失言もする。じゃ、自殺者だっているのかもしれない。

いや、どんな失敗はしても、自殺だけはしないんじゃないかな。だったら、「教育基本法」を改正し、小学校から全員、将棋、碁を必修にしたらいい。不倫や失言、いじめはあっても、少なくとも自殺はしない。うん、これで教育問題は全て解決だ。日本の夜明けは近いぞよ、杉作少年！

【だいありー】

(1)12月1日（金）の新聞を見て感動しましたね。「愛子さま、5歳に」と各紙が伝えている。「相撲に夢中。ポニーも好き」と。

大相撲期間中は、幼稚園を終えて家に帰るとテレビで幕下からの取り組みを見ており、ビデオに録画することもあるという。

凄いですね。私も相撲は好きですが、とても幕下なんて見ない。十両も見ない。大体、夕方、リアルタイムで見ない。夜にNHKで30分にまとめている「今日の大相撲」を見てるだけだ。それなのに愛子さまは夕方の放送を全部見るという。それに力士の名前もおぼえている。皇太子さまが前にテレビで言っていた。

「力士の名前は皆、フルネームでおぼえてます。たとえば、私たちは“朝青龍”としか知りませんが、愛子は“朝青龍明德”とおぼえてます」

凄いな。僕なんか、誰も知らない。じゃ、大相撲の解説をやってもらったらいい。無理か。

「週刊SPA!」の福田和也と坪内祐三の対談では、「大相撲の危機を救うには愛子さまに天皇になってもらう他はない」と言っていた。

(2)12月4日（月）9:00a.m.からジャナ専の授業。「時事問題」と「現代史」。午後から、新聞社の取材。「最近、生学連（生長の家学生部）出身者が大活躍しているが、その原因は？」と聞かれた。「みんな優秀だし、心の中に信仰を持ってるからでしょう」と答えた。無能な例外は一人だけいるけど。私ですよ。

(3)12月5日（火）昼、取材と打ち合わせ。6時から重要な会合があって赤坂に。場所を移し、1時過ぎまで飲んだ。

(4)12月6日（水）一日中、図書館に。夕方6時半から「山の上ホテル」で後藤臣彦氏『政治の品格』（原書房）出版会。元早大の雄弁会。元雄弁会や元左翼学生が大勢来ていた。何とあの日大全共闘議長の秋田明大氏も…。初めて会った。感激した。

(5)12月7日（木）3:00p.m.から河合塾コスモ。「現代文要約」と「基礎教養ゼミ」。

(6)12月8日（金）昼、取材。夕方6時から目黒。インターネットテレビの「ビデオ・ニュース・ドットコム」に出る。「マル激トーク・オン・デマンド」で神保哲生さん、宮台真司さんと「教育基本法」「愛国心」について語り合う。まるで大学のゼミのようだった。高度な講義を聞いた感じだ。とても勉強になりました。

インターネット関係の仕事が最近増えた。今は私のこのHPと、「オーマイニュース」の火曜のコラムをやっているが、12月末から北海道のメルマガでも隔週連載することになった。大変だ。取材も毎日のように入って、人と会ってるし。原稿もやたら書いている。才能も蓄積もないのに、アウト・プットばかりしてちゃいかんよな。もっともっと勉強して、イン・プットしないと。忙しくて、やってる仕事全て、ズサンになるのではないかと不安だ。遊びたい盛りなのに遊ぶ時間がない。金もないのに、「仕事して金があり余ってんだろう」と、たかられるし。「我々貧乏人にカンパしろ！」「金貸せ！」と言われるし。昔、クラスの人に毎日、金を巻き上げられ自殺した子供がいた。オラも抗議の遺書を書いて自殺しようかしらん。

(7)12月9日（土）午後1時から4時まで、「自由人権協会」主催のシンポジウム「言論・暴力・ナショナリズム」。中央大学駿河台記念館（お茶の水）。パネラーは、半藤一利（作家）、岡留安則、弘中惇一郎（弁護士）の各氏と私。加藤紘一さんも特別参加してくれ、活発な討論がなされた。実りある討論会だった。

(8)12月10日（日）午後3時より九段会館地下宴会場で、三浦重周氏の一周忌（早雪忌）。多くの人々が集まり、三浦氏を偲んだ。遺稿集第二弾「国家の干城、民族の堡壘」も発売された。

午後7時より、同じ九段会館の一階大ホールで鳥肌実のライブを見る。面白かった。終わって、楽屋を訪ねて、いろいろ話をした。

【お知らせ】

(1)12月16日（土）6:00p.m.～ 塩見孝也さんの忘年会です。私も行きます。「がんばり屋・高田馬場店」03（3200）0891です。今年は頑張らなかったけど、行ってもいいでせう。皆さんも行きます。

(2)12月19日（火）7:00p.m.より[一水会フォーラム](#)。講師は[歳川隆雄氏](#)で、テーマは「安倍政権の今後」です。場所は[ホテルサンルート高田馬場3階会議室](#)。終わって忘年会です。

(3)12月19日（火）7:30p.m.より[ロフト](#)。第1部は本橋信宏出版記念トーク。第2部は森達也さん、綿井健陽さん、そして私です。私は7時から一水会に出て、ロフトは9時からの第2部に出ます。よろしく。

(4)12月25日（月）7:00p.m. [ネーキッド・ロフト](#)。國貞陽一さんの『寿（kotobuki）魂』（太田出版）出版記念パーティ&ライブがあります。私も出席します。

(5)月刊「[創](#)」（07年1月号）私の連載では、加藤紘一さんの地元でやった「言論の自由」を考えるシンポジウムのことを書きました。巻頭のカラーページにも、この集会のことが出ています。同時に、この焼き打ちを支持する右翼の集会のことも出ています。さらに、「テロ実行の右翼が語った放火・割腹現場の状況」も載っています。なかなか貴重な記事です。読んでみて下さい。

(6)月刊「[現代](#)」（1月号）に出ています。「徹底討論・メディアは国家と戦っているか」。魚住昭、溝口敦、そして僕です。

(7)月刊「[世界](#)」（1月号）。10月27日に鶴岡で行われたシンポジウム「いま言論の自由を考える」の討論が載ってます。加藤紘一、小森陽一、佐高信、早野透、そして僕です。

又、魚住昭さんの「聞き書・村上正邦」には僕の「生長の家」時代のコメントも出ています。

(8)「[週刊読書人](#)」（12月15日号）「2006年の収穫」に私も本を三冊、推薦しています。

(9)月刊「オルタ」（12月号）に原稿を書いています。沢木耕太郎『テロルの決算』の書評です。[「オルタ」](#)は03（5209）3455。

HOME

今週の主張

言論テロと「表現の自由」

今週の主張12月18日

バックナンバー

(1)ヤバいな。あの事がバレたかな

「埼玉新聞に鈴木さんのことが出てましたよ」と言われ、ギクツとした。ヤベー、浦和で痴漢したことがバレたのかな。大宮で万引きしたことかな。「そんなことしてるんですか?」。いや、してねーけどさ。酒に酔ってオラのドッペルゲンガー（分身）がやったのかもしれない。その時は、「天に誓ってやってません」と言うしかないな。

そういえば、落合駅にも「女性専用車」が出来た。これもオラのせいかな。してないのに。冤罪だ。「女性専用車」は落合駅だけじゃないね。地下鉄東西線に出来たんだ。

「発言に報復、自宅に火。
違い許さぬ社会に違和感」

へー、放火された人がいたんだ。ひどいね。かわいそうに。と思って読んだら、私のことだった。もう忘れてたよ、古いことだから。でも3年か4年前だ。嫌なことは忘れようとするんだね。フロイトも言っちゃる。

しかし、「埼玉新聞」に取材されたかな。おぼえない。じゃ、共同通信かな。最近は、毎日のように取材で人と会っている。うーん、会ったかな。そうだ、一週間ほど前に「確認」の電話があった。

「放火された正確な日付を教えてください」と。「忘れたよ。放火されたのも夢かもしれない」と、まさか、そんなことは言えん。

うーん、と考え、ハッと思い当たった。『増補改訂版・新右翼』（彩流社）の巻末にある「年表」だ。これで調べた。これは助かる。それによると2002年3月だそう。赤報隊事件が時効になる直前だった。放火の直後に、「赤報隊に関する最近の発言は許せない。天誅を加える」という脅迫文が届いた。ああ、嫌だ、嫌だ。思い出したくない。「埼玉新聞」では鈴木君はこう言っちゃる。

〈自宅放火から4年。「幸い家族もいないし、半ばやけっぱち」と言う鈴木は現在も活発な言論活動をしている〉

えっ、こいつは「やけ」でやってんのか。ヒデー奴だ。でも、ポロツと自虐的に、モゴモゴと、聞こえないように呟いたのに、しっかりと聞いて、メモしてるんだ。さすがは天下の共同通



鶴岡のシンポジウム1

信だ。うっかりしたことは言えん。でも、痴漢や万引きはバレないでよかった。

「幸い家族もないし」と言うのも変だよ。家族がないことは不幸だろうが。貧乏だし、友達も誰もいないし、人に愛されたこともない。幸（さち）薄い一生だったんだね、この人は。それでヤケになって暴れてるんだ。しょうがない奴だ。

ヤケで発言してるから、ヤケで反論も来るわさ。再び「埼玉新聞」だ。

〈「ぶっ殺すぞ」。雑誌などに掲載されるたび匿名の脅迫めいた電話が自宅にかかる。「左翼かぶれ」「売国奴」。ネット上には容赦ない言葉も並ぶ。「国を愛すればこそ右翼の立場で活動してるんだけど」と苦笑する〉

いや、「売国奴!」「非国民!」「北朝鮮に帰れ!」なんて罵声を浴びるたびに、こいつはマゾ的な快感を感じてるんですよ。ゾクゾクとした「幸せ」を感じてるんですよ。それほどまでして注目されたいのか。バカタレが!

暗殺されるのなら、それも本望だし幸せだと思っているんだ。石川啄木にこんな歌がある。

〈誰（た）そ我に ピストルにても撃てよかし
伊藤のごとく 死にて見せなむ〉



これを引いて、「オーマイニュース」で、「暗殺されたっていいや」とヤケで書いてたぞ、こいつは。

「一度ぐらい、暗殺されてみたいもんだ」とも言っ
とった。一度死んだら、もう終わりなのに。それとも今の子供たちのように、「生まれかわり」を信じているのか。

そんなことはないだろう、こいつは。ヤケで言ってるだけだ。暗殺で死んだら、ケネディになれる。浅沼稲次郎になれる。そう思っているだけだよ。あさましい奴だ。

今のままじゃ、デブだから割腹できん。自決しても、「貧乏でヤケになって死んだ」といわれるだけだ。周りにタカられて、「抗議の自殺だ」と言われる。「埼玉新聞」ではさらに言ってる。

〈雑誌など対談相手は思想的立場を問わない。「考えの違う人と話すからこそ意味がある。タブーをつくらず議論をしたらいい〉

偉そうなことを言ってるけど、これだってヤケで言ってるんだらう。どうせ家族はいないし。一人だし。その点、家族がいて、家族を守りながら闘っている加藤紘一さんや溝口敦さんは本当に偉いですね。と、これからが本論です。

(2)溝口敦さんは本人と子息が刺され重傷を負った



「創」07年1月号

加藤さんは8月15日に鶴岡の実家が放火された。97才の母親が住んでいた。ちょうど散歩中だったという。帰ってきたら、もの凄い勢いで家が燃えていた。呆然とした。一体これは何だ。何が起きてるのかわからなかった。私も放火された事があるから分かる。「まさか。夢だろう。夢であってほしい！」と私は思いました。

お母さんは、「私のせいだ」と思った。自分の火の不始末で火事になったと思った。当然だ。まさか放火されるとは思っていない。近所の人は皆知って

いる。純朴な町の人たちだし。「実家が燃えてる」と第一報を聞いた加藤絏一さんもそう思った。「世界」（1月号）で、加藤さんは言っている。

「秘書からメモが来た。山形の実家が火事でほぼ全焼している。母は家にいなかったのが無事だというメモでした。母は元気ですが、さすがに97才ですから、薬缶（やかん）の火でも消し忘れたのかなあと、初めはそう思った。ところがすぐに、山形の事務所から電話があって焼け跡から切腹した人が運び出されたという。これは尋常な話ではないと夜の飛行機で帰ったのです」

これは「世界」1月号だ。10月27日に山形県鶴岡市で行われたシンポジウム「鶴岡発・『言論の自由』を考える」を再録したものだ。出席者は、加藤絏一氏、小森陽一氏（東大教授）、佐高信氏（評論家）、そして私。コーディネーターは早野透氏（朝日新聞コラムニスト）だ。11ページにわたって載っている。「世界」に載ったのは生まれて初めてだ。内容の濃い論議になっている。

佐高信さんも加藤さんと同じ山形の出身。鶴岡からちょっと離れているが、酒田だ。大川周明と同郷だ。そこにお母さんがいる。やはり90過ぎで元気だという。お母さんの世話をしているお姉さんから電話があった。放火の直後だ。「うちは大丈夫だからね」と。笑ってはいられない現実だ。

「世界」にはこの座談会に続いて、野田峯雄氏

（ジャーナリスト）が「溶解する民主主義、浮遊する右翼テロ」というルポを書いている。加藤さんの実家に放火した堀米氏が関係する忠孝塾愛國連盟の事務所を訪ね、藤元会長に取材している。これは貴重な取材だ。その他、最近、朝鮮総連に「小指」が送られた事件などにも詳しくレポートしている。ぜひ読んでみてほしい。

それと、「現代」（11月号）でも「言論テロ」について特集している。「徹底討論・メディアは国家と戦っているか」と題し、魚住昭さん（ジャーナリスト）、溝口敦さん（ジャーナリスト）、私の三人で討論している。

そのあと、加藤絏一さんが「反言論テロのシンボルとしての覚悟」を書いている。



「世界」07年1月号

右傾化と言論の役割を問う

徹底討論
メディアは国家と戦っているか

NHKへの放送命令
加藤純一代議士宅への放火テロ……
新聞テレビの鈍すぎる反応が物語る
ジャーナリズムの劣化

魚住昭×鈴木邦男×溝口敦

「現代」07年1月号



溝口敦さんは、二度も言論テロの標的になっている。それにもかかわらず筆を曲げず、一步もひいてない。「標的」といったが実際に襲われ、刺されて重傷を負った。一度目は本人。そして二度目は息子だ。これも恐ろしい。本人を襲っても反省がないし、「効果」がないと思ったのか。今度は全く無関係の息子を刺している。普通なら、これでやめる。ヤクザについての原稿が元だったが、奥さんや息子だって、「そんな危ない原稿はもう書かないでくれ」と言うだろう。それでも書く。不屈のライターだ。

「息子さんはどう言ってるんですか」と聞いたら、「怨んでない」と言ったそう。ウーンと唸った。よく出来た息子だ。普通なら、「おやじのせいだ。もうやめてくれよ！」と怨み言を言うだろうに。

多分、日本で「最大の被害者」だ。そして「最も勇気のあるライター」だ。だからこそ発言には重みがあった。この座談会も11ページある。読み応えがある。

(3)97才のお母さんは「データ・ベース」の全てを失った

もう一つに加藤さんの原稿だが、こう言っている。犯人について、「おかしな話ですが、生々しい悪意や憎悪は感じられなかったのです」と言い、こう続ける。

〈病院に運ばれた当人にはぜひ助かってもらいたいと思いましたが、現にいまも助かってよかったと思っています。高齢の母と住む自宅の庭でかつて割腹自殺があったという記憶を引きずって暮らすのは気分がいいものではないという理由もありますが、それと同時に彼がなにか時代の犠牲者、世の空気の犠牲者のように思えてなりません〉

偉いですね。なかなかそういう境地にはなれません。私なんか、放火された時は、完全にパニックでしたし、もし犯人を捕まえたら殺してやろうと思いました。いち早く犯人は逃げ去ったから、かえってよかったと思います。見つけていたら、自分の憎悪、激情をおさえられなかったと思います。まあ、「正当防衛」にはならないし、確実に刑務所行きでしたよ。

加藤さんのお母さんは、「大変だ。私の火の不始末で家を焼いちゃった」とパニック状態になったそうです。その後、「放火」だと分かるのですが、ご本人の着物は全て消失してしまい、それ以上に残念なことは、今までの写真や手紙、住所録など全てが焼けたことだと言います。今までの〈記録〉すべてを失ってしまったんです。これは本当に悔しいと思います。どういう事情であれ、放火はよくないことですよ。

「世界」（1月号）には、魚住昭さんの連載「聞き書・村上正邦」も載っている。今月は「第三回・日本政治右派の底流」。村上さんが「生長の家」に入信し、玉置和朗さんに続いて国会に出

る時の話だ。僕も魚住さんに取材されたのでコメントしている。

村上さんが、初めて「生長の家」の錬成会に来た時から僕は知っている。一緒に国会に出た小山孝雄さんも知り合いだ。又、当時は、優秀な人が大勢いた。今活躍している人も多い。井脇ノブ子、高橋史朗、梶島有三、伊藤哲夫…といった人々だ。

「生長の家」は宗教だけでなく、愛国心の話、政治の話も沢山していたし、それを聞きたくて、森田必勝氏はじめ「楯の会」の人たちも来ていた。又、信者が全国に多かったから、その子供たちが「生学連」（生長の家学生部）にはいくらでも入ってくる。左翼のように一人一人、オルグして誘う必要はなかった。そこで、優秀な人は残ったわけだ。この取材では、かなり長く、僕はコメントしているが、こんなところがある。

〈生長の家というのは非常にインテリ向けの宗教、キリスト教や仏教、神道などいろいろなものを取り入れて万教帰一、全ての教えは同じだ。ただ登り口が違うだけだと説く。

そのうえで谷口雅春先生は、「今、日本は危機だ。宗教家も勇気を持って立ち上がれ！」と叫んでおられた。生長の家は当時の愛国運動の中心だった。そんな時に活動できたことを僕は今も誇りに思っている。

また、「世の中は思い通りになる」「祈りは必ずきかれる」「一番大切なのは言葉だ」「病はない」…と教えられた。苦しい時はそうした教えを思い出して力づけられ、生きてきた。もし生長の家と出会わなければ、僕はたぶん自殺していただろう。どれだけ救われたか分からない〉

かなり真面目に、深刻に話してますね。そうだ。12月9日（土）にも、加藤さんの放火事件をめぐって話をしたんだ。1時から、お茶の水の中央大学駿河台記念館だ。自由人権協会主催のシンポジウム「言論・暴力・ナショナリズム」だ。岡留安則さん（元「噂の真相」編集長）、半藤一利さん（作家）、弘中惇一郎さん（弁護士）、そして僕だ。さらにこの日は、特別に加藤紘一さんも来てくれて、3時半まで、じっくり話し合った。

その中で、加藤さんの話がショッキングだった。やはり〈暴力〉は怖いという話だ。

〈ある評論家のところへ脅迫状が届いた。「お子さんの通学路を知っている」という内容だった。それ以来、その評論家はメディアに出なくなった。こういう内容のものが届いたら、本人がいくら勇気を持って発言しようとしても、口を閉ざさざるをえない〉

僕は一人で、家族がいないから、かなり自由に言えるが、確かにこれはあるだろう。「脅迫に屈するな！」「ただの脅しだ！」と言うことは簡単だ。しかし、本当かもしれない。実際、加藤さんは放火され、溝口さん父子は刺された。これじゃ、「やめてくれ！」と家族が大反対するだろう。そんなことで腰が引けた政治家や評論家は多いのかもしれない。又、それを一概に批判も出来ない。何よりも、卑劣な脅迫をする人間が悪いのだ。

その点、加藤さん、溝口さんは、本当に偉いと思う。命をかけている。頭が下がる。私なんて、とてもとても…と思った。「現代」（1月号）で加藤さんはこう言っている。

〈あの事件があって、私は図らずも、反言論テロのシンボルのようになりました。世の中で3本指に入るぐらいの言論を守る責任が与えられた。ここで私が口をつぐんでしまったら、日本中が静かにならざるを得なくなる。だから、これからも、発言はいままでと同じトーンで同じことを話し続けます。ここで姿勢を変えたりすれば、最後の砦がなくなってしまう。重大な任務を負ったと感じています〉

【だいありー】

- (1)12月11日（月）9:00a.m.からジャナ専門の授業。「時事問題」と「現代史」。
- (2)12月12日（火）2時、出版社で取材を受ける。3時間も。少々バテた。
夜、久しぶりに柔道の稽古をする。体がリフレッシュされた。
- (3)12月13日（水）2時、雑誌の取材。
- (4)12月14日（木）河合塾コスモは今日から冬休み。図書館。
- (5)12月15日（金）一日、家で原稿書き。
- (6)12月16日（土）2時。例の事件について又、取材された。もう終わったことなのに、しつこい。6時から塩見孝也さんの忘年会。高田馬場の「がんばり屋」で。皆、がんばって参加した。「YOU TUBEで『ムーブ!』見たよ」「マル激・ドットコムを3回も見たよ」と声をかけられた。これからはネットですね。

【お知らせ】

- (1)12月19日（火）7:00p.m.より[一水会フォーラム](#)。講師は[歳川隆雄](#)氏で、テーマは「安倍政権の今後」です。場所は[ホテルサンルート高田馬場3階会議室](#)。終わって忘年会です。
- (2)12月19日（火）7:30p.m.より[ロフト](#)。第1部は本橋信宏出版記念トーク。第2部は森達也さん、綿井健陽さん、そして私です。私は7時から一水会に出て、ロフトは9時からの第2部に出ます。よろしく。
- (3)12月25日（月）7:00p.m. [ネーキッド・ロフト](#)。國貞陽一さんの『寿 (kotobuki) 魂』（太田出版）出版記念パーティ&ライブがあります。私も出席します。
- (4)「オーマイニュース」（日本版）の立ち上げについて12月12日（火）の「ニュース23」で詳しく報じてました。編集長の鳥越俊太郎さんも病を押してがんばってます。市民記者もグンと増えて、充実したものになりました。感動的な放映でした。私も、毎週火曜日にコラムを連載しております。見て下さい。
- (5)12月8日（金）に出たインターネット・テレビ『ビデオ・ニュース・ドットコム』が12月11日（月）から放送しています。『マル秘トーク・オン・デマンド』で宮台真司さん、神保哲生さん、私です。「教育基本法」「愛国心」について、1時間半、かなり濃密なトークをやりました。見て下さい。
- (6)12月12日（火）ちくま書房から電話がありました。私の『公安警察の手口』（ちくま新書）が増刷になったそうです。第4刷です。ありがたいですね。『愛国者は信用できるか』（講談社現代新書）も4刷です。こんなに刷を重ねたのは初めてです。嬉しいですね。皆さまのおかげです。
- (7)今年もまだ残っているのに、来年の講演を頼まれました。1月に1回、2月に2回です。今年

はバタバタと忙しかったので、年末年始にかけては本宅にこもって、じっくり勉強しようと思っ
ちよります。

(8)一水会機関紙の「[レコンキスタ](#)」(12月号)はとても充実してます。読みでがあります。「週
刊金曜日」事件、加藤宅焼打ち事件、野分祭報告…など。他では読めない記事が満載で500円
(年間6000円)です。一部だけでも読んでみたらいいでしょう。私の連載「平成文化大革命」も
載っています。一水会はtel 03(3364)2015 FAX 03(3365)7130 mail:info@issuikai.jpです。

(9)田原総一郎責任編集の『オフレコ!別冊』(アスコム・1050円)が出ました。今年の7月28
日に放映された「朝生」の「激論!昭和天皇と靖国神社」の全てが載ってます。僕も出ていま
す。

(10)急遽決まりました!12月31日(日)の夜7時から、ロフトの年忘れイベントです。吉田豪さ
んと僕のトークです。吉田さんとは初めてです。

(11)メルマガ「北海道人」で新連載「危機の時代に--鈴木邦男・和多田進、10年の往復書簡」が
始まりました。今、和多田さんの手紙が出ています。私のは12月25日です。手続きをして見て下
さい。

(12)「ムーブ!」でやった「日本の右翼と左翼」は[YOU TUBE](#)で見れます。なかなか詳しいし、
面白いです。

HOME

今週の主張

〈追体験〉・山口二矢と三島由紀夫

今週の主張12月25日

バックナンバー

(1)余りにも衝撃的・挑発的な「写真展」だった



二枚の写真を見てほしい。70年の三島事件。そして、60年の山口二矢による浅沼稻次郎刺殺事件だ。このHPを読んでも人なら皆、知っている。「それがどうした」と言われそうだ。この写真は、別冊宝島の『日本の右翼と左翼』にも出ている。

しかし、よく見てほしい。まず、三島事件だ。バルコニーのフェンスがちょっと違う。市ヶ谷の自衛隊では、こんな短剣のような突起はなかったですよ。建物が違うでしょう。檄文もちょっと違う。三島本人も、ちょっと太めだ。

もう一枚の写真を見て下さい。短刀を構えてる山口二矢。一突きして、もう一度、刺そうとした瞬間でしょう。浅沼委員長の巨体が前のめりに倒れ、泳いでいます。山口二矢をとめようとする人も…。余りにも有名な、歴史的な写真です。しかし、これもよく見て下さい。顔が違いますね。三人とも同じ人

間が扮しています。そう。三島もこの人です。

森村泰昌の「作品」なのです。本人が、二矢、浅沼、三島に成り切って写真をとったのです。「現代アート」です。顔だけを貼りつけたわけではありません。大がかりな舞台装置で、あの歴史的瞬間を〈再現〉しているのです。

前にちょっと紹介しましたね。森村泰昌の個展が行われてると。11月11日（土）から12月16日（土）まで都内・江東区清澄のシュウゴアーツで行われました。そんなに作品が多いわけではありません。しかし、各方面から注目され、朝日、産経、週刊朝日などに大々的に紹介されました。「一体これは何だ！」と思って私も駆けつけました。

この個展は「烈火の季節/なにものかへのレクイエム・その壺」と銘打たれてました。今回の新作では「20世紀的なるもの」と「男たち」をキーワードに、以下のようなテーマが展開されていました。



- 1960年「浅沼稻次郎、山口二矢に暗殺される」
- 1963年「ケネディ暗殺犯オズワルドがジャックルビーに暗殺される」
- 1968年「ベトナム戦争下でのベトコン処刑」
- 1970年「三島由紀夫、自衛隊のクーデター未遂」

他にも細江英公による「薔薇刑」（1963年）を題材にした8点のシリーズ「薔薇刑の彼方へ」も同時に紹介されました。勿論、森村が三島に扮しています。会場でもらったパンフレットにはこう書かれています。

〈題材はさまざまな男たちによる様々な事件を再構築してつくられています。それらは昨今のバーチャルな世界ではなく、血と汗と肉体が激突する世界です。そのぶつかり合いが激しい火のように感じられ、20世紀を「烈火の季節」と呼んでみたかったと、森村はいいます〉

さらにこう書かれている。これこそが、なぜこの作品を作ったのかの動機に迫っています。

〈過去への畏敬と敬意なしには未来はありえないという、その関係性の中に現在はあるのではないか。真新しい21世紀的なものが猛スピードでつくられている現在、「20世紀とはなんであったか」と問うことは、過去を顧みるのみならず現代、そして未来を問うことに繋がるのではないだろうか。過去を今現在に生きるひとりの表現者としての私（作家自身）という「器」にうつしかえることで、決して懐かしむためのものではない…。今までの作品とがらりと趣を変えた今回の新作からは、森村の烈火のごとき熱い意欲が伝わってきます〉

自分が山口二矢に、浅沼に、三島に、オズワルドに扮しただけじゃない。自分という肉体（器）に「20世紀」を移してみたんですね。歴史の中に自分があるのではない。自分の中に歴史を入れ、それを体験するのだ。凄い。もっと大きな再発見があり、神秘体験だって生まれたでしょう。

だって、「三島事件」の時は、写真だけでなく、「映像」もあるんです。会場でも上映されました。バルコニーで、三島に成り切り、大演説をぶってました。驚きました。私は三度も見てしまいました。一体どこで撮影したのでしょうか。楯の会の制服を着て、バルコニーから絶叫する。あの市ヶ谷自衛隊と似た所を探し、借りて撮ったのでしょうか。時間も手間も金もかかってます。

でもよく見ると、鉢巻の字が違う。三島は「七生報国」でしたね。七回も生まれ替わって国の為に報いる、という意味です。楠木正成が言った言葉です。でも森村のは、最初の「七」は同じだが…。目を凝らして見ると、何と「七転八起」。パロディか。いや、ちょっとした遊び心でしょう。決して三島をからかっているんじゃない。三島に成り切り、事件を個人の体で再現し、追体験する。真摯な挑戦だ。でも単なる追体験だけではない。芸術家としてのオリジナリティや遊び心も出ている。

(2)三島事件「再現」の苦労話を聞いた



演説だって、よく聞くと、三島の「檄」のよう
で、その中に森村の主張も入っている。

〈おまえら聞けえ、聞けえ、静かにせえ、話を聞
け、男一匹が、命をかけて諸君らに訴えかけている
んだぞ。いいか、いいか〉

と森村は絶叫する。三島に成り切っている。中庭
に集められた自衛隊員は、何が起こったのか分から
ず騒然とし、ヤジを飛ばす。彼らに対し、三島は、
命をかけて演説するのだ。三島の演説の通りだ。

「私はこの日本の文化を頼もしく思っている」
「しかし日本の政治は政権争いの謀略、私利私欲に
走っている」

「経済効果が価値とばかり、精神的にからっぽに

陥っている」

…と、絶叫する。でも、よく聞くと、「芸術もそうだ」という言葉が入っている。これは三島
の演説の中にはない。しばらく聞いていると、突然、森村は言う。

〈おまえら聞けえ。いま日本がだ、ここでもって立ち上がらなければ、諸君てものはだね、永久
に外国の文化の奴隷である〉

〈諸君は表現者だろう。それならば、自分を否定する表現に、どうしてそんなに憧れるんだ。自
分を否定する現代の日本の芸術の流行りすたりに、どうしてそんなにペコペコするんだ。そうし
ている限り、諸君てものは永久に救われんぞ〉

おっ、今度は日本の芸術家に向かって絶叫してるぞ。そうか。これが言いたかったのか。さら
に演説は続く。

〈多くの間違った文化現象がこの世に跋扈している。芸術がめざすものとはなんなんだ。日本的
なるものとはなんなんだ。みんな、みんな間違っている。あいつもこいつも間違っている。この
間違いに気がついたものはいないのか。君たちの中にひとりでも俺と一緒に立ち上がる奴はいな
いのか〉

〈わかった。わかったよ。諸君は芸術のために立ち上がらないと見極めがついたよ。これで俺の
芸術に対する夢はなくなったんだ〉

〈それでは俺はここで万歳三唱を叫ぶ〉

とって、万歳をやる。さらに「永遠の芸術万歳」をやる。

いやー、凄いな、と感動した。森村にもぜひ会って見たいと思ったが、初日に顔を出して、す
ぐに大阪に帰ってしまったという。初日は、会場に来て、その場で着替えをして、三島に成り切
り、演説をして、サーッと帰っていったという。

僕が行った日は終わり頃だった。前日、メールをしておいたので、シュウゴアーツの責任者の

人から、いろいろ話を聞くことが出来た。こういうジャンルは何というんだろう。「現代アート」ですね、という。あの演説はどこでやったんだろう。その疑問に答えてくれた。大坂城の中に、今は使っていない古いビルがあって、そこに交渉して借り受けたという。

その時の苦労話を聞かせてくれた。下からカメラを回すが、アップにしても、森村が手すりに隠れてしまう。それで、かなり高い踏み台を使った。もしかしたら、三島もそうだったのではないか。さらに、森村は小さなマイクを服にしのび込ませた。そうでないと音がとれない。あの日、三島はマイクを使ってない。その上、空にはヘリコプターの爆音がした。もしかしたら、バルコニーの下にテープをおいて録音したのではないか。だから、後に発表する時は、かなり、はっきり聞こえるものになったのではないかと推理する。三島事件を「再現」したスタッフが言うのだから説得力がある。又、私の調べる課題が増えた。

僕の知ってる限りでは、駆けつけたテレビ局が長い集音マイクで、音を拾ったと聞いた。でも、ヘリコプター、ヤジの中で、よく三島の声を拾えたと不思議に思っていた。三島の謎はまだまだあるんだ。

(3)46年も経って、再び山口二矢と「再会」したよ

三島に成り切って演説をした人間は、実はもう一人いる。緒形拳だ。ポール・シュレイダーの映画「MISHIMA」で三島役をやった。あの時は、市谷に似ている郡山の市役所を借りたという。楯の会の服を着て、三島の「檄」通りの演説をした。完全に三島に成り切っていた。「その時、何を考えてましたか」と記者に聞かれて、「このあと死ぬんだなと考えてました」。鬼気迫る状況で、成り切っていたのだ。スタッフがいなければ本当に切腹したかもしれない。



で、森村にしる緒方にしる、幸せだ。幸せな体験をしたのだ。三島に成り切り、三島事件を追体験したのだから。それも合法的に。残された「楯の会」の人たちは、本当に追体験しようとして、それを果たせずにいるんだ。右翼の人だってそうだ。そんな「舞台」はない。やろうとしたら捕まる。その点、芸術家はいいよな。合法的にやれる。僕もやってみたいな。三島を。



三島は死後36年も経つのに、まだまだ「謎」がある。だから新しい。いくらでも本が出ている。今年の野分祭で元楯の会の田村司氏に記念講演をしてももらった。「山口二矢の事件に三島さんはかなり衝撃を受けてたんでしょう？」と聞いたら、「そりゃそうですね」と言う。でも、三島全集を読んでも、山口二矢については何も書いてない。少しは触れてるのだろうか。ただ、楯の会の人間に、大江健三郎の『セブンティーン』は読んだか、と聞いたという。田村氏が監修した本『火群のゆくへ』に書いてあった。

やはり、三島は山口二矢のことは気になっていたんだ。もしかしたら、自分で書きたかった。大江に先を越されたと思ったのか。あるいは、余りに衝撃を受け、気になっているから、かえって書けなかったのか。

60年の山口二矢、70年の三島。これが戦後日本人の〈原点〉ですよ。

前に報告したけど、『オルタ』（1月号）で山口二矢のことを書いた。沢木耕太郎の『テロルの決算』の書評だ。読み返してみても、谷口雅春先生の影響を再認識した。谷口先生は「生長の家」の創始者だ。宗教家だ。しかし、その前に、熱烈な愛国者だ。当時の右派的な人は、皆、谷口先生の本を読んでいて、二矢も先生の本を読んで最終的な決断をする。

二矢は、左翼に対する反撥、革命への反撥はあった。それでテロをやろうとする。しかし、ギリギリのところ不安だ。自分自身がよりどころとする根が必要だ。

「かつてはそれが赤尾敏であり、愛国党であった。今やそこから遠く離れ、より普遍的な根を必要としていた」

と沢木は書く。続いて谷口先生の『天皇絶対論とその影響』に触れている。

〈そのような時、二矢はこの本を読んだのだ。そこに天皇をあらためて発見した。『天皇絶対論とその影響』は、根を求め、道を求め、絶対的なものを欲していた若者には、自分自身にも不思議なほど、心の奥深くまで喰い入ってきた。

『私はこの本を読んで今まで自分が愛国者であることを誇りにもち、自分の役割が国家にとって重要なものであると自負していたことに深く恥じ、私心のない忠というものでなくては本当の忠ではないと思いました。今まで私が左翼の指導者を倒せば父母兄弟や親戚友人などに迷惑がかかると思ったことは私心であり、そういうことを捨てて決行しなければならないと決心しました。』

その本を読んだ直後、二矢は自宅近くの古本屋で『明治天皇御製読本』を見つけた。十円だった。彼はそれ以降、テロルを決行するまでこの本だけを読んで過ごすことになる

ここまで読んできて、ギョッ！とした。まさか！と思った。『天皇絶対論とその影響』は、当

時、「生長の家」の先生から借りて読んだ。難しくてよく分からなかった。二矢とは同じ年なの
に何て自分は頭が悪いんだろうと思った。これは迷っていた二矢の背中を押した本なんだ。じゃ
もう一度、読んでみよう。「生長の家」の人に電話しても、持ってる人はいない。ネットの古
本屋で探したら、5万円だった。ちょっと躊躇している。他で手に入らなかったら、これしかない
か。

実は、ギョッ！としたのは、もう一冊の方だ。『明治天皇御製読本』だ。家の中を探した。
あった。やっぱり同じ本だ。運命のいたずらか。こんな不思議なことがあるもんだ。アンビリー
バボーだ。

このHPを読んでも人なら知ってるだろう。3ヶ月ほど前に書いた。明治天皇の御製を調べてい
た。大逆事件の時、明治天皇は、「罪あらば我をとがめよ…」とう歌を詠んだ。自分を殺そうと
した人間に対しても哀れみをかけている。むしろ自分のいたらないせいだ。自分こそ罰してほし
い。そういう歌だった。でも、でも、本当に明治天皇の御歌かどうか今ひとつ分からない所があ
る。それで、いろんな本を調べていた。

その一冊として図書館で探した本があった。「貸出禁止」の貴重本なので、図書館に閉じ籠
もって、読んだ。凄い本だ。感動した。かなり長い時間をかけて読んだ。そんなことをHPで書い
た。実は、秘かにコピーした。300ページ位の本を、ひたすらコピーした。その本のことだ。それ
が、『明治天皇御製読本』だったのだ。完全に忘れていた。そして、40年以上たって、この本に
偶然たどり着いたのだ。

ウーン、運命の糸にたぐり寄せられているようだ。山口二矢が体の中に入ってくる。恐い。最後
にもう一つ。加藤紘一さんが「放火事件」について本を出した。12月18日発売だ。題名が『テロ
ルの真犯人』（講談社）。放火した右翼の人が逮捕されたが、本当の「真犯人」は彼を放火に駆
り立てた社会的風潮ではなかったのかという観点から事件を読み解いている。又、小泉前首相が
靖国神社参拝をめぐり、「闘うナショナリズム」を煽るのは「禁じ手」だと警鐘を鳴らしてい
る。

そして、ここからが大事だ。「スポーツ報知」（12月17日付）によれば…。

〈タイトルは浅沼稻次郎社会党委員長暗殺事件を描いた作家、沢木耕太郎氏の著書『テロルの決
算』にヒントを得たという〉

ここでも山口二矢が出てきたよ。…というところで終わり。加藤さんの本をぜひ読んでみて下
さい。私のことも少し出てきます。

【だいありー】

(1)12月18日（月）9:00a.m.からジャナ専。「時事問題」と「現代史」。学校に着いて講師室で
新聞を読んでいた。朝、毎、読、産経、東京と置いてある。パラパラと見る。毎日新聞を見て驚
いた。私が出ている。そうか、あの日、毎日の記者が取材にきてたのか。

12月9日（土）に行われた自由人権協会主催のシンポジウム「言論・暴力・ナショナリズム」
だ。もう一つ、12月に行われた毎日労組と「ジャーナリズムを語る会」主催の「脅かされる表現
の自由～言論テロにどう立ち向かうべきか」。この二つのシンポジウムの報告と発言が載ってい
る。それも25面の全面を使って。「許すな言論テロ」「表現の自由、高まる危機感」と題し。半
藤一利、加藤紘一、岡留安則、溝口敦、牧太郎、そして私の発言だ。

凄い特集だ。よくこれだけ大々的に詳しく報じたものだ、と驚いた。この日、夜は柔道に行

く。

(2)12月19日（火）東京新聞の「こちら特報部」で「週刊金曜日」事件について書かれていた。「週刊誌挑発、踊らされ」「右翼抗議、皇室劇中止の舞台裏」「『不敬』の再来、時代後戻り？」と大きく見出しが出ている。

「週刊金曜日」主催の集会で皇室をテーマにしたコントが行われ、「週刊新潮」が大々的に取り上げ批判した。「東京新聞」では…。

「その後、関係者らが右翼の攻撃にさらされている。劇団は謝罪文を発表、公演中止に追い込まれた。気になるのは、この週刊誌の広告に記された『不敬』の二文字だ。寸劇の内容が不穏当であれ、この文字には「問答無用」の暗い時代を想起させる重みがある。事件の関係者らに聞いた」

「週刊金曜日」の北村編集長、矢崎泰久氏らがコメントしている。私もコメントしている。又、今回問題になったコント集団「他言無用」の人達はコメントせず、かつて「他言無用」の人々が所属していた「ザ・ニュース・ペーパー」の杉浦さんがコメントしている。

「ザ・ニュース・ペーパー」も皇室ネタがあるが、杉浦さんは言う。「自分たちのコントはお客様の共感を得られていると思う。皇室ご一家にも共感を持って演じており、最初に人間の情がある」

しかし、どこまでが「愛情」で、どこからが「批判」や「揶揄」か難しい場合もある。コントで皆が笑って終わっても、改めて活字にすると、失礼極まりないものになる、ということもある。東京新聞のラストには私の発言が載っている。

〈新右翼団体・一水会顧問の鈴木邦男氏は「週刊新潮が一番悪い。抗議した右翼の話を間接的に聞くと『あそこまで書かれてしまったら、やらざるを得ない』ということだった」とメディアの責任に言及する。

「天皇制は暴力や法律で守られるものではない」と考える鈴木氏は、それゆえ、自らは反対する「不敬罪」が復活しかねないと懸念。こう提案する。

「これは行き過ぎとか、これは愛情表現だという話し合いはできる。公の場で『天皇制と笑い』というテーマで議論をすべきだ」〉

この日（12月19日）は7:00p.m.から一水会フォーラム。講師は歳川隆雄氏で、「安倍政権の今後」。前半だけ聞いて、ロフトへ。9:00p.m.から森達也さん、綿井健陽さん、「創」の篠田編集長らとトーク。「言論テロ」について。途中で石坂啓さん（漫画家）も加わる。加藤紘一さん実家放火事件と「週刊金曜日」事件について突っ込んだ話し合いをした。12時までやる。

(3)12月20日（水）招待券をもらったので「元禄忠臣蔵」を見る。6時半から「発言者」の忘年会。麻布のセフィーロで。西部邁さん、富岡幸一郎さんたちと会った。

(4)12月21日（木）図書館で調べもの。午後8時から月刊「タイムス」の忘年会。

(5)12月22日（金）一日中、家で原稿を書いていた。

(6)12月23日（土）図書館。取材。

(7)12月24日（日）2:00p.m.から「ザ・ニュース・ペーパー」を見に行く。こちらは自粛するこ

となく「さる高貴なご一家」のコントをやっていた。終わって代表の杉浦さんといろいろ話をした。

(8) そうだ。12月18日（月）に三島由紀夫から電話があった。森村泰昌の写真展の話をしたら喜んでいて。「市ヶ谷で演説をした時、踏み台を使ったんですか？」と聞いたら、「そんな瑣末なことは聞くな！」と叱られた。山口敏夫元議員の有罪・収監のことを心配していた。「そのことについて打ち合わせをするからすぐ横須賀に來い！」と命令された。

そう、三島の霊が降りるおばさんからの電話です。でも忙しくてまだ行ってない。三島さん、すみません。

【お知らせ】

(1) 12月25日（月）7:00p.m. ネーキッド・ロフト。國貞陽一さんの本『寿 (kotobuki) 魂』（太田出版）出版記念会パーティ&ライブ。私も聞きに行きます。

(2) メルマガ「北海道人」で「危機の時代に～鈴木邦男・和多田進の10年の往復書簡」が連載開始。先週は和多田さんの手紙。12月25日から私の手紙です。

(3) 12月31日（日）7:30p.m. からロフトプラスワン。吉田豪さんと私のトークです。「今年一年を振り返って」。政治、社会、犯罪、そして格闘技の話をする予定です。

(4) 「週刊朝日」（12月29日号）で「2006年、おススメ3冊」の特集。青木るえかさんが私の『愛国者は信用できるか』を取り上げてくれた。嬉しいです。感謝しました。

HOME